北アルプス登山史資料３

－黒部川側からの登山史・後立山南部地域登山史－

十字峡（黒部川下廊下）

平成 29 年（2017）

市立大町山岳博物館
OMACHI ALPINE MUSEUM

北アルプス登山史資料３

－黒部川側からの登山史・後立山南部地域登山史－

平成 29 年（2017）

市立大町山岳博物館
OMACHI ALPINE MUSEUM

発刊にあたって

市立大町山岳博物館では、北アルプス後立山連峰における登攀史を含む登山史上とりわけ重要な文献資料の内容を収録した冊子『北アルプス登山史資料』を 2010（平成 22）年以降、山域ごとにまとめて出版してまいりました。はじめに鹿島槍ヶ岳の登山史をとりあげた第 1 集（2010 年 3 月発行）、その後、続編として白馬岳周辺の登山史をとりあげた第 2 集（2012 年 3 月発行）を編集・出版。そして、このたび、完結編として第 3 集を編集・出版するはこびとなりました。

一連の登山史資料集作成のはじまりは、当館の人文科学系分野における展示を含む教育普及事業をさらに充実して展開していくため、その根拠として必要となる基礎的な文献資料を網羅的に収集した上、これらの情報を広く発信しようとの考えからでした。そこで、後立山連峰の登山史研究で欠くことのできない文献資料について調査・収集を行いました。

各冊子に再録した文献資料は、当館付属施設として 2012（平成 24）年に開館した「山岳図書資料館」の蔵書を用いて、原典等から活字を文字入力して編集しました。この山岳図書資料館の建設にあたっては、長野県山岳協会から建設費の一部として寄付金をいただくとともに、蔵書となる山岳に関する書籍を寄贈いただきました。同施設は、山岳図書等の資料を収集・保管することで散逸・亡失を防ぐとともに、市民をはじめ登山者や研究者等の調査研究及び教育普及に資することで山岳文化の継承と普及の推進を図ることを目的にしています。資料集の編集・出版は、同館の蔵書を利活用したもので、施設の存在意義や担うべき役割に沿う好事例といえます。

本書ならび既刊の登山史資料集が、当館で継続的に実施してきた関連登山史の文献調査及び収集の成果として広くご高覧いただくことで、皆様方の調査研究等の一助となることを願うとともに、貴重な原典等を有する山岳図書資料館の今後さらなる利活用の推進に結びつくことを期待しております。

市立大町山岳博物館 館長　鳥羽 章人

凡　例

1　本書は「北アルプス登山史資料３ ―黒部川側からの登山史・後立山南部地域登山史―」として、黒部川側からの後立山連峰周辺山域、また、後立山連峰南部地域を中心とした山域における大正時代から昭和 30 年代までの登山・登攀記録を中心とした文献資料を収録したものである。なお、収録の選定基準として、各山岳での各期における初登頂・初登攀の記録を中心とした。

2　本書に収録した文献資料について、著者名、題名及び収録書籍名、発行年月日及び発行先は、各編の冒頭部分に記載した。

3　文章・用語等については、次の方針に沿って編集した。
（1）本文の著述は原則的に原文を尊重し、発表時の文章のままを記載した。しかし、難解な用語や旧字については、現代かなづかいや常用漢字に一部改めた。
（2）江戸時代以降各時代にわたって慣用されていた用語は、そのまま原文のとおり掲載した。そのため、今日的にみると人権意識から不適切と思われる用語が一部あるが、歴史的文脈を尊重し、原文のまま掲載した。
（3）度量衡については、原文のとおりの単位を用い、メートル法等の表記でない部分もある。
（4）原文に明らかな誤字や脱字がある場合には、加筆や削除等行い、これを訂正した。

4　収録した文献資料の配列は年代順を基本とした。

5　各資料の尊重によって、文中に記載された年号は、西暦・和暦が混じっているが、ご了承願いたい。

6　収録した文献資料の原文によっては、縦書きのものもあるが、本書の構成上、横書きに改めた。それにともない、繰返符号を用いた表記については、一部改めて各資料内で統一をはかった。

7　各資料の原文に挿入されている写真・図表等の図版については、誌面の都合上、割愛した。

8　本書の編集は登山史等の山岳文化史担当の人文科学系学芸員・関悟志が担当して主に行い、事務員兼山岳図書資料館資料整理員・北村洋子がこれを補佐した。また、大町山岳博物館友の会サークル「山岳文化研究会」に協力をあおぎ、同サークル会員の宮澤洋介氏（同サークル代表）、有川美保子氏、仙波美代子氏、瀬戸口三栄子氏、平野悟氏、宮島順一氏、宮澤陽美氏、宮田京子氏（以上、順不同）に文字入力作業を一部行っていただいた。このほか大部分の文字入力作業は音声起稿・反訳事務所「オフィスなかやま」（長野県伊那市）による。

9　収録した登山記録の選定においては、山と溪谷社編『日本登山史年表』（山と溪谷社、2005 年）を主として参考にした。

１０　資料の転載につきまして、多方面の皆様方から多大なご協力を賜りました。巻末の謝辞にご芳名を記してお礼に代えさせていただきます。

目　次

北アルプス登山史資料３ ―黒部川側からの登山史・後立山南部地域登山史―

頁

発刊にあたって ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅰ 黒部川側からの登山史

黒部川側からの登山史年表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

黒部川周辺の山岳環境写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

黒部川周辺の山岳概念図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

1　中島正文 「黒部奥山と奥山廻り役（一）」『山岳』第 32 年第 1 號
　　1937（昭和 12）年 11 月 30 日刊　日本山岳會発行 ・・・・・・・・・・・・・ 10
2　吉澤庄作 「越中方面 大蓮華山登山攀緑」『山岳』第 5 年第 1 號
　　1910（明治 43）年 3 月 31 日刊　日本山岳會事務所発行 ・・・・・・・・・・ 36
3　冠 松次郎 「祖母谷道」『山岳』第 7 年第 1 号
　　1912（明治 45）年 5 月 24 日刊　日本山岳會事務所発行 ・・・・・・・・・・ 44
4　河東秉五郎 「白馬山登攀記」『日本の山水』
　　1915（大正 4）年 7 月 25 日刊　紫鳳閣発行 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
5　木暮理太郎 「黒部川を遡る」『登山とはいきんぐ』第 1 巻第 2 號・第 3 號
　　1935（昭和 10）年 9 月 1 日・10 月 1 日刊　大村書店発行 ・・・・・・・・・ 58
6　沼井鐵太郎 「大町より下廊下へ」『山岳』第 15 年第 1 號
　　1920（昭和 9）年 8 月 31 日刊　日本山岳會発行 ・・・・・・・・・・・・・・ 71
7　渡辺 漸 「黒部川」（部分）『山岳』第 24 年第 2 號
　　1929（昭和 4）年 12 月 25 日刊　日本山岳會発行 ・・・・・・・・・・・・・ 92
8　竹内鳳次郎 「女子劒岳登山記」『山岳』第 15 年第 3 號
　　1921（大正 10）年 4 月 16 日刊　日本山岳會発行 ・・・・・・・・・・・・・ 94
9　渡辺 漸 「黒部川」（部分）『山岳』第 24 年第 2 號
　　1929（昭和 4）年 12 月 25 日刊　日本山岳會発行 ・・・・・・・・・・・・・ 104
10　沢田武太郎 「雪の立山、針ノ木峠を越えて」『日本登山記録大成』第 7 巻 劒岳Ⅰ
　　1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 105
11　伊藤孝一 「百瀬慎太郎宛、伊藤孝一書簡」（部分）『山嶽活寫 大正末、雪の絶巓にカメラを廻す』
　　2005（平成 17）年 3 月 25 日刊　富山県[立山博物館]発行 ・・・・・・・・・ 108
12　窪田他吉郎 「スキーで針の木峠へ」『劒澤に逝ける人々』（東京帝國大學山の會編）
　　1931（昭和 6）年 1 月 20 日刊　梓書房発行 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 116
13　伊藤孝一 「百瀬慎太郎宛、伊藤孝一書簡」（部分）『山嶽活寫 大正末、雪の絶巓にカメラを廻す』
　　2005（平成 17）年 3 月 25 日刊　富山県[立山博物館]発行 ・・・・・・・・・ 127
14　沼井鐵太郎 「黒部川（鐘釣温泉より平の小屋まで）」『山岳』第 21 年第 2 號
　　1927（昭和 2）年 6 月 30 日刊　日本山岳會発行 ・・・・・・・・・・・・・・ 128
15　西堀榮三郎・奥 貞雄 「春の東沢」『日本登山記録大成』第 15 巻 薬師岳・黒部川
　　1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 154
16　冠 松次郎 「春の後立山」（部分）『立山群峯』
　　1929（昭和 4）年 5 月 25 日刊　第一書房発行 ・・・・・・・・・・・・・・・ 163
17　塚本繁松 「黒薙川柳又谷」『山岳』第 26 年第 3 號
　　1931（昭和 6）年 12 月 30 日刊　日本山岳會発行 ・・・・・・・・・・・・・ 167
18　加藤文太郎 「嚴冬の立山・針ノ木越」『単独行』
　　1941（昭和 16）年 8 月 25 日刊　株式会社朋文堂発行 ・・・・・・・・・・・ 184
19　水津景八郎 「積雪期の黒部川」『日本登山記録大成』第 9 巻 劒岳Ⅲ
　　1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 189
20　西村正己・大橋秀一郎・片山良一 「積雪期の黒部横断」『日本登山記録大成』第 9 巻 劒岳Ⅲ
　　1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 200
21　宍戸 元 「偵察のすすめ方 まず文献の検討を」『岳人』第 139 号
　　1959（昭和 34）年 11 月 1 日刊　中部日本新聞社発行 ・・・・・・・・・・・ 204

22　日本大学山岳部「春の北アルプス横断 内蔵之平、スバリ谷をへて 1958年3月の記録」『岳人』第132号
1959（昭和34）年4月1日刊　中部日本新聞社発行 ・・・・・・・・・・・・ 207
23　大阪大学山岳会 「赤沢岳西面 一九五八年四―五月の記録」『岳人』第247号
1968（昭和43）年4月1日刊　中日新聞東京本社発行 ・・・・・・・・・・ 210
24　大阪大学山岳部 「積雪期 黒部川上ノ廊下横断 1959年3月の記録」『岳人』第143号
1960（昭和35）年3月1日刊　中部日本新聞社発行 ・・・・・・・・・・・・ 214
25　酒井国光 「黒部川横断山行の記録年表」（部分）『黒部雪山』
1988（昭和63）年3月1日刊　酒井国光発行 ・・・・・・・・・・・・・・・ 218
26　酒井国光 「黒部川横断山行の記録年表」（部分）『黒部雪山』
1988（昭和63）年3月1日刊　酒井国光発行 ・・・・・・・・・・・・・・・ 219
27 「《対談》 黒部十字峡横断の記録 鹿島と剣を直線で結ぶ！」『山と渓谷』第280号
1962（昭和37）年6月1日刊　山と渓谷社発行 ・・・・・・・・・・・・・・ 220

Ⅱ　後立山南部地域登山史

後立山南部地域の登山史年表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 227

後立山南部の山岳環境写真 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 228

後立山南部の山岳概念図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 229

1　百瀬慎太郎 「後立山連峰逆走記」『山を想へば』
1962（昭和37）年8月15日刊　百瀬慎太郎遺稿集刊行会発行 ・・・・・・ 233
1-2　百瀬慎太郎 「會員登山報」（部分）『山岳』第8年第2号
1913（大正2）年8月31日刊　日本山岳會事務所発行 ・・・・・・・・・・ 239
2　一戸直藏・河東碧梧桐・長谷川如是閑 「日本アルプス縦斷記」『日本アルプス縦斷記』
1917（大正6）年7月23日刊　大鐙閣発行 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 240
3　竹内ヒサ 「鹿島槍から針ノ木へ」『夫婦登山ことはじめ ―袴で登った劔岳―』
2004（平成16）年10月12日刊　岡田汪発行 ・・・・・・・・・・・・・・・ 285
4　岡田 汪 「針ノ木峠、薬師岳、笠ヶ岳」（「付1 全記録」内）『夫婦登山ことはじめ ―袴で登った劔岳―』
2004（平成16）年10月12日刊　岡田汪発行 ・・・・・・・・・・・・・・・ 295
5　小笠原勇八 「一月の針ノ木岳スキー登山 ―その記録と生活など―」
『日本登山記録大成』第11巻 白馬・後立山Ⅰ（同朋舎出版、1983年）
1983（昭和58）年11月30日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 299
6・7　四谷龍胤 「厳冬の大沢生活」『日本登山記録大成』第12巻 白馬・後立山Ⅱ
1983（昭和58）年11月30日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 314
8　広瀬忠三・森田勝彦・江口新造 「第三回大沢小舎生活 ―当時の日記と記憶から―」
『日本登山記録大成』第12巻 白馬・後立山Ⅱ
1983（昭和58）年11月30日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 325
9・10　藤田喜衛 「赤沢、スバリ西尾根」『日本登山記録大成』第12巻 白馬・後立山Ⅱ
1983（昭和58）年11月30日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 337
11・12　立教大学山岳部 「厳冬のスバリ岳西尾根と赤沢岳西尾根」
『日本登山記録大成』第13巻 白馬・後立山Ⅲ
1983（昭和58）年11月30日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 343
13　山岳同志会 「スバリ岳の西面 一九五八年八月の記録」『山と渓谷』第232号
1958（昭和33）年10月1日刊　株式会社山と渓谷社発行 ・・・・・・・・・ 345
14　登嶺会 「赤沢岳・スバリ岳・針ノ木岳周辺 主として冬―春について」『岳人』第260号
1969（昭和44）年2月1日刊　中日新聞東京本社発行 ・・・・・・・・・・ 351
15・16・17　京都大学山岳部 「黒部中流合宿」『日本登山記録大成』第15巻 薬師岳・黒部川
1983（昭和58）年11月30日刊　株式会社同朋舎出版発行 ・・・・・・・・ 354
18　石井順一 「赤沢岳猫ノ耳第二峯直登尾根（仮称）」（「記録速報」内）『岳人』第160号
1961（昭和36）年8月1日刊　東京中日新聞発行 ・・・・・・・・・・・・ 374

謝辞・あとがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 375

黒部川側からの登山史年表

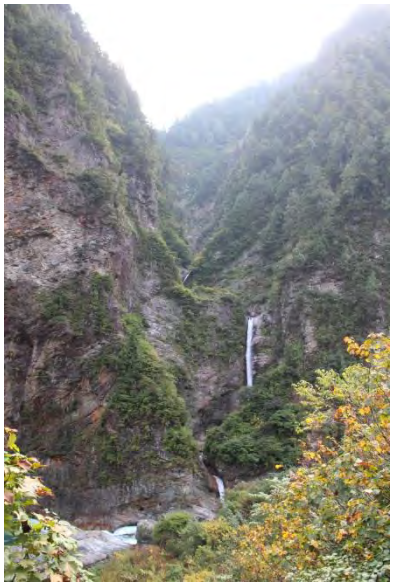
※No.1と2の間、1889(明治22)年10月初-中旬の登山に関して、報告掲載の文献を資料2(白馬岳周辺登山史)ですでに掲載しているため、資料3では収録を割愛した。

No.	登山年月日	登山内容(登山史上の事象・出来事)	報告者	報告掲載の文献
1	1640(寛永17) -1870(明治3)年	加賀藩は北アルプスの大部分を御締山(御留山)として一般人の越境・入山を厳禁。山廻り役による奥山廻り御用の者らによる定期的な国境見分登山	中島正文	「黒部奥山と奥山廻り役(一)」『山岳』第32年第1号(日本山岳会、1937年) 〔初出『蘆峅村十三郎由緒書』ほか〕
–	1889(明治22)年 10月初-中旬	音沢村～東鐘釣～サンナビキ山～島尻村(黒部奥山廻り役で辿った古道を使用か)	大塚専一	「信飛越山間旅行談」『日本登山記録大成』第11巻 白馬・後立山Ⅰ(同朋舎出版、1983年) 〔初出『地学雑誌』第2集19・20号(地学会、1890年)〕
2	1907(明治40)年 8月20-22日	祖母谷・西ノ谷遡行～清水平～白馬岳(黒部川側から白馬岳登山の初期記録)	吉澤庄作	「越中方面 大蓮華山登攀録」『山岳』第5年第1号(日本山岳会事務所、1910年)
3	1911(明治44)年 8月18日	白馬岳～祖母谷下降(第2記録)(冠松次郎の黒部初山行)	冠松次郎	「祖母谷道」『山岳』第7年第1号(日本山岳会事務所、1912年)
4	1913(大正2)年 7月下旬	猫又谷遡行～猫又山～白馬岳(猫又谷から清水平に達した初記録)	河東碧梧桐	「白馬山登攀記」『日本の山水』(紫鳳閣、1915年)
5	1919(大正8)年 7月27日-8月6日	欅平～下廊下～仙人谷～立山(下廊下遡行を含む黒部川本流探検の最初期の試み)	木暮理太郎	「黒部川を遡る」『登山とはいきんぐ』第1巻第2・3号(大村書店、1935年)
6	1919(大正8)年 8月2-13日	大川沢・シラタケ沢～五龍岳～八峰～黒部川・東谷遡行～棒小屋沢遡行(八峰から東谷への横断初記録)	沼井鐵太郎	「大町より下廊下へ」『山岳』第15年第1号(日本山岳会、1920年)
7	1920(大正9)年 7月中-下旬	上廊下初踏破・初下降(田中喜左衛門ら)	渡辺漸	「黒部川」(部分)『山岳』第24年第2号(日本山岳会、1929年)
8	1920(大正9)年 7月22日-8月1日	女性初の黒部横断・剱岳登頂(竹内ヒサ)	竹内鳳次郎	「女子剱岳登山記」『山岳』第15年第3号(日本山岳会、1921年)
9	1920(大正9)年 8月下旬-9月上旬	上廊下初遡行(沢本千代次郎ら)	渡辺漸	「黒部川」(部分)『山岳』第24年第2号(日本山岳会、1929年)
10	1921(大正10)年 4月8-11日 ※前年の可能性もあり	立山温泉～越中沢乗越～平(平の小屋)～針ノ木峠(積雪期初踏破)(積雪期黒部川初横断)	沢田武太郎 (第四高旅行部)	「雪の立山、針ノ木峠を越えて」『日本登山記録大成』第7巻 剱岳Ⅰ(同朋舎出版、1983年) 〔初出『山とスキー』第12号〕
11	1923(大正12)年 3月25-26日	立山温泉～平～針ノ木峠～大沢石室(北アルプス北部厳冬期初横断)(佐伯嘉左衛門ら)	伊藤孝一	「百瀬慎太郎宛、伊藤孝一書簡」(部分)『山嶽活寫 大正末、雪の絶巓にカメラを廻す』(富山県[立山博物館]、2005年)
12	1923(大正12)年 3月13-17日	立山温泉～平～針ノ木峠(スキーによる初踏破)(積雪期黒部川横断の最初期記録)	窪田他吉郎 (第四高旅行部)	「スキーで針の木峠へ」『剱澤に逝ける人々』(梓書房、1931年) 〔初出『BERG=HEIL』第1号(第四高等学校旅行部、1923年)〕
13	1923(大正12)年 3月4-22日	芦峅寺～立山温泉～室堂～雄山～立山温泉～蔦山～ヌクイ谷下降～平～針ノ木峠～大町(北アルプス北部積雪期横断の4番目の記録)	伊藤孝一	「百瀬慎太郎宛、伊藤孝一書簡」(部分)『山嶽活寫 大正末、雪の絶巓にカメラを廻す』(富山県[立山博物館]、2005年)
14	1925(大正14)年 8月25日-9月1日	黒部川・下廊下核心部の初遡行(冠松次郎らの黒部川探検の集大成)	沼井鐵太郎	「黒部川」『山岳』第21年第2号(1927年、日本山岳会)
15	1926(大正15)年 3月20日-4月12日	赤牛岳・野口五郎岳・烏帽子岳積雪期初登頂	西堀栄三郎・奥貞雄 (第三高山岳部)	「春の東沢」『日本登山記録大成』第15巻 薬師岳・黒部川(同朋舎出版、1983年) 〔初出『三高山岳部報告』第5号(第三高等学校山岳部、1927年)〕
16	1927(昭和2)年 6月15日	赤沢岳西尾根3峰(猫ノ耳)まで往復(初下降、初登攀)	冠松次郎	「春の後立山」(部分)『立山群峯』(第一書房、1929年)
17	1931(昭和6)年 8月6-14日	黒薙川・柳又谷下廊下初遡行～猫の踊り場～白馬岳	塚本繁松	「黒薙川柳又谷」『山岳』第26年第3号(日本山岳会、1931年)
18	1934-35(昭和9-10)年 12月31日-1月6日	一ノ越～大汝山・竜王岳～ザラ峠～平～針ノ木峠(積雪期単独初踏破)～スバリ岳往復	加藤文太郎	「厳冬の立山・針ノ木越」『単独行』(朋文堂、1941年)
19	1939(昭和14)年 3月25日-4月5日	弥陀ヶ原～剱沢～仙人池～雲切尾根下降～東谷尾根～東谷横断～牛首尾根支稜～鹿島槍ヶ岳(本格的な積雪期黒部横断の最初期記録)	水津景八郎 (関西大山岳部)	「積雪期の黒部川」『日本登山記録大成』第9巻 剱岳Ⅲ(同朋舎出版、1983年) 〔初出『関西学生山岳連盟報告』第8号(1939年)〕
20	1939(昭和14)年 3月14日-4月7日	唐松岳～五龍岳～東谷尾根下降～仙人谷～仙人池～別山乗越(本格的な積雪期黒部横断の最初期記録。下廊下中核部を経由して後立山、立山の両連峰を結んだ初記録)	西村正己・大橋秀一郎・片山良一 (大阪商大山岳部)	「積雪期の黒部横断」『日本登山記録大成』第9巻 剱岳Ⅲ(同朋舎出版、1983年) 〔初出『関西学生山岳連盟報告』第8号(1939年)〕
21	1956(昭和31)年 3月20日-4月5日	鳴沢岳西尾根下降(積雪期初踏破)～黒部川～内蔵助谷～立山(積雪期の黒部川で十字峡より上流域の下廊下に横断地点を求めた初めての試みか)	宍戸元 (大阪大山岳部)	「偵察のすすめ方」『岳人』第139号(中部日本新聞社、1959) 〔初出『関西学生山岳連盟報告』第9号〕
22	1958(昭和33)年 3月26日-4月6日	剱沢下降～ハシゴ谷乗越～内蔵助平～御前谷乗越～御前谷下降～大スバリ谷～スバリ岳～針ノ木峠(同コースでの積雪期黒部川初横断)	熊谷義信 (日本大山岳部)	「春の北アルプス横断」『岳人』第132号(中部日本新聞社、1959年)
23	1958(昭和33)年 5月2日	赤沢岳西尾根3峰(猫ノ耳)ダイレクト尾根初登攀	玉井康雄 (大阪大山岳部OB)	「赤沢岳西面」『岳人』第247号(中日新聞東京本社、1968年)
24	1959(昭和34)年 3月11日-4月2日	烏帽子岳～赤牛岳～北西稜下降～スゴの頭南稜(積雪期初登攀)～スゴ乗越(上廊下中核部の黒部川積雪期初横断)	野田憲一郎 (大阪大山岳部)	「積雪期 黒部川上ノ廊下横断」『岳人』第143号(中部日本新聞社、1960年)
25	1959(昭和34)年 3月15-28日	葛温泉～船窪小屋～針ノ木岳西尾根下降～平～五色ヶ原(同コースでの黒部川積雪期初横断)(関西大山岳部)	酒井國光	「黒部川横断山行の記録年表」(部分)『黒部雪山』(酒井國光、1988年) 〔初出『時報』(AAVK(関西学生山岳連盟))〕
26	1960(昭和35)年 3月16日-4月7日	鹿島槍ヶ岳～十字峡～北尾根～黒部別山～真砂尾根～剱岳(積雪期に十字峡を横断地点とした初の黒部川横断)(京都大山岳部)	酒井國光	「黒部川横断山行の記録年表」(部分)『黒部雪山』(酒井國光、1988年) 〔初出『京都大学山岳部報告』第8号(京都大学山岳部)〕
27	1962(昭和37)年 3月11-26日	鹿島槍ヶ岳～牛首尾根下降～黒部川十字峡～ガンドウ尾根(積雪期初登攀)～剱岳	小林信三・岩田克夫 (昭和山岳会)	「《対談》黒部十字峡横断の記録」『山と溪谷』第280号(山と溪谷社、1962年)

黒部川周辺の山岳環境写真
（下廊下周辺）

内蔵助谷出合～鳴沢出合の間

鳴沢出合付近


新越沢出合付近

白竜峡

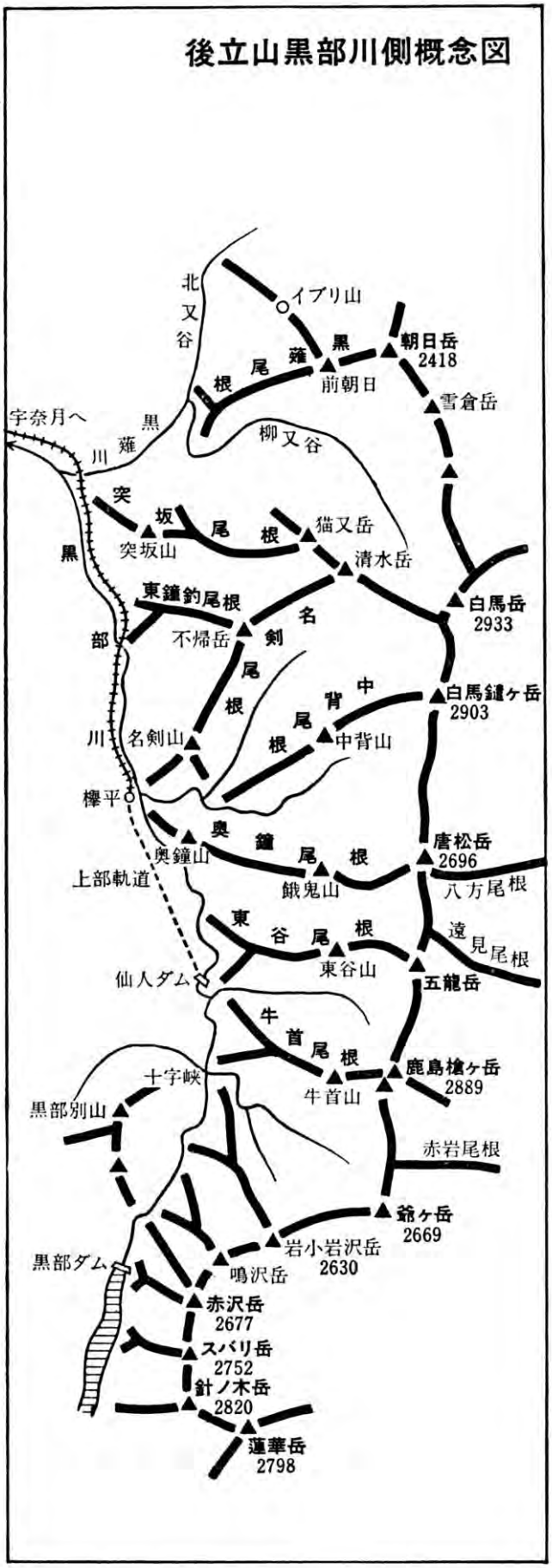
十字峡
（手前:剱沢、奥:棒小屋沢、左右:黒部川本流）

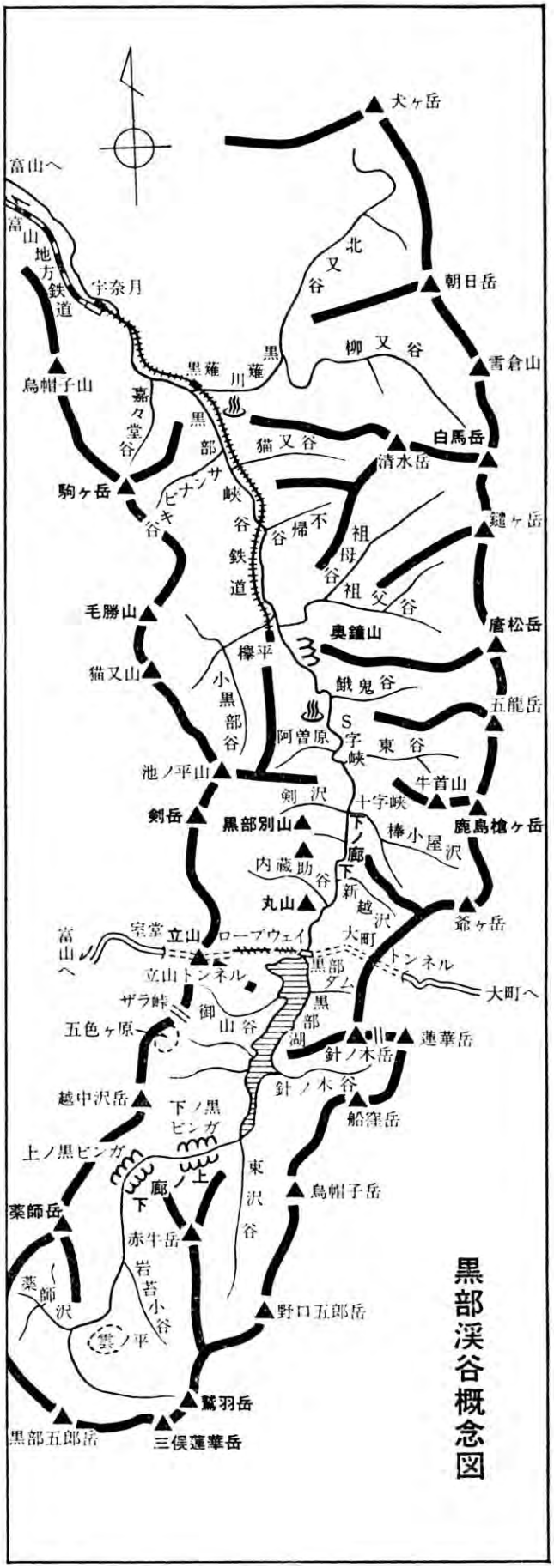
S 字峡

東谷出合付近

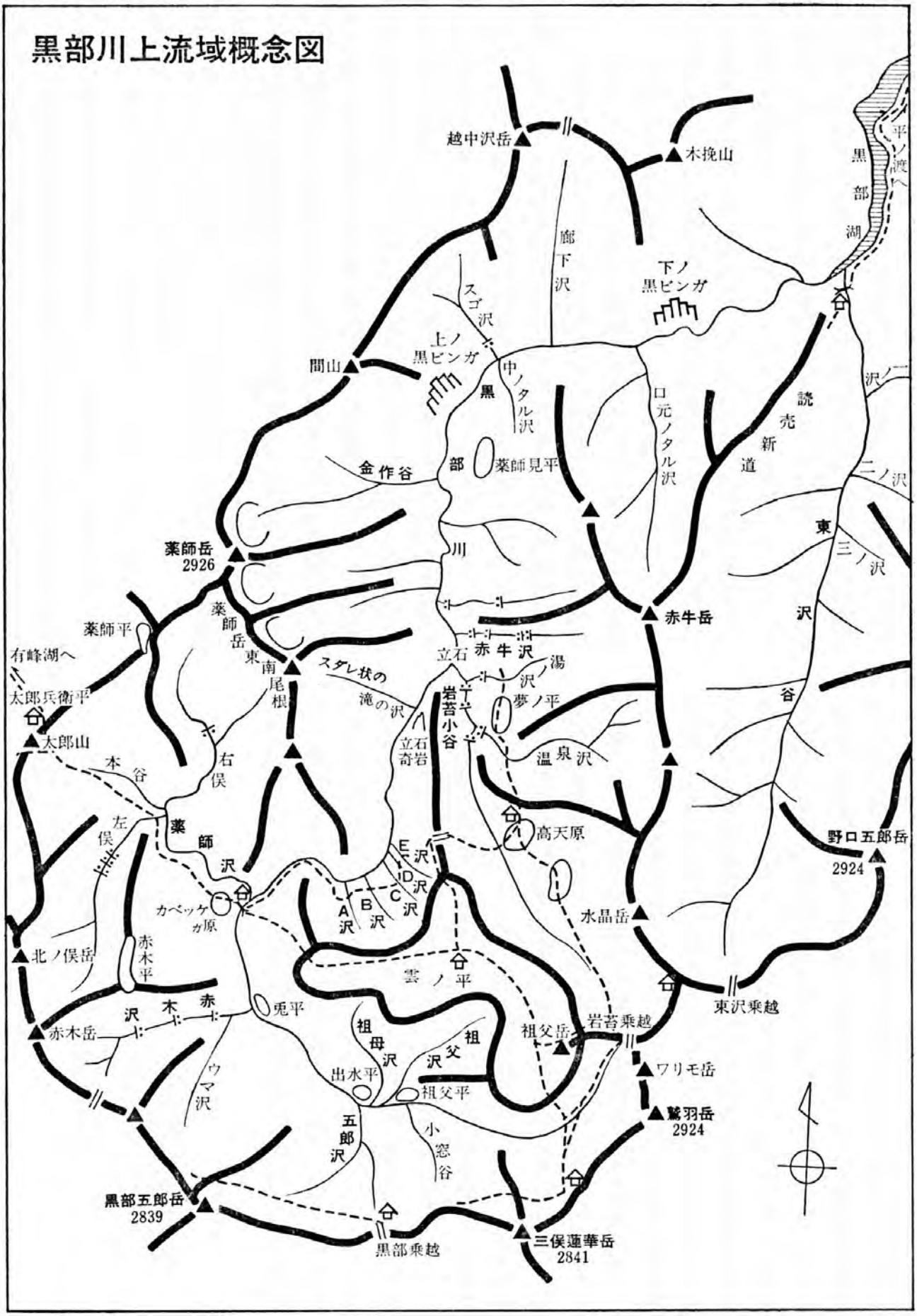
奥鐘山西壁（大太鼓展望台付近にて）

黒部川周辺の山岳概念図

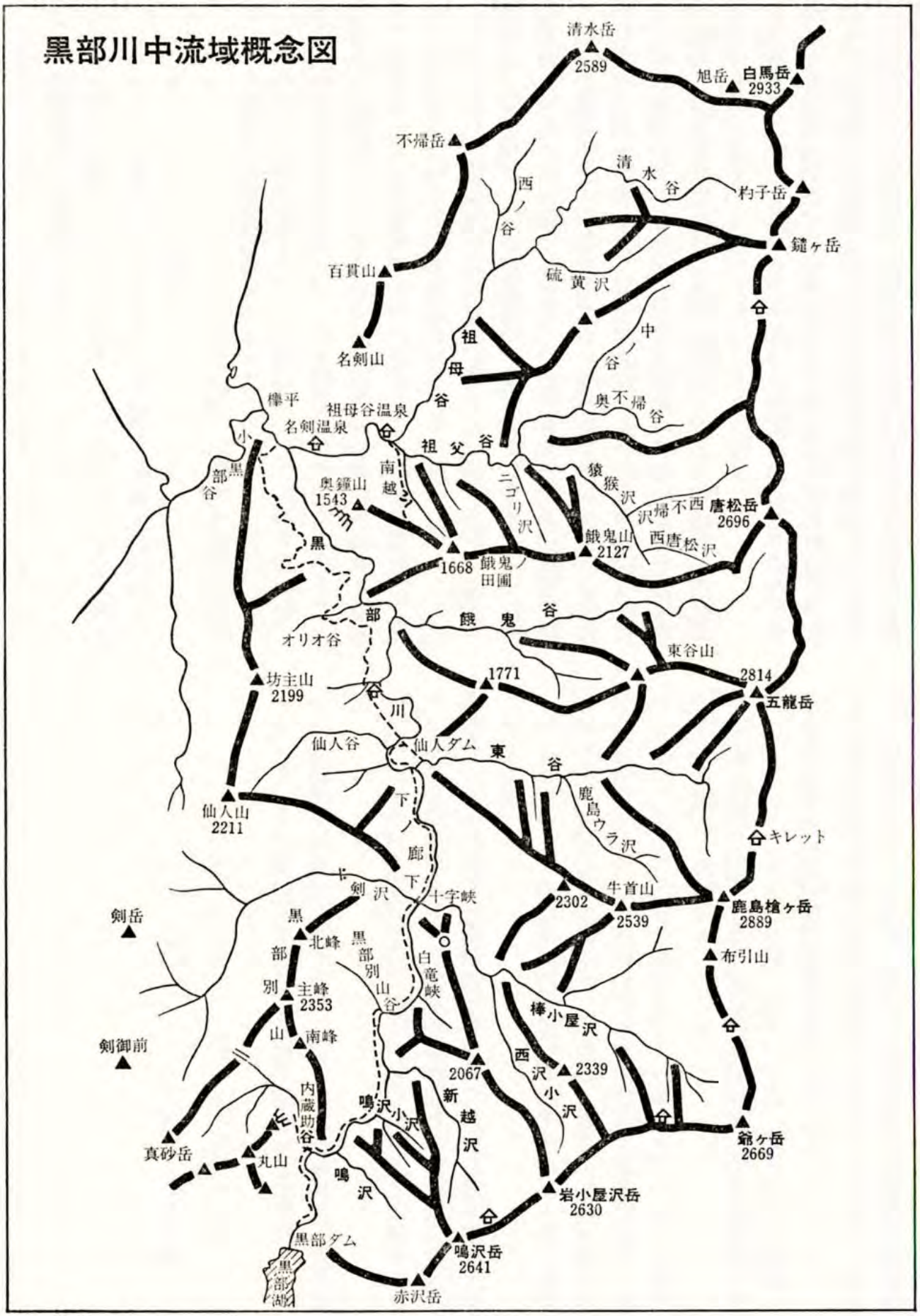




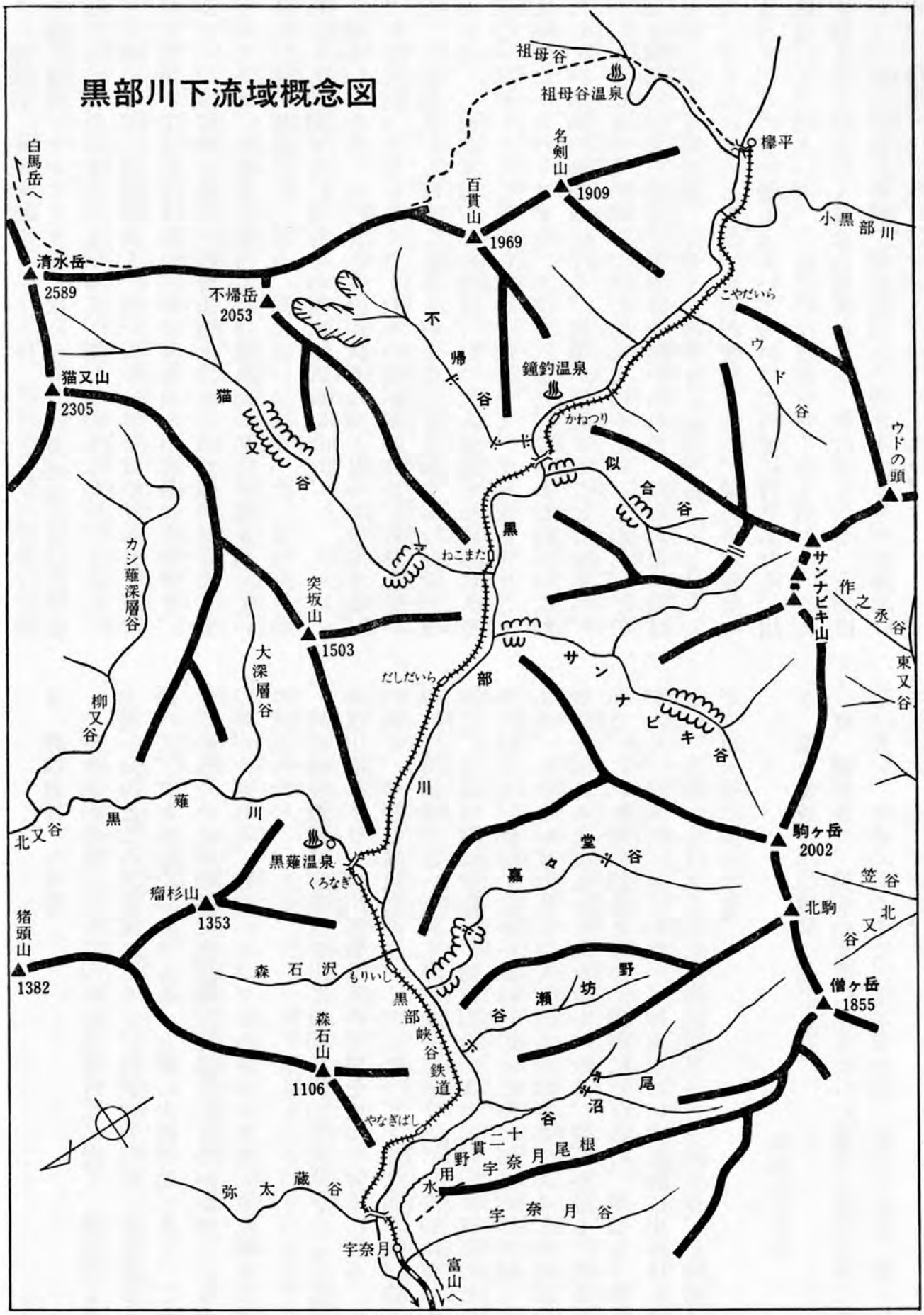
出典：【左】『日本登山大系』第 6 巻 後立山･明星山･海谷･戸隠（白水社、1981）p.125「後立山黒部川側概念図」
【右】『日本登山大系』第 5 巻 剣岳・黒部・立山（白水社、1981）p.150「黒部渓谷概念図」



出典：『日本登山大系』第5巻 剣岳・黒部・立山（白水社、1981）p.154「黒部川上流域概念図」



出典：『日本登山大系』第5巻 剣岳・黒部・立山（白水社、1981）p.168「黒部川中流域概念図」



出典：『日本登山大系』第5巻 剣岳・黒部・立山（白水社、1981）p.180「黒部川下流域概念図」

1　中島正文 「黑部奥山と奥山廻り役（一）」『山岳』第32年第1號

1937（昭和12）年11月30日刊　日本山岳會発行

〔初出『蘆峅村十三郎由緒書』 ほか〕

要　約

1640（寛永 17）年、加賀藩主・前田利常が浦山村の農民・松儀伝右衛門に国境（くにざかい）見分（山中警備）の内役を命じたことによって実質的にはじめられた加賀藩による「奥山廻り御用」。その後、1870（明治 3）年の「山廻り役」の廃止まで 200 余年にわたって、この北アルプス周辺の山岳地帯は加賀藩の「御縮山（おしまりやま）」（「御留山（おとめやま）」）として一般人の越境・入山は厳禁されていた。

奥山廻り御用は通常、2 ルートを隔年で実施し、7 月末から 8 月までの 20 日間程を要し、天保・嘉永年間には最大で総勢 40 人近い登山隊で行われた。

なお、中島正文による「黑部奥山と奥山廻り役」は、本記録の後、「同（二）」「同（三）」と続編が『山岳』誌上に掲載され、それらを含む中島の主だった山岳関係の研究論文や随筆等は、中島正文『北アルプスの史的研究』（1986 年、桂書房）として 1 冊にまとめられている。

はしがき

是の一篇は誰れにも前人未踏と信ぜられた黑部奥山一帯が今を去る三百年以前より越中農民達に依つて隈なく探險調査せられて居た事蹟を發表したものである。この農民達は英明な藩主の激勵に感奮し責務に精進すると共に、今日の登山者に劣らざる純な山の愛好者として、登山を樂しみ、山岳を愛し、俳諧連歌に想を述べ、山内の諸物の愛護に任じたのであつた。然かも余を最も喜ばしめたものは、處女地奥山の高山大岳が外國人や僧徒や雜輩の手に衣らず是の純乎たる農民の手に依つて早くから拓かれて居た事である。そしても一つの喜びは山岳諸家に今迄未到の地を些少とも抜き得たと云ふことである。この二の喜びが遲筆の余を鞭つて是の一篇を成さしめたのである。乍然本篇の根幹をなす古文書舊記は今に稀少であつて爲めに余の謬誤、偏見、獨斷を交へた所が寡くない。願はくば叱正を贈らんことを。尚又奥山一帯は十數年前汎んど余は足跡を印したるものゝ、今に到つて論ずれば即ち机上談山の譏を免れ難い。何づれ古繪圖を按じ書記錄を調べ再登山を試みて訂正の機を得たいと思ふ。（本篇に引用せる古繪圖舊記類は汎ね余の文庫の所藏に依る）

目　　次

黑部奥山の研究
一、奥山の濫觴
二、奥山の地境と名稱
三、奥山の國境と山道
四、奥山の森林
五、奥山の諸相（以下次回）
奥山廻り役の研究
奥山年表と關係舊記解説

黑部奥地の研究

一、奥山の濫觴

越中の國黑部奥山の起源は誠に空々莫々としたもので、推斷を許されない。其古記錄舊記等は古來殆んど瞥見を許されず、世人の耳目にふるゝものゝ無い状態である。黑部と云ふ字の語源も何處に根據して起り、何れの時代より文書に現れ、何れの記錄舊記等に使用明示せられて來たつたか、寡聞にして吾人の定かにし

得ない。

今吾人の手許に持つ慶長の越中古地圖には「黒邊川」と錄せられ居て、明かに現時立山地方の人々の信ずる「黒部とは山高く木立の眞黒に生ひ茂る日の目も見えぬ邊を指して言ふ言葉より出たもの」と云ふ口碑を想起せらるゝのである。但し此「黒邊」と云ふ文字も古文書には往々當字として用ひられて居るのだ。又域る越中の郷土研究家は曰く「黒部とはアイヌ語のグルベツより出でたるものである。グルベツとは魔の川と云ふ言葉であつて、妖怪も籠るてふ黒部八百八谷の水を合せて、愛本より下流は奔放自在新川郡の平野を年毎に荒し廻つて居る。けだし魔の川の所以である」と。此の論も仲々趣きがあるのである。アイヌ語は越中の所々に數多くの名稱を殘存して居るに徴して附會の説として一蹴すべきでない。

又一説に「黒部奥山の櫁（ねずこ）は俗に黒部杉と稱せらて良材として讃へられ、櫁は又黒檜（くろべ）とも云はれ、元來奥山には多量に生育する關係上遂に黒部と音律的に轉化したるならん」との意も又全然捨て去るべきでなからう。

尚又傳説には「黒姫山より流れ出づるもの右なるは姫川となり、左するは黒部川となる」と云はれて居るが之は全く一笑に附してよいと思ふ。

以上各説は一樣に棄て難い根據を有するものの、含味すれば只一面を語るのみであつて、俄かに採つて以つて正當となし得る確證の無いことが遺憾に堪へない。只第二説のアイヌ語のグルベツより轉化し、第三説のクロベ説を混淆したるものを以つて、やゝ吾人を首肯せしむるものあり、説述の體裁をも認めらるゝのであるが、尚後日の考證を待ちたい。

さて黒部が人文を有せざること數千年、文武天皇の大寶元年この黒部の一角をなす立山が慈興上人（佐伯有賴）に依つて開山せられた。爾來佛教の興隆に伴ふて、年々多數の立山禪定の人々がこの峰頭を目指して集り來つた。人々は峰頭より遙か東方日出づる後立山連嶺の壯觀を眺め、御來迎を拜しては只々佛緣の觀喜に咽び、地獄谷の異變を巡つては、因果應報の畏るべきを知る許りであつて、脚下の大黒部に對しては神官僧侶、中語、禪定者は等しく不知不言の地として、妖異を説くばかりで、事の眞をも傳へ得なかった。

立山の峯を歌ひ早月片貝の流に吟咏をやつた、萬葉の歌人大伴家持卿も、遂に國境の秘境黒部には片言隻句も無くて去つて行かれた。長享年中の堯惠上人の吾妻紀行もわづかに黒部峽口内山村の桃源の景色を述べたに過ぎない。

（吾妻紀行）の抜書

四圍秀峰に圍繞せられ恰も是れ壺中の小天地、黒部川其東北を流れ花時に至れば一眸紅ならざるなく黒部川の碧流と相映して幽邃桃源も比す可からず。（後略）

又宇奈月五千僧に堂塔伽籃があり戰國時代まで存在したと云はるゝものゝ、今何處に其の遺跡其の記錄を尋ね得べくもない。

かくて奥山は暗黒の内に年を重ね來つたが、戰國の末に到つてこの秘境に最初とも云ふべき快記錄、即ち越中富山の城主佐々成政が十一月立山の新雪を蹴つて佐良越を敢行し、濱松に徳川家康を訪ねた史實が吾人を驚かすのである。成政はこの前年天正十一年八月立山權現に四百五十俵の地を寄進して尊崇を表すと共に、他日危急の際萬一の通路をこの嶮絶の地針ノ木峠に取らんと、秘かに衆徒懐柔の計を施したのであつた。

（越遊行嚢抄）

立山權現勤行無二懈怠一旨被二申越一之通承届候、彌不レ可レ有二油斷一候、就中立山之儀從二神代一無二其隱堂建立一並祭禮如二先規一可レ入レ情之趣二十三人之請判得二其意一候、就レ其爲二新寄進一岩倉之内三百俵、以二寺田之内百五十俵一、合四百五十俵、全不レ可レ有二異儀一候、若堂塔橋以下大破二付而者、可レ被二相届一候旨、急度可二申遣一候、仍状如レ件

天正十一年八月二十日　　佐々内藏助

成政判

六角坊

院主御坊　寶堂本願　蓬門坊　長吏御坊　員林坊　楞嚴坊　千光坊　花藏坊

中道坊　常住坊　財知坊　覺乘坊　惣持坊　明靜坊　寶藏坊　藏積坊

多賀坊　玉藏坊　日蓮坊　無勒坊　實祀坊　玉林坊　一乘坊　以上二十三人

翌天正十二年霜月成政の佐良越踏破は斷行せられた。

（大閤記）

佐々内藏助勵_眞忠_雪中さらさらさら越之事。抑佐々内藏助成政、元は尾陽春日井郡平之城主たり、其後信長公被封千越中守護されば先君の恩惡を不忘して一とせ信雄卿與秀吉卿及鉾楯有しとき信雄卿御味方に與し越中にして義兵をおこし秀吉卿に敵對せり、天正十二年霜月下旬深雪をもいとはすさらさら越とて嶮難無双の山路に行迷ひぬ。是は何の地をさして思召立給ふやぞと從ひし士共問ひしかば遠州へこへ行家康へ相勸申來春は羽柴筑前守を討亡し信雄卿可ㇾ被ㇾ達_御本意_謀を盡し可ㇾ及歸國_也。兼て汝等に志らせ度は思ひけめと、於_賀州_無_沙汰_樣にとふかく忍び出しに依て左もなかりしなり。富山を出てより十日計は前田知まじ、ほの聞てより決定之間五日かくて陣用意五六日あらんや、上下二十日には歸城すべし其間は病と號し伽之者五六人かよひの小姓十人計には起請をかゝせ此義を知せつゝ毎日膳をもすへ常々有やうにこしらへおきしなり。かく思ひ立つてよりは只急がんより外よろしき事はなきぞとて雪になつまぬわかきはらを百人はかりめしつれ大山之嶺わきに攀上り南を見れば上下里有りとおほしくて紫折くぶる煙たえたえ也。いざ煙を心あてに下りみむかんしきと云ものに乘ておとしけれは眞忠の心さしを天感し給ふにや思ひの外やすやすと麓の里に著にけり。民のかまとに立入らん事のうれしさにあんないをもせす入しかば老たる樵天膽を消し是は變化のものそかし今此雪中に人間のわさにはあらしと不審しあへりぬ。小姓之長、建部兵庫頭と云し者いやとよ越中より信州深志邊へ心さす人にてあるそ宿をかしまいらせ道の案内をもせよ汝等心やすくあらんほとゝ引出物給へしと云しかはそれよりいとねんころにもてけうしけり。越中外山の城を十一月二十三日に出て十二月朔月日午の刻に上ミ諏訪に著したり。是より家康へ飛脚を以申達しければ駿州府中まで乘馬五十疋傳馬百疋迎ひとして被仰付宿等に至るまで一として不如意なること露もなきやうに徳川殿さたし給ひしに依つて雪中の勞苦を忘れつゝ十二月四日遠州濱松之城に至り家康卿へ對面し羽柴筑前守秀吉を討亡し信雄卿之達本意候樣に相議し翌朝打立清州之城に至つて御禮申上これかれ評議を盡し則令請暇又深雪の山路をたとりたとり越中に立歸りけりかく義を守り信を厚くせしに依て、秀吉卿とは不和にそ成にける。其後信雄卿與_秀吉卿_和睦有しかは佐々かひなき義を守り何事も徒になつて越中四部を三部羽柴肥前守（前田利長）に給り一部佐々に與へられ候し。

（家忠日記）

十二月二十五日丁卯越中之佐々内藏助濱松へこし候吉良信雄樣鷹野に御座候、御禮申候むかいにてふる舞候。

（當代記）

同十二月佐々陸奥守濱松へ下、千時信雄吉良鷹野シ玉フ　於_彼地_佐々有對面サテ頓テ歸國上下信州ヲ通

此の外寛永諸家系圖傳、武徳大成記、武徳編年集成、神君年譜、御庫本三河記、前田創業記、秀吉譜、末森記、微妙公御夜話等其他幾多の書中に於てこの成政の勇壯なる雪中佐良越の記述を見るのである。これ等の記述は主として大閤記より出發して居ると見られ、其間成政の濱松に到着せる日時の相違や又目的に關して家康と計つて共に秀吉を討んと策するものと、秀吉が己れを擊んことを恐れて援兵を乞ふが如きもの等の記述に些少の相違があるが冬期横斷は等しく認めて居るのである。然し他方天正十二年十月信雄と秀吉の間に和睦成立したる事實より推斷せば大閤記の記述は事實の顚倒せるを覺ゆる。此點を指摘して加賀藩士富田景周は其著「越登賀三州志」に於て、成政の佐良越は七月なるべしの評論を掲げられたのである。

（越登賀三州志）

有澤永貞云若キ時越中ニ住居シ立山禪定シテ其道ヲ嚮導ニ問フ、コノ山嶮絶ニシテ道只一筋ナリ、新宮ヲ岩倉ト云爰マテハ平地也、爰ヨリ三里許險路ヲ行テ中宮ヲ芦峅ト云、爰マテハ馬モ通フ也、爰ヨリ立山御前マテ九里余也、其道激水ヲ渉リ、嶮岨ヲ傳ヒ、岩ヲ踏ミ峯ニ上ル亦難所ノ比スヘキナシ、至險五里許上リテ不動堂ト云ニ至リ爰ヨリ立山ヘハ北ノ方左ヘツク沙羅沙羅越ハ右ヘツク其末ハ知ラス人ノ常ニ通フ道ニハアラズ、深谷大キニキレテ下ツテ又上ル風雨ニ逢フ時ハ進退度ヲ失フ夜宿セントスルニ民屋モナク洞窟ニ息フノ由ナリ、信州野口村ト云山家へ出ルナリ、芦峅ヨリ十一里許アリト云傳フ、爰ヨリ松本へ出人馬ヲヤトヒテ木曾路カ伊奈通リヲ行キテ遠州カ尾州へ出タルナルヘシサテ大閤記ニ十一月下旬ニ越中ヲ立テ十二月歸城トアルハ不審カシ、芦峅ノ者ニ問フニ冬日立山ニ登ルコトハ絶テナキコトナリ不動堂マデハ上ルコトアリ云、十一二月ノ比人ノ通フコトナシ、其上今年加州ノ

前田公ト戰フ起リハ七月ノ末ヨリシテ九月ニ至ツテ能州末森ノ城功後卷等ノコトアリ沙羅々々越コシテノ後加州ノ計策ニ及ヒタルコトナレハ六月七月ノ間ニコソ尾州遠州ヘモ行ツラメ其上今年十月ニ至ツテ秀吉公ト信雄卿トノ和平相濟ムナレハ霜月臘月深雪ヲ踏別ケテ行クヘキ理ナシト云々。景周按スルニ三壺記ニ十一月二十三日成政サラサラ越ヲコエ十二月四日遠州濱松ニ至リ神君ニ謁ストシ七國志、武徳大成記等ニモ十二月成政遠州ニ至ルトス、並ニ引證スベカラズ。是ハ十一月ト七月ト字體相似タルヲ謬寫セルコト疑フヘカラス、諸書ノ誤リ皆大閤記を因襲シテ之ニ及フト見ユ。

七月説を堅持する景周の所論の主點は、冬期山岳通過の不可能なることゝ、十月信雄秀吉の間に和議成立した事に依り、濱松行きの效なき事より判斷して居ることである。この説は成政の今年八月以降の行動より推測して合理的であると云はれ、今日も鄉土史家の信賴を受けて居る。乍然この七月説もこの季節の成政の濱松行は忽ち人々の耳目を聳て、且つ前田方を刺戟して警戒せしめ、且軍勢を進むるの掛念ある等の軍事上の難點を有する。これに比して前記十一月説の所論の優點は信州へ極秘の内に往來出來ること、然かも今年末森の決戰に破れ朝日山の攻防又利あらず、かてゝ加へて秀吉信雄の間に和議成立の報あり、形勢漸く己れに不利なるを以つて、急速信雄、家康の意向を打診し奮起を乞ひ且越中への援軍を求むるに在つた。神君年譜、御庫本三河記の記述ぶりが此間の消息を物語つて居るではないか。又雪中の佐良越は天候に恩まれ準備に缺くる所なくば今日では左まで難事ならぬ事ではないか。と云ふのである。後説に付いては、志田義秀が慶長五年十一月より十二月の候に於て軍勢を引率して新雪かさむ朝日山系（海拔六千尺）三十餘里を踏破して米澤城に退いた記事（「山岳」第二十九年第二號）に徵して、或は成政の霜月佐良越も可能にして然かも身邊の危急に際して最も深く考慮しての結果なりと判斷し、大閤記の記述を採るが當を得たものでないかと思ふのである。尚異論としては四月に決行せられたと云ふ説も存在するが、これは只里人談に過ぎない樣である。時節に上記の如く數説あるに對し佐良越の道筋に關しても數説がある。即ち人口に膾炙する現今の佐良越針ノ木峠道の外に劒嶽の北方ブナクラ越を通過したといふ説。又越中境川の奥あげろ路を通つたと云ふ説等である。この成政の壯擧は有名な丈け古來より傳説的色彩は中々に濃いのである。微妙公御夜話には佐良越とあげろ路を混同して居る。

（微妙公御夜話）

一、或時中納言樣越中立山之後に道あり、佐々内藏助信濃へ越る道も有能見て可參とて岡田助三郎、大橋甚兵衞金森長右解門、被遣、芦峅十三郎爲案内者、食物鍋を人夫に爲持、道の樣成河原をひたと行、信州松本へ出る也。夫より罷歸申上は黒部川原に付て罷越松本へ出申候、あけ路越と申は此通と承候。佐々内藏助越候さらさら越と申樣に承候、左樣之道は見不申候。但正月四日尾張内府へ參候は足輕二百人先に立雪を踏ませて參に山の谷雪吹埋陸地のことく成により却つて道よく候と申傳候旨承候。

筆者に佐良越の智識が無かつたのか、又この秘境の詳細は人々に語るを憚られたのか、切角中納言利常公の事業を記し乍ら内容は全く混同して記るされて居る。

以上各關係古文獻を通して、吾人は佐々成政が風雪の期よく嶮難の間を踏破して往來したる史實を確認し得て、驚嘆を禁じ得ない。只殘念なる事は成政が如何なる用意の下幾何の日時を費して如何なる山中の狀態の下に突破したるや、吾人の最も知らんと欲する點が朦朧として傳説的になり終つて居ることである。

成政のこの佐良越の史實は、既に此の時代ざらざら越の存することを明示したものであつた。當時信州邊の岩魚釣り、盜材者、密貿易者、間諜、立山禪定の拔け詣り等の者共が針ノ木峠を越して西に東に嶮路を辿つただらうと云ふことは想像に難くない。これ等の記錄や口碑にして見ても、奥山立入嚴禁の藩政時代の通過して來つた丈け、はばかる所あつて傳へられず湮滅してしまつたと見るべきであらう。又立山禪定の拔け詣り等は前立の岩峅寺や中宮の蘆峅寺が自己の存立上絶對に許さなかつた爲め記錄の絶無なるは致し方の無い事である。

天正八年以來新川郡を領知して居た佐々成政は天正十五年に至つて肥後に轉封せられて去り、新川郡は提げて前田利家の預り領となり、次いで文祿四年秋名實共に利家に領知せしめられた。於是この黒部奥山も長く前田家の制令下に置かるゝ事とはなつた。さて賢明なる利家候は佐々成政の佐良越の事實等を見聞した人

丈けに、此の嶮絶無双なる山岳地帯にも尚且數條の細徑を通し、然かも其道たるや信州に最も近く往來し得べき間道なることに鑑み、藩國の東方防衛の重要地區として黒部奥山の等閑に附すべからざるを痛感せられたことは自然のことであつた。

候は是の祕境の詳細を知り、且警備に關し慶長三年二月黒部峽口浦山村の百姓傳右衛門を大阪に召して諮問された。候は傳右衛門より種々奥山の状況を聞いて満足された。

（下新川郡史）

越中新川郡黒部奥山之儀委敷聞喜敷候謹言。

慶長三年二月　　利家在判

浦山村　傳右衛門

この傳右衛門は元和年中越後の浪士數百名が黒部峽口内山村に立籠りたるをも密訴して大事に至らしめなかつた功者とも云ふ傳へらる。次いで三代利常候は寛永十七年十二月黒部奥山に精通するこの松儀氏を召し出して諮問せらるると同時に、抜擢して奥山取締りの内役なる役儀に任命せられた。

候は松儀氏に鏡、硯、扇子等を與へ、然かも乘馬まで免許して役儀の重要なること、其勞苦に對する恩遇の並々ならぬことをも表明せられた。

（下新川郡史）

新川郡黒部奥山之儀見聞觀喜之事ニ候併深山之内□□等有之儀不審成事之候條是以後モ浪人山賊躰之者忍居歟暨山越ニ他國路通路之徒等者於有之ハ召捕可訴出候將鏡硯扇子令拜領候（寫眞文字不明）内役儀無怠慢心懸尤口外相愼不知不慮可相勤事。

附乘馬尤免許事

寛永十七年十二月　　中納言　利常在判

新川郡老百姓

浦山村　松儀傳右衛門

於是内役なる黒部奥山管理の役儀が發生して將來の加賀藩奥山廻役の濫觴をなした。即ち奥山の濫觴も此處を以つて其基本となすべきである。

此松儀氏の歿後慶安元年六月、ざらざら越黒部横斷路たる立山口の蘆峅村三左衛門父子を召し出して奥山の状況を聞き訂し、今回は藩吏を附して探險調査せしめられた。次いで同人に扶持米を給し、銀子、御帷子を拜領せしめ奥山廻りを命ぜられた。尚同人に鐵砲一挺に玉藥等を添へて渡され、此のざらざら越一帶奥山の警戒を命ぜられた。

（蘆峅村十三郎由諸書）

一、微妙院様（利常候）江戸より御登ノ刻慶安元年六月津幡ニ而津田玄蕃殿御取次ニ而私、親三左衛門小松へ可罷登旨被爲仰出候により同十八日ニ親三左衛門、私兩人小松江罷登玄蕃殿江相詰候へハ御城江被召出候、被仰渡候ハ先年權現様遠州濱松ニ被爲成御座候時分佐々陸奥守殿上下御通被成候ざらざらこえの道筋爲御見分岡田助三郎殿大島甚兵衛殿金森長右衛門殿被爲遣候間親三左衛門、私兩人ニ案内仕罷越又黒部愛本より奥の様子何とそ見候而歸候へとの被仰渡ニ付同年七月三日ニ右ざらざら越仕夫より信州野口村領之内馬留と申所迄右御三人案内仕り同七月十二日ニ蘆峅へ罷歸り夫より黒部愛本の奥内山村へ罷越黒邊谷奥わかべ、つりがね、つか山と申所より罷歸七月二十一日小松江罷登右ざらざらこえの次第黒邊谷之様躰繪圖仕上申候。

一、小松に於て毎日兩度御城江親、私相詰申候所ニ應安元年八月朔日私共ニ御銀、御帷子拜領其上私ニ四人扶持方被下御鐵砲新持筒壹挺玉三千藥三貫目小道具色々致拜嶺難有忝致頂戴今以所持仕罷在申候。

熱心なる利常候の奥山探究の態度が右の由諸書の上にいかに彷彿として居るではないか。此の結果、暗黒境黒部奥山にも一導の光明を點じ黎明が訪れた。常時出來上つた調査の記錄繪圖を以て吾人は黒部奥山開明の出發點とするのである。この慶安の調査のことは微妙公御夜話にも記載されて居ることは前々に記るうした通りである。この開明期に於ては戰國を去る日淺きまゝ奥山の施設も先づ攻防の戰略的意義を有する警備第一義を以て主としたものであつた。松儀由緒、十三郎由諸は多分にこの意味を持つものである。最もこれを端的に表現したものには小山田覺書がある。

（小山田覺書）

越中越後山境に上ノ山と云ふ村あり三日市より入境川の源を越る也。微妙公御代に其所の百姓五人に鐵砲五挺被下其外農具等被下作取に被仰付候。若水之境を何者ニ而も忍て越る者あらば打捨仕申ニ而境守仕候旨ニ而所ノ者申候、只今は三十軒斗ノ村也。越後關山へ出候旨足輕市島久左衞門申候。

この打捨御免の思想は當時の常識であつて未開に律する前田氏の周到なる用意と云つて讃へずばなるまい。此後奥山廻役も二名となり三名となつて維新に到つた。寛文五年に加賀藩は林制たる山廻役を設け七木の禁令を發布したのであるが、奥山廻役は別段其職律に變化を受けず隣國境界の警戒を第一義とし七木の禁令を第二義として役儀勵行し來つた。後年黒部奥山に木材伐採の議起り藩廳より奥山廻役に意見具申を命ぜられたる際も、彼等の勞苦廻避も去り乍ら固く利常候の遺戒を守つて警戒第一義を申し立てゝ難色を示したのであつた。

以上概述せる如く黒部奥山の濫觴は警戒第一義の下に生れ、中期に至つて林制上の各施設を取り入れて發達したのだつたが、取締りの嚴重さは年月を閲して變らず明治開放期に達したのであつた。

此間是の警戒第一義も廣汎なる黒部奥山に行き届かず各所に破口を生じ、頻りに信州の大盜伐者や岩魚釣の越境密行者を發見し、周章狼狽を演じ、遂に天明以降毎夏本藩より特派の横目足輕を加ふる山奥廻役の一行三十餘名の大登山隊を繰り出し、大正、昭和の登山者が人跡未倒と騒ぎ立てたる黒部奥山一帶を虱つぶしに探査することゝなつた。

二、奥山の地境と名稱

黒部奥山なる言葉は慶長三年前田利家侯の手簡に依つて現れ、續いて各書に散見する所である。想ふに奥山なる言葉は隨所に使はれたる常用語であつて深山幽谷を指すもので黒部のみが專有する言葉ではない。然るに加賀藩では使用上明確に區別を付けてしまつた。

（加賀藩御定書）

越中加賀兩國奥山之事。

一、奥山とは申は吉野（註、白山溪谷）より奥之分。新川郡立山を奥山と申旨。

即ち奥山を立山と呼んで其地方一帶を指して居ることが略ぼ首肯し得る。後世の稱呼黒部奥山、常願寺奥山、又は新川郡蘆峅寺奥山なるものは、立山と云ふ御定書の稱呼より擴大して便宜的に使用せられて來たのである。然し便宜と云へども使用は立山を中心とする深山以外には越中に於て奥山と呼ばるゝものは無いのである。

「奥山」の稱呼あり從つて地境は如何。元祿十三年の「奥山御境目見通繪圖」には越中境川の奥より黒部奥境をなす山々、後立山連峯、飛州境の山々より神通川綠りの緒谷村に至る間の山々谷々を記載して居るが表題の如く奥山の一語に一括せられて居る。この繪圖の奥山を裏書するものに當時の奥山廻りの覺書がある。

（岩城記錄）

一、私共儀毎々之通奥山廻り與六月十八日より境川奥、黒部奥山見分仕リ七月二日に罷歸り申候、同七月廿三日よりさら越見分仕りはりの木谷川合ニ而いはな釣申小屋掛置魚釣申かと一兩日逗留見分仕候へ共小屋之跡も無御座魚釣人も相見不申候、信州境を見分仕り夫より黒部水上飛州境迄罷越見分仕り八月十四日に罷越候、當御領境目筋相替義無御座候以上

元祿六年八月十五日　　内山村　三郎左衞門

この覺書の範圍を辿つて見れば略ぼ前項の繪圖と一致するではないか。尚享保十一年十月奥山廻役太田本江村善右衞門覺書に「一、私儀奥山廻りに而毎年奥山廻り御奉行所より被仰渡登山仕候得共是は越後信州飛彈御境目相廻り申候以上」と端的に述べて、境川より神通川に至る間の國境線を巡回する由を表明して居る。奥山なる範圍を極めて自然に物語つて居るではないか。降つて享和二年の「奥山御境目見通山成川成繪圖」にも同樣に黒部峽谷より信越飛の國境を成す山々谷々さては立山連峯を畫き神川縁りに到つて居る。又文化初頭の「奥山御境目並谷々川筋等略繪圖」も以上に加へて片貝谷、早月谷、常願寺谷まで記載せられて居て

是又奥山の稱呼に一括せられて居る。此の繪圖は奥山廻役の使用せるもので文化以後天保年間石黒信由翁の測圖完成まで概して變りはない。石黒翁とても奥山廻の古圖を參照せられたたる故些少名稱の變化を加へられたに過ぎず明治に將來して居る。然し奥山の範圍は石黒翁と云へども一指を染めて居られない。於是吾人は文化初頭より奥山の稱呼は立山中心として擴大して使用せられたることを知る。必然的にこの奥山に黒部の二文を冠すれば黒部川峽谷を形成する山々谷々を指すことゝなるは前文より歸結して當然過ぎる事である。この黒部奥山に上奥山なる言葉と下奥山なる言葉と二つの名稱がある。これは中ノ瀨平（註平ノ小屋）を中心として上流地方を上奥山と云ひ、下流地方の山々を下奥山と稱呼するのである。

明治に入つた後は此等黒部奥山の大部分は國有林に編入せられ現在では大阪營林局署の管下に入つて居る。其廣袤は宇奈月より上流一帶鷲羽岳まで黒部峽谷の本支流の全部凡そ東西五里、南北七里の重疊たる山岳地面積七萬町歩と稱さるゝ擴大なる地域である。

さて此の黒部奥山と呼ばれて居た藩政時代の奥山は如何なる状態であつたか。峯々谷々は如何。奥山廻役の見分も其水準を如何に昇げ來つたか。本項の研究の主力も此處に費さなければならない。

藩政以前の奥山繪圖とは何んなもであつたか？　恐らくはそんなものは存在しなかつたであらう。慶長の越中國古圖は立山は立派に記載せられているが、其背面は全くの白紙である。從つて立山が國境線上に在る譯である。此頃の繪圖も奥山の智識もこの程度が本當のものであつたろうと思ふ。即ち越中で立山と云へば奥山をも含むと云ふ觀念は常識であつたに違ひない。この蒙を啓いたのが加賀三代利常侯である。慶安元年侯の命を奉じた大島、岡田、金森の三奉行は蘆峅村十三郎等を案内役として奥山深く調査した記錄、又は同行の繪師半兵衞に畫かしめた繪圖は吾人の耳目にも奥山記錄として最も古い所である。此の調査は侯の深慮遠謀より出た所と認られ、十三郎由諸書又は微妙公御夜話等にも載せられて居ることは前述の通りである。

此の調査隊の規模の大は長く前後に比を見ない所である。藩より大島甚兵衞、岡田助三郎、金森長右衞門の三奉行が特派せられ、地元より蘆峅村十三郎、同人父三左衞門、弟權右衞門の三名、案内役として先導し、繪圖方として山の繪師半兵衞も同行せしめた。彼等一行に付隨する從者人夫も今に殘る文書上にて六十餘名の多くを數へらるゝのは少なからず驚かさるゝのである。

慶安元年七月三日一行は蘆峅村に勢揃ひした。この佐良越はりの木峠の調査は餘程精密を期したらしく、彼等は歩一歩二十間繩を以つて測量に從事したのであった。先づ姥堂前の一本榎を基點として測量を開始した。一行は藤橋を渡り黄金坂より材木坂、ぶな坂を經て彌陀ヶ原野に入り、追分より轉じて、松尾峠を下り立山下溫泉を對岸に眺めて刈込池を通過、ざら川（註湯川の奥）に付いて溯り、佐良峠の頂上に達し尚も測量續けて中ノ谷を下り、かりやすかんまく峠（註、苅安峠）を經て、ぬくい谷に入り此處にて不用の人夫二十名を歸還せしめ一行は此處に野宿した如くである。次いで再び作業を續け黒部大川端の中ノ瀨平（註平ノ小屋の附近）に達し、川幅二十五間の激流を涉つてはりの木峠に掛つた。一行は針の木谷の美林には驚いたのである。「左右は御材木山有。」と帳面に特筆大書した。かくして遂に針ノ木峠の絶頂に達した。

（奥山廻役喜右衞門記錄）

（前略）はりの木峠の峯但信州と越中と御境目山但此峠より信州へ下る。北へ向つて下る也。但此峯より駿河國富士山、信州松本ノ平なども詠見仕候。蘆峅寺姥堂より堺目迄但略間にて合壹萬九千百六拾五間あり。之を里に直す但三拾六丁〆。八里三拾壹丁貳拾間有。（後略）

彼等一行は針ノ木峠の頂上たる國境に止まらず、尚も測量を續けて、峠を下り信州路を野口村に向つた。一行は峠麓の馬留に到達した河北岸の栂の大木を目印として漸く測量の終點と定めた。帳面には此處にて野口村太郎に出會つたと記して居る。この越境の測量はこの調査の重大で且つ完璧を期したものなることを明示して居る。此の一行に繪師半兵衞が同行して見取繪圖作製に當つたのであるが、この時利常侯に呈出された繪圖は相當に立派なものと相像さるゝが、此の記念すべき繪圖は今何處に探し求むべきや定かで

ないのが殘念である。今日僅かに手元に殘された當時測量の貴重なる成果書の一節を掲げて當時の人々の苦心に敬意を捧げたい。

（奥山廻役喜右衞門記錄）

越中ノ御境山の名目針ノ木峠と云ふ。

信州ノ御境山の名目信濃峠と云ふ。

右の山境正峯より但貳拾間繩ニ而三三三＋三三三＋三三三＋三三三＋三三二〆四拾八繩ノ内七割ハ雪アリ此所右ノ堺峯但峠より五町程下ニ則雪ふミ通ル也おり詰則是ニ泊リ所あり。三三三＋三三三＋三三三＋此所くだれは右ニ平有二二くたれば川左に平有一＋三三川左り平あり三＋一此所下ル右手ノ川詰に小丸山有三三二＋三下れば川ノ左手に丸ヶ岩屋といふ岩屋有三此所川ノ南に平有三＋一此所下れは左より出る谷川有二三二此所迄川北ノ方は平也一＋三此所北に少し平有三三＋三二此所左右に平有二二＋同斷下りは右の方に小谷あり二＋此所ニ野口村杣共ノ板小屋壹問有但河北ニ有之三三三＋此所薪にう有也三三三＋二此所河北杣ノ板小屋三間有並河南ノ方より小谷出ル三三一＋三三三＋此所馬留といふ所也。是迄〆貳百貳拾八繩有り河北に栂又ノ木ノ大木有越中堺より信州馬留迄略間にて〆五千拾六間有り是を里に〆貳里拾壹丁三拾六間有。

大島甚兵衞樣御内待

半四郎殿

久石衞門

才三郎

長三郎

岡田助三郎樣御内待

六郎兵衞殿

角　藏

新右衞門

長　助

金森長右衞門樣御内待

仁　助

六　助

蘆峅村　三左衞門

十三郎、弟　權右衞門

繪師、富山　半兵衞殿

大澤次作

町袋村　善右工門

平榎　木村久助

長福　寺村三郎右衞門

この一行は七月十二日蘆峅寺へ歸り、再び行路を改めて黒部峽口方面愛本より山又山を越えて「わかべ」、「つりかね」（註、鐘釣か）、「つか山」まで遠く調査して七月二十一日歸國、加賀小松城なる利常侯の許に委曲報告した。今日彼等一行の愛本の奥を調査した記錄は知る由もないが、蘆峅村十三郎由諸書に依つて「右ざらざら越の次第黒邊谷の樣躰繪圖仕上申候」と書いて居るのを見ても、此の方面も相當に測量もせられ、繪圖も出來上つた事と推察せらる。利常侯は只一回の此の調査には滿足せられず屢々繪圖を修正して實地に適應する樣に努力せられた樣である。其後藩廳に於ても是の意を奉じ頻りに繪圖を重修して國境の粉爭に備へた。藩公用の公文書に正保の御繪圖、承應の御繪圖、寛文の御繪圖、又は延寶の御繪圖の名稱が隨所に發見されるが、是等繪圖も現在は名稱を聞くのみで吾人の耳目外にあるのは遺憾至極である。

寛文年間加賀藩は白山所屬の爭議に敗れ、境界問題の如何に解決至難なるかを痛感した關係上、今までの繪圖等の大修正を行ひ速かに國境問題の回避解消を決意した。於是國境線の一番不確實なる黒部奥山が問題

化した事は云ふまでもない。この奥山は慶安以來奥山廻役等に諮問して修正に修正を重ねたが、未だ想像圖を脱するに至らなかつたので、元祿十年より頻りに奥山廻役を召致して其準備に着手し彼等より覺書を徵し奥山國境の諸相を闡明にせんと努力した。元祿十三年三月二十三日奥山廻役三名を藩廳に召し出して、御算用場奉行野村五郎兵衞等の連署にて奥山御境目山々の實相を諮問し覺書を呈出せしめ、御繪圖に誤りあらば修正せよと命じた。此の時彼等は奥山御境目見通繪圖なる圖略と覺書を呈した。

（奥山廻岩城記錄）

覺

一、越後境寺山ハ越中大平村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概三里程御座候。

一、同下駒ヶ嶽は寺山ゟ南東之方ニ當リ申候。此間道程大概七里程御座候。

一、同犬ヶ嶽ハ下駒ヶ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

一、同黒岩ヶ嶽は犬ヶ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

一、同ゑぶりヶ嶽ハ黒岩ヶ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

一、同はちヶ嶽はゑぶりヶ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

一、同ゆきくらヶ嶽ハはちヶ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

一、同上駒ヶ嶽ハゆきくらヶ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

一、越後信濃境鑓ヶ嶽ハ上駒ヶ嶽ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

一、飛彈境鍋ヶ嶽ハ飛州信州境鷲ヶ羽嶽ゟ西ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

一、同上ノ嶽ハ鍋ヶ嶽ゟ西北ノ間ニ當申候。此間道程大概三里程御座候。

一、同寺地山ハ越中有峯村ゟ南ノ方ニ當リ申候。此間道程大概四里程御座候。

一、同から尾峠は有峯村ゟ西南之方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

一、同高幡山は越中長棟村ゟ東南之間ニ當リ申候。此間道程大概半里程御座候。

一、同高つふり山へ長棟村ゟ西南之間ニ當リ申候。此間道程大概半里程御座候。

一、同刀刃山ハ長棟村ゟ西北ノ間ニ當リ申候。此間道程大概半里程御座候。

一、同大かすみ谷ハ越中猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概貳里半程御座候。

一、同小かすみ谷は猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

一、同てやくこ谷ハ猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概壹里三十丁程御座候。

一、同くしりか谷は猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概壹里半程御座候。

一、同むしなか尾は猪谷村ゟ東之方ニ當リ申候。此間道程大概壹里程御座候。

一、同大三つ頭山ハ猪谷村ゟ東南之方間ニ當リ申候。此間道程大概半里程御座候。

一、右書上申山々名所之義所之者並近在之者茂右之通唱申候。

一、越中有峯村ゟ信濃境鷲ヶ羽嶽迄大概拾壹里程御座候。

一、同有峯村ゟ飛州江越申和佐府道ゟ信濃境迄峯通。

一、柳澤川北又川兩川共ニ越中山ゟ流出末ニ而落合黒なき川と申候。ゆきくらヶ嶽ゟ南西之間ニ當申候。

右川名之儀所之者並近在之者茂唱申候以上。

元祿十三年三月廿九日

新川郡奥山廻　内山村　三郎左衞門

同　　太田本江村　宗兵衞

同　　下梅澤村　市郎右衞門

不破平左衞門殿

小塚善左衞門殿

野村五郎兵衞殿

御横目樣御兩人御出御奉行樣と御列座

小笠原皆右衞門殿

山口源太夫殿

御改作奉行　佐藤仲左衞門殿

御取次　齋藤辰右衞門殿

繪師　喜平次

同　　長三郎

（註　この喜平次は慶安の時の繪師半兵衞の子である。）

物々しい御算用場の詮義振りが窺はれるではないか。國境の概念を得るのにかくにも愼重を期した。繪圖に付いては再答申が呈出された。

（奥山廻岩城記錄）

御國境目之儀ニ付御尋之品々奉得其意御假繪圖拜見仕候。

一、御假繪圖ニ記御座候飛州境上ノ嶽少相違ニ御座候ニ付直シ申候。

一、御假繪圖ニさら越道形御座候得共相極たる道筋ハ無御座候、私共度々相廻申砌ハ右之道筋大概罷越候慥成道ハ無御座候。

一、鑓ヶ嶽ゟ信州江越申道之儀御假繪圖ニ道形無御座候得共先年三郎左衞門信州江罷越申砌此道を罷通り候併さら越同事ニ極たる道筋ハ無御座候。

一、御假繪圖ニ記御座候飛州境上ノ嶽ゟ信州境山々越後境犬ヶ嶽迄御境目峯通リ候由承傳見覺申候得共双方出合之所と極たる義ハ無御座候。

一、御假繪圖ニ記御座候越後境下駒ヶ嶽ゟ同寺山迄ハ峯ヲ限双方ゟかせき仕候ニ付御境相知申候。

一、御假繪圖ニ記御座候越後越中境川之山際ゟ同海際迄相達御座候ニ付直シ申候。

一、大平村ゟ越中越後境海際迄往還道之外極りたる道筋ハ無御座候得共川原之義ニ御座候故何方ゟ茂相越申候。

一、飛州境上ノ嶽ゟ越後境犬ヶ嶽迄之内ニさら越幷鑓ヶ嶽ゟ信州江越道之外他國江越道無御座候。併飛州境上ノ嶽の間幷越後境上駒ヶ嶽ゟ同犬ヶ嶽迄之内ニは他國江越申候得共可罷越所可有之様ニ奉存候然共私共終ニ越申儀ハ無御座候同下駒ヶ嶽ゟ大平村迄之内ニハ他國江越道ハ御座候得共極たる道筋ハ無御座候。

一、飛州境上ノ嶽ゟ越後境海際迄之内大平村と荒澤川落合境川江流申候此外他國ゟ流申川無御座候以上。

元祿十三年四月六日

新川縣奥山廻　内山村　三郎左衞門

同　太田本江村　宗兵衞

同　下梅澤村　市郎右衞門

不破平左衞門殿

小塚善左衞門殿

野村五郎兵衞殿

（奥山廻岩城記錄）

覺

一、芦峅村ゟ立山峯迄九里八町と先規ゟ申傳候。

一、立山峯ゟ越中信州ノ境はりの木峠迄私共度々罷越候道程大概九里程可有御座と奉存候。

一、越中はりの木峠ゟ信濃國大出村迄道程大概三里程並越中信州境鑓ヶ嶽ゟ信濃國細野村迄道程大概四里程可有御座與奉存候此兩所道程先年三郎左衞門信州江罷越候ニ付相考記申候。

一、越中境村ゟ越後玉木村迄三百拾三間内貳百六捨六間境村ゟ川端迄。

但川筋之違ゝゟ過不足御座四拾七間境川之内ゟ玉木村迄。

但越後之内丁間打申様難仕境村源六方ゟ見方ニ而申越候以上。

元祿十三年四月六日

新川郡奥山廻　内山村　　三郎左衞門

同　　太田本江村　宗兵衞

同　　下梅澤村　　市郎右衞門

不破平左衞門殿

小塚善左衞門殿

野村五郎兵衞殿

常時の奥山の智識を傾到した前記三文書に於て注意せらるゝ點は、此の廣大な奥山數十里の間に於て鷲羽嶽より北方鑓ヶ嶽迄は針ノ木峠附近を除いてはほとんど山内國境の様子が彼等奥山廻役にも判つて居ない様である。奥山御境目見通繪圖にしても立山、藥師嶽、鑓ヶ嶽等よりの展望想像圖に過ぎない事に氣が付くであろう。是の圖に於ては鷲ノ羽嶽より北へは中嶽、赤牛ヶ嶽、大打ヶ嶽、眞砂ヶ嶽、はりの木峠、後立山、がきヶ嶽、上犬ヶ嶽、不歸ヶ嶽、鑓ヶ嶽と十一個の山名を見るに過ぎない。谷々でも針ノ木谷川、柳澤川谷、水上谷、犬又谷位いのものである。

毎年奥山廻りを爲す國境警備の役人にして然り、藩廳の役人繪師等も如何なる概念を得、如何に繪圖を畫くべきや如何に困惑したことか察するに餘りがある。

（奥山廻岩城記錄）

（前略）右書上申御境山に方角並に道程に付有峯村より信州境道のり立山峯よりはりの木峠迄道のり蛭谷村より信州境鑓ヶ嶽迄道のり義右山々難罷越山數多く御座候に付方角道のり等難圖由達而申候へ共いかにも左様に可有之、乍去大概申候へ左なくては御繪圖之義に付御延引之儀成不申候間其方共申段右御奉行様方御聞届候間大概に申候へと御座候。（後略）

この文書は當時の模様を手記したもので、奥山廻役の告白に奉行の方でも心得て繪圖の製作上大概の想像でも好いから答申せよと命じて居るあたり、如何にも當時の状況を彷彿として吾人に興趣を起さしめるものである。慶安以來手を盡した加賀藩の奥山繪圖にしても、元祿時代には僅かに想像圖を以つて滿足して居る始末で、當時の奥山廻役まで前記の有様では他に方法が無かつたと云へやう。是後も繪圖類は幾度か加筆訂正せられて行つた如くである。奥山廻役に繪圖方御用として褒美の代官役を授けられたのも此の時からである。愚直なる彼等は奥山の繪圖に付いては大いに責任を感じ努力を捧げ相當の貢獻した事は間違ひは無い。が然し何しても幼稚な智識と測量的の常識皆無の爲め常に見取圖等も百年一日を具現して居るのは止むを得ぬ事であろう。

繪圖に關しては吾人の手許に元祿以降享和に到る迄の約百年間のものが存在して居ない。又其間の測量其他の記錄も見聞して居ないのが殘念である。

此の間に正徳二年にははりの木谷に尾張者入込大盜伐の珍事あり、享保十一年には黒部奥山より材木伐出しの事あり、寛保元年にも盜伐の事あり、安永四年には上奥山にて盜伐を發見し犯人たる信州者捕縛の事あり、其他大小の事件相次いで起り奥山の地境も好むと好まざるとに係らず明かにせざるを得ざる状態となつて來た。是れ等の時代を通過して出來た享和二年の繪圖こそ吾人の期待して居るものであるが、この期待も享和圖を一覽してやゝ失望に近いものを味はされる。山名に於ては僅かに後立山方面には錫杖ヶ嶽を現出し針ノ木峠以南でははりの木嶽、折嶽の新名稱を見出すに過ぎない。但し谷々は相當に調査せられて、針ノ木以南では、折谷、岩苔谷、中嶽谷、ヌクイ谷等であり、以北では一ノ越谷、前山谷、黒なぎ川、樫薙、ノリクラガ谷、杉谷、ジヨウグウ谷、黒岩谷、ヒロ川原、大森石等の名稱が出現して來て近代の名稱の起源をなして居る。

此の享和繪圖即ち「奥山御境目見通山成川成繪圖」に續いで吾人の手許に在る最も關心を繫ぎ得る繪圖は文化初年の作「奥山御境目並谷々筋略繪圖」である。此の圖に於ては山名は赤鬼ヶ嶽の出現位なれど、谷々は詳しく記入せられ、嶮絶一世に鳴る十字峽附近も誤り乍らも朧氣に記入せられて居る。其他にも仲々よく調査せられて後立山方面の暗黒界を除けば、略ぼ近世の地圖に接近し來つて居るのを見る。此の以降の繪圖では文化年間の「新川郡繪圖」や、有名な越中の數學家石黒信由翁の「三州測量圖籍」十二冊である。石黒

翁は文政二年に藩命を受けて三州の測量に着手し文政七年三月「三州郡分略圖」を成就した。其後天保六年この略圖と略圖の基本をなす圖籍を清記して差し出したのである。即ち今に殘る郡分略圖と三州測量圖籍である。此の後加越能の地圖は長く翁の測圖に準據したものであつた。明治六年の越中國全圖も、十二年の縣下概測圖も甚しきはずつと降つて大正七年の富山市中田書店より發行の富山縣全圖までが翁の製圖に準じて居る。

以上の諸繪圖に依り、彼等の奥山諸手錄に依つて、彼等は奥山廻り常例道である信越飛境の山徑を縫ふて、嚴重なる山廻りを毎年實施し、其奥山の智識も略現今に近きものなることを知るのである。

依つて吾人は今手許に保存せらるゝ繪圖記錄に據つて些か今昔を比較對照し、併せて古來より立派に其名稱を存し乍ら實在を疑問視せられた後立山とは何處の山頂を指すものなりや、又信越飛の三國の境界は鷲羽嶽なりや蓮華嶽なりや、然して大蓮華と白馬との名稱の異動等を研究して山岳諸家の批判を乞ひたいと考へる。

先づ越中東境なる後立山々脈北端より順次南へ筆を進めやう。寺山、下駒ヶ嶽、黑岩ヶ嶽は今も昔も名稱に變りがない。ゑぶりか嶽は現測量部五萬分の一圖上にあるエブリ山には該當せず、北又谷の支流惠振谷の源頭に在る朝日岳を指すものではなからうか。次の赤男山は變りない樣であるが、雪倉ヶ嶽と針ヶ嶽とは現在は名稱が取り違つて居る。此の取違ひは元錄の繪圖より現今に至る迄測量部のみが取違ひの記入をなして居るのである。是等は些細な事ながら間違が正當化して居る一例で困つたものである。雪倉ヶ嶽の南へ連る上駒ヶ嶽は古來奥山廻の必らず登山して北方の山々御境目見分の見渡し場所として重視せられた所である。

（奥山廻岩城記錄）

（前略）上駒ヶ嶽へ登り下駒ヶ嶽ノ方御境目を見通し候而夫ゟ鑓ヶ嶽へ罷登りがきヶ嶽、後立山此山々難罷越候故峯通御境目を見渡罷歸申候。

然らば此の上駒ヶ嶽の名稱は現今の何れの峯に該當するだらうか。元錄十三年の覺書の「上駒ヶ嶽はゆきくらが嶽より南方に當る。但此道大がい壹里程御座候」を先づ念頭に置いて、吾人は現在の五萬分圖に依る峯々を南方へ點檢して行けば、必然的に白馬岳へ其指頭は向くのである。國境線上の峯々山々の見通し見分を第一義とする奥山廻りには、白馬岳に於てのみ廣大な見通し云々が可能であるからである。白馬岳は現在越中越後信濃三國の境として標高も最高を誇つて居るが、上駒ヶ嶽と呼ばれた時代は却つて其南方の鑓ヶ嶽が最も高く且三國の境として有名なものであつた。この上駒ヶ嶽が古來平凡に取扱はれて來た源因は其山容がなだらかで隣に屹立する峻峭な鑓ヶ嶽と比べて少からず見劣りする點であろう。も一つは國境線の南望が鑓ヶ嶽より劣る點であろう。上駒ヶ嶽を三國の境と認め圖上に表はされたものは石黑信由翁の三州郡分略圖と三州測量圖籍である。これ等の繪圖では上駒ヶ嶽の南腰に三國々境が記入され、南方へ小蓮花、大蓮花が國境線をなして屹立し、是迄三國々境として有名な鑓ヶ嶽とそれに續く不歸ヶ嶽は國内の山岳として上駒ヶ嶽の西方に記入されて居るのには少なからず異樣に感ぜられる。文政末年の藩撰とも見るべき三州地理志稿にも「鑓ヶ嶽、在上駒ヶ嶽西。」と出て居て圖籍に符合して居るのである。

これ以降の越中各地圖は皆この繪圖を踏襲して居るので、明治大正までも三州の境目は上駒ヶ嶽と記入せられて居る。尚又嘉永年間の「新川郡海岸分間繪圖」の中の入善町堂又川落口左岸よりの展望方位に上駒ヶ嶽、辰廿五度九と記入せられて居る。此れ正しく白馬岳を指し示して居るではないか。

さて上駒ヶ嶽を白馬岳とすれば、之より南に連る文化迄の各繪圖に見ゆる鑓ヶ嶽は當然今も鑓ヶ嶽と呼ばれるものに相違ない。この鑓ヶ嶽は古來三國の御境目に聳立する名山として、繪圖上に於ても山廻りの見分箇所としても著名なものであつた。天保の信濃國全圖に見ゆる鑓ヶ嶽なる名稱も唯一の越中側稱呼と共通せる點に於て此の著名の名殘と見なすべきであろう。鑓ヶ嶽は又越中小川溫泉より山又山を越えて信州へ通ふ山徑を有する點でも古來有名であつた。前揭元錄十三年覺書「鑓ヶ嶽より信州江越申道儀御假繪圖に道形無御座候得共先年三郎左衞門信州江罷越申砌此道ヲ罷通リ候併さら越同事ニ極たる道筋は無御座候」と隨分古

き山徑なる由を傳へて居る。降つて三州地理志稿には肝心の鑓ヶ嶽は國内に記し乍ら、是の山道のことは削除ならずと見えて、「元錄上記云。鑓ヶ嶽有間道通信濃州不有定路」と記して居る。此の鑓ヶ嶽が文政年間に至つて石黑信由翁に依つて越中國内の山岳として取扱はれて居る。然らば在來の鑓ヶ嶽なる地點は如何か。國籍に於ては上駒ヶ嶽の南方へ小蓮花、大蓮花なる名稱が出現して居るから、是を以つて考ふれば、上駒ヶ嶽は白馬に、小蓮花は杓子に、大蓮花は鑓に當てはめざる得ない。於是古來有名な鑓ヶ嶽なる名稱は大蓮花なる名稱に轉移し、然かも三國の御境目なる名山と云ふ觀念をも受けついだのである。然かも鑓ヶ嶽や不歸ヶ嶽なる古名稱を削除出來ず、申し譯け的に國内に聳立させたのは頗る不可解である。山名の變轉等尚研究の必要がある。三州測量圖籍が大蓮花と云ふ名稱を重視して採用した事は其頃すでに奥山廻役や地方人に依つて實際的に使用せられた居たと見るべきである。文政以後は蓮花山として通用語となつて居る。

（下奥山御境目廻御用方控）天保十四年齋木有次郎手記

（前略）同十七日天氣也、朝六つ出立いたし蓮花山江登り他國山信州ノ御田地直下に見申候人家も見申候。御國山之義は不及申御境目筋見分仕候而何も大悦ニ奉存候。

（下奥山日記）安政三年竹内常右衞門手記

（前略）七月四日晴天、麓の小屋辰上刻出立巳ノ上刻に蓮花山頂に至る、松原、竹内、脇坂、伊藤也。召連候杣は山崎村權之亟、同茂兵衞、蛭谷村彌助、山女村小兵衞也。快晴とは乍申煙雲兎角不晴頂に休むこと一時斗にて漸く御領御境筋見ゆる依而下山。（後略）

この蓮花山が後年に至るに從つて、三國の境と云ふ觀念と共に實際の三國の境上駒ヶ嶽に結び付いて大蓮花即白馬とまで進展したのではないか。又奥山廻りの登山も同樣藩政末期には、上駒ヶ嶽即大蓮花（即白馬）といふ樣になつて居たと思ふ節々がある。この頃には上駒ヶ嶽の高度も相當に認められて居た事と思ふ。大蓮花が越中人士に膾炙した所以は、鑓ヶ嶽と云ふ古稱以來三國の境をなす最高の峯と云ふ觀念の轉統が、上駒ヶ嶽と云ふ小さげな名稱や嚴密な意味の國境地點などを超越して、此のおほらかな大蓮花と云ふ名稱を喜んでもてはやしたと考ふべきではなかろうか。越中の大蓮花即ち信濃の白馬とは近く誰れしも疑はない所である。

是の大蓮花は遠く二百七八十年以前より山廻り役に依つて登山せられ委しく調査せられ、其名稱、位置も後世不動なる筈なるに、かくも時代に依つて變遷するとは實に不可解千萬である。變遷しないとしても其位置が前後左右することは矢張り不可解事である。

さて鑓ヶ嶽より以南即ち後年の大蓮花より以南針ノ木峠までの間の状態は、藩命を以つて毎年踏査する奥山廻役にさへ「罷越し難き」山々と云はれ、永く暗黑界として繪圖上に明記を許されぬ所であつた。元錄十三年の前掲の覺書を見ても此の方面の記載が全然脱漏して居ることに注意せらるゝであろう。後年三州圖籍等に依つて後立山への登路の記入や、展望方位等が觀測せられたものゝ、谷々川筋は依然として「罷越難き」部分であつて、文化時代までの各繪圖にも劣らぬ不明振りである。この圖籍が基本となつて長く後世の地圖をして後立山方面を想像圖に甘んぜしめたのであつた。

先づ元錄圖なる奥山御境目見通繪圖を見やう。鑓ヶ嶽の南へ不歸ヶ嶽、上犬ヶ嶽、がきヶ嶽と列り次いで後立山を堀起し、針ノ木峠に至つて居る。享和の奥山御境目山成繪圖（享和圖と略稱す）、文化の奥山御境目並谷々川筋等略繪圖（文化奥山圖と略稱す）、新川郡繪圖（文化新川圖と略稱す）に於ては不歸ヶ嶽の次へ錫杖ヶ嶽を現出して居る。三州測量圖籍（圖籍と略稱す）すらも後立山に到る間に赤鬼ヶ嶽を獨立され、針ノ木峠に到る間には僅かに栂山、コスバリなる名稱を新らたに現出して居るに過ぎない。此の以後は測量部五萬分の發行さるゝまで別段の變化が無い譯である。

鑓ヶ嶽より南へ續く不歸ヶ嶽とは現在の何處か。元祿圖、享和圖、文化二繪圖に依れば國境を成す山岳として現在もかへらずの難所を有する二八一二米附近の山頂を主峯とする一帶を指したものであろう。中頃南方へ錫杖ヶ嶽を現出してからは、やゝ北の一突起へ移動されたと覺しきものがある。元祿の見取圖に依れば頂上の平垣に畫かれてあるのは、北方より見通したものとしてよくこの間の形状を示して居るのである。不

歸ヶ嶽は又測量圖籍以降の諸地圖では上駒ヶ嶽、小蓮花の中間西方に畫かれ、國内の山として屹立して居る。之を現在に求むれば不歸谷の源頭をなす不歸嶽とせずばなるまい。

この時代に依る變化は一寸解決するに困難であるが、元祿以降の奥山事情の不明な時代は無闇に山名を國境に並べ立てたのであるが、後世事情判明と共に削除もならず合理的に國内へ移轉したものと見るべきであろう。

享和圖以降の錫杖ヶ嶽は前述の通り不歸ヶ嶽と共に二八一二米又は其附近の一峯を各々指したものと思はれる。不歸ヶ嶽が國内の山として認められた圖籍以降は必然的に二八一二米の峯のことゝ考へる。此の山の遠望は此の三角點を主峯として幾つもの峯を持つ仲々大きい根張りを見せて居る。次に上犬ヶ嶽は唐松岳を指して居るものと思ふ。文化奥山圖に依れば此の山にはミカゲガ嶽なる別名の存在して居ることが知らるる。次に南に連るがきヶ嶽は當然現在に名稱を存する餓鬼谷の源頭なる五龍岳を指すことは異論の無い事である。

現在の餓鬼山は五龍なる名稱の出現に依つて持つて行き所の無い餓鬼なる名稱をたまたま頂戴したに過ぎないものであろう。

文化奥山圖に依れば之の餓鬼ヶ嶽に赤鬼ヶ嶽なる異名の存在することを知る。享和圖を見れば是等のミカゲガ嶽、赤鬼ヶ嶽等異名の方が用ひられて居て、上犬ヶ嶽、餓鬼ヶ嶽なる本名が見當らないのである。然し此處に注意すべきことは文化新川圖以降には上犬ヶ嶽と餓鬼ヶ嶽の間に別に赤鬼ヶ嶽の出現して居ることである。これ等は別名の古來存在した事を知つてか知らずか、大黒岳の如き小突起に此の名を命名したと思はるゝのである。新川郡海岸分間繪圖中黒部川々口よりの展望方位に、餓鬼ヶ嶽、巳二度、赤鬼ヶ嶽、辰廿八度五、と立派に記るされてこの二山は全然別の山なることを明記せられて居る。今この二山を現在の地圖に求むれば其方位より斷じて大黒五龍となすに憚からないのである。餓鬼ヶ嶽を五龍とせば、其南方に聳立する後立山は當然鹿島槍ヶ岳なりとするに躊躇しない。果して鹿島槍ヶ岳を古來より後立山と目し來つたか。

元祿十一年奥山廻記錄に

（奥山廻宗衞留書）

（前略）藥師ヶ嶽より丑ノ方ニ立山。丑寅ノ方ニ後立山。寅卯ニ眞砂ヶ嶽。卯ニ火打ヶ嶽。（略）

かく後立山を目測した方位を記するのである。尤も此の時代の幼稚極まる磁石を以つてしたものは信用にも足らないが、後立山なる山顚を認識して居ることに注意を拂ふべきである。又方位其ものも相當現位置に近いもの指して居るに於ておや。

さて繪圖の方の記入振りは如何。元祿圖に於ては後立山を大きく畫き、南方へ一二の支峯を畫いてある。享和圖、文化新川圖も同樣である。文化奥山圖の如きは後立山の主峯と外に三峯も南へ連ね針ノ木峠に到つて居る。此等は吾人に強い示唆を與ふるものである。即ち古來針ノ木峠以北がきヶ嶽の間には數座の山々が連列して居るが、其最高峯のみ後立山と呼ばれ、殘餘のものは無名の山として從屬的に後立山の名に包含され來つた。實際に於ても赤澤岳以北鹿島槍ヶ岳までに拔群の山峯を見ない。殊に針ノ木峠に立つて北望すれば、この一帶は鹿島槍の一尾根の如き感を覺ゆるではないか。さすれば此の間の無名連峯は長く便宜上後立山に一括稱呼せられて來たことは疑ひない。之れが又後年に至つて後立山なるものが何れの山を指すか不明となつた遠因を作つたものであるまいか。この後立山を明確に決定したものは三州測量圖籍である。文政四年七月石黒信由翁は立山を測量せられた。翁は頂上に於て各山々峯々の方位を決定せられて居るが圖籍に記るされて居るものを掲げて見やう。

（三州測量圖籍）

立山ニテ視ル。

劒ヶ岳　子十九度半　エブリ岳　丑七度半

餓鬼ヶ岳　寅九度　後立山　寅十九度半

地藏岳　辰廿一度　針ノ木南又　巳十九度半

（以下略）

後立山の位置を右の方位に依つて計つて見れば正確に鹿島槍ををを指すではないか。

（三州測量圖籍）

藥師ヶ嶽にて視る。

大蓮花	丑十九度半	赤鬼岳	丑三十五度半
後立山	寅三度	針木峠	寅十度半
立山	丑十六度半	劒ヶ岳	丑七度半
針木南峯	卯初度	（以下略）	

この方位も略鹿島槍を指して居るではないか。是の三州圖籍には又後立山への登路をも記入して居るのである。略述すれば即ち小川溫泉を起點として小川を溯りコイド峠を越えて北又谷に入り、樫薙谷にて上駒ヶ嶽道と分岐し猫又山の一角なる猫又峠を越えて祖母谷へ下り、次いで祖父谷より南越を經て餓鬼谷に入り、東谷山の西方尾根を越えて東谷即ち當時の後立山谷に下り谷を横斷して牛首山の一角を絡んで鹿島槍ヶ岳即ち後立山に登るものである。尚注目すべきことは圖籍に畫かれて居る後立山の形狀が北尾根を有する鹿島槍其ものゝ山容に畫かれて有ることである。信由翁は實際にこの後立山に登山せられたか疑問であるが、圖籍には相當多方面の方位が觀測せられて居る。

（三州測量圖籍）

後立山ニテ視ル。

立山	申二十一度	別山	申廿四度
劒ヶ嶽	酉十六度五	藥師ヶ嶽	申三度
信州槍ヶ嶽	未三度	赤牛ヶ嶽	未廿一度
中岳六方	未十五度	鷲羽嶽	未十三度五
大蓮花	子廿度一	餓鬼嶽	子廿五度五
加州白山	申十六度五	駿河富士山	巳十五度
信州淺間山	辰六度	同妙香山	丑廿五度五
赤鬼ヶ岳	子十八度		

古來より文化年間までの是の後立山を中心とする連峯は「此邊後立山に至る迄ノ間至嶮岨ニ而通路相成不申候」と記錄は元より繪圖上にも記入せられて來たのである。然るに文政に入つて石黑翁の圖籍成就以來の繪圖には果然此の後立山登山路が記入せられて居るのである。之を以つて見れば六十餘歳の老齡に鞭つて鑾鑠たる翁が或は初登攀を勝ち得たのかも知れないと想像せらる。奥山廻の見分も此の道を經て後立山まで間もなく伸びて來て居る。

（下奥山御境目廻御用方控）天保十四年齋木有次郎手記

（前略）七月十二日晴天也。踊場出立、がきの谷道下り晝辨當、登り夫より後立山谷下り此道も雨天の節は通路難成道也。後立山登可申と存候得共雪甚數候に付迚も登兼候に付後立山川原に而野宿いたし翌十三日祖父の踊場へ罷歸申候事。（後略）

後立山登山は積雪の爲めに挫折したものゝ彼等の見方の道筋は既に後立山に達して居ることを證するに足るものである。

後立山は鹿島槍ヶ岳なりとする資料に嘉永五年の新川郡海岸分間繪圖がある、この圖中、入善町附近吉原村堂又川落口左岸よりの展望に「藥師ヶ嶽、午九度七。大日岳、午三度三。後立山、巳十二度五。餓鬼ヶ嶽巳八度二。上駒ヶ嶽、辰二十五度九。（以下略）」なる記入がある。今同海岸に到つて右の方位を測定するならば、後立山と名付られて鹿島槍ヶ岳、餓鬼ヶ嶽と名付られて五龍岳が吾人の目標に聳立するものである。是の現實は誰れしも否定出來ない。殊に同繪圖は米穀運送の船舶に依つて藩政時代實用に供せられたるものにおいておや。以上に依つて古來使用せられた後立山なる名稱は鹿島槍ヶ岳に對して附せられたるものなることを斷定すると共に、以南針ノ木峠までの峯々は一括して後立山なる名稱に包含されて居たと附言したい

のである。藩政時代にかく判然として居た後立山も禁斷郷として黒部奥山深く聳立せる關係上、明治大正に入つては越中人士にも忘れられ遂に其の山名すら宙に迷ふの状態に立ち到つた。初期「山岳」誌上でも是の後立山の名稱を巡つて相當討論の花が咲いたのであるが、何れもコジツケや無智な地方人の言説を布衍するに過ぎなかつた。然して結局五龍がゴリウ（後立）に通ずる故を以つて後立山は五龍岳ならんと云ふことを以つて結着となつたのである。但し此當時と云へども具眼の士は「ウシロタテヤマと云ふ總括的の大名を何故鹿島槍の如き高峯を措きて北方に偏り而かも比較的低少なる此峯に與ふる事となりしか云々。」と大疑問を發して居らるゝのである。之れは實に達識であつて敬服に堪えない次第である。

尚今一つ新説を紹介するが、立山頂上雄山神社の神官佐伯尚宜翁は「鹿島槍ヶ岳は鹿島大嶽ともミカゲガ嶽とも云ふ。其故は曉天には旭日鹿島大嶽の肩の邊より昇り夕べともなれば立山の御影が長く大嶽に向かつて引くよりミカゲガ嶽の名ありと幼時より教へられたり。」と語られた事である。後立山々脈に古來佛縁の名稱の多い事より察して、ミカゲガ嶽の持つ意味と相對して鹿島槍にふさわしい次第であるが、確實なる文献の伴はぬものとして上犬ヶ嶽と混同の恐れあり、暫く結論を保留して置きたいと思ふ。

さて後立山より針ノ木峠迄の山々は總て後立山なる名稱に包含せられて居ることは測量圖籍の出來上る迄は何の繪圖を披いても同様である。然し何れの繪圖にも後立山の主峯を畫き二三の支峯を畫き添へてあるので、無視したり又は無調査と云ふことは無い様である。只二六〇〇米臺のダラダラした長尾根にて別段傑出した山峯が無い故、後立山の大名に包含されたのはやむ得ないことである。この間を通過した記錄は元祿十三年の内山村三郎左衞門の手記に在る。「（前略）針ノ木峠道、鑓ヶ嶽迄の道之儀はい（叢）の内を幾日もくぐり候へば何ほどに候や。（後略）」と無我夢中で通過したと告白して居る。此等は如何に嶮難であつたかを表明して居るのである。

圖籍には後立山の南に栂山が聳えて居る。これは爺子谷のことであらうか、この栂山の南は針ノ木峠であるが、この間にコスバリなる地點の記入がある。コスバリとは「小狹」とも書かれて國境と黒部川との最狹部を意味して居るのである。スバルとは越中とは小さく縮まる、又は小さく詰められる意味を有するのであるから、コスバリなる意味は前記の如きであると思ふ。之を現境に求むれば赤澤岳スバリ岳の間でありスバル岳はこの古名稱の遺存と思はるゝのである。余をして一地點に求めしむればむしろ赤澤岳を取りたいのである。

次は針ノ木峠である。古來奥山ではこの峠程有名な所はないのである。佐々成政の越えたのもこの峠であり、慶安の調査の目的もこの峠であり、又毎年兩國の境界として制札を建てたのもこの峠である。實に奥山大道の第一の切所として常に最重要視された地點である。故に現今のスバリ岳、針ノ木岳の如く二八〇〇米を超え、後立山にも比すべき峻峯も長くこの峠の名に包含せられて無名で居たのである。後立山よりこの峠まで長く山名の無い所以もこれにて諒解せらるゝことゝ思ふ。

針ノ木峠より南へ進めば元祿圖では眞砂ヶ嶽となり、享和以降の圖では針ノ木嶽、折嶽、眞砂ヶ嶽と連列して居るのであるが、測量圖籍では北針ノ木嶽が聳立し續いて針ノ木嶽を並べ所謂針ノ木の南北二峯を見るのである。この二峯共に峠より南へ未の方向に一里内外の距離を以つて屹立して居る所よりして、現在の舟窪(原文ママ)岳、不動岳を以つて擬したいのである。藩政時代針ノ木谷は北又と南又に分たれ、北又の終點は針ノ木峠とし、南又の終點を折嶽として居たのである。故にこの南北の二又に狹まれて居るとも峠上より見られる舟窪、不動に南北針ノ木嶽の名稱ある。けだし自然のことではあるまいか。測量圖籍の中の藥師ヶ嶽頂上よりの展望に「針ノ木南峯。卯初度」として記され、山廻り役の定例道はこの南峯を通過して居る所よりして不動と目すべきである。

續いて針ノ木嶽の南へ列る折嶽とは何か。これは南澤と鳥帽子を總括したものであるまいか。圖籍の山形は仲々峻峭に畫いてあるので、鳥帽子の巨岩を主峯として、南澤岳をも包含して居るものと考へる方が至當らしいのである。藩末の山廻定例道は折嶽より南澤の下へ下つて居るのである。

（黒部上奥山廻御用方控）文久三年齋木有次郎手記。

（前略）七月六日、曇天針ノ木谷小屋出發より南又の谷へ登り道一里半斗上に而畫辨當いたし夫より段々登り折嶽の峯へ上り同所の峯に近年新小屋場に而小屋爲打候、針ノ木谷入口より折タケの峯迄里數三里半斗有之至而ツヨキ坂に而一統難儀いたし候。（後略）

（上奥山日記）嘉永二年齋木有次郎手記。

（前略）二十日曇天也、前日之疲勞甚敷漸々辰刻三吉小屋場出立、折嶽通クヅレの難所上を通り南又へ下り候（後略）

即ちクヅレの難所を有する南澤、鳥帽子の邊は奥山廻りに取つても相當に艱まされたらしい。測量圖籍には藥師嶽頂上の展望の方位に「折嶽、卯十度半」と記されてあるが、正に南澤鳥帽子の間を指して居る。是の折嶽と眞砂ヶ嶽の間の鞍部には古來より三吉小屋場の名稱が存するのである。其位置は多分現在の鳥帽子小屋附近と思はるゝが、決定的の場所は今一寸示し難い。此の小屋場は奥山廻役や杣人足の間には隨分と名代の場所であつて、天明以後鳥帽子の一角に三吉嶽の俗稱あり、又東澤へ合流する鳥帽子南側の谷に三吉谷の名稱の存することは測量圖籍以後の繪圖を披いて見て驚くことである。三吉小屋場又は三吉谷の名稱の起る所以は本文の「奥山廻役の研究」の章に於て記述したい。

折嶽の南へ續く眞砂ヶ嶽とは今如何。元祿圖に於ては針ノ木以南はこの眞砂が嶽を以つて始つて居るのである。この時代この山名は隨分と廣い間を代表して、元祿の頃藥師ヶ嶽頂上より展望の方位として、「寅卯の方に眞砂ヶ嶽」と記され、南澤鳥帽子を中心とする廣い間をも意味して居たが、其後奥山調査の進行と共に段々と南の方へ押し下げられたものゝ如くである。この眞砂ヶ嶽は近來まで信州方面の人夫共の間に稱呼を有して居て筆者の耳にも聞かされた所であるが、彼等の眞砂なるものは野口五郎の南方の一角を指して居るが、これは大なる誤りである。昔の奥山廻りは峯通りの著名なる峯頭を採用して山名を附するのが常道なる故、この山脈中でも三ツ嶽又は野口五郎嶽の如き傑出せる山頂を捨てゝ單なる一角をなす小峯へこの眞砂なる名稱を移したとは考へられない。又眞砂ヶ嶽に續いて列る火打ヶ嶽も前記の人夫共が云ふ眞砂の附近にヒノハチと稱する一角が存在するのを目して火打ヶ嶽なりと彼等は云ふのであるが、是は共に信用に足りないものであると筆者は考へる。この眞砂、ヒノハチは諸山岳家に依つて幾度か記述せられて居るが、諸家は別段加賀藩の奥山廻りも御存知なく又峯通り見通しの故實も承知せられぬ故に、只漫然と是等人夫共の言説を受け入れられたものと推察するのである。この間の上奥山日記を一覧しよう。

（黒部上奥山廻御用方控）

（前略）早朝三吉新小屋場出立、同日氣色宜敷二付峯通リ罷出候處他國地山々一見大町池田邊ノ在所相見へ同國丹波嶋川淺間山も一見いたし夫より中岳峯通り眞砂火打ヶ嶽中程より池ノ平へ下り前々小屋へ相向候處雪消候而水少も無之ニ付無據中岳下川原先年小屋場江相下り小屋爲掛申候。（後略）

即ち火打ヶ嶽より五郎池へ下つた有樣を叙して居る。

眞砂ヶ嶽、火打ヶ嶽を最も確實に決定するものは矢張り三州圖籍である。圖籍には藥師ヶ嶽の頂上よりの展望方位が載つて居る。「眞砂ヶ嶽、卯二十七度。火打ヶ嶽、辰十二度」是を以つて藥師ヶ嶽の頂上に立つて其方位を指せば些少の異ひがあるが、眞砂の方向に三ツ嶽、火打ヶ嶽の方向に野口五郎嶽が聳立して居るではないか。即ち是等に當てゝ稱するとも大いなる過誤ではない樣である。殊に兩者共相當拔群の高度山容を有して居るに於ておや。

さて次は中嶽である。現在の各地點に中嶽を求むる事は實に至難である。元祿繪圖には中嶽は國境の山としてではなく、國内の山の樣に赤牛嶽と共に連繫して畫かれてある。享和圖もやゝ之に近く文化圖や文政以降の繪圖になつて始めて國境の山の如く畫かれて居る。之れに依つて考ふるならば往昔は中嶽は其名に示すが如く赤牛と連つて國内へ突出して聳ゆる黒嶽のことを指して居たものゝ如くである。然し多年段々と實地調査の進むに從つて國境は此の峯の南方の一角を通過して居ることが判明した結果、隣國との境界問題をも考慮に入れて、黒嶽の南方現在の赤岳を以つて中嶽なりと命名したのではないかと想像するのである。文化以降黒嶽は中嶽六方、又は中嶽と呼ばれ依然として中嶽の一部を爲すが如き名稱を繪圖上に於て與へられて

居る。是れは何時しか中嶽が分離して國境上の山となりより高く天に聳ゆる黒嶽が劍と名稱さるゝに至つたことを雄辯に物語つて居る。立山に於ける劒岳の關係に似て興味深いで所はないか。

（上奥山御境目廻御用方控）

（前略）同十二日晴天、中嶽下小屋出立朝四ツ半頃六方山（註、黒嶽）續中嶽峯へ登り候處俄に霧立行方相知兼ルニ付暫く休居候處其内中地山村孫次郎道相尋夫より一統飛出し中嶽峯通濟候。（後略）

六方山と云はるゝ黒嶽と中嶽と云はるゝ赤岳とは一續きの峯なることを記るして居る。中嶽劒即ち黒嶽は標高も優れ繪圖上にも一大標點を成して居ること故、文政の圖籍に於てもよく各地より方位が測定されて居る。是の中嶽劒の一番優秀な眺めは上ノ岳方面からであらう。實際劒と呼はるゝにふさわしい峻峯が峭立して天際を突いて居る有様は立派に眺められ、其名稱ある所以が了解せられる。

この中嶽より國境線は彎曲して元祿圖、享和圖、文化圖に於ては直に飛信越三國の境界なる鷲羽嶽を崛起して居るが、測量圖籍以後は獅子嶽、東鷲羽嶽を經て鷲羽獄となつて居る。

獅子嶽とは何處を云ふものか。之は赤岳の南方に在る一岩峯信州の人夫達の云ふ小鷲と呼ばれるものに該當しやう。大天井又は槍ヶ嶽方面より眞黒き岩塊を以つて眺めらるゝものである。次なる東鷲羽嶽と鷲羽嶽との關係は、現在に於ては鷲羽嶽と三俣蓮華嶽との關係に相對する譯で、私は加賀藩各繪圖上三國々境として定まる鷲羽嶽を説明し之の關係を明確にして見たい。

越中飛彈信濃三國の境界は現五萬分の一槍ヶ嶽の圖幅を見れば三俣蓮華嶽（二八四一米）なる名稱が記入してある。此の三州の境の山名が蓮華嶽と呼ばるゝ様になつたのは飛彈山脈に日本アルプスなる名稱が小島烏水氏に依つて實際的に與へられ、日本山岳會の諸氏が相次いで是の山脈一帯の登高に乘り出された所謂日本アルプス黎明期の頃である。小島氏の明治四十四年版の日本アルプス第二巻の中の「日本北アルプス縱斷記」に「山名に就て」と題して

蓮華嶽なる山名はその山の白雪が白蓮華を思はせる様な所から思ひつかれたといふわけではない、嘉門次の説明する所に依ると飛彈の獵師がこの山で熊を射止めた。そうして熊の譚（譚嚢）のつもりで俗稱蓮華譚（肝臓）を腹から引き出して喰つたので信州の獵師達が嘲つて「蓮華喰ミの岳」と云つたのを略して蓮華嶽と云つた相である。

と書かれてある。又同氏の北アルプス風景論には、

立山火山帯、黒部山脈、後立山々脈の山支脈を有して居るが此三支線を一線に結束して居るのは蓮華岳である。（故に蓮華岳は一名三俣の稱がある）飛彈の國に屬する日本アルプスの最北はこの蓮華嶽から始まるのである。

と書いて蓮華岳として使用して居らるゝ。

（山岳第七年第一號「北アルプス瑣談」榎谷徹藏氏）

三又嶽（當字ミつまただけ）三國境上にある蓮華嶽の異名である。私の考へではこの脈中に蓮華が澤山あるからこの稱呼を用ひた方が便利ではなからうかと思ふ。

と書いて居られ三國境上の地點は蓮華嶽と頗る普通に稱呼使用して居らるゝ。大正元年測圖大正四年製版出版の陸地測量部五萬分の一槍ヶ嶽圖幅にては三國境上は鷲羽嶽となつて居るのだが就是某氏の痛烈なる抗議を紹介しよう。

（山岳第八年二號「机上談山」）

（前略）地形はよいが地圖としては頗る輕からぬ不滿な點が二三の圖にあると思ふ。それは地名の調査が不充分なのだと思はれる點である。（中略）槍ヶ嶽圖幅を見ると飛信越國の境が鷲羽嶽となつて居る。實際は其東北二九二四米の三角櫓のある峯が鷲羽嶽とか單に鷲とか呼はれる峯で目標になるべき鷲羽の池も圖にちやんと表はれて居るのである、而して三國の境は蓮華嶽なる名で呼ばれて居るのである。而して其南地圖に蓮華嶽とあるものは正に雙六岳に當つて居るのである。これ等の山の名は殆ど一般の通用を持つて居るので決して彼我相混じて使はれる様な事のないものであるから頗る該圖の名は不都合千萬であつてその地方に行く人々にとつては人足の使ふ名と行違ひが出來たりして仲々迷惑を起すことであらうと思ふ。これ等の事の爲めに切角疵の少ない此地圖に實用的なものとしての疵をつける事は決して少なくないのでこの點大いに何とか御一考を願ひたいと思ふ次第である。

この抗議が採用されて三國の境は昭和五年修正測圖より三俣蓮華嶽と改稱せられ鷲羽は東北の二九二四米の峯へ記入せられて山岳家の賞讃を拍したのである。こは果して妥當なことであつたらうか。今試みに蓮華嶽なる名稱にしても其發生を至細に熟讀して見るならば之れ信州杣獵師等の偶然事から出發した假名に過ぎない。信州地方の文獻にも繪圖にもはた又地方權威者の言葉でもない。豈んや古文獻などには何の係りも無い。それが誤つて傳承し日本山岳會の權威に捨はれて遂に三國々境の重要地點に擬せらるゝと云ふ結果になつたのである。今かりに山岳諸家をして越中有峯道、又は立山方面より越中の案内者をして先達させ三國々境に登山せられたなれば諸家は必らずや蓮華嶽の代りとして鷲羽嶽なる名稱を拾はれた事と思ふ。由來日本山岳會先達の諸家は信州方面を基點として同地の案内者に依つて登山せられた結果現在の日本アルプスの各峯の稱呼はほとんど同地方の人夫、案内者の用ふる稱呼のみを採用して居らるゝ如くである。然かも此の當時の山岳家は山名など實に簡單に命名して居らるゝ。初期の「山岳」紙上を眺むれば思ひ半ばのものがある。國境の山はすべからく兩國の人々の文書より調べて決定すべきであり、他國の山々は某國の人々某國の文獻より確證を得て命名すべきことは論ずる迄も無い事である。

閑話休題。三國々境は蓮華嶽に非ざることを證する越中側の文獻は如何に。

（奥山廻役宗兵衞記錄）元祿十年

一、信濃飛彈境目は鷲ノ羽ヶ嶽ノ後右兩國ノ境目ノ由承及申候。

（奥山御境目見通繪圖）元祿十三年

鷲ノ羽ヶ嶽。但シ飛州信州越中三ヶ國からみ。

（奥山廻岩城記錄）元祿十三年

一、飛州境鍋嶽は飛州信州境鷲ノ羽ヶ嶽より西ニ當リ申候。此間道程大概貳里程御座候。

即ち元祿の頃より三國の御境は鷲羽ヶ嶽であつて足跡も此處に至つて知るのである。この頃藥師が嶽頂上より測られた方位も「鷲ノ羽ヶ嶽、己(原文ママ)の方向」となつて居り些少の違ひはあるが三國々境の邊を指して居るのである。元祿から下つて正德、寛保には針ノ木峠以南の各山峯に於て頻りに盜伐の事があつて、加賀藩山廻り役も幾度か不時登山を餘儀なくせられ、安永年間には犯人就縛のこともあり、この方面は隨分と探索調査せられ、繪圖も修正に修正を重ねた事と思ふが、三國御境目は別段に變化なく鷲羽嶽になつて居る。以降百年の間文書記錄等に於て三國の境に名稱の異變が見えない。次いで文化奥山圖、文化新川圖も同樣三國の御境目は鷲羽嶽である。但し鷲羽嶽の呼稱は古來は鷲○ヶ羽嶽又は鷲○ノ羽○ヶ嶽と呼ばれて居たが、文化以降は現在の如くなつてしまつた。

さて三國の境は鷲羽嶽であるが、現在の鷲羽の池のある鷲羽ヶ嶽とは如何なる關係にあるか。この二山に明確な名稱を與へて居るものは、三州測量圖籍である。圖籍には三國の境は鷲羽嶽であるが二十五丁の間ものゝ其他の幾つもの繪圖、地圖、山廻記錄を尋ねてもこの鷲羽の池について記載せられて居るのは見當らないのである。之は一面に他領と云ふ關係もあり又一面に三國々境の重要地區に池の無い事を意味するものである。

以上各書に於て蓮華嶽なる名稱は片鱗をも見出せないことは了解されたことゝ思ふ。然るに此處に不審に堪へない事は測量圖籍以降各諸圖に鷲羽嶽の西方に三俣嶽の記入を見ることである。是は作者石黒翁は何を思ひ誤られたのであらうか不可思議な事である。三つ俣、三つからミは常用語であつて、鷲羽嶽に使用せられてこそ正當であるが他山に用ひては全く意味を成さない。思ふに之れは鷲羽獄に使用して居る内に、何時しか別個の山の樣に取り扱はれ、信由翁にも受け入れられ繪圖に記入せられた樣である。現に東鷲羽（鷲羽）鷲羽（蓮華）と並んで鍋嶽（黒部五郎）となるが、是の間に三ツ俣なる地點は現在の現地は元より五萬分圖上に於て何處を探しても見當らない。もし強いて蓮華の西方二五八〇米の一小峯でも謂ふのであらうか。三州圖籍の是の誤りは實際解し難い。多分老齡の信由翁が全部この奥山を踏破することが出來ず、奥山廻り役其他の測量をも參酌せられた爲め鷲羽と三ツ俣を別個のものなりと判斷した結果ではあるまいか。他にも一二之に類した錯誤を發見せらるるので注意すべきである。この過失が後世まで影響して居るのを見ると權威

者の過誤が實に世を誤るの甚だしきを痛感せられるのである。乍然この測量圖籍の正確さは當年の如何なる他の繪圖記錄より優れて居て、今に到るも價値少しも滅ぜず益々光揮を放つて居る。多少の瑕瑾の如きは何等この大功を傷けるものではない。

以上の文獻に依つて三國々境は鷲羽嶽と命ずるのが至當であつて、蓮華嶽又は三俣嶽なるものは近世偶然事に依つて起つたものですべからく剪除すべきものと考へられ、それについてもつくづく卿士古文獻の研究と云ふことが痛感せらるる。越中の山岳に越中人が起つて研究しなかつた罪も大きいが、初期山岳諸家に今少し日本アルプスの領主であり天下の書府と云はるゝ加賀藩の古文書に留意して貰ひたかつた。これに留意せられたならば日本アルプスの現名稱に非常に越中色濃いものが現れて居たことと思ふがかへすがへす殘念に思ふ次第である。

鷲羽嶽より西へ連る山は鍋嶽である、即ち今の黑部五郎嶽である。この鍋嶽より鷲羽嶽までは元祿時代既に奥山廻りの足跡が印せられて居たと見えて、前記にも見ゆる通り「一、飛州境鍋嶽は飛州信州境鷲ノ羽嶽より西に當り申候。此間道裡大概貳里程御座候」と里程を明記して居る。

尚西方に連る上ノ岳は今も昔も山名に變りはない。藥師ヶ嶽、赤牛ヶ嶽も現在と位置名稱の異動なく、寛永、承應の昔から既に山名は諸書に散見する所である。殊に藥師ヶ嶽の如きは頂上の藥師様が四方の尊信を集めて居たと見えて、承應三年の加賀藩士、篠嶋又左衞門の願文は今に存在して居る。

以上大略國境の主要山頂の今昔の名稱位置の變化移動を考證した筈である。尚此外に幾多の峯々殊に立山連峯黑部川谷々に付いても述べなければ體を成さないのであるが、是れは更に研究し近く發表の機會を許されたい。

三、奥山の國境と山道

黑部奥山と云はるゝ廣大なる人烟斷絶の地域に隣國との境界は何を以つて表示されたか。

（奥山廻役宗兵衞記錄）元祿十年

（前略）惣而御境目之儀山々峯りを汎り此方は御領後の方は他國領之由申傳承申候也。（後略）

（同右）正德二年内山村平三郎手記

（前略）はりの木谷峯を境信州越中御境ニ而此方之谷川同峯より水之落様を以何れ茂境目に往古より定り來り申候。（後略）

即ち奥山一帶の境界は數十里に渡つて連立する高山大岳の峯々尾根を結んだ一線と云ふ不文律が成立して居たことが判る。故に古來より奥山廻りも罷り越し難き深山は相當な御境目見通し場所に於て展望し、異變の有無を見届けた丈けで滿足したものである。又各繪圖も長く是の奥山一帶に聳立する國境の山々の見取圖のみを記して居た次第である。

（奥山廻岩城記錄）元祿十年十一月

一、有峯より藥師ヶ嶽江登眞砂嶽、火打嶽、中嶽、鷲ヶ羽嶽、鍋ヶ嶽、上ノ嶽、此山々難罷越候ニ付藥師ヶ嶽高山ニ御座候故此峯より右山々峯通リ御境目見渡罷歸申候。

他國より仲々に越境し難い地勢丈けに、割合に警戒第一義を重じ乍らも簡單なる國境觀念ではある。この國境線の實地踏査を怠つたが故に將來頻々として越境盜伐者を出した。この盜伐者達は國境の不分明に乘じ言ひ逃れの爲めに、加賀藩領を信州野口山なりとした事が奥山廻りに依つて發見されて居る。

（奥山廻役宗兵衞記錄）正德二年八月

（前略）針ノ木谷西ノ方少平成る所ニ（中略）小屋腰之右ニ寶永八年八月野口山と書記之候へ共私共砂ミがきに仕文字相見江不申様ニ消罷歸申候。（後略）

然し此等は幼稚なものであつて所謂國境問題となるべきことではない。實際に於てこの奥山は嶮難至極、何等人爲的の利益享受地でも無き事故、隣境との葛藤は自然起り得なかつたであらう。隣國と云つても信州

は松本藩、飛州は高山幕領に接し、この兩國には奥山へ干渉の手を伸ぶる奥山通の存ぜざりし爲めか、よく數十百年間隣國と靜謐を保つて來た。此間僅かに信州より入込む盜伐者や密偵に依る越境侵犯に多少の動搖を示すに過ぎないものであつた。

當時加賀藩に於ては加賀の白山と呼ばれた白山に就いて、明暦より寛文まで長年月隣國越前藩と所屬を爭ひ遂に越前領と決定され、續いて幕領に屬せしめられて解決したと云ふ苦汁を喫せられ、國境問題に就て神經過敏となつて居た所へ、延寶年間高山藩が廢せられて幕府直轄領となるや、忽ち猪谷方面に於て親藩たる富山藩と幕領の間に境界紛爭を生じ苦情に陷る等の事あり。之の爲め奥山方面に於ては絶對に前轍の如き苦汁を喫せざらんとして奥山廻りを督勵し境界の闡明に手段を盡したのである。然し當時人力もて如何とも爲す可からざる奥山は自然に問題の派生を防止して幕末に至つたのであつた。

この間奥山廻りは毎歳嚴重に勵行せられたのであるが、彼等は如何なる山道を通過したか又其足跡は如何。然して隣國へ通ずる大道間道は如何。この等の闡明に依つて奥山の當時を回想すれば深々たる興趣の湧き來るを覺ゆるのである。

奥山を經て隣國へ通ずる大道のうちつとに有名なものは佐良越、即ち針ノ木峠道である。此の峠道は何時頃から拔けたものか知り得べくもないが、戰國の以前より信濃より黑部川畔へ密獵に來る者や盜伐者や政治的使者や密貿易者や其他種々なる非合法的の旅行者に依つて拔けて居たものと考ふべきであらう。戰國時代飛驒高原の城主江馬氏が有峯道を通過して千垣（現縣榮鐵道の終點）の對岸、中地山に支城を置いて、越中新川郡に出兵して居た事などより考ふるならば、當時江馬氏と關係ある信濃の國の領有者武田氏など、江馬氏と共に相應にこの峠を活用して居たものでなかつたか。

天正以前の文獻の無いのは誠に寂寥に堪えない。吾人の目に先づ觸れて來るものは第一章に詳記した天正十二年霜月の佐々成政の通過である。此の大體は多分に傳説的の色彩が加はつて居るのだが、又芦峅村十三郎の由諸書中「佐々陸奥守殿御上下御通被成候云々」と書いて居るのを見れば、素朴な地方人士の口碑より通じて事實の眞實性が窺はれるのである。下つて慶安の利常侯の命に依る佐良城の調査は其足跡信州の馬留にまで及び今日其測量の成果記錄まで存在して居るのであるが、これこそ日本山岳史上に於て山岳調査探險の濫觴とし山岳測量の嚆矢として特筆すべき事項ではなからうか。慶安元年と云へば實に今を溯る正に二百九十年前である。

爾來針ノ木峠道はざら越として奥山第一の主要大道として奥山廻り役、御林伐木者、立山禪定者の間に名高く喧傳せられた。明治の初め金澤の士族中この峠道は信州へ越ゆる捷路に當ることに着目して社を建てゝ此の峠道を改鑿し牛馬をも通じたのであつた。今に殘る「牛小屋」の稱呼は即ちこの名殘である。然しこの道も針ノ木谷の山道相次いで崩壞し遂に放棄のやむなきに至つた。其後別段に事なく是の事實等は全く忘れられて今日に到つて居る。針ノ木峠は信越の捷路と云ひ隣國の境界をなすと云ひ、兩國にとつては重要な地點であつた。故に加賀藩に於て鑑みる所あり、藩末には毎歳境界の制札を峠頂に建てたのである。所謂針ノ木谷に野口山などの石標など發見してから俄かに此議が成立したものであらう。

（上奥山御境目廻御用方控）文久三年

（前略）針ノ木谷御境は東谷へ相登可申事は勝岡氏拙者御境より壹里斗下迄相登候處霞相立迚も登り方六ツケ敷候ニ付杣之内達者なる者共に札爲持御境江爲立拙者共暫く待居候處御境より罷歸一統一集ニ八ツ半時頃針ノ木谷小屋場へ罷歸候。（後略）

元祿の繪圖以降に於てこの大道は明確に記され以來變換はない。又位置其他についてもこの道程明確に諸人に疑問を與へぬものは無いのである。只慶安の時は立山道と途中にて別れ松尾峠を下つて佐良越へ向つた道は、文政以降奥山廻り等に依つて立山一ノ越より中ノ谷ヌクイ谷へ向つて下る道を採用して居ることである。是は年々さら谷が崩壞相次ぐので室堂を據點として一ノ越を下る道の平易なるを優れるとしたが爲めである。然しさら越は立山下溫泉の利用者等の關係に依つて崩壞し乍らも存續せられて居たのである。さて針ノ木峠以外この擴大な奥山に隣國へ通する大道幾つかある。

（奥山廻岩城記錄）

覺

一、新川郡猪谷村より飛州之内茂住と申在所へ罷出申候此道荷付牛通申候。道之名無御座候。

一、同郡有峯より飛州之内山之村と申在所へ罷出申候。此道難所ニ而牛通兼申候。道之名は無御座候。

一、同郡芦峅寺村よりはりの木峠へ掛り信州之内野口村と申在所へ罷出申候さら越と申難所ニ而牛通不申候。

一、同郡小川之湯道より鐡ヶ嶽へ掛り山峯谷を越越後國大所村と申在所へ罷出申候。去共道と申ニ而ハ無御座候。

一、猪谷村より飛州茂住村迄道程貳里程内五丁程猪谷村より飛州御境目迄。

一、有峯村より飛州山之村まで三里程之内貳里半程有峯村より飛州御境目迄。

一、芦峅村より信州野口村迄道程貳拾七里程の内貳拾三里半程蘆峅寺村より信州御境目迄。

一、小川湯より越後大所村迄廿里程内拾七里程小川湯より越後御境目迄。

右越中より飛州信州越後へ越道私共覺申通書上申候道程儀山路ニ而御座候丁間難申上御座候得共大概覺申通書上申候。以上

元祿十二年三月二十三日

新川郡奥山廻内山村　三郎左衞門

御算用場

（奥山廻役宗兵衞記錄）

覺

一、越中猪谷村より飛州横山村へ出る道猪谷より御境目之所に而ハ南ノ方に當り申候。此道飛州東路往還ニ而荷付牛通申候。馬はから馬迄通申候。

一、越中長棟山ノ飛州横山村へ出ル道長棟山御境目之所ニ而東之間ニ當リ申候。此道荷付牛通申候。馬はから馬迄通申候。

右横山道と杉山道ノ間峯通見渡大概三里程御座候。

一、越中長棟山より飛州佐古村へ出ル道長棟山より御境目ノ所ニ而ハ南ノ方ニ當リ申候。此道牛馬共荷付ニ而ハ通リ不申候。荷出シニ通申候。

右杉山道ハ佐古道ノ間峯通リ大概一里程御座候。

一、越中有峯村より飛州大多和村へ出ル道有峯村より御境目之所ニ而ハ西之方ニ當リ此所牛馬共荷付ニ而ハ通リ不申候。荷出しニ通申候道也。

一、越中有峯村より飛州和佐府村へ出ル道有峯村より御境目之所ニ而ハ西南之間ニ當リ申候。

右大多和道より和佐府道ノ間峯通リ大概一里半程御座候。

元祿十三年三月晦日

天正寺村　重右衞門

御算用場

以上二つの覺書に依つて黒部奥山と稱せらるる部分即ち南は鍋嶽鷲羽嶽より北は鐡ヶ嶽に至る間に他國へ越す通路の山徑は、針ノ木峠道と小川溫泉より鐡ヶ嶽を經て信州細野村又は越後大所村へ達する所謂鐡ヶ嶽道と二つのもの許りなることを知る。この鐡ヶ獄道も古來名高き通路であつて、之も針ノ木峠と同じ様に種々なる人士に依つて利用せられて居た事は想像に難くない。只此のコースは針ノ木峠と違ひ通過の人々も少く幽谷の道迷ひ易く然かも長大なる道程と標高抜群の高山を越ゆるの不利あり、針ノ木峠ほどにもてはやされなかつたのである。この道の起源のことはよく判らない。前田領となつてからさへ最初の記錄は前記二つの古文書であるが、慶安の調査の時の愛本の奥「つか山」とは栂池のある白馬方面を指しこの道を調査したのでなかつたか、知りたいものである。勿論「つりかね」は鐘釣のことであらうが、元祿御境目見通繪圖では鐡ヶ嶽の山腹へ池を畫き「信州へ越す道」と云ふ道形を書き込んである。この池は大池か栂池か長池か判らぬが、大所村へ出ると云ふ文書より察して白馬大池らしく思はるゝ。この大所はこの愛本の奥を調査せられた慶安元年の年利常侯御國入りの際わざと越後の關川より道を轉じて此の僻村に止宿され山巒の状態を研究されたと推測せらるゝのである。利常侯の根智越とて藩士の語り草となつたのである。參考までに記しておこう。

（微妙公夜話錄）

一、慶安元年、微妙公根智越とて姫川の上へ御通り被遊候時分、大所と申在郷に御止宿被成候處に山中何も肴無之候。姫川滿水に候。河向迄は方々より之飛脚獻上者數多持參候得共、聲届きながら山川深く故難越候。此段被聞召和田十郎左衞門に矢筈に鷄のへ緒に細き細引を結付遣候而段々大きなる濱引に仕、兩方の岸に留させ候樣に被仰付候而繩越に仕候へば自由ニ往來仕候旨、中西小左衞門咄承候。

この根智越の時までに利常侯の胸中に黑部探險の方寸が成つて居たと推せらるゝのである。周到なる侯は大所に於て既に之れより鑓ヶ嶽を越えて越中小川へ出る道ある位の事は地方人より聞かれた事と思ふのである。

さて元祿頃のこの道の狀態は前にも記したが、元祿の覺書の「鑓ヶ嶽より信州え越申道之儀御假繪圖に道形無御座候得共先年三郎左衞門信州江罷越申砌此道を罷通り候併さら越同事に極たる道筋は無御座候」と其道なるものは形さへも無い嶮難の山道なる事を告白して居る。此等の文書、記錄が語り傳へられて三州地理志稿には「鑓ヶ嶽、有間道。通信濃洲。不有定路」と書いて居る。慶元以來黑部は嚴重なる禁斷鄉となつた爲めに、鑓ヶ嶽道並に針ノ木道は共に奥山廻の大道としてのみ主なる機能を發揮した如く、天正以前の樣な自由な行動は許されなかつたであらう。

この鑓ヶ嶽道の概要を記しこの大道の支線なる各奥山廻の常例道のことを少し記して見たい。文化繪圖並に三州測量圖籍に依つて順序を記すならば、小川溫泉を起點としてコイド峠を越し、横山峠へ掛り、柳又乘越を經て柳又谷に入り、カシナギ深層谷を溯行して、猫ノ踊場（猫又岳）に登り清水平に達し上駒ヶ嶽（白馬）か蓮華嶽（鑓ヶ嶽）へ登るか又は鞍部を絡んで信州細野か越後大所へ達するものである。この道順は元祿以前より現在まで大體に於て誤りは無い樣である。只文化奥山圖は柳又谷を深く溯行して現旭岳（原文ママ）に攀ぢて鑓ヶ嶽へ達したる如く道形を記入してあるも、之は現地圖のオウレン谷の尾根でなからうか。昔の人が不得手に柳又の深谷を溯つたものとも考へられない。

今一つ文化奥山繪圖其他にも記載されて居る、小川溫泉より相の又谷を溯行し、北又谷に入りサルノハナツキの嶮を經て、黑谷ヶ谷を溯り黑岩ヶ嶽に達し國境の連峯ゑぶりヶ嶽、はちヶ嶽、ゆきくらヶ嶽、上駒ヶ嶽と縱走して鑓ヶ嶽に達し、越後或は信州の道と合するものは、純然たる奥山廻りの常例道であらう。この鑓ヶ嶽道の支道として祖母谷の黑部大川と出合までの道がある。之は古くから有る道らしい。元祿圖には鬼ヶ岩屋とあるは祖父谷祖母谷出合の近在にある岩屋のことで又つりかね山とあるのは鐘釣か奥鐘のことで此の記入あるのは奥山廻りの道の存在を示して居るものである。又鑓ヶ嶽より不歸、錫杖に至つて居るものも奥山廻り役等の常例道で支道とも云ふべきものであろう。文化繪圖までは錫杖ヶ嶽以南は罷越し難き山であつたが、三州測量圖籍からは後立山へ見分の定例道が記入せられ爾來奥山廻役の見分を實施して居るのである。其道筋は上駒ヶ嶽道とカシナギで別れ、深層谷を横切り猫又谷の源頭を越え、祖母谷に入り、南越を越えて、餓鬼谷に降り、東谷山の一角を攀ぢて、後立山（東谷）に入り、牛首の尾根に取り付いて、後立山（鹿島槍嶽）に登るものである。之れより以南へは別段に定例道は無いが時應じて針ノ木方面より見分を實施した樣子である。

（奥山廻役竹内手記）天保九年六月

（前略）前文之通り小屋跡等道形之義已ニ而相替義無御座候猶更栂谷頂より後立山續際迄罷越候へ共右之外無覺束義茂見分不仕候。後立山並餓鬼ヶ嶽及蓮花嶽迄の間信州路より賊入込義迚も嶮岨通行相成申ヶ所ニ而ハ無御座候乍去道筋より入込人有之茂其義難計御座候。右後立山際より罷歸り尚更打返見分不仕候ニ付前文之道筋通り信州路へ相移り夫より又候黑部針ノ木峠を越、同落合へ昨夜小屋着仕候。（後略）

さて此處で不思議な事は今日黑部奥の大道たる鐘釣宇奈月の川岸の道が少しも現れて來ないことである。往昔の人々は常識として見通の利く峯通り尾根の道を採つた事が此處でも現れ、河岸の岸壁を溯行するの不可能事を試みなかつたのである。隨分な長い年月明治時代まで黑部川岸の道の記入も記錄もないのである。現在の下ノ廊下と云ふ所の如きは彼等の最も苦手とする所であつたらう。圖上にも内藏助平より下手祖母谷

まで「これより祖母谷へは難所ニ而通路不成」と記入して居る。黒部奥山ではこの下ノ廊下は如何に難物であつたか分る。實際上には奥山廻りは役儀上國境の見張りを以つて第一義としたる關係上、黒部谷々川筋等は峯頭より見渡して異變の無いことを以つて滿足して居たことゝ思ふ。又繪圖上に於ても當路の上官は國内の谷筋は峯々の如く重視しなかつた點も大いに關係して居ることゝ思ふ。但文化奥山繪圖は流石に奥山廻役の使用のものと推定さるゝ丈けに谷々も中々調べてあり、十字峡らしきものゝ記入も見るのである。之れは當時と云へども下ノ廊下附近も彼等も一再ならず通過した事に依つて相當の智識は有つたらうが、何分測量的の常識皆無の者故に彼是と混同になるのはやむを得ない。

針ノ木峠方面は如何。針ノ木峠大道のことは前記の如くであるが、奥山廻の常例道は何處を辿つたものか。於是各手許に存する繪圖を對照すれば、御境目見分の定例道として國境山脉縦走路を採り之も長く變化を見ないのである。文化繪圖並に三州圖籍に依つて順を追ふて見るならば針ノ木谷の南又を起點として、南又谷を溯り針ノ木南峯（圖籍ニ依ル）に登り、之より折嶽の峯に達し三吉小屋場にて一泊し再び行を起して眞砂、火折と縦走を續け、中嶽を横に中嶽劒との鞍部を越えて黒部川源頭に下り三つ又に野營を張るのである。鷲羽嶽へは此處より上下するか、又は中嶽より東鷲羽嶽と縦走して鎖嶽との鞍部十二越へ出てこの三つ又へ下るか何づれかを採るものである。三つ又より此道は本流に付いて下り折谷の出合にて本流に別れて折谷を溯行し太郎兵衛平に出て有峯へ入るのである。此の道は往古は有峯から鷲羽嶽迄は拓かれて居たと思はるゝが、針ノ木谷までの記錄は見當らない。寛保以來上奥山に於て頻々と盗伐の事實發見せられた頃より奥山見分の定例道として拓けた樣である。この盗伐見分の爲めに拓けたと思ふ道に中嶽谷道がある。之はヌクイ谷出合附近にて本流を渡り對岸本流に付いて溯り、中嶽谷（東澤谷）を登つて中嶽下の小屋場へ達し定例道と合するものである。此道は難路ではあるが、直に奥山の中心たる中嶽に達するもの故上奥山に異變のあつた場合彼等に取つて重寶な山路である。この道は安永四年奥山廻役三ヶ村長兵衛等が盗伐の噂を聞いて急行見分に赴いた由記錄に見えて居る。

以上が上奥山の常例道であるが、藩政中頃より中嶽道丈けは利用少なかつたものゝ如くである。上奥山は割合嶮難の度少く、加ふるに安永以來盗伐者出沒して奥山廻りを手古摺らせた所丈けに、彼等は事毎に此の邊の地區を縦横して其歩道は立派に成り谷々川筋山成の實相も極めて明細に判別して居て、いやしくも不明の個所を有して藩廳より叱責を喫するが如きは絶無を期しただらう事は疑ひない。以上大體奥山諸繪圖に記入せられある山徑について説明したと思ふ。

今一つ右圖には無いが、文政以降三州圖籍等に記されて居るブナクラ越のことである。此の道は伊折より早月川の源流をブナグラ谷に入り、ブナクラ嶽（猫又岳）鞍部に古圖には名のみ存して居るブナクラ峠を越え西鐘釣に達する道である。之は初め小黒部へ出て祖母谷出合に達して居たものが、文政より西鐘釣に温泉が湧出し浴客が出入往來する樣になつてから片貝谷より鐘釣へと立派な道路ができ、却つて其方が本道なつたのである。ブナクラ越は古來黒部谷への捷路として、一説には、佐々成政もこの峠を七月（十一月に非ず）越えて、内藏助平の岩窟に一泊して針ノ木峠へ掛つて行つたと説を爲す人が在る位である。奥山に異變あらば此の捷路を取つた事は一奥山廻りの手記に「寛保元年七月二十二日に在所罷立早月谷より罷登り劒嶽東方越をぶなくら越と申也」と見えて居る。又安永四年の奥山廻役の覺書（奥山廻役の研究ヲ參照）にも「（前略）私共三人杣人足多召連劒嶽ヲ越黒部谷後立山之腰罷通りはりの木峠へ罷越御境目見分仕候（後略）」と書いて居る。共に奥山に盗伐あり、奥山廻役等がブナクラ峠の道を越え平素罷越し難きなどゝ云ふ後立山の嶮難を物ともせず、山内を至細に見分しつつ急行調査に赴いた眞摯なる樣子が彷彿として敬意を表せらるるではないか。

尚此の項に於ては有峯道、長棟道、立山溫泉道或は又立山參拜道の事を記し今昔を辯せねばならぬ次第であるが之は何づれ適當なる他の題目にて發表する機會を得たいと思ふ。

四、奥山の森林

古來奥山は林木森々として繁茂し、原始の儘に幾千百年を經過し、其林相も黑部と云ふ字の依つて來るてふ「黑邊」又は「黑檜」と云ふ文字にふさわしい限りのものであつた。以前は兎も角藩政時代となつてからは、御林山として林制上より、又隣國の境目として戰略上より諸人出入禁斷の地として斧伐の音を聞かず常人の覗ふを許るされなかつた事は奥山の濫觴で述べた通りである。藩末に至つて伐木のことあるも、奥山廻り等は一致して、其秘境の濫りに開らかるべきで無いことを力説したのであつた。其爲めか奥深く伐木のことは無かつた。尤も奥山御境目筋の山々には四時雪消えやらぬ高嶽峻嶺連つて、伐木は越中側へ運輸しては其大半は利益せぬ所である。さりとて信州へ伐り出すは利益なるも、盜伐常習者に山内の様子を知らるるのは實に不用心極ることである。これが釣り合つて長く林相を保持して來たと云ひ得やう。

（奥山廻役竹内記錄）

就御尋小紙を以申上候。

一、黑部奥山御林御材木、信州手寄之方同國之者へ請負に可被仰付義有之候はゞ山境之所何を申場所請負に被仰渡候て可然哉と御尋に付申上候。上みの方は中嶽谷を限下の方は猿飛邊を限黑部本川より信州の方御林請負に被仰渡候得ば可然様奉存候。尤本川より御國の方伐取不申様被仰渡候得は可宜と奉存候、本川を打越候得ば立山へ近御國方案内相知不縮にも可有之候哉と奉存候。（中略）

右就御尋申上候乍併其刻御縮方手配相考仕方可申上義も可有御座候哉、難計奉存候旦又他國へ請負に被仰付候得は谷峯切所、道方宜仕可申と奉存候左候得ば御國方不縮に茂相當可申哉と奉恐察候將又請負年限相濟跡哉伐縮方六ヶ敷可有御座候哉、右兩様乍恐深御賢慮可被仰付御義と奉存候。

卯七月　　吉左衞門

太郎右衞門

新川御郡御奉行所

奥山廻りの主張する所尤なりとした事は論を持たない。

奥山の木材は黑檜を最上とし、五葉松、はだ等がある。然し前記の如き次第もあり、藩直轄地として伐出しも面倒臭いもの故、結句濫伐を避けて年月を閲したと見るべきである。林相については記錄甚だ少く何れ奥山廻役の項にて詳記するを便とする故一二をのみ掲げよう。

（佐伯記錄）

覺

一、黑部川谷　杉、檜、五葉、つが、松はた、槻。

一、片貝川谷　杉。

一、早月川谷　杉、檜、五葉、松はた。

一、常願寺川谷　同　斷。

一、白岩川谷　杉、檜、五葉、松はた。

一、上市川谷　同　斷。

〆

右新川郡御材木御座候山々谷々如之候。

享保十一年十月二十六日　　善右衞門

三郎左衞門

（佐伯記錄）享保十一年十月

（前略）新川郡山々五葉松はた一ヶ年に三千本宛御用木に爲伐候而茂減り目も見申間敷哉と御尋ニ付其通リ委細ニ申上候。（後略）

右の二文書は只一つ例に過ぎぬが、黑部の林木を概記して居る。尚後段の文書の如き一ヶ年に三千本位で減りを論じているのは一寸異とする所であるが、之は當時の伐木の幼稚と他に理由が有るのである。理由は奥山廻り役の研究で述べたいと思ふ。

明治以降は營林署の管理となり、時として良材のみ伐採し、又頻々として盗伐のことあり、些少林相の惡化を來して居ることで有るが、大部分は原始の姿態を存し、日本稀れに見る境地を形成して居るのである。

昭和十一年大阪營林局の職員一行、黑雉川上流原始林を調査して人跡未到の嶮絶せる地勢を述べられ、埋れたる寶庫と讃えられて居らるゝが、以つて往昔の黑部奥山の林相を偲ぶの資料として此の記事を掲げたい。

（大阪朝日新聞）昭和十一年八月

拓く新秘の寶庫

探險の目的は太古以來一挺の斧も入れぬ爲老樹の倒壞腐朽おびただしく雪崩と洪水に依る山崩れ崖崩れ相次いで荒廢の極に達したため倒壞樹の大椎積を整理し水源を涵養し不用材の伐出しを目的とした。

薄井氏談「（前略）イブリ山を越えると熊の徑さへ遮斷されてしまふ。ロツククライミングも尾根傳ひも峻拒されて居る。そこで小澤の水の流を綱と綱にお互の體をくゝりつけてジヤブジヤブ徒歩で急流溯行だ。乳のあたりまでの激流は越るが身體を呑む奔湍や瀧は川から上つて鋸のような岩塊、紙のなやうな壁を滑りつゝ這ひ攀るだけだ、一行いづれも一日十里の山路を辭せぬ猛者揃ひだが今度は最大のスピードを出して一日ギリギリ十町だ。足の土ふまずは餅を燒いた樣に腫れ上つて足といふ感覺はまるでない。雜木帶を山刀で切り乍ら這ひ進むも難行の一つだ毒虻と蝮は間斷なく襲撃する蝮はこつちにとつては絶好の美食だ、片つ端から摑へてり燒にして食つてしまふ。人外境唯一の榮養劑だ。毎日のやうに猿の大群に出くわす。人馴れぬ猿はキヨトンとして逃げもせずキヤツキヤツとからかい乍らついて來る。然しカメラを向けても感じない密林である。（中略）これ丈けの苦難はあつたが山は想像以上の美林だつた。山毛欅、杉、姫子松、ねずこ、しらべなど殊によく運輸方法さへつけば廢りものゝ木を擇伐した丈けでも三百萬圓位ひ樂に出るだろう。

この方面は昭和六年八月塚本繁松氏が走破されて居て其「山岳」二十七年第一號に現れて居る「朝日岳と北又谷」の記事と比較して流石に新聞の記事だと思ふが二文共に林相の美を讃して居らるゝのは間違ひない。この北又谷の深奥に殘る人跡未到境の一斑を推し進めて往昔の黑部の森林を想像して頂きたいと思ふ。

（未完）

（一二、五、一五　於越中津澤杏子文庫）

2　吉澤庄作　「越中方面 大蓮華山登山攀録」『山岳』第5年第1號

1910（明治43）年3月31日刊　日本山岳會事務所発行

要　約

1907（明治40）年8月20～22日の記録。

メンバーは、吉澤庄作、漆間唯一、佐々木仁次郎（音沢村の案内人）、佐々木助七（同）、その他、計14名。

行程は、祖母谷温泉～祖母谷・西ノ谷遡行～清水平～白馬岳～鑓ヶ岳付近～清水平～祖母谷温泉。学術的な関心を持っての登山で、植物採集を行いながら登っており、植物や地理・地質などについて詳細な記述がなされている。

※黒部川側から白馬岳登山の初期記録。

※吉澤庄作は魚津中学校教師（博物学）（旧制魚津中学校は、現在の富山県立魚津高等学校の前身校）。

はしがき

黄金色のアキノキリンサウや、白い優しいヨメナやコンギクや、さては金米糖の様なミゾソハの花などが、見渡す野邊を飾りて、空にはアカ子トンボが舞うて居る。

此うらゝかな小春日和にあたり、越中下新川の黒部原頭に立ちて、東南の方を眺むる時、其大波小波の湧き返へるが如き一帯の山脈中、前面低山性の山々は紅葉の眞最中で、更に遙に望む時、黒部溪谷の右と左とに、遠く二巨人の既に白帽を被ふりて横はれるを認むるのである、右は云はでもしるき我中越の盟主、立山の連山で、其左なるは、日本アルプス北鎭大蓮華の峰である(原文ママ)、

アヤメが過ぎて麥が實り、堤に合歡の花が咲き撓んで、照りつく蛇籠のあはひに、河原撫子が咲き亂れる頃、圍周せる郡山は、既に業に白衣を脱いで、緑の色に立かへるとも、此二巨人は其白き頭の被ぎをば脱がうともせぬ。

中越人士の多くは、立山の威靈に接して居る。

只其東方の巨人大蓮華は、中越の人によりて、訪はれたる事は殆んど無い。山嶮しさが故か、あらず。路遠きが故か、あらず。中越方西よりの登路、明かならざるは蓋し其主因である。嗟吁大蓮華の山、果して越中方面より足を入るゝを許さゞるか。

一　發端

立山に登りたるものは、黒部の深谷を距てゝ、南より北に屏列せる一帯の峻嶺を見るであらふ。是れ飛騨山系の連嶺で、重疊せる峰巒は、蜒蜿欝積して、所謂日本アルプスの北半をなして居る。針木嶺より、後立山、鹿島槍岳、大黒岳、鑓ヶ岳となり、大蓮華となりて、自ら越中、信濃の境界をなして居る。夫れより越中、越後の間に延びて、乗鞍、上駒ヶ岳、雪倉岳等となり、遂に親不知の峭壁となりて、直ちに日本海に沒し終る。

此連嶺中、信濃、越中、越後の國境の邊、殊に磅礴欝積して群巒蜿起し、鑓ヶ岳、杓子岳、不歸岳、鐘釣山、鉢ヶ岳、雪倉岳等の峻峰層々として、雲を截り、天を磨して居る。就中大蓮山（白馬岳）は我下新川郡と、信濃北安曇郡 及越後西頸城郡とに跨りて、標高實に二九三三、一米（陸軍參謀本部最近の報告）。群山中獨り昂々然として、あたりを拂うて居る。實に日本アルプス最北の雄鎭である。

從來此山の登路としては、信州北安曇郡なる北條村より、姫川の一支流、松川に沿ひ、北俣より葱平に出で、夫れより登る事は最も行はれて居る。越後西頸城郡大所村より蓮華温泉に一泊して、夫れより峰傳ひに

も行ける。

今までの處、越中方面からの登攀者は殆ど無い。

自分はどうしても黒部谷より登攀を試みたいと、常に思つて居た。一般觀光上から云ふも、黒部の深山幽谷を跋渉して、其絶勝を賞するは壯快なるべく、學術上から見るも、此方面よりの方は、甚だ趣味多かるべきを信じて居たからである。

偶々祖母谷温泉にあるの日、此事を湯本の朝田君に話した、幸いに朝田君の家僕に、此方面の地理に精しいのが居たので、其翌年同志者と共に、黒部谷方面より登攀する事としたのである。

二　門出の記

八月（明治四十年）の十八日、朝早く三日市町、馬車場にと歩を運んだ。漆間唯一君と共に、乗り出したのは、五時を、僅に過ぎた頃であつた。荻生（オギフ）、若栗、浦山の村々を經て、下立（オリタテ）村に着いた。次第に右に迫り來る山々には、蜩が勇しく鳴き交はして居る。左なる黒部の川面には、朝霧が一面に立こめて、鞺鞳たる響を包んで居る。かくて爪先上りの國道三里にして、愛本橋畔に至り、馬車を辭した。

此地は黒部溪谷の將に山地を出でゝ、扇面状に發育せる、冲積平原に向ふ狹隘の地で、其岩脚を搏ちて激怒する溪流の、湧き返へる飛沫は、雪華となりて崖樹に濺いで居る。兩崖の青巒、これが爲めに鳴り、萬樹の綠葉これが爲めに搖いで居る。

三　黒部峽谷を溯る記

愛本橋を左に見て、右に折れ、山路を辿りて内山村に入り山形市次郎方に就いた。數名の人夫は吾等を待て居る、運ばすべき荷物を彼等に托して、先へと急いだ。これからは黒部の左岸、段丘の平地に沿ひ、黒部の清瀬を左に見て黒部の峽谷を溯るのである。約半里にして村を離れると、右に一大飛瀑がある、結晶片岩系の絹雲母片岩、角閃片岩、雲母片岩などが其兩崖に輝いて居る。

黒部山林の爲めに開かれた一間幅の道は、平坦砥の如くで歩の運びも早い。黒部河原の栗黄（ぐみ）吹く風は、路の傍なるダンカウバイやクマシデや、毒々しいタケニグサや、さては葛の裏葉を吹き返へしつつ、右手の山腹なる、萩や薄を驚かして、次々に青い波を送つて居る。

山合の平地には、大豆や粟や、里芋などが作られてある。草帽短葛の村童が、葛の葉を堆く積みたる馬を引いて來る。彼方の豆畑より少女の謡の洩れ來るは、雜草を除（と）つて居るのであらふ。

内山村から一里で、吊橋に由て黒部川を左に、越えた。是れからは溪愈々蹙まりて、山地との間に餘地が無い。深造岩の斷崖を切り開いた路で、黒水は直ちに其右なる崖脚に咆哮して居る。行くこと一里で佛石（ホトケイシ）の茶屋がある、蜀の棧道にも似たる林道を辿ること尚一里で、路が二つに岐れる。左は黒薙（クロナギ）温泉路で、此より約十町で行ける。右に沿ひて行くと暫くで黒薙川の吊橋がある。

笹原（サヽハラ）、出平（ダシダヒラ）などを過ぎて行くと、次第に黒部峽谷の眞相があらはれて、植物景觀亦次第に深山的となる。山毛欅（ブナ）やハウチハカヘデや、ハクウンボクや、タニクワ、チドリノキの如き濶葉樹の間には、ツガの老樹立ち雜り、對崖の山勢次第に峻嶮を加へ、下行く水は奔龍の如く、急に馳せては白練の如く、停滯しては紺青を溶く樣である。夫れが谷間の梢の間に見え隱れして居る。岫を出でゝ遊ぶ閑雲は、解けつ結びつす。山容、水態、樹勢、雲影、もはや人寰のものでは無い。

一縷の新道、幾たびか曲り曲りて、猫又（ネコマタ）に着く。黒薙の分れから約二里、これから鐘釣温泉迄は半里で、祖母谷（バヽダニ）温泉までは約三里半である。

貉谷（モジナタニ）（當字）小便谷などを過ぎて、東鐘釣山の麓に着くと、奔流山脚に激怒して、山鳴り谷響き、萬綠悉く動いて居る、一大吊橋を越えて、左岸に移る。約二町で鐘釣温泉場に着くのである。

此地一帶、古生層の粒状石灰岩能く發育して夫れが花崗岩の迸發に逢ひて、接觸部に變質を爲し、接觸接鑛物として、碧色の柘榴石、ヘデンベルグ石、硅灰石其他輝水鉛鑛、黄銅鑛を胚胎して居る。此地に坑稼せ

る、鐘釣銅山は、全く此接觸鑛床である。

鍾釣温泉は、此石灰岩の罅隙から迸るもので、玲瓏透徹、快味口に媚びる炭酸泉である。夏季になると、浴客常に滿ちて、此空谷を賑はして居る。此地を通るものは、是非一浴を試み給へ。

嘗て入浴中の日記がある。此に一節を録して此温泉に關する記事の補遺としやう。

『温泉は客舎より羊腸たる阪路を下ること、殆ど一町、黒部の溪間に出づ。其間左まで嶮しと云ふにはあらねど、疲れたる足には稍辛し。溪水の漲涸によりて、湧泉其處を異にするを以て、別に浴舎の設けあることなし。四壁は巨岩によりて包圍せられ、砂礫其底をなせり。前は黒部の清瀬を隔てゝ、連なれる險峭、側立數千尺、直ちに面を掠むるが如し。上は翠嵐滴らんが如き綠葉、自然の日被となりて、其間より紺碧の空をあらはせるなど、極めて詩趣に富む …。』

四　鐘釣温泉より祖母谷溫泉に抵る記

鍾釣より林道は半減して三尺幅と爲る、今までの様に平坦ではない。溪谷は愈急迫して峽愈深く、兩崖の峭壁益急峻にして水愈々清い。V字形をなせる上流式の景觀、名にしたふ、黒部の峽谷、此に至て極まれりと云ふべしである。白き花崗岩の岩脚を洗ふて流るゝ水は、岩に狂ひては萬丈の白沫を崖樹に濺ぎ、淡紫のギバウシ、黄色のハクサンオミナヘシ、淡紅きハギの花などしぶきの風に搖めい居る。其黒みたるツガや、枝の垂れ工合の面白き子ズコ、奇骨の稜々たる五葉松の如き、針葉樹の間にイタヤカヘデ、カツラ、ブナサハグルミ、ヒトツバカヘデなどの濶葉樹が立ち雜り、其下陰には石南や、イハウチハなど、一面に生ひて居る。山水の景觀益々奇抜で、眞に深山幽谷的の光景である。

ガラ谷、ウド谷など過ぎて、いつしか小黒部川に着く。兩崖の山脚相迫る處、清酒なる木橋がある。此あたり、槭樹科植物甚だ多く、其白雲紅葉の美觀想ふべしである。一阪を上り、又黒部の本流に着く。花崗岩の侵蝕殆んど千尺、下行く水は濃藍の如く、其兩崖相迫る處、僅に數間。所謂猿飛（サルトビ）にして、蓋し天下の絶觀である。峭壁削立の間を過ぎて、欅平（ケヤキダヒラ）に至れば、復た一大吊橋がある。

黒部の本流を左へ離れて、祖母谷川に入る。温泉まではもう一里に近い。花崗岩の絶壁を打開きたる、一綫の新道を辿り、一阪を越えると、急に亞硫酸瓦斯の嗅が鼻を衝くであらふ、ふと前面を見ると稍打開けたる間に、五葉松が見えて、其葉陰に立ち並らべる幾つかの屋根が見える。吾等はかくて祖母谷温泉に着いたのである。

五　祖母谷温泉記　海抜二千二百五十三尺

東から來る祖母谷川と、南から來る祖父谷川（ヂイダニガハ）とは、客舎の後で落合ふて、夫れが温泉場の北側を流れて、黒部の本流に落合ふべく、西へ西へと流れて行く。虹の様な吊橋が、前面に横はつて、其の左の橋爪には五葉の巨松が、所得顔に枝を擴げて居る。此谷合をば、獨りで領して居る様である。對岸なる青巒の、此前面に於て盡きんとする處には、ツガや、子ヅコや、五葉松が根を占めて、其散漫たる雜木林の、しまりをつけて居る。

前面は長短幾双の屏風を立てまわした様に、直立の峭壁で、針葉樹が層々として生え繁つて居る。祖母谷川が其山脚を右に左に、うねりて行くのである。左は祖父谷よりの續きで、イタヤカヘデ、ブナ、サハグルミなど濶き葉を擴げて、近く前面の針葉樹と對照して居る。其間河域の平地に設けられた幾棟の客舎は、近年の新築である。樋にて導かれた硫黄泉は、四個の浴槽に碧瑠璃の様に湛へて居る。

俗塵を靈泉に洗うて、臥牛の様な岩上に踞まり、暫し四邊の風光に憧るゝ時。眞綿の様な一抹の白雲は、前領に棚引いて、後の針葉樹は、うすぼんやりとして、誠に夢の様である。白雲は次第に前へ前へと進んで來る。一平面に描かれた屏風の繪の様に見えた山水の景は、薄く、濃く、歴然として厚さを示して來る。其ちぎれちぎれのあはひから、濶葉針葉の葉影が、見えつ又隠れつする。

雲は次第に溪に下りて、サハグルミや、ナヽカマドや、ウリハダカヘデや其間に蔓（はびこ）れる山葡萄などの葉陰に屯して、遂には何處となく消えてしまう。多分ヤマソテツや、天人草や、岩の上に生えて居る杉苔など

に、吸ひ込れて終うのであらふ。

六　祖母谷川を溯る記

休養に費した十九日は過ぎて、愈々二十日となつた。天氣模様は申分が無い。往復三日間の食料、鍋、防寒具、其他の準備を終へて出發したのは、六時半。同行者共都合九人、人夫としては音澤村の仁次郎と外に四人の壯漢で、一行總て十四人である。而かも吾等の前途の總ては、一人の仁次郎の信賴にあるばかりである。仁次郎の外には、大蓮華への地理を知るものが無いのである。

前面の吊橋を經て、祖母谷川の右岸に沿ふて溯る、河域中諸所に、硫汽孔や噴汽孔があつて、水蒸汽や、硫汽を噴いて居る。濛々として立ち騰る蒸汽は、此空谷に渦巻いて、更に峰から空に漲つて居る。開かれた林道は、七八町で叢の内に消えた。もう是れからは殆んど路は無い。丈に餘る蓬、山アザミ、垂れかゝる薄、萩、置き餘る露を掻き拂うて、岨崖を辿る。

崖は嶮しく、溪は狹く、花崗岩を抉つて奔る激流は一際白い。ギバウシや、ナキリスゲや、タマガハホトトギスなど岩間に叢がりて、置き惑へる露は、腰以下を霑す。左より來る小溪を越えて、絶崖を攀ぢると、灌木、喬木の綠葉から成れる穹門を潛る。迷路を辿る樣である。切りたる根を跨き、横はる頑石を踏み越して、行くこと五六町で河原に出る。右に水を涉つて大岩巨石の間を縫う樣に、次第々々に北々東へと進む。更に右に崖を攀ぢて林樾の間を辿る。幾たびか絶壁の飛瀑を避ける爲めに右に林間を辿る。ブナ、サハグルミなどの下陰にはイラクサ、テンニンサウ、トチバニンジン、ヤマソテツ、シユモクシダ、コガ子シダなど、いやが、上に茂り合て居る。方向は約 N.10° E. かくして又河原に出る。溪間を溯ること約一里で本流を左へ離れる事となつた。即ち左折して一支流に就く。方向は殆んど正北となる。

次第に急を加へて全溪殆んど飛瀑。大廈の如き巨岩、鐵條網の如き仆木、吾等の前途を阻む。十一時半、稍々開けたる地を得て晝飯を終へた。温泉よりは二里に足らぬ、而かも時を費す事五時間。

又歩を續ける。左に一溪あり、右に就いて行く。オホバミゾホヽヅキ、トリカブト、センジユガンビ等あらはれる。行く行くイハワウギ、シナノナデシコ、タカ子ナデシコ、コゞメグサ、ミヤマミヽナグサなどに逢ふ。ハナシノブのあちこちに見ゆるは殊に珍しい。兩岸の叢原にはオホイタドリ、ハンゴンサウ、オホヨモギなどの發育は、中々盛である。

行く事一里許で、左折一溪を攀ぢ登る。水は殆んど無い。兩崖の叢中にはゼンテイ花、立山ウツボグサ、グンナイフウロ、赤沼フウロ、オホサクラサウ、シナノキンバイなど咲き亂れて植物の景觀、もはや世の常のものでは無い。モミデカラマツ、絹笠草、深山カタバミ等は尚花盛で。白根アフヒ、白花ノヘビイチゴ等、もはや果實となつて居る。

約一時間で登り詰めると、平地があつて、白山オホバコが一面に敷かれて居る。ベニバナイチゴの果實は、紅熟して浮世外の味がある。

西南黑部の谷を距てゝ、近く聳ゆる立山、別山、劍岳は、當面槍目、雄姿自らあたりを拂ふて居る。これから根曲り竹や、ナヽカマド、ホツヽジ、クロウスゴなどの茂れる間を踏み分けて行く。

峰へ登り詰めると、幾百年の霜雪を經たらんと思はれるシラビソが、吹き荒ぶ烈風の爲に、半分から末は白き骸骨となつて、白雲の去來する間に特立して居る。高山的の景觀が自然にあらはれて來る。

郡内の方面は、霧の海に沈みて白蕩然たるばかり、ちぎれちぎれの白雲は、巻き上げ來ては、兩の頰を冷めたく嘗めて行く。次第に立木も疎らとなつて、眼界は漸く廣くなる。硫黄澤の谷は直ぐ向ふに見えて、立山の連嶺や、信越國境の脊梁山脈は一目の裡に見渡す事が出來る。かくて吾等は、喬木帶を過ぎ、灌木帶をも通り越えて、草本帶に入り、實に雲上花壇中の人となつたのである。

唯見る、紅、黄、白、紫の一大花壇。黄金の盃を叢間に置き散らした樣な、シナノキンバイ、ミヤマキンパウゲ、ミヤマキンバイ、或はキンクルマ等。紫紅色の美しいヨツバシホガマやナンキンコザクラの如き。或は赤沼フウロやグンナイフウロの薄紫色なる。イハイテウ、チンクルマ、ハクサンイチゲの純白なる。ミ

ヤマリンダウ、オヤマリンダウの碧色せる。僅に四五寸にして、而かも老幹の風致ある、ツガザクラ、アヲノフガザクラ、ミネズワウや、其他姿優しき車百合や、伊吹トラノヲや、オホサクラサウなど。五色陸離として、峰から峰に續いて居る。

花を踏みしだきつゝ、尚も歩を運ぶ。祖母谷川の溪聲は次第に、右の下に遠かり、清水平（セウヅダヒラ）の三角標は直ぐ前に見えて居る。シャクナゲ、ハヒマツ、ミヤマナヽカマドの蔓れる間を分けつゝ、行き行きて、殘雪の皚々たる處に出る。岩桔梗や千鳥桔梗の瑠璃色せる美大の花が、岩ツメクサや、白山イチゲなどの白花と共に、裝點して居る。正に是れ、天津乙女の簪の折れか。

七　清水平（セウヅダヒラ）の一夜　約九千尺

展望と採集とに時を移した吾等は、五時過ぎ、漸く清水平なる第十六號三等三角點の下に着いた。大蓮華山は近くに東方の天を磨して居る。稜骨秀でたる鑓ヶ岳は、杓子岳と共に、其西南に聳えて見える。立山、劒岳は、見る間に雲霧糢糊の裡に包まれてしまつた。閃き渡る電光、鳴りはためく雷。俄然降り注ぐ驟雨。天柱折れ、地維もや缺けなん。天地只濛々。此くの如き事約十五分、沃雲さりげなく散りはてゝ、雨は漸く霽れ上る。六時に近い夕陽は、有磯海の上より斜に夕榮えて、其細い名殘の雨に映じたる時、天地白盡。

我郡部より越後糸魚川方面にかけて、下界一面に群がれる白雲、湧き上りては峰巒の如く。高く聳えては、氷山の見る見る我前に迫るかと思ふと、奈落に向て一時に頽れかゝる様の凄まじさ。其日光に映ずる白雲の、煮え返へりては、沸きたつ様、天地の開闢を目の當り見る心地して、誠に天地の壯觀であつた。

嗟吁何等の大觀ぞ。あらゆる色彩を以て彩られたる東の空。

見よ。大蓮華の北麓より起りて、硫黄澤の谷に渡れる虹の大觀を。日本アルプスの北半、針木嶺より鹿島槍岳、大黒岳、鑓ヶ岳、大蓮華山。共に此七彩の大穹門の内に収められて居る。全圓の三分の二を占めたる、此類ひなき虹は、其外圍を更に取り巻ける複影と共に、此空漠たる天と地との間を彩化したのである。

此意外なる天地の大觀を縦まにしたる吾等は、稍東方なる低地に就き、野營を張るべく共に働いた。曩に測量隊員の野營地で、小屋の用材や、ハヒ松の薪材が多い。

暮色は大蓮華の方より次第に迫りて來る。雨後の碧空には、一つ二つ次第に星の數が殖える、北斗七星の見え揃つた頃に、二棟の小屋が出來上つて、月が大蓮華の一角より昇り初めた頃、晩餐が備つたのである。偃松の粗朶は盛に燃される。煌々たる焔に照されたる二個の小屋、輝ける焔を取巻いた十四人。此外には人間の拵へたものは何も無い。曇りなき月は、太古ながらの峰巒を照らし、谷底より來る溪聲のみは何等かを吾人にさゝやいて居る様だ。あゝ、人寰を超越せる事九千尺。限りなき星を眺め、盡きぬ感に打たれ、吾等は初めて自然の子たるを知った。飽くまでも清新の夜氣を浴びて、崇高の感に打たれる吾等は、吾等の總てを、月と星とに托して、夢を包むべく、二枚の毛布にくるまつた。

八　大蓮華山の絶巓

朝の四時、偃松のバチバチ燃ゆる音に目は覺めた。朝飯の鍋が眞中に吊るされて、五人の人夫は車座に取巻いて居る。顔を洗ふべく、泉まで歩を運ぶと、曉嵐衣袂に迫りて、思はず胴震ひをする。指も落ちんばかりの冷水に、殘れる眠けを洗ひ落して戻ると、金星一つ我頭上に輝いて居る。高寒は膚を刺す様である。毛布に包まれたる幾個の達磨が、焚火を取り圍んだ。

此處大蓮華山の中腹とも云ふべき一帶の嶺上で、西南は祖母谷川上流の深谷、東北は黒薙川の上流、柳又の溪谷である。二三の峻峰、筆架の様に聳ゆる、一帶の尾根傳ひに、大蓮華に達するのである。

川島碌郎氏が本誌二年一號に於いて白馬の小屋より小川温泉に達する途中、『濃霧の爲めに阻碍せられて、約二里餘、鐘釣（シャウヅ）小屋に一宿す』と述べられたるは、此地の事であらふ。氏はシャウヅに鐘釣を當てたれど、鐘釣（カネツリ）は西方にある別の山で、此地は清水（セウヅ）である。

見よ、明けなんとする東の空。活き活きして勇ましい朝の光は、山の端に仄めきて、今や自然は靜かな眠

から醒めやうとする。大蓮華山巓の一等三角標と、東北の方、鉢岳の巓とを、横さまに結び付けたる一連の雲は、黄色から橙色に、更に暖紅色となりて、今や雄大なる朝の光が、山の一角から洩れ初めて、峰から峰へ、谷から谷へと浴せかける。谷あひにひれ伏す白雲は、驚いた様に、ちぎれちぎれに落ちて行く。

嗚呼尊い哉、萬丈の光芒、何等の壯嚴であらふ。何等の崇高であらふ。

採集した植物の整理がすむと、丁度食事も整ふたので、一同樂しき朝餉の團居をした。嬉しや紺碧の空は、今日の晴天を示して居る。

石礫の眞砂が敷き詰めた様で、一塵もない。其間に點綴せられた高山植物の五色陸離たる光景は、是れまことに雲外の禁苑が、はた天津乙女の舞の庭か。

日は麗かで、風は襟に冷い。タカ子バラの清香、置く露を厭へるコマクサの花、高潔比ひ少なきタカ子スミレ、或はユキワリシホガマ、ミヤマウキキヤウ、ミヤマアケボノサウ、ミヤマセンブリ、さてはハヒマツの下蔭なるリン子サウ、ヒメイチゲ、岩角を占むるシコタンサウ、其他シロウマアサツキ、タウチサウ等、何れも珍品である。

ハナゴケ、アカゴケ、木葉ノエイランタイ等の地衣類を、そくそく踏み行いて、一尖峰を右に繞り、更にハヒマツを渉り第二の尖峰を廻りはて行く、西南深谷に面する處は、草本の發育殊に良く、車百合、赤沼フウロ、郡内フウロ、白山バウフウ、秋ノキリンソウと共にタンポヽの咲き雜れるも珍しい、平地ではタンポヽは四月で、アキノキリンサウは十月の末である。四季の花を一時に見るを得るは、さすがに高山の御花畠である。

眞立てに右に下ると、殘雪があつて、其消え際にナンキンコザクラ、イハイテフ、ミヤマキンパウゲ、ウサギギク、等の大群落を見る。

氈の如き綠草の山腹を、稍東北に登ること、一町許で懸崖に向ふ。左は第三の尖峰で、甚だ高い、右は三角標を有する一小峰である。前面は深谷に向へる峭壁、大殘雪が恰もヨダレカケの様に懸て、所謂カールの地形とも見るべきで、極めて、趣味あるを覺えた。

是れから屋根傳ひに左に登り、大尖峰の右腹を廻はり、大雪溪を渉つて、白山イチゲ、イハイテウの草原を踏み、大蓮華の直下、石室の邊に着く。三角標までは五六町に過ぎぬ。岩石の磊落たるものはあれど、傾斜は甚だ緩い。此あたりツクモグサ、ミヤマアケボノサウ、オヤマノエンドウ、ヒメコゴメグサ、タイツリワウギ、チシマアマナ、キバナノシャクナゲ等を見る、磽确たる礫砂の間には、木状地衣類と共にウルツプサウが甚だ多い。ウラシマツヽジ、立山キンバイ、コマクサ、トウヤクリンダウ等をも見る。

かくて吾等は大蓮華の絶巓、一等三角標の下に突立つたのである。

東南信州に面する方面は、深く抉り缺かれて、其古生層粘板岩質（或はグレワッケ砂岩か）の山骨を露はして居る。足をのゝき、神震ひて、久しく窺ひ見る事が出來ぬ。直下は松川の上流北股で、南股と合して糸魚川に注ぐものである。北は低く越後との國境に延びて乗鞍及び鉢岳に連亘して居る。其北西の方面は緩く傾斜して、柳又の溪谷をなし、電光の如く屈折して黒薙川となり、西に折れて黒部の本流に注ぐ。南西の方面は、緩漫なる傾きで、祖母谷に連なつて居る。それであるから、大蓮華の絶巓、三角標附近の降水は悉く越中下新川郡の地に流るゝ譯である。兩國に接する分水嶺の所屬地籍の分界は、其降水の落ち行く領域を以て定むるものとせば、大蓮華の絶頂なる三角標附近を以て、信州の地籍とせずして、越中の地籍とするの、寧ろ當然なる事が分かる。

信越の國境をなせる、飛騨山系北半の崇嶺は、黒部の一大峽谷を挟んで、二枚の屏風を立てた様である。其左側の峻嶺には、針木嶺、後立山、鹿島槍岳、大黒岳より當面の鑓岳まで、筆架の如き連峰は、近く手に取る様に見える。

立山の南に當り、遙に峻峰の特立せるものは、薬師岳である。近く黒部を距てゝ、あたりを雄視せる立山、そが從者の如き別山、劒戟の天を磨せる劒岳。颯爽たる風姿、自らありを拂うて居る。大日岳の右の肩を掠めて、遙に白雲の汀線を突破せるものは西境の王者、加賀の白山である。西北の方下新川郡の視界に入るは、

片貝川の河口より、横山村の海岸に至る扇面形の範圍内である。黒部川は白い幾條の銀線、或は並び、或はからみて富山灣に注いで居る。片貝川の河口近く、商船の點在せるは、石田港である。

かくて朝田君の寫眞機によりて、大蓮華絶頂に於ける吾等一行は、盡きぬ記念を留めた。

九　鑓ヶ岳を迂廻して清水平に抵る記

大蓮華山の西南、杓子岳を距てゝ、相語るが如く見ゆる一峻峰は鑓ヶ岳である。峰傳ひに磽确たる山脚を繞り下りて、一谷に下る。此處黒百合が甚だ多い。稍行くと、兩側の巉岩相接せんとする處、左側巨巖の下に一小屋がある。一側は石や草を積み上げて、他方に入口がある。まるで岩燕の巢である。内には誰も居ない。一坪半許りの中央には、爐があつて、椀や杓子の載せられた鍋が、其眞中に留守をして、味噌や米の容器は、其側にかしこまつて居る。是れは黄蓮や、駒草や、黄蓍（ワウギ）等の藥草を取る爲めに、信州より來て居る人の所有である。飢えれば鍋に就て喰ひ、渇すれば、溪に飲む。病めばトウヤクリンダウを湯に振つて飲めば、夫れで腹の蟲が濟む。日が昇て朗かな空には、蓮華へなり、鑓へなり、草を取りに行く。降れば此室内に寢ころんで居るまでの事。雲の下で人が泣いて居やうが、犬が噛み合つて居らふが、一切關はずの山中大王である。惜しかりしは、此太古の民に遭ふ事を得無かつた事である。

是れより小徑に沿ふて、左に一涯を攀ぢると、其間に、ミヤマアヅマギクの可憐の小紅花が咲き揃つて居る。更に偃松を越えて、次なる溪間に出る。此處にも新しい石室がある。四壁は巨岩で疊み上げられて、上には桐油合羽で屋根を作られてある。是にも人が居無い。

是れから鑓ヶ岳へ登るのである。足は疲れて中々捗取らない。幾帶の大殘雪を踏みて其西南面に出ると、草本の發育が見事である。全山の岩石は花崗岩質の霉爛瓦解して眞白く、其殘雪と相映發して遠くから望むと、全山雪を以て包まれた樣である。其間にコマクサ、タカネスミレ、ウルツプサウなど裝點して居る。時既に三時。絶頂まで登らで戻る。

清水平に直行するには、麓なる一大深谷を渉りて、一小峰の三角標を目蒐けて突進するのである。吾等は次第に下りて、偃松と、ミヤマハンノキ、及びナヽカマドの密林中に踏み込んだ。幹から枝、枝から幹へ踏み移りつゝ行くと、下は千仞の絶壁、目もくらむ許り。驚いて横傳ひに迂回して、漸く溪間に達した。更に右に草本の繁茂せる一涯を、横傳ひに登りて、又偃松の密林に身を投じた。兩手で次ぎ次ぎに、枝をつかみては次へ移る。足で歩るくので無く、手で泳ぐのである。殆んど下り盡すと、ムシトリスミレの一大群落に出遭つた。

風は吹き止んで、雲は谷合に収まつた。六時に近い夕陽は、山の端の孤雲を射て、鑓ヶ岳の三角標は、白く輝いて居る。此穩かな夕日の大觀を、前面小峰の頂上に立つて縦にせんものと、氣のみあせれども、足は中々利かない。辛うじて登り詰めて、兩尖峰を横傳ひに越えると、向の平には、さゝやかなる小屋が見えて、一縷の煙が靜に立ち昇つて居る。忘れもせぬ吾等の最もなつかしきホームである。偃松の陰より頻りに呼んで居るのは吾友である。

幾個の偃松の森も夢の樣に越えて、重き胴亂を卸すと、小屋は朝田君の手によりて見事に改築せられて居る。廣き室内には、呉蓙を敷き詰めて、いざ奥にと云はるゝだに娯しきに、食事は如才なく、出來上つて、前に並らべられた數々の肴。あゝ。あの時の嬉しさは、思出すも飛立つ樣だ。

十　清水平の第二夜

十七夜の月はさりげなく登り初めた。劒の如く鋭き風は、凸突きたる尖峰を搏て、更に空谷に唸て居る。吹き傾けられた月は、僅に山の端に支へられて居る。小止みなく地殻を刻み行く溪聲は、自然の極りなきをさゝやいて居る。あゝ此夜景。何たる壯嚴であらふ。

化石の樣に暫し屋外に佇みたる我は、夢を包むべく、再び毛布にくるまつた。

朝の三時であつたらふ。彗星々々と呼ぶ漆間君に起されて屋外に飛出た。星核が大蓮華の頂上にあつて、

發光躰の尾が鑓ヶ岳に向つて引かれて居る。彼は天涯幾億里の遠きより、偶々飛來りて、今し吾人の前に異彩を放つて居る。吾等は今此處にありて、此遠來の珍客に遭ふ。豈に萬感なきを得んや。

南より北に流るゝ銀河は、黑部の谷と殆んど平行して居る。星は云はず、山は語らぬ。飽くまでも淸絶の夜氣を浴びたる吾等は、小屋に入るべく踵を廻らす時。一個の流星は吾頭上を越えて、遠く家鄕の空に消えた。

十一　終結

明くれは二十二日、一同なつかしき小屋に別れて歸途に就いた。淸水平なる三等三角標に立ちて、暫し大蓮華の方を見ると、其頂上は今や白雲の領する處となつて居る。

これより尾根傳ひに、元來し跡を辿りつゝ、祖母谷川に下りた。右に跋え左に涉り、温泉に歸着したのは、午後の三時であつた。

多年の宿望であつた大蓮華の登攀も、かくて成効を告げたのである。

3　冠 松次郎 「祖母谷道」『山岳』第７年第１号

1912（明治 45）年 5 月 24 日刊　日本山岳會事務所発行

要　約

1911（明治 44）年 8 月 18 日の記録。

メンバーは、冠松次郎、丸山広太郎（細野の案内人）、丸山徳十（同）。

行程は、白馬岳～祖母谷下降～祖母谷温泉。

※祖母谷下降の第 2 記録。

※冠松次郎の黒部初山行。

※冠松次郎は日本山岳会会員。

前號所載、高野氏の白馬山より祖母谷温泉へ降られた紀行文に因みて、鹽頭平より祖母谷温泉へ行く。順路に近きもの概略を、杜撰な日記を土臺として書かうと思ふ、白馬から鹽頭平迄は氏と同一の經路を採つたのだからこゝに略す。

鑓ヶ岳の峰頭に立つて西北を望むときに、少しく注視すれば、朝日岳の尾根續きの、遙か凸端に、二つの三角標を見出し、その手前に偃松で蔽はれた尾根の隆起にはさまれて居る、狹小なれども幽靜なる一小平地のあるのに氣づくであらう、これが鹽頭平で、白馬頂上の小屋から朝日岳の左側面を迂回してその裏面へ出て、それより尚西微北に山稜を搦んで行けば、三時間程で達することが出來る、この丸い盆を置いた様な靜な水平地は、朝暮、山雲徂徠して斷えす濕氣を帶び、偃松の美、山草の麗は、正に雲の平若くは天狗の小屋塲とでも稱すべき所である。

もう此邊へ來ると。白馬よりも土地が可なり下つてゐる爲に、四顧の山岳は益々高大して、展望の面白さは遙に蓮華の群峰を凌ぐ、加ふるに越中平原及日本海は益々近く、立山連峰の崇嚴は、到底白馬山上の比ではない、曾て扁平に見えたる、雄山、大汝、富士の折立は一團となつて、劍ヶ岳以上に尖頂を露はし、劍ヶ岳はその大さを數倍して、萬岳を壓仆せん勢を示して居る、鹿島の槍と立山の間には、穗高山、槍ヶ岳より、黑部五郎岳に到る諸高岳が、雪の縞、岩の襞を見せて、矗々と折れ重なつて、しづまり返つた旦の雲は、これ等萬岳の裾を浸して靜々と沸動してゐる、朝日は妙高山の少し右から昇つて、夕日は遙に三角標のあるスロープの後に沈む、朝も夕も我を睨視してゐるものは矢張立山連峯である、越中方面より見たる白馬は、何等の奇勝も壯嚴もなく、なめくじがはつてる様で、僅に鑓が鈍頂を抜んでゝ居るのである。

八月十八日　晴朗（明治四十四年）

今しがた運動を開始した雲海の一部は、黑部の谷を奔騰して、鹿島槍や五龍を目がけて信州の方へと落込んで行く、その中から、時々、ゆらゆらと全容を現す鹿島槍の尨大さは、恰も怒濤を蹴つて行く長鯨のように見える、もう立山連峯の頂上が赤兀になつて、その大雪溪は燦爛たる光を放つた、劍ヶ嶽の中腹に白雲が一筋たゞなはつてゐるのが、湛然として動きさうにも見えない。

高野氏一行の遭難にかんがみ、朝五時十五分、鹽頭平の傾きかけた偃松小屋を出發した、同行者は案内兼荷持の丸山廣太郎、同德十、の二人、偃松の切り明けを通りぬけ、三角標のある處まで行かずに、小屋より第二の凹んだ所から左へ迂回して、あるかなきかの細徑をひろひ、尾根を縫ふて西に南に進路を取つた、丁度一時間も歩いた頃に、栂の倭木が處々に集團して居る、水溜の多い平地を出た、こゝから明かに小川温泉へ行く尾根も見えるし、遙か右下に、浩蕩たる黑部の川原が大きくゝねつて、小川が紐のようにそれに注いでゐる、川の先は杳渺として水天の界も見えないが、注視してる内に二三と思つた白帆が十幾つかに殖える、其間を縫ふて直江津通の汽船が走つて居る、こゝはもう少し早ければ、所々に殘雪があるに違ひないが、今は全く沮洳地を殘すのみに過ぎない。

左直下から急峻な空澤がなぎ落ちて、遙かの下に殘雪が見える、溪聲も大分強く聞えるようになつた、この澤は祖母谷川の一源流で、谿の行末に白煙濛々と立ち登つてゐるのが、祖母谷温泉の少しく上流にあたる、噴湯のであることが後に分つた、（高野氏一行は此平地より尚尾根を續行して、數時間行かれたと云ふことだ、）澤の急峻なのと人通りの少い爲、全く人跡を認めることが出來ない。のみならず、却つて尾根には明に細徑を通して居る故、どうしても北澤を降る氣にはなれない、廣太郎はしばらく尾根を往復して道を尋ねて居たが、漸く半信半疑で、澤を殘雪を目標にしてひたおりにおりた、降り切つた頃には左から來る本流―鹽頭平より發源する―に合して水勢も非常に強くなつて、大きな雪のとんねるの下を流れて行く、一行はこのとんねるの下をくゞつて身振をした。私はつい三四日前大町で、氷をほしがつた事を思ひ出して、今更ながら生活の變化したのに驚ろいた、廣太郎はしきりにタキがないかを心配して居たが、よい案配になさそうだ。

この近所の全谿を蔽ふて密生してる、大イタドリは實に見事なものであつた、一時間足らずの樂な谷渡を續けて、河原の左の可なり廣い處へ出る、こゝでハンの木や樺の枝で編んだ小屋を二つ見出した、一つは全く頽廢して、その傍に生新らしいのが建てある、漸く人跡を確めて安堵した、後に温泉で獵師佐々木仁次郎に聞いたら、七月下旬越中の人が三人で祖母谷から小川温泉へ通つた時に造つたのだらうと云ふた、午前八時三十分右より一源流の落合ふ堂に到る、（高野氏一行は先の尾根を續行して、この溪より降つて來られたこゝと思ふ、）「もうこんな處へ來たづら―」、と廣太郎が獨言を云ふて居る、この溪水を合せて、祖母谷川は俄にその水量と溪幅を增大して、これから約一里の間、懸崖絶壁を以てかこまれたる。險惡にして豪壯なるセトを形造つてゐる。

これから暫の間は谷の中をのみ下るので、一行は狂奔してる激流と闘かつた、そうして間斷なく櫓の如き大岩巨石の上を匐い登つては飛び降りた、然しいつまでも盡きそうもない絶壁、深淵、奔潭に驚かされる。

谷が深いからまだ日は當分身體に當りさうもない。いくら運動しても汗どころではなく、仰ぐと細長い青空には雲の一翳も見えないで、遙か尾根上の新緑は鮮かに日光を浴びて、春先の如き麗かな感じを與へたが、谿谷の動搖はさすがにすさまじいものだ、さつきから劍ヶ岳が鼻先に見える、この大岳は始終一行の當面を壓して。祖母谷を俯瞰して居る、もう裾の雲は動き始めて斷えずその雄姿を變幻させてゐる、この威容に接して恍惚として居た私は、更に谿谷を顧みて、磊々たる巨岩を蹴つて飛瀑の如く急轉直下し來る峻流を仰いて、名状し難い壯美感じた。

午前九時四十分、漸く祖母谷川と硫黄澤との落合へたどりつき、谷の中へ突き出て居る一巨岩の上で荷物を解いた。岩の上には枯木の燃えかけがちよんぼりと殘つて、空罐が狼籍としてころがつてる、こゝで高野氏一行が暴雨中に一夜を過されたのだと、廣太郎が云ふた、私は四顧して悵然たらざるを得なかつた。それは我々の一行の樣に、道も略ぼ分り。早朝出發したのみならず。好晴の日であつたなら、假令如何程困憊しても要するにたかが知れてるが、今よりも水嵩の多い、七月中旬、風雨の中を未知の深谷で道を失せられて、奔湍で四圍をかこまれてる、此一つ岩の上へ露營をされた、高野氏一行の困苦は察するに餘りありである。

朝早かつたのと間斷なき勞動で、しきりに空腹と疲勞を覺えたから、早いけれども晝食を濟し、約一時間程岩を枕にして谷川の音樂に都會の夢をむさぼつた。

目をさましたのが午前十時四十五分、出發しようとしたが、祖母谷川は直下で硫黄澤の凄流を合せて、渦巻き立つて流れてゐる、最早徒渉どろこではないから、左岸へうつることは中々むづかしい。右岸を仰くと十餘丈の懸崖は、碧潭からそゝり立つて、恰も大屏風を立て廻した樣な大きなヒシとなつて、命をからむ蔦かつらは、ぶるぶると谷風におのゝいて居る。

このヒシの危險で且迷路であることを知つてる我々は、どうしても奔流を横ぎつて左岸へ出なければならなかつた、然し近所には橋に供する樣な木は全くない、止むを得ず廣太郎と德十で、ヒシを攀ぢて木を切りに行つた、私は一人茫然として岩に腰を下ろして、深谷の鳴動に耳を傾けて居た、幾度か流されては直しゝて、丸一時間もかゝつて、ハンの木二本で急造の橋が出來、それを渡つて漸く左岸につくことを得た、やが

て溪側へ入ると、ヒシこそないが四五十度もある急斜面の、土がぽとぽとして足を下す度にずるずるとすべる、全身の力を手にこめて、熊笹やハンの若木を命の綱に横にへヅヽた、最早足は手の二分の一の用にも足りない。杖と雜嚢が邪魔になる事は非常なものだ、廣太郎に案内をさせて德十に後から氣を付けさせ、懸命に此難所を熊笹や灌木の逆茂木を押し分けて、可なり高い處まで匐い上つて、又匐い降りた、最後に熊笹も何もなくなつて、萱やよもぎのくちてどこどろになつてる所へ出て、戰慄しながらすべり落ちる樣にして。一先づ河原へ下りた。この大へヅリは祖母谷中での最難關であつた、天氣だつたからまだしもいゝが、雨でも降つて居ようなものなら、尚幾倍の危險と辛勞を感たことか知れない、谿側のどろどろした急な崖、私はそれを一番恐ろしいものに思つて居る。殊に手がゝりでもなくならうものなら、實に懸崖に手を放つ樣な思ひがする、河原を少し行つて小さな瀧の上で左の密林へ入つて。小へヅリをやり。谷に添ふて可なり歩いて、廣い河原へでゝ、深淵につき當つて又左谿側へ入り、かくして大なる徒涉をすること五六回、小なるへヅリを二三回、依然左谿側の密林を行くと、午後一時三十分に、二丈餘の絶壁の上で路らしきものが盡きた、細引きで荷物を河原へ卸し、交互に警めながら崖側をはい降りて、河原へ出た。こゝで徒涉して始めて右岸に移り、欝々とした森林のとんねるの下に、しだらなく轉がつて居る、苔むす石の上をひろつて三四丁行くと、路らしきものを發見した、やがて行く事又三四丁で立派な林道へ出て、鞳々の聲に振り返ると高野氏の紀行にあつた、樋の樣な岩壁の内を落下してる、壯大な瀧があつた。それを右に見てその下の危い橋を渡つて、坦々たる林道を温泉へと急いた、温泉から十二三町手前で、對岸の平地に噴湯が十餘筋盛んに湧き出てゐる。白煙が濛々として夥しい出湯はおしげもなく谷川へ流れ落ちてしまう。

今朝見た噴煙はこれだなと思つた。そして遙かに源流の方を顧みたが、もう山岳重疊して何處をそれと見分けがつかなかつた。

霞の樣な釣橋を渡つて、對岸の温泉場へ着いたのは午後二時三十分、取敢ず數日間待ちこがれて居た浴槽へ入つて、徐ろに今日一日の旅行を回想した、非常に愉快だつたが、又非常に苦しかつた、何だか二三日の分を一度に歩いた樣な心地がした。

● ● ● ● ●

山岳第五年第一號、吉澤氏の大蓮華登山録にある略圖參省。但し同圖中、清水平（鹽頭平）續きの尾根から祖母谷への降路に當る谿流に、左より（略圖にて）出合ふものが祖母谷川の本流で、それより下流で左から落合ふ谿流は。同一支流。此間に小舍があつて、この落合からセトを形成して居る。それから下流に當つて左より會する長流は硫黄澤で、源を鑓ヶ岳、朝日岳に發する、朝日岳は白馬山と杓子岳を結ぶ國境の線から、少し越中に寄つた處に聳えてゐるもので、鹽頭の頭、或は裏蓮華と呼んで居る。祖母谷温泉の裏で右から出合ふ大きな澤が、祖父谷川で、不歸岳、唐松岳等から發源する、その南の長き尾根が餓鬼岳の尾根で、この尾根の南側に大黒鑛山道が通じて居る。

私が安全に、且比較的迅速に祖母谷温泉へ降ることが出來たのは、全く高野氏一行が前回困苦せられた賚であるから、謹んで同氏一行の人々に厚く感謝する。

私たちが信州から大蓮華を越えて、祖母谷へ來たと云ふことを聞いて、湯宿に居た越中人が、案内者の室へ押かけて、話をして聞かせろと云ふて承知しなかつたのには、廣太郎も驚いたと云ふ。翌朝温泉を發つて大黒鑛山の道へ行くときも、皆出口まで來て、怪訝な顔をして一行を見送つて居た。

秋十月頃、富山から愛本へ出て、黒部川へ沿ふて黒薙、鐘釣の温泉から、祖母谷へ來て見ると。谿山紅葉の景色は實に美しいさうだ、「秋おいでになれば方々よい處を御案内する」。と獵師仁次郎がしきりに來遊を勸めてた、冬は温泉宿は皆引拂つて、仁次郎が獵をしながら留守番をして居ると云ふ、熊や羚羊や猿はこの谷で大分獲れるさうだ、仁次郎は小黒部の谷を溯つて、劍へ確に登れると云ふて居た。

祖母谷温泉は祖父谷川と祖母谷川との落合の、直ぐ下の平地に建てられてある、湯は少し熱すぎるが、無盡藏で清爽なる客室は祖母谷川の清瀬に望んで、湯宿の四面は滴たる如き翠巒にかこまれて居る。山中としては食物は中々上等だし、登山家を非常に優遇するから、三四日ぐらい滞在しても、決して失望する樣な處

ではない、信州北安曇のまづい飯や味噌の半煮に、數日を暮して居た私は、越中の米や味噌や蟹の鑵詰の美味に舌打した。

蛇足だが、これも祖母谷道の一つだから、序に祖母谷温泉から大黒鑛山を經て四ッ屋へ出る、道筋の概略を少しばかり書き加へる。

温泉の脊後の道を四五町登ると祖父谷川の一支流に出遭ふ、この澤を水と逆行してあえぎあえぎ二時間程上ると、澤は漸く水が細り、遂に栂の欝葱とした餓鬼岳の尾根續きに出る、その尾根について澤を後ろにして、斜右へ迂回して行くこと數丁で、立派な路が兩側の堤の様になつてる林の間を通じて居る、こゝで道を捨てゝ、向つて右の榛莽をかき分けて、二三丁程行くと餓鬼の平と云ふ一名所がある、可なり廣い處で、池が二つ程あり、平を一面にかやの如きものがはびこつて、周圍の森林が如何にも美くしい。杣人の小舍が一つあるから、中食をするには上等だが、生憎近所に水がない様だ。曇てつ居た爲とんと分らなかつたが、眺望は中々佳いさうで、立山から後立山脈の高岳が、この平を圍繞している森林の間から、續々と見えると云ふ、一遊の價値はあると思ふ、又元來た道へ戻つて、續行すると、これから大黒鑛山迄は、餓鬼岳の中腹を通して立派な鑛山道がついてゐる、その路の下に大黒澤五龍澤の下流にあたる深谿が、遙に音をたてゝ流れて行く、南望すると亂雲の間には、右から岩小屋澤岳、赤澤岳、鳴澤岳、針木岳、一段奥に赤牛岳、それから立山連峰と云ふ順に、大岳の眺望を恣にすることが出來る、朝八時に温泉を出發すれば、餓鬼の平で晝食を濟せ、午後四時頃には樂に鑛山の飯場へ到達する、大黒鑛山には大きな飯場が建てられて、爐が幾つも切つてあるから、安樂に宿泊することが出來る。

飯場から一二丁の西の丘へ登ると、唐松岳、牛首岳、大黒岳、五龍岳が手にとる様に見える、西南の方黒部の深谷を隔て、挺聳してゐる劍ヶ岳は、殊にその夕陽を負ふた時、恰も大鋸を横たえたようで、惡魔の如きその形相は、寧ろ凄慘の感を與へる、私は飯場へ二泊した、其間、暇さへあればこの丘へ登つて立山連峯を眺めては喜んで居た。

鶯や駒鳥や山鳩なぞが朝早くから四方の山裾で囀つて谷川の音さはやかに聞こえる、この鑛山飯場が温泉であつたなら、嘸よいことだらうとつくづくそう思つた。

五龍岳、唐松岳、大黒岳は頂上迄なら三時間もあれば達せられる。鑛山から北城の四ッ屋へ出るのには、大黒越をして平川を降るか、唐松岳を越えて八方岳の尾根を行くかの二つだが、鑛山の休みのときは人通りがないから、大黒越はその雪溪が危險で、且八方尾根に比してあまり趣味がないと云ふことだ、飯場から唐松岳の頂上までは三時間だが、八方の尾根は非常に長いから七時間もかゝつた、この尾根は、前には四ヶ城平を俯瞰し、南に後立山脈、北には白馬連峰を縱觀して、眺望は實に壯大絶美を極めてるのみならず、山草も可なり豊裕な處で。高根菫々菜や、蟲取菫々菜が繁殖して、雪割小櫻なぞは叢を爲して所々に集團してゐる、八方池と云ふ大きな池の外、小さな美くしい池や沮洳地が所々にある、比較的低い尾根としては、その尾根の美觀、及寰繞の展望は確に第一位を占むべき處だと思つた。

朝七時に飯場を出發すれば、唐松岳の頂上で十時頃、それから八方岳を極めてその尾根を降つて四ッ屋へ、午後四時過には着けると思ふ。

上野を夜行で發てば、明科えは翌日（第一日）の朝九時頃に着く、それから馬車で飛ばせば、其日の内に四ッ屋へ着くことが出來る。四ッ屋の山木旅舘で一泊して、翌日（第二日）白馬の頂上へ宿り、第三日には杓子岳。槍(原文ママ)ヶ岳、朝日岳を極めて鹽頭平に一泊して、第四日は祖母谷を下つて温泉に宿り、もし滯在しないとすれば、第五日には祖父谷川を溯り大黒鑛山へ宿り、第六日は五龍岳等を極めて鑛山に滯在し。第七日に唐松岳、八方岳を越えて山木へ歸る。たかだか十日も費せば、隨分愉快な旅行が出來ることだと思ふ。

4　河東秉五郎　「白馬山登攀記」『日本の山水』

1915（大正 4）年 7 月 25 日刊　紫鳳閣発行

要　約

1913（大正 2）年 7 月下旬の記録。

メンバーは、河東碧梧桐、その他 4 名、西尾長太郎（案内人）、ポーター2 名。

行程は、猫又谷遡行～猫又山～清水平～白馬岳～白馬尻～北城村。

※猫又谷から清水平に達した初記録。

※河東碧梧桐（本名＝秉五郎）は正岡子規門下の俳人。

大正二年七月末日、黒部川の峡谷を溯つて後、宿志の登山を果した。越中方面から登つたのであるから、大蓮華登攀記といふべきであるが、嘗て白馬山塊として、其一群の峯巒を敍したこともあるので、こゝにも信州名を襲ぐことにした。

其一

我等一行の案内者に選定した西尾長太郎が、始めて我等一行を迎へた時、「旦那方‥‥ 探検に行きやッしやるさうで」と、探検の二語に力を入れて最初の挨拶をした。黒薙温泉主人に野営用の天幕なり油紙なりを用意して、登山者に賃貸をせぬか、と相談した時、温泉主人の答へは「探検に登られるお方は年にお一人かお二人あるか無しですから」といふのであつた。案内者の詞は單に當世風なことをいふものと思ひ、温泉主人の話は、其不用意を辯解するものとのみ聞流してゐたのであつたが、黒部――越中――方面よりする白馬登山の寒心すべき危險は、既にそれらの簡單な話頭にも含まれてをるのであつた。眞に單純な登山でなくて、多少の危難を犯す探検なのだ。越中方面よりする探検者は、無事を欲せぬ物好きに限られてをつて、寧ろ其隻影をも止めずといふべきであつたのだ。

固と越中方面の登山路としては、單だ僅に二條あるのみである。其一は黒薙・二見の二温泉を經由して、柳又谷を溯るもの、他は祖母谷温泉を起點として、其深谷を攀ぢるものである。この二條の道は、白馬以西約二里許の處、俗に清水平に合する。柳又よりしても、亦た祖母谷よりしても、必ず一泊の野營を否むことは出來ぬ。清水平は其野營地として聞えてをるのである。ショウヅは北陸語のシミヅで、現に山中――加賀――温泉の俗謠にも「桂シヨウヅは昔のことよ」などある。山頂近い所謂オネに、幾分の平地と、雪解の水の絶えざる流れとがある。若しこの方面に石室又は小屋を營むとすれば、天賦の恩惠に滿ちた山中のオーシスである。清水平からは、斷續する數峯のオネ傳ひに、比較的平易の道を辿つて、やがて白馬の頂上に達し、其日信州北城村に下ることを得るのである。越中方面の登攀路が幾分危難を伴ふとすれば、そは清水平に達するまでの澤傳ひで、柳又道は黒薙川の上流、祖母谷道は祖母谷川に沿ふ行程一日の距離であるが、昨年の大出水は、この峽谷の本支流となく、到る處猛威を逞しうして慘害殆んど未曾有であつた。中にも祖母谷と柳又とは、最も其被害の甚しいもので、小林區署の開鑿に關る林道さへ、其の大半を奪はれた。たゞさへ危險の稱ある白馬登山の二大幹線は、一時殆んど交通をさへ絶つたのである。爾來力を修繕に盡したとは言へ、其難路たる意味には幾許の增減をも見てゐない。我等一行の會見した一小林區署員は殊に祖母谷道の破壞の甚しい狀態を説いて、「まるで違つた澤になりました、山ヌケがする、谷が埋まる‥‥‥‥ なかなかエライですよ」といふのであつた。

こゝに柳又と祖母谷の中間に位する他の一溪谷がある。從來人の入ることの出來ぬとされてゐた難中の難峽であつたが、昨年新たに約四千間の林道を開いた。白馬登山二大幹線の通路を、假りに半圓周

をなすものとすれば、其溪谷は即ち其半直徑に當る。蓋し路營地清水平に達する最短距離なのである。林道の盡きた後は、人跡未踏のヤブ又は澤を辿らねばならぬが、そはさまで遠距離ではない、或は早く其澤のアタマ——峯頭——に出で、祖母谷道か柳又道に合することを得るかも知れぬ。要するに、其ホド——林道のこと、或は歩道の誤りか——を經て白馬に達したものは、黒部に山のヌシは多くとも、未たゞの一人もない。前途を想像することも、憶測することも出來ぬ。白馬登山に一通路を開く元氣を鼓舞してはどうか、と其ホド開鑿に携はつた案内者の長太郎は、頻りに一行の好奇心を嗾るのであつた。谷の名を猫又谷といふ。

「探檢」の意味を餘りに現實にするといふよりも、猫又谷に於ける林道延長の地利蹈査的計畫書は、かくて一行の盲判を押すことゝなつた。若し不幸にして今一日——それも僅に十五六時間内外——遲れてゐたとすれば、雲霧は深く峯頭溪谷を擁塞して、それに伴なふ疾風を驅り、一行は其露營地をさへ得るに苦しむのみならず、行き歸るべき道をも失して、或は無事下山すら出來得なかつたかも知れぬ一大慘禍を含む、眞に寒心に堪へぬ無謀の暴擧に參加した。我等が北城村で一行の無事を祝した其夜より、密雲次第に垂れて、殆んど二三の星光を雲間に望むのみであつた。翌朝は時に晴れて又た時に雨降る。我等が馬車を驅つて大町に入らんとする前、嶽颪の冷やかな西北風は颯然として稻の葉末に落ちた。顧みれば、日本アルプスの連嶺に凝集する雲の動きは、名詮自稱白馬の鬣を揮ふが如くであつた。猫又谷の越中方面の地理は兎も角、清水平より以東、白馬の頂上に達するまでのオネ傳ひに、屢〻道を失して其の方向をさへ誤つた覺束ない案内者を先導として、二十歩以外を見透かすことの出來ぬ雲中に彷徨したとすれば、定住する處は、たゞ迷ふの一途あるのみだ。一行八人——同人五人人夫三人——の食料として露營後に殘留したものは僅かに二升三四合の米のみであつたことに想到すれば、僅かに十五六時間の危い瀬戸際を潜つたことを、誰に天祐と思はぬであらうか。九死に一生を拾ひ得たというても、さまで誇張の言ではないのである。

其二

猫又谷には「三田泣かせ」といふ名所があるとは、長太郎が屢〻口にした所であつた。黒薙溫泉の「猿が馬場」、柳又道の「猫の踊場」などに對する妖怪趣味を帶びた名所かとも思うてゐたのであつたが、それは小林區署員の三田某が、以前この谷の蹈査に上つた時、行くことも戻ることも出來ないで、子供のやうにシクゝ泣いてゐたのを、先導した人夫が見出したといふ滑稽談であつた。ホドの鑿けない以前の難路たる押して知るべきである。林道は澤の右岸に沿うて入り、次いで約二十町九十九折の急勾配を攀ぢて、一峯腰に出る。溪谷の岩石を避くる爲めには、已むを得ずかやうな迂廻路を取らねばならぬ。たゞ三田泣かせの如き名所を親しく弔ふことの出來ぬのを遺憾とするのである。其峯腰から指示する猫又谷の全景は、長太郎の説明によつて、略ぼ今後の行くべき方向を定め得る。前面に杉檜類の鬱蒼とした峯頭の著しく尖つた山がある。其尖頭の暗綠色な森に對して、少しく下に青苔を展べた如き平らが見える。長太郎は其青苔を「草ヅキ」といふ。ホドはあの草ヅキに盡きてをるとのことだ。自然其草ヅキから、雜木の見える山の肩邊を渡つて、其向ふに丸く蟠まる濶葉樹の山に取り付かねばならぬ。さすれば、其奥に立つ猫又谷のアタマのまだ消え殘る雪の邊に出ることは、さまで難儀な業ではないといふのだ。あのアタマにさへ立てば、右して祖母谷道に合せうとも、左して柳又道に續かうとも、清水平は最早掌中の物だともいふ。前景に立つ針葉樹の鋭峯は固より、中景の濶葉樹の鈍峯、それらを壓して後景に控ふる、恐らく日本アルプスの餘勢を保つ猫又谷のアタマさへ、殆んど呼べば應へんとする距離に立のを見て、既に一呼吸の元氣を揮うて、猫又谷開きの榮譽を贏ち得べしとさへ勇む者もある。たゞ難色を呈して「どうかの一」と口を噤んだのは、主な荷物を背負つた二人の人夫のみであつた。

林道は次第に谷に下りる。眞の薪雜棒を二三尺置きにつないで、僅に足の蹈み場にした針金の弔り橋を二つ渡つた。昔の藤蔓の吊り橋と、危險の程度には何の相違もないなど語つたのは、まだ前途の困難

を想像することの出來ぬ、元氣の横溢する時であつた。谷を 溯 るに 随 うて、ホドは次第に跡を絶つ。背丈に餘る雜草は行手を覆うて茂る。今一つ最後に渡るべき吊り橋が、たゞ針金の殘骸を止めて流失してをるのを見た時、「段々エローなるぞ」と人夫の一人は警告的の獨語を吐いた。が、間もなく目的の草ヅキに著いて、銘々腰にして來た結飯の半ばを開いた時は、恐らく雪線以上の高峯に立つて、脚下に起伏する千山萬岳や、一望際涯を知らぬ海つゞきの平野を瞰下するやうな快味を、誰しも空想に描いてをつたであらう。既に其附近に布いてをる殘雪の上ハ煤を拂ひながら、ひたすら雪を咬むに餘念のない者もあつた。

「サア皆の衆氣をつけろッ」と鉈を抜いて手近い石楠木を切り拂ひ始めた長太郎か叫んだ。さうして殆んど直立した懸崖の雜木の間に、さも猿の如く潜り入つた。立木に縋るといふよりも、それに身を釣つて密林を行く身輕な早業は、最初の中こそ多少の好奇心をも使嗾し得れ、何處までこの輕業を續くべきか、果もない林を望見しては、多少不安の念も誘致して來る。長太郎は絶えず前後に氣を配つて、「枯木につかまるな」「石を落すな」「もつと上ハ場を行け、イヤ下タ場を來い」とあらん限りの悲壯な聲を絞る。後れた者等は、又た遙かの後ろで、何事か救ひを求めるやうな叫びを發する。ヒーと鳴くといふ鹿の聲にも似て、寧ろ悲鳴を上ぐるものとしか思はれぬ。この山の樹靈石魂も、恐らく始めてかゝる悲鳴に長夜の夢を覺まされたであらう。それとも、これら憐むべき者共に幾分の慈悲を垂れたのかも知れぬ。約七八町の難場を漕ぎ過ぎた時、獸類の渡り筋か、又は獵夫の蹈み馴れた徑か、無形の手がこの方向に進めと誘ふものゝやうに、密林の僅に開くさも道らしいものに逢著した。兎に角目的はこの難場を逃れて、水の流るゝ猫又の本澤に出るにある。重圍を脱する一條の血路がこゝに開けたものとして、脱兎の如く其細徑を下ると、易々として殘雪の隧道をなす目的の澤に下り著くことを得た。山に馴れぬ人々の中には、この血路に逢著しないで、あらぬ方向に迷ひ入つた者もあつたが、兎に角無事な影を雪面に印して、先づ第一の萬歳の聲を揚げた。が、中には手に持つ物の煩しさに堪へないで、金剛杖を捨てた者もある。著て來た檜笠さへ打棄てようとした者もあつたといふ。

磊磈とした石を蹈んで、右に左に幾度か溪流を徒渉しつゝ行くのは、一言「エライ」といふのに盡きてをるけれども、ヤブ潜りの難行の後では、却て變化のある興味を呼ぶものであつた。かくして若し最初に指示した濶葉樹林の鈍平な一峯にとりつくことを得たならば、この開道的蹈破は、眞に一擧手一投足の勞に過ぎなかつた。

行くこと約十餘町、左右の岩層が屏風の如く聳えて、それに丈餘の飛瀑を現ずるに至つて、澤傳ひはハタと自然の門扉に閉されたことになつた。左右何れなりとも、此門扉を通過し得る道はと、種々に蹈み試みたのであつたが赭面黑貌の巨人は頑として其手を緩めぬ、又た其口を開かぬ。已むなく左岸の岩石の上に存する草ヅキを志して、再びヤブ潜りの難行を經營せねばならぬ。其偉大なる自然の威力に對する、人間の痩腕はかゝる時殊に其貧弱さを露出する。其薄ペラさが赤裸々になる。四方の岩石が手を打つて其貧弱さを嘲み笑ふとも知らず、何れ流汗淋漓氣息奄々として、渾身の力をこゝに傾けぬ者はない。辛うじて上に下に道を失しつゝ、瀧上の澤に這ひ著いた時は、いつまでかゝる拷問の試驗臺とせらるゝのであらうかとの、羅馬の囚人の如き悲觀は、他事に空虚な一行の脳裏を充塡した。然も到達すべき猫又のアタマは、尚ほ何れの方向にあるか、前途は依然暗澹として、些の光明を齎らすものもないのである。

其三

「さつきの草の臥てゐた鹽梅は、どうしても人の休んだ跡だ」「人が休んだか、熊が臥てゐたかわかるもんでねえ」「熊といやア、これから奥の岩かげに、晝寢してるだア、丁度雪の解ける時分だに‥」など多少の閑話の挿入されるやうになつたのは、瀧に出會うた時は又た其時と、悲觀的決心の黙契によつて、石のごろごろした澤傳ひを蹈み始めた後、其澤が幾分づゝ擴まつていつて、可なり上へまで見通され

る處に、もう瀧などは出て來ない、といふ見當のついた心の落著きを得たからだ。が。段々頂上近くなるので、勾配は次第に急になる。ゴロゴロした石が大きくもなり、亂雜にもなる。澤傳ひというても、右左りに石の上を飛び渡つて行けるやうな手輕な處ではない。兩手をかけて縋りつかねばならぬ立つた岩もある。股まで浸つて石の苔にすべらぬやう恐るゝ渡らねばならぬ水もある。手がゝりのない大石、飛び越えねばならぬ淵、渾身の勇を籠めた、命ちを賭する一跳一蹶も幾度であつたらうか。一行は自然散り散りバラバラになつて、下を瞰下ろしても、上を仰いでも、たゞ縱橫に起伏した岩石ばかりが眼界を塞いで、後れた人々も、先きに立つやからも、何處をどう行きつゝあるものか、更に笠一つも目に入らない。自分ながら、かゝる岩石の間によく道を得たものだ、と今更ながら吐息をつく。自然の設けたこの障害物競走には、今後どんな禍機が包藏されてをるかとも心から嗟歎せざるを得ない。が、今はまだ最後の勇を揮ふ時機ではない。時計を見ると、午後三時過ぎだ。却つて餘裕を作らねばならぬと、少しの砂場を見つけて腰をしてをると、いつの間にか一行が同じ處に集つて來る。さうして多くは、いきなり横になつて口もきかずに寢てしまふ。前途の見込や、熊の話などに身を入れる長太郎に相槌を打つのは、マアマア我輩の役目なのだ。休む毎に話が腰折れになつたり、前回の讀み續きになつたりする。かやうな谷に吹き溜つた雪は、今時分が消え盛りで、両方の崖は日に日に雪の壓もしから脱れて行く。其土や泥づきの處には、待ち構えてゐた草が見る間に芽生する。山はこんなに青葉の夏盛りだが、雪の消え際はまだホンの春先きで、拇指大の芽や、赤ン坊の掌見たやうな若い葉が、まだ瑞々してをる。其草の芽生を食ひに來るのが、熊や青猪（羚羊）なのだ。けふのやうに天氣のよい日は、芽を食つて腹の太つた奴が、ついうとうと晝寢するものだ。岩の飛び飛びに立つてをるやうな處は、十分氣をつけて行かぬと、出合ひがしらに熊とブツかることがないとは言へぬ。獵師が今頃熊を撃つのは、さういふ場所をつけ込むのでも知れてをる。まアこれだけの人數で往きやア、大抵の熊なら晝寢も覺めるだらうが……と長太郎の話は、我等に耳新らしい。馬鹿なケダモノといふのは、恐らく青猪であらう。人間を見かけても、可なり離れてをれば、すぐ逃げようとはせぬ。一人が手拭でも振つて踊つて見せると、三時間でも五時間でもたゞ黙つて見てをる。獵師は其間に脇へ廻つて樂々と撃つのだ。馬鹿なケダモノもあるもんで、と自分に手拭を振りつゝ、踊の身振りをして見せる。意外な笑ひ話は時に一行の心氣轉換にも效がある。

翌日露營地を出發して、左方の丈なす草の間を一峯頭に攀ぢ、それより姑らく峯傳ひをしてをつた時、遲れた人夫が、後ろから「シゝだシゝだ」と叫ぶ。見ると其峯から深い谷に落ちてをる尾の木の間に、一頭の羚羊が全身を現はして立つてをる。我等を距る約三十間許りに過ぎない。一行は長太郎の話を想ひ出して、ハンケチを振り、帽子を振り、手拭を振つて見せた。羚羊はいつまでも逃げ去らない。長太郎が「青ジゝにかまつてちやア日が暮れるに」とつぶやくまで、お互ひに其珍客を觀迎した。

仰ぐ許りに突立つてをる左右の山の中でも、右手の方は鬱蒼とした濶葉樹林で、多くは天然の山毛欅類だ。曩に麓から仰いだ鈍平な濶葉樹帶は、この山だとワシヤ思ふと長太郎がいふ。それにしては鞍形をした猫又のアタマは、最早程近く立たねばならぬが、さる峯頭は何處にも見出されぬ。山は大きいものだ、とは今日まで幾度か諸方で聞かされた案内者の口吻だ。それに馴れて、より以上に大きく想像してゐる我輩は、よい加減な氣休めを言ふものだ、と尚ほ今一度位は、ヤブ潛りの拷問を餘儀なくされるらしく、竊かに豫期してゐたのだ。左手の山は、この黒部の峽谷から伐り出される第一の要材たるニヅコを始め、檜拇類の針葉樹帶が、次第に稀疎になつて處々大きな澤が落ちる、でなければ長太郎の所謂草ヅキの平らが見える。ヤブ潛りの拷問を期待してをる我輩は、其澤や草ヅキを仰ぐ毎に、さも沙漠のオーシスが、慈しみを以て我等を待ち設ける自然の母の懐ろでないかと、羨望の目を以て打ち仰がぬ事はない。其度毎長太郎は地理を説いて、こゝでオネに取りつく位なら、柳又の谷を上つたのと同じことになる、猫又の道開きに來た效がないといふ。一歩この猫又谷に蹈み入つた最初の運命は、是が非でも、其の運命から逃避することを許さないのだ。この谷の頂上附近、柳又道に合するあたりに「猫の踊り

場」といふ平ラがあるさうだ。往昔怪猫の栖んだ遊び場所とでもいふのであらう。我等は其猫に魅入られて、この谷の本線を眞向に切り抜ける外、この運命の開拓法は見つからないのだ。次第に腹は減る。次第に足は重い。たゞ時々渡らでもよい雪解の水のザヽ流れに蹈み入つては、過度の運動に熱した肉や骨を醒して、我から爽快な心持を味ふ位のものだ。行く手に殊に聳立する大岩石の立つのが見える。其物蔭に一點の黒影がある。さも人の蹲まるものかとも怪まれる。「人でなエか、盗みに來てるかも知ンなエ」とつぶやいた長太郎が、更に詞を足して、此方が山林の役人でもあるかと思つて、逃げてしまはなければよいがといふ。前途の見込の立たぬ不安な心は、この長太郎の詞にも明らかに讀める。單に人を戀しがるのではない。さる盗伐の山通を得て、早く今後の方針を確定したいのだ。人がをるといふ噂さに好奇心を嗾られた一行が、次第に近づくに随うて、それがたゞ一塊の石であつたことを慥めると同時に、却て失望の歎聲を洩らすよりも、さる石をも人と錯覺する程に氣のあせつてゐる長太郎を憐むべきだ。

程なく廣く谷を埋めた殘雪帶になつた。今までの殘雪は、谷に殘つたといふよりも、山からずり落ちた雪塊に過ぎなかつた。切れゞな島のやうなものだつた。が、これからの殘雪は、眞に谷に吹き溜つた、處によれば絶えて消えることのない萬年雪なのだ。平坦な陸地つゞきの土臺なのだ。今までの雪は、長太郎が「腐つてる」と言うた如く、蹈むに危險なものだつた。が、これからの雪は「カンカンしてる」雪石なのだ。我等は崔嵬たる岩石の間を左折右曲するよりも、先づ足に滑らかな雪上を行く、苦樂の劇變に、覺えず觀聲を揚げたのであつたが、先達の長太郎にも、遂に隠くすことの出來ぬ欣びの情が眉宇の間に動いた。見ると左手の山は其頂きが既に手にとる如く近づいてをる。綠の草ゾキも鮮やかに見える。二三の瘤に似た突起のほとりには、頂上らしい燒土の赤みを帶びた場處も點綴する。「ワシヤやつと見當がついた、その瘤が猫の踊り場に違ひなエ……すると、この谷を右にとつて行きやア……もうこつちのものですぞ」

前途の見込がつくまでと、それまで祕藏してゐた辯當を雪上に開いた時、始めて一行の何人も、我輩の如く食事を重んじてゐた者のなかつたことを發見した。辯當は曩きに食ひ殘した結飯二つに過ぎなかつたが、其一つを靜岐君と長太郎が殘してゐたのみだ。他は人夫の二人まで、いつの間にか平げてゐた。空腹の絶頂に、前途の安心を得た強度の食慾は、この際食ふ物を持たぬ人々に懸念する餘裕を持たなかつた。登山者の常套語たる「鹽ムスビの甘さ」を繰り返さなければならぬ程、我輩は餓鬼になつてゐた。が、既にこつちのものになつたこの冒險も、尚ほ雪上を歩むガンジキ又は鳶口を必要とするやうな雪石の懸崖を登らねばならなかつた。一歩を誤れば、雪の上を毬と轉ぶ危險は、歩々に積つて往つた。其雪崖の危險を避けて、頂上近い堰松帶に入つた時は、眞に猿鹿の類ひも入り得ぬ、獰猛なヤブ潜りであつた。言はば最後の勇氣を揮ふ時期に到達して、更に其勇を試む幾多の障害物があつたのだ。殊に一旦猫又のアタマに攀ぢて、白馬山塊の峯々の夕暮の物凄い光景に接し、清水平ラの露營地に尚ほ進まうとする元氣を鼓舞した時、人夫の一人が防寒具を収めた信玄袋を遺失した、それを拾ひに下らねばならぬといふ報告を齎らしたので、已むなく其アタマを下つて、名も知らぬ處に露營地を求めねばならぬ事になつた時、其僅かな頂上までの雪上を昇降する無駄足は、たゞさへ頂上の可憐な櫻草の咲き亂れた蓐の中に、人事不省の如く倒れてゐた一行の元氣を沮喪し盡した。そが中に尚ほ幾分の餘裕を存して、一行の督勵に任じ得た我輩は、この祕藏の結飯に對する感謝を廣言しても差支ないのであつた。せめて椿川君の齎らした氷砂糖を、我輩の專らにする食慾の滿足を頒つ爲めに、皆に配つた。

其四

人夫の二人が米を量つてをるのを見た間もなく、右手に下りた谷水の側で、早や火を焚き始めた。手ごろの石で竈を築いて、それに鍋を掛けたのが眞に一瞬の間だつた。いつ枯木を拾ひ集めたんかも知らぬ。四方の暗澹とした色彩の中に、鮮明な赤い火を見るのは先づ何より快い。始めての露營の經驗に伴

なふ危惧の念を壓する希望の光に滿ちてをる。長太郎は「腹が減つて、鉈も思ふやうに使へなエ」と言ひつゝ附近の何といふ木か、堰松とは別な集團を作つた濶葉の生マ木を伐る。それを露營地へ一本々々運ぶのは我輩だ。日の暮れるまでは、北日本海もそれと見えて、雲か佐渡かと疑はれるやうな糢糊とした一抹の黒影も出沒してゐた西の空が、次第に翼を擴げる雲翳で覆はれて來る。夕映の殘紅の片影をも遺さず黒暗々たるものになつて行く。「明日の天氣は」と聞くまでもなく、山馴れた者だけ我輩以上に神經過敏な彼は、既に其雲行きを氣にしてゐたのだ。不圖氣づくと、我等の頭上に大きな幕を引いた雲が覆ひかぶさつてをる。それが次第に西へ西へと伸びて行く。今まで煌めいてゐた星の影も、次第に塗抹されてしまふ。「明日雨か風になつたら……」我輩は水を浴びた如く慄然としてこの一語を發したのみだ。が、彼には其意味は既に解釋されてゐた。「折角こゝまで來たのだがのウ……」と、已むなく祖母谷溫泉―曩にこの頂上に上つた時、脚下の深谷に、其地獄溫泉の白氣の立つのが見えてゐた―にでも引返す外はないとの覺悟をほのめかす。さうしてドシドシ鉈を振ふ。伐る木は大方五六尺以上に達する。枝の貧しいのと反比例に、幹はいづれも握り太なもの許りだ。雪に押されて曲りくねつた幹でも、雨覆ひにする柱の心づもりは、彼と我輩の間に以心傳心であつた。

この恐怖の襲撃を二人の間に包藏して、やがて、食事の舞臺となつた。眞に往きつきバツタリの不用意千萬の露營にも、飯を盛る皿と、味噌汁を入れる椀とがあつた。飢に疲れた人々には、獵燭の明りの届かぬ暗中に、ほの白く見える飯の色と、焚き立ての汁の匂ひとが、どれ程の慰安になつたであらうか、雪水で焚く飯の味に經驗のある我輩は、先づ其箸あたりに餘り快よからぬ連想が浮ぶ。さうして先程から眉間の通りに睨みくらをしてゐた、西の空の雲のたゝずまひが念頭を去らぬ。「オイ飯！」、「オイ汁！」、と四人のお給仕に忙殺されてをる人夫とも沒交渉に、明日の課程を彼れ是れと案じてゐた。固とこの露營地は、この猫又のアタマを極める途中に見て置いた、陸地測量部員か、熊狩の獵師かゞ、何時とは計り難いけれども、一度は露營したらしい痕跡の殘つてゐた場處であつた。前後左右山のアタマに取り圍まれてをつて、第一に雪線以上の風防ぎになつてをる。それに第二の要件として水が近い。のみならず、堰松の跡を絶つた、土の露はな平地が凡そ四五疊も敷ける、已むを得ない露營地としては、地の利を占めてゐたのであつた。で、眞中に枯木を積み、其上に生木を覆うて焚火をし始めても、其火のぐるりに、八人の一行が曲りなりにも寢ることが出來るのだ。人夫が食事を終る頃までには、何れも毛布や外套を被つて、人の事などはカマつてをれぬ、銘々の寢るだけの巢を作つた。もう四方は夜の巨手に包まれて、氣になる眸界の雲さへ、暗扉の外に締め出された。「旦那、もうワシ等も草臥れた、屋根作らんでも大丈夫ですぞ、あれ星が……」と長太郎の聲がする。「天氣は大丈夫だに」と他の人夫が口を添へる。成程、今まで頭上を覆うてゐた雲の影は何處かに吹き拂はれた。あれが北斗七星だと、そこらを探し廻るまでもなく、鍵の手の曲りがそれと直覺される程明晃々と見える。此上人夫を逐ひ使ふもの餘り心ない業だ。夜露で濡れる位は我慢せなければならぬ、と予も空氣枕を地ベタに据ゑて、一枚の茣蓙を敷いた上へ、二枚がけの毛布を兎毛君と引張り合つて横になつた。天氣は大丈夫だといふ心中の悦喜は、今まで案じてゐた明日の課程を、忘れるともなく全部放擲して、たゞ疲勞の殘つた我になつた。姑らく仰のいて、ぢーと星を見詰める。天の川の薄く切れ切れに流れてゐたのは、仰のき具合か丁度予の目には映らぬ。左眼の眥の方向に、一つ際立つて大きな星がある。それをぢーと見詰めるのだ。星の瞬きとは言ふが、かやうに光の動くものとは、今まで殆んど知らずに居た。自分のイルージヨンかとも怪しんだが、一刹那も、じつと光を据ゑてをることはない。星が裏表と、團扇でも素早く翻へすやうに動くかとも疑はれる。太陽系の規定の運動につれて動くものとのみ思うてゐた星にも、星それ自身の他の運動があるのだ。星の運動といふよりも、寧ろ光の動搖といふ方が適切かも知れぬと思ふ。一體人間の肉眼で見得る距離以外にある、星辰の他轉自轉は、言はゞ何の運動もないのと同じ事なのだ。即ち靜止なのだ。其靜止の星にも、光の動搖だけは存するのだ。そこに何物か無形の大きな力が働かねばならぬ。宇宙の大きな動的氣分は、かゝる處に却つて歴然たるものがある。と何か深い哲理にでもブツかつたやうな氣分で、我を忘れてうつとり

してゐた。氣がつくと、自分の眼も星にかぶれたのか、頻りに瞬きをしてゐるのだ。自分にもをかしい程睫が動くのだ。倏忽として星の光が見えなくなる。雲が來たのだと思ふ。次第に星のかくされて行く跡を追うて見て行くと、雲の動きは相應に早い、一時全く空を覆うてしまうたかと思ふ其後ろから、又た次第に晴れて來る。一陣の風が面を拂つて過ぎる。天氣は大丈夫か知らぬ、といふ疑惑が又た頭をもたげたり、すこめたりしてをる間にも、大きな暗やみのかたまりが、大地と共に我を奪うて行くやうな氣もする。膝から下の兩脚をモギ捨てるやうな夢から覺めた時、星を見詰めてをると思うてゐたのが、いつか我知らずウトウトしたことを知つた。人夫等もそれぞれに巢を作つたのか、ゴソリと動く音もせぬ。左手の山の濶葉樹林を搖する風の音が、遠雷の過ぐるやうな微かな響きを傳へるのみだ。星は依然として同じ處にきらめいてをる。不圖、けふ途中で長太郎の話した、觀音山といふか、黑部の峽谷に立つ、立山連山の裾の一峯で、身體を自分で生埋めにした男のことを思ひ出した。平生人の上らない山なので、そこで人知れず死なうとしたのは、人目に觸れ易い華嚴瀑に飛び込むやうな俗氣のない處に詩的興味がある。さういへば、こゝに八人の壯夫が横つてをる。これが山中の毒氣か何かに觸れて、このまゝ骸を曝らすやうなことになつたらどうだ、死といふイヤな觀念を毛頭感ずることなしに死にたい、といふ理想が現實にされるわけではないか。死といふ觀念と戰うて、それに打ち勝つのが、人間の最後の戰ひで、又た最後の人格の露はれだ、と理窟はいふものゝ、どちらかと言へば、さる戰爭なしに死にたい、といふのが人間の欲望、又た弱點なのだ。實際この八千尺に達する人間界を離れた處で、大地が陷落して幾十丈の下へ、我等を突差の間に埋沒して仕舞ふとする。後から尋ねて來るものがあつても、何處でどうなつたか探しやうもないとする。たゞ知る者は彼の中天の星のみだ、といふのは少々月並臭いが、さういふ死に様は、愈ゝ以て理想的になるではないか。イヤそれはホンの空想に過ぎぬけれども、この汗みどろになつた身體が、頭と足と、胴と背とが押し合ふ様にゴツチヤになつてをつても、一向に熱苦しいとも、むさ苦しいとも感じない。これが一つ蚊帳にモグリ込んだのであれば、どの位惡臭と熱鬧に堪へないであらう。其惡臭と熱鬧は言はゞ人間持前の毒氣なのだ。人間を恐れる熊が三町先きから嗅ぎつけるといふ其人間臭なのだ。イヤな人間臭から脫却してをる、といふことだけでも露營の有難さではないか。テントや油紙を用意しなかつたのを、無謀の冒險とのみ思うてゐたのは誤つてゐた。かゝる上に吹き落ちた。何の加減かさやうな勝手な熱を吹くものだ、と何處からか警告を與へられるやうな氣がして、さうだ明日の天氣、イヤ今夜の天氣だ、と再び神經過敏な昔の我に返る。以前の星は、何處にか影を失うた。遠雷の風の音が、我を引き入れるやうに微妙な咽きを立てる。シーンとした靜かさが鼻柱を壓する。

其五

予の目覺めたのが午前三時前であつた。「オゝ寒ム」と鼻聲を鳴らしながら起きて來たのが、予の側の長太郎であつた。生マ木を焚く方法などを説明しながら、燃え殘つた焚火を吹く。さうして二言目には、けふの天氣を祝福する。それに雷同することなしに、其心中を酌むものは我輩より外にはなかつたのだ。我輩はゆふべの空想などは忘れてしまつて、「天佑々々」を繰り返した。仰ぐ空に、幾分の雲翳はあるが、それが却て賴もしい晴れなのだ。暗澹たる夜の色彩は、まだ全く拭ひ去られてはゐないが、悦喜と希望に充ちた我輩には、既に朝風の爽快さが身に沁みる。二度分の飯を焚かねばならぬ今朝の勤務を思うて、容赦もなく人夫の二人を搖り起す。さうして長太郎とは爐邊の夜話といふやうな氣で、何くれと語る、話題は右往左返してもつれた絲の端緒を探ぐるやうだ。

生木を焚くのは、先づ枯木を燃して、可なりの火を作つて後、其上へウンと壓しのかゝる程生木を積み上げるのだ。尤も三四尺に伐り縮めなければならぬ。こんなに積み上げてどうするのか、下の火を動かす度に、上の方は盛りこぼれるではないかといふ程の高さに積むのだ。さうでないと、生木は決して燃えぬ。それでも容易に燃えつかないが、又た一旦燃えついても、すぐ消えたがるのを、甘く鹽梅するのが、焚火の上手といふのだ。雪中の焚火は生木でないと暖まらぬ、といふやうなことは、東北旅行當

時に聞いてゐた。其高々と積み上げた生木が、一度び燃え盛つて來れば、眞に焔々烈々として、焚火としての盛んな味ひが始めてわかる。

露營地を出發したのは、八時に垂んとしてゐた。きのふは右股―略圖參照―の頂上に上つて、餘りに右に寄り過ぎてゐたといふので、けふ中股の草の間を志して進んだ。さすがに草の露は衣袂を霑して、新らしい草鞋をもしとしとにする。それにしても露營地が少しの高みであつたので、この露さへさまで厚くはなかつたことを喜んだ。經驗のない露營が、偶然にも合理的であつたといふことも亦た天佑の一つだ。

頂上にとりついてからは、もはや平易な坦道を行くやうで、登山の苦は總てきのふ一日で店卸ろしをしたものゝやうであつた。この邊には雪は殘つてゐない筈だ、雪の解け方が十五日も遲れてをる、といふ頂上の大殘雪を蹈むのも愉快であつた。遙に日本アルプスの連嶺を仰ぐ雄大な山岳觀は、かゝる大觀に始めて接する同行の諸君の血を湧かしめた。連嶺の覇王たる鎗ヶ嶽の劍尖きも見える。其背後に螺尾をつくねた、お馴染の穗高嶽も立つ。山嶽の大波濤は、澎湃として、歩々我に迫つて來る。長太郎は、手近かな餓鬼谷、東谷を始めて其アタマの大黒嶽を指示しつゝ、鹿島槍、後立山、針ノ木嶽と順次に説明して行く。空想に描くそれらの山塊が、峥嶸近づくべからざるものであるに引きかへて、現實の眼に映ずるものは、こゝから峯頭を一蹴して過ぎ得るものゝ如く思はれる。それらの景觀に幾分馴れた我輩も、愉快といふよりも、寧ろ痛快を叫びたい元氣が横溢する。殊に、白馬山特有として聞えた高山植物が、次第に其色を競ふやうになつては、脚下の美觀も亦た我等の心を嗾る。名を知つてをるのは、僅に菫と櫻草位のものだが、其他名も知らぬ百花は、紅・紫・白・黄・赭・褐等色のありたけを盡してをるのだ。下界のダリヤやカンナや、培うた藤、作つた菊の様なケバケバした上すべりのした色ではない。同じ赤さにも同じ黄色さにも、半歳の雪の洗禮を享けた清淨さが籠つてをる。深みがある。強みがある。氣高さがある。どうして等閑に見て過ぎられやう、歩みながら手に摘み溜めた異種の花が、瞬く間に二十餘種になつた。虎の尾に似て穗に立つのもある。百合に似て紫の濃いのもある。梅鉢草の花を大きくして、或る葉の臺から三又に咲く眞白なのがある。葉も花も白天鵞絨に似て、さも鳥の産毛の細工物に似たのがある。升麻に類する小米花がある。奈の花が單獨に咲くかとも疑はれる眞黄なのがある。色も様々なのに比例して、形も亦た様々だ。古風な壺の形をした中から雌蕊の針の突き出たのがある。昔の堂上人の穿いた淺沓の形を其まゝ逆さに咲くのもある。中にも春蘭燭を石楠木の紅で染めて、それを蓮の白さでボカしたとでもいふべき、マンドリンの形に咲く小さな花は、其葉の葱草のやうな細かなキザキザが薄い綠青に染まつて、それが粉を吹いてをるやうな色と相待つ美妙可憐さ、乾き荒んだ我が脣を忘れて口に喞みたくもある。やがて櫻草の一團が十坪にも餘廣さに舖きつめられてをる處に出る、我から身を投げて花中に埋まつてしまひたくも思ふ。これが果して我等の棲む地上の花であらうか。我等は果して白馬山といふ地圖上に明らかな土の塊まり蹈みつゝあるのであらうか。仰いでは雄心落々、伏しては緬懷切々、發作的昂奮はやがて悲痛の情をも伴なふのである。

高山植物は、信州方面には甚だ稀疎で、葱平ラの野生の葱をのぞいては、殆んど普通に見馴れたものゝ外、異草珍花を發見し難い。植物の採集を目的とする人は、越中方面の清水平ラまで進まねば、白馬山として效果を収め難いであらう。

かゝる痛快な興味は、餘り永續するものではなかつた。イヤ却てホンの一時的であつた。そは、先達の進む道が時にあらぬ方向の谷に下りたり、雪崩の爲めに足跡の失せた時など、其道を求めるに右往左往して、殆んど道に迷ふやうなことが餘りに度々起つたからだ。何處に行く？といふ疑問と危惧の念は、一時眺望を我等の眼から奪ふ雲霧の襲來の爲め一層強められた。さうして清水平ラの千紫萬紅の草原を過ぎて後は山のオネ傳ひが全く道のない、あるは石礫の懸崖、あるは堰松の横放する間、あるいは滑硬な殘雪の峻壁を行くので、又たきのふの辛辣な拷問を繰り返すかとも疑はれる。眼裏の眺望を奪はれ、脚下に再び異草珍花を見ぬとすれば、遺留するものは、數學的にもたゞ山中の危難のみだ。まして昨日の

疲勞は未だ全く癒えてをらぬ。靜岐君は一時腹具合が面白くないと蒼白を顏色をしていた。兎毛、椿川、愛松の三君も、始んど喪家の狗のごとく蠢々として生氣がない。露營地を出發した當時の一時のプラス的元氣は、今や全くマイナス的悲觀に變ぜざるを得なかつたのだ。我輩が「一體大蓮華はどこだ」と、長太郎の曖昧な方向指示を叱責したのも、また已むを得なかつたのだ。若し一時襲來した雲霧が、正午過ぐるまで晴るゝ遑がなかつたとすれば、我等はよし小蓮華—信州では朝日嶽といふ—のオネを傳うて、白馬の主峯との間に介在する平地に到著してをつたとしても、尚ほ白馬は何處？の疑惑から脫することは出來なかつたであらう。白馬の主峯！　寧ろ平凡に丸い、悠揚たる曲線美で築き上げられた其頂上は、我等の想像に描いてをつた、突兀雄峻なものとは、殆ど男性と女性の相違はあつたけれども、先達の長太郎には眼に熟した頂上の三角點が、何よりも慥かな其目標であつた。之を望見した時の彼の叫びは、隱蔽された目的物を新たに發見した如き痛烈さが籠つていた。「あれか！」と其目標を仰いだ我等の微笑も亦た悲痛な腹の底から滲み出るものであつた。白馬の頂上を既に我物として其裾の水のある地點に認めた、晝餉の味は眞に甘露であつた。やがて其頂上に苦もなく達し得て三角標の下に擧げた祝盃の一杯も亦た五臟六腑に沁みるものであつた。一行の元氣は頓に恢復した。さうして、こゝにも一天佑を得て、折節信州から上つて來た學生の一行に際會し北城村に下る順路—長太郎は其道を全く知らぬというてゐた—をも明らかにした。若北城村に下る道を誤つたならば、この九仞の功を殆んど一簣に缺くのであつた。最初長太郎の豫想してゐた信州に下る方向とは、全く別な溪谷を行くのであつたからだ。

主峯の頂上を臥牛に比すれば、小蓮華の頭は駱駝の背部であつた。彼は裾野的の優美な一線を引き、是は力強い岩石の屈折線を露はにしてをる。彼には粘土を捏ね上た細工の妙を見、是には刀法の放膽な彫工の技が著しい。殊に其屈折線には處斑らな殘雪を配して、日の直射する色の彩強さが加はる。

主峯三角標下の眺望は信州方面に皆無であつた。其優美を丸みを持つ猫背の背部は、三角標下で、遽然切り絶たれて、信州方面には、噴火口壁の如き層厓が巨口を開いてをる。其巨口を湧く雲は、永久絶ゆることのない噴烟かとも綿々濠々として立ち騰るのだ。風は越中方面から吹き渡る。次第に力を增すかの風は、今や崩れ落ちんとする層厓の際に湧き立つ雲を壓しつけて吹く。雲は更に抵抗力を倍して、却てそれに逆襲せうとする。風と雲とが眼前咫尺の處に戰ひつゝあると氣付いた時、其相鬩ぐ樣をたゞ無關心の態度で見てをることは出來なかつた。同時に登山した學生の話では、きのふは四方よく晴れて、佐渡能登までも見えた、佐渡が見えるのは、天候の一變する時だ、と信州の人夫が語つたさうだ。天候の一變する其過程として、この戰ひが始まつたのだ。言はゞ前哨の衝突なのだ。見ると、我等の來た小蓮華方面の南方の山地は晴れ晴れとしてをるにも關らず、眼を西北に轉じた脚下の彼の溪此の峽には、綿の如き白雲が長い尾を引きつゝ動いてをる。それらの雲はやがて其龍頭を合して、山腹を東へ東へと迂回する。さも此前哨の衝突に聲援する出動の如く思はれる。此戰ひが次第に擴大された時如何の慘狀が現出するかは多言を要しない。一行の誰かゞ、新らしく削つた樂書きを讀んでゐた三角標の柱には、既に笛を鳴らす如き風が募つて來た。風と雲との捕捉すべからざる空虛な衝突が、其實內容の充實し切つたものであることに想到した。

頂上を辭して一步信州方面に下つた大雪溪は、恐らく他の山嶽に見ることの出來ぬ長大な殘雪帶であらう。葱平ラから白馬尻に下るまで約半里程、只見る白皚々たる急傾斜なのだ。さまでの屈曲もしてをらぬので、葱平ラの眞上から、白馬尻の眞下まで、たゞ一眸に見通される雪曇りのした其果てまでを瞰下ろして、眼に眩惑を感じないものは恐らく無いであらう。殊に葱平ラ附近に矗立する眞の雪壁の如きは、如何に足がゝりを求めて下るべきか、見るから凄風毛髮を逆立たしめる。さうして信州でいふ杓子嶽の鋭尖峯は、巨鬼の角を擬して、其雪壁を睥睨して立つのだ。若し前途を知らぬ迷路に彷徨してをる時、かゝる光景に逢著したとすれば、一行の足は遽然こゝに立ち悚んで仕舞つたであらう。が、心中既でに北城村を摑んでゐた脫兎の如き勇氣は、寧ろこの大雪田の下降を、變化のある一快事だとも考

へた。雪の上には圭角の多い砂礫が非常に散布してをる。雪の解けるに隨うて露出したものとしても、甚だ奇な現象だと思うてをる頭上に、何とも知れぬ大音響がして、クワラクワラ大石小礫が崩れて來た。早や足下まで矢を射るやうに飛ぶ礫もある。一歩を誤れば、多少の傷を負ふ所であつたけれども、これさえ山嶽の我等に興趣を添へる景物とも見るのであつた。

翌日北城村を出發する時、始めて我等の著衣が、草汁に染み、岩皴に擦れ、雪泥垢穢に汚れてをる慘澹たる樣に氣付いた。次いで、一行の顔を始め頸、手のきらひなく赫變した醜さをも語り合つた。いづれか二日間の勞苦を語る好印象ならぬはなかつた。この印象の悲慘を極むる程、我等の成功を大にするものであることを思うて、一人の落伍者もなかつた一行の奮闘的努力を改めて祝福せざるを得なかつた。我等は永久に猫又谷開山の名を擅にし得るものであることを附言せねばならぬのである。

北城村に下り著いたのは、既に夜八時を過ぎてゐた。が、葱平ラの雪壁を人夫が鉈で足がゝりの階子段を削る等に無駄な時間を費した。我等に鳶口又はガンジキの用意があつたならば、今一時間は早く下降し得たであらう。

白馬尻で一人の少年に會した。今朝北城村を出立して單身登山を企てたといふ。別に食料の用意もしてをらぬので、無謀の登山を中止せしめて、北城村に同行した。川越町の染織學校の生徒だとのことだつた。其健脚は十六七の少年とも思はれぬ程であつたが、かゝる高山に行くには、餘りに無謀に過ぎる。何處と言はず、青年を薫淘する所轄學校長は、夏季の旅行及び登山に對する知識を其生徒に與へる必要がある。でなければ、不測の災害を免れぬであらう。

北城から白馬尻に至る間、約三里半、道は爪先上りで至つて平夷である。其道の沿ふ姫川の上流は、黒部の峽谷を見た眼には、餘りに平凡で又變化がなさ過ぎる。白馬尻には石室の宿泊處がある、白馬の頂上にも石室がある。予等と共に頂上に達した學生は、昨夜は白馬尻に半野營し、今日は頂上に一泊するといっていた。北城村を出發して、途中細野村を過ぎては、右の二石室の外一軒の休息所もないのだ。―尤も途中に炭燒小屋はある―信州方面の白馬登山が年々殷盛に赴きつゝあるというても、之を富士山などに比すれば、程度の知れたものだ。山嶽登攀の最も容易いのは、日本第一の高山富士山であるといふことが愈々鮮明になりつゝある。

植物採集に公の制限があるといふことは、北城に下りて始めて知つた。越中方面に何等の告示のないのを見ても、登山者の多少を卜するに足るのだ。尤も清水平ラ附近は白馬山の境域以外になつてをるから、採集は自由であるかも知れぬ。

葱平ラの野生の葱を二三本摘んで還つた。特に葱としての香氣があるとは思へぬ。たゞ其坊主の花―まだ蕾であつた―が、葱らしい特色をしてをるのに注意を惹いた。歸宅後數日して、そを旅衣のポケツトから出して見た。莖は過半赤枯れてをるにも關らず、摘んだ時の蕾が見事な紫色の花に開いてゐた。其生き生きした花の艶は、今摘みとつたものかとも疑はれた。野草の潛勢力！　自然の力が何處まで深いかはこの一事にも驚歎される。

雪上を降るのは、其方法を知らぬと、最も危險だ。長太郎は一本の杖を後ろに突いて、兩足を辷らしつゝ下るに妙を得てゐた。其早さも亦た意想外であつた。雪を辷る時は、前にノメル事はない。必ず足をすくはれて仰向けに倒れるものだ、其時突いた杖で梶をとるのだと言うてゐた。信州方面の大雪溪を下る時は、適者生存的に、其方法を眞似ても見た。到底一歩一歩運んでをつては、大雪溪の半ばで一日を費やさねばならぬからだ。が、梶をとり損つては倒れる、ノケゾル、失態の樣々を盡くす上に、兩脚を輕く運ぶ呼吸を會得せぬので、甚しく疲勞する。不圖予は一方法を案出して、却つて安全にして迅速な策だと思うた。そは力を專ら足のカヽトに入れて、一歩々々雪を蹈みつけて行くのだ。丁度富士の御殿場口の砂走りを下るのと同じに、身體の重みは自然に蹈み込んだ雪に支へられる。重量利用の下降法であつたことは慥かである。が、一旦雪が凍てゝ、足の力で蹈み込むことの出來ぬやうになつては、折角の妙案も、何等の效驗を奏しなかつた。

5　木暮理太郎　「黒部川を遡る」『登山とはいきんぐ』第１巻第２號・第３號

1935（昭和10）年９月１日・10月１日刊　大村書店発行

要　約

1919（大正８）年７月27日～８月６日の記録。

メンバーは、中村清太郎、木暮理太郎、佐々木助七（音沢村の案内人）、佐々木作松（同）、佐々木清助（同）、宇治長次郎（大山村の案内人）、山田竹次郎（同）。助七ら音沢村の案内人は池の平までの同行。

行程は、欅平～下廊下～仙人谷～池の平～剱沢～別山乗越～室堂。

※下廊下遡行を含む黒部川本流探検の最初期の試み。

※中村清太郎、木暮理太郎は日本山岳会会員。

山の憶ひ出〔連載〕（二・三）

黒部川を遡る

（鐘釣温泉より仙人谷まで）

一　はしがき

我國の一大峡流である黒部川の全貌が完全に世に紹介されるに至つたのは、誰が何と言つても、これは立山後立山両山脈の山々と其抱擁する谷々とに限りなき興味を有し、就中立山連峰と黒部峡谷とを禮讃して措かざる冠君の數年に亘りて倦むことを知らない努力の結果であることは、動かす可からざる事實であり、又よく人の知つてゐる通りである。されば纔に黒部の片鱗を窺ひ見たに過ぎない私などは、いつも之に對して感嘆久しうして止まないのであつた。其當時はよく冠君の訪問を受けて、山の話に夢中になつてしまつた二人は、玄關に置いた靴や冠君の蝙蝠傘を盗み去られたことを、すぐ隣の室に居ながら少しも知らずにゐたことなどもあつた。話の落ち行く先は大抵黒部ときまつてゐた。そして探險の度毎に同君の齎し歸る新しい黒部の祕境に聞き入りつゝ、私の心は躍つた。しかし冠君のやうに時の自由を持たない私は、殘念ながら同君と行を共にし得る機會は一回も無かつたのである。

黒部峡谷は斯く大正の末期から昭和の初にかけて、始めて探られたものであるとはいへ、舊加賀藩の時代に於ても山廻り役なるものがあつて、數年毎に黒部奥山を巡視し、其間黒部川の一部に觸れたことは、記錄に存してゐるし、又天保頃の作と想はれる繪圖に據れば、祖母谷以下は流に沿うて道が開け、中流は平より御前谷の下手に至る路ありしものゝ如く、又針木谷の南澤を遡り、南澤岳より尾根を縱走して鷲羽岳に達し、黒部源流に下り、藥師澤を上りて藥師野（太郎兵衞平）を横切り、有峰を經て東笠西笠兩山の間を水須に出るコース、及び平より本流に沿うて東澤に入り、之を遡りて前記の尾根筋に合する路が記入されてゐる。この巡檢は軍事上よりも寧ろ森林の監視が主要なる目的であつたものと私は考へてゐる。鐘釣温泉の湯壺に浸つたことのある人は、温泉の湧き出してゐる洞門の岩壁が更に大きく穹窿狀に擴がらうとする目の高さの處に、慶應三卯八月　山奉行辻安兵衞山廻伊藤刑部と書いた、かすかながらも殘つてゐる墨痕を見た覺えはないであらうか。此人々は恐らく最後の山廻り役であつたらうと思ふ。私の北アルプスの旅には常に案内者であり、又冠君の黒部探檢にも缺かさず案内者として、其成功に貢獻する所の大きかつた宇治長次郎の父は、山廻り役の人夫として同行したことがあるといふことを、同人からも弟の岩次郎からも聞いたのであるが、それがこの慶應の時であつたかと云ふ事はさて措き、山行の樣子などに就ても少しも知るに由なかつた。

登山者の間で最も早く黒部下廊下の探求に心を惹かれた者は、私の知つてゐる限りでは、友人中村君であ

つた。而し斯ういふ事には後になつて其權利を主張する多くの人が現れて來るものであるし、又それが正しかつた場合も稀にはあるから、私は自分の知つてゐる範圍と斷つて置く必要がある。勿論黒部川を横斷したり或は其一部を上下した人は、以前にも少くないが、これは黒部川が目的ではなかつた。

中村君は大正四年の七月から十月まで鐘釣溫泉に滯在して、畫作の傍附近を跋涉し、其折案内者として同伴した音澤村の佐々木助七から、黒部に關する多くの知識を得て、益〻下廊下探査の素志を堅くしたらしい。其後幾度か計畫が立てられて私も之に與つた。しかし豫想以上に嶮難の恐ろしいものがあると思はれた爲に、容易に實行の運びに至らなかつたが、遂に大正八年七月下旬を期して二人で之を實行することになつたのであつた。

今から當時を追想して見ると、私達の準備には多くの缺陷があつた。綱なども三十米のものを一本しか携帶しない。夫も本式の物ではなかつた。天幕も五人用のもの一張に過ぎない。それに中村君は油繪の材料を忘れなかつた。これに身廻りの品を合せると、五人しかゐない人夫の中から一人を要した程の重さであつた。私達は何と暢氣なことであつたらう。これと云ふのも前途に少しの油斷を許さない、緊張した態度が絶對に必要である困難で危險な行程が幾日にも亘つて續くであらうなどゝは考へてゐなかつたからである。つまり認識不足に陷つてゐたのであつた。夫にはまた理由がなくもなかつた。私は曾て書上君から同君の譯した「マツターホーンを爭ふ」と題する書を贈られて之を一讀し、胸糞が惡くなつて讀了するのが厭になつたことを覺えてゐる。今其轍を蹈んで、無邪氣な山人の心を勝手に忖度し、而も夫を以て自己の不明を辯解するの具に供しやうとすることは、眞に恥づ可きの至りであるが、この際暫く讀者の寬恕を得て筆を進めたい。

案内者助七の話では、平の小屋まで一週間あれば行けるとの事で、自身も一二度通つたことがあるらしい口振りであつた。但し斷言はしなかつたやうであるが、餘分の荷などを持つて行ける所ではないといふ注意も、亦危險の程度やその場所に關して、具體的の説明若くは指示をも受けなかつたので、私達の危惧と不安とは、畢竟するに自己の想像の所産であるかの如くさへ思はれた。唯仙人谷の出合で右岸に渡り、棒小屋澤（助七は之を東ゴリヨウと呼び、それに對して劒澤を西ゴリヨウと稱してゐた。劒澤もツルギといはずツルガと發音した。）を過ぎると、再び橋を打つて左岸に移るのであるが、此橋の打てるか打てぬかが遡行の可能不可能を決するもので、うまく打てればいゝがと幾度も氣懸りらしくつぶやくのであつた。私達は仙人谷から先へは行かなかつたので、其架橋地點が果して何の邊であるかを確め得なかつたが、冠君の蹈査した結果から推せば、假に架橋し得たとしても、左岸の山側を辿つて平に出ることは、黒部別山を踰えでもしなければ不可能である。そして黒部別山に登ることも其邊からは絶望に近い。それで私は果して助七は平まで通つたことがあるのであらうかとの疑が後に生じたのであつた。勿論山谷の跋涉に慣れ切つた者が身輕で歩けば、七日で足りるにしても、荷物のあることを考に入れて、相當に準備することを怠つたものとすれば、案内者としては手ぬかりであつたことを免がれないであらう。邪推すれば或は助七の黒部に關する既知の範圍は東谷附近に限られてゐたので、仙人谷まで案内して行程を打切る意圖を初めから持つてゐたのではないかと想はれるやうな曖昧な態度がないとは云へなかつた。斯様な臆測はしかしよくない事だ。

此外私達の不注意からして人夫の調和が缺けてゐた事も見逃せない。黒部のやうな處へ入るには、谷歩きに熟練した者の一人でも多い方が心強い。それで多年同行して其技倆に信賴してゐる氣心の知れた大山村の宇治長次郎と、他に山田竹次郎の二人を呼び寄せた。助七は同じ村の佐々木作松と佐々木清助といふ二人の若者を連れて來た。勿論知らぬ同士であるから多少氣まづい點はあらうと考へてゐたが、斯く迄に排他的であらうとは全く豫想しなかつた。例へば食料品を持つた若者の荷は、日毎に其量を減じて、果ては殆ど空身にも等しくなるが、天幕や毛布などでいつも重い長次郎等の荷を分擔しやうとはしない。私は見兼ねて或朝、どうだね少し分けて貰つてはと言ふと、助七は氣色ばんで言下に「お前等荷を分けた時に、どれを背負ふかと聞いたら、それを背負つたのではないか、初からの約束だ」とはねつけたやうな次第であつた。

案内者として賴みに思ふ助七であるから、黒部といへば自己の領域ともいふ可き強味さへ加はつて、我意に募つたとて止むを得ないにしても、目的達成といふ見地からすれば、可なり重大な關係のある事であるの

に、夫に就ては何の顧慮も拂はれてゐないらしいことが分つたので、私の心は暗かつた。

身贔屓な助七の言動につれて、二人の若者までも長次郎等を侮つてゐた。無口で暢氣ではあるが、山や谷歩きにかけては誰に劣る可くもない自信のある長次郎は、心の中ではさぞ癪に觸つてゐた事であらう。口數の多い助七の前に、溫和しい長次郎は愈〻無口となつて、如何にも無能らしく唯默々と隨伴するのであつた。

一度、仕合(しあひ)谷の南を限る山の鼻を踰える際、崖を下つて汀を辿れば三時間も近廻りとなるといふので、私は下らうではないかと長次郎に勸めて見た。こゝで長次郎の技倆を發揮させて見たいと思つたのである。上部は幾分オーバーハングしてはゐるが、四五尺下に離れて、別に足場の確かな岩壁が屹立してゐる。いつもの長次郎ならば、上を廻らうと言つても「なに案じはねえ」と自ら進んで下ることを主張する筈であるに拘らず、例になく「荷は重いし、慣れぬ人夫衆が居るだで」と浮かぬ顏して斷つた。從順を裝ふ彼の心の底から「今度はおとなしく何處までも引込んでゐるぞ」と固き決意の閃きを感じて、これはしまつたと思つた。兩雄併び立たず、私は流を見詰めたまゝ暫く憮然としてゐた。二人を一緒に連れて來た事が間違つてゐたのであつた。それは兎もあれ助七が初めて私達を比較的困難なく仙人谷まで導いて呉れた功勞は、之に依つて沒し去らる可きものではない。私は今も深く感謝の意を表してゐる。

此年は又丁度古河合名會社で、餓鬼の田甫から棒小屋澤までの路を作る最中であつた。この一行には黒部の紹介に力を入れてゐた高岡新報の記者が同伴して居たらしい。それで私達を恰も競爭者であるかの如くに思ひ違へ、且一行の案內を賴まれた助七が夫を斷つて置きながら、先約ではあつたが、私達の案內者となつたことも刺戟となつてか、よくは知らないが何かと盛に書き立てたさうである。このはしがきは當時を記憶してゐる人の參考ともなるであらう。

二　鐘釣溫泉まで

中村君と私の乘つた上野驛發明石行の列車は、七月廿七日の午前八時半に泊驛に著いた、長次郎と竹次郎が約の如く迎に來てゐた。例年ならば此頃は快晴な登山日和の續く季節である、今年は如何したものか兎角降り勝で、山登りには不適當な天候であつた。殊に黒部の谷深く入り込まうとする私達には、絶えず其事が氣遣はれた。今日も汽車を下りて町をあちこち買物に步いてゐる中に大雨が降つて來た。晝頃に漸く歇んだが、小川谷の奥に朝日岳の雪がちらと見えたのみで、僧ケ岳や駒ケ岳の連脈には雲が低く垂れてゐた。驛前の旅館で晝食を濟し、荷が多いので女の荷持を一人雇ひ、平坦な四里の道を步いて、愛本橋の袂の茶屋で一休みする。直ぐ上は謙信の物見山と呼ばれてゐるさうだ。荷持の女は此處から返した。

三十里の長い流程を、自ら穿つた深い谷底に躍り狂ひ喚き叫んでゐる黒部川も、この幅四十間あるかなしの峽口でぐいと引括られた後、廣い扇狀地に向けて一擧に解放されてゐる。それだけに此處は物凄い淵を成し、薄濁りを帶びた水が大きな渦を卷いて、捩れた漏斗のやうな口を開きながら、底の方から氣味惡るい音を吐き出してゐる。崖にのり出した一本の松の木の下には、深さの知れない穴があつて、龍宮に通じてゐるのださうだ。此穴に主が棲んでゐる、此主へ愛本村の平三郎といふ人の娘が嫁に入つた、いよいよ淵に入る段になると、狹霧が水面を立ち罩めて、少しも樣子が見られなかつたといふ。娘は屢〻里へお客に來た。或時決して見ることはならぬと警めて、一間に籠つたのを、母親が怪んで竊に覗き見ると、盥の中でお産をして、三疋の龍の子を生んで居たさうである。それから娘はパツタリ來なくなつた。此主は其後も時折村の娘を略奪に來たさうだ。夫には前兆があつて、娘のある家の坐敷に、杯を添へた美酒が置いてある。それが七日の間續く。若し酒に手を付けなければ何事も無くて濟むが、少しでも其酒を飮めば娘はさらはれて行くのださうだ。これは助七の話である。

これから愛本溫泉までは一里足らずの道で、五時半に溫泉に著いた。延長五千八百間の木樋を用ゐて、黒薙谷の二見溫泉を引いたものである。新築の二階建で甚だ氣持ちがいゝ。此夜は白馬方面に電光の閃くのを見たが、星の光は冴えてゐた。但海の方は暗いので翌日の天氣が心配になつた。

夜が明けて見ると果して雨である。此日は溫泉に逗留して、案內者の助七が音澤村から來るのを待つてゐ

た。其間にも中村君と宿の二階から替るがわる首を出して、其處から見られる黒部川を幾度か眺めた。水量はさして増した様子もないが、水の色は濁つたり澄んだりした、それと共に私達の心も暗くなつたり明るくなつたりする。其中に段々濁る一方になつたので、私達の心も亦益〻暗くなつて行くのは情なかつた。晝過ぎに助七が來て、打合せが濟むと一風呂浴びて歸つて行く。夜中に數聲の雷鳴を聞いたが、雨は降らなかつた様子である。

二十九日。朝起きて見れば相變らず雲は低く垂れて、峽谷の風物嵐氣霏々として頗る穏でない。昨日よりは夫でも幾分か模様が好いやうに思はれたので、一行七人が黒部川の上流に向つて愛本溫泉を出發したのは午前九時半であつた。

道は左岸の段丘の上に通じて、暫くは喧しい瀬の音も耳にしなかつた。ウナヅキ谷を過ると桃原である。十數年前までは一面の桃林であつたといふが、今はもう名殘の木も見當らない。此處で釣橋を渡つて右岸に移つた。河の水は稍赤土色を呈して大石の間を凄じく奔下してゐる。左手は森石山だ。其山の鼻が平たく潰れて段を成してゐる所に茶屋があつた。前には田なども作つてあり、對岸の尾沼谷には橡の大木が多い。山頂は雲に掩はれてゐるが、日に照された谷の綠は燃えるやうに鮮であつた。一しきりヒグラシが盛に鳴いた後で、鶯の聲を聞くのも夏の山路らしい感じがした。

茶屋から間もなく道は上りとなつて、高い絶壁の上や横を通るやうになる。其度毎に渦を巻いたり白い泡を立てたりして、矢のやうに馳る川がちよいちよい脚の下に瞰まれる。峽勢窄迫して、黒部川特有の廊下がそろそろ始まつたのだ。

午後十二時十分、佛茶屋で暫く休んで晝食を遣つた。茶屋の側の薄暗い木立の下を少し西に降ると、川に臨んだ絶壁の上に佛岩が立つてゐる、今にも倒れ落ちさうで危い、能く視ると荒削の佛像に似たやうにも想へる。岩には青苔が蒸して、臺のあたりはギバウシが手向の花のやうに咲いてゐた。乾からびた妙な物が爐の上に吊してある、何かと聞いて見れば熊の臓物であるといふ。里程表に、五味(ごみ)平へ十九町、別道へ廿二町、黒薙溫泉へ卅二町、二見溫泉へ卅五町、鐘釣溫泉へ二里二十二町と書いてあつた。對岸に嘉々堂谷を見送り、行手に森石谷を迎へて、間もなく殖林した落葉松林の美しい五味平を過ぎると、黒部川第一の貢流黒薙川の釣橋を渡つた。上流はすぐ屈曲してゐる高い岩壁に遮られて、ほんの一部しか望まれない。水の色は藍綠に冴えてゐた。

これから少し河の緣を離れて、平な草地を辿つたり殖林した杉林の中を通つたりする。此時雷鳴と共に大雨が降り出したので、七谷越の高い峭壁を横切る際には、上から落ちて來る瀧のやうに急な谷川の水を頭から浴びたりした。稍下つた處は猫又谷の出合で、崖から崖へと一ぱいに漲り溢れて急瀬を躍らしてゐる本流の横へ、左から雨で水量の増した赤黒い色の濁流を石と共に押出してゐた。本流が濁るのは斯うした支流の影響であらう。

谷筋を罩めてゐた霧が薄らいで、其中から翠の濃い山の影がぽうつと行手に滲み出した。百貫山である。幾多の平行した縦谷が骸骨の肋骨のやうに懸つてゐる、山その物が既に岩の骸骨なのだ、針葉樹と闊葉樹と入り交つて生えてはゐるが。其前に東釣鐘山が釣鐘を伏せたやうに蹲つてゐる。しかし高さ七十丈にも餘る石灰岩の全石からなつた絶大の釣鐘だ。頂上は黒木が茂つてゐるが、胴から下はむき出しになつて、黒い岩肌の所々が朱をなすり付けたやうに赤錆びてゐる。道は其下を通つて蔽ひかぶさる青葉の中をだらだらと下り込むと、いきなり雷のやうな瀬の音が脚元から起つて眼の前に釣橋が現れた。夫を渡つて坂に懸ると、右岸の河に臨んだ岩の上に、まだ建てられて間もない新鐘釣溫泉の二階屋が見えた。こつち側の岩間から湧き出す湯を水車仕掛のポンプで汲み上げて、樋で導くやうになつてゐる。右手の奥には不歸谷の落口が岩壁に穿つた洞門のやうに開いて、細い流を注いでゐる。周圍が餘り峻酷なので安心して泊つてゐる氣になれさうもない。

上り切ると狹いが平な段だ。木立までが奥深く續いてゐる。見上ぐる谷の空は兩方からのし懸る山と山との間に仕切られて、明り窓のやうに細長い。其筈である。向ふ岸は八百米もある百貫山の急斜面が手の届く

程に近く、此方は又三名引(さんなびき)の山裾が西鐘釣山となつた岩壁で、それも首の痛くなる程仰向かなければ頂上のあたりは眼に入らないのだ。脚の下深い谷底から唸りを持つた水聲が滿谷の空氣を搖がして衝き上つて來る。體が痛い樣に縮まる感じだ。こんな處に溫泉宿があらうとは嘘のやうにしか思はれないが、山に沿うて建てられた幾棟かの客舍を見るに及んで、安心したやうに吃驚しない人はあるまい。鐘釣溫泉に來たのだ。湯は水楢などの大木が茂つてゐる川べりの岩壁の下からだぶだぶ湧き出して、淸淨な砂を底とした天然の岩槽に湛へたまゝ、人の勝手に浴し去るに任せてある。全く周圍の自然と旨く融合してゐる。宿からは直ぐ下に當るのだが、廻り道をするから一町許の距離になる。今は浴客の込み合ふ時で、中村君と私だけは宿の人の居る隣の部屋に暫く泊めて貰つた。

三　奥鐘山の大岩壁

三十日。朝起きると庭に出て先づ空を仰いだ。鼠色の雲が五六本の白くされた枯木の立つてゐる百貫山の一角を掠めて、のろのろ爬ひ廻つてゐた。いつか飛行機射撃演習の行はれた地點であるといふ。この狹い谷間で見られるものは夫だけだ。今日もまづいなと思ふ。それでも不足の食料品を補充し、支度が濟んで出懸る頃には、雲が割れて久振りに靑空が見られた。

林道は依然として左岸に通じてゐる。こぼれ懸る露にしとど濡れながら木の間を抜けると、忽ち崖下に黑部川の奔湍が現れる、水はもう濁つた赤土色でないのは嬉しかつた。空谷(からたに)を過ぎて、山かせぎなどする人の休場である山の鼻で一休する。桂、楡の大木が多い。此谷に這入つて以來、強い期待を以て毎日のやうに囑望して、いつも雲の爲に妨げられてゐた雪を見たいといふ希望は始めて滿たされた。上流に思ひも寄らず池ノ平續きの山が殘雪斑々たる姿を見せたのである。

對岸の百貫山と名劍山を連ねた急峻な山稜を絶えず頭上に仰いで、橫合から不意に落ち來る幾つかの支谷を越えた。獨活(うど)谷、小屋ノ谷、蔭ノ谷などいふのがそれだ。支谷と支谷との間は此處では必ずしも殺(そ)いだやうな山の瘦尾根ではない、好い山ひらがある。中には荒廢した畑の跡かと想はれる平もあつた。小屋ノ平といふ、大きな桂や楡の葉蔭を洩れた日光が縞をなしてゐる間を縫うて、サカハチテウが飛んでゐた。

小黑部谷に著いたのは十時半であつた。山の鼻と鼻とがぶつかり合つてゐる間を、谷水は深く穿つて勢に任せて奔下してゐる。危い崖道を上下し、釣橋を渡つて又崖の緣を少し登ると、小黑部鑛山への道が岐れる。楡の大木に交つて栂や黑檜（ねずこ）などが岩壁に生えてゐる。石楠が出て來た。附近には野生の杉もある。杉と石楠を一所に見たのは初めてだ。黑部の本流は此處で三方から突き出した山裾に押狹められて、猿飛(さるとび)の奇峽を成してゐる。路から下りて木につかまりながら覗き込むと、花崗岩の壁と壁とが二三間の近く迫り合つて、天井の抜けた絶大な洞穴を作り、聲を潛めて暗綠に沈んだ水が音もなく其中に吹ひ込まれて行く。白い壁面は磨いたやうに光澤を帶びて、下から反射する水の色がそれへ仄に靑く映つてゐる。凄美の極だ。十二時、本流と祖母谷(ばゞ)との岐れ道に著いて晝飯にした。黑部峽谷の人跡稀な幽絶境はこれから始まるのである。

午後十二時半に此處を出發した。暫くは欅平(けやきだいら)の古い林道を辿るのであるが、偶に林區署の役人か又は獵師などが入り込む外は、常人の來る所ではないから、道とも判らぬ程荒れに荒れてゐる。助七が先登に立つてアカソ、イラクサ、蓬などの丈なす中を押分けて行く。濕つぽい草の香が鼻から這入つて、ツーンと頭へ抜ける。矢張人氣の無い所だけあるなと思ふ。太い蔓などが灌木と搦み合つて邪魔をしてゐる所では、頭にカギのある幅廣の鉈がキラリ閃く、そんな事が度々あつた。道のある所だと云つてもこの通りだ。こりや樂ではないわいと坐ろに不安の念が漂ふ。其癖心はぐいぐい奥の方へ引張られて行くのだ。途中助七は蝮蛇を一疋見つけて、ちよいと頭を叩いて打殺し、杖の先にかけてぽんと川に投げ込んでしまふ。無造作なものだ。

欅平の谷へ來た。前面が俄に開けて高い岩の上に導かれた。上流奥鐘(おくがね)山の絶壁と突端から、際どく身を交しながら忽然と走り出した黑部川は、茲に全容を曝露して、白泡を嚙んで六七町の間を躍り狂つて來るが、

一度足元の崖下にのめり込むと、ワーツと聲を揚げた儘もう何處へ行つたか判らない。雲間を洩れた太陽が強烈な光を投げて、瀬も淵も岩も眩いまでに輝いてゐた。水の涸れた九月には、こゝから下りて河の中が歩けるといふ。これから針金や棧道の殘つてゐる岩壁の横を二度許り通つて、草の茂つた急崖を一息に下ると、蜆谷の落口に當る本流の底に立つた。そしてまじまじと四邊を見廻して悸とせずには居られなかつた。

右岸奥鐘山の絶壁は、三百米もあらうと思はれる花崗岩の一枚岩で、それと相對した蜆坂も決して低いものではない。鴨綠を溶かした水は其根から根を洗つて、無造作にすういと流れてゐる。力強いうねりの外は碌に波も立たない。幅は狹いやうでも四十間近くはあらう。蜆谷はと見れば、水こそ少ないが三四丈の瀑を成してゐる。全く行詰つた感がある。人夫の一人が何處を登るのかと聞く。一服やつてゐた助七は、瀑から左手の崖へと腮でしゃくつて、あこを登るのだと答へる。途端にホウあこを登るのかと驚嘆の聲が洩れた。音澤から來た二人の若い人夫は、此處は深いだで泳げるとか、勢(せい)が強いで泳げないとかいふ意味のことを大聲で口早に話し合つてゐた。中村君と私とはたつぷりと河に浸した手拭で顔の汗を洗ひ流し、改めて復た四邊を見廻した。

この山奥に蜆谷の名があるので、場所がらといひ念の爲に蜆の化石でも出るのかと聞いて見た。助七は笑つて答へない。強ひて質すと、以前荒ごなしの材木を搬出する際に若い女達もこの急崖を上下した。それを見上げてふと思ひ付いた名であるといふ。若い娘だで蜆ずらと大笑する。何さま幾十年を黒部の山谷に過した助七のことである。氣まぐれの戯言(ざれごと)が其儘地名となつたものも少くあるまい。瀧倉谷の奥にある駒ケ岳なども、形が獨樂に似てゐるので付けた名ださうだ。其時に助七は「俺が居なくなれば誰も知つてゐる者が無くなるで、後に殘さうと思つて、名前の譯を書いてゐる。出來たら旦那方に送つて見て貰はふ」と話した。是非送つて呉れと約束したが、未に果されないでゐる。

やがて綱が出された。身輕になつた助七は夫を肩にかけて、瀑が退縮する際に殘したものらしい瀑の左岸の崖を攀ぢ登つて、綱を付けると下りて來た。夫を手頼つて皆無事に瀑の上の狹い段へ登り著いた。振返つて見ると奥鐘山は、いつの間にか大屏風を擴げたやうに高大な峭壁の全面を露して、東の空を占領してゐる。最も高い所で六百米、低い部分でも二百米は下るまい。實に言語に絶した素派らしいものだ。表面は稍黒ずんだ灰色で、それへ白く輝く數條の竪縞を織り出してゐる。大雨の際に瀑の懸る水筋の跡であらうと思つた。ギバウシや矮小な木が其處此處の凹くなつたり襞になつたりした所に、ちよぼちよぼ生えてはゐるが、そんな物は到底此壁面の偉大なる單調を破るに足るものではない。

岩に腰掛けて一息入れる間もなく、劒岳の方面で雷が鳴り出した。皆急いで蜆坂の登りに取り懸つた。坂とはいふものゝ傾斜の少し緩い絶壁であるから、足で登るよりも手で登る場合の方が多い。併し下から見上げて考へた程危險では無かつた。岩は堅くて凹凸がある。五分の手懸り足懸りも安全に生命を保障して呉れる。勿論些の油斷を許さない、刻一刻と移動して止まない體重の中心を、微妙に調節するあらゆる筋肉の働と、集注的な強い意識とを必要とする。

一滴二滴と雨が落ちて來た。倏にして太い銀針のやうな雨脚があたりを眞白にしてしまふ。折折電光が物騒しく動搖する大氣を掠めて、仄に赤く眼を射る。雷鳴は左程ひどくもなかつたが、岩に獅嚙みついて崖の中途を蝸牛のやうに這ひ上つてゐた私は、叩きすくめられたやうに立ち留つて、岩を傳ふ瀧の如き雨水を頭上から浴びた。雨具と思ふけれども、人夫とは離れてゐるし、よし又近くにゐても、銘々が自分の身一つを守るより外には餘念のない瞬間なのだ。如何なるものでもない。漸く百米餘りを上つて尾根の一端に縋り著いた。早速荷を解いて雨具を着けたがもう遲い。雨が復た強く降り出したので、とある大岩の根方に逃げ込んで僅に夫を凌いだ。岩の軒からは私達を圍つて雨垂れが太い水晶簾を懸る。それを水呑に受けて渇いた喉を潤した。溫るいが旨い味だ。

雨が疎になると谷が明くなつて、正面に向ひあつた奥鐘山の絶壁から、忽ち一條二條續いて五六條の大瀑布が、虚空を跳つて滾々と崩落するのを木の間越しに望んだ。根なし雲が時々瀑の半あたりを往つたり來たりする。其壯大にして而も痛快なる景色は眺めて飽くことを知らない。二百丈もある瀑が人も碌に通らない

谷筋の奥で、年に幾回となく出現することが嘘のやうな事實であるのが面白い。

もう四時を三十分過ぎてゐる。幸に雨は歇んだが、動かないでゐた所爲であらう薄ら寒くなつて來た。見ればづぶ濡れの全身から湯氣が立つてゐた。私は心の内に、焔をあげてパチパチ燃え上る熾な焚火を想像して、早く泊り場所へ著きたいものだと思つた。然し今日の難關は未だ切抜けられた譯ではなかつた。此處からシデや令法（方言 牛の糞）や槭などの茂つた山の横を搦みながら少し行くと、雨樋を竪てたやうな潜り戸の狹間が待ち構へてゐた。夫はがつくり落ち込んだ谷の側壁へ、譬へば大きな鑿で縦に溝を穿つたものと想像すれば大抵當つてゐる。岩と岩との間は四尺位しかない。底は土が多い上に雨の後であるから滑るに決つてゐる。思ひ切つて一氣に滑り落ちれば造作なく片はつく、が、それつ切りだ。

また綱が下げられた。十丈餘りの長さはあるが、底までは届かない。中途の右側の段を成してゐる所で、立木に攫りながら皆の下り終るのを待つて、再び綱を下げる。今度は木があるので、身輕な中村君や私には樂であつた。小さい澤を渡り、兩面羊齒の繁りに茂つた薄暗い森林の中を横さまに通り抜けて、澤傳ひに下り著いた所は、仕合谷の落口より少し下流の河原であつた。五時五十分。

河原は水が退けてまだ間もないのか、蹈むとじめじめして心地が惡い。仕合谷の方にも良い野營地がないので、今下りた澤の突き當りの大岩が堰き止めた亂石の上を平にして泊り場所とした。蓬や茅を大分刈り取つて下敷にしたが、體が痛んで、それに黒部に入つて初めての野營であるから、目も冴えて此夜はたうとう安眠されなかつた。河床に亂れ伏す大岩を躍り越え跳ね返りながらたぎり落ちて來る黒部川の水聲は、地響を打つて、終夜私達の假寢の床を震蕩してゐた。

四　折尾谷の出合

三十一日。依然として天氣模様は好くない。風の方向も不定である。唯割合に雲が高いので稍心強い。氣はせいても支度に手間が取れて出發したのは午前八時半であつた。

野營地から仕合谷まで僅二町許の距離は、河原を歩いたり岩の上を傳はつたり、又は水際の崖をへづつたりした。仕合谷を渡ると河の中へ乘り出した大岩の胴のあたりを攀ぢ登つて、栂の森林に分け入つた。ヒグラシが鳴く。此大岩の先端は鉾のやうに尖つて高く峙ち、向ふ岸の奥鐘山の絶壁から獨立して一層高く聳えた巨大なる岩柱と相對して、幅五六間の峽門を成してゐる、後に夫婦岩と名付けられたのはこれであらう。森林は河に沿うて六七町も續いた。足場は確であるが山は急斜面の崖だらけであるから、手を出すにも足を運ぶにも氣は許せない。崖には黒檜、米栂、姫子松などの黒木が多い。脚下は直立の峭壁で、水面迄は思つたよりも近く、三十米位のものである。對岸の奥鐘山は昨日と違つて、絶大な三角形を呈した眞黒な岩の斜面を見せ、まるでピラミッドの一面を望むやうだ。其面には多少の草木が生へてゐる。あすこは登れさうだなと助七に問へば、登れると答へた。

林が盡ると、藥研を少し伏せて立てたやうに抉れ落ちた懸崖の上に出た。川に下つて近道を取るか、尾根を登つて遠いが安全な道を辿るか、どつちかを選ばなければならなかつた。が、結局遠くとも安全な道に就くことにした。長い長い羊腸の登りが始まる。この道は八年前に助七のつけたものださうだ。森の中は思つた程ひどい藪ではなかつた。木立が密蔽してゐるので、下木は餘り伸びられないのだ。併し登りは飽きる程長い。途中水楢の大木の根元が洞穴になつてゐるのを見た。熊の穴ださうだ。羚羊の寢た後もあつた。一時間半を費やして漸く黒木の多い尾根の頂上に出た。前面が目隠しを取つたやうに開けて、眼下に今宵の泊場所と決められた折尾谷が望まれた。其右岸の高い所にある岩壁に大きな洞窟ががつくり口を開けてゐる。高い山は雲に掩はれたり近い前山の蔭になつたりして、あの心を唆る雪の姿は牛首山あたりに少し光つてゐるのが眼に入つたのみで、黒部の本流も亦出入の激しい幾重の山裾に深く包まれて、唯一箇所赤茶化た崖の下に青白い水面をチラと覗ひ得たに過ぎなかつた、アゾ原あたりであつたらうか。

何處をどう下りたかは知らない。何でも始は急な山腹を木に攫りながら無暗と横搦みに下りた。谷らしい溝に出る。そこで助七が濡れ腐つた落葉の塊を引掻廻して、十數疋の蚯蚓を掘り出したことを覺えてゐる。

岩魚を釣る餌にするのだといふ。暫く下ると河原が現れ、續いて岩が多くなつた。其處で先に崖を下りて河を傳ふ路が上つて來るのと合し、右に楾の茂みを押分け、闊葉樹に交つて栂や黑檜の生へてゐる崖の間の岨を下り氣味に横巻にして、河に臨んだ絶壁の緣に辿り著く。拔足で緣を通りながら叢を拔け、大虎杖を薙ぎ倒して、横に長く河岸に蟠つてゐる大磐石の背に躍り上つた、折尾谷に著いたのである。午後二時三十分。振り返つて今下りて來た山側を見上げると、青木黑木の紛糾してゐる間に露岩の錯峙した急崖である。あんな所をよくも通り拔けたものだと自ら感心したが、何處を通つたのか一向に見當はつかなかつた。

此處は思の外に谷が開けて、河幅も四十間を超え、河原も少しは露出してゐる。下流は正面に谷を塞いで、例の奥鐘山の三角形が兩岸に續く青葉の中に益〻黑い。上流は近く三十間の距離にある小屋程もある大きな根無し岩が、此方側卽ち左岸に近く立ちはだかつて、上に一本の流木を戴いてゐた。大水の際に置き殘されたものであらう。其岩の左は黑部川の全流が七八尺の瀑を成してどつと落ちてゐる。其落口の圓く盛り上つた水線の動搖は實に壯なものだ。そこで一旦淵と湛へた水は更に下手で向ふ側の一層巨大な岩に行手を阻まれ、逆に引返して、中央に峙つ巨岩の爲に復も堰かれて二派に分れ、左は二丈ばかり、右は三丈あまりの急湍をなして奔下し、相合して私達の立つてゐる大磐石に横さまに撞き當り、眞白な泡の流が半町も續いてゐる。能く視ると白い泡と泡とが嚙み合つて虛空に跳つてゐるものは、淡い紫紅色を帶びてゐた。一二間離れるとお互の話聲などは、もう蚊の唸る程にも聞かれなかつた。

大磐石と更に高い岩壁との間に大岩が撐へられて、其下に好い平な砂地がある。居ながら瀑が見られるので其處を泊り場所とした。助七は長い間釣に餘念も無かつたが、たうとう尺許の岩魚を一尾釣り上げた。過日の洪水に流されて魚は薩張居なくなつたといふ。五時頃雨が降つて來たが間もなく歇んだ。

明くる八月一日は、場所が氣に入つたので、貴重な一日ではあるが滯在して疲を休めることにした。實際又其必要があつたのだ。朝と夕方に雨が又降り出したが、大降りにはならなかつた。晝前助七は折尾谷で尺三もある大きな岩魚を釣つて、私達の食膳を賑はした。釣つた場所は落口に近い一坪にも足らぬ小さな瀑壺であつた。折尾谷もこのあたりでは明るい谷で、水は細い。この岩魚も大水に置き殘されたものであらうといふ。私は始め鱒かと思つた。夜中に目が覺めて外を覗くと、鬱陶しかつた谷の空はいつの間にか星が銀砂子を撒いてゐた。

五　アゾ原

二日。晴れ渡つた空には一片の雲もない。今迄緊め付られてゐた胸が一時に擴るやうな快感がある。午前四時頃から起きたので、六時四十分には出懸けられた。旭の光は既に對岸の餓鬼奥鐘の連嶺の頂を超えて、此方の山の中腹を段だらに染分けてゐた。山の裾を直ぐ登りに懸つて、脚の下に河を見ながら進む。絶壁の上を通つたり或は下を廻つたりする。木が無ければとても通れぬ所がある。黑味を帶びた岩壁も水に洗はれる所までは、白く研磨されて滑に光つてゐる。山の傾斜が緩い所ではシデ、栁、水楢などの大木が茂り合つて、其下には兩面羊齒が大きな葉を四方に擴げて隙間もなく生えてゐた。森の空氣がひやりと冷い。斯うした山の鼻を一時間餘り横に搦んで河原に下りた。水は向ふ岸の四五丈もある花崗岩壁の下を瀨を成し淵を成して流れてゐる、色は益〻冴えて來たやうだ。絶壁には横に大きな襞が幾つかあつて、そこにはギバウシの花が咲いてゐるのを見た。河原傳ひの氣樂さを沁々味ひながら、二町も遡ると對岸で餓鬼谷が合流してゐる。此峽谷の支流としては落口が誠に隱かだ。硫黃の臭ひが風に連れて鼻を衝く。合流點から半道程の上流に溫泉があるのだといふ。

又山の裾を登り始める。木は生えてゐるが、地膚は堅い岩の壁だ、表面は苔に被はれて水氣付いてゐるから能く滑る。九時五分尾根の一角に達して、其儘石楠の多い山の背を登つて行くと、栂、樺などの大木が出て來る。南に劒澤の北を限る仙人山續きの尾根が鋸齒を苛立たせ、其左に五龍鹿島槍續きの山が物凄い色をした雲の厚襖をすつぽりと被つてゐる。何處からともなくピユーピユーと口笛を吹くやうな妙な聲が聞える。鳥でも蟬でも無いやうだ。登つて行く中に山稜は細く痩せて、痛ましく岩骨を曝露してゐる。こんな處には

きまつて石楠、姫小松、黒檜、米躑躅などが生えてゐるものだ。瘤のやうな岩の隆起を踰えてから、尾根の側面に沿うて下ると奥ノ平に出た。緩傾斜の地で、大きな栂の純林がある、下には根曲竹や羊歯が多い。最前聞いたのと同じ妙な聲が間近で復聞える、訝る間もなく一疋の羚羊が飛び出して一散に逃げて行つた。小さな澤に出る。横を巻いて尾根の頂上に達し、少し上つて又同じやうな横搦みを續け、岩多き斜面を過ぎ、最後に澤を傳つて下りて行くと、岩面の小さな孔からプツプツと息を切つて、水蒸氣と共に熱湯が沸き出してゐる、あたりの岩の裂目からも湯が滲み出して、硫黄の華が眞黄色な素麺を流したやうに沈澱してゐる、立ち留ると草鞋まで熱くなつて來る。減水の折は餓鬼谷の出合から右岸に移り、河傳ひに此處まで辿り得るとのことである。右に木立を衝き拔け、可なり水量のある澤が三四丈の瀑を成してゐる上を徒渉し、向ふ側を左に下るとアゾ原に出た。そして不思議な光景に目を奪はれた。午後二時四十分。

私達の下りた處は、河に沿うて長く延びた大岩磐が歩廊のやうになつてゐる上であつた。水面からは二三丈の絶壁であるが、上流の方は低く階段狀を成して河原に續いてゐた。岩は花崗岩でも、質の惡い朱のやうに赤く錆びて、見るから怪しげな荒けた有樣を呈してゐる。岩の歩廊は二町餘も續いて、其間到る處に湯が湧き出してゐるのだ。或者は直徑三尺もある熱湯の池を湛へ、其中央に徑五寸位の圓丘を築き上げて、其處から二三尺の高さに湯玉を飛ばしてゐる。或者は河底から湧き出る清水のやうに、池の底で沙をモクモク吹き上げてゐる。又或者は岩壁の表面に多量の沈澱物を堆積して、自身は其奥に潜まつてしまつたものもある。さうかと思ふと又或者は岩の狹間から微な鳴動と共に盛に濛々たる白烟を噴出してゐる。宛ら溫泉の化物屋敷の縮圖だ。十間とは隔てぬ向ふ岸には硫黄の沈澱してゐる處が少くない。恐らく河の中からも亦湧き出してゐるのではあるまいか。岩の裂目といふ裂目は、湯の沈澱物でセメントを塡たやうに塞つてゐることから考へても、此附近に湯の噴出の多い事が察せられる。

歩廊の突き當りは高い絶壁となつて、上流の河身は鋭く左に一曲し、下流も亦高い絶壁の間を河は右に折れて、するりと姿を隱してゐる。全く袋の底に閉ぢ込められた感じだ。どうもがいても容易に出られるものではない。

今日も時間はまだ早いが、此處に泊ることにした。平地が無いから河原に小屋掛けして、茅を厚く敷き均したので少しも體が痛くない。河原と岩壁の間に湛へた豊富な湯へ河の水を堰き入れると、好い頃合の溫泉になる。岩磐は裸足では歩けない程熱いから、そこを付け込んで、汗に汚れた物を皆洗つて岩の上に擴げて置く。明る朝になつて見ると果して熨をかけたやうに乾いてゐた。實に贅澤な野營であつた。

六　仙人谷を上る

三日。今日も快晴である。出懸けに一風呂浴びて、午前七時名殘惜しい野營地を後にした。岩壁の上を河に沿うて仙人谷に出たいと思つたが、それには半日以上を要するといふので、昨日下りた瀑のある澤を暫く登つてから、澤を離れて左に雜木の茂つた斜面を一時間程上ると尾根の上に出た。南東に鹿島槍ケ岳、牛首山、岩小屋澤岳などが見え、南には仙人山の尾根が間近く聳え立ち、北には餓鬼奥鐘の連嶺の上に猫又山の雪が眩い光を放つてゐた。

此處から瞰下した仙人谷は、豫期に反して思の外に明い谷であつた。陰鬱で暗い、そして木はあつても岩巣（いはす）だらけで、一寸途方に暮れるのではあるまいかと想像して、心をときめかしてゐた此谷が、しかも黒部本流への落口に近いこのあたりで、斯くも打ち開けたなごやかな姿をしてゐやうとは、誰が思つたらう。仙人山から東へ續く山稜の一峯二一七三米の三角點から派出された對岸の尾根こそは、木立の繁つた急峻な側崖が押し迫つてはゐるが、此方（こつちがは）側の中腹から谷底へかけては、割合になだらかな斜面で、雜草や灌木が青々と生へ茂り、こんもりと盛り上つた栂の大木が疎らに散生して谷風にそよいでゐるさまは、人里近くの谷地（やち）にポプラの木が生えてゐるやうな感じである。しかしこれには大きな犠牲が拂はれてゐるのだ、尾根の側面を薙ぎ取つた恐ろしい大崩壞に因つて、地貌が一變したものであることは、脚の下に赭色の岩膚を露出してゐる大きなガレから察せられる。谷間に點在してゐる栂の木などは、恐らく土や岩と共に頽れ落ちた若木の生長

したものかも知れない。歳月といふ自然に取りて唯一の良醫は、この大疵を殆どそれとも分らぬ迄に癒してしまつてゐるが、流石に赭色の大ガレのみは、夏は眞向から直射する強烈な日光に、冬は又頻發するであらう雪崩の爲に妨げられて、どうにも手に負へぬものか、當時を物語る記念として、赤裸のまゝに殘されてゐる。其眞下よりは稍や上手に當つて、四五丈の瀑が全容を露しながら、白く懸つてゐるのが瞰まれた。

黒部本流に目を移すと、上流は仙人山の岩瘤だらけな山稜に遮られて見る由もないが、東谷の出合あたりから右斜に折れて、仙人谷の右岸をなす尾根の岩壁の下まで來ると、其裾を洗つて溢れ漲る藍靛色の流が初めて眼に入る。岩壁の高さは二三丈に過ぎないであらう。其上は濶葉樹の茂つた斜面が上るに從つて次第に傾斜を增すと共に、針葉樹が多くなつて、其間から白くされた岩骨が剝き出してゐる。水に臨んだ岩壁の一箇所に、木を組んで七八尺程河に迫り出したかけはしめいたものがある。二週間許り前に劔澤を目指して出發した近藤君が目的の澤が通れなかつたので、仙人谷を下つて案内者の平藏に黒部を泳ぎ渡らせたといふ場所に違ひない。實際それから下は河の落差が急に加はつて、水勢一段と激しく、白く泡立つ大うねりが仙人谷の出合附近で巨岩に扼せられ、其兩側を渦まき流れてゐる。若し止むなく河を泳ぎ渡るものとすれば、其外に適當と想はれる場所はないのである。此附近は黒部川の河身が甚しく屈曲してゐる所で、左右から突出した山の鼻づらをこづきながら、不格好な弓字狀をなして、岩崖の底深く一條の活路を開いてゐる。栂やシデ、槭などの濶葉樹が岩の斜面にしつかりと根を下して、綠の蔭を翳してゐる木の間傳ひに、どこからともなく大嵐の吹きすさぶに似た音が響いて來るが、この尾根の高所に居てさへ、河身を縱觀し得るのは、僅に其あたり數町の間に過ぎない。

尾根に立つた儘三十分餘を眺望に費して、いざ谷に下らうとする時、助七から「旦那方これからどうするね」と聲をかけられてハツとした。どうするもかうするもない、私達の目的は初めから平まで遡上することにきめてある。今更案内者からこんな相談を受けやうとは思はなかつた。しかし朧氣ながらこの事あるを豫期しないこともなかつたのである。これから奥へ進むには、是非とも右岸に渡らなければならない。それには仙人谷の出合に近い河の中の巨岩に橋を架けて之に移り、岩の上を足溜りとして、更に其橋を引いて對岸へ渡すのである。これは氣骨の折れる上に、可なり危い仕事であるにきまつてゐる、何時間を要するか見當もつかない。私は緊張した重苦しい氣持で架橋の説明を聞きながら、瀧津瀨をなして奔流する河の中に横たはつた大岩を見詰めたまゝ、斯樣な際にいつも長次郎から聞く「なに、案じはねえ」といふやうな賴母しい聲のかゝるのを空しく、實に空しく待つてゐたのであるから。

それは然しどうでもよかつた。一行の糧食は辛うじて三日を支へ得るに過ぎない。これから上流の遡行は、今迄の經過から推して、二日や三日で容易に爲し遂げられるものでないことが判明したし、況して斯樣な旅に何よりも大切な人夫の和を得てゐないことから考へて、此儘行進を續ける氣には如何してもなれなかつた。それで希望の幾分なりとも充し得た事に滿足して、思ひ切つて本流を離れ、仙人谷を遡つて、立山の室堂に出ることを心の中では既に思ひ定めてゐたのであつた。

兎も角も谷へ下りることにして、脚の下の赭いガレを右に横斷してから、草原を眞直ぐに下つた、この下りは案外容易で、十五分とはかゝらぬ中に、上から眺めた谷地のやうな處に著いた。丈高い草や矮小な灌木が叢生して、ごつごつした大岩に掩ひかぶさつてゐる、これはデブリーであるに相違ない。其中を押し分けて行くと、歩く度に足を掬はれて、漸く谷底近くまで辿り著く間に、幾度となく前にのめつたり横に倒れたりした。もう此時は誰も口に出しては言はないが、此處から引き返すのが當り前のことであるやうな顔をしてゐた。

夫から身輕になつて、黒部本流の渡場を見に行つた。仙人谷の落口には大きな瀑が懸つてゐるが、上からでは望めない。槭などの古木が茂つてゐる右岸の崖を下りて、斜にのり出した木の枝に憑れながら、横さまに見上げる、それでも深く抉れ込んだ岩壁の奥にあるので、瀑身は全部見られなかつた、五六丈の高さであらう。轟韜の響きは近いだけに黒部本流の瀨の音にも紛れない。瀑壺から溢れた水は、又低い瀑となつて本流に躍りこんでゐる。後に冠君の撮した劔澤の落口の寫眞を見て、よく似てゐると思つた。

本流の左岸は絶壁が續いて、其上は樹木の茂つた急崖である。横を搦むのは非常に困難らしい。平藏が體に綱を結び付けて、其上から跳び込んだといふ俄造りのかけはしは、一町とは離れぬ上手に、太くもない木組みがふらふらになつて殘つてゐた。其下は青藍色の迅流が對岸に斜に横たはる大岩床の表面とすれすれに駛走してゐる。川幅は五間とはあるまいと思つた。深淵の底は青黒く沈んで深さが測られない、しかしよく見れば流の動搖の激しいのにおどろく。水面ばかり見詰めてゐた目を川から離すと、あたりの物は忽ち羽が生へて飛ぶやうに逆に走り出す。立つてゐる地面までが夫にひかれてぐらぐらと動く、目が眩んで倒れさうになる。不思議な魔力を湛へながら沈默してゐる水の姿は凄いものだ。此處に跳び込んで泳ぎ渡つた平藏は、さすがに剛の者程ある。

對岸の大岩床は、其根を長く水底に突き出して河床に段を成してゐるらしく、流はそこで急に一度大きく波を打つて白い波頭の立ち續く激湍と化し、少しく右斜に流れて、仙人谷の出合に近付くと、河の殆ど中央に蟠る巨岩に思ふさま衝き當つて、喊の聲と共に水烟を揚げてうねり狂つて行くが、すぐ右に曲つて絶壁の間に身を潜めてゐる。助七はこの巨岩を指して、あこへ橋を架けて向ふ側へ渡るのだが、水が多いとむつかしい仕事だと若者に話してゐた。架橋の困難は一目で知られた。これがうまく成功すれば、右岸は岩はあつても壁ではないし、傾斜は緩く、森林が水際近くまで寄せてゐる所もある。河が左に曲らうとするあたりに岩の崩れがあつて、其先には草原らしい明るい綠の斜面が見えてゐた。まづ東谷までは無難であらう、夫れから先は殆ど想像もつかない。對岸の岩間からは、湯の烟が二筋ばかり白く立ち昇つて、河風に吹き颺げられては空に消えて行つた。

荷物を置いた所に戻つて、うら淋しい晝食を濟し、午後十二時半に出發して仙人谷を上りはじめた。尾根の上から見下ろした瀑は、近付くと五段に分れて落下してゐる大瀑で、其中第二段のものが最も高く、尾根から見たのはこの瀑であつた。左に瀑を見ながら藪の中を進み、頃合をはかつて谷に下ると、うまく瀑の上に出られた。

狹い谷は全く瀑と奔湍との連續で、河床には奎角の鋭い岩が亂れ立ち、水は其間を狂奔してゐる。河の中に淵が續いて通れなくなると、岸に追ひ上げられて、根曲り竹や灌木につかまりながら、崖の横を搦んだりした。それも長くは續かず、足場が悪くなつて又河に追ひ下ろされる。直立した岸壁は高くはないが二丈位はある、綱がなければ如何にもなるまい。こんな事を二三度繰返したので、小うるさくなつて、つくづく雪溪の戀しさが身にしみて思ひ出された。

此谷にも仙人ノ湯の外に、湯のにじみ出してゐる處が數ケ所ある。孰れも湯垢が岩壁の面に奇怪なさまざまな線を描いてゐる。其中の一箇所では稍湧出量が多く、岩の間の河原になみなみと湛へてゐた。一浴を試みたい氣持に驅られたが、すぐまた汗になることを考へて思ひ止つた。

一時二十分、待ち憧れてゐた雪溪に達した。もう占めたものだ。顧ると谷の正面を限る後立山山脈には、積雲の大塊が屯して盛に活動してゐる。もくもく湧き上る白銀を溶したやうな頂のあたりには、領布雲が二すぢ三すぢ横に靡いてゐた。行手を仰ぐと仙人山の尾根にも雲が低く垂れて、一雨來さうな氣配である。遠雷の響が何處からともなく聞えて來る。雪溪を吹き下ろす冷い風に、蒸し暑い谷の瘟氣がとれて、久し振りに蘇つたやうな氣持になつた。左岸の大虎杖の林の中では珍らしく鶯が囀つてゐた。

一時間も上るともう雲の領であつた。丁度そのあたりで雪溪が二に岐れてゐる。左の溪の入口に近い右岸から、白い烟が雲にも紛れず濛々と立ち昇つてゐた。それが仙人ノ湯である。泊るにはまだ少し早いし、先を急ぐ必要があるので、惜しくも夫を見捨てゝ右の本谷に入つた。朗かな駒鳥の鳴聲が沈滯した谷の空氣を賑はして、爽快な音波を鼓膜に傳へる、夫に和して大瑠璃の囀りが近くの木の間から洩れ聞えた。この四五日荒つぽい河音にいぢけ切つた耳には、なんと微妙な調であつたらう。暫くして溪が又二分する、左を取つて行く間もなく又二つに岐れた、今度は右を取つた。眺望がないので足の進みもおのづと早い。傾斜が次第に緩くなつて、雪が絶えると深山榛、七竈、白樺などの生へた草地に、紅花イチゴ、日光黄菅などが咲いてゐた。この草地は尾根の上まで續いて、其處は廣い平になつてゐる、木立もあるが森林といふ程ではなかつ

た。四時十分。左に少し行くと仙人ノ池が叢に埋もれた一面の古鏡のやうに光つてゐる、野營には誂向きの場所だ。其畔りに天幕を張り小屋を掛けて、火にあたりながら夕飯を濟ますと、七時頃に大雨が降つて來た。連日の疲れで今夜はぐつすりとよく寢た。夜中に時鳥の鳴く音を聞いたやうな覺えはあるが。

七　室堂を經て下山

四日。午前五時頃目が覺めた。外では焚火がパチパチ音を立てゝ燃えてゐる。天幕から出て空を仰ぐと、曇つてはゐるが高い卷層雲だ、眺望は四方に開けてゐた。間近い劒の八ツ峯から三窓の頭へかけて簇立した岩峰の群が眞先に目を惹く。此處から見ると三窓の頭は、三つ許りの尖峰が鋭く天を刺して直立してゐる、一群の王者だ、右に三窓を隔てゝ小窓の頭が蹲踞し、左に續く稍低いが根張りの大きい頭の尖つた二三の峯は、近習であらう、夫から一段低く六つ七つの岩峯が一列に押し並んで、圓味を帶びた峰頭を北に傾けて、稽首してゐるかのさまがある。襞といふ襞は雪に埋められ、堅剛な肌は偃松に掩はれて、ざらざらの岩屑などは何處にも見られない。何といふ素派らしさであらう、思はずヤアと聲をかけて、のけ反らないではゐられない氣持になる。南には別山、眞砂、富士ノ折立から、遠く野口五郎、南澤岳などが見え、北より東にかけては、猫又山から、朝日、白馬、鑓、奥不歸、唐松岳に至る後立山山脈の山々が望まれた、さまざまな形をした殘雪が山の特徴を語つてゐるのが懷しい。

七時四十分、池の平に向つて出發する。附近の林の中で鶯や目細が頻に鳴いてゐた。それに交つて郭公の聲らしいものも聞えた。草原を右に登つて仙人山の頂上に立つと、東に五龍、鹿島槍の二山が仙人尾根の上に頭を擡げ、黒部別山の右に、舟窪の尾根を超えて、遙かに大天井、常念あたりが朧げな姿を雲間に垣間見せてゐた。

此處で助七の一行三人と別れることにした。今日の中に小黒部谷を下つて村まで歸るのだといふ。用意に殘りの米を與へ其勞を犒つて、急ぎ足に遠ざかり行く後姿を暫く見送つた。私達四人は荷を造り直すと、池ノ平の鞍部へは出ずに近道をして池の畔に下り、そこから右に岩徑を傳ひて小窓の雪溪に出で、やがて三窓の雪溪と合した北俣の河原を辿つて、劒澤との出合に達した。九時四十五分。

このあたりの樣子は、四年前に來た時とは見違へる程に變つてゐた。誰もがよく天幕の代用とした大岩の根元などは、大小の石に埋められて、河原も同樣である。これから上流の劒澤も雪溪から下は木が繁り河筋も變つて、全く面影を異にしてゐた。この狹い谷の中でさへ變れば變るものだと思つた。八ツ峯の麓に當る雜木の茂つた小山の裾を廻ると、河は稍右に折れて長い雪溪が始まる。眞砂澤を過ぎ、長次郎谷を送り、平藏谷を後にして、何處までも雪の上を辿つて行く。登るに從つて勾配の緩くなつた雪溪は、次第に左へ廻つて南を指すやうになる。谷はいつしか扇形に開いて、途切れがちの雪が暫く跡を絶つと、間もなく別山裏の平に達した。

この廣い盆狀の高原に、しつとりと水を含んだこまかい砂地に、嫩草が褥をしい茶屋うに生ひ茂つて、如何にも踏み心地が好い。夥しい珍車の白い花がそれへ霞模樣を染め出してゐる。草に涵され草を養つてゐる水の集まりが中央に二三の細流を湛へて、雜魚や水スマシの群こそ見えないが、里の小川の俤を偲ばせて、靜に山の影を浮べてゐた。岩の多い水涯の濕地には、色丹草の群落が恰も苔でも蒸したかと思はれる程に密生して、黄に赤味のさした細莖に三四の花梗を描き出し、五瓣の小花を咲き連ねた風情は、濃紅な白山小櫻や濃紫の千鳥桔梗に比して、華やかさに於て較べものにはならないが、またなく可憐である。

急な雪田を登つて、別山乘越に着いたのは午後四時であつた。北俣の出合から普通四時間の行程であるが、荷が重いので六時間餘を費してゐる。こんな思い荷を背負つて谷を上つたのは初めてだ。三窓も長次郎谷も先年より雪が少ないやうに思はれたが、地獄谷から室堂方面に眼をやると、今年も雪の多いことが首肯かれた。岩と緑とそして殘雪とに按排された美しい山谷の模樣は依然として變らぬ美しさを持つてゐた。午後から次第に荒れ氣味となつた空には雲が低く垂れて、雨氣を含んだ南風が吹き募つて來た。休んでゐると汗にまみれた肌がベツとりして餘計に氣持が惡い。それでもよく休むので、午後六時に疲れ切つて漸く室堂に辿

り著いた。

五日は豪雨を伴なつた南の暴風が未明から荒れ狂つてゐた。一日滞在しやうかとも考へたが、早朝づぶ濡れになつて登山した百餘名を合せて、二百五十人に餘る參拜者で、室堂の中は蜂の巢を突ついたやうな騒ぎだ、横になる席もない。中村君と相談して下ることに決め、返りの人夫を一人雇つて、午前八時に結束して下山の途に就いた。十二時、栂坂の茶屋にて中食。午後四時芦峅に達して、私達二人は寶泉坊に宿り、長次郎達は家が近いので歸つて行つた。麓では風も強くなかつたが、雨は終夜歇まなかつた。

明くる六日は、曇つてゐた。朝春藏（平藏の弟）が訪ねて來ての話に、昨日雄山に登つた參拜者の中に行方不明の者が二人あつたといふことだつた。午前八時頃迎ひに來た長次郎達に送られて、晝頃五百石に著いた。そしてお互に黑部の谷奥で昨日の嵐に遭はなかつた幸運を心から喜んだのであつた。（完）

（大正八年十月稿、昭和十年七月補筆）

6　沼井鐵太郎　「大町より下廊下へ」『山岳』第15年第1號

1920（昭和9）年8月31日刊　日本山岳會発行

要　約

1919（大正8）年8月2～13日の記録。

メンバーは、沼井鐵太郎、佐藤静馬（大町の案内人）、宮原勇吉（ポーター）、内山忠春（同）。

行程は、鹿島川・大川沢・シラタケ沢～五龍岳～八峰～東谷下降～黒部川下廊下～棒小屋沢遡行～棒小屋乗越～扇沢。

※八峰から東谷への横断初記録。

※沼井鐵太郎は日本山岳会会員。

自大正八年八月二日至同十三日。

大町―鹿島川―五龍―八峰―東谷―黒部川―棒小屋澤―扇澤―大町。

案内者、佐藤靜馬。人夫、宮原勇吉、内山忠春。

一　鹿島谷より五龍岳へ

もう私達は大町から二里半も離れて居た。空は七分の亂雲を見せてゐたが、今しも輝く太陽は、リュックサックから首筋に掛けて、さつと光を撒き散らす。とぼとぼと歩む間に「何の爲に今歩いてゐるんだらう」と思つたりする。火山の裾野と違つて、峽間の陽はぢりぢりと燒き付けては來ない。けれども一週間の蟄居が終に汗腺を爆發させて、只さへ夏負けの私はうんざりしてしまふ。今朝迄緊張してゐた心は、唯樹蔭眞清水と其等の考にのみ占領されて仕舞ふ。軈て鹿島大神の宮に來て、荷物を置くと、急いで上つて社前に額づいた。納涼と開運の祈禱がごつちやになつた。散々町で想像に耽つた後なので、別に黒部の話も出ない。其内日は影つて來たので氣が付いて復た北を指す。

午後二時二十分ツメタ澤を渡り、更に本谷を渡つて河原に一休みする。ツメタ澤の奥は木は欝蒼として雲が暗い。見廻す空も青色は將に隱れんとする。さアと先達の聲に立上つて、小屋の側から一二間上の林道に上つて、山の鼻を廻ると、鹿島の流は見えつ隱れつ私達の左をせゝらいでゐる。對岸の山腹は一帶に闊葉樹林で相變らず山懷の綠も美しい。道は一尺幅ばかりにか細く、蛇の樣にうねつて草の繁みを分けて行く。水面まで約二三間、其から十間二十間と段々に競り上つて、時には靜かに下る事もある。其内ポツリポツリと厭な雨がやつて來たので、皆着呉座を被ふたが、草や木の小枝が擦れて、いくら工夫しても其不快な單音を免れる事が出來ない。三時五十分に鹿島槍側に一の澤を見る。此邊はそろそろ山奥らしく、尾根の上はコニフアーの類も增して來る。栂の林を通つて坂を上り詰め、檜・栂・石楠等が一箇處に蔓つた處に來る。之から右へだらだらと下りて又一つ鼻を曲ると一寸澤らしいのにぶつかる。しつとり濡れた丸木橋をネールドブーツで危げに通り越して山懷に入つて行く。其處が一寸平な處で道の右に一軒の小屋が潰れかゝつてゐた。

此が泊場で、ツメタ澤合流點から凡一里半計りであらう。雨は止まないので楓の下に蹲んで待つてゐると、三十分後にやつと上る。先づ天幕を張る。其から火を焚いて、草の下敷に絲立を布いて、暖い飯とミヅナの汁を食べて、天幕に潜りこみ雜談に耽る事型の如しだ。谷までは二町もあらう、聞えるものは澤の、それも愼しやかの忍音、駒鳥の聲が夕暮の空氣に沁み渡る。流行に外れた處はよい、初日からしんみりした心持を味ふことを得た。

昨夜は薄着であつたが暖かに寢られて、眼が覺めても頭が判然する。駒鳥の鳴く澤で手水を使つて歸ると、山の上に大きな二重の暈が見える。一重の暈は雨で二重のは日照だと靜馬は極めこんでゐる、軈て其は消えて、谷を罩めた水蒸氣も上り、日光が天幕を照す頃、食事を終へてぼつぼつ出かける。道は遠く東側

に入り込んで、下りとなると再び谷へ近づく。鹿島川も奥山の裾を縫ふて流れるのだ。花崗岩の河床、潺湲たる水聲、樹木はすくすくと立ち繁り、地圖に讀む西側の崩れも岩壁も露はでない。半時間程に道は益〻河身に迫つて、左手、鹿島北槍の側尾根から一つの澤の、上手は雪渓、下は暗き洞穴の如くなつて落合ふのを眺めて過ぎると、一叢の藪で立ち消えになる、そこで河原に下りて一休する。鹿島槍側は如何にも急に反りかへつて、偃松の色すら打仰げない。此からが何日費すか知れない無人境の旅だ。然し二俣迄は靜馬に、そして只彼一人に新しい記憶がある。

去年の夏、靜馬は慶大の豊邊君を案内して大黒から五龍に登り、南へ縦走しやうとした時、濛々と霧が懸つてしまつた、ふと東方が開けると、鹿島川が白く光つて河原も廣く見えたので、下る氣になり、尾根から危險を冒して二股に下つたといふ事である。で、彼によると右股（オーゴ澤）を上りつめる方がよからうといふ。此も盲目の杖の様なもので、うまく當つて呉れゝばいゝといふ頗る勝手な希望に過ぎなかつた。夫れにも拘はらず私がかういふ迂廻路を撰んだのは、唯だ恐らく記錄のない鹿島川の水源を極めたい爲であつた。

其から河原を傳つて右へ左へと徒渉する。水深は上手に渡ると膝までもない。川幅も幾らか開けて來て、其儘十町計り進むと、遠見山から澤の落合ふ廣い河原に出る。其處の右岸に高さ四間長さ五間許の殘雪が横はつてゐる。海抜千三百五十米の地點である。廣河原を通過すると一つのタルがある。傍の藪を越えて上の河原に出ると、もう鹿島川も下流の隱和な姿を見せないで、傾斜が眼に見えて増して來る。水量も渓谷の小さい割に豊富で、處々徒渉し切れずに岩を乗り越えたり、へつったりする。其内谷は西へ急に曲りこんで、遠見山の側の山腹が中々馬鹿にならぬ惡場を見せ始める。靜馬は去年此處まで二股から山腹を横にまいて來て、瀧のある澤からやつと谷に下りられたといふ。私達は食事しながら彼の話を聞いた。

再び出發したのが十一時過で、三十分も遡ると右から小い澤が落合ふ。其處に誰か泊つたと見えて焚火の跡があつた。川は尚左に曲つて水の落差は愈〻増して來る。四五町も進んで見ると、岩は更に大く流も深く岸を傳ふ事が稍危險を感ずる。一ケ處美しい瀧があつて堰き落ちる水は深い淵に蒼渦を巻いて復た滾々と溢れ出る。暫く眺めて何と名を付けやうかと考へたが、どうも適當に表す事が出來ないので止めてしまつた。

此瀧は先づ無難に左側から上つて暫く行くと、又谷は少しく左へよれる。其處から十町程の距離に二股を分つ尾根が見える。川幅は一寸廣くなつてゐるが兩方とも深く通れさうもない。靜馬と勇吉は荷をおろして左側の岩をへつって先を見に行く。暫くして私も默つてゐられなくなつて、岩壁を下りかけると、ふと背がつかへて跳ね反され、どつと水に落ちこんだ。見るみる一間計り流されたが、運よく石に足を挟れて助かる。瀬の所だから好かつたものゝ、全身濡鼠となつて大に器量を下げた。其内靜馬等も歸つて來てどうも先が惡いといふ。鹿島川のタルと淵、吾々はもう二日目に谷から威嚇されたのだ。無理にも行けば行かれるだらうが、第一の目的からして冒險が伴ふのでは叶はない。既に一時間から愚圖々々して居る。其處で右岸の藪を上る事とした。

五十米位脊尾根の様な處を登つて右へ下り氣味に進む。掻き分ける事凡一時間半で殘雪のある涸澤に出て休む。眞正面に高く右股の雪渓が雲を戴いて眼を射た。近く蓼々と瀧の音がずる。愈〻其處が二股だといふので、大虎杖の中を斜に下りて谷底に下り、對岸へ徒渉する。木をくゞり鼻へ出て見ると、左股の瀧が間隔二十間も置いて、三段に連るのが見える。高さは合せて十間許だが、中段は二條に分れて中々美事である。其上は左股の雪渓が枝を擴げて白冷の光を投げてゐる。峯は雲の内だが、折々顯れる小尾根は岩の肌も荒々しく俄かに高山景を示す。然し靜馬は景色所ではない、一服すると立ち上つて勇吉と共に上の方へ泊場を捜しに行く。若い人夫と私とはヤマハンノキに攀れながら瀧の音に茫然としてゐる。

物の二三十分もして二人は歸つて來た。雪渓まで上つて見たがいゝ所も無いし風當りも強いので引き返したといふ。止むを得ず下におりて、右股の谷が落ちこまうといふ所、水面から一間程上つた岩の間を均らして天幕を張る。今日もぱらぱらと雨が降つて來る。其が霽れて中食の餘りを食べ終ると今度は本降りになつた。折角燃えた火が弱くなつて其代り谷の水は忽ち濁り、轟然たる響を發して岩を撃つ。三階の瀧も醜惡な相貌を呈した。其南側の崖から泥水の瀧が落ち始める。まさか天幕に水はつくまいが、場所が場所とて氣

味のいゝものではない。人夫達は先達ての雨續きに白馬の祖母谷で悲慘な目にあつた話をする。早く上(あが)ればいゝ、其ばかり思つてゐると一時間位は遠慮なく過ぎ去る。何だか左の手首が痛い。思出すと其は今日墜落した時に痛めたのだ。尾根の雨は冷く恐しいが、谷の雨は今にも身體が腐つて腐植質(ヒユームス)にでもなつちまひさうで不快極まるものだ。然し其内に大雨は小雨となり消えかけた火が自ら燃え出して、到當霽れて呉れる。午後七時半である。山の中の者は正直で、月が雲を破つて出る頃には、谷の水は再び清くなつた。九時近く夕食を終る。蕗の味噌汁で腹一杯お粥を啜つた。

四日の朝は暗い内から度々眼が覺めた。 雲が赤いなと窓から覗いて見て又うとうとする。其内に日が出て來る鹽梅なので起きて顏を洗ふ。七時頃朝食が濟んで岩の頭に腰かけて一服してゐると、何だか空がどんよりして來て、高い峰には霧が懸つてしまふ。風は西北から吹いて來る。今日一日無事に過(すご)せば第一の目的が達せられるのだ。思へば鹿島川の源が大正八年の今となつて始めて自分の樣な者に探られるといふのは可笑(をか)しい。たとへ其が深さに於て高瀨に劣り背景に於て籠川に及ばずとも、此谷ばかりが「つまらない」といふ實證もなしに閑却されてゐたのは寧ろ不思議である。

八時半頃出發。藪を上つて直ぐ上のタルを避けて右股の河原を上る。去年靜馬が來た時は二股まで雪溪があつたさうで、左股の三階の瀧の上から右股の落口附近へ下りたといふ。時候も變つてゐるし又今年は殘雪の多い場所が去年とは異る（扇澤などがさうである事を後に認めた)。二三町上から殘雪が現れる。雪溪はひどく割れて一寸通過困難の所もある。左から瀧のある澤が落ち合つて、其から左へ曲るあたりから稍〻長い雪溪が始まる。傾斜は二十度計りであらう。同じ水仲間でも固體となると俄かに取りすまして風物を一變する。五龍岳は折々雲の切れ目に鑿の跡も荒々しく大岩塊となつて憤起する。偃松の靑さも見えぬ恐しさ、復た霧が舞ひ上つて、足許の雪溪のみが徒らに生白い。雪の波形に踵(かかと)を押へて歩一歩高く登る、左側は草の柔い島の樣な處だ。中には野營に適する平らな所もある。見るから旨さうな薊が生えてゐる。人夫は早速束に摘んで荷の間に挾む。雪溪は一寸切れて、再び始まると今度は少しく急になつた。

左手の岩蔭に休んでゐると、空は段々いけなくなつて、今迄見えてゐた五龍續きのぽろぽろの岩峰も全く濃霧に閉されてしまつた。稍透いて見えるのは村界から二股迄下りて行く尾根の側面で、谷は此の處廣く、三條ばかり彎曲した雪溪の分岐點になつてゐる。晴天ならば當(あて)がつくといふものだが、と靜馬は私の方を顧みたが、如何樣(いかさま)五萬分一の地形圖で判斷しやうにはせめて十町位も見通しが利(き)かなくてはならぬ。後(あと)で考へると、此から左の雪溪を上れば豫定の如く五龍の南方に達せられたのだ。が、今は徒らに考へに耽る時でもない。何でも早く國境に取り着いて一夜の避難所を得る必要がある、其處で岩蔭を出て、なせになつた草原を西北に越えて、中央と覺ゆる雪溪に取りかゝる。その緣に水が小走りしてゐたが、誰も唇(くち)付けやうとする者なく、雪と土の境を無言の内に踏み上る。ふと頭を上げるとぱつと霧が開いて、再び五龍附近の將に崩潰せんとするが如き岩峰がぬつと出る。忽ち其は厚い幕に隔てられる。霧小便が遠慮なく注いで服の毛先に細(こまか)い玉となつて附着する。さと打拂ふと脆くも碎けて掌(てのひら)は汗の如く濡れてしまふ。その灰色の中に獨(ひと)り岳雀と鶯の聲のみが、何の憂へ氣(げ)もない。

一つの巉岩の上から、雪溪は益〻急に益〻狹(せば)まる。咫尺を辯ぜぬ霧も、幅三間といふ立て籠(こ)んだ雪の往來では、左右兩面岩の根が今にも拔けて、瓦落々々と崩壞するのではあるまいかと見える。雪面の傾斜は三十五度にも及んだ。折惡しくカンジキを用意しなかつた足許(もと)は、ともすると淺い波形から滑り勝ちである。霧小便は中々止まず、氣溫も餘程低下したのであらう、足の指は感じが鈍くなりかゝつた。見返ると今年始めて山に入つたといふ若い内山は、滑る足を持て餘しながら「こんな目始めてだ、俺(おら)いやんなつたね」と苦笑する。「何(な)あに、これ式」と元氣のいゝ勇吉が立止ると、それでも「豪(えれ)えもんだの、先が見えたら猶更恐(こは)くて登れねぇずら」と感心する。「さうともさうとも。劒の長次郎谷の樣だ。」と靜馬が煙管を喰(きせる)はへ出す。

かうやつて何度息を入れたか分らない。立(たて)壁の雪溪、足を入れたら其儘上るか下るか二つの内一つだ。然も尾根の那邊へ出るか、又此最後に雪が消えて綱も懸けられない崩れた絶壁に突當るかも知れないけれど、

約十町も登つて右側の壁が丸く後退りして行つて、其處に最早白檜の孤影も見えなくなつた時の事だ。「もう尾根に近いのだ」と思つて、人夫達の休む暇に、試みに右側の灌木の影を目標にザラを攀ぢ登ると、あつとばかり私は躍り上つた。其處に霧に濡れて生々としたウルップサウが咲いて居る。霧小便は終に岳の冷い雨となる。絲立一枚被つてぢつとしてゐると、ひゆつひゆつと飛んで來る風は又も雨を吹き下して、一時ちらと本尾根を現はす。とうとう無事に來られたと、彼等に知らせる樂しみを豫想して待つて居ると、軈てざらざらッと氣味の惡い音を立てながら、荷の重い三人が登つて來る。私は「おーい、尾根は眞上だぞ」とどなつた。返事は微であつたが一同も元氣らしい。

四人揃つて一先づ安心して此ザラ尾根を斜めに搦んで行く。本尾根へは十分も立たない内に出られた。けれども霧は霽れさうもない。信州側から颯々と襲ふて來る。さアかうなつては泊場すら見付けるのが容易でない。既に三時半頃だ。其處で今立つ地點が何處であるか考へる餘裕も無く、越中側に野營の準備をする。丁度尾根の緣に岩角が少しばかり高まつて信州側からの風を幾分避けられる處で鳶とアルペン・シュトツクで石を掘り返し、平にしてやつと天幕を張る。霧は復た雨となつて來る。と間も無く雨風は強くなつて、終に焚火する事も絶望となる。腹に容れたものは中食の殘だけだ。其れも直ぐ食べ終つて、僅かに敷いた偃松の上にごろりとなる。何かかう恐しい物を期待してゐると夕の來るのも早い。何時の間にか人の顔も見えなくなつて、天に吠え岩角に擦れる風音のみがあはれな宿りを包圍する。

二　五龍より八峰へ

兎に角一夜は寢たものと見える。氣が付いて見ると風は何時しか越中側に廻つて、間斷なく天幕に吹き付ける。晴れて呉れればいゝが、さうしたら雪を溶かして米を煮てとかゝる場合の想像は陽光と暖い食物の他に移らない。一時間二時間と時は用捨なく過ぎて、もう正午の頃である。退屈は不安以上に心を占めて、色々な食へさうな物を引きずり出す。魚煎餅・干鱈・干杏・黑砂糖・白髮昆布。人跡未到の谷へ入るといふので食糧も絶體必要品の他は大制限を加へたから、中型の私のリュックサックからは魔術でも使はなければ殆ど出る物は無い。終に生米を嚙り出したが、忽ち齒が浮いて痛いから止めてしまふ。瀨戸引の水呑に雨水を入れて、蠟燭の焰で氣永に暖める事を工夫したのも此時だ。湯氣が立つ迄はぢつと見てゐるが、天幕の垂布に當つて水漬いた足先からづきんづきんと冷氣がこみ上げて來て、 最早我慢仕切れず飲み乾してしまふ。ビスケットこそ持つて來るべきであつたが、何分私は餘り好かないので止したが、今になつて思ひ當つた。

午後から益々猛烈になつて、天幕の支柱が屢々倒れさうになる。其度に勇吉が素速く這つて出て、綱の押へに重い石を載せて來る。其が復たぐらぐらする。天幕の屋根の兩面は風力が加はるとぴたぴたと打合つて、最早水に飽滿し切つた布からは、寢てゐる顏の上に飛沫を浴びせる。轟と鳴る。そら今度こそ、と決心する。が金二十一圓也の屋根型天幕も中々強い。あをられ、叩かれながら四人の生命を抱いて中々綱も切れやうとはせぬ。

不安の第二夜が來た。頭と足は水に濡れて、僅かに腰から胸のあたり迄後生大事と毛布にくるまつて、苦しい睡眠を取らうとする。物も言はない。宵のロとろとろと寢かけると、寒氣の爲か濕氣の爲か、ぞくつと身に沁みて又々眼を見開く。何か夢を見た樣であつたが忘れてしまつた。上を仰ぐと吐息をついて又強いて眼をつぶる。

慥か午前三時の頃、魔夢から放されて意識が明瞭になると、第一あの耳につく嫌な空氣の震音がはたと止んでゐた。窓から見ると、澄みかへつた空に星光がきらめいて居る。もう大丈夫だと、俄に手はリュックサックの底を探つてウヰスキーの栓が開かれた。飮めない靜馬達も心からの祝盃を擧げた。方二坪にも足らぬ天幕内も何處となく賑かになつて、私の心は只管曉天の美しき色が慕はれた。そして感謝の念に滿ちてゐた。

終に夜が明けた。もう誰も窮屈な天幕内に長くなる者もない。肺に一杯フレッシュな大氣を吹ひ込んで、靜かに山と空に對した。南方近く聳立する鬼面の如き大岩塊は豫想通り五龍岳であつた。一昨日上つて來た

折ちらと見えて消えた、あの胸に殘雪を光らした峯が夫である。もし吾々が東面を下瞰すれば分かる様に、この潰滅に近い山陵の他の場所に取付かうとしたなら、どれ程の危難に遭遇したか知れない。私のやまはまんまと外れたが（後に八峰まで歩いて了解した如く）、其が反て好い事になつた。

八月六日。早朝五龍岳に登つて、東谷（カハラゴヤ澤）の様子を眺めてから引返して朝食を濟し、濡れたものゝ始末をして晝寢をする。午後一時頃出發。五龍山頂では霧の爲何も見えない。風は越中側から吹いて來る。十五分休憩して下りに向ふ。下りは中々悪い。下り切つて一峯に差しかゝると傾斜緩になつて稍安定を感ずる。之から幾つかの小峯を上下し乍ら高度は次第に減ずる。

小ギレット（原文ママ）と稱する所（有名なる八峰のギヤップ附屬のものと異る）を通り過ぎて、泊場所に着いた。此先にも泊場はあるが、此處に一泊する事にする。四時半頃であつたらう。靜馬は去年此處から鹿島川の二股に下りたのだといふことである。夜になると月が出たが忽ちまた隱れてしまつた。蝙蝠と思はる動物の飛ぶのを見た。寢たのは九時頃である。

八月七日。午前八時頃出發して偃松と石に包まれた尾根を上り、凡十五分程で第二の泊場に出た。東側は霧が深い。間もなく八峯小ギレットの手前に着いて、荷を下ろしてキレトの見物に行き、引返して下りに向つた。

三　八峰より東谷へ

もう十時を餘程過ぎたかと思はれる。愈々石の谷を下るとざらざらと崩れて全く氣味が悪い。右手に少々藪があるので成るべく其を傳つて行く。凡二百米も下つて其ナギは涸澤の形に狹まつた。最早靴では足許が危いので草鞋に穿きかえる。小さな懸崖を下つて間も無く雪溪に移る。此邊が八峯迂廻路の最低所で、小さい枝澤が岩壁のかげから幾つとなく忍び寄つて來る。雪溪は左程急ではないが、周圍の狀態が安心出來ない上に、片方に傾斜してゐるので歩きづらい。加之八月に入つた事とてがばと割れてトンネルを成してゐる所もある。用心深い靜馬は幾重にも注意を與へ乍ら私達を導いた。雪溪が盡きると小流となつて岩から岩へ跳び下りる。左右は綠の尾根が何時のまにかひしひしと迫つて來て、豫期してゐた恐怖を目（ま）のあたり見るのかと思ふと、俄然其處に第一の瀧が現れた。「來たな」と私は誰にいふともなく云つた。

瀧は水も有るか無しかの細いものであるが、其懸崖は高さ四五間もあらう。綱を掛けるにも便りがない。瀧壺は貧弱であるが、其から水條は一段を經て直ちに直下し、終に其儘鹿島槍側の赤兀の澤に到るあたり迄、姿を見せないのは、如何に深く如何に急轉して、山腹を走り下る事か。第二第三と益々大くなる瀑布の連續が當然聯想された。其處で私達は方針を變へて別方面を探る事に決した。

再び八峯ギャップ迂廻路の最低所に戻つて、南側に上ると人の踏んだ跡がある。白檜、唐檜の森中に一條の小徑が尾根の方へ消えてゆく。其口に野營の跡があつて、傍の木に知名の登山家の姓名が見える。一服すると靜馬は南方に傾斜を搦（から）んで偵察に行く。其影が木立に隱れてしまふと、殘つた者が木に登つたり、彼方此方歩いたりして様子を見る。東谷奥の河原がちらと見える。上方には例の大ギレトの頭が重りあつて高聳し、私達を威嚇する。じめじめしたヒユームスの臭に耐（た）えられなくて頻りに煙草をふかしてゐると、凡三十分の後に靜馬が歸つて來た。「どうだ」と聞くと、極めて自信あるらしく餘り多くは語らないで、も少し南へ移つて成るべくキレトの澤を避けなければ危險だといふ。また一服すると、一同はやをら立ち上つて、南方鹿島槍側へ、左を山にして密林を横切つた。直きに一つの涸澤を越えて藪をがさがさやつて行くと、復たも石の涸澤に出る。之を少し下つて林叢の間に潜りこむ。其處はシラベ、タフヒ、ミヤマハンノキ等の間に、珍しくも低く移住したハヒマツがによきによきと立つて、丁度東北地方の山の様だ。ハヒマツは中々深いが、さう長い距離ではないので墜落を免れる。すると尾根は急に木が疎になつて左寄りに下つて行く。しゝの道らしい跡を辿つて左側に下ると直ちに草生の急傾斜となつた。ミヤマハンノキ林の間凡五間の幅を以て一二町が程、咲く花は立山ウツボグサ、ウスユキサウ、アキノキリンサウ、ナツユキサウ、ヤグルマサウ、Aconitum sp. 及び薊の一種等である。實はあはれなお花畑だが、今迄磊砢たる岩石と闇黑な針葉樹林のみ

見慣れて來た眼には非常に優美なものであつた。此草地の左上には高さ五六十尺の幕（石壁）がはだかつてゐる。草地を殆ど滑り下りて立木の間に荷を置くと、又も先達の二人は偵察に出かけた。

最う峯から谷へかけて凡三分の二も下つたであらうと思はれた。けれど先に見て引き返したあの連續する瀧の相貌が、なほも色々新奇の想像を生んで、こゝの地盤の力なさ以上に心の落付が保てない。幕の上は繁りに茂つて、峯の上は元より仰がれず、只正面にどつかと坐した鹿島槍の牛首山尾根が、總じて赤く或は白く兀げたまゝのナギを垂れて、其足許に何事かありさうな氣配を示す。二人が歸つて來て下の樣子を報告すると、勿論異議はなく、再び「東谷へ」といふ唯一の希望を以て出發する。

草地の下は恠しげな一つの石の谿となつて居た。下りかける所が、土も石も草の根も、皆ぼろぼろと崩れて始末が惡い。一人々々離れて、よくやる樣に、細心の注意を拂つて下らなければならない。兎に角之を下りておづおづと石溪にかゝる。總じて岩石は堅いが、急さも急なり、がらがらの石塊があつたり、苔が生へて居たりして、樂（らく）ではない。行けども行けども同じ調子なので聊か氣が緩んで來た。すると急に異樣な音が發して誰か顚倒した。起きやう起きやうともがく内早くも二三間ごろごろころがつてやつと頭を上にして岩角に獅噛（しが）み付く。其が一番元氣な勇吉だつたのではっと思つたが、幸ひ擦り傷も無い。「大丈夫か」と覗くのを「何の何の」と例の調子であるのは嬉しい。だが餘り疲勞してはと少し下つて左に切れて灌木の間に荷を下（お）ろさした。午後三時頃であらう。異鄉を探る旅の心は、安らかな宿りへ、谷間の水へと急がれるが、一時の休みにも上方を仰ぎ、「これだけ來たのだ」と自ら慰めなければならない。

石の涸谷はなほも遠く、急に續いた。ふと前面を見ると、この澤の先は一段と急になつて最早本谷に落ちこむらしく、雪溪がちらりと見える。石から石へと踏み下つて、時には草地をまいて進む事もある。小さな瀧は數へも切れぬ。そろそろ水が湧いてゐる。最後の崖を下りて、もう本谷に近いと思ふ頃、ふと見れば私達の運命も終に恐しい斷谷に陷らうとしたのである。

私達の足下の澤は目前數十間の處でぐたりと折れ落ちる。先に見た雪溪は實は森に包まれた澤のも一つ向ふにある。日がかげつて寂然とした山の空氣は、其處にざ……ざ……ざ……と鳴る水音に震へて、私の神經に氣味の惡い誘惑の響を傳へた。誘惑が次第に意識に上ると、復も此が翼なき者の立ち得る最後の場所ではないかと苦悶した。靜馬と勇吉はとうに何處へか斥候に出かけて、殘る内山も澤を下つてゐる。其處で私も身輕に岩を跳び、傍の藪に忍び入つた、密かに瀧の上に立つて見ると、驚いた事には、足下五六十間の處に黑ずんだ岩片の散亂した稍平な雪溪があつて、其れから極めて低い尾根を一つ越えると、其處に上で見た雪溪が白蛇の如くのたうつてゐる。尚ほ近くの雪溪には一つの澤が四五十尺の二段の瀧となつてどうどうと落ち込む。その岩の色が丁度特種の火山地方に見る谷の樣に眞赤だ。今迄視界の狹い、危（あぶなつ）かしい石の溪を下りて來て、此の光景が展開した爲、身體の節々がづきんづきんするやうな一種の痙攣を覺えた。けれども最早谷の見える處迄來た、水音の高く聞える處迄下りたといふ事は、近き瞬間的の未來を想像せしむるより寧ろ、靜に頭を振り上げて、自ら轉ぶが如く下りた跡を無量の感慨を以て慕ひ眺める動作を生んだのであつた。

荷を置いた所へ戻つて一行が勢揃ひすると、日は餘程傾いて長い休も出來ないので、軈て右手のヤブを拔けて暫く西南に延びた脊尾根を傳ふ事にする。藪をくゞり笹の莖を平にし、散々な思ひで栂の森に移ると、其尾根は單に左手の本谷と右手の澤の間の障壁に過ぎないので、足場の惡い事夥しい。岩塊を鋭く積み上げた上にふわりと蘚苔の毛氈を掛けた樣なもので、その毛氈たるやうつかりすると股まで落ちこむから堪らない。あっと驚いて栂の枝をつかむと、此が又白枯れに枯れてゐてぽきっと折れる。幾らテルペンの香が好きだといつて、かう矢鱈に虐待されては嫌になつてしまふ。

尾根は益〻脊骨を發揮して兩側は峭壁となる。右手の澤が見えて、其處に電光形の瀧が飛沫を散らす。更に下ると大きな岩塊が尾根を横領して、其先が二間程斷絶した處に來た。靜馬は例によつて先を見に行く。折から駒鳥が美しく囀づる。見上げると八峯續きの亂杭齒の樣な奇怪な姿が、太い落葉松の枝間に望まれた。

私達はもう尾根を見限つて谷へ直下する事になつた。谷に面した山腹に一本の枯れたカンバがある、其れ

を目あてに猿の様に、手は木から木へと傳つて下りる。樺の下は豪い崖になつてゐるので、之を右にしてスゲの類ばかり生えた草地の凹みを下る。其れが又怪しくなると二人の先達は又も先を見に行く。もう河原迄彼是二十間許だ。彼等が歸ると私のアルペン・シュトックを借せと云つて、二人は草地の急傾斜に斜に段々を付けて呉れる。凡半町許の處だが草の根がずるずる抜けて極の惡場だが、まア無事で之も通り越す。四人の顔は緊張し切つて、さしもの難所も滑つたりしなかつた。靜馬は煙草入れを落したとかでむづかしい顔をして居る。それでも若い者の足に一々眼をとめては、「氣付けて呉れよう」と注意を懈らない。

私達は其草地から石の壘壁を越えて、終に東谷最奥の磧に駈け下りた。谷から谷へ、あの鹿島川最後の夜から數へて今日は四日目になる。唯だ谷といふ者に親しみたい爲に、地表の搖ぐ不安な暗黑な八峯山腹をわざと撰んで、絶間なく苦しい體驗の幾時間を經て、此處に來た。四人の眼は夕べの光に輝いて、熊の様な顔にも安堵の微笑が漂つた。

時刻は大約五時半と覺える。もう野營の準備に取りかゝらねばならない。其處で數町下の平さうな所を目懸けて谷を下る。下りた邊は丁度上で見た兩雪溪の落ち合ふ附近で、雪は消えて間も無いが、露(あら)はの磧の大岩は皆不安定に足をぐらつかせる。此の傾斜は十度程と思へる。野營地は處々探した擧句磧の中のミヤマハンノキの林の中と決めて、一服する暇もなく、石を起し木を伐り米を研ぎにかゝる。嬉しい宿りの用意だが、此谷間の夕べは殊更幸福を感じた。

氣が落付くと私は一人仕事場から離れて、一つの岩に腰かけ、谿の景觀と峯の仰望を心ゆく迄眺めた。谿は凡一町程の幅で､岩の大なるは徑一間にも及ぶものがある。皆未だ荒砥にもかけられない鋭いまゝの物が、一様に蓋ふて、南側に行寄る水は懷しい音を立てゝ落ちて行く。野營地の上流二三町の處から雪溪が S 字形にうねり登る。其處に高さ二百尺ばかり何々ホルンとも名付くべき岩峰が全く山腹とは離れて屹立してゐる形が痛快だ。澤から峰へ眼を上ぐれば、夕映の鹿島槍が雄々しく立つてゐる。そゝり立つ八峯五龍一帶の或は眼を剝き、或は肩を怒らし、幾條にも割れ殘つた峯角の亂舞、其下に綠の衣剝げて露はなる大岩壁、又かのギヤップの南と思はれる一つの澤に二條に連る高い瀑布、その瀧は二百尺もあるかと思はれる。遠目に確かな事は分らないが、思ひがけなく珍しいものを見た譯である。そして若し私達がキレトの澤下りを固執したならば、之に類した豪壯な瀑布に當つてどんな恐しい目に逢つた事かと今更慄然とした。泊場に歸ると靜馬は高く聳えた一の岩壁を指して、「あの上に俺(わし)が登つて谷の樣子を見たのです」と赤黑い顔に得意の色を浮べる。一行を案内する時は難(むづ)かしい顔をしてゐるが、野營地に着くときまつてにこにこしてゐるのが彼だ。

夕飯が出來た。谷の薊と干瓢を汁の實にしておいしく頂戴する。日はこの時暮れて、信州には月が出たのか、鹿島槍の上の浮雲は金色に色付いた。星もちらちら見えて來た。最早安眠の他に慾は無い。天幕の中には木の若い枝を積んで、其上に薊や其他の草を敷いたので大變上等なベットになつた。けれども軈て草の葉からのそのそ尺取蟲が這ひ上り、又入口から小さな羽蟲が飛び込んで來て煩いので、無暗に蚊取香水を振りまくと、餘りの匂高さにこつちまで興奮して暫くは寢られないで困つた。

四　東谷（カハラゴヤ澤）

午前三時頃惡夢に目が覺めて再び横になつた。二度目に氣が付いた時は夜は白々と明けて、谷一杯に岳雀と駒鳥が囀り交はしてゐる。三十分位はうとうとして、起床。朝霧は深くないので、天幕も草も十分乾いてゐる。煙草をふかし乍ら振り仰ぐと、鹿島槍續きの尾根に日が照り初めて紅く、北の方五龍と相對して夕べにも勝る景色である。やがて日の光が射しこんで來る。空には一點の曇もない快晴で、當分天氣は定まつたものと見えた。

疲勞してぐつすり寢込んでゐた人夫達も起きて、飯を煮る。米は先日の暴風雨の際水漬(びた)しになつた爲三割方赤くなつてゐる。其儘では惡臭を發するが、好く洗つて炊くと幸ひ臭みが脱けたので、名物櫻飯だと笑つて口に入れた。食糧も草鞋もまだ十分あるので頗る氣が強い。

午前八時（?）出發。今日は八月の八日である。右岸を傳つて行く。北に廻つた谷を數町進むと、右手の山足からキレトの瀑が水量も可成豊かにとっとと流れ落ちる。河原は鹿島川の二三倍もあつて、亂石は泊場程ひどくも無く、割合に歩き易い。石は皆花崗岩の類で、此が山上から白く光つて誘惑したのだ。段々下つて行くと、落合ふ水は何れも口が瀧になつて居て登り難い。又谷は山足を廻つて西寄りに流れると、下に向つて谷の空は猫又、釜石、仙人の山々や、大窓の頭に遮られる。遠い山は後の殘虐な姿に對しては其崎嶇たる脈も如何にも優婉に眺められる。又一つの少しく大きい澤が右から落ちて來る。此は五龍の南方から流下するものである。その澤を過ぎると今迄見えてゐた劔以北の山山は見えなくなつて、眼は只河原の飛石のみに注がれる。川楊の傍に砂地があつて、其處にシナノナデシコが美しく咲いてゐた。この時空を仰ぐと少しく雲が出て、澤の奥には取りすました五龍と其南の嶺の何の化粧もせぬ素肌が見えた。

其から三四町行くと圖らずも山裾に添うて人の泊つた跡がある。是はと驚いたが、岩に落ちてゐた物は、正宗の四合罐と燃え殘りの木のみで、野陣場は凡一坪、一方を石で圍つて寢られる樣にしてある。その焚木の炭の所に蘚が生てゐる程で、少くとも三年は立つらしいといふ靜馬達の鑑定である。が登山者で無い事は確かで、つまらない事だが大に安心した。同時に東谷即大町人の所謂カハラゴヤ澤北城人の所謂南ゴリユ澤は全然人の來ない處ではないといふ實證を得て、行先の暗雲が散じた樣な安心と自信を抱いた。

泊場の跡から少し下ると、又右から澤が入つて來る。澤の下部は岩石の押出しで、谷の磧も一町許なほ廣くなつてゐる。平らさも平らだ。日は餘程高く峯の上に登つて五體は稍熱して來る。なほ進むと右手に高さ數十米の白糸瀑又は白簾瀑とでも言ひたげな飛瀑が懸つてゐる。其を見て行けば今度は同じ側に立壁が現れる。左側にも小さなのがあつて、タルにでもなつてやしないかと思つたが、近づいて見ると至極無事だ。但し深い徒渉は嫌つて右側の大虎杖の中を分けた。此の崖は地形圖丈見ると一寸考へさせられるが、實際何の事は無い。野營地出發から彼是一時間程である。

空は白雲が湧き立つたが、大部分は海の底の樣に眞青だ。磧の砂地にシヽの足跡なども見られる。周圍は再び開闊となつて、瞳は新緑の山肘の上に重つた小窓の頭に吸ひ付けられる。右に注ぐ廊下式の一澤を過ぎ行けば、軈て谷の位置は具合よくも劔の聖壇を遙拜する樣になる。然し東谷は地圖で跡づけた程一本調子に黒部の巨壑に向つて邁進するのではない。磧の廣さ、小尾根の遠近、谿の方向、そんなものゝ瑣細な違ひから、不圖、豫想せざる雪の面を仰ぎ、峨々たる岩面を掠(かす)め見るのである。

又一つの澤が北側に現れると、谷は左へ廻りこむ。河原は以前にも增して廣やかになつて、暫らく四五町の間は蜿蜒と流れる。其先が聊か狹まつてゐるが、もう牛首山から來る大きい支流の落合であらうと思はれる。此邊が八峯の泊場から憧憬の眼を以て眺めた處である。山際に蔓延した森は闊葉針葉相半し、山毛欅、白樺、板谷楓等の梢には、山蟬の鳴き聲が姦しき迄に耳朶を擊つた。恐らく千古の秘密を藏したと豫想される黒部國有林は、未だ此處では陽の光明るく洩れて、人間の血の通ふ暖さがあつた。

最早十時を過ぎたであらう。背は流汗にしとゞ濡れて、長い休憩が戀しくなつた。廣河原は突然ぐつと窮迫して來て、川の幅五六間となる。双方の賽の如き石の壁が右岸に打ち連る。左岸に移つて見ると、流は今迄になく激して、突出した岩の鼻を、一間計りのタルとなつて喚聲を擧げる。最初の瀑布と奔湍だ。對岸を何の氣なしに見ると、腹のデブデブした割に足の細く尖つた一個の獸が立つてゐる。羚羊だ。此方も驚いたが、先方もキヨトンとした顔で人間を見つめてゐる。靜馬がヅドンと鐵砲の眞似をして嚇すと、羚羊は暫く考へた末、草のちよぼちよぼ生へた急斜面に駈け上つてしまつた。隨分年をとつた奴で十二三貫がものはあるだらうと云ふ。

タルは左岸のヤブから無事に通過して、一二町もすると左から大きな澤が落ち合つて來た。即ち牛首山と鹿島南槍の間から流れる谷で、地形圖に 1197 と水準を示したドウである。其處に五六人は入れる岩小屋が自然に出來てゐる。槍澤の赤澤小屋よりは圍ひのある丈好いと思ふが、濕氣があつて雨の日は惡いに違ひない。然し外では暑くてぢつとして居られないから、中に入つて行厨に箸を付ける。今日はひどい目にも逢はなかつたが矢張町の飯よりは旨い。終つて草鞋を穿きかへる。大町を出てから此が三足目で、其中二日間は

靴、一日半は嵐で滞在といふ譯だが、とまれ、黒部へ入つても不足の憂はない。

再び外に出て、屋根をなした岩上に上つた。大岩澤（澤に大岩横はり、岩小屋等もあるので、假に斯う命名して置く）は本流よりもずつと傾斜がついて綠の山腹に伸び上つて行く。其奥に二五二七米の地形圖の所謂牛首山が偃松の色鮮かに靜座してゐる。鹿島南槍は惜い哉その東谷に下した長大の尾根に遮られて見えない。此邊の谷の樹木は栂や水楢のさまで大木ならぬ闊葉樹が主なるもので、澤筋は例の川楊が一列に又は散在して立ち列んでゐる。草の繁みはクガイサウ、シナノナデシコの優しい花に綴られる。飜つて本流に對すれば直ぐ下で一段落ち込み、上空には劒直北の尖峰と三窓、小窓の頭及仙人山の一部が見えた。今迄徒渉は僅かに三四回のみであつたが、愈々黒部に近づいて來たといふことは總ての風物によつて暗示された。恐らく今日中に本流に接する事は出來ないであらうが、間もなく那落の底を狂奔する水を見得る事を想像するのが又樂しかつた。

ドウに着いたのが十一時頃で、中食の爲に凡四五十分も經過した、結束して立つと、一町計り下に至つて右岸に高さ二三間、長さ二十間程の岩壁が、之から下廊下の領分だぞと言はぬばかりに立ちはだかる。左岸を傳ふ事暫時、兩岸とも直立してゐる。今度は比較的歩み易い右岸に渡つて見ると、又惡い處が出るので左岸へ徒渉する。斯くして徒渉數回の後終に高さ十五間以上の小廊下となつた。其處で先達二人は、八峰から下る時試みた樣に、空身になつて偵察に出懸ける。此處は五萬の圖で見ると、凡東谷山の南西から一九〇〇、一七〇〇、一二〇〇と數字を記した側尾根の麓にあると思はれる。二人が歸つて其の短い距離なる事を報告すると、一行は右岸を搦んで大岩の上に出る。谷は此から右へ一寸曲つて再び左に廻つて行く。岩の下は二三間の垂直面になつてゐて、僅かに足懸り手懸りがあるばかりだ。始めて綱を取り出す。勇吉が金剛力に支へると靜馬、私、内山の順に下りる。最後の勇吉は下から足に手をあてがつてもらつて、無事に下りる。一同が揃ふと二三間幅の流を渡り切つて對岸に添うて下つた。一町ばかり斯うした廊下が續いた。それからも岩壁あり、タルあり、瀬あり、水量も增して思ふ樣に徒渉も成り兼ねるので、右側の薄の中に分け入り、約十分の後、山葡萄の夥しい斜面を横切る。中には白樺の幹と言はず小枝と言はず、べつたりと搦み付いた美事なのがある。一粒つまんで舌に載せると未だ酸味が強くて食べられない。けれどもその青い房々した實は見た丈でも立派な物である。

再び河原に下り立つた時は日は中天に炎々と輝いて、入道雲から反射する眩しい光は五體を臭い汗の氣で悉く取りまいた。もう二時頃である。綱を使ふ頃から此調子では谷は益々急に益々險惡になるであらうといふので、行々泊場を求めつゝ下つたが、私一人はそれは餘りに愼重に過ぎると思ふた。何しろ暑くて叶はない。冷い水を心地よく一二回徒渉して左岸を歩むと、五六町が程は無事なので、其先まで行つて樹蔭に一休みする。靜馬と勇吉は又もや活動を開始する、背後には鹿島の南槍が雄々しく聳えて、北槍と結ぶかの釣尾根も一部分手に取る樣に見えた。

やがて歸つて來た靜馬は、此下にもう一段平らな處があるといふので、私達は尚も前進を續行する。果して磧は可成り廣やかに水平に續いて、終始危惧の念に驅られた昨日とは異ひ、身も心も眠る樣に過ぎてしまふ。けれども其は間も無く山腰にしめられて、愈〻谷は深く急に落ちこむ氣配がして來た。流は磧と云ふよりも稍平らかに石の重疊した段の左を小深く刳つて滔々と走る。左手の山の闊葉林の端に黒木がもやもや生へて、その尾根に寄りかゝるものゝ如く仙人山の大峭壁が目前に迫つて來る。地圖にＹ字形に水條の描れた仙人山の澤の窪がありありと眼底に映る。懷しい黒部川は其下に碧玉の深潭を湛え、白龍の舞ふ如く水沫を飛ばして瀧と落ちるのであらう。もう直ぐ其處だ。然し、後門の狼（八峯）は追駈けては來ないが、正に虎穴に入らんとする。無心の山蟬がブナの森に鳴く音も、やたけに逸る心の緒を搖り動かして止まない。「下廊下へ!!」其夢が現實に開きかゝる時、「此處らで泊りませう」と先達の深切な聲が聞えた。

靜馬のいふには、此から下る程惡場になるのは火を睹るより明かである、寧ろゆつくりと此處へ泊つて明日一杯にも黒部の岸に出た方が得策である。其れもさうだ。食糧は十分にあるし、昨日難所を通過して今夜もう一夜靜養する必要もある。五町や十町進んだ處で大した差はないと考へる。が、未だ物足りないので幕

營の準備は後の者に任せて一人谷を下つて見ようと思ふ。泊場と決めたのは大虎杖の草藪の中で、其から林を拔け、小流を飛び越え、大岩の押出しを羚羊の如くとびとびに越えると、對岸一二町の下に白い大きいものが見える。凝視すると其は天幕だ。こんな處で自分達の持物以外に人臭い物を見ようとは豫期しなかつたが、若しや木暮さんの一行ではあるまいかと大聲に呼び乍ら、右岸に添うて駈けつける。澤には粗末ながら巧みに橋が架けてある。之を渡つて對岸の一段高い處にあるのが、道路普請等でよく使ふ普通の大天幕だ。側に竈を作り、焚物も置いてあるが、天幕の中にも附近にも猫一匹居ない。天幕は十人以上らくに寢られる廣さであるが、荷物などもろくに置いてない。勿論私達仲間の「他愛なく山を駈けづり谷の水にひたる爲の巡禮者」でない事は明かである。小林區の役人かしら、又は先日鐘釣に某會社の水力調査隊が入つて其内の一人は上流を探險するといつた樣な記事を新聞で見たが、其等の人であらうか、不審は一方私の獨專といふ子供じみた野心を傷けると共に、誰かに逢つて谷の樣子を聞きたいといふ希望をも生んだ。然し大町を出て一週日後になつても未だに淋しいと思ふ程大自然の威にひれ伏しては居なかつた。兎に角通知だけはして置かうと、ノートの紙を一枚破いて五六行の文字を認めた。此手紙を天幕の中に投げ込んで直ちに私達の陣屋に引返した。

歸つて見ると既に天幕はピンと張られて、忠實な彼等は丁々と木を伐つてゐる。私は息もつがず「かうかうだ」と話すと、皆も不思議がつて其の内靜馬は出かけてゆく。凡一時間もして一寸小雨が降つたが直ぐ霽れて、其處へ靜馬はのつそり現れる。「隨分長いから心配したぞ」と言ふと、「へえ、實は橋のある所から北側の尾根へ上る切開があつて、それへついて行くとえらい所まで登つた。まだまだ高く上つて行く樣子だけどいゝ加減に歸つて來ました。さうともさうとも黑部の谷も見えねえ位高い所だ。何でも此切開は猿飛の邊へ出ると思ふだが、のう」「ふーむ、してみると何の爲に來ただか」「山林の役人づら、國有林がどの位あるだが測量に來た」「さうづら」と三人は眞面目になつて彼等一流の辯で話しこむ。靜馬の手には毒々しい蝮が木の枝の楔に挾まれてゐる。之も其道でとつて來たのだといふ。其を殘酷にも皮を剝いて膽をとる。卵があるから雌だと當り前の事をいふ。内臟をすつかり搓りとつて白むけになつた奴が、火に炙されると恐しい事、能ふ限りのたうつて逃れやうとする。蛇といふ長蟲、元來人間の憎まれ者だが、皮を剝かれ腹わたをとられて迄も生に執着する根強さには並居る者皆感心した。

到着が三時半頃だつたから、夕飯を食べた後も夕日が赤々と射してゐた。夕暮に天幕に入る時頭を上げると、鹿島槍の上に變な雲が現れた。すると一閃の紫電が眼をくらまして、遠雷の響が太鼓の如く聞えて來る。昨日よりもなほ低い所で暖いのは結構だが、其代り尺取蟲や羽蟲が猛烈に襲來するので、例によつて三越の蚊除け香水を振りまく。思はず知らず小田原提灯にひつかゝると、忽ち火を呼んでぱつと燃え上がつた。驚いてたゝき消す。紙はもうめらめらに燃えてしまつたが針金は何かの用になるだらうと取つて置く。時計を修繕しやうと努力したがやつぱり駄目だ。それも止めて毛布を引被ると、訪れるものは遠雷のどよめきと遙かの水音のみである。然し今夜も星がきらめく。さア寢る事だと思つたのが九時近くであらう。

八月九日。昨日は誤つて早起したせいか、今朝は人夫達の起きたのも知らなかつた。愈〻今日は黑部入りとなる譯だが、尾根の旅と違つて何處か呑氣でやはらかい氣持がある。食事の際には日が既に山の端に上つた。櫻飯は今朝で盡きて、米は殘り一斗もある。昨夜から火にあぶつてあつた蝮の肉を分けて食つて、出發したのが八時半頃。日の出前の西南の雲は綿をちぎつて投げた樣で、夕立の模樣があるとの事であつたが、兎も角連日澄み渡つて英氣颯爽たるものがある。

三四町にして大天幕の傍に出る。今朝も人は居ないので、右手切開が十間餘り高所にあるのを眺めて、只管河身に隨つて下る。主に左岸を拾つて行くと、その下が直ちに小廊下となつて、一氣に進む事が出來ない。徒渉は膝上迄もあつて、水勢も可成り強く、注意に注意を重ねて行く。川幅は一間位の處もあれば、三間位になつた處もある。兩岸は花崗岩類の堅牢な急壁をなして、部分的ではあるが、次第に黑部式を發揮して來る。闊葉樹は髪の如く崖を掩ひ、淺い日射しが下草に燃え映る。所々岩登りをやらなければならないが、岩がしつかりしてゐるので平氣だ。其狹い谷が愈〻狹まつて何事かありさうに思はれると、先達の二人は例に

よつて先を見に行つた。二十分の後二人は戻る。一行は今度は主に右岸に添うて再び左岸に移る。此邊になると流も相當に深く、タルと釜とが連續するし、もう本氣で水底の一石毎に踏みしめなければならない。やがて川は一旦左に屈曲してS字狀に右にうねり、一つの大きなタルとなる。兩岸の絶壁は俄然百尺の高さに連り始まつて、正面の仙人山の大斜面も見る事は出來ない。無言で荷を下ろした靜馬は、岩を飛び下り、流を押し切つて先を見に行く。勇吉も續く。内山も我慢しきれず後を追ふ。私は岩上に座して、欝蒼たる針葉樹の下に蛇身の如くうねり行く河を眺めやつた。其は三四十間進んで物凄いタルとなつて、其先は右に打ち返すのでもう分らない。丁度此處は左の山腹から今の今割れたばかりとも思はれる、ひどい澤が二條直下して合する處である。その左の澤は、正に八峯ギヤップの樣に凄慘たる掘れ溝になつて、岩の層理の一つひとつが如何に大きな運動量を示す事かと考へられた。然しその源頭の尾根は見上げる程高く、黒々と喬木が幕の上を飾つてゐる。本流の右手からも同じ樣な澤が此は石の流を押し流して居る。

更に木を便りに高く登つて見ると、兩岸の角度は七十度に垂んとして、水は脚下に谷の空氣を巻き込んで豪壯の共鳴を發する。屈曲する處必ず急湍、澱む處必ず深淵、其は私を脅威する谿谷の始めの貌であつた。もうぢつとしてられないので、三人が歸つて來ると靜馬を促して、身輕に右岸を傳ふ。徒渉も股迄あつてうつかりすると倒れさうになる。タルの手前から岩角に牛蝨（だに）の如く獅噛みついて、そろそろと瀧を覗きにかゝる。二股に分れて二間ばかり崩れ落ちた水の塊は直ちに右手に反撥して轟然と落下する。もう其先は見えない。只韃靼の響が斷續して聞ゆる處、恐らく此からは晝なほ暗き森の中を深く深く何段となく連續急轉する東谷落口の瀧となるのであらう。靜馬も私も「豪い事だ」としばらくは呆然としてゐた。背後には殘つた二人が岩上で焚火してゐる。眞直に立ち昇つた火焔は恰かも山神の靈火の樣に思はれる。

もう谷にはついて行けない。岩は堅いが、丁度黒部の谷がさうである樣に、水に磨かれた花崗岩は悉く丸味を持つて、綱を掛ける一突起すらないのである。何れの側にせよ、東谷の落口迄は、高く峯を登つて半日行程以上である。地形圖で見ると、東谷落合に瀑布の記號があつて夫れから二三分東の處に澤の窪が讀まれるであらう。丁度我々の當惑したのは此邊であると思ふ。野營地は更に三四分右に一七七一・六米の三角點から上部のたるんだ尾根の直下する裾あたりである。私は絶體に陸側五万分の一圖の地勢表現を信じたいが、然しどうも此邊になると、私の感覺の誇張と聯想にもよるだらうが、隨分と分らない。（五萬分之一のスケールで然も等高線許りで絶壁に近い地勢を表はす事は不可能であると思ふが）。そして黒部川の水面の標高と位置が詳細な點は實際に不明なのだから、此から本流迄距離如何といふ事も云ひたくないが、大體落口迄は三四町位のものではなからうかと思ふ。兎に角進むべき道は一つより無い。即ち左手の廊下について一旦尾根に登り、岩頭を搦んで行くばかりだ。もう大分時間を空費してしまつて空腹を感じたので中食を濟ます。愈〻東谷に分れる殘惜しさに、思切り澤山水を飲んだ。谷そのものの樣に皆の顔も靜かに引き締つて行つた。

五　下廊下（東谷下部より劔澤落合まで）

斯樣な標題を掲げた處で、實は水面から遙か高い山腹をへつって歩いて、終に劔澤落合附近迄水に觸れ得なかつたのである。然し地形圖を見ても分る通り、雄大な鹿島槍の山足が仙人山のそれとかち合ふ處は、等高線のつまり方の特に甚だしい處で、其處をどうやらかうやら通過して劔澤落合に出られたと云ふ事は、私として先づ類例の無い事である。恐らく私は二度とあんな馬鹿げた苦しい旅をしやうと思ふまい。

東谷最後の休息地から谷を離れて、左側の急な涸澤を登る事となる。大岩の所から深い徒渉をやつて、對岸の崩れかゝつた草地を登り、右手の澤に移る。黒部の本流が見たい心が一杯だつたので、どういふ風に登つたか詳しい事は忘れてしまつたが、ノートを見ると「右澤より痩尾根一つ越してカラ澤の急を上り、右のブナの下に來る、約百五十米の上り」とある。何でも急な所で、必死になつて登つたのであつた。岩の割れ目を傳つたり、草の根に捕つて殆ど手足で掻き上つたりした事も記憶する。一息入れた後又も押上つて四抱へ位ある巨大なクロベの根元に立つた。尾根はまだ高い。丁度東谷落合に向つて、さしも長い鹿島槍の大尾根の末端が支離滅裂して崩落する處だから、何處が眞の郡境だか分らない。成るべく本流の方に向つて搦ん

で行くと、石楠の藪が巨石と黒木の抱き合つた切れ切れの尾根の下に現れる。其をやつとの事に分け上つてクロベ、ツガ等の生へた岩角に倚つて西に下瞰すると、初めて黒部の本流が見えた、その深い碧潭と白い瀬のしぶき。森と岩の底に輝く谷。

どれ程今迄其一瞥が待たれたであらう。見える處は三四町に過ぎないが、岩壁は賽の目に刻み上げ、或は赤く或は白く、其間を物凄い程徹明な藍青色の水の帯が悠然と流れる。明るい谷だ。そして磧と名のつく處も作らない大量の水だ。「おーい黒部」と私は聲を張り上げた。人夫達も「先生、せめて滿足して下さい」と私を顧みた。兎も角見た丈で蟲が納まつた。東谷は此處からは到底見えない。も少し尾根を下つてと思つたが、下は恐しい一大岩壁になつてゐるらしい。崖は東谷に面した方が素晴らしい大さだ。翼が無ければてんで行かれない。

黒部に面した斜面は危險で歩けないので、も少し尾根を登る事とする。二十分ばかりして不圖先頭が立ち止つた。見るとクロベの大木で根元から餘程上部に何か刃物で切つた跡が殘つてゐる。跡は古い物と思はれる。昔積雪時に越中の者でも盜伐に入つたのかも知れない。兎に角こんな處迄人が入つてゐるのだ。人跡未到といふ言葉は色々の但書が無ければ安心して使へる文字では無いと思つた。

なほも登る。尾根は脊せ細つて所々に岩塊がある。元より深造岩の類で、隙間には小粒の水晶の結晶などがある。石楠の藪は思はぬ所に引懸つて偃松以上に厄介だ。其も時には歩き易い蘚（こけ）の道に變つて、ほの暗い立木の間を擦り抜けては心地よく脂の匂を嗅ぐ。

其内に乘越の様な處に來る。左側は東谷から私の登つた澤の右の窪の取つきである。近藤氏も此を通過された事は後で直接に聞いたが、私達は一の足跡すら發見し得なかつた。一度見えて隱れた黒部の本流は四五町も長く見える。東北の方には五龍岳が綠の裾まで露はしてゐる。海拔千二三百米の處である。腹も減つて來たので、恰好な休場を幸ひ中食の餘を食べる。之から上方は少しくナセになつて、四邊の樹はツガ、クロベ、ヒメコマツ等見事なのがある。總じて黒部谷はクロベ（ネズ）が多いので、ヒメコマツも亦少くない。先から梢は怪しい風音に鳴つてゐたが、ふつと吹き止むと日がかつと照つて、黒部川の水聲が幅廣く響いて來た。此處から少し登ると容易に又平らな處に來る。樹間を仰ぐと、脊尾根の右手一面に大岩壁があるので、もう尾根傳ひは止めて、今度は谷へ下る道を求めようと試みた。

大岩壁の下はしんしんと茂つた森となつて、定かに分らないが、南側の一尾根に到る間に例の隱れ谷でも刳り作るらしい。一行は燕返しに方向を轉じて、尾根から灌木の茂みに身を投じた。勿論其は尾根傳ひよりらくな事ではない。草鞋は何時しか片方に捻（ねぢ）れ曲つて來る。手は一刻も放して立つては居られない。さうして藪から藪へ、一の涸澤を渡つて目指した尾根に立つ。途中で見た黒部川には大井川奥の鳥森山に似た小中島があつて、川筋は其右手に廻る。山裾から再び現れる流は青黒い淵になつてはゐるが、遠目にも湧き返る水の生氣潑溂たる態は東谷の落合ふ爲であらう。尾根に立つて南面すると、其處にも黒部の碧流がちらとして、遙か彼方の劒澤と思はれる絶壑が、燦（さん）として陽に輝く仙人山側面の大峭壁の蔭に割れて見えた。

最早日は傾いて來た。今日の宿りは雲をつかむより的の無い話である。再び草鞋を締め直して、此尾根の側面を南下する。向ふに又一尾根が谷に落ちてゐる。草地を滑り、窪に近づくと此處にも水は無いが、ひよつとしたら本流に下りられるかも知れないと、暫くは汗みづくになつて木につかまり石を跳び下りて行く。もう先から百米は下りて來た。山毛欅（ブナ）の根元に跨つて一休すると、靜馬は尾根を越えて水を求めに行く。泊る處を搜すべき時刻だからである。斯様な所だと何時木のかげから岩塊が轉び出ないものでもない。人間の血を吸つた事の無い蚊の群が得たりと押し寄せて來る。木立にすかせば仙人山の凄絶極まる赤裸々の岩壁が、手の届く様に近い。黒部川は樹に遮られて水音も遙かになつた。靜馬は歸つて來ると無言で荷を負ふて先に立つ。私も後の二人も押し默つて一尾根越えて涸澤に下る。この澤では仙人山の絶壁が前より廣く見渡される。中央に引掻いた様なカラ澤は、ポツンと殘雪らしいものがあるが、其上下は恐しい高い瀧で、水が眼に見える程あつたらさぞ壯觀であらうと思ふ。之から尚下り氣味に又一尾根越えると稍大きい石溪がある。散々に猿の眞似をして跳び下りると、之にも水は無い。折から日は暮れかゝつて、嫌（いや）な事にはポツポツと

雨が降つて來た。

此時程嫌になつた事は無い。今朝ふと見付けた怪しの雲は約束通り降らしたからだ。もうこの澤を下るより他はない。黒部の本流迄は百米位と思はれるので（實際はもつとあつた様だ）、綱を出して、先づ足下の二間の棚を下りる。雨は本降りになつて、大粒では無いが見る見る内に襟元から濕つて行く。暫くがたがたになつて下ると、空瀧は二つも三つも續いて見える。厄介とは思つたが仕方がない。三間計りの綱を二重にして下ると、十間ばかりにして又高い瀧になる。之も無事に吊り下がつて一先づ休憩する。左右の山腹は一寸攀ぢ難い程に切迫して來る。雨は用捨なく強さを增して、とうとう夕立の本性をあらはす。

此雨では岩角の綱もつるつると滑つて、本流の絶壁を冒險して下る事も決行し兼ねる、と云つて休んで居る所は極めて不安な様子だ。滴々の雨水がくつゝきあつて一水を成す時には其處此處の岩片が何時摩擦を減じて頭上にぐわらと飛來するかも圖られない。其處で頭が痛い迄に氣を配つて更に下つた。二度綱を使つたが、最後の瀧では雨が更に強く注ぐので滑る事甚しく、三間の急所が命の瀬戸際の様に思はれた。然しこの涸澤には岩角の堅いのや、倒木等があつて人一人支へるには十分であるのはせめてもの手頼りである。なほ下に豪い直立の瀧が現れたが、其處には大木の未だ朽ちないものが梯子の様に立てかゝつて居たので、綱も使はないで濟んだ。其が十間ばかりで再び高い崖となる。餘程下りては來たが、時は遅いし雨は土砂振りで、行先が果してどうなつて居るか知れない。丁度この棚の上が具合よく大岩石を負うて上方からの墜石を避けるには十分なので、、泊る事とする。

こんな處こそ記念の撮影をして置きたかつた。天幕もどうやら張る事が出來て、勇吉は雨中に熱心になつて火を起す。内山と靜馬は焚物を集めたり、天幕を張り直したりする。不圖氣が付いて私は有りと有らゆる容器を出して、天幕から滴る水、苔蘚の飽和し切つて洩らす雫を氣永に集める。其が漸く一合から二合足らず溜つた時、夕立は上つて、火は岩頭に勢よく燃え出した。其處でずぶ濡れの衣を乾して、明日はどうしたものだか、此處はどの邊だか評議した。仙人山の上には雲が紅く色付いて明日も好晴なる事を豫想せしめた。谷の奥では孤獨を歌ふ木兎（？）の聲がポッポッと聞えた。雨は全く止んで仙人山の峭壁を前にした猫額大の岩上は早くも闇に包まれて來る。夕食は辛じて集め得た二合の雨水を湧かして蕎麥かきを作つて嘗めた。靜馬自前の六十尺許の補助綱が其を預けた内山の荷の中にないので、年若な彼は頻りに氣を揉んで、明日あさでもさがして來るといふのを、何だ、つまらない事で大事な身體をこわすなと元氣を付けてやる。月が出たらしく、峯は明るく浮き出たが、黒部の水音を近く耳にしながら終に好きな茶も煮られぬといふ、極めてうら寂しい一夜であつた。

八月十日の曙の色は、谷底の岩の上のにも音づれて來る。天幕を出て見ると、よくもこんな所に泊れたものだと思ふ。涸澤の幅は三間にも足りない。五體を休めた岩面は天幕一つがせいぜいで、それも圓錐形の天幕なら全く張場に困つて仕舞ふ。つくづくと屋根形切妻の小型が大切に思はれた。前面仙人山の尾根には既に朝日が照つて、空は一抹の雲も無い。涸澤は遙か尾根の頂から一直線に下りて來る。石には皆蘚が生へて、不斷水の無い澤だといふ事が分る。綱は盛に使つたが、八峯の様に地盤が脆弱では無くて、足下の不安の念は更に無かつた。たゞ愈ゝ本流に臨む處が廊下の名に負かず垂直な又寧ろ刳れた岩面に終るであらうとの心配のみがあつた。序でに此澤の位置を地形圖で示すと、東谷劒澤兩落合の中間から少しく南方によつて明かに認める事が出來る其の窪である。

出發したのは仙人の尾根の下まで日の射す頃で、午前七時と見積る。直ぐ左（南）の藪の急傾斜を押し上つて、斜に本流に向つて山腹をまいて行けば、川音近く轟く處に一の切開が見える。どうも昨日からの天幕といひこの切開といひ、最近誰か入つてゐるに違ひないので、其を傳つて下ると、中々通り一邊の切開ではない。急な處は段々にならしてあつて少くとも十日か二十日前に作つたものらしいけれど此が二十米計りにして盡きてしまつた。確かに何處へか續く筈だが傻しても分らない。（後できくと此は東谷から劒澤落口へ山越えに來る道の途中から分れてゐるもので、實は此方を始め切り下げて行つた處下が惡いので中止したのださうだ。）其處で左方に搦んで急壁を下ると、ミネカヘデの多い林を拔けて、花崗岩の白く光つた一つの

石溪を得た。此處にも人の來た樣な形跡は無いが、何にせ水を水といふ欲求が烈しいので近寄ると、ちよろちよろと鼠の尾にも似たる小流が岩の隙を狙つて落ちる、勿化の幸と荷を下ろして朝飯をたく事になつた。

澤の幅は泊つた所と同じく二三間あるが全體の規模はずつと小さく見える。上下には矢張タルがあつて、黑部迄は三十間位のものかと思はれる。空腹なので覗きにも行かない。日は嚇々と照る。宵からやけに煙草をふかしたので舌は熱を持つて、水で洗つても洗つてもざらざらする。飯が出來る迄長い事だ。ぢつとしてゐるのも馬鹿げて居るので、澤を下つて見る。前面の左は絶壁になつて居て一寸通れさうもないが、ひよつくり出て來た靜馬はさらさらと木の枝から枝へ身體を渡して巧みに下りてゆく。瀧の上に立つて見てゐるともう彼の姿は隱れてしまつた。谷の風は北東から吹いて來るが、仙人山の上の雲は南西から動いて行く。私も靜馬の後を追はうと思つて瀧の左から下りかけると、鹿の樣に靜馬が上つて來て、澤の落口は豪い崖にえぐれて居る、此方側の岸は見えない、中々綱も使へさうに思はれないが、黑部の流は其頂に立つて一寸石を投げても對岸に届く位の幅だといふ。景色はどうだと聞くと、どうも水量の多いつたら無いと語る。彼も今飯をたいてゐる所は水面から三十間位の高さだと云つた。私一人で其處まで行くのは一寸躊躇された。其時煮えた煮えたといふ叫びが再び猛烈な食慾を刺戟したので、岩の上に戻らざるを得なかつた。

晩い朝御飯は内山の採つて來たカヘロッパ（ギバウシの一種）の味噌汁で大變旨かつた。段々腹が出來ると、そのカヘロッパの甘いぬるぬるした汁が氣持惡くなる。さうすると取つて置きの澤庵を厚切にして御茶漬で流し込む。意地の汚い話だがほんとによく食べた。そしたらだるくなつてしまつたので、いゝ氣なもので日蔭にごろりとなる。

二度目にたいた飯がぷつぷつ音を立てる時眼を醒ました。既に午前は餘す所二時間しかない。昨日と同じく夕立雲が來たが、今日は何でも劒澤、棒小屋澤の落口邊迄行つて、地圖にも見えるナセな所に泊れるだらうと高を括つて、場所柄にも似あはず再び桃源の夢を貪る。其れや是れやで、水無の野營のお蔭にとうとう今日は晝まで空費してしまつた。

正午の頃、蟬の聲姦しき山腹を分け上つた。今日の陽は特別に暑い。尾根は急にして小灌木の繁りは慓悍な抵抗をする。振り返ると飯場の澤の北尾根は到る處大岩が重り合つて、來た道のも少し上を通つたら、どんなに苦しんだかと思ふ。行々黑部の激流が見えて來た。幅は三四間、手に取る樣に近い。對岸の仙人山の崖は一段と惡魔的な險惡な面を形作つて、剩さへ樹木は少く、到底へつる事は出來ないであらうと思はれる。實に根強く張つた森林があつてこそ今の今迄無事であつたのだ。

又一つの小屋尾根に出る。先から少し宛上り氣味に來たが、此處に立つて見ると延々二里にも餘る長大な岩小屋澤岳の支脈は、ばつたり缺け落ちて、頭上に戴く黑い密林、其下の何百尺の急壁は下に渦まく碧潭の物々しさを語る樣である。その手前のナセ尾根も針葉の色濃く下つて來て、谷の流は落合ふ水のまざりあふ處にあるのか、東谷のあたりに見た色とは異つて、活潑に瀬をなし岸を擊つて居る。

小尾根から下りて山腹に一息つく。流汗瀧の如しと云ひたい。目的の地が見え初めて心のみがせかれる。もう平尾根の一つに入つて行くものと見えて、山腹の傾斜は足に痛く感じなくなつたが、ヤブは依然として蜘蛛の網より甚だしい。又一尾根を越えると、黑部川はさらにありありとタルのありか迄はつきりとする。少し進んだ處に又も例の怪しの切開が忽然と現れた。

此處に於て私達は異議なく切開を下る事とする。殆ど一直線に、凡そ五六町も（實際は其半分も無かつたらうと思ふが）駈け下りる。谷の響音は鼓膜を震動して遂に水に觸れ得る可能を信じさせる。「今度はほんものずら」と人夫は云ふ。磧の石が見え出して、左すると怪しい生物（いきもの）の形が目前に迫つて來る。其は人だ。正に人だ。草を刈る鎌の手を休めて、此間の羚羊の驚きよりは更に妙な、不審な顏を向けて立つて居る。前方を見ると岩角に大天幕が張られてある。「今日は」と草刈男に一言挨拶していきなり天幕に駈け寄つた。中には和服を着た八字髭の人が横臥してゐて、之も默つて私を見つめた。簡單に會釋して私の行路と目的と、又東谷の天幕の事等語ると、其人は「やア夫れはえらい」と微笑に變つて、中に招じて呉れる。交換した名刺を見ると「古河合名會社櫻井清美」とある。噂に聞いた測量の人であつた。登山者の影すら見えぬ黑部上

流の畔に、斯様な人に逢はうとは思ひもよらなんだ事だ。

到着したのはまだ午後二時頃であつたと思ふ。鹿島槍、岩小屋澤岳、黒部別山、仙人山のひしひしと詰め寄せた一角、萬斛の雪溶水の、人をも山をも呑まんばかりに吠哮して疾走する峽流の傍に、安んじて足を投げ出し得る小さな避難所があつた。耳を撃ち眼に映ずる物は、只絶大な力を以て長驅する水流と、それに呼應して震ふ岩壁と森林とのみである。人も草も空氣も、其猛威の内に包まれて、此世から遠く隔たつた一團の精力に他ならない。

最初に受けたシヨックは多分其程の物であつた。然も吾々がもし櫻井氏に先じて此地に下つたとしたならば、如何に隨喜の涙に濡れた眼は谷の魔力に魅せられて勝手なロマンスを作り上げたであらう。人は自然に一人對する時其心戀の如く、二人以上にして始めて理智的な批判に入る。たしかそんな事を吉江孤雁氏の著書に見た事がある。私と雇傭關係を結んだ靜馬達に對しては、其立場を分持つ事は出來なかつた。玆に櫻井氏と面會したと云ふ事は、私の燃えさかる好奇心を鎮め、盲目のアムビシヨンを治するに特効があつた。己一人水に近づいた時は、恐らく谷の妖精が私の意識する暇あらせず不可思議の彩筆を振るつたであらう。其丈私の現實は今複雜となり、ちぐはぐの心理が作用し、其結果筆の取り難い事となつた。

測量隊の一行は櫻井氏の他に人夫が八人程居た。皆珍しさうに集つて來て二人の對話を聞く。草刈男はこんな所へ來る人間は無い筈だがと驚いた事を話した。私が氣儘な山谷の巡禮者である事が了解すると、相手の人達も隔意なく質問に應じて呉れた。人夫は皆越中愛本村の者である。何日か此處に滯在して食糧が無くなつたから、愈〻明日は切開を傳つて下ると云ふ。あの切開は祖母谷から此迄一日行程であるといふ。水力測量は未だ十分に行はれたものでは無いらしいが、大約一秒間に八百八十立方尺流れる、三百あれば電力は十分に取れるんださうだ。水速は此附近で秒速八尺、水量は目下の所平時よりは多いといふ。水は劒澤落口の邊から引いて祖母谷の附近迄持つて行く見込だといふが、實際どういふ形式の下に運水するか、其點は不明であつた。人によると日本帝國の貧乏國なるのも忘れて頻りと風景絶體保存論を稱へるが、山岳を崩し、美しい森林を燒却しない限り、黒部川の様な天然の大動力は大に利用したがいゝと思ふ。話に聞くと既に鐘釣附近は古河、三井、三共の會社で占有して、古河が最も奥にある所から今度の實測を始めたわけである。けれどもそれは一種の廣告に過ぎはしまいかと私は密かに恐れる。徹底した計畫のない事業の宣傳こそ山の神聖を汚す事大なるものがあらう。

未だ日は高かつたが、越中の人は此から先に良好な野營地の無い事を説いて、頻りに忠告するので、私達も今宵一夜賑やかな時を過さうといふ事になつた。そこで先づ身輕になつて劒澤落合あたり迄行つて見る事とする。私達の下りた處は劒澤落合の下流約五六町の處で（歩いて見ると十町位に感ずる）、ナセ尾根の北端の流に望む處にある。幸にも下廊下の凄絶さも此の小部分だけは東側が稍〻磧らしくなつてゐて、天幕の張られた岩上から水面迄は三間位のものであらう。流の幅は五六間乃至十間。色濃藍に花崗の大塊に映じて、水の深さも知られず、深淵が其儘落下すると云つたらよからうか。天幕場から惡魔の行場の様に亂雜に尖りあひ寄りつどふ岩壁の隙をねらつて、大分草鞋の泥の跡がついてゐる。其が磧への通路である。磧口に下りると、其處には竈が二つもしつらへてあつて、逞しい赤銅の胸をあらはにした男が何か煮てゐる最中である。對岸には樹を二つ三つ束ねた橋が架してあるが、水量が增した爲か、川の中央の巨岩から對岸へ渡る處がタルの飛沫を蒙つて危險で通れさうもない。其先に二ケ所ばかり平の小屋で見た様な針金渡しがあるが、其一方は危險だから其内太いのに架けかえると云つてゐた。

磧から直ちに淺い然し冷い水を渡つて、磊々たる大岩の累壁に攀ぢ登つた。暫くすると左上からどえらい薙が振りかゝつて來る。地圖で見ると大した事は無い様だが、どうして見上げる首が痛い位だ。その中腹をへつるとがらがらと石が流れて危險で仕様がない。夫で又流の方に下ると、岩壁の夥しく浸蝕されたる間に一條の針金が十數間も下まで斜に張り渡してある。其を手繰つて再び流の傍に出る。見ると右岸百尺許の高所に森に搦まつて一條の赤旗が翻翻と風に靡いてゐる。其が劒澤を見る地點なのだ。しばらく岩壁登攀をやつてゆくとヤブがひどくなる。不圖振り返ると劒澤は傾ける陽に燦と輝いて黒部川に臨んだ。あつと言つて

私は思はず手を放す處であつた。元よりほんの一部しか見えない。然しどうにもかうにももがきの取れない惡場なので、止むを得ず元に戻つて、岩をとびとび南進する、その岸壁が一きわ急に取りつく事も出來ない斷崖となつた突端に、靜馬達は腰を下ろしてゐた。

劒澤の落合は對岸の岩の鼻が邪魔になつて見えないが、滔々と浪立ち溢るゝ本流は、岩小屋澤岳尾根の末端から廻つて劒澤を合し、一層精力に滿ちて押し流るゝものと見える、到底平の渡しに見る樣な生優しいものではない。

暫くは恍惚と水の色調と音律に身を任してゐたが、野營の準備のあるので、も少し先へ又は對岸へも渡つて見たいのを我慢して、歸路につく。寢覺の床岩を數倍にも擴げた樣な白い丸みある岩の配置と碧い渦流はやゝもすれば五尺の體を夢幻の内に引入れんとした。何處から落ちたものか一匹の大蟇（がま）がタルを越え岩にあたつて流れて來る。岸に上らんと四肢を彈いたが遂に及ばず、白い腹を上に向けて中央の大濤に卷き込まれてしまつた。

白い大天幕に添うて鶯色の隙間のない小天幕が張られた。食前の一浴を試みやうと下におりて、はるばる携へ來つた水泳着を身につけて、入江になつた淵の中にどつぷり漬（つか）る。見る見る數間流されて本流に押し遣られさうになる。懸命に片拔手を切つて石にとりつくと、夕の風に身體の組織は氷る樣に思はれた。越中の人夫は、黑部で泳がうといふには、手を水上に出しては駄目だ、水を抱く樣にして泳げばいゝとか言つてゐた。其の荒川に慣らされた彼等とても、櫻井氏が叱咤する迄は容易に跳び込み得なかつたさうだ。

夜が來ると流は一層物凄い怒號を擧げた。時を惜んで櫻井氏の馳走になるコヽア入粉ミルク等を飲み乍ら、谷の話や山越えの話に時は過ぎて、寢たのは九時頃であらう。

六　棒小屋澤遡行

夜中屢々溪聲に夢を破られた。其都度靜かに首を擡げると、陰森たる谷の氣が漲る内に、那落の底から響く怨恨の如く水音は心を壓して、今にも一沫の波頭に碎けかゝるかとも思はれる、そして氷冷の水が直ぐ指の先に觸るゝ樣にも覺えた。

起床して岩頭に立つと、今日にも變らずのたうちまはる蛟龍は銀鱗を光らして、其の喩ふる物なき青玉の肌は明く輝く花崗の岩壁に擦り寄つて、所狹しと小瀑に飛下する。黑部川は全部瀧の連續といつてよい、いや瀑布とかタルとかいふ言葉もあてはまらない。昨日も言つた樣に、深淵が其儘に落下するのだ。然も其は大井川の樣に重々しく澱む事はない。飽く迄猪突、飽く迄明徹に大量の水を遠く日本海へ吐くのである。タゴールの詩も恐らく此處では生まれないであらう。動的な、見れども見れども飽かぬ水そのものの姿だ。

古河測量隊の一行は朝とく鐘釣に向つて行つてしまつた。私共は分けてもらつた御飯と蕗の味噌汁を食べて、一時半も後れて出發した。既に日は谿間にも照つて、岩の峽に殘る一片の雪塊から蒸氣が立上る。食糧も安心する程十分に殘つては居ないので、最初の豫定通り棒小屋澤を上る事としたが、其落口の惡場、大瀧の連る深い隧道をどうして避けたものかが問題であつた、愛本の人達はよくは分らないが棒小屋澤落口から十町許り上流に落合ふ澤も惡いらしいから、ずつと其上を通つて行つたらよからうといつた。然し靜馬は昨日見た時赤旗の手前から林に包まれた崖を登つて成るべく本澤について行かうと云ふ。私も、多少の冒險はあつてもやはり飯のうまくたける、水と焚物の豊富な谷を訪れて行きたい。

其處で靜馬を先に立てて、磧を少し行つてから、ナギを左に見て崖を攀ぢ登る。岩の根に搦みあつた樹木の枝は、黑部を覗く恐しさに畏縮したのか、中々堅くて押し分けられない。手は脂ににたにたして、顏も幾回となく彈かれる。一間位の岩壁は右にも左にも頭上を壓して、その意地惡くも抵抗する木が無かつたなら、どうしても登れない箇處がある。斯くして僅々五十米の高距を得るに四五十分は優にかかつた。一息ついて後を見ると、黑部の奔端は冷笑のどよめき凄まじく、今にも落ちて來よと嚴命するかの如くである。劒澤の窪が見えて來たが何と深く割れたものであらう。黑部別山、仙人山の對峙する側面の絶壁は正に九十度に及ぶ處もあつて、身の毛のよだつ體（てい）の感を抱く。谷の空は又怪雲が匍ひ出したが、昨日は無事だつたので別

に心配もしない。

又登攀を始める。ヤブは依然として繁茂してゐるが、其が命の綱である。二回休んでから禿げた額の下に出て右の方へ搦んで行く。其途端尖つた枝の折先で眼を撃つたので氣が轉倒してしまふ。先づ負傷もなく十間許り進むと、再び劒澤はかつと開いて最下の瀑布、白馬の尾の如き貌は、直下の藍を湛えた壺にざんぶざんぶと落下するのが見える。黒部の本流は劒澤落合の方にずつと迂回してゐるものらしく思はれる。次に中段の狹い、純白の飛瀑が見える。瀑布と瀑布の間は湖の如く廣まつて潭々(たんたん)と水を湛え、勢餘つて二ノ瀧に落下する壯觀は筆紙に盡し難い。仙人山の頂も此から見えた。

更に尾根の突端に這ひ上ると劒澤の殆ど總ては一目に集まる。其下部の水勢烈しき事と水量の多き事とは驚く可き程だ。櫻井氏の話に、黒部川の水量は其七分を上流より其三分を劒澤と棒小屋澤より齎すといふ事であつたが、劒澤の水はよし其量に於て本流に及ばずとも、其質たるや、あの天を劈く劒、別山一帶の大雪溪から滴り出して聊かの寸隙もなく階段的に飛射する、恐らくあの水を一掬したら百年も命が延びるであらうと思つた。

仙人山から落口近く劒澤に入る雪溪も小さくない。黒部別山と仙人山のさし挟んだ大障壁は鳥もとまり得ぬ程峻直に屹立する。仰げば三窓の雪溪いや高く、劒の本嶽は見えないが其右肩の兀突たる岩峯は遙かに我々を睨まえてゐる。

尾根は棒小屋澤の左に劒澤落合に向つて刃物の如く鋭角に切りさいなまれた遺物であつた。棒小屋澤は水聲も忍んで來る樣に恐しく深く隱れて居る。一刻も早く見なければ氣が濟まない。そこで黒部と劒澤に別を告げて尾根の頂を越えた。午前十時半頃と思ふ。

其からは主に闊葉樹で、ネズ、ツガなどの黒木も混つてゐる。下草の代りにひどい石楠の藪があつて、今朝から續けて勞動に五體は爆發しさうに暑い。其からホツツジの藪となつたが、此が又細い癖に無暗に彈いて始末に終へない。又小休を試みて上り、棒小屋澤に面する側に下りて、岩壁の上、クロベ、ヒメコマツの大木の根元に蹈まる。そして中食の箸をとつた。今迄このやうな烈しい運動をした事が無いのを思ひ浮べ、然も其が下廊下より抜け出る唯一の豫定線なる事を考へては、あの神祕境が如何に固く門戸を閉してゐるかに驚嘆した。

食を終つて東を見ると、棒小屋澤本流と手許の支流を分つ尾根が見える、樹に攀ぢて小手を翳(かざす)と、本流の水は新綠の葉がくれにきらりと光つた。水の流るゝ處岸はV字狀に迫つて、矢張廊下の態をなして居る。まだまだ棒小屋澤の傳ひ難い事が瞭然である。對岸の尾根の先端は黒木の頭の、是も惡絶なる嶮崖に連つて、全く人外境と思はれる。岩壁はイハタケでも生えてゐるのであらう、黒い肌を所所に示した。先に見た支流を分つ尾根は翁然とブナの純林がはびこつて、熊の棲家でゞも有りさうに思はれた。

再び荷をしょつて、此側は下れないから、尾根に戻つてヤブを分ける。すると鞍部の樣な所へ出た。支流の澤は此時見えて、本澤に落合ふ上に十間以上の高い瀧も見える。本流の一部には殘雪が白冷の光を投げる。少し進むと又鞍部めいた處に出たが、其からは地形圖の所謂西澤小澤持小屋澤の間の尾根が見えた。下瞰すると樹の間に河原が見えて大して危險らしくも感じないので、愈こゝ下る事と決した。駒鳥がしきりに旅情を誘うて、谷の水が又となく戀しい。

例によつて木にぶら下がりながらどんどん滑り落ちる。百米位は瞬く間に過ぎて、終に棒小屋澤の上に立つた。其處はこの大岩に堰かれた水が滾々と溢れる一瀑の頭(かしら)である。下流は直ちに瀧が連續して十四五間先は三段に落ちて左折するのでもう分らない。その角(かど)にどうと落下し轉々する有樣は、此ぞ黒部に注ぐ數段又は一段に高い大瀧を暗示してゐるではないか。今下つた處は黒部川から恐らく五町に及ばぬ近距離にあつて、私達は再度幸運にも豆粒大の安全地に邂逅したわけである。上流は遠からず右方に屈曲してしまふ。一體に水量は東谷より少いが、絶壁は流石下廊下の中心とて、更に偉大に聳立する。先づ谷にも下りられたと萬歳を叫んで、安心の煙草をふかした。谷の入口から涼風がさっと吹き寄せて舞ひ上つた瀧のしぶきを上身に浴びる。

其から左方に岩を搦んで、流に下り立ち、左岸に渡つて少許、再び右岸に徒渉する。川は右方へ曲つて行く。徒渉股間に達する處もあつて凡十間ばかり邁進した、すると眼前に三段に連なる瀧がわつとおめいて落ちかゝつた。瀧の高さは合せて五間位。まだまだ下廊下の領分を脱してゐない。すぐとその先が支流の落合ふ場所で、其を通過しなければどうも安心がならないと悟つた。

其處で左岸を少しへつって、適當の所から山腹を登つた。中々其登りも悪いので、やつと左へ切れて、水面上五十米許の處から山の鼻を廻りかける。支流の澤は高い瀧が三段に連つて大凡百二十尺もあらう。脊尾根の突端から山腹をへづつて暫くするといよいよ本流といふ處で、危い岩壁の上に出た。澤の流域はもう危なげないので下りる事に決めたが、綱を二重にしては到底も足りない、慥かカンバの類であつたと思ふ、其根元に十分まきつけて、一重にして投げると、百二十尺もあるものが先一間程足りない。だから凡百尺の崖と思はれる。傾斜は七十度位又は其にも足りない位であるが、蘚の水氣が、綱に觸(ふ)れてぬるぬると滑る。靜馬、私、内山の順に下りて、最後の處は綱を放し樣駈け下りてほつとする。勇吉はと見ると、結んだ綱を二重に直して握つて三分の一程下りて來たが、もうどつちも素手では下れないので、恐々足場を爪先にさぐつてゐる。靜馬は左手の危岩に裏からよぢ上つて大聲にどなる。私は氣味が悪くて見てゐられないので、流に足をひたして口笛を強くならして外方(そつぽ)を見てゐた。けれど勇吉は無事に下りられたと見えて、「よかつたのう」といふ靜馬に對して「豪いぞ豪いぞ。俺(おらア)川ン中へとびこんでしまはうかと思つた」と賑やかに私の傍にやつて來る。一同は祝福の水を飲んで、馬の樣に長い息を吸ひこんだ。

此の處川幅は一二間の狹きに押し詰つて雙崖なほ小廊下の趣があるが、水量は驚く程ではなく、傾斜も緩いので一寸安心が出來る。もう日暮に間もない、何とかこの閉ぢ籠めた屏風の中から緑の草敷く廣い河原に出て行きたい。異常な興奮に目尻の上つた靜馬は、しつかと荷梯子をくゝりつけて、「さア、氣付けて呉れよ」と先に立つ。瀬の音は冷く骨の隨迄沁みて、足は忙しなく右へ左へと渡る。一處胸迄つかりさうな深みがあつて辛じて、アルペン・シュトツクを足場にして岩に取り付く。流は中々急である。丈も立たない深淵が到る處に口を開ける。水に親しみのない彼等の顔は不動明王の侍者の樣な緊張を示して、可笑しいと笑ひでもしたらそれこそ渦の眞中に叩き込まれさうだ。尤も内山は大町から二三里東の山によつた處の者で、この旅行中時々水練の話を持ちかけたが、其都度靜馬は今にも彼が水にとびこみでもするかの如く思つて諄々と其不心得を諭す樣子が面白かつた。早く切り抜けたいといふ希望のみが心を占める。然し流は數町にして兩岸の絶壁見るからに凄まじく天を閉して、一つの谷一杯に落下する飛瀑に突きあたつた。瀑の上には殘雪がアーチ型に殘つて、岸と岸との間に危橋を渡してゐる。もうそれについて進む事は絶體に出來ない。そこで無言のまゝ、アルペン・シュトツクのお蔭で上れたタルの上に戻つて、左岸（南西側）の砂地に荷を下ろした。

私達は初め餘りに早く下り過ぎたのだ。誰の顔にも血管は太く青く張り切つて、眼光炯々と岩壁を睨んだ。兼て棒小屋澤の下部が悪いといふ事は聞いてゐたが、成程其は死の谷であつた。私達は必死になつて彷徨した擧句、終にこの猫額大の砂上、水は足を洗ひ、頭上には何時落ちんやも圖られぬ破岩を戴いて一夜明かさねばならなくなつた。

やがて日はとつぷり暮れた。夕食は晝飯の殘と味噌汁ですまし、出來損ひの片栗を食べて天幕に入つた。用を足しに外へ出ると、淙々たる溪流は蝙蝠の羽翼のやうな形にかぎられた狹い空に對して、嘗て感じた事のない壓迫と、物の氣にとり憑かれた樣な心持をば感じた。これ程狹い空を見た事もない、エメラルドに輝く星の數も指折り數へられる。毛布にくるまると、水音が耳についてしばらくは寢られない。何か鳥の啼く聲でも聞えはしないかと耳を聳だててゐる内、疲勞は全身に廻つて前後不覺に陷つてしまふ。

八月十二日。私と内山はぐつすり寢られて氣持よかつたが、靜馬と勇吉は頭上の岩が心配で十分眠られなかつたさうだ。昨夕は興奮し切つた後であつたから恐しい響に聞こえたが、今朝は如何にも優しい川の流である。朝飯は片栗を混入して炊き上げたら味が頗る上等であつた。恐怖の谷にも、豊富な水と燃料とがある事は、晝間の奮闘を償ふに充分である。昨日迄三日間下廊下の附近をうろつきまはつて、貴い難行を積んだ

代り、行程は一寸も捗つて居ない。食糧の關係上、明日は是非とも大町に歸らねばならぬ。其には今日は成るべく時間を節約して、尾根に上り、少くとも棒小屋澤の上部迄出る必要がある。もう散々な目にあつて、明い灯の色が戀しい。出發は午前七時時分、砂地の傍の澤を上る。澤といふよりやはり岩壁のひだといつた方がよい。足場はしつかりしてゐて石一つゆるがない。直ちに五十米も登つて、側へ草を分けて行く。再び窪に出て一休する。それから先は岩の間やつと人一人入れる位の狹さで、傾斜は身體を直立して指の先が岩面に届く程のものだ。カラ澤を大分上つてから草の間を右に巻いて脊尾根に獅噛みついた。石楠が忽ち包圍攻撃を始めて手も足ももぎ取られる様だ。藪から稍平らな處へ出てほつと一息。百五十米は登つたであらう。時間は約一時間經過して居る。傍の栂（であつたと思ふ）の幹に大きな鳥の巣を發見する。内山が木に登つてたゝき落すのを拾つて見ると、誰も何鳥が巣くつてゐたか判斷を下し得ないが、兎に角古い物であつた。

又ヤブに入る。昨日よりはらくだが、歸心の萌した時なので元氣がない。稍上ると本尾根に達して信州境の山が穩やかな物腰（ものごし）で私と向きあつた。更に上ると背後から劔澤と、小窓、三窓の雪渓、それから久し振りで劔の尖頭が自ら足を停めさせる。北には白馬から西する清水平の續きの山が見え渡る。近くは例の瀧の荒澤が全豹を表はして、峻嶮な落ち込みがいとゞ凄まじく見える。

山が見えたので喜んだが、藪は更に根曲り笹が加つて一行の脛をはぢく。苦心慘憺の末やつと平らかな處へ來た。之を突破して少しく下れば、爺ケ岳の淡緑の肌と棒小屋澤中部から上の廣やかな河原が展開した。大抵見當がついたので谷に下らうと一決して、山を左に搦み二三の小尾根と窪を越え下つて、狹からぬ草の蓬々と生へた涸澤の源頭に來た。谷の水から五十米許上方である。川は見えたが頻りに空腹を感じたので、どつかと岩の上に腰をおろさねばならなかつた。

中食を終るや直ちに岩壁を這ひ下りて、再び本流の水際に立つた。最早下廊下の區域は全く脱して河原は先へ先へと續く様である。いやなヤブより飛石を傳ふ方が遙かにましだ。三四町にして右側の山側に泥塗れの小雪田を見る。左側からは山崩れして流に落ちこむ。雪の傍に軟かい蕗が群生してゐるので、今晩のお菜にと大分採集した。

水流の徒渉も容易になつたが、連日の過勞に膝關節ががくがくする。西澤小澤の分れ尾根が見えて來たので休みもせずに行くと、間もなく其合流點に達した。支流の水量は貧弱ではあるが、奥深く森に包まれてのび上つてゐる。

落合の直ぐ上に本流のタルがＳ字狀に三つ續いてゐる。局部的ではあるが一寸暗い峽をなして、其上は一枚岩が覆ふ。左側のヤブを分けてゆくと、邪魔になる木を伐つた跡があつて、近い事ではないが兎に角人が通過した證據は十分である。岩のはざまから直きに岩壁は打開いて前よりも廣い磧が續いた。三四町で左側の山の間から澤が流れて來る。地形圖にはこの澤に當る處に水條の記号がないが其水量から見て、當然入れてよいものであらうと思ふ。なほ十町ばかりはぐんぐんとばして上流に進んだ。

谷そのものは至つて平凡だ。駄々廣いといふ丈で、流も小さいなら、石の奇もない。其處へ思出した様に小岩壁が現れたが、此は難なく右手に登つて又河原に下りる。布引の頭の邊がよく見える。舊友にめぐり逢つた様な喜ばしさが靜馬達の頬にも浮んだ。豫想外に歩き易いので今日は棒小屋乗越から出る澤のドウに泊らうと決する。大空は半ば雲におほはれたが、其は夏の晴空の常だ。溪は美しいブナの林に包まれて河原の石は徒らに白い。左手に林の圍む平らな押出しを見てゆくと、其隣に鹿島南槍から長驅する澤が潺湲たる音を立てゝ落ちあつて來た。水は但しひどく濁つて居て不思議に思へた。このあたりから再び布引の頭が眺められた。

終に乗越澤の合流點に來てしまつた。本流を十五六間行つた處に程好く茂つたヤマハンノキの林があつて、第一流の野營地だ。河原の緣に陣取つて天幕も綺麗に張る。磧づたひは凡そ三時間以内のものであつたらう。五時半の頃とおぼえて、安樂な泊場には、木を伐る勇吉の唄がなごやかに反響して鳴り響いた。

河原は本流の先まだ可成り平らで、襟足おとなしい山にかくれてゆく。爺の峯は赤兀が所々にあるが、總て今日迄荒々しい骨格のみを見續けて來た眼には、優美な京の東山に對する様な心地がする。翡翠の色の肌

には殘雪らしいものも見えない。下流に面すると仙人山と劒の一部が上空を占めてゐる。此の處川幅凡三十間であらう、但し流は一間にも及ばない。對岸に行つて山足の岩に腰かけて再び劒を見る。夕燒した西空には、其の嚴乎とした山容はなほ北にも及んで、小窓、三窓の頭もカンカンとたゝけば金音を發する樣だ。其内に日は三窓小窓の間に岩峯に入つて行く。黃昏前の陽の散光、やがて雲赤く全天に走つて、最後の晩餐を祝する如く見える。

歸ると焚火の上に蕗がぐつぐつ煮え立つてゐる。十分にアクをとつて汁の實にする。殘つた物は明日の辯當のお菜に取つておく。尾根からは霧が下りて來てブナの林をやんはりと眞綿のやうにくるむ。シホカラが多い事は閉口だが、何しろ氣はのびのびした。

此旅行で最も贅澤な夕食が終る頃、赤雲は黃にぼかされ、其が淡々と消えて行つて、夜が來た。月の光は峰から射して來る。流石に夜氣は薄着の肌に迫つてゾクゾクする。天幕に入つて取つて置きのウヰスキーを乾盃して、櫻井氏に分けてもらつた粉ミルクだの、大町仕込の肉桂、乾杏等を賞美した。其は樂しい晩であつたが、又曉の待たれる一夜でもあつた。

七　大町に歸る

八月十三日。起きて窓外に立つと、日は劒のあたりに射して、赤味さす卷層雲は形面白く空にあつた。谷の白樺にも日は照つて來る。歸る日の朝の長閑けさ。意氣揚々として朝飯を炊き、殘ンの焚木を山の如く積む。火は忽ち靑空を嘗めて、爺のあたりに谷を見下す人もやと思ふ。米は二三合餘つた丈だ。大抵の物は消費してしまつたが、只食糧兼雨の日の附木の代りとして携帶したバタ一鑵と紫蘇の粉だけが殘つた。昨日とつた薰のいゝ蕗は味噌あへにしてお菜箱に詰めた。

午前九時頃出發、上天に雲がかゝつたが西の方劒の空は深碧だ。泊つた處は秋にしゝとりに來る處で、もうそれからは難所もあるまい、谿の旅は徹底的に水條ばかり傳へと、乘越の澤を踏み登つた。

十五度から三十度の傾斜である。二三町にして雪溪。右から小澤が落ちあふ。小さなタルがあるが黑部から來た吾々には朝飯前の仕事だ。しかし決していゝ場所ではない。徒涉する程の事もなく、四五町で岩影に休む。もう汗が背筋を流れて暑くるしい。遙か上方を見ると一つの大瀧が飛沫をあげてゐる。まはりの尾根は針葉の小樹林。岩は小さいが崩れやすい。澤の幅は三四間のものである。

岩影を出て少しく上れば又殘雪がある、其上は水が濁つてゐる。タルが一つ現れた。稍々危險の思ひをして這ひ上ると、休場で見た大瀧が眼前に迫つて來た。すでに百米以上も登つたであらう。棒小屋の谷を隔てゝ牛首山が見える。其峰は偃松、白檜の色が胸のあたりまで濃く、頭の近くからは美しい草地となつてゐる。瀧は高さ五六間で水さへ無ければ登れる位傾斜してゐる。其を左にからんで上ると、そろそろお馴染の草花が現はれてくる。大サクラサウ、ヨツバシホガマ、タチフウロ等。一段上に出て右側を傳ふ。その上は少し平らとなつて雪溪が横たはつてゐる。右から又も水が落ちて來る。平は二三町も續いて又一つの瀧となつた。澤は二段となつて私達は右方の瀧を登る。高さ五六間、岩角が多いので濡鼠になつて攀ぢた。不動明王の瀧上りだといつて一同は笑ふ。

暫く衣を日に乾して出かけた。後には牛首山が見える。更に一つの瀧となつたが、此はわけはない、一枚岩の緩傾斜面を上つて、その上の小瀧から右にからむ。此邊から鹿島槍の上半部が眼に映ずる。牛首山は頭の上から爪先まで眺められた。小瀑の連續はしばらく續いて心持長いと思ふ頃、澤は更に二岐に分れる。右を取つても早源と覺える水の隱れる處に到つて、昼食の爲に荷をおろした。布引の頭から鹿島槍まで雄渾な尾根の屈曲を見る。霧が少し出て來たが大した事はない。四邊は岳樺が行列して物も言はずに私達を覗きこむ。十時半から十一時頃の事である。

蕗の味噌漬で越中側最後の食事を濟ました。汗が冷えて嚔が出る。三十分の後に立上つてカラカラの細溪を天上に向ふ。左から澤の窪が落ちあふ。右手に上つて雪溪を踏み、穴のやうな所を通りぬけると、なつかしい草本帶がぱつと開けた。爺も見える。心は足よりも急いで草地の上りは苦しかつた。が、終に山岳巡禮

の常道に辿り着いた嬉しさは疲労を癒やす事が速い。私達は豫定の如く棒小屋乗越に立つたのである。

國境からは申す迄もなく劔、立山の大連嶺が望まれた。天上の楽園五色ヶ原の高原も見える。岩小屋澤岳は尾根續きに溫和に、五龍は鹿島槍の側尾根を越えて怪異な姿を顯はした。立山東面の内藏助平は笹の色もあざやかに望まれたが、タンポ(原文ママ)澤の山腹の高原（此は先年冠松次郎氏に依つて探られた）は見えない。山に雲が行き過ぎると、私達は荷を背負ひ上げて、黒部の深谷に最後の別を告げた。幾度か峰の上に立つて翼無きを慨いた私は、斯くして鹿島川を振り出しに谷から谷へとさまよつて來た。そして今は未知なりし境地から再び人里へ下つて行く。

附記　行程摘要

八月二日。午前九時大町出發、立山劔行鵜殿氏、立山劔白馬行の四高教授某英人、白澤より爺鹿島槍行の宮川氏等も同じく出發、鹿島溪谷に入リ林道を傳ひて鹿島川に注ぐ小なる澤の傍、林中に野營、到着午後五時、夕立あり、此地點ツメタ澤より凡二里。

三日。野營地出發午前八時四十分、林道は十町餘にして盡き、之より溪中屢々徒渉を以て進む、廣河原（圖上川の甚だ屈曲せる處）より二股まで壁とタル少からず、右岸林中を進み二股に到り（凡三時頃）岩上に野營と決す、此日急流に墜落して時計を破損し、爾後總て正確なる時間記錄を取る能はず、復た夕立あり。

四日。午前八時半、右股を上り雪溪を蹈みて五龍岳の登る、雪溪思ひの外長く且其上端は甚だ急にして狹し、此日霧かゝり咫尺を辯ぜず、初め五龍の南方に出でんとせるが方向を失し北方小鞍部に出づ、この上りに迷ひて却つて容易なりしを幸ひとす、尾根着凡午後三時半、將に天候險惡ならんとし急ぎ天幕を張る、普通ならば泊り得べき地點に非ず、果して風雨烈しくなる。

五日。朝に至るも止まず、正に暴風雨なリ、正午の頃最も甚しく天幕の支柱屢々倒されんとす。

六日。午前三時頃風雨止み蒼天に星斗を見る、約四十時間目に陽光を拜し、火をたき食をとるを得たる也、午前中は乾燥と休息に費し午後より五龍に登り、南下して八峯手前の泊場に到る、午後四時頃、野營、東谷平らかに見ゆ。

七日。天氣晴朗、午前八時頃出發、八峯ギヤツプの頭まで辿り、少しく引返して普通縱走大迂回路の下端に下り、之より尚八峯の澤を下らんとして數丈の瀑布（水殆無）連續せるに出會ひ失敗、再び縱走路の下端に戻り、鹿島槍側密林の脊尾根を搦みつゝ下る往々草生の急斜にかゝれば地質脆弱甚だ危險を感ず、午後五時半頃漸くにして東谷最奥の河原に下るを得たり、凡一八四〇米の地、溪中野營。

八日。午前八時頃出發、東谷を下り、黒部本流に落合ふ所より七八丁上部に野營、此迄は先づ容易也、野營地の數丁下に古河測量隊の天幕發見、但無人也。

九日。測量の天幕より尚數町下れば谷は愈々深く狹く瀧は瀧に連り到底下るを得ず、左岸カラ澤を上り黒部本谷より凡四百米の高距に達し、之より徐々に下りつゝ急斜せる密林の山腹を歩く、相對する仙人山の崖物凄し、再三本流に下らんとして能はず、水面上凡五六十乃至百米の地をへつり進む、既に日暮に近くなれば萬一を案じて一のカラ澤を下り、尚本流を覗くに至らずして岩上に野營す、此澤にて最も盛に綱を使用す、水無し、夕立を集め辛じて二合を得たるのみ。

十日。早朝出發し一尾根を越ゆれば漸く水を得、朝食と休憩に時を費し午前十時頃に至る。之より益々谷に近きつゝ進むに一の切開を得たり、怪みつゝ下れば偶然本流の傍古河測量隊の野營地に到る、技師櫻井氏並人夫の一行亦大に驚嘆し余等一行を歡迎す、時に午後二時頃、之より進むも良好なる野營地無かる可ければ、此邊に一泊と決し天幕を張る、黒部の水は脚下に流る、右岸を傳ひ劔澤落合を見に行く、三窓の頭を仰ぎ、其壯觀言語に絶す。

十一日。櫻井氏一行祖母谷に下る、余等は午前八時頃劔澤落合の對岸より絶壁を攀ぢ凡二百米の高度を得るに數時間を費す、之より一旦棒小屋澤に下れば急流と瀑布身を沮み遡るべくも非ず、對岸の山腹をへつり復た危險を冒して澤に下る、遡行二三町にして復た行き詰り、止むを得ず少しく戻りて猫額大の砂地に天幕を張る、午後五時頃。

十二日。前日の失策に鑑み一旦南方なる岩小屋澤尾根に上り暫くして澤に下れば既に下廊下の範圍を脱して河原廣く平らかに溪水の徒渉容易也、午後四時頃持小屋澤上流二股の河原に達し最後の露營を張る、夜祝盃を上げ互に無事なりしを喜ぶ。

十三日。右股の澤を上りつめ棒小屋澤乗越より左下して扇澤を下り常道大町に歸る、大町着午後九時。

7　渡辺 漸　「黒部川」（部分）『山岳』第 24 年第 2 號

1929（昭和 4）年 12 月 25 日刊　日本山岳會発行

要　約

1920（大正 9）年 7 月中～下旬の記録。

メンバーは、田中喜左衛門、その他 1 名（田中の友人）、大西又吉（大町の案内人）、ポーター4 名。

行程は、高瀬川千丈沢～雲ノ平～黒部川源流部から下降～薬師沢出合～立石～上ノ黒ビンガ付近～廊下沢出合上流付近～針ノ木谷遡行～南沢出合。

※渡辺漸による田中喜左衛門からの聞き書き。

※上廊下初踏破・初下降。

※田中喜左衛門は日本山岳会会員。

（本文に添えられた「附記」部分のみ以下に抜粋）

附　記

上廊下に關する從來の記録に就いては「黒部川探勝の經過」（冠松次郎氏）（二十一年第二號一七五頁――一七九頁）中に其の概略が記載されて居るが此れには多少の誤謬も含まれて居る様であるから其の訂正旁此の機會に一言したいと思ふ。

上廊下を初めて探られたのは京都の會員田中喜左衛門氏であつて此れは大正九年の七月中旬から下旬に掛けての事であつた。一行は同氏他一名と大町の大西又吉及び四名の人夫の七名であつて先づ高瀬川水俣千丈澤を溯りそれより雲の平を訪れた。此れより黒部川の流域に入り、第一日は薬師澤落口まで下降して其處に一泊、第二日は奥廊下の谷を辿つて立石に達し一泊。立石まではずつと谷筋のみを下降されたさうだ。第三日は尚谷筋に沿つて奥廊下を降り、金作谷落口附近にては膨大なる殘雪が本流を悉く埋め盡したるを目撃せられた由だ。此れより暫らくは右岸に沿つて下降されたが谷が左に曲つて更に少し下手で右に逸れて居る邊り（卽ち自分達が高廻りなせる二十八日のＪ、Ｋ、附近）まで來ると谷筋が行かれなくなつたので右岸を可成高い所まで登つて高廻りをし可成進んでから割れ谷を降つて僅かばかりの河原を見出して一泊されたさうだ。此處は丁度例の深い徒渉點の手前で自分達が晝食をした點（二十八日のG）に相當し、同氏の降られた割れ谷は米谷、野口の兩人が先きを見るべく登つて行つたものだ。同氏が此處で撮影された寫眞と自分達の寫したのとを比較して見ると、大正九年は非常に水量が少く、昭和三年は可成多い方で同一に論ずるわけには行かないが、七月下旬と八月下旬とでは流石に非常に水量に差異があつて、同氏が行かれた時分には渡渉等思ひもよらぬ事で、到底丈が立ちさうも無い。第四日は此處より暫らく高廻りをなし、それより右岸の水際傳ひに進み何處か分らぬが或る地點で左岸に移り、數河澤と廊下澤との中間邊りで一泊されたさうだ。第五日は此れより大體左岸を下降し、口元ノタル澤落口上手の廊下（二十七日のＫＫ′）の所では矢張左岸を高廻りされたさうだ。黒ビンカ直下の惡場（二十七日のＦ、Ｇ）は右岸を高廻りし、此れから行程はずんずん渉つて平から針ノ木澤を溯つて南澤落口附近で一泊されたとの事だ。上廊下を下降して居る間は毎日小雨が續いて行程がちつとも捗らず大分天候に惱まされたらしい。金作谷の下手で支流が瀑となつて本流に合して居るのは自分達と同じく再三目撃されたさうだ。

田中氏に續いて同年八月下旬より九月上旬に掛けて澤本千代次郎、同三郎の兩氏が大町より、平に到り此れより上廊下を溯行せられ立石よりオクノタル澤を上り、雲の平に達せられた。此の時には水量が非常に少くて谷の中を何處でもずんずんと行けたさうで、自分達の溯つたのも八月の下旬、もう九月に近い頃ではあ

つたが、どうもあれから一週間や其處等でそんなにまで水が減るとは思はれないのであるから、此の大正九年といふ年は昭和三年と比較するとずっと水量が少なかつたらしく思へる。田中氏の下降された當時の狀況を考へて見ても七月下旬としては割合に水が少なかつたらしい。昭和三年の夏には七月下旬頃はとても谷沿ひに行く餘地はなかつたであらうと言ふ事は自分達の溯つた時の種々な點から推して知る事が出來る。

澤本氏の溯行された時には口元ノタル澤上手の廊下（二十七日のＫＫ′）では水深は股まで達しなかつたさうで、丈も到底立つ見込の無かつた自分達の時とは大分趣きを異にして居る。こういふ具合であるから黒ビンカ直下の惡場も例の深い徒渉點も全然問題にならなかつたらしい。然かし「上の黒ビンカ」の上手で右岸を高廻りした所（二十八日のＪ、Ｋ）の深潭は此の時にも水の中を通過する事は出來なかつたさうで、右岸の高廻りは相當に困難を伴つたといふ事だ。本流が此の樣に水量が少なかつたのであるから、從つて支流はずつと水が少くて、瀑になつて落ちて居る澤等は一つも見受られなかつた由だ。奥ノタル澤は瀑の連續で右岸をずつと高廻りされたが、それでも樹間に認め得たものは十を以つて數ふる程だつたさうだ。

上廊下探勝の第三回は冠氏が大正十三年八月に双六谷から降られた時で此の時の事は「黒部號」に其の紀行があるから此處には述べない。

此れから以後東信道を辿つて上廊下を探つた例はあるが谷沿ひに辿つた人のある事を寡聞にして耳にしない。

（了）

8　竹内鳳次郎　「女子劔岳登山記」『山岳』第15年第3號

1921（大正10）年4月16日刊　日本山岳會発行

要　約

1920（大正9）年7月22日～8月1日の記録。

メンバーは、竹内鳳次郎、竹内ヒサ、岡田郁之助（ヒサの弟）、北沢清志（大町の案内人）、西沢亀重（ポーター）、清水彦男（同）、細川紀道（同）。

行程は、針ノ木峠～平～立山～劔岳～小窓～白萩川・西仙人谷下降。

※女性初の黒部横断・劔岳登頂（竹内ヒサ）。

（「雜錄」収録）

一體吾々の劔行は、最初は普通に針の木から五色原、立山、劔と順に行き、歸りは小黑部谷、祖母谷、大黑と云ふ豫定であった。しかし鹿島槍から歸つて大町の對山館に逗留してゐる中、追々と歸つて來た幾組かの登山者や人夫に尋ねて見ると小黑部の道は非常に惡くなつて居るし祖母谷道は壞れて居てとても通れないと云ふ。思ふに女伴れでは餘程困難らしい。何處か好い脫道はないかと思つて地圖を按じるてゐると、登山地圖に、小窓を越えて伊折方面へ引いた赤い線が注意を引いた。五萬分一の地圖と較べて考へると、小窓を越えて伊折方面へ出ることも大した困難はなさそうだ。登山地圖によると小窓の西側は雪溪になつてゐる。傾斜は少し急な樣であるが雪があれば此の傾斜は何でもない。然し西向きの雪溪は事によると所々解けて居ないとも限らないが、未だ早いから大丈夫だろう。何れにしても登山地圖に引いた赤い線が點線でないのが心強い（山岳第十一年第二號一五二頁參照）。辨慶岩附近大窓との出合ひ迄行けば、それから先は小黑部鑛山の鑛夫が通つた道があるだらう。案内の知らぬ道で、且つブナクラ迄行けぬ時に途中野營地があるか否か不明であるが、登山地圖の説明に何でもなく書いてあるから心配には及ぶまい、と思つて愈小窓を越へる事に決める。北澤清志が案内して呉れる事になつた。人夫は西澤龜重、清水彦男、細川紀道の三人である。

七月二十二日

午前八時十八分対對山館発發、午後三時二十九分大澤着、野營。

今日の出發は賑かだ。大澤へ行くのが四組、高瀨入りが二組許りで、相前後して立つ。吾々の組が一番最後であつたが、鹿島槍で皆一つ所になつた。天氣は上等である、そのかはり暑い。互に挨拶を交すと登山者の常として直ちに隔意なく話す。海軍の木村氏は、針木より鹿島槍迄行かれると云ふ。丁度一週間許り前に吾々が逆にやつたのを順に行かれる譯だ。横濱の大島氏は令息及その友人なる二人の學生を連れて、これは又我等と同樣劔へ行かれると云ふ話、他に立山に行く三人連れの中學生がある。皆後になり前になりながら進む、どうせ今日は大澤泊り、急ぐには當らない。木村氏に、ヂエットランド海戰の話など聞きながら、何時の間にか大澤に着く。今度は弟が加はつた上人夫も一人多い。夕食は中々賑かだ。

二十三日

午前六時三十九分大澤發、八時五十四分針木峠。九時四十三分峠發、十時五十分針木嶽頂上。十一時三十九分頂上發、午後〇時三十六分針木峠歸着。二時〇八分牛小屋、四時四十一分南澤着野營。

朝早く仕度を濟まし、人夫を殘して、木村大島の兩氏と共に出發する。僕は今迄木村氏位アルプスを馬鹿にした服裝をした人を見た事がない。背廣に白の短靴、柄の曲つた中指大のステッキを振り廻し、シガーを吹かしながら大股に登つて居られる、これがその險難を天下に誇つた昔の針木峠だつたら面白かつたらう。それでも感心に茣蓙を被て、水筒を肩に掛けた所だけが、普通の散歩と違つて居る。併しその内、だんだん雪溪の傾斜は急になって來る、どうかなと思つて注意して居ると、その指位の大さのステッキの先に、鷲の

爪程のフックを、ポケットから出して取り付けて、それで欺し欺し登つて居られる、寧ろ滑稽の感がある。大島氏はと見ると流石に山岳會員だけに、肥つては居られるが中々速い。我々はこれに後れざらんと努めて續く。時々霧が捲いて來る。見え隱れするズバリ嶽が非常に美しい。峠へ登りつめて隨分永く待つたが、人夫は一寸來そうにない。大島氏は蓮華へ、吾々は木村氏と針木嶽へ向ふ。針木岳は、此の方から登ると何でもない。頂上の展望は壯んなものだ。今日は東の風強く、雲多くして且素敵に迅く飛んで居る。こちらで山が隱れたと思ふと彼方で顯はれると云ふ樣な工合で、景色に變化があつて非常に面白い。南方はやはり槍ヶ嶽が簇がる雲の上に突つ立つて覇者の威を示して居る。これに對して悠然と肩を張つて控へて居る藥師の態度が氣に入つた。その中間に赤牛嶽黑嶽其他の群雄が、雲の中に、頭を出したり引つ込めたりして居る。立山は、恐らく此處から見たのが一番いゝだらう、どつしりして根強い感がある、裾を廣く張つてこれを黑部に落した所、なかなか雄大だ、上半面は雪多く、雪を破つて三角形の黑い岩が、簇々と頭を出して居る樣は、亦秀麗たるを失はない。これに續いて彼方には、長次郎、平藏の兩大雪溪を眞白く見せて、大豪劒が控へて居る。眞に自然の大彫刻だ。北方は雲に包まれて遂に駄目かと觀念して居る內、僅かの間ではあるが、スバリ嶽より鹿島槍白馬に至る迄の連峰、皆その頭だけを、雲の上に浮いた樣に見せて呉れたのは實に嬉しかつた、かくて一時間近くも景色に見とれて居る內、急に寒さを覺えて來たので降る。遙かに霧の中から人の呼ぶ聲が聞へる、木村氏の人夫がやつて來た。此處で木村氏とお別れする。針木峠へ近くなつた頃、呼笛の聲がする、こちらも應じる。少しゝて淸志が迎へにやつて來た。あまり歸りが遲いので心配したと云ふ。笛は大島氏が吹いて呉れたのであつた。牛小屋邊で二度目の晝飯を食つて、南澤まで降つて泊る。實は平迄行くつもりであつたが、淸志が、此處が好いと云ふから、それにした。大島氏もやはり南澤泊り。

二十四日

午前八時四十分南澤發、九時四十五分平小屋着。十一時十四分平小屋發、午後〇時四十八分刈安峠着。一時四十三分刈安發、三時二十八分ザラ峠野營地着。それより五色原へ登り、五時三十六分野營地に歸る。

朝起きて見ると雨が降つて居る、ひどくはない、暫くして止む。初めて見る黑部の流れは思つた程でないと飛び込んでみて驚いた、中々急だ。膝以上に流れが深くなると、思ふ樣に足が出ない、深い所は股まである。用心にポケットのものをリュックサックに移して居てよかつた。妻は淸志に負ぶさつて渡る、仕方がない。平の小屋では、先に渡つた大島氏の人夫が火を燃して居て呉れた。濡れた服を乾かしたり、飯を食つたり、隨分グヅグヅして、十一時過、人夫を殘して大島氏の一行と共に出發する。今日は朝から人夫がいやに悠つくり構へて居る。日がカンカン照り初めたので汗になつて刈安峠へ登り着いた。此處の眺望も一寸好い。一時間近くもして漸く人夫連はやつて來た、直ちに一緒に降り初める。ザラ峠から出て來た溪流を渡つた時、人夫連は此處で食事をすると云ふ。又吾々のみ先に出發する。その時淸志が「今日はザラ峠で泊りませう、重い荷物を五色まで上げて又下ろすのはつまりませんから」と云ふ。ナール程、それで分かつた。昨日の南澤泊りも、今日のグヅグヅも畢竟その事の爲であつたのか。一寸してやられた樣な氣がしないでもない。然し考へて見ると、淸志の立場も可哀そうである。自分は先達であるから、お客樣にも能くしなくてはならないが、人夫も勞つてやらねばならぬ。ザラ峠に適當の野營地がある以上、お客樣だけ五色へ行つて貰う事にして、重い荷物を背負上げ背負下す手數を省きたいのは人夫に對する人情だらう。峠に來て見ると淸志が云つた通り好い野營地がある。リュックサックを置いて杖一本で五色へ出かける。思ひの外登らなくてはならぬ、是では人夫が嫌うのも無理はない。五色原では寒い風が吹いて居た。雪解けの水が草の間を傳つて流れて原一面がヂクヂクだ、空は曇つて五時と云ふのにもう薄闇い、淸麗な草花は寒そうに震へて居る、頗る感傷的の景色だ。それでも大鷲奥大鳶から吾々の前になだらかに引いた緩傾斜の軟かき曲線の上に烏帽子から、槍、穗高を中央に笠ヶ嶽までが、遙か南の方は晴れて居ると見えその明るい空色を背景にして、くっきりと浮き出したその落ちついた眺めには、寒い乍らも約一時間も足を停めさせられる。野營地に歸つてみると、既にテントは張られて、人夫は夕飯の支度に忙しい。カレーライス。

二十五日

午前八時二十五分ザラ峠發、十一時十五分鬼嶽頂上。午後〇時四十三分龍王嶽、一時四十二分一の越着野營。

吾々も今日は人夫達と一緒になつて歩く。大島氏一行は少しく早く出發される。鬼嶽への登りには時々急な所があるが、岩が確かりして居るのと足場がいゝのとで少しも苦にならない。晝飯には一時間も休んで隨分ゆつくり歩いたが、何分道程が近いので午後二時前に一の越に着く。今日は朝から晴れては居るが風が強い。一の越に着いた時は北東の風が猛烈に吹いて居る。それで西側に野營した。あまり風が強くてテントを張るのに非常に困難する。だんだん空模樣は惡くなつて大粒の雨さへ加わつて來た。テントは最初そう惡い位置に張ったと云ふでもなかつたが、地面に少々傾斜があるのが心配だ。バロメーターはと見ると益降る。大島氏は野營を止めて室堂へ降つて行かれた。僕は斷然テントを移す事にする。然しどうも思はしい所がない。そこであまり上等の場所ではないが比較的風も防ぎ且皿を伏せた樣な地形の處見つかつたので、其處へ移轉する。四時頃少し風が弱つたと思はれたので、清志と室堂へ米味噌の補充に出かける。ところが弱つた。室堂では雨の爲に米が上がつて來ないから無い、賣れないと云ふ。此處で米が手に入らないとなると勿論この先旅行を續ける事が出來ない。且室堂では、此の風に一の越の野營は危いから、降つて來て室堂に泊れと頻に勸める。併し吾々は頑張れるだけ頑張つて見て、それでいけなかつたら逃げて來るから、その時は賴むと答へる。併し逃げて來るにしても、夜中風雨を冒して坂を降つたり雪の傾斜面を横切つたりするには、どうしても懐中電燈が必要になる。ところが吾々の懐中電燈は、その事を心配して、この室堂へ降つて來る前一寸試してみたのだがどうしてもつかない。それで出來るなら大島氏から一つ拜借したいと云ふのが、吾々が室堂へ出かける時の目的の一つであつた。そこで大島氏に事情を話してお賴みすると、「私共には幾つもあるからずつとお使ひなさい」と云つて心よく借して下すつた。この懐中電燈には、旅行を終る迄いくら吾々が助かつたか知れない。室堂で無いと云う米は、吾々にもどうすることも出來ない。少しでも上つて來たら分けて貰ふ事に賴んで一の越へ引上げる。夜になつて果して猛烈な暴しがやつて來た。天幕の支柱は晝の中から杖を二本も縛りつけて置いたから大丈夫だが、テントは風を受けた方が帆の樣に孕む。その凹んだ処に雨を吹きつけるから、水が滲み出して雨滴となつて内側をつたふ。水に濕る位まだいゝが布が裂けはしないかとそれが心配になる。それで内側から色々な物で支へる。山の暴風はどうも方向がよく分らない。間を置いて烈しく吹きつける風は一度毎に方角が違つて居る樣な氣がする。然し地形上そう感じたのかも知れないが夜十時頃は多くは北方から來た樣だ。其中にだんだんこちらも慣れて來る。どうも大丈夫らしい、この模樣ならば逃げ出さなくてもよさそうだ。大丈夫となると、山の旅行、樂な樣でもやはり疲れて居ると見え、皆よく眠る。一時頃一寸目を醒したが、風は尚旺に叫びを發して闇のなかを暴れ廻つて居る。雨もひどい。バロメーターを見ると、ほんの少しであるが、宵よりはいゝ方に動いて居る。尤もこのバロメーターは私製だから、全然たよりにする譯にはいかない。マア吹きたけりや吹け吹け風の神と又一と寢入りする。

二十六日

雨の爲及米の爲滯在。

一度目を醒してからは、流石によくは寢つかれない。風は尚烈しく吹き暴れて居たが、夜明け頃から弱つて來た。午前六時頃には方角の決まらない風が思ひ出した樣に吹いて來るだけになつた。そのかはり雨が非常な勢で降つて來る。どうせ今日は滯在だ。それにこの雨では飯も焚けない。朝食は昨日室堂で買つて來たパンで濟す。午後少し小降りになつた時、大島氏が心配して見舞ひに來て下さる。お入りなさいと云つても、濡れて居るからと云つてレーンコートを着て外に立つて話される。何でも室堂では昨夜もう逃げて來るだらう、もう來るだらうと云つて心配して待つて居たと云ふ。その時京都の大谷氏も、昨夜からか室堂に來て居ると云ふ話であつた。そして「大谷さんが、牛肉やバターで西洋料理を拵へて食ふもんだから、みんな腹のへつた連中が、鼻をならして堪らなそうにしてますよ」と云つて笑つて降つて行かれた。山の生活にもやはり差はある。多人數詰め込んで居る室堂で、悠つくり場所を取つて甘い料理を食つて居る至極平民的だとの評ある貴族の態度を想像する。僕もバターで何とか云ふ洋食が食いたい。室堂のパンにかぢりつく。

二十七日

滞在。

今日も亦雨の爲滞在、然し今日は米の爲ではない、米は昨夕清志が買つて來て呉れた。昨日から降り續いた雨は尚容易に止まない。その上に霧も深い。然し風は全く凪いで居るので、立山參詣の連中は、朝早くからチリンチリンと鈴の音をたてて、テントの側を雨を突いて登つて行く。午後になつて雨歇んで少し青空が見えて來たので、吾々も三人淨土に登つて、それから室堂へ降つた。室堂では、大島氏が立山から丁度降りて來られた所であつた。大島氏は會社の都合もあり、若し明日も雨であつたら、劔行は止めにして芦峅へ降ると云つて居られる。吾々は、地獄谷を見物して野營地へ歸つた。室堂のお爺さんは、この天氣は未だなかなか好くなりませんぞと云つて居たが、夕食後人夫達は西の空を眺めて、この夕燒けが氣に入つた、明日は屹度天氣だと、さも確信あるものゝ如く云つて居る。私製のバロメーターは、お爺さんに賛成の意を表して居た。

二十八日

又滞在。

私製でもやはり器械だ、器械と年寄りは好く當てた。雨は夜半から降り出して夜が明けてからは更に烈しく降つて居る。又滞在して米味噌その他を補充する。その時、室堂のお爺さんが弟に「明日は曇りかもしれんが、明後日からは屹度晴れる、そう天に澤山雨があるもんぢやない、明日少し位は降つて居てもたてたらおたちなさい」と云つて勸めたと云ふ。有難い。

二十九日

午後七時四十三分一の越發、八時十三分立山頂上。午後〇時十三分別山神社。二時二分別山裏の窪地。三時五十分別山裏の窪地發、四時三十五分平藏谷。四時五十二分長次郎谷入口着野營。

パン二百五十、三日四晩の蟄居、今日漸く釋放される。霧は深いが雨はない。朝早くから仕度に騒いで居る人夫達の聲も、今日は殊更に勇ましく聞える。飯を終ると結束して立つた。霧は前後を塞いで何等の眺望も許さないが、吾々には放たれたる小鳥の嬉さがある。且つ愈これから劔へ向ふのだと自ら足も輕い。少しく登るともう參詣連の降りて來るのに逢ふ。妻を見て何とか云つては行き過ぎる。多くは女がこんな所に來て居るのに驚いて居る樣である。妻は唯黙つて笑つて登つて居る。立山だけですます參詣の人々には、立山が嶮しく思はれるのも尤もだか、この幾層倍ひどいか知れないと思ふ山を前途に控えて居る吾々には、立山位は恐らく妻の眼中にもないだろう、「だつて道がついてゐるんですもの」と至つて平氣だ。一の越から頂上まで丁度一時間を費す。頂上では一寸でも晴れて呉れるといゝがと思つて居たが、とても晴そうな空模樣ではない。三十分許りして人夫達はやつて來た。清志は雄山神社の御神酒に目をつけて、戴きたさうな顔をして居る、立山から別山への峰づたひは、最初日程を作る時からその眺望を想像して樂しみにして居たものだが、この濃霧では仕方がない。十一時頃河野さんの一行が霧の中から現はれた。話をきくと何でも午後五時頃劔の頂上に着いて、月明りで鶴ヶ御前への尾根づたひをして降られたと云ふ。こうなるといかな劔でも少し輕蔑したくなる。何しろ今迄豫期しなかった冷の登りと、豫期して居ても困つた鳴澤嶽の偃松以外は、あまり平易であつたものだから、妻でさへ劔に對して「頂上近くまで雪溪があるんだから」と少し馬鹿にした樣な事を云ふ樣になる。その後又一組の登山者に遇つた。室堂から來たものらしい。二人は學生らしく、一人は會社員か記者でゞもあるか、越中の人夫が案内して居る。「劔へお登りですか」と尋ねると、「エゝ劔へ登らうと思ふんだけれどももう駄目々々、病人が出來て悲觀々々」と大きな聲で會社員らしい若い男が答へる。そして倒れて腹の邊りを押さへて居る一人の學生らしい人に「どうしても歩けませんか」と念を押して居る。態度が輕薄で恐ろしく不人情に見える。病人は吾々をチラと見たが顔を背けた。「もうこの先き、嶮しい所はないつて人夫も云つてるんだからもう少し行つてみませうよ、少し位は歩けるでせう」なぞといつてる言葉が殆ど強要して居る樣に吾々には聞える。山に來てこんな不愉快な場面を見せられるのは珍しい。正午頃別山神社に着く、未だ霧が深い。三十分も休んで居たが、急に寒くなつて來たので歩き出す。これからの降りに一寸惡い所があつたが、僅かの間だから何でもない。劔澤を少し降りた所に、平らな好い野營地

がある。人夫は此處に泊らうと云ふ。何と云ふ所だと聞くと三田平と云ふ。多分昔慶應の人が死ぬか生れるかした所なんだらう。誠に好い野營地だ。昨夜河野さん一行の野營したらしい跡がある。僕も、別山の頭から何にも見えなかつた腹癒に、此處に泊まつて朝日を受けた劔を見たくもある。それに清志は長次郎谷の入口にも平藏谷にも野營地はあるにはあるが水が遠いてと云つて降るのを澁つて居る。然し、明日の事を思ふと少しでも足を延して置きたい。それに未だ時間は早い。遂に出發と決めて發足する。途中寫眞など撮つて居たので人夫に後れて居たが、平藏谷の入口で追ひ付いた、清志は長次郎谷まで降らうと云ふ。一服吸つて荷を背負つて立上つた清志が「奥さん、明日は心配いらん、あのタルの降り工合を見て居たが中々確かだ」と誰にともなく大きな聲で云ふ。振り返つて見ると、成程今吾々が降りて來た許りの雪溪に一ヶ所非常に急になつて居る場所がある。平氣な樣では居るが、女を伴れての明日の劔登りをやはり心配して、人知れず妻の足並を注意して居たとみえる。長次郎谷の入口に來た。成程野營地はあるにはあるが狹い。且地面が石で平でない。木の枝や草を澤山敷いてゞこぼこの地面をならす。雪は近くにあるが水は遠い。雪溪を横切つて、人夫の一人は米を磨ぎに一人は枯枝を集めに行く。二人の働いて居る姿が雪溪の彼方に小さく見える。やがて枯枝を澤山背負たのと、鍋を提げたのとが二人連れだつて寒そうにして歸つて來る。誠に氣の毒だと思ふ。夕飯には、小指位の小さな筍の入つた味噌汁が出來た。甘い。

三十日

午前七時十分野營地發、八時三十五分熊の岩。九時九分熊の岩發、十時雪溪の頭、十時二十一分劔頂上。午後〇時二十一分頂上發。〇時五十一分雪溪初まり、二時長次郎谷野營地歸着。二時五十分長次郎谷出發、四時二十五分岩小屋着野營。

今日愈劔へ登るその日が來た。朝起きてすぐ天氣工合を見ると藍色の空が輝いて居る。深い谷間の野營地の事とて朝日は勿論空さへ僅か一部分しか望めないがその僅かの空が見上げて居ると眼が痛くなる程輝いて居る。しつかりカンジキを着けて、朝寒の風に面を吹かれつゝ、長次郎谷の雪溪に第一歩を踏み込む。踏み込んだ時のその感じ、これはとても山登りする人以外に分かるものではない。妻も弟も欣然として歩を運んで居る。清志と他に西澤と云ふ人夫が同行する。雪溪は流石に大きい、黒味を帯びた兩側の巨岩は、被さる樣に聳えて居る。雪は堅からず歩くに丁度工合がいい、且思つた程急でない。熊の岩で一息入れる。雪溪もこれから上は掃き淨めた樣に奇麗だ、枯枝一つ落ちてゐない、それに傾斜もこれからは餘程急になる。妻はと見ると「こんな好い所、ほんとに來てよかつた」と云つてニコニコして居る。清志も初めは心配して終始妻の後について居たが、心配なしと見てかズンズン先に登つてしまう。吾々は寫眞を撮りなどしながら嬉々として登る。「こんな美しい雪溪ならいつまで續いてもいゝわ」なぞと贅澤を云い初める。しかし全くその通りだ、登りつめるのが惜い樣だ。雪溪が盡きてからは杖なしで岩角を踏んで、遂に頂上に登り着いた。話に聞いた程嶮しい山ではなかったので少しアッケない氣がする、但し白馬の肩から初めて此山の望んでから是非一度はと思つた一年來の希望が玆に達した譯だ。天氣は好し風はなし、皆嬉しさうに何とかかとかシャベリながら先づ何よりも先に握り飯に嚙ぢりつく。嚙りながら四方を眺める。惜い事に天氣は劔だけに好くして他の山は皆雲に包まれて居る、尤も食つてる間は景色はどうでもいゝから、又全身の神經を握り飯に集める。その内には晴れるだろう。ところがなかなか晴れさうもない、太陽は劔だけをカンカン照して居る。それでも何處かの山が一寸でも頭だけなり出したら撮つてやろうと思つて寫眞器を用意して注意して居る内、鶴ヶ峰前の方から尾根づたひに登つて來る一組の登山隊が眼に入つた。見て居る内に向ふの人達は惡い場所に來たのか、皆一箇所に集まつて動かない、一人がどうかこうかして岩を登つて居るのが見える、やがてロープを下した、それにつかまつて一人々々が登る、それ等がみんな手に取る樣に見える、苦心慘憺たるものであるらしい。そしてその人達は少しも休まず登つたり降つたりしながらグングン近づいて來る、やがて頂上に現はれた、見ると黒岩直吉の案内する東海銀行の戸木、渡邊の兩氏と松澤由造（？）の案内する近江の井花氏とである。その内又一組、越中の人夫が例の無情氏と一人の學生とを案内して平藏谷から登つて來た、病氣の人はどうしましたと訊くと、別山の上でテントの中に留守番して居ますとの返事。狹い山頂が俄かに賑かになる。長次郎谷を登つて長次郎谷を降る極く平凡な登り方をする吾々は、心中少し意氣地なく

感じる。かくて頂上に二時間を費したが、立山が一瞬間その西半面を見せたのみで、その他は何にも見ずに降りに向つた。雪渓は降りが危ない。降りだすとすぐ僕は轉んで二三間滑り落ちた。その時この調子なら滑つても降れるなと思つた、それに新越から劒を見た時菊十爺が「大坂のKさんはあの雪渓を滑つて降りましたよ」と、それが非常な冒險の様に話した事を思ひ出して滑つて見たくなり、莫蓙も何にもないが其儘滑つてみる、尻が濡れて冷たいには閉口だが素敵に面白い、二三十間も滑つて立停まり上の方を見ると、登りの時とは違つて皆かなり緊張して一歩々々を注意して降つて居る、清志は先登にたつて大分心配して居る様だ。尻は冷たいが皆が降りて來るのを待つて寫眞を撮る。そこで皆と一緒になつて歩き出す、併し一度滑つてからは間だるこくつて歩いて降つて居られない、復た滑り出す、其うち清志も妻に對して安心したと見へ、一人で先に降りて行つてしまう。妻はたつた一人になつて後れて居る、少し可哀そうになつたので待つてやつたが本人は案外平氣で居る、且確かな足を踏んで居る、これなら大丈夫と思つて又先に滑つて降る。熊の岩から下は雪渓が汚ないのとそれに石なぞ轉がつて居るので歩いて降る。歩き出すと僕や弟は亂暴に足を踏み出すので度々轉ぶ、轉び方が滑稽だと云つて妻は立停まつて聲をたてゝ笑つて居る。何れにしても降りはやはり早い、雪渓を降り初めてから一時間と少しで長次郎谷入口の野營地に歸つた。とうとう劒にも無事に登つた。清志は安したやうに「奥さんはいゝ、をつかながらないからいゝ、平氣で足を踏み出すからいゝ」と、食事中話した。登つてみると案外平易な山ではあつたが、兎も角一年間恐れをなしてその名を聞いて居た此の山に、人手を借らず無事登り了せたのは妻にとつても嬉しいだらう、僕も滿足だ。無口の西澤でさへ何とか云つて喜びを述べて呉れる。皆何となく氣も輕く燥いでみえる。これから岩小屋迄には雪渓は直きに盡きて度々徒歩が初まる、妻は膝以下の處は自分で渡つて居たが、多くは清志の厄介になつて居る。岩小屋では河原の奇麗な砂の上に野營する。これ迄大事に取つて置いたうどんを、雪渓の下から流れ出る水で冷やして食ふ。うまい。夜は遲く迄山の端から月が出る迄天幕の側で焚火して話す。長大なる三窓の雪渓が近く高く吾人の頭の天邊で月光を受けて青白く光つて居る。

三十一日

午前六時四十七分野營地發、八時四十六分小窓頂上。九時五十二分小窓頂上發、十一時十分辨慶岩。午後三時ブナクラ、三時五十分バンバ島、早月川との出合ひ、四時五十二分バンバ島發電所前着、野營。

今迄は、清志が自分の山でも案内する様に引つ張り廻したが、これからは地圖が案内だ。今日中にブナクラ迄は是非行きたい。朝も早く出發する。今日は風があつて馬鹿に寒い。小窓の雪渓は緩い坂になつて居るので歩くには少しも骨が折れない、それに寒くて休むと足の指が痛い程冷たくなるので皆グングン登る。時々霧が捲いて來るが惡い天氣でもなさそうだ。愈〻小窓の頂上近くなつて、妻が足を停めて「道ぢやないか知らん」と峠を見上げて云ふ、僕もそれには前から氣が付いて居た。こんな場合の雪渓の常として頂上に近く急になつて居る、その雪の傍の青草にヂグザグにつけら道らしいものが見える、近づいてみると果して路であつた。なあんだこんな立派な路があるのか、それぢやあこの先きも心配したもんではあるまいと少しく拍子ぬけの感がする。峠に立つて西側を見ても霧が深いので何も見えない。峠の東側には人工を加へたらしい三坪許りの平地がある、其處で枯枝を集め、固形アルコールで火を起して温まりながら食事をする。此處は野營地としては、雪上の上に薪に乏しいから不適當ではあるが出來ない事はない。僕が氷砂糖をしやぶりながら頻に地圖を調べて居た時、峠の上を喞え烟管で歩いて居た清志が「先生ちょいとその地圖を持つて上つて來ておくんなせえ」と呼ぶ、大變得意の様だ、上つてみると無理はない、今や兩側霧晴れて降るべき谷の形勢がすつかり分る、清志は「こう降りてあれを曲るんでせう、あの邊で大窓と出逢うんでせう」と指さす。僕は地圖と磁石で位置や谷の方角を確かめる。大體の様子は分かつた。又すぐに霧が捲いて來る、天氣模様がどうも穩かでない。一時間以上も休んで出發する。小窓の西側の雪渓は東側よりはずつと急だ、それに山崩れがして土が雪の上に被さつて居るので汚ない、初め少しの間は雪の上を歩いて居るとは氣がつかなかつた。カンジキなしで降る。雪は堅いが波になつて居るので急な割にカンジキを着けなくともそんなに困らない。霧はだんだん深くなり時々雨が來る、すると急に寒くなる。清志と弟と一人の人夫は吾々とは一

二丁の距離を置いて先に進んで居る。勿論姿は見えない。一筋の雪溪を降るのだから道を間違へる氣遣いはない、それでも相呼應して降る。その内弟の怒鳴つてる聲がだんだん遠くなる、餘程吾々は遲れたらしい、追ひ付きたくとも少しあせつて降ると雪が堅いから度々滑つて倒れる、仕方なくカンジキを着ける。その時天候急に變つて谷が眞闇くなり非常に凄い景色となる、身體が引き締められる様な氣がする。カンジキを着けて居る吾々の側を一間許り離れて人夫が降つた、足音は聞えるが姿は直ちに朦朧として消え失せる。やがて電光と雷鳴に襲はれる。それが今度は豪雨に變る。風が加はつてそれ等がすべて猛烈にやつて來る。吾々もそれにつれて壯烈な氣分になる。カンジキを着けた足はもう確かだ、急いで降る。辨慶岩の附近に來た時は、風も雷も止んで雨だけが蕭々として降つて居る、見透しも少しくきく様になつた。此處で皆待ち合せて一緒になる。皆凛然として突つ立つて居る。見上げると空は明るくはなつたが雨は止め度もなく降つて居る、併しもう止むだらう、そう天に澤山雨があるもんぢやない。辨慶岩の下で雪溪が切れて居て降れない。右側の崖をへつって大窓との出合に移つた。果して雨は小降りになつた。こゝで又崖崩れがして道が通れない。こんな所に來ると清志はお得意だ、僕のアルペンシュトックを引つたくつて道作りにかゝる。吾々は皆崖の中腹に一列に並んで待つて居る、一番終わりに立つて居る僕には、先きの方で清志がどんな事をして居るか少しも分らない。だいぶ時間は過ぎる、餘程の難工事らしい。僕はそれがどんな工合か見たいのだが、二人並んで立てない此の崖路では自分だけ先に進む譯に行かぬ。それで一人引返して、他に大窓の雪溪に降るべき路を見つけに出かける。暫く探して居る内路ではないが少し危險を犯せば降れると思はれる場所があつたので、それを降つて居る内皆が僕を呼んで居る聲が聞える、逆戻りして元の場所に來てみると、清志と西澤だけが殘つて他は皆大窓の雪溪に降り立つてこちらを見上げて居る。荷物も下してある。見るとロープが下げてある、足場も出來ている、それを力に降る。皆降りてしまつて一と休した時清志が「あんな所の一ヶ所や二ヶ所なくちや面白くねぇ」と云つて今通過して來た所を見上げて居る。そして「奥さんは全く始末がいゝ、どんな時でも平氣で居るから危なっ氣がない」と云つて褒めて居る。然し腕力の弱い女にはあんな場合どうであつたかと思つて妻に訊くと「どうってほかに仕様がないぢやありませんか」と答へる。然しロープを使用したと云へば餘程危險な場所の様に思はれるが實はそれ程の處ではない、清志も後で「男許りならロープはなくても降りられたんだ」と云つて居た。此處は大窓の雪溪を中央に南に小窓北にも一つ雪溪があつて三つの雪溪が一ヶ所に集まつて居る。これから下は雪は切れて流れになつて居る。そのかはり右岸に路がある。これからブナクラ迄は、數回左岸に移るが多くは右岸の林道又は河原を下る。天氣は急に晴れたり急に降り出したりするが降つて居る間の方が多い。度々徒渉をする。その度に清志は妻の世話をやいて居たが、後には大概の處はズンズン先に行く、妻も袴や衣服はどうせ濡れて居るのだから大抵の處はザブザブ渡つた。それに渡れない程深い所は丸木橋が架けてある。心配して居た野營地はブナクラ迄に幾個所もある。ブナクラの出合に來た時は又隨分雨が烈しかつた。それからは左岸のみを降る、雜草が丈より高い。バンバ島には白萩川と早月川との合流點に茅葺の小屋と發電所に屬する木造の家が一軒ある。小屋には俗離れのした白髪のお爺さんが一人で居る、内に入れてもらつて雨を避けた。お爺さんは小窓を越えて來たと聞いて、ほうそれはゑらいと云つてるが格別感心した風もまい、唯妻を見て、あんたも一緒に越えて來たかと尋ねた。それから橋が架つて居たらうと云ふ、お爺さんが架けて置いて呉れたのかと訊くと、そうだと云ふ返事、若し此のお爺さんが居なかつたらなら、吾々は餘程難儀したであらうと思ふ。伊折迄の道程や宿屋の有無を訊ねた。宿屋はあると云ふ。それでは伊折まで行う。未だ早い且それ程疲れても居ない。其覺悟で立つにはたつたが、バンバ島發電所の前まで來た時、清志が「先生、この邊で泊つて呉れませんか」と云ふ。妻と弟とは伊折行を主張緒したが人夫を見ると可哀そうにもある、且明日此處からでも上市迄出るのは何の造作もない事だ。遂に又野營に決める。丁度雨も止んだ。夜發電所に電燈が點くと里へ出た氣がしみじみとする。人夫達は鼻唄をうたひながら見物に行つた。

八月一日

午前六時四十九分野營地發、八時四十分伊折、十時二十五分折戸。十一時五十三分極樂寺村。午後一時五十分上市停車場着。

今日は相憎くと天氣が好い、カンカン照り付けられる。山から出て來た吾々にはひどくこたへる。發電所前からは車道が通じて居るから道は上等だ、そのかはり照り返しが強くて暑い事甚しい。極樂寺村の茶店で晝食して午後二時近く上市停車場に着く。上市からは汽車で北陸線の滑川に出た。滑川停車場では先づ第一に石炭酸の匂ひが鼻をつく、腕に赤布を捲いた巡査が嚴かに乘り降りの客を監視して居る、出入口には昇汞水が備へてあつて一々手を洗へとある。虎列刺が烈しく流行して居ると云ふ。下界。

附記

記事は、初め簡單に唯記録した時間の説明位のつもりで書き出したのが少なからず冗漫になつた、後で妻に關しても少し委しく書くべきであつたと思つたが、何しろ旅先きで書いて居るので、妻自身の氣分やその他の色々の事についても、僕が今書いたより以外には筆を進める譯に行かない。それから人夫やその他の人々の云つた言葉については、方言を充分眞似し得なかつた憾はあるとしても、一言も附け加へたり修飾したりした點はない。又山容や地形はこれを記するは通過した所があまり知れ渡つて居る場所であるのと、且今迄本誌に幾度も委しく載つた事のある場所のみであるので止めにした。それでも小窓からバンバ島迄は少し詳しく書いてもいゝと思はぬでもなかつたが、平易な通路で特記する程の價値がないのでこれも止めにした。唯だ二回の晝飯に二時間と辨慶岩の處でロープを使用した時約四十分を費した以外には、かなりに道を急いだ事を附記して置きたい。勿論雪溪では暴しの爲、辨慶岩以後は雨の爲林道が滑つて思ふさま急げなかつたとは云へ、恐らく岩小屋よりバンバ島までは女の一日の行程としては充分と思ふ、例令吾々に伊折迄行ける自信はあつたとしても、それは平地を上市まで行く翌日の道程を顧慮する必要がなかつたからの事で、他日女伴れで此の邊を通過される人の爲に此の事を一言申添へたい。

それから妻を伴れて歩いた私の經驗について少しく書いてみたいと思ふ、經驗と云つても去年と今年と唯二た夏の、しかも北アルプスのみに限られたる誠に貧弱な經驗で、從つて云ふ事も本誌の讀者なぞから見たら誠につまらない或は間違ひだらけの事かも知れない、間違つて居たらどしどし訂正して頂きたい、これが刺戟となつて婦人登山やそれに關する研究が盛んになれば、それは僕の最も望む處である。

こゝに云ふ山とは、白馬や槍ヶ嶽の樣な準備なしで平氣で登れる山を指すのではなく、少なくとも四五日がゝりで行く云はゞ山地の旅行に關するものである。

妻は中肉で丈は五尺二三分、女としても小さい方である。時々腹痛を起しはするが先づ普通の健康體と思ふ。足は他の女を知らないから斷言は出來ませんが普通以上に達者とは思はない。近頃學校出の女ならば大抵これ位は歩けると思ふ。然し妻は、大に達者とは言へないが確かな足を踏んで居た、それは女だから險惡な場所に來れば隨分歩みはのろくはなるが、踏み出す足にはあまり危なつ氣はなかつた、それで安心して伴れて行つた譯である。今迄歩いた經驗としては、女學校時代半里の道を往復して居たのと、それ以外には三年前、僕と岐阜から（實は岐阜驛より關迄電車）高山を通つて越中笹津へ歩いた事があるだけである。山の經驗といつては大山に登つたのと箱根の乙女峠を越えた以外に何にもない。かくして昨年白馬から鑓ヶ嶽を降り、有明山、燕、槍ヶ嶽、焼嶽等へ登つた。その時準備さへよければも少し深い山に入れると思つたので、今年になつて前記の山を伴れて歩いた譯である。

山に於ける服裝と云つても別に變りはない、着物は筒袖で袴は括りにして居た、それに麥藁帽を用ゐた。カンジキを着ける時は、下に普通の足袋を穿いてその上に刺した度を穿いて居た、刺した度には、一尺許りの眞田紐の中央一寸許りを足袋の甲に横に縫ひ付けて置く。これはカンジキを一旦普通の通りに穿いて、その後からこの紐をカンジキの環に通して折り返して足の甲の上でしつかり結ぶ爲で、そうすると雪溪を横に歩く時なぞカンジキが横にずれなくて非常に好いと思つた、どうしても女はカンジキでもなんでも緩く穿こうとするから、それにはこの方法が大變有功と思つた。

山に入つて女の一番困るのは徒渉と藪くゞりで、眞の藪潜りは未だ知らないが、鳴澤嶽の偃松位でも隨分困つた樣である。あんな所では麥藁帽も邪魔ものだが袴は寧ろ悲慘だ。それに妻は餘りに腕に力がない、それがこんな場合に一番いけないと思つた。普通吾々が急な雪溪なぞで杖を力に登る時でも、妻は杖を横に兩

手に持つて登つて居る、何故杖を使はないかと訊くと、力が少しもはいらないからと云ふ、力のいれ方がまづいのか力がないのか知らないが、此の力の弱いと云ふ事は登山に、特に藪くゞりに非常に不適當だと思ふ。併しこれは妻だけの事で女に皆此の缺點があるとは思へない、が又多少似通つた點もあるだらうと思ふ。藪くゞりにもまして困るのは徒渉である。この困難は初より豫期して居たが、どうも好い考も浮かばなかつた。實は黑部川の平の徒渉も人手を借らないつもりで、妻自身もその事を覺悟して、袴を脱いだ時不體裁でない樣、その下に着るべきものも用意して居た、然し先に渉る人を見ると少し女には困難らしく思はれたので、清志が負つてやると云ふのをいゝ事として負はれて渡つた樣な次第である。こんな工合で、何事よりも此の二つが女には困り物であつた。併し服裝を洋服とすれば、此れ等の困難は大に緩和し得る事と思ふ、殊に徒渉の如き丈が高く且つ洋服ならば男も同樣に出來やうかと思ふ。要するに此の二つも男よりは困ると云ふ話で絶對にいけないと云ふ譯ではない。それ以外には女なるが故に特別に困難を感じた樣な事はない。兎も角女で白馬や槍ヶ嶽以外の日本アルプスに登ると云へば非常な冒險の樣に思つて居る人もあるかも知れないが、少なくとも鹿島槍と劔位ならば、冒險なぞとは以ての外であらう。

それから準備については、僕は妻の爲に特別用意をして行つたものはない、唯男のみの場合よりは物事すべて少しづゝ潤澤に用意をして行つた丈である。それで別段不自由を感じなかつた。強ひて云へば、雨のなかで惡る場を歩く時なぞは、莫蓙よりは輕いレーンコートを妻の爲にほしいと思つた。それから妻には換へ草鞋と水筒以外何も持たせなかつた、初めは辨當だけは背負はすつもりでその爲の袋を用意して持つて行つたが、とうとう辨當は僕か弟が背負つてやつた。これはあまり好ましい事ではなかった。若し少し強い婦人ならば、辨當とその他化粧道具位を入れる小さなリュックサック位は背負はした方がいゝと思つた、その方が一から十まで人の世話にならなくて本人も愉快に違いない、女は山に入つたら化粧が必要である。こんな事は本誌の讀者は充分承知に違ひない、妻は何かクリームを塗つて居る樣であつた、其爲か去年の樣に一皮剥けずにすんだ。

女の登山に就て最も大切な事は、細心にして充分山に經驗あるいゝリーダーが附いて行く事で、僕の樣な山の素人が伴れて行つたのは、此の事のみは冒險と云へる。好い案內者も必要だが、何よりも第一に好いリーダーを必要とする。これは男のみの場合でも同樣であるが、女を伴れて行く時は殊に痛切に感ずる。

リーダーの資格については、僕の樣な素人が云々するも可笑しいが、僕は山の地形について委しい人よりは寧ろ山地の天候も關して正確なる判斷をなし得る人を適當と思つた。天候の事に關しては人夫の云ふ事なぞ少しも當にならない、僕はいくら女でも暴風雨に曝露しない限りは、怪我や病氣の爲に部分的の災難には遇ふとも、全體として遭難する樣な事は殆んどないと思ふ。要するに正確なるバロメーターとこれを判斷する好い頭とはリーダーの持つべき一番大切なものと思ふ。

それから、リーダーはどんな事を注意しなくてならぬか。これも僕の樣な素人が云ふ迄もない事ではあるが、二三氣付いた事を書いてみるならば、一番緊要なことは日程を樂に作る事と思ふ。無理をしたり道を急いだりする時に多くは災難を惹き起す。妻や弟は毎日の工程が常に樂過ぎる樣な事を云つては、不平を洩す事などあつたが無經驗の吾々が少しも山を恐れず愉快に且平氣で歩き得たのは、險惡なる天候を避け得たるにもよるが、多くは日程を樂にして居たが爲と思ふ。又こんな事もある、去年信濃山岳會の人達に加はつて槍ヶ岳に登つた時、或る女學校の教師だと云ふ人が、私に妻の歳を尋ねた故、正直に二十二歳ですと答へると、それは感心だと云つて其人は「私が女生徒を伴れて山に登つた經驗では、十六七歳までは皆能く歩けるが、それから年を取るとどうもいけない」と云つて居た、こんな事もリーダーは心得て置くべき事かも知れない、十五六の頃よく歩いたと云つても二十を過ぎたら餘程加減しなくてはなるまい。それから多人數を伴れて山に入るのは全然いけなくはないが餘程好い條件が揃つた時でなくては危いであらう。又肥つた女は不適當の樣に思ふ人があるかもしれないが、僕には何とも云へない。去年百瀨君が三人（？）の婦人を伴れて、大黑から不歸を通過して白馬岳大池と歩かれた時の寫眞には、隨分肥つた婦人も居られた樣だ、且その時の話も聞いたが、大した困難も感じなかつたとの事であつた。

要するに日本アルプスは獨り男子のみに許されたる天地ではない。僕の僅かの經驗によつて得たる所を一言にして云ふならば、僕はそれが有名な險惡の山でない限り、現今澤山の男子が登つて居る山へならば、女でも身心共に健康でさへあれば誰でも登れると云いたいのである。（大正九年十月。竹内鳳次郎）

9　渡辺 漸 「黒部川」（部分）『山岳』第 24 年第 2 號

1929（昭和 4）年 12 月 25 日刊　日本山岳會発行

要　約

1920（大正 9）年 8 月下旬～9 月上旬の記録。

メンバーは、沢本千代次郎、沢本三郎。

行程は、平～黒部川遡行～立石～雲ノ平。

※渡辺漸による聞き書きと思われる。

※上廊下初遡行。

（本記録は、前掲 No.7 に含まれているため、ここでの再掲は省く。内容は該当頁を参照。）

10　沢田武太郎　「雪の立山、針ノ木峠を越えて」『日本登山記録大成』第７巻 剱岳Ⅰ

1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『山とスキー』第 12 号〕

要　約

1921（大正 10）年 4 月 8～11 日の記録。

メンバーは、沢田武太郎（第四高等学校旅行部）、佐伯平蔵（芦峅寺の案内人）、佐伯喜一（同）、佐伯嘉左衛門（同）。

行程は、立山温泉～越中沢乗越～平～針ノ木峠。スキーではなく、ワカンジキを用いている。

※1920（大正 9）年の記録の可能性もあり。ここでは『日本登山記録大成』第７巻 剱岳Ⅰの記述に従う。

※針ノ木峠の積雪期初踏破。積雪期黒部川初横断。

※旧制第四高等学校（略称・四高）は、現在の金沢大学の前身校のひとつ。

この旅はもと四高旅行部で計画致したのですが、参加する人々が減じて私一人となってしまい、ついに決行致したのです。しかし主として芦峅寺の佐伯平蔵が骨折をしてくれて私をして成功せしめました。

初めからこの旅には天候を極度に心配しました。それは丁度この時期は二日と好天気が続かないとのことでしたから、それにかなりの冒険だったからです。万事は平蔵が備えました。

人夫　佐伯平蔵　同喜一　同嘉左衛門。

嘉左衛門はこの行の案内者で、冬の間、平の小屋にいて、羚羊狩りを、若い時にやったという男で、その当時は大町芦峅寺と立山をまたいで活動した、むしろ発展した愉快な奴です。

食糧品は夏の登山と同様なものを携えました。ハム、チーズ、アルコールの類は特に、多量に持参致しました。立山温泉で食糧品が得られるだろうとの予想で日程、三日分しか間に合わないほどの量でしたけれども、――しかし立山温泉では、私等一行より三日前に人が登っていて、食糧品は充分に補充することが出来ました。

防寒用意としてはスキーに行く支度でした（関温泉のあたりの標準）。またそれで充分でした。私はこの旅の半分は羚羊の皮で作った一種の靴（「そっぺ」と云っています。皮のある方を外にしてあります）を用いてみました。これは浸水の憂いあり、また足に苦痛を与え、そのうえ歩きにくいものです。

スキーを用いない雪の上での交通具としては猟師の用いている輪かんじきを使用しました。これは先年の上高地への旅にも同じく、非常に靴と親しみが好いものでありました。ちょっと見ると接触が硬いようですが実際やってみると案外なものです。

四月の雪は硬化しているので樏（かんじき）では楽々と歩けました。履物としては私が靴を用いた外は信濃毎日新聞の所謂純日本式のものです。人夫は勿論このソッペを足袋と草鞋の間にはさんで穿きました。

三日とも好天気でしたから光線の反射が極端にひどく曇眼鏡が大した役をしてくれました。

私は四月二日（一九二一年）に芦峅寺の平蔵方に着きました。稼人は月の一日と三日と七日は泊まりに出ない。こんな習慣が芦峅寺では昔からの掟となっている。劒の谷にその名が付いている長次郎も平蔵もこの村字の人々です。しかして平蔵は大分日本山岳会の人々に教育されたと自分で云ってはいますがやっぱり五日と七日には出ないと頑張ります。三日には南風が吹き出した。立山から吹き下ろす生温い風です。午後には荒となりました。四日もまだ雲行はなおりませんでした。五日は出られない。それで六日にやっと七日の天気を見越してこの村から二里も無さそうな藤橋で夏の茶屋を占領して明日の旅途をひそかに祝していました。七日はまた雨に暮れました。八日もまた雨にあけました。私にとっては、平湯から上高地へこの時分

出た大正九年の経験あるのみですから雪の山途の不安を痛切に恐れていました。それで思わずながらも偶然の晴天の享楽をするために一週間ものむだな、あきあきする時間を我慢を致しました。しかしてこの無神経的な我慢は充分償われましたけれども、何もすることなく芦峅寺の平蔵の家に四日、藤橋の小屋に三日、不安と慊怠と、今思ってみてもいやになります。

しかしてこの小屋を出たのは、八日でした。なんとなく大町に出られる予感に喜悦していました。空はだんだん晴れていく。材木坂を登ります（この行、初めは弥陀ヶ原を通り松尾を下るより直接に立山温泉に行く予定でしたが、途中トンネルがあるそうで、それが通行不能だろうとのことでしたし、また立山温泉に人の上ったことが不確実でもあったのでした。トンネルを通ったか否かの問題となります）。ここらは雪が浅く岩が露出しています。美女坂へ出ると雪はかなりあり、かんじきに歯切れよくあたってきました。美女平へ出たときにもう、空はすっかり晴れて紺い青い色に空気は流れていた。遠く薬師が望まれました。かすかな朝日が梢を通して影を雪の面におとします。「ぶな坂」にさしかかったときにはかなり気温は増し、日珊瑚のような梢の枝からは、解けかけた雪が、無愛想におちてきます。兎の跡はあっても兎はいません。

弥陀ヶ原の入口あたりで正午になりました。また曇ってきます。この原は一面の雪の砂漠で松尾峠の位置が広漠としたこの砂漠の一角にあるので、もし深く霧に罩められると夏でも旅人が迷うのだそうです。しかして冬幾人かの猟師がこの原を越えて立山温泉に帰ろうとして生命を犠牲にしたとのことです。それで今度の旅は、嘉左衛門は云っている。弥陀ヶ原を越えて松尾を下ってしまえば、もう半分の成功だ。自分の若いときしし狩（かもしか）を職業としていたとき幾度となくこの危い経験をした。だから己れが居れば他の三人の命は受け合った。しかしもし万一、吹雪にでも遭えば、それは温泉に出られれば僥倖だ（それであるから初めから天気が、この旅の最も顧慮すべき問題でした）。これがために忍んだ七日の無為な生活もあえて生活せねばなりませんでした。弥陀ヶ原を登り行くにつれて天気は安定になりつつありました。なんとなく今朝の予感が再び脳に迫ってきました。あそこが松尾峠だと指された時は午後一時半でした。もはや不安はさって希望が満ちている。雪はかなりしまっていました。かんじきの歯切れは非常に気持ちがいい。タテヤマウサギでもあろう白毛兎が盛んにとんでいます。立山連邦の一がほのかに雲の間から見られました。ほとんど平面に近いだだっ広い処でちょっと方向を取りちがえればとんでもない処に出てしまう。松尾峠は切り立って湯川の温泉の方に落ちている。この峠の頂上から左に下りた。かなり軟かい雪の上を膝までもぐって川岸に下りたのは三時頃でした。安定になりつつあった天気は晴れた空を現わした。五色ヶ原のこっちの崖が恐ろしく急に処々雪をも積もらせないで迫っている。立山温泉は夕映のうちに暮れた。温泉には三日前に番人が雪路を芦峅寺の隣村からやって来ていました。朝暾に明けた温泉は、またかく別に美しい。サラザラ越に出ないで、直接に五色の南に出て、越中沢の頭に出ようとする。朝の雪は凍っていた。かんじきが通らぬ。鳶の南の嶺線に出たのは正午でした。午頃にかけて雪は非常によく歯切れる。しかして越中沢ヌクイ谷の頭に立ったのが三時頃、空は極端に晴れていた。越中沢の大きな谷の雪は粉雪でした。膝まではいる。雪が割れて水が出ている辺り（大分下って）からは湿っぽい雪となっていました。なだれが小さな岩崖からマリのようにかさなり合って出ている。平の小屋に着いたのが三時頃、今年は冬、越中の猟師がこの小屋を根拠として針ノ木谷でかもしかを狩ったので小屋の入口だけは開けてあった。黒部の水は少なく、夏の夕方ぐらいの水量もない。

十一日、冷たい、黒部の水を、フクラハギまでぬらして彼岸へ渡りました。切れるように冷たい。両岸には雪が四尺程も積もっていた。至って安全に渡れます。針ノ木谷の黒部に落ち込む処は雪がない処が諸々ありました。雪はかんじきに歯立たないほどでもありません。針ノ木の大きな傾斜に来てからはもう輪かんじきは歯立たない個所が多い。非常な不安と恐ろしさを感じました。やっと針ノ木の峠の頂上に立ったとき天気は悪くなってきました。しかして吹雪が襲ってきた。正午頃には我々は安全に針ノ木の信州側の大きな傾斜の頭から粉雪をけとばしながら今夜のあたたかさをたのしんで馳せ降りていました。大沢の小屋は雪の下で見えなかった。大沢の小屋からちょっと下った処には大きなだれが出ていました。しかしてこのなだれ

は三日の南風のときに出たのだと嘉左衛門は云っていた。谷が広くなるともう雪が処々消えている。高瀬を遠く望む処からは雪はちっともありませんでした。

ごく大ざっぱに路すじだけを書いてみました。私は今山好の人々にお話を致すつもりで書いています。私は雪の針ノ木を越えた者として、何と云ってもこれについて後からこの峠を越える方々に対して前の経験をお話するの義務を感じています。それでこういう紀行文に至って拙である自分が拙なる文を書かなければならなくなりました。

なお私が他人に聞かれるごとにお答えするこの旅について二三の事柄があります。

一、雪は私の行ったときは猟師（越中）の経験によって最も輪かんじきで歩きよい時に、絶対的に好天気を俟って行ったものです。それでスキーで行かれる方々には直接の御参考にはなりません。とりわけ雪の知識が無い私のこと故。

二、私の行った時節では輪かんじきの方がスキーよりも良くはないかと思ったことです。概して否、一般に信州側の谷は雪が粉雪でした。越中側は凍っていました。東向と西向で日射の関係でしょう。それ故越中から信州へ出る方はかんじきではその逆よりはるかに楽です。

三、雪崩の出る時節は私の行ったのが丁度中間（第一と第二との）の時だそうです。この雪崩の出る処と時とまた雪のある処とない処と、またはその多少についても芦峅寺辺の猟師の経験に依る外ありません。針ノ木信濃側の籠川の雪崩はいつでるかその処、程度、時間などは対山館にでもお聞きになれば百瀬氏は猟師に聞いてお知らせするでしょう。

四、私は元来少なからず山の生物に興味と関心を持っています。それでこの針ノ木を越えた動機も雪の高地の生物の生態を知りたいためでした。しかし好事家（アマチュアー）の知識と経験ではほとんど無でした。何も見た点はありません。それであるから少なくとも私は希望として有能なスキー諸家はちょっとこの方面にご注意をねがいたい。

五、私の旅は全部小屋を利用致しました。しかして立山温泉で食糧の中継ができます。否、芦峅寺からは何も持って行かなくともよいほどにこの温泉には罐詰類その外の物があります。番人が出してくれました。それ故この峠を行かれる方は、温泉の経営者と夏のうちから約束して食糧品その他の備をさせておくのが有利です。平の小屋も私の行ったときは冬に猟師が居たので入口が開いていましたが、もし冬でも猟師が居なかったときは、小屋の入口の穴を開けねばなりません。しかし雪中露営をする方々にとってはこんな注意は無用でしょうが。

温泉は私の行ったときは這入れませんでした。

最後に望みます。高山の地獄谷に天幕を張り、これを根拠地として、星を戴いて出て、劒の頂上輝日を拝す。誰かがステンボーゲンの雄大な跡を、長次郎沢なり平蔵沢にのこして更に雄山から浄土へと画かないかを思っています。

黒部は平の小屋の処では、私の渡渉した月と日と時とでは普通の想像とは異なって夏よりは勿論水は少なく雪で敝われてはいず両岸はあまり高く雪がなく、至って楽に渡渉を行えます。

11　伊藤孝一　「百瀬愼太郎宛、伊藤孝一書簡」（部分）
『山嶽活寫 大正末、雪の絶巓にカメラを廻す』

2005（平成17）年3月25日刊　富山県[立山博物館]発行

要　約

1923（大正12）2月25～26日の記録。

メンバーは、佐伯嘉左衛門、佐伯福松、佐伯宗作、佐伯政吉、佐伯忠太郎、佐伯鶴松、志鷹喜一、志鷹光次郎（以上、芦峅寺の案内人）。

行程は、立山温泉～平（平の小屋）～針ノ木峠～大沢石室。

この登山は、1923（大正12）年1月から3月（偵察や停滞、アプローチ等を含む）に行われた伊藤孝一らによる映画撮影を伴った黒部横断の一部。当初、信州側から針ノ木峠越えで越中側へと北アルプス横断を試みたが、悪天候等によって大沢石室で6泊を要した。結果、下山した後、越中側から再入山しているが、大沢小屋停滞の間、サポートのために立山温泉で待機していた伊藤の関係者が一行を案じ、荷担ぎ兼逆ルートからの瀬踏みとして雇った越中の衆8人を探索に出向かせ、吹雪の中、大沢石室までやってきたのだった。これが事実上の北アルプスの厳冬期初横断であり、芦峅衆の実力を示した登山である。

※北アルプス北部厳冬期初横断。

資料1　百瀬愼太郎宛、伊藤孝一書簡

昭和17年の暮れから18年の正月にかけて、伊藤孝一と百瀬愼太郎は「雪の立山、針ノ木越え」の記録を纏めるべく書簡を交わした。この「百瀬愼太郎宛、伊藤孝一書簡」は、伊藤によるノオトと通信日誌を元に書かれた。本書簡は簡易ではあるが本人の手に依る校訂を経ており、依ってこれを底本に書簡の備忘日誌部分をここに抜粋する。

……　中　略　……

資料1

百瀬愼太郎宛、伊藤孝一書簡

百瀬堯氏蔵（抜粋）

●大正12年1月（発端）

1月2日　夜十時の列車にて出発。

1月3日　朝、大町着。中山スキー場。

1月4日　乗越スキー場。

1月5日　同上。四、五両日撮影の映画現像のため、同夜、勝野、名古屋に帰る。

1月6日　乗越スキー場。夜、県口文次郎氏と共に梅の家に遊ぶ。

1月7日　休養。

1月8日　乗越先のスキー場。県口氏帰京す。

1月9日　朝、勝野、大町に着。奥村、スキー勇猛にして挫折。接骨医にかかる。同夜、和田コーチの慰労宴。席上、雪達磨式スキー映画封切。二次会、梅の家。

1月10日　和田氏、大町を去る。同列（ママ）にて山口、赤沼両氏も去る。午後、手塚氏宅に遊ぶ。

1月11日　雪の大澤小屋視察準備。
1月12日　大町出発、大出(おおいで)泊り。
1月13日　畠山、小林区小屋泊。
1月14日　大澤小屋の埋没状況を目撃、再び畠山に帰泊。大澤宿営の自信、ここに確立す。
1月15日　下山、大町帰着。
1月16日　赤沼君より大澤探検成功を祝すと来信あり。この日、小池氏大町に来る。
1月17日　大出より羚羊(かもしか)の肉到来。手塚、小池、佐々木の諸君と共に猪鍋(ししなべ)で飲む。赤沼君より、明日松本に出よ、と打電来る。
1月18日　大町発、百瀬兄と別れる。同行、小池、佐々木両君。有明駅より赤沼氏同車、北松本にて山口氏の使者より贈品を受け、その伝言にて浅間音羽ノ湯に開催中の写友会に出席中の山口氏を訪れる。小池氏とは松本駅に別れる。同夜音羽泊。
1月19日　松高山岳部主催の山映画会の催しに引き込まれて帰宅を延期す。そのため、映画運搬の必要を生じ、勝野急遽(きゅうきょ)帰省、赤沼君は有明における公開準備のため午後四時の信鉄［信濃鉄道］にて帰る。夜、山口氏来訪。共に音羽泊。
1月20日　山口氏朝帰る。午後二時、浅間発。駅前飯田屋にて小池、福林両君と会す。夜八時の列車にて勝野来松。飯田屋泊り。小池氏同宿。
1月21日　長野県試写検閲のため、勝野、小池両君、長野へ出張し、午後三時帰松す。同列(ママ)有明に向かう。同夜、赤沼氏宅泊。当日終日烈風荒天。槇有恒氏一行、立山に遭難の報、伝わる。
1月22日　新屋青年団主催、松高信濃山岳會後援の山岳映画会を有明小学校庭に公開。当日福林君来る。終日降雪。
1月23日　小池、福林両君、一列車先に出発、赤沼君と同行午後五時、有明発、北松本下車、松本館の猪鍋会に列席す。当夜、信毎［信濃毎日新聞社］の牧氏、島々の奥原氏、赤沼君等と共に吉田屋に二次会、第三次会は牧氏のみを省きて音羽泊。
1月24日　奥原氏、まず帰去、終日音羽に居続ける。夕刻飯田屋に出で、夜八時の列車にて松本を立つ。同行赤沼君、午後十時半、長野着。駅前、藤屋に泊。
1月25日　朝八時の列車にて長野発、途中、田口駅にて乗合わすべき約束のあった佐々木氏、遂に姿を見せず。富山平にて夕映えの立山を仰ぐ。津幡乗換、勝野だけは下車せず、そのまま石川県庁の検閲を受けるため金澤に行く。午後七時、七尾着。先着の小池氏出向かう。自動車にて和倉温泉、和歌崎館に入る。
1月26日　昨夜、勝野君からの電話にて長野県の許可証入要とのことにて、早朝、小池氏、金澤に向かう。東京岡本フヰルム商會の映画未着のため、松本に残りたる福林氏いまだ来会せず、一同鶴首(かくしゅ)。
1月27日　七尾の某劇場で公開、福林氏も来着、赤沼君、壇上に立ち、ボールドにアルプス銀座を図解して大いに宣伝せしもこの時。
1月28日　四高旅行部員の宿舎に催されたる健啖会に出席、猿松［奥村吉松］おおいに手腕ならぬ口腕をふるって歎賞せられ、公開後は殿町通りの喫茶店に、玉井教授を中心に茶話会あって、同夜、金澤発。山代温泉あらや泊まり。
1月29日　一路京都に向かい、初めて高山画伯を知り、同夜三高における公開後は吾等一行だけの慰労と称して、亀甲に、角屋に沈澱。
1月30日　北恒男を中心に取巻いて祇園で生ビールの盃洗飲みと称する珍鯨(ママ)を演じたり、福チャンは『君も行くなら僕も行く』と謂(とな)える大声名吟に祇園石段下の査公を驚歎せしめるなど。

●大正12年2月（信州側）

2月15日　雨。夜十時十分の列車にて堀田、富山に向け出発。同十時十五分、一行三名、松本に向かう。
2月16日　雨。早朝、松本下車。勝野は直(ただ)ちに大町へ。松高の思誠寮に福林君を、仲町に信毎［信濃毎

日新聞社］の牧氏を、各々訪問し、今度の計画を報告す。おりからの猛雨中を九時五十分の信鉄［信濃鉄道］にて松本を立つ。有明下車。待ち受けた赤沼君と駅前の不二見に晴れ間を待つ。午後四時、不二見発、当夜、赤沼君宅泊。

2月17日　晴。赤沼君、十九日夜までに大町参集を約す。午前十一時、有明発、大町へ。百瀬氏宅に入る。昨夜中、芦峅なる堀田より打電三通、

第一信『カクシン　デキタ　アンシン　シテ　ススメ』

第二信『アスタツ　センパツタイ　二一ヒ　オオサハニ　ツクヨテイ　ミチスヂ　アンゼン　シンパイナク　ススメ』（午後七時）

第三信『アスタツ　七ニン　オホサワエユク　三ニン　タテヤマニマツ』（午後十時）

2月18日　快晴。大町にスキー大会開催さる。信鉄［信濃鉄道］の一番列車にて大勢来集、乗鞍の冬期登山に成功し、昨日帰松せしばかりの山口、和田両氏もこの中にあり。吉松一人同行、乗越に行く。勝野も高瀬川の橋に出向き、始発場面の撮影開始。午後、乗越。夜、手塚・五千尺の丸山・大毎［大阪毎日新聞社］の武田・信濃日報の松下、信毎［信濃毎日新聞社］の小松、山岸・信鉄［信濃鉄道］の山口等の諸氏に主人公百瀬氏および自分も加わってメートル昇上。

2月19日　曇。横浜の竹内鳳次郎夫妻、来町。夜、約束通り、赤沼君会合。

2月20日　雪。午前十一時、對山館出発。一行、百瀬愼太郎・赤沼千尋・伊藤孝一、勝野銈四郎・奥村吉松の五名に人夫十三名、ほかに臨時の同行者として竹内氏夫妻。総員二十名。午後二時、大出着。兵三郎宅泊。

2月21日　雪。午前八時五十分、大出発、唐松ノ山神附近にて暫時陽光を仰ぎたるも、セメントの小屋より再び降雪。気温意外に暖かきため雪崩の危険ありとの理由、および大澤小屋埋没の状明白のため、畠山にて前進を中止、時に午後三時十五分。

2月22日　雪のち曇天。起床、六時。細雪静かに降る。畠山小屋出立十時五分、雪止まず。扇澤の辺りより天候やや良好となる。岩小屋澤以上は全溪ほとんど雪崩の跡、起点、鳴澤岳方面か。午後三時三十七分、大澤小屋到着。先月の視察当時に比し、埋没の状、やや浅し。小屋前面入口には吹き散らしの空洞が出来ている。直ちに発掘作業開始。午後五時四十五分、一同小屋内に落ち附く。白樺の生木終夜煙る。

2月23日　晴のち曇。起床六時半、猛烈な煙むさである。人夫中に残留組と帰還組との区別で揉める。一晩の煙むさと寒気のために気力失墜の者が大部生じた。結局、竹内夫妻を送って黒岩直吉ほか三名が下山。残留総員十四名。一行は小屋前で雪上幕営開始。

2月24日　快晴。暁闇四時、氷点下十九度、幕内の一睡に眼球の充血平癒す。撮影。午後二時、黒岩来たり。新聞の出駄良目報道によって一行家族の憂慮の甚だしと報ず。そのため喉への登行を中止して誤伝訂正の手紙を各自に書く。寒気堪えがたしとて、赤沼氏、小屋に入る。幕営四名。

2月25日　雪。昨日一日だけが明快で、また天候は悪化。黒岩・山田・倉科・西澤・中村の五名、大町に降る。黒岩は昨日の報告の反報をもって下山、他は各自の防寒具用意と食糧追加運搬を用件としての下山。日中、幕内温度、零度。夜、百瀬氏、小屋内に入る。幕営三名。夜、雪止む。

2月26日　雪。夜半（一時半）、寒冷酷烈、一行三名も天幕を捨てて小屋に入る。八時起床、小屋内の煙むさは非常である。到底永い篭城は難しいと言う感がし始めた。午後二時、大降雪中に人声がする。大町からの荷上げの連中であろうと思っていると、『ヨーホ』と入って来たのは越中から差し廻された人夫である。厳重な身拵えは、氷雪に凍って勇壮剽悍の極みである。喊声を以てこれを迎える。佐伯嘉左ヱ門。同福松。同宗作。同政吉。同忠太郎。同鶴松。志鷹喜一。同光次郎。以上八名。その報告大要、

一、本日、黒部平ノ小屋より出発。

一、峠と大澤間の積雪軟質にして大腿部までを没し歩行非常に困難。

一、針ノ木澤方面は雪崩の憂い無し。

一、平蔵・八郎の両人、目下上京中、帰郷と同時に立山温泉に入り一行を待つ筈。
一、平ノ小屋には兵三郎宿営す。
午後四時、昨日下山せる四名来る。小屋内満員となり、一行は再び雪上の幕内に入る。夜、十時半、気味悪き風の音と共に篭川一帯荒天に激変す。

2月27日　吹雪。天候悪化。激烈、言語に絶す。幕内の一行、熟眠できず。遂に暁に至る。小屋内、吹き入る積雪尺に及ぶ。大町の人夫一行、下山を要求す。幕内、小屋内、何れも篭居。外出不能状態に堕(おちい)る。午前九時、荒天を冒して大町の人夫全員下山の途につく。越中連八名、猛吹雪と闘う。正午、なお吹雪停(や)まず。いよいよ猛威を逞しうして荒れ狂う。篭川下方岩小屋澤方面と思しき方角からゴーウと轟いてくる風の音、三十秒ほどしてダーッと天幕を圧する強烈な風速、降る雪よりは積雪を吹き捲いて、天幕はだんだん埋められて行く。夜の九時半頃までこの状態が続く。夜十時やや風速和らぐと雖(いえど)も到底快晴への見込みは立たない。越中連からもこの空に篭城困難を申し出で、ひとまず下山を進言して来た。評議数刻、遂に下山、再挙を富山方面より決行と断定。

2月28日　吹雪。吹雪依然として止まず。天幕は昨日来の荒れに半ば以上を埋没、鳴沢、スバリ、針木、蓮華の大尾根は轟々と鳴りはためいて凄まじい状況となった。下山には重荷であり、越中方面からの逆行計画にこの小屋に置いて役立つ品のほとんどを残して、十時半、遂に一週日に近い篭城の大澤を後に下山の途につく。五日六泊の大澤滞在中、下方に押し出した雪崩の有様は、非常なものである。往路とは全く見間違えそうな渓の風物である。午後四時四十五分、大出(おおいで)着。嘉左エ門一人を大町へ先発せしめ、下山の報告をする。兵三郎宅にて食事、日全く没するの後、大出発、八時、大町帰着。手塚氏、竹内夫婦、大町人夫等の出迎えをうける。百瀬氏宅、一同愁眉を開く。（大正十二年二月大澤入り日誌より）

●大正12年3月（富山側）

3月1日　晴。ただし山見えず。後立山、暗雲低迷、展望なし。山中なお吹雪けるがごとし。松本の牧氏より電話しきりにかかる。越中人夫八名、吾々の用意品全部を持って先発す。

3月2日　晴。山、美しくはれわたる。百瀬氏宅の全家族、竹内氏夫婦、手塚氏等に見送られ、正午十二時半、自動車にて明科(あかしな)に向かう。出発寸前、信毎［信濃毎日新聞社］牧氏に電話を以て急遽明科より発足、今夜高田泊の旨報告す。明科駅前にて蕎麦を喰う。同駅発午後一時四十二分。長野駅発、五時十二分。高田駅着午後七時三十三分。新愛知新聞社高田支局長、近江秀氏の出迎えを受け、一同面喰らう。露見の経路は、松本の牧氏より富山の穂狩登茂作氏へ、同氏からまた高田へ、という順序で知れたのだそうである。高田館に近江氏を待たせ、山善［山道具・スキー店］へ行く。本日休業とて目的を達せず。旅宿に帰り近江氏と対話、同氏の帰るを俟(ま)って入浴、然るのち一盃。十二時過ぎ就床。

3月3日　霙(みぞれ)。山善でクリンケールを打つ。午後一時四十分高田発。直江津乗り換え、同二時四十分発。この列車内に百瀬君の知人小林栄三郎氏（富山小林区役人）あり、同氏泊駅に下車。富山駅着、午後六時二十分。沢山な出迎え人に驚愕、電車で富山館へ行く道中すら一行同志の話さえできない。旅館の入口ではフラッシュまで待っていて、黒い五つの顔がレンズに入った。宿の奥座敷には色々の人が入換(ママ)り立換(ママ)りやって来る。百瀬、赤沼の両君がかわるがわる応対して、これを撃退したのは大部深けた後である。酒もソコソコにして十二時十五分ねる。

3月4日　晴。今日も千客万来の盛況には弱った。七時起床、九時出立の予定は、これらの人々のために段々遅延する。勝野の役廻りとなった買物（主として、シャツ、ズボンシタなどの防寒具）にも時間が空費された。遂に午後三時の列車で立つこととなったが、それよりも早く、県営鉄道の肝入りで休止中の貨物列車を特に運転という破格の思営にあずかる。岩峅寺(いわくらじ)では五百石警察の連中が駅に出張っていて、壮挙を視送すと称し、特に注意を要望すると附言した。千垣駅では電気局の廣田氏の命令で撮影のため列車を逆行させた。非常な好意と便宜ではあったが、ヤハリ人の住む處(ところ)は気苦労も多かった。嘉左エ門と福松とは横江まで出迎え同車していた。芦峅(あしくら)では土地の有力者佐伯靜氏邸に迎えられ、同家の客となる。時、午後三時半。

富山から吾々を送ると称して芦峅まで同行してきた市川ほか二名の富山スキー倶楽部員が、ここで立山まで同行すると言い出したには驚いた。唖然としたが、廣田氏を通じ、無制限の入山期日、到底同行困難の旨を述べ、退去してもらう。［大正十二年三月四日附富山新報の記事により、この倶楽部員は市川・石黒・中村の三人と判明。］

3 月 5 日　降雪。廣田氏から、静氏の懇望なり、とのことにて立山神社参拝、静氏邸出発、などの映画面がこの方面の振り出しに加えられる。大澤以来の八名の人夫に新しく七名を増員、総人夫十五名となる。佐伯嘉左エ門、同福松、同政吉（小政）、同忠太郎、同宗作、同鶴松、同栄作、同亀藏、同清作、同兵治、同重吉、同竹次郎、志鷹喜一、同光次郎、三川兼次郎。静氏邸出発午前十時三十分、降雪しきりなり。藤橋小屋到着、午後一時十五分。途中泡雪のため一行全身濡れ通る。

3月6日　晴のち雪。嬉々として出立、鍋が小さくて数回に炊く食糧はハカバカしからず、出発遅延して午前十時となる。藤橋は橋桁だけで板が全部取りはずされ、渡橋頗る難渋、かつ非常に恐ろしい。誰かの犬が遂に墜落したが別に異常はなかった。犬だからである。一行中に一人でもこうした異変が生ずればこの行は画餅に終わらねばならぬ。渡り切った千寿ヶ原からは、全く足跡を留めない新雪である。雪踏作業が人夫の交替に行われての前進であるから頗る遅々、人夫から到底明るい中に温泉までは困難であると提案された。しかし鬼ヶ城附近に荷を捨てて明日これを運搬すると言う案で前進続行。マムシ谷に達した頃から雪になってきた。遂に前進不能と決定、引き返す。嘉左エ門、亀藏等を相手に百瀬君が大いに討議したが、結局は引き返すこととなる。またあの恐ろしい橋を渡ることはいやだった。一泊予定の藤橋茶屋に二泊となったことは食糧に不足を生じたので、福松ほか二名がそのため芦峅に降る。食糧のほか、兎二匹、酒五升が運搬されて一日の不快を一掃してくれた。宗作の子供病気の報も同時に齎らされて、宗作はここから芦峅へ帰っていった。

3月7日　快晴。午前三時起床。満天の星美し。斬るごとき寒冷、耳鼻の感覚を奪う。一行この、快晴に、元気頓に昇る。出発午前六時。桁だけの橋は三寸ほどの厚さに氷雪がへばり附いて、しかもそれが丸味を帯び、危険極りなく、心胆寒し。先へ渉って全員の渡り了るのをハラハラして眺める。無事通過。昨日の通路が踏み残されているので前進捗る。鬼ヶ城入口、午前十一時三十一分着。出口は八分通り積雪と岩壁から崩落した雪交じりの土砂とのため閉鎖されている。隧道の出口発、午後十二時十分。附近雪崩頻々。特に眞川合流点北側の断崖から墜下する瀑布のような雪崩は壮観を呈す。この辺りで仰ぐ薬師続きの大尾根が白銀に鎧える姿は雄大、鍬崎山が背後に低くなる頃から、登行が目立ってくる。水谷の辺りは雪崩の押し出しが火山礫の黒や茶褐に彩色せられ、自然が描く図案の巍々を見せている。それかと思うと、実に無駄なことだとしか思われない砂防工事の跡がある。大自然の威力の前には、ひとたまりもなく破壊されたらしい無慙な光景は、人間が自然に挑戦して完全に撃ち敗かされた痕跡である。マザマザと眼の前にこうした有様を見せつけられて、今まさに大自然に挑まんとする吾々の行動には、特に自然の恵みあれかしと祷らざるを得ない。この工事の砕き去られたところから暫くして、谷の左岸にこえる。もう谿間に流れは見られない。常願寺川の水源は眞川に分かれ急に細められ、埋め尽くされている。鼻先に迫る一段の雪丘を絡んで登りついた雪の原は立山温泉の平である。温泉宿は見えない。一面の広い雪原に大波のような蜒りが二、三本、同じ色の線を描いて、その中央にコンモリ高い膨らみがそれであると言う。『オーホホイ』と先頭の人夫が発声する。続いて何人かで同じ叫びを何度も繰り返す。浄土から大鳶へ連なる山骨露わな連嶺を背景にした、その雪の膨らみから、ポツリと黒いものが現れる。一つ、二つ、三つ、その中の二つが膨らみの上から前面の白い線の中へ滑行して消えたが、今度はたちまち白線の上へ乗り出してきた。ここで判っきりスキーをはいた人間であることが知れる。平藏と八郎であった。名古屋出発以来二十一日目で堀田と会合、時に午後五時。日没の太陽は七色の輪で覆われた。明日の天候はまた不安である。夜、勝野転倒（脳貧血？）して一行驚愕。

3月8日　雪および雨。朝六時、雪踏み人夫出動、吾々出発七時半。その頃より降雪は雨となる。篭居。

八郎から槇氏一行の遭難真相を聴く。

3月9日　　霙(みぞれ)。滞在、温泉に待機せし人員、堀田銀一、佐伯平藏、同八郎、同政吉（大政）、同邦造、以上五名と、ほかに温泉附人夫、高尾長作、池田重治の両名を加え、計七人。これに吾々五名と人夫十四名が交じって総勢二十六名となる。夕暮れ、佐良岳方面の夕照、紅に輝き壮麗。

3月10日　　快晴。室堂への雪踏み人夫十一人、全部空身にて出動。吾々は人夫五名を連れ、午前七時二十分出発、温泉の平から湯川を対岸にこえ、松尾坂に向かう。日本晴れの快天に朝の間の雪は樏(かんじき)を要しない。八時、松平。少し登ると先登別動隊の一部が羚羊(かもしか)を追い廻している様が、高い峨壁の上に黒点のように見出される。ときおり綿のような浮雲がひと塊あて出てきては薬師岳方面を覆う。午前十時四十五分、松尾の急峻な中ほどで板倉氏終焉の跡を弔(とむら)い、十一時二十分、峠下の尾根先に昇り附いて休息。遠く白山、近く薬師岳、悉(ことごと)く一望に入る。昼食。午後十二時半、峠に出ると弥陀ヶ原を足元に、大日、早乙女の真白い姿が曠茫と展開、奥大日の右に三角形に光った剱岳が黒く雪さえ鎧(よろ)わない裸形を見せる。槇氏一行の山上根拠地となった大きな雪の穴が、なおそのままに遺(のこ)されている。この穴へ一時十分に着く。平静な白銀の天地を轟かして銃声が一発、人夫が猪(しし)だ、猪だ、と騒ぎ出す。吾々もそれに引連(ひきづ)られて概念的観察を了(おわ)って午後一時半、下降にかかる。松尾の半腹で羚羊(かもしか)を射止めたらしいことが判明、急(せ)いて松平まで降り、撮影を了し、四時半、温泉の穴に帰る。室堂行きの別動隊のうち五名は羚羊を追い、他の六名が室堂の状態を見定めて帰った。その報告により、室堂宿営可能と判明。この報告と羚羊の肉鍋とで、夜は気焔万丈。立山登攀、室堂宿営の同行人夫七名を撰出。［この七名、福松・亀藏・平藏・光次郎・喜一の五名までは分明。］

3月11日　　雨。成すことなく終日了る。人夫の小原節と鴨緑江節とに暮れる。平藏、福松の両名、眼を痛め、終日臥床(がしょう)。

3月12日　　午前曇。午後、次第に晴る。午後一時、湯川の対岸に雪崩の瀑布を撮影、そこの氷結した池に小鴨を見る。九時就床。

3月13日　　雪。この頃中の雨で、雪の量は大分減じたように思っていたが、また昨夜来の雪で元々になってしまった。夕暮れから吹雪き状態になって出入口の穴から吹き颪(おろ)す粉雪が戸障子の透目から盛んに吹き込んでくる。障子は敷居に氷結して絶対に動かない。人夫の唱う鴨緑江節が耳についてきた。聴くともなく独り聞こえてくるその哀調は閑居の倦怠に一層の覆輪(ふくりん)を掛ける。三寒四温と予(か)ねてききおよぶ朝鮮の鴨緑江を唱うのであるが、吾々は一晴五荒程度の割合で大澤以来を経過してきた。だから篭居中に聴かされるこの歌謡に段々好意が持てなくなった。謡う人間に罪はないが、歌詞が面白くないなど言い合うようにまでなった。夜九時頃から急激な寒気が襲来し、次いで空が晴れ、星が見え始めた。残雲を吹き散らす吹雪の名残りの下で、何も知らぬ光次郎がまた鴨緑江を始めたが、こうした快調に向かう時になると、この歌もさほど苦にはならない。妙なものである。

3月14日　　快晴。八時人夫出動開始。十六名にて米、炭、スキーなどを運ぶ。午後三時半になってこの連中が帰ってきた。鏡石の手前まで運搬してきたとの報告である。平藏と嘉左エ門の両人が、今日太陽に笠(ママ)が冠るを見たからいまだ天候順調ならず、と言う。アルコール分は、昨夜の馬印葡萄酒を最後として杜絶(とぜつ)。

3月15日　　朝の間、晴。午後、吹雪、烈風。午後四時以後、快晴。午後五時、温泉出発。真暗闇を雪あかりに頼って松尾に向かう。待つ甲斐ありし暁闇(ぎょうあん)である。湯川対岸の急坂を一気に登ると次第に足元が明るくなってくる。佐良(ざら)から浄土へかけて追々灰白色の山姿を浮かべてくる。まさにこの行の黎明(れいめい)である。七時十五分、松尾の急雪面を登り詰めて峠に出た頃、天候はまたもや面白からざる状を呈し始めたが、まだ弥陀ヶ原も天狗平も眺められた。しかし、その天狗平を突っ切って雪原の眞直中(まっただなか)に出た頃には名状し難いほど猛烈な風が横殴りに吹き附けてきた。当然かくあるべき筈の粉雪が交じって相互の声も聞こえない。もう四顧(しこ)は茫乎(ぼうこ)として視野には何物も無かった。僅(わず)かに、先に進む者の鼠色の背が見あてである。圧迫するような強風は、ややもすると転倒しそうである。積雪を捲きあげるのと、灰をぶち撒(ま)けたように叩き附ける粉雪とは呼吸を止めそうである。この惨憺たる状態の中で室堂の破風(はふ)と気象観測所の櫓(やぐら)とを発見したのは、

午前十時十五分である。室堂は北の破風から梯子を利用して出入りをする。この出入口から滝の飛沫のように粉雪が吹き込んでくる。もちろん室内は真暗である。燭台をつける、炭火を作る、宿営の用意が次々に整えられてゆく頃、さしも猛悪を極めた天候も次第に平静に還り始めたが、恰度、その頃には炭酸瓦斯が室内に充満してしまった。光次郎が梯子から墜落したのを手始めに大勢の人夫が段々に毒瓦斯にやられだした。一行中でも吉松がやられる、赤沼君が吐瀉する、一難去り一憂湧く。福松が大力に任せて反対側の破風を丸太棒で突き破り空気の流通を良くしたので漸くこの患難を脱する。軽い頭痛は全員が感じたことであるが、百瀬君と自分と勝野の三人だけは撮影のため早く室外に出ていたため、この難を免れた。この夕の光景は生涯を通じて忘れ得ないものとなるであろう。大日・浄土の両面から見おろす弥陀ヶ原の一帯が石膏細工のような純白なのに、夕日の写す反映は銀盤に投げかけた七色の虹である。表わな皮膚が感覚を失い、歯の根の合わないような身振いが生じても、これを見捨てることはできなかった。夕食は自分と勝野が粥を啜っただけ、他の三人はパンの一、二片で止めてしまった。しかし、意外に暖かく熟睡することができた。

3月16日　日本晴。人夫の声が勇ましい。文字通り、カラリと晴れた。千載一遇とはこれであろう。午前七時十五分、室堂発。雲の片鱗も見えず。一ノ越、九時十五分。大尾根の雪、氷結し、登行危険。輪樏の爪を利用して足掛りを確かめる。岩石が露出し、偃松が見えるようになって樏を去る。先頭の福松がスコップで氷雪を砕いて足場を作る。その氷塊が凄まじい勢いで滑り墜ちてくる。五ノ越、午前十一時半。十一時五十分、この行の前半に成功して頂上に立つ。展望、遮るものなし。食パン、ハムの各一片に満たす昼食は、二度と味わうことのできない食事として記憶されるであろう。午後十二時四十分、頂上発。二ノ越の辺りより驀らに室堂の黒点をめざし駈け降る。室堂帰着、午後二時二分。堂内後始末完了。全員、午後三時五分、室堂出発。一行五名に亀蔵・喜一の両人は地獄谷へ、他は直ちに温泉へ。地獄谷より見たる剱の背面は悽壮。地獄谷発、午後四時半、ミクリヶ池の岸からスキーを穿く。急いで別動隊の跡を追う。転倒、逆転、亀蔵・喜一の輪樏と同様の速度で松尾に到着。疲労、空腹、甚だし。赤沼君の残菓キャラメル美味、吉松、最も空腹を訴う。銀盤の弥陀ヶ原、紫色に暮れ行く。奥大日の頂のみ紅に、空あくまで碧なり。松尾の下りは急斜面を過ぎて暗くなる。勝野しきりに遅れ、亀蔵殿軍して降る。松尾の下にて先着別動隊の出向かうに会す。空腹甚だしく湯川上流に水を飲む。午後七時半、温泉に還る。四高生、喜多・窪田両氏、昨夜温泉泊り、今朝、平経由、針木に向える由、案内人は宗作とほか四名。百瀬君の見た宗作の夢は正夢だった。徹底せる空腹とて、一同注意して食事する。この誡を守らず徹底的満腹を完行せる吉松、急に病体となり苦しむ。最後の立山温泉の一夜である。各々、通信、電文などをかき、十二時就床。

3月17日　午前、晴、風強し。午後、曇。夜、雨。水谷附近墜石頻々、との四高生の報告によって、午前五時、堀田、まず温泉を発足、通信、電文などを託す。右同行者、高尾、池田、邦造の三名。火之用心、戸締りなど完了、午前八時、温泉出発。芦峅以来の人夫十四名に平藏・八郎・大政の三人が加わって人夫総員十七名となる。温泉の背面から直ぐ登路にかかる。十一時半、大鳶の西尾根にかかる頃より風強くなる。前日、残留人夫によってここまで運搬してあった荷を振り分ける。越中澤乗越着、午後一時、小憩。風強きため直ちに下降、雪崩を避くるため、大部降って昼食。以後の谷通りは安易。途中、雪崩の跡、三ヶ所。森林帯へ入ってからは散策気分に勝手なところを樹林を縫って歩む。午後四時十五分、平ノ小屋着。小屋は雪の下に、兵三郎と弥三太郎が狩猟を目的に宿営している。四高生、本朝、針木に向かい出発せる由。なお、兵三郎より、喜作父子、棒小屋澤にて雪崩のため惨死せるを聞く。夜九時、降雨となる。

3月18日　雨。雨、終日降り続く。気温、非常に暖である。越中沢方面に数回、雪崩の音を聞く。

3月19日　霙。黒部の対岸に落ちる崩石、ますます強烈なる音響を立てる。平藏より残米二斗三升と報告、一同驚歎。今回持参の米三斗、嘉左ヱ衛門等のここに残せし捨米三斗。計六斗が今朝までに二斗三升となったことは、誰にも計算割が立たない。しかし、ただ呆れている場合でないため、明日、新雪の五寸程度ならば出発。不幸にして尺に近き場合は滞在。人撰にて温泉まで米継ぎを出動と決定し、平藏・八郎・喜一の三名に命令す。黒部増水、針金渡し修繕。午後、盛んなる泡雪、重々しく降り、比較的暖かき谿間の

幕営では、この泡雪、たちまち溶解、天幕類に残る。夜食、一行五名、粥。泡雪はまた雨となる。空鑵(あきかん)を叩く山神祭りに人夫眼を見張る。

3月20日　雨のち晴。午前一時、百瀬君、便所に起き、非常な風雨であると言う。幕内の雨洩り盛ん。応急手当の後、また寝入る。八時起床。九時、針木澤方面まず明るみ初む。十時半、三日間の寿司詰めから開放されて本腰の撮影にかかる。午後二時、大黒部の上流から帰って昼食。次いで下流方面撮影。兵三郎から羚羊(かもしか)の燻製肉二貫五百匁二十五円という品を半分買入れて食糧を調節。九時半、就床。

3月21日　快晴。五時半起床。修繕完了せる金線渡しを以て荷を渡し始める。全員渡り了(おわ)っていよいよ針木澤へ入る。時に午前七時二十六分。雪面結氷、歩行安易にして前進捗(はかど)る。八時四十分、大南澤合流点、針木岳背面の岩崖が素晴らしい色で仰がれる。北葛、七倉が見えてくる。午前十一時河田に昼食。恐らく夏場より楽々と歩む。峠の南側にかかる。ただ白い、本当に白い、その窪みから見上げる光り輝く銀色の峠の線へ真一文字に登っていく。両側の岳樺には樹氷の満開。『名物の雪姫踊れ枯木に花よ』と謡(うた)いたくなってきた。午後一時五十五分、遂に針木峠に立つ。北側は、蓮華からスバリへかけてベタ一面の白銀の屏風、声を呑んで見守るばかりの急傾斜。光次郎、福松等で雪庇(せっぴ)が破られ、そこから飛ぶ。マヤクボから下はスッカリ雪崩の跡。午後四時十五分、大澤小屋着。埋没した小屋の上を一直線に流れたらしき雪崩の跡、相変わらず煙い小屋だが何と言う慕わしをこの小屋から感ずることか。福林君一行が小屋に遺した手紙がどんなに懐かしく読まれたことか。全員、喜悦して就床、九時。

3月22日　晴。寒いと言って勝野が第一番に起きる。午前二時である。寒いには相異ないが、今日、里に出る嬉しさが彼を長く眠らせて置かなかったのであろう。私も三時に起きてしまった。朝五時、三川兼次郎が無事本日下山の吉報を携えて大町へ先発する。今日も良い天気である。午前七時三十五分、大澤小屋出発。午後一時四十分、大出(おおいで)着、保三郎爺サン方に休憩。道路に溢れた二十二名、どの顔にも微笑がある。孝男サンが来る、手塚サンが来る。一時間後におこるべき勝閧(かちどき)の高唱(こうしょう)が、今ここに爆発しそうである。午後三時三十分、大町。

これが對山館の敷居に私が腰をおろして直(す)ぐに書きとめた、この記録の終止点である（終わり）。

夜、越中人夫十七名、慰労会、梅の屋。

3月23日　晴。午後四時の信鉄［信濃鉄道］にて十七名越中へ。福林君、加藤信彦君来町。

3月24日　晴。後立山、美しく晴る。石川欣一氏来町。写真の一部、現像、焼付、同氏に渡す。午後十二時四十分、大町発。非常な寂しさが私を襲う。赤沼君、追分で下車、また何か落とした感じである。

12　窪田他吉郎　「スキーで針の木峠へ」『劔澤に逝ける人々』（東京帝國大學山の會編）

1931（昭和6）年1月20日刊　梓書房発行

〔初出『BERG=HEIL』第1号（第四高等学校旅行部、1923年)〕

要　約

1923（大正12）年3月13～17日の記録。

メンバーは、窪田他吉郎、喜多要（以上、第四高等学校旅行部)、佐伯宗作（芦峅寺の案内人)、佐伯和一（同)、佐伯三九郎（同)、志鷹三三（同)、志鷹新次郎（同)。

行程は、芦峅寺～藤橋～立山温泉～ヌクイ谷～平～針ノ木峠～大沢～大出。スキーによる積雪期の針ノ木峠越えを目的とした山行。芦峅寺から立山温泉を経て五色ヶ原西南の鳶山付近の稜線を越えるまでの途中、シールやスキーアイゼンを効かせながらスキーを使用。ヌクイ谷はスキーで下降。針ノ木谷の登りではスキーを用いず、針ノ木峠から篭川谷下降時にスキーを使用。なお、案内人らはワカンジキを使用している。

※針ノ木峠のスキーによる初踏破。積雪期黒部川横断の最初期記録。

※旧制第四高等学校（略称・四高）は、現在の金沢大学の前身校のひとつ。

越中より立山を經、黒部を渉つて後立山山脈を横切つて信州に出でんとする所、そこに吾國最高の峠にして最險の峠針の木がある。峠の頂上標高二五四一米（約八四〇〇尺)、夏時なほその溪谷に大雪溪と頂上に大雪庇を有して行く人を脅して居る。其の昔佐々成政が雪中之を越えて信州に入つたことは史上に名高い事實であつたが以後餘り人にも知られず、近くウエストン氏はこれを踏破して世に紹介し日本最高の峠にして惡絶險絶我國に冠たるものとした。これより針ノ木の名は漸く登山者の問に廣く立山より信州に出づるもの、信州より黒部、立山に入らんとするものゝ通過多きを加うるに至つたのである。

併しながら近時我國登山界の傾向は漸く夏を離れて冬の登山に向はんとし、この峠も亦一般冬季登山者の注目の對象となつたのである。が併し冬季登山には可なりの熟練なる經驗と周到なる注意と充分なる準備とを要し、而も雪深き後立山を降雪時に敢て踏破せむとする者はなかつたのである。この時に於て蹶然起つてこの針ノ木雪中踏破を敢行して世の耳目を驚かしたのは吾が先輩澤田武太郎氏その人であつたのだ。時は大正九年四月上旬今立山の主と言はるゝ佐伯平藏を案内として立山彌陀ヶ原より立山温泉に出て黒部の寒流を渉つて針ノ木の險を遂に越えたのであつた。

これが動機となり又同時に盛に近來勃興するに至つたスキーに依つて、後これを越えんと試みたものは二三にしては止まらなかつたであらう。併し天は澤田氏以後のこれ等の者を苦しめた。昨年も學習院の一行は立山溫泉に十日間も險惡なる天候と闘ひつゝ籠城し遂に目的を達せず引返さゞるを得ざるに至らしめられたのである。かくして未だに針ノ木はスキーの Spur を印せしめたことはなかつたのである。

吾々は刺戟された。發奮させられた。吾々の雪の立山に對する長い間の憧憬の念が今や急に湧きたつ様に高くなつた。そして來るべき冬こそ針ノ木峠を越さむとスキーの練習に懸命の努力をした。そしてこの計畫を胸に秘めて夏を送り更に昨冬は猛烈なる練習を越後の關に送つた。その中今年の正月立山に於て槇氏一行の遭難が報ぜらるゝや益々その計畫の實行に關する準備を密にするに怠りなかつた。世人は槇氏の遭難を聞いて冬季登山の無謀なることを説いた。或者はこれを目して暴虎憑河の勇なりとさへ罵つた。併し乍ら、人は常に向上の努力止み難きものであり若しそれが新たなる行なりとは言へ眞面目なる向上の努力を以てなさるゝことならば武陵桃源に永久に舊套を脱し得ずして困循姑息千年の夢を貪らんとする人は何とでも言へ、我々はこれを敢て行ふ、と云ふ信念を抱いて居た。吾々は密かにこの準備計畫整ふるに何等躊躇する所もなかつたのである。

立山の最良たる平藏、八郎の二人を呼び計畫を樹て、學習院一行の再擧を三月廿八日と聞き、又冬の山のスキーに最も適する雪の状態の一日も早いことの良いのを知つて、より早き日時をも定め學校の終了を待つのみとなつた。

やがて二月も上旬となつた。比の時である。

吾々の最も驚いたのは！ 名古屋の伊藤氏一行が信州側よりスキーを以て針ノ木を踏破せむと試みつゝあるといふ報を手にして我々は焦慮した。出来ることなら吾々が始めて(原文ママ)スキーで針ノ木を越したい、同じ越すとするも最先きに越したいといふのは人情として無理からぬことであらうし、又それ丈け意義もあるのにと思つた。然し如何ともせん術がなかつた。その中打ち續く天候險惡のために伊藤氏一行は瀕死の状態にて大町へ引返したとう報を手にした。吾々は少しく安心した。然るに又もや数日經るや否やに驚くべき報を手にした。それは瀕死の状態にありし筈の伊藤氏一行が早くも富山に現れて越中側より立山、針ノ木を越えむとするとの報であつた。同氏等は山に入つた。やがて二月も終つた。我々は珍らしく續いた天氣に近くの山山の雪の漸く減つてゆき、樹々の芽の大分膨んで來たのを見ても氣が氣ではなかつた。そして試驗の一日も早く終らんことを願つた。漸くにして將に試驗も終りに近付く頃天氣も良い日、惡い日とかはるばるつゞいた。そして前に平藏等と相談して定めた日、即ち三月十八日頃といふのを繰り上げて九日試驗終了の翌日直ちに出發するから、といふ電報を芦峅寺なる平藏の許へ打つた。吾々は平藏は伊藤氏の一行に加はらずして殘つて居るものと考へて居たのである。然るに翌朝芦峅寺より平藏、八郎共に不在の由電報が達し、吾々はすつかり整へられた準備を眺めて唯々啞然として平藏等の無責任なるに呆れ又憤慨もした。然し又この數日前恰度新聞に富山縣警察部にて立山登山の無謀の者を差止むるやうな記事も出して居たので、或は其筋の干涉かも知れぬと思つて委細手紙の來るのを待ち乍ら、近くの山に登り遙に立山を望んで欝憤を晴らしたりした所が十二日に至つて芦峅寺から電報があつて案内ある故直ぐ來れとの事、早速準備を整へ、食料を新に仕入れたりなどして、その夜は燈の輝く街を語り歩いて暫らくは味ひ得ないであらう所の都の情調をも味つたのであつた。かくして翌十三日午前十時半、降りしきる雪の中を井出、立野の二君に送られ喜多要君と共にこの行についたのであつた。

春になつたとはいふものゝ北國の空は未だ寒かつた。陰く濕つた鉛色の重い空から雪さへ昨夜から降り出して町も停車場もプラツトフオームも構内も見ゆる限り眞白であつた。唯レールのみが黑く光つて居た。時折機關車が濁つた灰色の空に白い蒸氣を吹き上げつゝ往來して居た。やがて列車が來た。汽車の中はムツとして居た。僕と喜多君は見送りの井出、立野の兩君と重い別れの言葉を交わした。やがて列車は轟々たる音と共に進行し始めた。二人が帽子を振つて送つて呉れる。窓の外は一面の銀世界だ。曇つた硝子を拭いて去り行く金澤を見送る、やがて雪の中に白い屋根も見えずなつた。二年の間我々を育んで呉れた醫王山の雪に遮られて見えないのも何となく心殘りだ。吾々は餘り話もしなかつた。二人は默つて各々何か考へて居る。汽車は眞白な平原を走つて山に入つた、もう深い雪が曇つた窓硝子を透して窺はれる。暗いトンネルを轟々たる昔と共に過ぎて列車が石動に泊つた時、空の一部が開けて微かに醫王山の頂が顔を出す、オヽ汝醫王山、長の年月吾々を育んで呉れた汝、我々を錬えて呉れた汝、又今日も吾等の試錬の首途を送つて呉れるのか、有難う、吾々は行くよ、元氣で行くよ、さらば。

吾々は富山驛から電車で南富山の縣營鐵道の終點に行つた、恰度晝だつたので驛前の小さな饂飩屋で晝食をし、三時の汽車までには大分時間もあるので、外の用事もあつたので、電氣局に深井氏を訪ねた。そして今度の我々の行について相談した。實は此の時吾々はこのことを公けにしたくなかつた、といふのは二人共家の方へは唯々一寸スキー旅行に越後の方へ行くといふことにして家の者に心配をせしめない様にしたいと思つて居たからであつた。内所で家を出たと云ふ譯であつたのだ。槇氏遭難以來人々は立山に對して餘りに神經過敏になり過ぎて居る。それだのに今又目的と時期こそ異れ、そこへ行くといふのは假令我々が充分なる準備と成功の確信を有するにせよ、人々は決してこれを快くは行はしめないであらふといふことを心配

したからであつた。併し此事を秘密にするといふ事は直ちに寄集つた二三の新聞記者達によつて無益にされてしまつたのであつた。

吾々は各々六七貫宛の澤山の荷物を持つて又縣營輕鐵の小さな箱へ入り込んだ、汽車の中はこんで居て迚も荷物の多い我々は入れなかつた。仕方なしに二等に乘る。列車はガタンガタンと鋭い音を立てゝ段々雪の深くなる立山の麓へ麓へと走る。雪は益々激しく降つて來た。田も畑も家も樹も皆一面眞白な上瀧を過ぎて赤黑く濁つた常願寺川を渡るとやがて汽車は横江に着いた。外へ出ると赤い顔をした—それは直ぐに雪燬けをした山男を示して居た—頑丈な大きな男が迎へに来て居た。これが今度の行の案内をして呉れた吾々の信頼し得たFührerの佐伯宗作であつた。年は三十前後でもあらうか、逞しい筋骨ではあつたが穩かな物の言ひ振りと丁寧な親切さを持つて居た。

これから雪の降る路を常願寺川に沿ひ一里半許歩く。左手の崖の上の方には未だ工事中の汽車の線路が見上げられる。右手は川から直ぐに崖から杉の生えた雪の山へとつゞいていくらか薄くなつた雪を透して微かな紅の陽の光がさして彼方の灰色の空から穩やかな山を浮出さしめて居るのが美しい。千垣を越える頃から益々雪が深くなつた。降り立ての柔い雪が一尺許りもあつてスキーを擔いで重い荷物を背負つて居る身には頗る歩き難い。一歩柔い雪の中へ踏み込むと急に身體が雪の中にめり込んで倒れる。前に行く僕が倒れる、漸く起き上つて笑つて後を見返ると喜多君が倒れて居る。おまけにもう日も暮れかゝつて道も定かではない。二人は大汗で頑張つた。芦峅寺の村の明りが漸く薄やみの中に輝いて來るのを見て二三尺も積つた雪の路を又元氣に歩いて旭屋といふ小さな宿屋の土間に荷物とスキーを下した時はもうすつかり腹が空いてゐた。

その晩は宗作と相談した。初めは昔々は案内の外に人夫三人もあれば充分かとも思つたが案外荷も重いし夏と違ひそんなに多くは背負へないのと又輕くして出來る丈頑張つて早く行きたいためとて—實際冬の登山には一人に四貫以上は無理だらうと思はれる——四人とした。案内の佐伯宗作と人夫には佐伯和一、佐伯三九郎、志鷹三々、志鷹新次郎の四人、その人達は八時頃宿へ來て吾々と炬燵にあたつて山の話など語り合つた。皆元氣な赤ら顔の若者許りだ。そして圍爐を圍んで干鰯を肴に前祝をして直ぐに床にもぐり込んでしまつたのは大方十時頃であつたらう。さつきまでチラホラ降つて居た雪も歇んだらしい、寒い風が筧の音を凍らせ乍ら梢に鳴つて居る。明日は僅か藤橋までだからそう早く出發する要もないからゆつくり出來る、併しどうか天氣でありたいものだ、などゝ思ひ乍ら何時しか寢込んでしまつた。

三月十四日

薄明るくなつたかと思ふ時分に目が覺めた。雨戸を細目に開いて外を見ると樹も家も往來も柔かな眞白な雪で蔽はれてゐる。空を仰ぐと淺黄色の寒空に凍つたやうな星が微か瞬きしてゐる。サラサラ梢の雪を拂ひ落してかすり過ぎて行く風も凍える様で今日の天氣を示して居るかの様だ。安心して又床にもぐりこむ。

案内の人夫達の來たのに起されて又起き上つたのはキラキラ朝日の輝いた八時頃であらう。人夫達は背負ふものゝ分配やら自分達の荷拵へや準備に忙しい、僕は朝食もすみすつかり準備が出來てから目映ゆい朝日を浴びて眞白な雪の山村の氣分に浸り乍ら老杉の鬱蒼と生ひ茂つてゐる立山神社に詣でる。境内には人一人、犬一匹の跡すらもない。唯々櫛の間から洩れて來る日の光がキラキラ輝く箭の様に雪を射て清々しい雪の面に綾を織つて居るばかりである。鳥居の間からは鍬崎山の稜線が鋭い線をなして蒼空との間に銀色の境をつけて居る。

十時過ぎ皆用意が成つて出發した、人夫達は餘りスキーがうまくないらしいので皆輪樏にさせることにした。少し行つて佐伯静氏の宅へ寄つて挨拶をし、村を一歩出ると紺碧の大室の下に眞白な大日岳が輝いてゐるのがみえる。陽の光は眼鏡をかけてゐてさへも目映ゆい位だ。何たる壯觀であらう、左は別山より雄山、淨土、鷲、鳶など白皚々たる連峰が蜿蜒として逆巻く怒濤の如くに眼前に展開する。吾々の心は躍つた。あの清淨な雪の山々、長いこと憧憬れたあの莊嚴な山々、吾々は今一歩々々とこの神の殿堂に詣でやうとして近付いてゐるのだ。雪は柔い、スキーを穿いて途々滑り乍ら常願寺川の左岸に沿うて一條の所々雪崩などの

ために崩れた雪の路を行く、鍬崎山の續きの稜線は一線の Wachte をなして Ruckgrat を蒼い空に縫ひ付けてゐる。與四兵衞山といふその中腹に無數の兎の足跡のついた山の對岸の所で半ば崩れ落ちた雪に腰を掛けて晝食をする。

道は隨分惡い、藤橋へもう四五丁の所で雪崩れのために崩れた危ふ氣な個所を通る時に一寸足を滑らしてヒヤリとする。藤橋へは二時頃着いた、小屋が三四軒ある。一番手前の大きいのに入つてルツクサツクを下す、恰度山へ働きに行つた外の村の人も來て休んで居た。暫く休んで僕は稱名川の谷に沿うて少し入り、恰好の Skigelaende を見付けてスキーをする。喜多君は橋を渡つて宗作と一緒に材木坂の方へ兎を獲りに出掛ける。スキーの練習を暫くして居るとズドンと一發谷間に響いて鐵砲の音、向ふの山の林の中から喜多君がオーイオーイと言ひ乍ら手に眞白な兎をブラ下げて雪の中をかけ降りて來る。大分午後の陽も溫くなつて雪も腐れて惡くなつたので Hutte に入り焚火に當る。小屋には婆さんとその孫かの若い男が一人居る。一冬中こゝに小屋の番人として長い寒い日を送るのだ。

やがて陽も何時しか傾いて淡い夕暮が谷から湧いて雪の山も朧ろに霞みかゝると明るい日が山の上へ上へと逃れて行つた。

家の中は眞晴だ。晩の兎の味噌汁は實にうまかつた。廣い部屋も空いて居るが疊もないので圍爐を圍んで放射狀に寢る。僕と喜多君は一番奥に二人でシユラーフザツクに包まつて折から少し暖か過ぎて蒸して來たやうな天氣の事を心配し乍ら小屋の下を流るゝ稱名川の水音にも、枕許近くにある筧の音にも妨げられもせずいつしか夢路に入つた。

十五日

夜中に目が一寸覺める。ザーザーと屋根板を叩く雨の盛んな音がする、アヽ遂に今日は駄目か、と殘念で堪らない。では仕方がない、明日を待たう。明るく日になつた、又雨だ。やがて二日、三日、又四日、いつしか五日と經て未だ此處に停まつて天氣の惡いために前進することが出來ない。遂に雪も融け去つたので業を煮やして歸京する。日本橋の上で友達に會ひアヽ俺も遂に雨のため失敗したよ、と頭を掻くと、人の聲が、「オイオイ今何時だい」と耳の傍でする、聽けば喜多君の聲だ。オヤ、未だ藤橋か、占めた、何だ今のは夢だつたのか、緣喜でもない、マア朝の夢は逆夢だ、と決めると喜多君が「オイ盛んに雨が降つて居るナ」と歎息するやうに言ふ、全くひどい降りらしい、バサバサ屋根を打つ樣な音が風と共に益々激しい。人夫達は未だ皆眠つてゐる。喜多君は又床にもぐり込んでしまつた。僕は先刻の夢が逆夢になるのか正夢になるのか心配で堪らないので戸を開けて外に出て見る。未だ迚も薄暗くて稱名川のみが獨り吠えてゐる。風は生溫く南から吹いて眞黑な雲が盛んに彌陀ヶ原の方へと走つてゐる。が併し雨は少しも降つてゐない、どこを見てもそうひどく雨の降つてゐた樣な形跡もない、併しマア今日は駄目かと小屋の中に入るとひどく降り出した。外へ出ると暗いが別に降りもしない。はてなと考へ又小屋へはいると又直ぐ酷い雨の音がする。ハテ面妖なとよくよく考へてみるとそれは台所の筧の水の音だつたのか分つて馬鹿らしくて仕方がない、飛んだ心配させる筧の奴だ。癪に障つて皆を起して焚火を始めたのは五時。

宗作は外へ出て空を見て迚もいけませんぜ、と云ふ。僕は今日是非溫泉迄ゆきたいと云ふ。それならば初めの豫定の如く彌陀ヶ原を通れないから常願寺の谷から行くなら行くといふ。吾々も彌陀ヶ原の天氣の惡い時は實に方角などで困難するのを聞いて居るので下から行くことゝする。

小屋を出て三寸角の橋桁一本しか渡してない藤橋を荷物を背負つてスキーを擔いで下に泡立つ激流を見ながら薄氣味惡い思ひして渡つたのは六時半。常願寺磧の雪の廣い深い谷をスキーをつけてスースーと平地行進して行くのは氣持好い。時折薄い雪の橋を渡つたりする。兩岸の崖が高く川から峙つて代赭色の腹を見せて居る。空は一面曇つて薄暗い雲に鎖されて居る。やがて行手が廣い流れのために切られた所に出る。崖を登るわけにも行かぬ、止むなくスキーを脫ぎ膝位まである所を徒涉する、水は濁つてゐて徒涉には餘り氣持よくもない。併し案外水は溫かだ。雪の岸へ上ると靴の中が水だらけで氣持の惡いこと夥しい。脫いで穿

き替へるのも煩いので又そのまゝスキーを穿く。併しこゝらから割に雪が固く樏を穿いても二寸位、スキーでは漸く Spur がつく位の程度であるから靴のまゝ歩いても大してもぐることもなさそうだ。流を左に、右に、左の小高い林の中を抜ければ又右の崖を傳、夏の溫泉路に登り、又磧に下り幾回も徒渉して桑谷も過ぎ、ミヨウジといふ所（陸測五万分ノ一、五百石圖幅の恰度常願寺川の上流へ消えかゝらうとする邊りである）へ出る。こゝは激流が峙つた數十尺の懸崖の下まで迫つて來て岸を嚙んで居て迚も徒渉も出來ねば左の崖の中腹を傳ふわけにも行かぬ。止むなく左岸の急峻な雪の斜面を登つてこの崖を遠く後方から迂回せねばならぬ。

斜面は雪崩の跡などあつて約五十度、中途まで行つて下を見ると殆んど直角の様な氣がする、下は斷崖になつて居て直ぐ濁つた凄い流れが渦を巻いて居る。一度足を滑らしたら迚も途中で止りそうもない、假令ピツケルとてもこの堅い雪にこの急斜面に對して突嗟の塲合間に合ひそうにもない。餘り好い氣持もしない。要らぬと思つたピツケルがこんな思ひも掛けぬ所で迚も役立つた。併し Steigeisen 穿く可きやうな所でもなし又 anseilen する程も無さそうなので宗作の後について息の苦しくなるのを堪へてスキーを擔いで一足一足足塲を充分にこしらへて氣を付け付けして登る、迚も樂ぢやない。かうなると僕も靴に假令先き丈けでも Nagel を打つてくれば良かつたと今更乍ら後悔する。實は今度新らしいナーゲルを打つた靴を作つたのだがスキーに合はなかつたので唯スキー用のナーゲルなしの靴にシユタイグアイゼンを合せて持つて來たのだ。仕方がない。この靴でも、と思つて靴尖でドンドン堅い雪を蹴つて足塲を充分にして辛くの思ひで上の樹の間にとりついてヤレヤレと思つて一休みする。皆大汗をかく。高さは僅かだが隨分急に登つたものだ。人夫の一人が荷を下す途端味噌を入れた桶を取落す。アツと云ふ間もあらばこそ、桶はコロコロスーツと滑り落ちて瞬く間に濁流の中に消えて行つた。喜多君と思はず顔を見合す。喜多君が「針の木の雪溪もこんなに急か」と聞いて「一番上の所は恰度こんなものでせうね」と云はれて「オイ未だ迚も樂ぢや無えナ」。

やうやくこれを越すと林の間を抜ける、人夫はトリネコの樹を見付けて鉈でその皮を剝ぎ取りその眞黄色な皮を雪の反射で炎症を起した赤い目の瞼の上に眼の藥だと言つて貼る。

下りて橋を渡り又磧を行く、やがて鬼ヶ城へ來る。名前からして恐ろしい所だが全く左の彌陀ヶ原の方の斷崖が凄く崩れて高い裸の崩壞し易い巨人の様な大きな岩の峰が亂れ過ぎ行く厚い雲の中に峙つて恰も天に向つて咆哮する鬼と、これを脅やかさんとする天との戰を思はしめる様だ。恰も雪さへ降り出して寒さも一層加はり唯兩岸の轟々と峙つ懸崖の下に白雪の點在するのを見るのみ。威嚇的な川底の缺潰や崖の崩壞のありたけを盡した赤い山の腹を通して一本の水の滴る眞暗なトンネルが通じてゐる。白い雪の原から急に暗いトンネルの中に入ると暫らくは何も見えぬ。滴る水の音と己が靴の音のみ高く谺して物凄い。磧に出で干鰯を副食に辯當を食ふ。鬼ヶ城の材料小屋は泊れば泊れるといふ丈けで貧弱な餘り頼りにはなりそうもない小屋だ。

十二時此處を發つて又磧を溯る。暫く行くと雲が漸く薄くなつて來る。恰度眞川と湯川との合流點に來た時今まで厚く鎖されて居た空は急に、靑く開けて眞川の谷から藥師の峰であらう、雲に見えつ隱れつしてピカピカと時折銀光を放つ。正面に美しく白い雪の膚を疎に樹々で綴つたカゴノクラ山が光る。昔は此の川の右岸を傳つてあの山を九十九曲りして登つて立山溫泉へ行つたものだ、昔はこの路を牛が通つた、と宗作がいふ。今の道は藤橋からズツと川の左岸を傳つて湯川の谷を溯り溫泉へとついてゐる。此の新しい道も遙か左の上手に所々見えるが大方この冬中の雪崩のために崩れ去つたものであらう。いくらも殘つて居らぬ、寫眞を撮り暫く休んで愈々湯川の谷は火山灰の様な性質の地層で實に崩壞し易く風もないのに高い崖から大きな石がゴロゴロと落ちて來ては濁つた川の中へ飛込んで行く。自然はこの谷にあらゆる兇暴な破壞を逞しうして居る。此の谷を雪崩と落石に氣を付け乍ら進んで行くのは直ぐ眼の前に鳶岳と鷲岳が手招きしてゐてもさう捗るものではない。幸ひにも僕等の通つた時は既に雪崩の時期も漸くすんで居たから大したこともなかつたがそれでも大きな山全體が雪と石塊とを捏混ぜた様な泥状のものになつて崩れてゐる所や、雪崩の跡に點々と大きな落石のある所を通る時は未だに上から絶間なしに落ちて來る石に氣を付け乍ら一人々々行

かねばならなかつた。泥の中に足を踏み込む、岩を跨いでとぶ時足下の大きな石が急にグラついて躓き倒れ膝を打ち手を擦りむく、雪崩のあとの雪塊の間が急に足下からめり込む、雪の崖を這ひずり上る時上から引張る者の足場が崩れたりして一番路の悪い所だ。こゝなどスキーとしては選んではならぬ道であらう、と思はれる。數十丈もあるやうな崩壊性の岩から成立つ斷崖の下を遙か谷間に奔流の音を聞きつゝ一歩一歩緊張した歩調で雪の上を歩いて行く時の氣持はその場合ならでは又味はれぬ氣持だ。

併しもう危險な個所も殆んど過ぎて溫泉上の大きな岩が輝く鳶の麓に見えた時、輕い安易な氣分が我々をこの緊張から除いて、鍬崎山からこの谷にかけた幾多の曲線美、光線美の表現の限りをつくした一幅の畫とし、キラキラ輝く雪の峰をして、峙ち迫る兩岸の懸崖をして快い詩に變らしめたのであつた。

やがて吾々はスキーで溫泉裏の急坂を登り始めた。坂を登ると段々眼界が廣くなる。登りつめると急に邊りが廣々として直ぐ前に溫泉の屋根が雪に埋れて居るのが見える。犬が急に吠え立てる。雪の中から人がゾロゾロ出て來る。エヽホヽと呼ぶ、又應へる。伊藤氏達の連中だ、兩方は互に引付けられるやうに近付いて行つた。雪庇の上で四方の寫眞をとる。今迄鎖されて居た淨土の方面が段々雲の間から現はれて來る。松尾の近所もすつかり見渡される。

雪の上から段々をつけて小屋の中へ潛り込む、小屋の中は暖かつた。他に澤山芦峅の人夫が居た。皆何れも愉快な山男らしい顔付をして居る、伊藤氏等の支配人たる堀田氏に會つて挨拶する。伊藤氏等の一行は今朝彌陀ヶ原の吹雪を冒し平藏、八郎が先頭となり活動寫眞機を携へて室堂へ行つたとの事、八郎は巳に歸つて來て今日の彌陀ヶ原の吹雪のひどかつた事を話して居る。よくあんな時に行つたものだと感心する。大きな圍爐をかこんで盛んな炭火をおこし皆火に當つて乾かしたりする。伊藤氏の計畫を堀田氏から聞く、大袈裟なので一寸驚かされる。吾々は遂に豫定の如く、否豫定よりもずつと早くスキーで針ノ木を先登に越し得ることになつたのだ。併し矢張り伊藤氏等の居なくて話相手の少ないのは寂しい。火鉢を圍んで堀田氏に親切にすゝめらるゝまゝに熱いコーヒーを幾杯も飲む。溫泉と云つても勿論冬は温泉(原文ママ)は出ないのだ。

やがて夕方になつた。天氣を見に外に出る。夕陽は將に鍬崎山の彼方に沈まんとしてその眞赤な瑪瑙の燃える樣な光を低く垂れた雲の間から投げて邊りの山々を紅に染め映えて居る。靜かに日影は山を上へ上へと追つて行く。淨土の頂き近くが縹色の空に一際浮き出して微かに色付いた水晶の如くに光つて居る。紫の襞と藍の襞を疊んで迫る樣な尾根、薄紅の疊を千疊の氷宮に敷きき詰めた樣な溫泉の平地。只默然として居る。段々と邊りは血の燃ゆる樣な色に彩られて行く。やがて最後の光りが紫色にバツと劈かれて金色の雲が又なく美しい。美しい糸條を空一杯に引き加へた、かと思ふと急に邊りは薄暗くなつた。かうして天地この大自然の中に一人立つて居ると寂しい孤獨に取殘された樣な氣がして人戀ひしさ、人懷しさが急に胸にこみ上げて來る。あゝ自分は孤獨なのだ。自分は永劫に孤獨なのであらうか、遮莫、吾も亦人なのだ。Liebesglun に胸を焦す若人でもあるのだ。

この寂寥に對して敬虔に滿ちた心の奥底から自ら湧き出でゝ僕は歌つた。

夕日は隱れて道は遙けし
行末如何にと思ひぞ煩ふ
我が主よ、今宵も共に坐して
寂しきこの身を育み給へ

感激に滿ちた目で空を仰げば薄暗い西の空に明星がピカリピカリ瞬きして居た。

十六日

溫い羚羊皮の寢床を出づるや直ぐに外に飛び出す、仰げば淺黄色の空に眞白く浮き出た淨土と龍王が未だ眠りから覺めやらぬ巨人の如くに靜かに並び聳えて今日の好晴を約するかの樣。雪の溫泉平を吹き通してゆく曉の風は寒い。やがて淨土の上の方から明るみかゝつて來た、今迄淺黄の東の空が紺青にかはつた。黄金の縞の幾條かゞ最早空を横切つて急に鈍色の空を紅に照らして擴がつて行つた。

朝食をすまし堀田氏等に見送られ伊藤氏の荷運びの人夫等と一緒に朝風を浴びつゝ出發したのは六時半、日は未だ淨土の頂きにまでしか來て居らぬ。溫泉から五六百米東南へ風の爲めに波の樣に條付けられた硬い雪の原を歩いて、そこから大鳶岳を登り始める。夏と違つてザラを廻らず鳶を越えて五色の裏からヌクイ谷を經て平ノ小屋に出ようといふのである。鳶の登りは惡かつた。雪はカンカン硬かつた。人夫は樏で眞直に斜面を登る、吾々はスキーで zickzackgehen し乍ら登る、ビリゲリーアイゼンは勿論つけた。それでもスキーは下に滑り落ちんとするので少し足でたゝきつけ乍ら登らねばならない、頑張つて一心に登る。松尾の方が見え出す、溫泉の下の方へ段々陽があたつて來る。白樺に捉つて滑らない樣に休む、可なり汗ばんで來る又グイグイ登る。急な所を登つては又少し緩やかな所へ出る。又休む。好い加減登つた。兎に角今日は溫泉から鳶の肩まで約千三百米午前中に登らねばならぬのだ、可成り疲れたから四百米も登つたかと思つてもう五分の一位登つたかと聞くと、イエイエ未だ未だこれからこの十倍もありますよ、と言はれて又登り出す。又暫らく雪崩の出さうな崖の下のやうな所や、いやな急坂を隨分登る。途中幾度も休む。陽が頭上に輝き出して來た。溫泉は眞白に下に見え、湯川の谷が赤黑く白い間に沈んで居る。西笠山や鍬崎の複雜な山皺の影が黑く段々明瞭になつて來る。又隨分登つた心算で大丈夫三分の一は登つたらうと思つてそう聞かうかと思つたが、又さつきの樣に言はれると癪だと思ひ「もう五分の一は來たか」と聞くといやいや未だ五分ノ一に足りませんと、云ふ。驚いていやに辛いナ、と思つて又頑張り出す。成程五分ノ一も行かない位だらう。漸く松尾の方の崖が同じ位の高さに見えて來た。これからはもう雪も少し軟かくなつたので好い工合に海豹皮をつけてスキーで樂に登る。二人で交代にラツセルする。餘り登るの許りで倦きる。天狗平の湯川に面した崖が鷲岳の裾からその皺に雪をため乍ら顏を出して來た。白樺の細い幹が白絹のやうな柔かい光澤を出してゐるのに倚つて無心で眺め入る。又しても暫らくモリモリ登る。松尾の上の方から天狗平の方へかけて大日岳の穩かな頂が段々に浮び上つて來る。彌陀ヶ原も同じ樣な高さに下つて行く。もう時間も好い加減たつた。必ずどんなことがあつても半分以上は大丈夫と思つたが少し掛値して、もう大方半分は來たらうねと訊くと、エヽあの上の光つて居る高まで行くと恰度半分です、と言ふ。指される方を見れば遙か彼方の上だ。隨分これは手應へがあるなと思ひつゝ漸くの思ひで大汗かいて乾葡萄を嚙り嚙り元氣をつけてその半分の所まで登る。然し可なり登つたものだ。もうこの苦しいのも後半分と思ふと元氣が出る、水筒の水がなくなつたので雪を嚙る。汗が出て眼鏡が曇り、雪を嚙るので唇はすつかり荒れて厚くなり、太陽は益々強く照り付けて顏も頸も燬けるやうだ。人間にも高山植物の樣に紫外線を吸收する Flavon があれば良いな、など思ひつゝ登つて行く、唯上は白皚々たる雪の山だ、今吾々はこの山に向つて止むない憧憬を以て登らう登らうと努力して居るのだ。

やがて白樺の木もなくなつて小高い稜線に突當る。一線の Giplfelwachte がつゞいてゐる。その上に立つて眺めると、何と云ふ透明な大氣であらう、西は遙か越前の彼方より一連の白山連峰、近く西笠や五箇の山々を望んでその右に眞黑い日本海の水平線が我々と同じ高さにあつて吹けば消えなんとする能登半島を抱いて居る。脚下から出る常願寺の流れも純白な彌陀ヶ原の裾を廻つて富山一帶の白い平原に赤黑い條を刻み込み、昨日遙かに仰ぎし鍬崎も複雜な山の線を張り乍ら今は眼の下にあるではないか。眞に羽化登仙の思ひとでも言ふやう。暫らく休んでこの倦かぬ景色を眺めて後又出發する。雪の狀態もよくなつた。もう半分過ぎては樂だ。十一時半最期の努力を前鳶の下でなして尾根に登れば急に藥師の尨大なる山容が人を威壓するやうに直ぐ眼の前に迫つて來る。緩やかな Wachte 陰に前の奥鳶を仰ぎつゝ、横に鷲の頭を望みつゝ、深い谷を隔てゝ藥師を味ひ乍ら晝食をする。水が無くなつたので困る。

鷲岳の中腹に羚羊が二匹動いてゐるとて皆爭うて僕等の双眼鏡を借りて眺めて居る。それにしてもあの人達の目は早い、あんな遠くの點のやうなものを逸早く羚羊だと認めるとは。

又一時間許りして奥鳶を登りその肩に達する。餘り陽が強くあたゝかいので雪が非常に水ツポクなりスキーに粘着し易く不愉快だ。wenden する時に海豹皮とスキーとの間に雪が挾つて苦勞する。肩からは藥師は勿論、藥師から五色へ緩やかに滑らかに續く尾根、木挽山の間から雲ノ平の凄い大地を魔の櫛つたやうな鋭

く眞黒に立並んだ崖巓と、その向ふに三角形に浮ぶ眞白な笠とが望まれる。東の方からは烏帽子が山の端からその黒い顔を出して覗いてゐる。

こゝで伊藤氏等の人夫一行と別れ、急な雪庇を降り、滑り落つるやうな危ない Lawine のあとを海豹皮を取去つて横に搦み、急な見測られぬ様な深い谷の腹を横に縫つて、漸く五色から越中澤乘越への尾根の偃松の堅い雪に埋れた Windkruste の張つてゐる所へ取付くことが出來た。

ヌクイ澤乘越から見た黒部は偉觀だ。左は五色ヶ原の高原が緩やかな長い裾を引き、右の方から下つて來た木挽のつゞきの滑らかな斜面とが遙か脚下の方で衝突し合つて深い谷を成して居る。その下の方に兩岸の山の相戰つた屍でゞもあらう、物凄いやうな雪崩のあとの雪の塊が疊々として横はりつゞいて居る。正面に巍然と烏帽子がその襞の多い裂罅だらけの複雜な山の背を白と黒に斑に染めて立ち、中央に不動、蓮華、針ノ木、スバリが黒い劍戟をつらねて行手を遮る巨人の勢を張り、左は赤澤、鳴澤よりの岩塊を削つた様な尾根のつゞきが眞白な白髪のその名に相應しい爺岳の方へと續いて居る。後立山と立山との間を深く貫いて四時凜冽膚を刺す如き流を走らす黒部の谷は深い。そして常緑樹の多い所爲か黒部の名に相應しく一面他の谷に比べて黒い。唯赤牛のみがその近くに夏とは全く異つた純白な牛と化して居る丈であつた。

ヌクイ谷の降り口は急に下つて居てその上の方は Windkruste と Feuchtlawine や Schichtlawine のために Schneebeschaffenheit が Skifahren に對して非常に惡い。こゝでビルゲリーアイゼンを取り去つて Stembogen で降らうとする。下の方に Grundlawine の痕が歷々と見える。一度轉ぶとこの午後の腐れた表面のクラストのみが堅くて中の極めて柔い Schneepulver が直ぐに Grundlawine を誘ひ起しそうに思はれて薄氣味惡い。試みに雪の球を上から投げるとそれが段々々々大きくなつて雪達磨よりも大きな球となつてそれに幾百の小さな球を従へさせ乍ら轟々と落ちて行く、エヽ行け、と思つて一氣に半制動で滑り出す。ガラガラとスキーがクラストの上を擦つて斜に下つて行く。Stem する方の足へ充分力を入れて一生懸命に下る。然し Geschwindigkeit が思ふよりは早くなる。前が狹い。白樺の樹が立並んで居る、止らうとすると木の傍の急に柔くなつた雪の中へとび込んで平衡が失はれて轉ぶ。失策つた、と思ふ間に身はスキーとルツクサツクと共に急傾斜の雪のクラストの面をガリガリ打破り乍ら滑り落ちて行く。別に下に何も危いものもないやうだ、面倒だこのまゝ降りちまへ、と狡猾く構へて雪の面に横になつたまゝ身體をズルズル滑らす、案外樂だ。上の方を見ると喜多君や宗作が「危い危い」と怒鳴つて居る、「何大丈夫だ、樂だぞ、」といひ乍ら十間餘りも滑つたらう。下を見ると驚いた、今僕の落した雪が皆大きな二抱へも三抱へもあるやうな塊になつて幾百となくゴロゴロ谷に轟き乍ら落ちて行く。サアこれが雪崩を起こしては大變、と止めると直ぐ止る。背中に雪が入つた。拂つて今度は愼重に下る。併し雪崩のあとや雪球の轉がり落ちたあとへ行くと雪の状態が急に變るので時々ヒヤリとする。漸く急な所を降りて下の緩やかな廣い谷で後のものを待ち乍ら寫眞を撮つたりする。やがて喜多君が來て、どうせこの谷を眞直行けば平なのだから人夫達を後にして先に行かう、といふのでこの理想的のスキー場 Ein ideales Skigelande を一直線に直滑降する。雪は實に細く輕い。灰の様な雪がスキーの尖からサラサラと細かな水煙を上げて居る。時々脅かすやうな大きな雪崩のあとに出會ふ。五色の方の崖から押し出して來た、何處から發して來たとも分らぬやうな大きな雪崩が二抱へもあらうやうな山毛欅の樹やネズコの樹などをメリメリに引裂いて打碎いて四五町もこの谷に續いて流れ出して居る跡へ來てはスキーが狼籍たる雪塊の上で躍つて進み難い。寫眞をとつて居る間に喜多君は先きに行つてしまふ。後からこの一本の Spur をつけて理想的の Skigelande を思ひさま直滑降する。全くこんな谷がこんなに廣く冬の通路として割に雪崩の危險の少ないのには意外だつた。スキーは尾根を選ぶ可きだ、併し此處は尾根が林で駄目で谷がこんなに夏と異つた絶好の通路となるのだ。これなども Skilaufcr として相當研究したい問題である、などゝ考へつゝ滑つて行く、ヌクイ谷の乘越から黒部まで二里近くはあらう、途中雪崩のあとも十や二十ではなかつたが全く意外にスキーに良い谷だ。平へ近付くに從ひ山毛欅の樹が大きくなり多くなり雪も腐れて惡く klebender Schnee となつて來た。併しなほも滑りつゞけて快い Skifahren に充分の滿足を得て黒部なる平ノ小屋場に着いて、とび付くやうに腹の底まで浸み通るやうな冷い清い黒部の水

を呑んだ時は恰度三時、喜多君は僕よりも二三十分前についたといふ。二里許りの所を一時間にも足らずに來たのだ、小屋の前に羚羊の皮がなめすために張り乾かしてある。兵三郎と彌三が來て此處を根據に羚羊獵をして居るのだ。

全く雪に隱された一つの小屋の中へ孔を下りて入つて焚火にあたつて話する。一時間半許りすると人夫達が來た。小屋は九人入るのには少し狹い、二匹の可愛い犬が客に席を取られて主人の蔭に坐り乍ら恨しそうに見慣れぬ人々を見つめて居る。雪に埋れた小屋から紫色の煙がユラユラと谷間に擴がつて立上つて居る、仰げば鬼が岳が薄紅の夕陽に映えて山毛欅の木立の間に輝いて居る。やがて美しい幻も段々薄れて消えたと思ふと雄山澤の空にチロリ星が輝き始めて遠い微かな思をさせ乍ら靜かな夕靄が忍びやかに黑部の谷を段々包んで來る。夜は盛んな焚火をして羚羊の肉の汁に大切に持つて來たキヤベツを入れて舌皷を打つ。平ノ小屋まで來ればもう針の本越も半分以上成功したのだと言はれた言葉を思つて輕い安易な氣分になる。天氣は又明日も良いらしい。何といふ幸運だらう。明日さへ好ければ僅か四日で針ノ木越(原文ママ)が出來るのだ。一日中強い陽に照らし付けられたので顏中がほてつて眼の前で焚火でもして居るやうで熱くて却々眠れない。夜も可なり更けた、流石に風も寒い。仰げば幾千万といふ星がその冴えた光で濃い闇を震はせ乍らキラキラと輝いて、宇宙の永劫を語り、造化の神秘を語つて居るかの樣だ。星多き天の沈默が愈々深くなつて來た。顧みればあたりには潺々と咽ぶ黑部の流れと梢を傳ふ風の音より外は何もなかつた。

十七日

夜は持つて來たものを總べて着て寢たが未だ薄寒かつた。夜中に人の聲がする。大きな焚火も消えてしまつて小屋の中へ寒さが浸み通つて來た。人夫が又火を起す、漸く寢入つて起きたのは暗い中であつた。薄明りの雪の平の林の間を朝の氣分に浸り乍らブラブラ歩いて居るのと自分の口から出る息が凍り付く樣に思はれる。羚羊の肉を土産に貰つて兵三郎と別れ、愈々最後の努力すべき日の行程にかゝる。

小屋から黑部を越して對岸へ渡るには夏なら針金の渡もあるが今は具合が惡く使へさうもないといふので徒涉することにする。岸に立つて見ると川の幅は十間許り、水の深さは膝位まではあらうか、流るゝ水は水晶よりも淸く底の石の一つ一つまでが明らかに認められる。兩岸には雪が一間程もある。スキーを擔ぎルツクサツクを背負ひ、ズボンを膝の上までまくつて思ひ切つて川に入る。その冷いこと、將に凜冽身を切るといふより以上だ。底の小石はヌラヌラする。岸で思つたより水は深い。流は早い、始めの中は淺い所を選つて涉らうとする、その中足に感覺がなくなつて來る。アツと思ふ間に足がヌルヌルの底の右から滑つて膝の上からズボンからすつかり濡れてしまふ。凍るやうな冷たさに自暴になつて眞直に渡り切つて岸に這ひ上る。サツと吹いて来る谷間の身を切るやうな風に見る見る中にズボンの濡れたのがゴリゴリと凍りついて行く。大急ぎでズボンを引脫いて足を用意のタオルでゴシゴジ擦る。眞赤になつた。手早く身仕度を整へてヤレヤレと一息する。これで今日の一苦も去つたのだ。皆用意が成つて Hütte の對岸を出發したのは七時十分。

針ノ木谷の雪は堅かつた。靴のまゝ歩いて少しも潜らぬ、痕もつかない位だ。スキーを穿くのも損なので擔いでドンドン歩く。夏と違ひ煩い徒涉の話なく、唯々時折雪崩のあとゝ、雪の橋の上を氣を付け乍ら通る外別に何の苦勞もない。併し矢張り時々ナーゲルの靴の欲しいやうな所もあつた。谷は深く、兩方の崖から大きな常綠樹や山毛欅などが生ひ繁つて暗い谷を劃つて遙かその間から鬼ヶ岳が覗かれたり、針ノ木岳の裏が姿を見せたりした。やがて針ノ木岳の裏の削るやうな絶壁とその腹の所々から湧き出でた雪崩とが頭の上に蔽ひ被さる樣になつて居る谷間の白樺の林に洩れ來る陽の光を浴びて休息する。南澤を一寸針ノ木の溪へ入つた所で十一時になつたので晝食をする。

これから愈々針の木峠の登りにかゝる。見上ぐる眼の前に屹然と蓮華岳がどうする氣かと言はぬ計りに峙つて居る。峠までは急な雪の斜面がつゞいて居るが左に急な岩壁があるので峠の頂上は分らない。一歩々々峠を登つて行く。白樺の間を縫ふて右に左に行く。漸く不動が見えて來た。雪は Windkruste をなして居て

可なり堅い。先頭の宗作が作つた足場を踏んで行けば別に靴で潜る程でもない。陽がかつて太陽に雲がかゝつて來た。併し大分登つて振り返つて見ると、何時の間にが槍、穂高より常念、烏帽子などの雄峰が不動の上から眞白に裝うて顔を出して居る。これからの登りは實に苦しい。峠の頂上がそこに見えては居るがその直ぐ左の下の大きな岩壁がいくら歩いても歩いても近くならない。下を見ると一度滑つたが最後もう止まることも出來ないやうな堅い表面がクラストをなして居る。急峻な大雪溪が雪崩のあとの線を示し乍ら遙か下方へ消えて果てしがないやうだ。滑り落ちても死ぬことはなからうが登るのは大骨だ。息は切れる。もう一歩、もう一歩と一心に足に力をこめ、靴尖で雪面に充分な足場を作つて登る。Kruste の下が割に柔らかなサワサワの細かい輕い雪（Schneepulver）なので下手すると直ぐもぐり込んで滑りそうになる。勿論 Steigeisen を用ふる所ではない。却つてスキーにビルゲリーアイゼンでもつけて少し叩き付け乍ら登行した方が樂らしい。今はもうそれをする程も長くもないので靴のまゝ只管登る。やうやく頂上の少し顔出した岩の頭にとりついて北アルプスの主峰を一眸の下に収め得た時の愉快さ。時は一時五分。陽は隱れたが赤澤、鳴澤の中腹に雪が低迷する外目を遮るものもない。一面白皚々たる連峰、南は槍、穂高は勿論、純白な赤牛、高瀨、常念の山々、深い高瀨の谷、北は鳴澤の下まで籠川の深い谷が刳るやうに底知れずつゝいて居て、その彼方に爺、鹿島槍などの白馬連峰が純白な雪を戴いて天をついてゐるのが見える。左と右は峠につゞいて蓮華とスバリとの間に大きな雪庇（Gipfelwachte）が峠の頂から籠川の溪へかけて恰も信州側より登らんとする人を追い返す砦のやうに出來て居る。籠川谷側の雪は皆峠の南側越中からの風のために吹き上げられ吹き溜められて全く柔かく細かく、峠の兩面で非常な Schneebeschaffenheit（雪の性質、形状）の差異を示して居る。白い連峰の雄々しい姿が沈鬱な色を增して強く人間を威壓して居る。默せるが如き此等の雄峰はその沈默の間に偉大なる仕事をなしつゝあるのだ。刻々に何事かを計つて何事かに力を伸ばして居るのだ。何といふ莊嚴さであらう、思はず襟を正さしむるやうな氣がする。人は此の如き冷やかなる大自然に對し、嚴肅なる山に向つた時に於て初めて莊嚴なる感じを泌々と味ひ得る。

吾々の長らくの宿望も漸く遂げられたのだ、これでこの行に對する吾々の努力が報いられたのだ。今や冷やかなる自然に對する憧憬とその飽滿せられた時に感ずる憂愁とが胸に迫つて來た。

寫眞をとつた後雪庇をとび下りてスキーをつけて軟らかなスキーをつけてさへ膝までも入るやうな輕い雪の廣い扇形の谷を、ステムボーゲンを大きく描き乍ら滑降して行く愉快さ。それもやがて鳴澤の下、谷の狹まつた所へ來ては物凄い雪崩 Grundlawine のあとのために斷念せざるを得なかつた。これから下の溪は全部大澤平に到るまで連續した雪崩の洪水のあとであつた。時々又スキーをつけて雪崩の横の細い斜面を半制動で降つて行く。この峽谷に氾濫した大岩石のやうな硬い雪崩の雪の塊が滑つたために、雪面に鋭い巨人の爪で引掻かれた樣な痕がついて居る。

遂に大澤平の數町手前でスキーを全く脱いで雪塊の間を縫ひ、飛び越えて行く。下の大澤小屋から誰かスキーで出て來るのが黑點に見える。暫くして「オーイ」と呼ぶ、向ふから應へる。段々その黑點が近くなつて來る。

蓬に傍に寄つて誰やらと見れば今年正月金澤であつたことのある松本高校の福林君である。意外な邂逅に喜んで小屋に誘はれて散々御馳走になる。大澤小屋は全く雪崩の心配のない所であり、頑丈な好い小屋だ。米も大分おいてある樣だ。桃の罐詰やら Candy 甘納豆やら貪り食ふ、どうせ人の腹だなどゝいふ意地汚い根性はないのだが、兎に角甘いものと水氣のものが欲しくて堪らぬからだ。

一時間許り休息して色々話して福林君に送られ、別れて籠川の谷を一直線にスキーで飛ばす、白樺の木がスウスウ横を掠めて後へ飛んで見く。顧れば陽は又麗らかに照つてスバリの頭に桔梗色の光を帶びた銀の冠を戴かせて吾々を見送つてゐる。

扇澤を過ぐる頃、人に合ふ。(原文ママ) 棒小屋で先日雪崩のために死んだ喜作爺の死骸をとりに扇澤を越えてゆくのだといふ。あの有名な喜作の死んだのは出發前金沢澤で既に聞いた、併し今こゝでこれを迎へに行く人と合ふなんて何といふ因緣かと、山男の最期といふものを考へる。

白澤も過ぎて又降つて行く。やがて雪も少なになり、山も淺くなつた。大出へ數町の所で林の中に憩ふて人夫達を待つ。

大出に出て人夫達と喜多君はこゝで夕食をする。僕は別に腹も減らず、足勞れもして居ないので先きに大町へ電報を打つため夕暮の路を電車路に沿ふて辿つた。

顧れば山は遠く去つた。夕靄の中に爺から今名殘を告げて來た蓮華の連峰が淡い。言はれぬ心の寂しさが言ひ知れぬ山の懷しさと共に初春の靜かな山國の夕べの悲しさと共にヒシヒシと襲ふやうに胸に迫つて來た。

× × ×

尚ほ、此の行にあたつて多大の御盡力と御援助を賜つた武藤校長、富山電氣局長深井氏、及び伊藤氏等の厚意に對して厚く御禮を申上げ、且つ案内たる佐伯宗作及び他の方々にも深い感謝の意を表する次第であります。

(一九二三)

13　伊藤孝一　「百瀬慎太郎宛、伊藤孝一書簡」（部分）
『山嶽活寫 大正末、雪の絶巓にカメラを廻す』

2005（平成 17）年 3 月 25 日刊　富山県[立山博物館]発行

要　約

1923（大正 12）年 3 月 4～22 日の記録。

メンバーは、伊藤孝一、百瀬慎太郎、赤沼千尋、勝野銈四郎（撮影技師）、奥村吉松（撮影同行者）、佐伯嘉左衛門（芦峅寺の案内人、以下同じ）、佐伯福松、佐伯政吉、佐伯忠太郎、佐伯宗作、佐伯鶴松、佐伯栄作、佐伯亀蔵、佐伯清作、佐伯兵治、佐伯重吉、佐伯竹次郎、志鷹喜一、志鷹光次郎、三川兼次郎。

行程は、芦峅寺～立山温泉～室堂～雄山～立山温泉～鳶山～ヌクイ谷下降～平～針ノ木峠～大町。

この登山全体は、1923（大正 12）年 1 月から 3 月（偵察や停滞、アプローチ等を含む）に行われたもの。名古屋の素封家・伊藤孝一は、盟友の對山館三代目主人・百瀬慎太郎、燕山荘開設者・赤沼千尋とともに大規模な登山隊を組織。映画撮影を伴う大がかりな登山となった。伊藤はこの登山で撮影したフィルムを編集し、日本初の本格的な雪山登山記録映画「日本アルプス雪中登山」を制作。同映画は日本初の本格的ドキュメンタリーといえる。

※北アルプス北部積雪期横断の 4 番目の記録。

（本記録は、前掲 No.11 に含まれているため、ここでの再掲は省く。内容は該当頁を参照。）

14　沼井鐵太郎　「黒部川（鐘釣温泉より平の小屋まで)」『山岳』第21年第2號

1927（昭和2）年6月30日刊　日本山岳會発行

要　約

1925（大正14）年8月25日～9月1日の記録。

メンバーは、冠松次郎、沼井鐵太郎、岩永信雄、宇治長次郎（大山村の案内人)、野口松五郎（ポーター、以下同じ)、安川亀次郎、宮本岩次郎、村井、青木助次郎、青木長松、白川、山本甚井。

行程は、棒小屋沢出合下流付近～未踏の谷を平まで遡行（このとき「十字峡」を命名)。英国製登山綱など計100m以上のロープやピトン10本、カスガイ、釘などを持参。報告者である沼井鐵太郎は東京帝国大学農学部農芸化学科卒。本記録は、科学的な視点からの記述が含まれるとともに、近代登山の山岳・登山用語を一部交えながらの紀行文となっている。

※黒部川・下廊下核心部の初遡行。

※冠松次郎らの黒部川探検の集大成。

※冠松次郎、沼井鐵太郎、岩永信雄は日本山岳会会員。

大正十四年八月二十五日――九月一日。

鐘釣温泉（泊）――猿飛――欅平――シアヒ谷落合（泊）――折尾谷落合――シヾミ坂――アゾハラ――千人谷落合――吊り橋を渡り、東谷落合（泊）――作郎越（日本電力の歩道、新稱）――棒小屋澤落合下流の泊場に泊――棒小屋澤落合――長次郎越――本流右岸、棒小屋澤落合より數町上流の地點（泊）――無名澤落合の下流約二町の地點（泊）――岩小屋澤岳の長尾根に登り、再び本流右岸に下る――黒部別山澤落合の約二町上流の地點（泊）――本流の徒渉左岸、大へつり――内蔵助澤落合――ゴゼン谷落合――雄山澤落合――平ノ小屋（泊)。

一行　冠松次郎　岩永信雄　沼井鐵太郎

人夫　案内宇治長次郎及野口、安川、宮本、村井、青木助、青木長、白川、山本の八名。

緒　言

去年冠さんと岩永君は黒部別山澤南方の大へツリで、用意の足りなかつた爲止むなく下降を中止し、内蔵助澤を上られたのであつた（本號岩永氏の紀行參照)。爾來岩永君の黒部行きの熱望が益高まつたのが動機となつて、終に冠さんと三人の間には今年こそといふ一致した計畫が成り立つたのであつた。日本電力の下からの道は去年既に棒小屋澤落合附近の泊場までついたので、殘つた惡場の通過に三日かけても、全體として大した日數はかゝるまい。然し其部分に於ける考察と實際上の全き準備とが必要である。

私は嘗て大町の佐藤靜馬他二名を連れて東谷（カハラ小屋澤）から下廊下の核心へ近付かうとしたが、其道程に於て既に無理があり、かてゝ加へて食糧の缺乏を來したので、棒小屋澤劒澤兩落合の形態も靜査するを得ずして復た國境の方へ辛くも逃げたのであつた。（沼井、「大町より下廊下へ」、山岳十五年一號二四――七一頁)。其後長次郎を連れて黒部別山へ始めて登つたのも、實は下廊下に關して何等かの知識を得たいといふのが眞の目的であつた（沼井、「黒部別山と内蔵の助平」、山岳十七年二號一九――二七頁參照)。此時は既に前年長次郎を先達とした冠氏が黒部別山澤の對岸迄下つて居られたので（冠氏、「下廊下の記」、山岳十六年一號四三――六五頁)、下廊下下半の通過に關する考察の材料は朧氣ながら略ゝ出來上つたのである。實歳には中々思ふに任せず、昨年の行にも私は加はる事が出來なかつた。

但、此等の觀察よりして、恐らく下廊下の未知の部分は所によつて岩石の節理面の向きを異にし、其爲意外に便利な水邊の棚（廊下の裾）と割目を提供して呉れるかも知れないと考へた。此は冠氏と長次郎の見通しによつて最早部分的には肯定的に鑑識せられた事である。同氏の行では其處に磧の存在する事も認められ

た。又、私は自己の乏しい經驗と諸氏觀察の結果より想像して、棒小屋澤落合を廻つて上流の右岸は、河身の方向が多少東西に傾いてゐる爲却つて岩が順層（kopfseite）であり、へつりを確實ならしめるであらうと楽觀したのであつた。それにしても棒小屋澤劒澤の兩落合附近は、其險惡さを少しでも私が知つている丈、最大難關に思はれた。又、黒部別山澤より下流の屈曲部は確かに大問題だつた。其處には長次郎が谷より山より瘠々見て、彼の知れる範圍内に於て最も惡場とした、右岸直立數百米の赤兀の絶壁がある。

然しかういふ奥深い場所は兎に角當つて見なければ眞實分からない。其故今年は出來る限り愼重な態度を取つた。先づ、殘雪の特に多い此夏を過して最も水の少いと思ふ時季（八月末）迄待つ。長次郎に早くから依頼して彼の他八名の人夫を契約して置いてもらふ。人夫を多くした事はへつりや徒渉、架橋の際の作業能率を增す爲である。又、此迄の經驗に徵して登山具も念入りに整へ、赤絲入りの英國製登山鋼を百呎一本、八十呎一本、六十呎二本、其他に和製の二重に編んだ木綿の鋼約八十尺、計約三百八十尺のロープと、今年始めての試みにピトン（Piton; Mauerhaken）十本を用意した。長次郎の方へも必要と思ふものは持つて來る樣に云つてやつた。長次郎からも他の荷は成るべく少くして呉れと云つて來たので、私達はつとめて享楽的食糧品等は減じた。防寒具は谷を行くので不用である。木綿とスレンの寢袋さへあれば寢られる。洋服丈は上下とも毛織の物を一着餘分に持つて、破れた時の用意且立山に登つた時の防寒兼用とする。天幕は不用といへば不用であるが、二百十日をひかへた頃の事とて、一行十二名を分けて容るゝに足る屋根型天幕三張を持つて行く事にしたが、支柱は勿論家に置いた、草鞋は長次郎達の手製の緒の丈夫な奴を三人分二十足持つて来させる事にする。此他不足の品は三日市で買ふ事にした。尚又、寫眞は出来る丈撮るつもりで、冠氏は手札形アルピンカメラ、コリニアＦ六・三の器械でフイルムパツク五打を持ち、岩永君はヴエスト形ピコレツトのツアイイスＦ四・五でロールフイルム二十本を持つ。私は記錄係といふ役目でノートの他に双眼鏡、クリノメーター、バロメーター、寒暖計等を持つ。初めはも少し氣のきいた測量機械をと思つたが、荷にもなるし又限られた日の行に惡場での實際的効果を疑つたので、止めた。眞實言へば何も持たずに壯絶な景色を飽くまで眺めるのが私どもの第一義である。

一　鉢鐘温泉まで

八月二十四日。午後七時の金澤行急行で上野を出發する。歐米を一廻りして此月初めに歸つて來た別宮さんが送りに來て呉れる。氷河の上に聳え立つ鋭い輝かしい峯を登つた新歸朝者は、渓谷と森林の美に於て我國が如何にすぐれてゐるかを感得して來た人である。「黒部、お供したいなア」とウエツターホルンの模型を前にして、遠くなつかしく求める樣な眼の色を漂はした同氏の面ざしを、私は忘れない。此數年冬山夏山の快き行に大抵いつも連れだつた仲間の一人を殘して山のへに去る事は心淋しい。然し同氏の友情は既に手配整つた私達の首途（かどで）を毫も亂さなかつた。私は同氏のロンドンで求められた新しい眞白な百呎のロープ（アーサー・ベール製）と、アメリカ製の野營用ズツクのバケツとを受取つてやがて気持ちよく別れた。

空は星の夜。下右舷の月も照る。

汽車はすいてゐたのでらくらくと寢て、いつしか信州路は過ぎ、二十五日の黎明には越後國糸魚川驛に着いた。私達は普通列車の一番に乗り換え、西へ西へとつゝましげな日本海を右窓に眺めつゝ揺られる。焼、火打の火山の群も岳の色鮮やかながら、なほ深く高く樹山越しに白馬、旭、小蓮華、朝日等の雪多く殘る峯々と、瀧倉岳のあたりが指されると、バラツクの都にて過去の思出、今年の想像に耽り耽つた黒部川の奥の間が、又なつかしやの言葉となる。然し私どもは空想からは明かに離れつゝある。話杜絶（とだ）えて一（ひと）しきり双眼鏡から榧松の深さや雪渓の狀態が覗かれる。其内に黒部川の鐵橋を渡る、豫想外に水が少いので、先づ此分なら下廊下もと、冠さんは自信ありげに言ひ切る。私は久しぶりに來た越中の山河、たゝずまひの如何にも鷹揚な、そして何處か引き締つた景色を見て、心が濾過清浄される樣な氣がする。

午前六時四十分、三日市驛で下車して驛前の宿屋に上り込み、朝食をしたゝめる。此附近は有名な黒部水瓜の産地とて、大きなのが店の前にごろごろしてゐる。食物では中々むつかしい岩永君も水瓜は第一級の好

物とあつて、食後早速よく熟れたのを切らせる。此は大和水瓜で、本統の黒部水瓜は未だ早いといふ。大和の方で四貫目位のが十五錢とは安いのに呆れる。

長次郎達は九時頃來るわけなので、其迄の時間を利用して三日市の町に買物に出かける。仕入れた物は木綿の細(ほそ)いロープ百五十尺、麻絲若干、かすがひ五本、三四寸の釘十數本、金槌一挺、鹽引の鮭二匹等が主なるもので、此内かすがひ、釘等を求めたのは谷に入つて對岸に越す際橋又は筏を組む材料に使はうといふ冠さんの考えからであつた。（然し結果から見れば、特別用具としてピトン四本が使はれた丈で、他は悉く豊富なロープが重要な役目を演じたのである。）

九時の汽車ではまだ人夫達は來なかつたので、私達はぶらぶら過して十一時に至つた。長次郎他八名は其時來る。挨拶もそこそこに黒部鐵道の小ざつぱりした電車に乘りこむ。今度は皆始めての人ばかりである。御本人の長次郎の身體は大分いゝがどうも頭が病(や)んで困るといふ。思ひなしか彼も白髪(しらが)が大分增えて顔面もゆるんだ樣だ。

電車は前々から都會化した女連れや遊山でもする風體の人達が多かつた。此は皆宇奈月に入浴がてら遊びに行くもので、初めはあんな山の中へ行くにしては少し變だと勘違ひしてゐたのだつた。此電車は一時間ばかりで宇奈月に着く。途中愛本までは黒部川兩岸の峽(はざま)入口の山の襟が見える丈で變つた事もない。愛本では愛本橋から餘程離れた所を通つてしまふ。それからは兩岸の山肌を直(ぢ)かに見て行く。長いトンネルを地下水のしぶきを浴びながら走り抜けると、所謂文化式建築の宇奈月停車場が現れる。あたりは以前から見れば驚くべき程變つて、宿屋、料理屋食物店等が數十軒立並び、遠慮なく新開地温泉鄉の惡臭を發してゐる。そしてなほいやなのは此處が登山根據地の樣に宣傳されてゐるからだ。其のつもりなら以前の如き口元黒部の落着きを何とか殘して置いて然るべきであらう。よく物の本に見、人の話に聞いた黒部の玄關が斯く迄荒されては、滔々たる時勢、誰かよく下廊下の絶美こそ破壞されないと言ひ得るだらうか。

私どもは一秒間ももどかしくいそいで晝(ひる)の支度を整へて、午後一時半ごろ其地を離れ、右岸へ渡つて、山奥の緑に包まれた古い温泉場へと線路道を歩んで行つた。日は光耀と輝いてゐたが、川の面(も)から凉風が起つてゐた。黒部下流の峽には今、日本電力の電車線路を敷くとて、かしがましい工事が始められてゐた。群れゐる工夫、材料運搬の鮮人、荷を負ふ女達、口髭の生えた測量士らしい人物、轢(きし)る電車、仕上げ終つたトンネル、未だ終らざるトンネル、はつぱの音生々しい破壞の崖と砕岩の堆積、廣々した小屋場、そんなものが混(まぢ)つて私達の眼を刺戟し脚(あし)を疲らした。黒部川の水は屢々碧(あを)い淵と湧き立つ瀬波の只ならぬ景を示したが、其は餘りに騒音と雜影の滿ちた内に己(おのれ)一人を持する姿であつた。恐らく釣鐘迄電車が開通した暁には此口元も以前とは違つた意味ではあるが、自然に近付いて來た人達の心に清楚な趣を見せる事であらう。今は只一時も早く去つて、自らなる森の下道を我が足下に踏みたい願ひのみで一杯である。

三時、森石澤を過ぎ、少し行つて線路を離れた。十五分過には黒部での大きな支流の一つ、黒薙川に架した橋を渡る。此川の上流にも工事は行はれ、遙かにダイナマイトの岩を崩す音が聞える。黒薙川に添ひ稍上つて曲り角で休み、人夫達を待ちながら、小暮、田部兩氏の此谷の奥、エブリ谷の旅を忍びつ、其の綠深い境地が電力供給地と成り行く悲しき運命を考へる。しばし經て人夫達が上つて來(く)る。其後からホワイトシユース輕々しく（？）湯場廻りの遊山客が二三通り過ぎる。やがて我々も立つて、日のかげつた山の鼻を越し、下りにかゝつて再び黒部本流の右岸を行く。四時十五分、出シ清水といふ所で水を飲み休んだ。其先には出平（デダヒラ）といふ停留場になる所があつて、其邊から谷がよく見える。左岸の鐘釣岩見たいな岸壁に眼が留まつた（黒部川は愛本より入るとすでに山は急峻で崖が現れ始めるのだつた）。次に出シ大谷といふ地點があつた。

五時十五分といふに猫又谷の落合に着いた。美しい此の落合の水色も、あたりに大きい工事場が建ち、幾十といふ人の働いてゐるのを見ると、興ざめがして停まる氣にはなれなかつた。然し此谷を過ぎると漸くトロ道に離れ、淺い森の下蔭を行く樣になつた。とある岩に腰をかけ、木の間を通して谷のざはめきを覗き、又人夫を待つたりした。バロメーターを見ると氣壓は七十粍ばかり低い樣に思はれた。

それから空腹の脚は、先の岩屑を敷きつめた道の行にほてつたまゝ、稍ゝ重げに運ばれて行つた。行々仰いだ高い攀ぢ難い東鐘釣岩の下(もと)を廻つて進むと、對岸の澤に一塊の殘雪が横たはつてゐた。六時十分、崖際から吊橋を渡る。其袂近く、新釣鐘の温泉は大岩と相擁して建つた様な宿であつた。川を覗きこむ浴場は解放されて、裸かの人が立つたりしてゐた。橋を渡り越すと左岸五町にして此夜の宿り、鐘釣温泉場に着く。時に六時二十五分。

丁度入湯の盛りで滿員だとあるのを、頼んで私達は家人の一室をあてがつてもらひ、長次郎達は上の薬師堂に泊る事になつた。あの長い道を下りて磧の湯にも行く。混雑してゐるので、中村清太郎氏の麗筆によつて豫想してゐた趣は、私には起らなかつた。宿に歸つて食事後横になると、もそもそと例の蚤が皮膚の上を歩き廻つた。此にはひどく弱り然も退治の下手な私は遂に全滅を期する事は出來なくて、此旅、下廊下の清浄境までしよつて歩かなければならないのだつた。其夜は暖く、窓の所でも十時頃二十二度半位であつた。

二　東谷落合に到る

山道はまこと八月二十六日の朝より始まる。温泉で米、味噌其他一週間分の物を仕入れて、七時三十分にいでたつ。二町上にガラ谷といふ名所がある。岩稍灰色の磧で、さして美しい谿間でもない。百貫山は綠の樹もて衣を織り、岩兀をくるんでのさばり立つ。仰角三十五度、此のあたり流石立秋の頃をへて、樹々の葉色少し褪せ、小粒の實さへ其蔭になつてゐる。

八時、さゝやかな峠の上。百貫山、名劔山をかたへに、遙か源には大窓續きの淋しい雪の山が現れてゐた。下り道となつてヨヘラ谷といふ稍赤味ある小さなガレ澤を通る。本谷は遙か下の所で、感じのよい流を見せる、百貫、名劔の莊重な姿を眺めるにも適當である。八時四十分、ウド谷。此は傾斜緩く稍大きな左岸の澤である。一休みして蟬の聲水に響くを聞きながら、漸く黒部流域の、山は幾重にも襟を合せ、嶮しく谷に落ち入つて、森中に光る水、谷奥にたゆたふ雲の、色映えの引き締り行くのを感じて來(く)る。山際の森林はまだ闊葉樹ばかりである。小屋ノ平といふたるんだくぼみを通過し、九時三十五分には小黒部谷落合の吊橋を渡つた。

私達は此橋で始めて深山に近着いた氣がした。狹いが岩を削る小黒部の流れより、岸を傳うて本流の方へ通ずる道跡がある。此も水電工事のさきがけのもので、ボールトを打つてあるので先づ容易にへつる事が出來る。そして本流左岸の廣い岩棚の上に立ち、沸騰する流、狂奔するタルの止むなき躍動の姿を眺める。此場さへも文化の責苦に遭ふた都人には瑠璃の光彩である。そを何事ぞ、峽谷の秘密は今金力によつて發(あば)かれ、變裝の止むなきに至つてゐるのだ。

水は本流より小黒部の方が冷(つめ)たかつた。人々は湯の匂がするといつて鼻をひくひくさした。十時十分出發、五分ばかり登ると峠路に來る。即ち右は「池ノ平通路分岐點、標高二〇〇〇・十六尺」と標木がしてある。我々は左して數分後に切通しに出た。道はそれから方向を變へて上流本谷の河身に向つて下る様になつてゐる。奥鐘山が此方からは木山に見えて突立つてゐる。だらだらと下ると左手下に名もしるき猿飛の名勝が現れる。空晴れて常より明るき空氣を通して、私達はまざまざと其光景に見入つた。魚の肌の如き黒ずんだ藍色の水が峽中をとうとうと流れてゐる。漸く現れ始めた黒部杉は崖際にもたれ聳えて一段と深味を添えてゐる。歩を進めて上流を覗けば、又此方が谷の景色は軟かくてよい。折しも岩魚がきらりとタルを躍り越えるのが見えた。この邊の岩は白味と青味交互してゐる。

十時五十五分、分れ道。一行の進むべき黒部歩道は右であるが、中食の爲左へ下つて、袂に「東洋軽銀會社欅平測水所」と書いた札の立つた吊橋約三十五間を渡り、祖母谷川の左岸に來て腰を下ろす。川水を汲んで來て中食後人夫達は晝寝をし、岩永君は渓水をレンズに入れるとて大分下の磧に下り、私は長い吊橋の上に腹這つて、本流の水の迅(と)く走り去るのをぼんやり眺めたりした。水に流されてしまつた祖母谷温泉の昔物語、鐘釣が第二の宇奈月となる頃には其處も新たに宿が建つて、豊富な湯量と幽邃な紅葉美とが人を呼ぶ事にならう、第二の鐘釣になるのも遠くあるまい、などと冠さんは思ひを述べられた。

曇り日となつた正午、元來し方より黑部川右岸の歩道を踏み分けて行く。稍上つ方にて右方より凉氣が襲ふ。其は自然に出來た風穴の一種で、岩の積まれた間を何處ともなく吹いて來る。出口の一で測つた温度は五度半。珍しさに若干の人と共に十分ばかり居殘つて、冷(ひや)やかさに足のだるくなつた頃、又ふはりと熱(あつ)い大氣の内に身を傾ける。十二時半、中年の栂生ひ茂つた段地の上に來た。此が欅平で、乃ち日本電力の事務所のある所だ。先頭の冠さんは一町程下の小屋に立寄つて道を聞いて居られる。初め長次郎が小暮、中村兩氏の伴をして助七の案内で行つた路は、私達の來た通りの方向に辛うじて跡を見分くるのみの草埋みとなつてゐる。上つて來られた冠さんは小屋に一人ゐた男が教へたと云つて上の道を指される。其は古い路から高みへ折れ曲つて行く、今年伐採の仕立下ろしの道なのである。

道はいきなり登つて行く。其に從つて奥鐘稍ゝ尖り、谷の奥山も見えて來る。九十九折の細徑は峻坂を攀づるので、荷の重い人夫達は間もなくおくれてしまふ。たゝんだ絲立一つの他何も持たない長次郎と三人のみが、急ぐともなく知らぬ道の不安より餘り休まずに行く。陽の現れて又隱れた空は夕立の氣がしてゐた。一時近く汗ひきに二十分程休んで、尾根にかゝると、其處に脆い兀岩があつた。豁然として南方の山澤が現れる。紫黑色を呈した奥鐘の大峭壁は餓鬼谷の山を背景として黑部の大割れに望み、流石廊下の弟たるに恥ぢない。東の方、祖母谷の澤筋は緑の大塊に喰ひ入つて、高き極みには殘雪まとふ榧松の山、あたりに赤兀二條(すじ)をかけて横はつてゐる。この兀は祖父谷の奥であらうか。

道はなほもさかしく續いた。遠山は屢々眺められた。一時半頃、梯子を架した所には「大、十四、八月、日本電力」の文字が見える。バロメーターではすでに二百米近く登つてゐる。カケスの聲を跡に凉風に吹かれて進めば、道は山腹に横移りして下り氣味となる。ワイヤアだのボールトだのが傍に置いてある。と、人聲が聞える。近付いて尋ねると此道は今開鑿中だといふ。成程一廻りした向側にはカチンカチン働いてゐる工夫達が見える。いづれはこの通り殆ど水平に持つて行つて（凡九百六十米のコンターライン）、東谷對岸に同樣作業してゐる道と一致させるのだ。出來たら東谷の根據地迄材料食糧運搬の用に供するのださうだ。私達は折角三百米も登りつめてこの樣に呆然としてしまつた。そして小屋の男の信じ難い事、或は商賣がたきの樣に思はれたかもれぬ事を今更に知つた。初め冠さんも、前に來た時には小屋の下から川岸近く行つた樣だのに、男はそんな道はない、上のが本統だと斷言したさうだ。尤も彼は新參で仙人谷迄も行つた事がないのだつた。

二時、皆は中ツ腹で駈け下りて行つた。重荷を負つた人夫達の憤慨は無理も無かつた。二十分にして私達は欅平の小屋に着き、男をなぢつた。彼はしきりに其不明をわび、茶を入れて呉れたりした。人夫達は十分程してから私達と合した。二時間も空費し、大切な人夫を疲らしては、豫定通り折尾谷かアゾ原で泊る事は無理になつた。

二時四十五分發。私達一行は小屋の下から少し上り、栂林の中を横に行つた、忽ち谷筋が隈なく見渡せる所に出た。黑部川は殆ど直線的に此の所シアヒ谷の手前迄顯はれてゐる。露出した崖は未だ高くはないが、秋近い森に包まれた兩側の山脚は川中に折り入つて、典型的の V 字狀谷を示してゐる。岸べには磧のとびとびにある樣、川中には花崗岩の巨石飛び立ち、碧流を邀へて往々白く相擊つ色相、其は水少しといへ、實に黑部の美しい特徴である。打仰ぐ左壁（右岸）、奥鐘の絶壁は一段と水態に生氣を興へてゐる。

夫から涸澤と水澤を經て稍々濕(しめ)つた道を下りつゝ、三時二十分にシジミ坂登口に着いた。シジミ谷といふのは黑部本流に入る水無しの崖谷で、狹いながら恐ろしく急な惡場なのである。道は一旦本流水面近くの磧に下(お)り立ち、それから此崖谷の急場に立てかけた高さ十二米ばかりの梯子を登つて行く。入口には可成り高い尖頂塔狀の雪塊が直立してゐた。對岸奥鐘の削壁は美事なものであつた。梯子が終ると左して裸か岩をへつり、上(うえ)の荒れた窮谷、岩登りの遊びに選ばれさうな個所を振り返り惜しみつゝ再び林叢の内に入つた。シジミ坂附近からは全く黑部を溯る氣分に一貫して來た。谷の見通し、緊張味の始まり、そして谷の匂。

思ひ切つて斷ち割つた一片の樣な奥鐘山を眺めて、あの頃木暮、中村兩氏が其絶巓から瀑となつて落つる雨水に壯快を叫ばれた事を憶ふ。其時は此道も出來てなくて、一上一下岩魚釣師の怪しげな跡を拾ひ、シジ

ミ坂などはもう少し上まで登られた様であつた。四時近く、山際を廻りこむと危い吊橋がかゝつてゐる。長さ八米ばかり、澤は小深く削られた一のガレ澤である。之を渡るとすぐ先にも一つ吊橋がある。長さは前の凡そ倍あつて、澤も見るからに險惡な割れ谷をなしてゐる。橋を過ぎてからは道は次第に下つて行く。四時十分にはシアヒ谷（仕合谷又は志合谷、いづれも宛字らしい）落合に着く。

此落合は磧が廣い（凡一町程）。もう大きな石がごろごろしてゐる。黑部川は夫婦岩の關門にしめくゝられてより、東側にかたよつて流れてゐる。奥鐘の聳えた他特別に奇とすべき景ではないが、少くとも第一日の野營地としては迫らず、嶮しからず、夕暮の空氣は気儘に水と和し、草の葉を撫でゝゐた事がよかつた。心伸びて私どもは夫婦岩の一に立つたが、此上の見晴らしと俯瞰は豫期を滿足しなかつた。それからシアヒ谷に登つた。其處にもすぐれた景觀はなかつたが、飛泉を越え、久方振りの殘雪に接してすがすがしくなつた。下ると人夫達は三張の天幕を稍高みにピンと張り、食事の支度も整へて、今は子供の如く岩魚追ひの最中であつた。シアヒ谷の水路を丸きり變へ、オホイタドリやヤマヨモギの葉でかこつた流から二尾の岩魚がすくはれた。ズツク製のバケツは魚籠にもなつた。

始めての谷の宿りは夕焼に祝福された。野營飯も大きな焚火のぐるりで樂しく始められた。食後の一服又一服は水音に聞き惚れ、新たなる谷の實感に旨味を持つて來た。私達は一番小さな四人用の天幕にもぐりこんだが、この夜からの固い寢床も暖かく（八時天幕内にて二十四度）、其にも増して「山に寢る」事が嬉しかつた。

八月二十七日、夜露が大分下りて未明から冷やかになつた。四時半頃起き出でてしつとりした谷の空氣を吸ひ、聳え立つ奥鐘山をいゝなと思つた。空模様も順調なので安心する。

七時五十分、出發。夫婦岩（左岸小なる方）の肩を越え、漸くに色調鮮やかになりゆく黑部の水趣を喜びつゝ、稍進んで段々上りとなる。約百米迄登つて來ると、やがて傾斜三十五度の岸壁をへつる様になり、其から逆落しの下りとなる。然しさういふ所には道は手を入れて梯子が組んである。此の梯子道は長さ凡十五米ばかりで、或所はシジミ坂よりも惡かつた。此より奥鐘山は見えない。そして餓鬼谷の割れ目とおぼしき地形が行手にあつた。

第一の梯子道から暫くして又急な梯子道となつた。其は藪蔭に隱れた割れ澤のようなへこみで、道の有難さは、荷がつかえる位のわづらはしさですんだ。（けれど嘗て冠さんは此二つの急場で道がこはれてゐたので惱まされ、綱を使つて活路を開かれたのであつた。聰體にこの黑部左岸の歩道は其後よく手入れがしてあるといふ話である。）其邊から道は廣く屈曲する川の左岸を巨石磊々たる、水量豊富な折尾谷落合の光景を見つゝ廻つて行つた。

折尾谷はシアヒ谷よりも大きく、雄々しい氣のする所であつた。私達は其を渡つて本流の磧、石小屋のあたりに荷を下ろし、八時四十五分から十時二十分迄其附近で遊んだ。本流は流の幅凡二十間もあらうか、轉石は白くどつしりと河中に羅布され、岸の小崖は裾を垂れて一齊に傾き、流るゝ藍に、巻き返る白い渦紋に洗はれてゐる。岸の上は闊葉樹の林がクロベを混じて深々と包んでゐる。峽谷のうるほひ、凝視と黙想が私達に始められて來たのだ。其中でも本流の中程迄淺瀬を渡り大石に這ひのぼつて眺めた、水晶玉簾の如きタルの彩を忘れ兼ねる。又、奥鐘が下流の上空をしかと塞いでゐるのもよかつた。

私達が景色に見惚れ、寫眞を撮つたりしてゐる間に人夫達は又岩魚追ひをやつてゐた。此落合でも私達は温泉の匂を嗅いだ。本流の水温は十四度ばかりで、折尾谷のは之よりも一度丈高かつた。

此落合を去る前に下の道から水電の人夫達がやつて來た。今朝早く欅平を出て來たもので、これから東谷の天幕場迄荷を運ぶのださうだ。其人達は荷が重たいので、私達が出發して新道を進む事僅かで追ひ越し、つひに其日再び逢はなかつた。新道は上りの餘りないよい道で氣樂に行ける。そして林の道は十一時十分前にガキ谷落合の對岸を通つた。此谷は森中に深く狹く刻まれた澤のように見えた。それでも葉隱にきらりとひらめく岩と水の存在は、優に黑部支流の險惡さを顯はしてゐた。水面から凡五十米の上を平らかに過ぎる歩道は谷底より稍高しとはいへ、嘗て此の水脈を戀ひ慕つて一上一下苦しみの勝つた行をなした人々よりも、

遙かにましな覗き方である。

ふと仙人山の黒い姿を行手の空に認めて、私達の探るべき所はなほ遠ざかれる事を考へる。道はこれより又上り下りして少し宛高まつて來(く)る。十一時二十分、稍急なザクの様な小澤で中食。空曇り來つて凉しくなつた十二時過、午後の行を始める。道は又よくなつて、路傍の小景には氣も留めず去つて行く。東谷山（五萬分一地形圖の稱）に属する黒部側の崩れた崖が見える。十二時半上りが終つて私達は本流へ突出た左岸の山膝を乗り越える。と其處に一つの岩場があつて、山側は南に向つて急下し、現れた一幅の山水、アゾハラの湯けむりと支流の小瀑、綠なす森を左右に幅廣くうねつて目覺むるばかりの碧藍の淵と白い奔湍の諧調、湯垢のついた黄味の岩は其に混つて、此處に印象的な俯瞰となつてゐる。折から小雨が一しきり襲ふたにも拘らず、私達はこの寧ろ奇抜な光景を飽かず眺めて、物の十五分ばかりその岩場の乗越にゐた。

硫黄の湯臭い空氣をゆらいで、私達の身體はアゾハラに向かつた。其處の下りは中程は殆ど直立の崖の面をワイヤアで吊つた、丸太五六本並べた棧道を行くのであつた。それから平(たひら)となつて進むと、森林中にありさうに思へぬ尖つた岩塊のガレがあつた。そのあたりは非常にお湯臭いので、恐らく地下の暖(ぬく)もりで新しく崩れたのであらうといつた。アゾハラの小屋場はそれからぢきであつた。午後一時着。

其處は本流から三四十米高い所で、粗末な小屋が一つあり、又立派な小屋場にする為のならした平がある。陽がかつと照つて暑いので私達は支流の澤に下りて水を掬つた。然し其水はぬるく、湯が混つてゐるのはたしかな事だつた。此前よりも一體に谷が荒れてゐるとは冠さんのお話であつた。湯も川の上にあつた所がなくなつて、今は氣樂に入るべきでもないらしい。總じて地のぬくもりの為かアゾハラの樹は瘠せしなえて、楓はむしばんだものばかりである。そして澤の上手を見やると、荒々しい其形貌は分岐した枝澤皆瀑をかけ、恰かも浸蝕の進んだカルデラに近くゐる様な氣がする。

眞晝の陽は照り渡つて長く留まるべき誘惑を私達に與へなかつた。されば本流に近づく事も見合せ、一時二十分道の續きを追ひ求めた。ぬる澤のすぐ隣に一つの小澤がある。此は水清く冷たくて思はずも數杯を過した程であつた。それより少し上れば森影を廻らうとする所でアゾハラの上手の澤の奥、黒味勝ちなる岩の割れ目荒々しい山肌に食ひのぼつてゐる雪渓を顧みた。シジミ坂の割れ谷より遙かに規模大きく、其趣も異つて如何にも凄慘な、死の冷たさを感じる様な狀態である。高嶺の嶮峻。氷雪まばゆき岩の殿堂には、登高の心誘ふ華やかな透明さがあるであらう。さりながら此の荒谷、峡流近き岩と雪と森の抱擁して荒凉たる境地には、珍しき觀物ながら、異常の第六感に訴ふる寂しき引力が働くのである。

私は恐い物見たさに似た心持を以て振り返り振り返り道を登つて行つた。前に來た山岳宗徒の人々が、其れを通つて木山高く越えた事も思出されて、益々アゾハラと其澤奥の事が心に印せられた。其が見えなくなると眼は黒部の流に向つた。老若の掬生い茂つた山腹のへつり道から、アゾハラのあたり、又上流の一段と黒部川らしくなつて來た谷景色を見て、悦に入つた。やがて谷を廻るとアゾハラの流と上に奥鐘山が見えた。其峻峯は南の三角になつた尾根を眞直に望むのであつた。其後道は次第々々に高さを增して谷に離れて行つた。掬の木立を通して黒部大谷の屈曲するあたり、稍赤味ある岩肌を水光にさらした姿が映る。恰かも水勢が谷を押し擴げんとするのを堅緻な岩根之をむかへてさはさせじと喰ひ留めたかの如き、節のある水脈、其は眞に黒部の特徵である。そして其右岸の岸壁は細かに割れてゐたが、明かに順層である事をも認めた。

かくて可成りの高度を有する乗越に着いたのは二時であつた。黒木稍多くなつて來た兩岸の山々、右に偏つて稍遠く仙人山の東尾根、其鋸齒を刻む外形を眺めて、私達は十分ばかり休んだ。次で下りは小綺麗な掬林を過ぎる。やがて山を廻り始めるに及び、仙人山の先の小澤、殘雪を臧し下部は瀑が落ちて居るのを目擊する。すでに谷は奥まつて來た。對岸闊葉樹の熊の棲家らしい深い綠の色、其は午後の陽に照り返つて無焰の火の如き豊かな生氣を呈してゐる。本流は薬研の底を水聲烈しくわめき落ちてゐる。力あるものゝ美しさ、限りなき憧憬、水邊への思ひは胸につのつて、只管に歩を運んで行く。

先んじた私は樹陰から現れて、岩の上に立ち、足下十間ほどの仙人谷を眺めやつた。流石に其は源より高き、より深き飛瀑重なる相貌である。岩の間の狹く段をなせる事、兩岸の垂直近き壁、其上の密林、いづれ

もが廊下近き吊懸の支流なる事をうなづかしめる。急な梯子道を下つて、水邊の岩床に行き荷を下ろす。時に二時四十五分。此落合も非常に湯臭い。其湯は少し下の本流に少し傾ける一大岩面の上部に湧く。（出口にての溫度六十五度）。又橋の向側にも湧く。尚又本流の右岸にも湧いてゐる。間もなく一同揃つて第二回の中食をすまし、一時間近く休息をとつた。

岩永君と私とは仙人谷落合の光景を割り増して想像してゐたのであつた。折尾谷で逢つた水電の人夫達は、仙人谷にも小屋場があり、流には橋が架けてあるといつたので、兼て聞いてゐた仙人の瀧と本流の豪勢な様を更に美しく胸に描いてゐた。けれど小屋場は水に遠く（小屋はなし）、橋も吊橋ではなかつた。恐らく虹をなす飛沫を浴びて渡るのだらうと曾遊の冠さんさへ想はれた落合の瀑は、全く跡方もなく、嘗て水を支えてゐた岩塊は飛び散つて本流對岸に迄及んでゐる。思ふに雪崩の勢で斯くの如き變化を生じたものであらう。天地滄溟の變といふも強ち形容ばかりではないと感じた。

落合附近の本流は上手に狹い關門をひかえ、左後から白玉の水がほとばしつてゐる。其が深い潭に擴がると、其處に川中に一つの大きな饅頭岩がのさばり出てゐる。此岩と右岸岸崖とのあはひは二間位にせばまつてゐる。そして此が最初近藤氏を誘惑したものだといふ。實際に同氏が利用したのはもう少し上手なる左岸の岸壁である。本流の景は未だ豪壯と極賞するを得ざるも、亦此迄來れば、谿水只岩のみに觸れ、谷内の反射光線は華麗なる映像と化し來るのである。

休息の間小雨があつたが、三時四十分出發の際には未練氣もなく上つてゐた。之から東谷落合の對岸迄は餘り上下もなく、道のりも意外に近かつた（地形圖は少し變である様な氣がする）。仙人谷と平行して次に直ちに可成り大きな澤がある。がらがらの石の積まれた平凡な澤で、水量も少なかつた。其を渡つて爪先上りになると行先からハッパの音が響いて來た。先入觀念かも知れないが、私にはどうも其反響よりも、殺生ながら猟銃の響きの方がぴつたりと氣持に合ふ。昨日以來しばらく忘れてゐた工事の音響は、單純に山道を行き、渓間の序曲に耽溺する事を妨げる。

やがて指す手に東谷落合が現れた。嘗て私が下る能はざりし其支谷の最下部は、今や無人境の誇を奪はれて、右手に水電の白い天幕さへほの見へる。谷を廻れば後（しり）へ森影なりし仙人谷の上段の瀑は、稲妻の如く折れた姿を本流の縦通しに眺められる。

私は又東谷左岸、黒部川右岸の高い森に包まれた尾根を眺めた。彼の時只管大谷の水魔に吸ひ寄せられて、東谷の瀑場より尾根に逃れ、之に近付かうとしてさまよひあせつた岩場や草場や姫小松の木立、凹澤のくぼみなどが、今は手に取る如くなつかしまれた。一見平凡な會遊の地を他所より望む氣持は全く主觀的回想的なものであつた、當事者以外には何等の興味をも生じないかも知れぬ。私の心は暖く和らいで、早くも東谷の水に觸ればやと小躍りする。

四時十分、東谷の正面に來る。矢張り大きい支流で、小黒部谷、祖母谷を除けば今迄鐘釣掘泉から見て來た内で一等である。落口は低い瀑となり、其上は可成り平らかに流れて右手に隠れてゐる。瀑場は此蔭らしい。落口迄瀑の連續の様に想像してゐた事は當が外れた。又落合は何となく鷹揚に擴がつて右手に岩の段あり、白い二棟の測量天幕が屯してゐる。道から右岸への吊橋はもう少し上手にある。けれど私達は一度崩石で道のこはれた惡場で行きつまり、上の工事場で爆破する石の墜落を避けて戻つた。兼て注意された通り一同揃つて聲をあげると、やがて水電の工夫やつて來て工事を一時中止させ、私達を導いて呉れた。一つの小屋場に出て先づ安心する。此は吊橋を架ける迄の水電の陣屋だつたものだ。吊橋は其れから直ちに渡られる。餘り上等な作りではなかつたが、お蔭で私達は數年前は夢にも思はなかつた黒部本流越えの宙乗りをする事が出來た。

本流右岸磧の適當な所で野營を張つたのは四時四十分であつた。私達は水電の人に挨拶しに行く。西川義男氏といふ若い技師の人が居て、大變に歡待して呉れる。そしてしきりに其天幕に一泊をすゝめるので、無下に斷はりもならず我々三人だけお世話になる事にした。此天幕には西川氏の他に口元黒部の音澤村から來てゐる山案内が二人ゐて、丁度長次郎が平の小屋から下へ見通しをつけてあの立派な、水に近い道を作つた

様に、同じ仕事を受け持つてゐる。

東谷の落合附近の谷の景觀は一言にしていはゞ瀟洒たる風光と稱する事が出來る。流の幅は七八間、落合附近は稍〻つまつてゐる所がある。美しい白肌の花崗岩塊は水蝕に圓滑ながら、決して弱々しい形貌ではない。岸の崖は高さはいふ程の事はないが、面白い形に彫刻されて、凝視すれば何となく滋味が湧くかの樣である。水量の變化少しといふ黑部川も流石今の渴水期には水引いて吊橋の先から此方泊場の近く迄相當廣い磧になつてゐる。(吊橋の長さは凡二十五間あるだらうとの事)。谷奥は流二町程で右折して右岸の山足森の綠に閉ざれ、水は其蔭から雀躍して行進して來る。更に東谷落合に立てば、支流は恰かも突き當りの崖から湧くもの〻如く、見えぬ瀑場から餘勢を以て濺々と岩間を走り、最後に平たい岩の上を滑り又は其横手から本流に廣がり注いでゐる。其行先本流の下は又堆石と岩鼻の優しげな組合わせをなす間を、色は静かに深み滔々と流れて行く。先づ居ながらにして見る川の折れ曲り、落合の落付、然も力を臟して愼み勝ちな、森林と空と境する、奇は無きも飽かぬ姿なのである。

そして自然の技巧は此落合に理想的の溫泉を加へて呉れたのである。其は日電天幕場の上手岩間から湧くもの、二條あつて炊事用は攝氏凡六十度、入浴用は五十七八度（共に二十八日早朝の測定)、湯量は相当豊富なもので、質は硫黄氣を極微含む殆ど單純泉に近いもの、立派な風呂桶を二つも備へて、人々は朝な夕な汗を落し暖まつて勞役を忘れる事が出來る。

東谷落合の溫泉。其によつて全く思ひがけなき仙境を得たのであつた。我々は私かに測量天幕の代りに感じのよい木小屋と、山谷の放浪者のみの生活を想つたのであつた。秋、紅葉たけなはの頃、ざくりざくりと霜を踏んで谷の上下いづれかの道から、此湯場を尋ねたら如何に心地よい事であらう。又、此溫泉はアゾハラなどとは違つて水に浸る憂ひはないので、今後、水電事業の根據地たるのみならず、其歩道を利用して兩岸の山々への登攀の足溜り、休息地となるべき運命を有してゐる樣に思ふ。

三　作郎越

（東谷落合より棒小屋澤落合まで）

八月二十八日。午前四時半眼がさめると本流は流石に水聲高く、暗がりの空氣は冷たかつた。今日は棒小屋の泊場迄成るべく早く行つて、それから先道のない我々の本舞臺に入る所の樣子を偵察して置く豫程なので、私は提燈をさげて人夫達を起しに行つた。空は殘ンの星また〻いて、今や白み行く。天氣の續くのが何よりの仕合せで、風呂につかりながら私は全く安心し切つて居た。

朝飯も御馳走になつて、七時二十五分厚く禮を述べ、愈々最後の足溜りを去つた。吊橋の袂から右岸作郎（サク）越（ゴエ）の歩道は上り始める。作郎とは前記音澤村の案内の一人の名前を取つたものである。少し登れば本谷は左岸仙人山の側は壁屹立し始め、漸く峻嚴な地勢となつて來た。然し谷の幅は比較的細く、水も今は乏しくて大岩の轉々累積するのを認める。廊下の裾は多くは断ち切れて、左岸の克明に川傳ひし難い事を示す。兎に角東谷落合を境界として玆にも黑部川の景觀は上下に區別する事が出來るやうである。そして其上流の陣容は主として劒澤を挟んで下廊下の怪物黑部別山と相對する仙人山西面の形作る事を知るのである。

道は次第にくの字を描いて高みへ高みへと登つて行く。思ふにましてよい道で、かの數年前始めて古河の測量隊によつて作られた樣な俄か道とは物が違ふ。棒小屋の泊場迄で大約二萬圓を費やしたといふのだから、今度の水路測量の規模の雄大なのには感心させられる。それ丈、彼の日道なき密林をへづり其夜の野營の水さへも心許なかつた大町よりの旅とは、似もつかぬ今日の山旅となつて居るのだ。

八時十分、左手森中の小尾根に達する。此付近は私の足跡が六星霜を經て思出深い境地なのである。とあるクロベの下に「作郎越」と記した一の石標が見出された。恰かも奥仙人澤の直前に當り、黑部谷の上流は左岸仙人山側の崖、木は生えたれど心ゆくばかり直なるに對して右岸は稍〻なせに見え、其先に棒小屋澤とおぼしき割れ目と峭壁が讀まれた。本流の磧は相變らず輝く谷に見えたが、此前の豪石なる流勢は見られなかつた。只私共は流に覗く壁が高く七十度を越えて益〻直立式となるのを認めたのである。又、谷の奥左手

に偏り突兀として風雨に背き、はむかへるが如き赤澤岳西尾根が現れてゐた。二つの尖峰は特に山の子の神經系をかき亂した。此は大正八年の行にはついぞ氣付かざりし景である。黑部別山の筋骨隆々たる相貌も僅か我眼に觸れてゐる。

私共はなほ行手に二つの自然ならざる物を認めた。一つは棒小屋澤迄の間にある草場を東信電氣の道が電光形に下つて來て居るものであつた。他の一つは棒小屋澤左岸の遙か上（鳴澤續きの山？）に一つの旗が閃めいてゐるものであつた。其は恐らく測量の爲にであらう。双眼鏡を互に渡し合つて其旗の存在をたしかめる仕事に私達は餘程時を過した。

二十五分の後又道を進む。尾根歩きが始まる。一所、赤澤岳西尾根が馬鹿に際立つて見える場所がある。「猫の耳」とたとへた上部の鎌のやうな鋭峯が殊に私達の好奇心に滿足を與へる。それより尾根の右について上つて行く。黑部別山の壁が見えたり、本流の明るい水と岩の群りを覗いたり、又遠く岩小屋澤岳の高い尾根を仰いだりした。然し何といつても全く骨其物の樣な黑部別山の寄りかゝつた樣な突起の割れ目と岩壁は凄いものだつた。

此の小尾根を衝き上つて半時程の間には、高みとはかけはなれ、一の草生水無しの涸澤を越して南走するに至つた。大まかに斷落した黑部別山、其北峯が見えて來る。之に對する仙人山も凄い形相だが、ちと神經質的な表情を浮べてゐる。栂林の下にて休み、セロ奏づるが如き親しみある大谷の水音に耳傾けては、去りし日行く日の山行く我心の微笑を送る。ふと其の溶くるがの心持は木の間より見る切れ切れの赤澤岳の姿に突沸する。

平らかに歩道は續いた。又涸澤を渡つて、峽谷の奥に東澤乘越の赤ガレや雪渓を望んだ。眼下本流の廊下は早直壁をなして居る。進んで赤澤岳の側こそ隱れたれ、遙か黑岳、日本北アルプス中央の雪の殿堂を仰ぎ見ては、黑部川といふものが如何に直流的な削流をなして居るかと納得するのである。やがて稍々大きい石の涸谷に來た。此は先年私の一行が下つた澤で、私共はこの餘程下より本流間際迄綱を使つて下つて行つたものであつた。彼の時は囊中の物を探るが如き期待と不安とがあつた。今は翠緑を分けて足自ら歩み速め、間もなく棒小屋の泊場へ着かうとしてゐるのである。道こそは有り難い。けれど此も可成り上を通つて居るので、此前私の見た谷の景觀は眼に入つて來なかつた。殊に私がたしかめたく思つて居た、川中の島の樣になつた山脚の瘤と其附近のとろりとした碧い清潭のうねりは、終に見過してしまつた。

涸谷からは一段と凉しい緑林の内を行き、やがて梯子道の下りとなつて、高度は急に減じて來る。其小尾根道から棒小屋澤泊場附近、荒削りの岩間と流水とが視界に入つて來た。一休みの後道のよきに任せて走る如く下つて行く。此邊からはたしかに元の古河測量の道を利用したらしい。作郎越の尾根から注意した分れ道（東信道）は其邊に合してゐた。棒小屋澤下部は落口の上右岸の支流迄惡く、黑部本谷は又崩落しさうな崖があるので、此迄迂回するのは或は止むを得なかつた事であつたらう。分岐點から棒小屋の泊場迄はぢきであつた。下りで凡十分位であつたかと思ふ。

泊場着午前十時三十五分。下りで汗をかいてうだつた所へ、夏の陽は又明るい谷内をかつと照したので、私達は愴惶として其處に建つた二棟の小屋の内に別れて入り、脚を投げ出して、人夫に持つて來てもらつた本流右岸に湧く清水に喉をうるほした。私のリユックサックからはレモンの實が取り出され、天下一品のレモン水が杯を重ねられた。其後ののびのびとした午睡は、又必要な事であつた。

此泊場は此前私の泊つた場所と同一である。附近の動かぬ自然には變りない樣だが、渓水は著しく減じて心の狂ふ樣な美感には擊たれないが、河中に岩が幾つも現はれて、却つて奇景を作つてゐる。

小屋前の附近の丸岩の下から對岸へ上下二條のワイヤアが張つてある。此は日本電力のもので、前に古河の架けたも少し上流のワイヤアは取り去られてゐる事が後で分つた。

午後一時、年上の人夫二人を野營の支度に殘して、他の九人は空身になつて落合の樣子を探りに出かけた。磧へ下りて後は道らしい道もない。磧は相變らず小廣くなつてゐるが、水の引いたせゐか、何處か變つた樣に見える。左方さゝやかな崖澤によつてやはり殘雪がころがつてゐる。其附近から湧く水は冷やかで清冽だ。

磧の中に「距愛本道標十一里十町」と記されてある。

先へ進めば崖際水をびちやびちや渡つて巨岩の壘壁を乗り越え、右岸崩落せんとする崖下の棚迄、一つの山脚を越える。此邊は何だか前よりも狀態がよくなつて歩き易い。少し行けば流れはもう凄まじい早淵となつて、人は岸の岩間をへづる様になる。以前はワイヤアが張られてあつたが、今度は其便はない。川に向つて下向きの棚で、滑らかに洗はれた岩面は只、摩擦のみが手頼りである。先頭の山本は單身斜に攀ぢて三角形の傾いた棚上に立ちロープを垂らす。其一端は其處に打ちこまれたボールトに結びつける。すると長身の青木長松と頑健な宮本岩次郎が後を追つて、其まゝ青木は長身を利用して足場を探り三四間先の安全な棚場へ達し、宮本と協力してロープを斜に張り渡す。長次郎は後から私達を看守つて呉れる。何のと私は山本の眞似をしてロープに頼らず上の點に攀ぢたが、狹いおほひかぶさる様な急壁で指先だけの手懸りでは心許なく、終に山本の助けを借りた。來てみると惡い所で、下の深い藍色の奔湍を見ると、自ら緊張し過ぎて體の平衡が危くなる。然し兎に角張られたロープに從つて行けば安全である。最後に山本がやつて來る。ロープは歸りがあるのでかけ放しにして置く。皆揃ふと棚場を歩いて、第二の難所に來る。此邊は川幅がぐつと迫つて來て、もう眼の先に落合の見える所だ。但、落合の壯觀は川岸からは全然分らない。此前私は靜馬達と共に此岩場迄來て行きつまつてしまつた。勿論水量も多く、今よりらくでなかつた。道具立を充分にしなかつた其時には勿論不可能の事であつた。

第二の難所は水際から高さ三間ばかりのしかゝつた岩壁の頭をへつって上下するのであつた。然し其下りめには一番のつぼの青木長松でさへやつと足の届いた、つるつるの行手とは反對の方に傾いた、丸みのある岩面がある。此處は全く惡場で、後下廊下の核心へ行つても見ない程の気味の惡い所であつた。私達三人はロープがあつても單獨では行けない所であつた。漸く幅廣い棚に達してほつとしながら、白い花崗岩の壁をへづる友を見返り、水涸れても恐しい一團の水力の強さに心奪はれ、世にも珍しい光景と思つた。對岸の壁は順層で、遙かに歩きよささうに思へる。壁上の緑の林、日中の谷は今し燃え立ち輝いた盛りである。行手間近かの棒小屋澤右岸の壁（實は其一つ先の本流の壁であつた）は傾斜七十度、其對岸は六十六度を算し、全くの窮谷になつてゐる。

私達はそれから水邊に下りて傳ひ、壁は直立して激流となつた所で、少し川中へ轉石を踏んで徒渉した。水量は膝程であるが、中々強く、人夫に杖又は手を引かれて渡つた所もあつた。其先は又網目の早い瀞になつて谷は更に蹙まり、滑らかにそげた右岸の岸壁に對して、皎々と光る角張つた岩陰から、劒澤の落ちるとおぼしく、押し出される本流の水は一きは目立つて白沫を吹いてゐる。偖て流の縁は通れないが、其處の手前から岸は巨岩を越えてすぐに藪中を楽に登つて行かれる。そして水面から凡二十米上の突端に達した、時に二時三十分。

其時一と眼見てあつと驚いた。驚いて忽ち眞美を悟つた。この喜ばしい壯絶の感じは恐らく私どもの一生忘れ得ないものであらう。即ち足下の裂け目が棒小屋澤の幽谷だつたのである。そして棒小屋澤と劒澤の落口は完全に一致して向ひ合つてゐるではないか。

嘗て私のさまよひにも思つた。この行でも上流に向つて兩岸の緊張した山脚を眺めて、兩落合は地形圖の圖示程違つて居ないにしても、薄匁の様な岩根を介在して間近かにはなつてゐるだらうと想定した。然し實際には其以上で、斯くの如き珍しい、黑部十字街が開かれてゐたのである。私達は棒小屋澤の割れ目を一つ先へ多く勘定してゐたのである。

劒澤の冷水は一つの大きなカマから幅一丈ばかりの小瀑となつて本流に吐き出されてゐる。此突端からはカマは三分の二程しか見えないが、沸騰する渦紋により瀑の存在は明かである。其縁の岸壁は實に壯麗な花崗岩の特徵を表はして、美しい幾何學的の線が走り、其局面が如何にも立派だ。瀑上は岩盤の傾斜稍鈍く、思ひの外木立が深い。恐らく其霊泉は樋の如く瀉下してゐるのであらうと思はれる。

棒小屋澤は又三段の瀑場になつてゐる。左上手折れ曲りより飛び出て落つる瀑は三間程、此が第一で、次に電光的に屈曲せる三間餘の瀑となり、第三に二間ばかりの斜の瀑となつてゐる。カマは小さい、四間餘。

劒澤に比較して何となく壓迫される様な暗い影の射す吊懸谷だ。然し此瀑場の上は更に更に幾段かの人間を近付けぬ瀑の咆哮が存する事を知つた私は、棒小屋澤の流に一しほ感慨無量なのであつた。下から二番目の瀑上は細流をなして平らかに流れ、磧さへ生じて通過し得る可能性が見えるのである。棒小屋澤の通過は極く上か、極く下かでなければ無理だらうと推定した事は此で當つてゐる。

更に又黒部本流を眺むれば、二町半ばかり上手、右岸に墜石の磧があつて、流は之を迂回して現れ來り、廊下は三四の節を有して、下流より一層華麗な勝地を形作つてゐる。もう眼に見えて落差がある、二つの支流の落合は洞門の如く縮まり沸き立つてゐる。川中に現るゝ巨石、岸の削壁、陽の明るさ異るに從ひ變幻極まりなき水の色、燃ゑ立ち深み行く岸上の樹林、そして全體に渡つて峯頭の如き透明な光彩。

かくする間に長次郎は早本心に歸つて病を忘れたるかの如く、ロープを用ひ、棒小屋へ或は本流の岸へ、明日の下調べに出かけて行く、其結果今立つ突端の右手本流の岸に下つて架橋した方がいいだらうといふ。落合の上流に就ては何ともいはないが、あの遂石の磧迄壁傳ひは中々難事であらうと思はれる。私どもは我を忘れて或は凝視し、或はレンズを覗き、屢々讃嘆の聲を擧げて只々谷に酔つてゐた。

黒部別山は又程近く其直壁を峙だて、私どもの心をひきしめた。詳しく見れば剞劂された様な滑らかの棚があり、岩は赤味さして飽くまで硬かった。植物生育の最盛期を過ぎつゝある頃の事とて、樹木は八月初めよりも割合に下迄茂つてゐた。折しも頂よりの散光が射來る。縞目に谷の急壁は染まり、水はモザイクに變色する。壯年の谿谷は水今なほ怒り狂つて千尋の底まで巖を劈き割らんとしてゐた。

略々景を見つくし、惡場の様子も探つたので、三時二十分歸途についた。徒歩もへつりも慣れで心安く行つたが、第二（行きの）の惡場は避けて下から架橋して越えた。架橋の材料は行きに置いていつたものだが勿論充分な事は出來ないので、長次郎ともう一人が先づ危ない所をへつって行き、丸太の一端にロープをからげて下げ、踏ん張つた。私達は水面から僅々三尺ばかりの所をかうして渡してもらつたが、人間の支柱は始めてゞ、人夫を信用してゐるものゝ、不安でならなかつた。然し越中の人夫が水を良く知り、岩をよく選び、惡場にあつても動じずに迅速に作業する様を見て、誠に頼もしく思つた。

へつりが終つてから未だ早いので、人夫の一人（青木長松）は釣絲を垂らし始めた。蒼黒い淵に走る魚影は少くないがどうしたものか絲ばかり切られてしまつてゐる。崩れ岩の山脚を越える手前で、私は川中に突き出た大岩の上に攀ぢ登つて、又谷景色に現をぬかす。岩の南端淺瀬の所は趣が奥深い。試みに此處から兩岸の仰角を測ると、右岸五十六度、左岸四十度と出る。流石に深い V 字狀谷だ。此岩は日本電力の測量にも利用したと見えてベンチマーク（B・M）が打つてあつた。

四時半頃泊場に歸る。六人用の天幕が一つ張つてある。人夫達は大きい方の小屋に寢るのだといふ。小屋は兩方が開け放しで夜になつたら寒さうだ。さうかうする内に黒部別山の壁に夕雲がかゝつて上空は色付いて來る。黄昏どきの其峭壁は見れば見る程壯烈だ。其を眺めつゝ今日よりは眞に山奥らしき宿りが始められてゐる。夕食後のウヰスキー、小倉羊羹、未知の峻嶮に入るに先だつての味覺の滿足は又言ふに言われぬ樂しきものである。

私どもは早寢すべきを、月見にとて岩の縁に腰かけて谷あひの夜景を樂しんだ。奔流青白く跳び、山の端の針葉樹轟々として蒼黒き渓山の眺め、静けくも妖麗の月光なるかな。いつとなく三人は黙し、世を離れた岩上にて恍惚として佇むのみである。漸くに谷内が黒くなつた九時、天幕に歸り、好晴を感謝しつゝ眼を閉ぢた。

四　長次郎越

（棒小屋澤落合の通過）

八月二十九日。今日こそ無人境に入る日である。三時半頃稍寒く眼がさめたので私は抜け出でて火を焚いた。五時二十分頃から起き出す。気溫十度。磧に下りて洗面する、其水溫九度。兎に角快晴がうれしい。長次郎は落合の上流の赤ぬけは通れないから其上を廻る豫定だといつた。彼の計畫に間違ひはなく、然も日を

經るに從ひ元氣になつて行くのは流石に雄々しき山人である。

七時三十分出發、昨日第一回にロープを使つた所迄十七分を要す。磧から人夫の一人は丸太を一本かついで行く。惡場にさしかゝると皆荷は置いて、先づ精悍な山本が先頭で一番高みに登り、他の人夫は順に配置されて、荷物から運び渡す。それから私達だ。此岩壁は水面よりの高さ約十二米、へつる場所は下部水面上三米の所より始まる。今日は少し行き方を變へて餘り上下はしない。八米ばかりの長さを有する岩角のオーヴァーハングを下廻りに行く所が惡いので、橋をかける。山本は最後まで高みに殘り、ロープをはづして單身下りて來る。かくて作業と通過全部終る迄四十分かゝつた。それから徒渉を一寸して十分ばかりで第二の惡場に來る。此處は宮本とも一人が荷を担いだまゝ通過してしまふ。勿論ロープは昨日から張つたまゝにしてある。それから青木助次郎が中に立つて荷の中次をする。中次は第一の場所よりも遙かに惡いが、人夫は巧みに聯絡を保つて料理する。一方最後の長次郎はロープをしかと握つて水邊に近付き、誰か落ちた時の用意に身構へてゐる。此岩壁にロープを張つた高さは水面上凡六米、長さは十五米ばかり（但ロープは八十尺のものを使ふ）である。昨日の歸りに下を通つた所は逆には出來ないので、再びあの具合の惡い丸いつるつるの岩を越えて行く。下に落ちれば助からぬ流れがあり、渦まき返つて滔々と鳴る音を聞くと、私達は一層緊張した。此は全く峯の岩登りには缺けてゐる危險である。然も技術上あちらの岩登り屋が最も困難としてゐる slab 上の横斷なのだ。身體の重い冠さんには上と下と三人がゝりで愼重に足場を定めた。最後に長次郎は山本の補助をかり、ダブルロープで下りて來た。第二作業と通過は三十分にして終つた（局部的にいふならば此のへつりは平小屋迄の全行程中最惡なるものであつた）。

すでに九時十分。夏の陽はいま谷に輝く。黑部別山はぬくもつて直壁は赤黑くなり始めた。蟬が無心に鳴く。對岸には黃色いキンレイクワ、赤いアザミの類、白い忍冬科植物の花などが咲いてゐる。岩へづりをやつた後には瑣々たる花にも優しさを感じる。小憩。其次の水勢激しい徒渉は荷があるので足の運びが不安で緊張し切つて。それから昨日の道を突端に登る。時に九時半。くぼみに荷を置き、人夫は殘らず一組になつて弁當とロープを持ち、棒小屋澤に下り、澤の對岸に攀ぢて先を見に行く（昨日長次郎は本流の水分に下りようといつたが其はやはりむつかしい事が分つた）。私達三人は萬事を彼等に任せて長い事其處で待つ。

二三間下つた所が棒小屋澤の觀瀑には最もいゝ。本流は午前の陽を受け返して、昨日よりも明るく感じる。何度見ても美しい力のこもつた景色だ。何處から來たか赤トンボが澤山飛んでゐる。スイスイと上流をさし、劒澤のカマの上を舞ひ、又は空高く登つて気流に乘じてゐる。私は恐しい境地なる事をも忘れて、其銀色の羽の行末を眼で追ひ求めた。ふと氣が付くとぢりぢりと額は陽に煎られてゐた。暑いので藪影に行き、寫眞撮りに何處か見えなくなつた連れをも呼ばず、とろとろと眠りかゝる。

暫く立つて私は二人を促し、高みの方へ登つて劒澤の上部を見通さうと企てた。森林のおほふ此の山の端にも隱れ岩は到る處に行く事を阻んだ。棒小屋右岸の尾根を凡八十米ばかり攀ぢる。劒澤は最下のカマから上の可成り廣い所が現れた。嘗て望んだ瀑と釜の連續せる峻急にして燦然たる壯觀は更に北方に寄らなければ見えない。仙人山側の細かに條(すじ)割れのいつた崖だけが見えるに過ぎない。其は劒澤の探査第一着に私が數年來下行して見やうと思つてゐる澤の右岸である。此の見え方より察するに、劒澤は上流池ノ平分岐點なる岩小屋から下敷町にして本流近く迄（落口より三四町の所）一直線に飛下し、其れより落口に向つて右折し、稍平らかな岩盤に到つて左折し瀉下して、再び本流の上流に向つて瀑となり落合のカマとなるものである。故に地形圖の澤の方向は大體に於て正しいものと認めるが、落合といふものは地形を表はすに重要であるから、是非測圖の修正を施すべきである。但、此は決して測量部の仕事を非難すべき事にはならないので、黑部峽谷の如き峻嚴なる深刻なる地形では、見通しだけでは水線の記號を正しく描く事は先づ不可能であると思ふ。

下り道、棒小屋澤の瀑場の上の一部分を下瞰した所に乘越せる場所があつて、測量隊が手を付けた様な形跡がある。下流で日本電力の人から聞いた事によれば、棒小屋澤の架橋を試みた事は事實で、只事業の進捗上其よりも東谷以下の歩道を完成する事が緊急だつたので中止したさうである。突端に歸つて來た頃には、

私達の人夫は本流の壁の方へ木の茂みを分けて、すでに消えてしまつてゐた。私は一人人夫の通つた跡に從つて棒小屋澤の水邊に下りた。其處の下り目には昨日今日の新しさではない伐跡がある。崖はさまで急ならず、頼りになる木があるので、其を手繰つて先づ容易に下りる事が出來る。高距凡五間。下り立つた所には小崖に囲まれ、流れに洗はれた一坪半ばかりの曲玉形の磧がある。落口から十五間ばかり奥。同じく高距は六間位かと思はれる。丁度下から數へて第二の瀑上の平で、對岸まであはひ五間ばかり、下端のタルのふちは成程よい渡り場である。然し水勢は相當猛烈で一人では徒渉に不安がある。本流の方を見やると棒小屋澤落口上の早瀬を通じて劒澤第一瀑と釜及び落口のタルが見える。岩壁の襞は錯綜し、釜の縁の一部の白色を除いて他は鐵赤色を帯び、實にすばらしい、渓谷支流と十字路をなすさへ稀なるに、斯くの如き力強き燦爛たる落合が他にあらうか。餘りの荘美に獨占も惜しく、上に登つて二人を呼び、弁當を持つて再び棒小屋澤の小河原に來り、第三瀑の飛沫を吸ひながら中食を開く。

午前中は此處は日影で凉し過ぎた。十二時頃から陽が洩れ始めて身體は暖まつて來る。水音は子守唄の如く思ひ、うたゝねをする者さへある。ふと見れば陽の昇り加減で、劒澤の釜は先の青味は失せて、草色の乳狀に變つてゐる。黑部本流の止むなき水の面も色薄く、今にも大氣との境は消ゑさうに思はれる。人夫達の登つて行つた對岸にはシモツケの紅花が飾られてゐる。そして私はいつしかぼんやりと澤の水の迅く往き動かぬ波の如き、タルの頭をみつめてゐた。

やがての事に再び上の休場に歸つて、輝く陽光の下に山襞の陰影を生じた、深み勝る黑部別山の姿に見入つた。山は動くかの樣に生氣を發してゐる。山肌は幾重にも平行した割れ目があるが、尾根は皆切れて到底登り難い。中でも中央より上に大きな岩塔が屹立してゐるのは凄絶を超絶して世外の美術である。一時頃バロメーターは　六六四粍、八四〇米を示してゐた。三度安逸な睡眠に陥る。耳朶を撃つた峡の水聲、瀑の響は重く遠くなつて行く。上流の壁と水が幻の如く頭の中を通り過ぎる。

午後一時頃叫聲がするので、起きてまぶしい眼に小手翳し、對岸を見る、軈て人夫はしづしづと下つて來る。偵察の結果は如何。程隔つて語り合うべくもないが、其内に澤近い惡場を山本から先に四肢を張つて巧みに過ぎた。二時十分前、ひょっこりと山本一人丈が私達の傍に抜け出て來た。餘り長かつたので心配しながら「どうだ」と聞くと、此れから見える上流の磧の少し先にうまく下りられる、一行は其處で野營地をも確かめて來たといふ。越える所は此れから見える岩の間の草生えた急場から倒れた枯木を傳ひ、棒小屋澤左岸突端クロベにサルオガセの豊富な小尾根を行つて、大きな立枯木の後から本流の方へ搦む樣である。山本は私達と共に在つた殘餘のロープを持ち、再び對岸に登つて倒枯木の上に投げかけ、他の人夫と協力して惡場の上に張り渡す。そして他の人夫は之を傳つて棒小屋澤を越え、私達の方へ揃つて帰つて來た。

彼等のよく我々の目的を知り、己を忘れて冒險的な探査に奮闘して呉れた心根を思へば、私は其時張り詰めてゐた感謝の念が烈しくこみ上げて來て、知らず涙が溢れ落ちた。三人互に握手して「有難い」と言つた聲は、少くとも若き日の歡喜に震えて響いたのであつた。長次郎も微笑を浮べて私達に安心の言葉を與へた。曰く、之を行つて下りはらくである、そして屈曲の先は磧が下廊下（狭義）の口迄續いてゐるといふ。（尤も此は長次郎の癖で、至極楽觀的な口調なのであつた。）

二時十分、私共は荷を背負つて勇躍上流に向つた。棒小屋澤の流は八尺程あるが、其には架橋されてらくに越える。越えた所の小さな中洲から劒澤落口の澤と第二のタルのへこみが見える。中洲から一寸徒渉して二條目の瀑上を過ぎる。それから岸に攀ぢて行くにはロープの助けがあるので、行程が捗る。大して急ではないが、倒枯木下の所は草の兀場と一丈ばかりの岸壁で、大分惡い。かくて二時三十五分に全部の人は上の大枯れ木の立つた岩場に集まつて來た。本流間近なので、下流の谷と劒澤とがよく見える。谷に落ちこむ澤は凄まじい。然し其上は大きなタルだと思つてゐたのがさうではなくて、日光龍頭瀧式の瀉下する急瀬で、暫く左右に屈折し終に岩蔭木蔭に蔭れる樣は手に取る如く分かる。落口の釜は右側案外に丸からずして、下流に向つて長くなつてゐる。落口の水勢は劒澤よりも棒小屋澤の方が豪勢に見える。

それから私達は棒小屋澤右岸の突端より少し高めの所を本流に添うて通つて行く。山は骨が現れて急なの

で、藪は案外にない。本流の半以上を眺めて行かれる。其上、小藪のまばらに生えた頗る急なくぼみを百尺の新しいロープを全部使つて登つて行つた。此處はロープがなくともよかつたが、安全の為の、英人の所謂ハンドレイルに使つた。此上に又六十尺のロープを張る。先頭は白川と青木長松で、身軽に操作して行く。此上りは磧に下りる迄で一番悪い場所で、一所など傾斜は七十度に近く、崩れ易い石と原土から成つてゐた。それから先は大した事はない。三時、私達は乗越に來た。垂直百米餘の登りで、乗越といつても別に鞍部ではない。稍平らかな黒木の下の休場なのである。十分にして最後の長次郎がやつて來る。記念の為其處の立木に「長次郎越」なる新稱を年月日と共に刻む。彼の見通しと指揮によつて我々の一行が開いた此の道筋は、既に記録された劒の雪渓、平ノ小屋より下方の黒部川の新道と共に、彼の名を冠しても不可はないであらう。

一休みの後、少し上り気味に三間乃至五間へつつてより、下り気味に長い露岩の下を劒澤を後にして行く。此はシヽの歩いた道跡であるといふ。成程シヽともあらう者はうまい所を歩いてゐる。棚續きの下りである。次に藪へ入つて行く。對岸の細く高い瀑の見える所から傾斜六十度ばかりの小部分をロープで吊り下り、其少し下から崖際の木に六十尺のロープを結んで簡単に下る。も早水は近い。暫く林の内を猿の如く攀ぢ下れば、傾斜緩やかとなつて、俄然シヽウドやオホイタドリの草藪となる。但木よりも草の傾斜の方が注意を要する。漸くに其下端から南に進み、黒岩から本流の右岸棚の上に下るを得た。此處は落合から望まれた磧の二十間ばかり上である。一同水邊に揃つたのは三時四十分であつた。即ち落合から一時間半かゝつた事になる。

落合を過ぎて黒部別山の領域になると風物は總じて雄大で典雅なるものと一變して來る。水量は落合下に比して少いが、兩岸の裸岩の壁は高聳し始め、落差明かに増して、足下近くにも一つのタルさへある。谷間は下流よりも大きく、斜陽になほ明るく頗る清新の感を與へる。豊滿な紺白の激流、其上(かみ)には右手黒部別山中央部の大障壁が高く屏風をめぐらし、其下方には黒部別山澤と間違へ勝ちな大割れの崖谷と、思ひ切つて胸をそらした突端のピラミッドが現れてゐる。其のあたりこそ下廊下の中心であらう。今や我が足は嘗て幾日の夢なりし無有境にしかと立つた事を意識した。

技術的に見て私どもの喜んだのは、此の屈曲より上(かみ)は右岸の岩層が大體に於て豫想通りの事であつた。利用し得る岩棚の面は其附近で strike N6－9° W, dip NS54－58° をして居て、少しの偏差はあるとしても、棒小屋澤落合下方と反し所謂順層（kopfseite）なのである。（花崗岩類は塊狀の深造岩であるが、大體は節理面に矢張一定の規矩がある様に思ふ。）左岸は之に反し、殊に黒部別山式に岩の裂罅が直立に近く立ち始めてゐる。岩山にしるき崖澤も美事に生じてゐる。たまたま其岩面が曲り緩やかなるものも明かに逆層（rucksoite）なる事を認める。

野營地には此の大きな岩棚より一段下りて砂地より淺瀬を行き、本流屈曲部の磧を稍下つた右手にある滑らかな崖際の斜に長いオーヴアーハングを利用し、人夫達は巧妙にピトンとロープを用ひて上段と下段とに、天幕をおほひかぶせ、頗る變つた陣屋を作り上げた。火は磧に焚く。磧の上部には黒い斑紋のある岩がすはつてゐる。それから下手流によつて磧は谷の中程迄出てゐる。私達は清流に口を漱ぎ、頭を洗つて水際の大岩より谷の上下を見渡す。

先づ棒小屋澤落合右岸の突端、私どもの長く居た休場が間近かに見える。黒部川は二段のタルから立派な岩の關門を過ぎて、幅廣く丸く兩岸を押し、沸々とたぎつて落合にせばまつて行く。岩壁は白と鐵赤と黒、灰のモザイクに飾られてゐるが、皆光は吸収するものより反射する方が多い。落合への眺めは全く下流よりの夫れとは形も距離も違つて見える。此は谿谷の形狀と觀測者の立脚點によつて異る事は勿論であらうが、傾斜面の上よりと下よりとの感じの差が錯覺的に異る爲ではあるまいか。私は谷の上から見た方が距離は短縮した様に感じた。兎に角下流の眺めは眞に絶景である。棒小屋澤落口の白瀑は明かに指され、劒澤の釜を包む特徴ある岩塊も鮮やかであつた。

軈て焚火をかこんで樂しい夕食が始まる。椎茸と玉葱を入れた味噌汁は殊にうまい。そして其間、今日も亦夕雲がしづしづと谷に下りて來る。私達は最上段の寢床に引き上げて、其入口にさゝやかな火を焚き、ブ

トを防ぐ、其光景は一段と印象的な原始的感銘を與へる。人夫の一人が負傷したので、朝鮮人参エキスを塗つてやる。此の薬には私も昨日から向脛が厄介になつてゐる。手當済んで湯を沸かし、又山にはちと過ぎたホットレモンを乾杯する。

月は又峯を離れた。三人は其の青白い光を慕ふて磧に出た。奔る瀧は今珠玉の如く輝く。とぶ水は白うして稍うす青み、うちひそむ早瀬はえも言はれぬ銀色に照つてゐる。高き崖は浮いて仙骨稜々とし、右岸の森の梢はうごめくが如く深い趣を表はして、今や天地嫦娥の遊歩に好むがまゝの姿態をもつて侍るかの如く思はれる。ふと夢遊病者の如く水邊に歩み、手をひやゝかな川床迄いつまでもひたして、私は限りなき月夜の思ひを親しんだ。背にする岩はひえびえと、奏づる水の調べにいよいよ、眼は冴えて來る。終に峡の月は黒部別山に隠れた。廊下の半ば上は光照れるに名殘惜しみ、九時四十分に寢床に歸る。下廊下の第一夜は斯くも祝福された。（午後十時過、気溫十八度。）

五　下廊下の核心へ

八月三十日。未明の星空は下廊下の行が幸ひされてゐる事を物語つた。一夜の宿りの禮を岸壁に厚く述べて、八時に十分前なる頃、朝暾に向つて川を溯り始めた。昨日下りた廣い岩棚の續きを進むと、タルの上に青味を帯びた美しい平滑の壁がある。其處から今日は黒部別山澤對岸の稍下手なる赤抜けの山肌が見える事に気付く。朝の谷水はほがらかに流れる。

平岩から一寸下つてより傾斜五十度ばかりの面を斜に三四間登る。長次郎はロープを垂らして呉れたが、岩の性狀からいつても極めて安全な足場手懸りがあるので、不用な位だ。何となく岩壁は丸味を減じて來た。タルの上流は又落差を増して一つも女性的な流紋は作らない。右岸のアンデサイトを思はせる様な赤壁を二度目のロープで三十五米ばかり攀ぢ登る。傾斜五十五度位。此處は技術的にいへば綱で結びあつて各人隔時登行をすべきである。下をへつっても行かれさうだが、一ヶ所足の運びのむつかしい所が淵の上にある。上つてからへつるとすぐに灌木の中を行く様になる。私はふとクマリン（香料の一種）の匂を感ずる。軈てヤマヨモギや花の凋んだカメバヒキオコシ等の草の生えた平に出る。平の上には生々しい赤壁が直斷されて立つて居る。此の草の平を一町ばかり進んで行く時、私は草中には角のある石が地をおほつてゐるのを見た。皆赤壁よりの岩屑（デブリー）で、之で見ても黒部川が生を營んで、盛に削磨し、兩岸又之に伴つて變化して行く事が分明である。

私達は草場の中頃、川縁を稍離れた岩屑道の丌場で休んだ。振り返ると嵯峨たる仙人山東のヅコ（頭）も見える。まとまつた美しい景色だ。對岸は矢張り逆層で、潺湲たる水注ぐ小澤が多い、灌木も相當茂つてゐる。其側上空の黒部別山支峰の亂峰は鳶色に光つて、おごそかな有様を示す。此の平は丌場の所で二十度前後の傾きをなして可成り廣く、下廊下の域内としては珍しい所だ。私は重荷となるのを承知で岩片を採集したり、人夫にさがさしたりしたので、二十分ばかりわけなくたつてしまつた。

九時近く、又草原を分けて、咲き殘つたツリガネニンジンやカハラハゝコに眼を觸れて行く。黒部川は此の平の臺を小廻りして流れてゐる。見やる對岸には長石のヴエインが太く入つてゐる。其は皆縦に入つてゐるので、恐らく其気脈又は基岩との境目から浸食作用が起つて裂開を生じ、末には其處に見る様な大小の崖谷が右岸よりも遙かに多く發達したものであらう。

草場の外れから木藪を少し下り、川岸の水から一間乃至三間の箇所を行く。別にむつかしいへつりではなく、美しい水の躍動や波紋を眺めつゝ歩ける。野營地からも見えた白くむき出しになつた黒部別山側の尖頂岩は真上に聳えてゐる。其岩峰から谷に下りてゐる崖谿は、質が脆い様で、常に破壊の營力は働けるものゝの如く、最下部には扇狀のタールスが發達してゐる。此も下流には餘り見なかつた地形だ。それから川の屈曲を曲ると私達は谷の奥、例の直立數百米なる赤丌附近の下廊下プロパーを望み始める。川は一寸開き、廊下らしい削立となつて來る。川幅も今までに比べると稍擴まつて、益々「明るき峡谷」の特徴を發揮して來る。

行先の川岸の岸壁は順層ながら稍丸味を帯びた赤味の壁で、流の大量は瀞となつて静かに押し合つてゐた。對岸の岩は平滑な八面體に割れてつるつるのものが多い。但、傾斜は今ゆく側の方が総體に強くなつてゐる。再びロープが取り出される。約五米攀ぢ登つて、對岸草の生えたタールスを望みながら、次で十五米ばかり斜に岩腰を下る。此は手懸り足場は小さいが矢張上向のしつかりしたものなので具合がいゝ。そして此場所は傾斜四十度以下の岩稜（アレト）の横面なのであつた。

これより一町ばかり平らな磧を歩む。磧には大小の墜石が散らばつてゐて、岩の間軟かき砂地には羚羊の足跡が續いて印せられてゐる。谷奥の左手には、先年冠さんが三角點から天氣の模様を見て下らうとせられた無名澤の割れ目と、其上の額の様になつた木深いが側腹嶮しい山の鼻が見えた。其處が實に下廊下の中心なのである。なほ又、下廊下の大觀を組立つるに最も役立つた黒部別山は、惡絶險絶なる地貌をあらはし、一大屏風の上には角塔、尖峰、乳頭等種々の岩塊の突起が數へ切れぬ程隠顕し、畳積して、誠に比類少き山なる事をうなづかしめる。立山、劒より展望の快を貪るの時、木深い低い平べつたい山の黒部別山の裏側（黒部側）が、劒、穂高さへ或は三舎を避くるていの複雑な地形、嶮峻な傾斜を有する事をよく想像し得るだらうか。後立山山脈の尾根からでさへ、恐らく其眞劒味は終に了知されないであらうと思ふ。

さつき見たタールスの次の澤にも草地があり、上は壁になつてゐる。壁の地は闊葉樹の細木が立てこんでゐる。磧はぢきに盡きて、九時三十分、其南端に來り、淙々の水聲に耳洗ひながら行手の通過如何にと片唾を呑んだ。此處で此日始めて考慮を要する長い惡場に遭遇したのである。谷は行先二町ばかり、川幅一杯に濁流が漲つて兩岸共に純粋なゆるみなき岩裾となり、殊に我々の行くべき右岸は傾斜平均七十六度位の、初めはオーヴアーハンギング気味の、金気の色出た岩壁なのである。黒部別山の高みは仰角四十度を示す。谷中、此方に近く大岩が横はり、其上手の水は白めきさはぐ急瀬より俄かに深く澱んでタルとなり、再び湧き立つて眞中へと疾走して行く。私達は其の力こもつた山水を今迄よりも更に美しとは思ふものゝ、如何に通らうかの思ひで双眼鏡を用ひ、岩襞をあれこれと探し求める。流の上には今高く無數のトンボがきらきらと舞つてゐる。

すでに長次郎は單身へツリを始めてゐて三分の一程行き、自信を抱いて歸つて來た。彼が流近き岩上に腰を下して上流を見つめる頃には、彼の指揮に從つて山本を先頭として殘らずの人夫はロープと共にピトンを携へて作業に行く。自ら人夫は二組に分れ、若い三人と宮本とは先に進んで惡場終局、川中へ大石の散乱した所へ出る。他は割合に近い所でピトンをうち、又橋を作るのである。ピトンをうつた惡場から大石の磧迄は岩稜の鼻が四つばかりある。其の二つ目迄若い組は戻つて來て、抱いた石を水中にどしどし投げ込む。十時十五分、作業終つて人夫が歸つて來る。日射しは暑く、昨日よりもたしかにすぐれた日本晴だ。人夫達は先づ荷物を置きに往復して、次にか弱い私達を渡して呉れる事になる。長次郎は一安堵して頭が病むと訴へる。彼に事なかれかしと祈る心を轉じて、黒部別山側の岩の割れ目に氣を付けて見ると、割れ目の線は少しく南に傾いて來てゐる。つまり岩石の節理面がさういふ傾きなので、從つて上方の尖峰や角塔はいづれも南方がより急に突き立つてゐる。凡俗を脱した其形相は寫すに筆なく、只「豪い」といふ言葉に盡きてしまふ。私共は待つ間の長さに、日影なる岩のほとりにてしばし氣持よく華胥の國に遊んだ。

三人の人夫が私共のリユックサックを取りに來て呉れたのは十一時十五分過であつた。一緒に直ちに出發。十間ばかり岩の壁を平らにへつり、其處にゐた一人の人夫に指されて川の縁を徒渉する。六間ばかりの距離であるが淺い。又岩をへつつて行くが、其は皆とげとげしてゐて順層である。之よりロープ、ピトンの場所である。ピトンは初め一本、次は三間ばかりの平滑な急斜した岩面で、其處に二本連續のピトンがうつてある。ピトンからピトンへは勿論ロープが連絡してある。初めの所は手懸りが充分なのでピトンは不用の様に思はれたが、次の部分は全く其の有難味を感ずる急場であつた。なほ第三のピトン一本をへてロープを頼りに下る。傾斜凡四十度の平壁。今度は川の縁を膝迄入つて渡る。其處は人夫が石を投げこんで淺くして呉れた鼻である。十間未満にして岩角を廻つたが、本流の疾走を身に感じて、水温以上にひやゝかな感覺が岩へづりよりも強く心をひきしめた。廻つた所は僅かばかり小石の磧になつてゐる。次で稍深い徒渉。以後流と

岸のすれすれの境を或はへつり、或は渡りかくて十間もすると登り易い岩角に來る。斜の棚を登つて最後の岩鼻を越しにかゝる。其鼻の下は恐しい迄に流が透明で深かつた。十二三間の間は上向きで凡十七八度の面を有する理想的の棚である。それから丸味はあるが幅廣の棚となり、之を歩いて十間ばかり進むと、川中に大石の轉々とした磧に着く。此日の大へつりは此で終つた。十一時四十五分。丁度このへつりに作業の準備し始めてから二時間餘を費した事になる。山人達は私達の荷を持ち、私達を助けながら、終にピトンをも外して越して來たには感謝と共に其のバランスとへつりの巧みさに驚嘆するの他はない。天晴れ、長次郎が選抜して來た丈あつて、誰一人として弱い者はなく、然も自ら分業し、互に呼応して沈着に動作する一の氣風は、昨日以来益々下廊下行にふさはしき、かぐはしきものに思はれて來た。

そして其勇者達は今や巨岩の傍にのびのびと憩ふのである。頭が痛いといひながら、一面頗る樂天家なる長次郎は、山人達に笑はれながらも釣れぬ岩魚釣りを始めてゐる。棒小屋澤劒澤落合附近からは人跡絶無でさぞかし夥しい漁獲だらうと思つてゐたにも拘らず、一作日から少しも釣れない。去年釣れたといふ竹次郎といふ名人がゐないからだらうなんて言はれたが、それにしてものつぽの青木が釣好きと見えて休息の度毎やつて見るが、どうも上らない。兎に角今年は不漁であつた。

この休場では火を焚いてお茶を沸かし、中食をゆつくりと味はつた。下流には仙人山の頭が三つ見え、其最東峰と二番目との間には兀岩の突起がある。足下の本流は魚影明らかにして優しげなタルと渦流から成つてゐる。岩は白色を帯びてゐる。對岸黒部別山側の崖は前に見た上部の色々の自然の彫刻は隠れてしまつて、最上の塔だけが可成り南に傾いて見えるばかり。其邊の山脈は今光と影との面白い對照だ。やがて真綿の散切目の様な雲が少しばかり湧いて來る。なほ左方上流へと眼を轉ずれば、左岸には、遙か下より頗る顕著だつた鋭三角の谷底より抜け上つた岩峯は、最早手近に迫つてゐる。黒部別山澤對岸あたりの廣い山は二つに打ち重つてゐる。其森林には黒木が多い。問題の赤兀は上部丈すらりと人を射てゐる。

川は上手、之から左に曲つてゐる。曲り角對岸の壁は長三角形をなし、其處丈滅茶々々に白い脈が入り乱れてゐる。晝間の光明で少し上の山の肌が燃えたつて來る。全くの裸岩ならず未だ草木が少からぬ此付近の景勝は、綜合性を好む人に嗜好せられるであらう。中食後は各々勝手な所に陣取つて晝寝をする事になつた。長次郎だけはどういふつもりか又絲を垂れ始めた。私共はまともに日を受けて寝られぬ。見ると大きな岩の集ふた間の日影に山人達は寝転がつてゐる。しばし其處へ行つて細かい砂を弄び、凉氣を入れて、岩永君と二人上流を見に行つた。少し進むと磧續きによい泊場になり得る砂地がある。先は此磧から徒渉と一寸へつりをしてから又磧に出て、それより谷は左に曲り又右に行くのが見える。對岸にも磧が開けて流水は右より左へ移つてゐる。益々逼迫して來た廊下の趣、然し磧と巨岩は到る處に感じよく開けて、單調ならざる様に配せられてある。既に美の諧調はいやが上にも襲ひ來つた。下廊下核心への自然が、如何に我が心を躍らし、賞美措く能はざるものとなり行くであらうか。

戻つて話すと人夫達は私達の見た砂地に泊つて空身で先を見に行き、明日は此の鼻の山を乗越さうといふ。けれど長次郎は徹底せずんば止まぬ志と、多年の經験と其天才的の感の鋭さより、此先水面上三尺程に見える磧迄行つて泊り、乗越した方がいゝとたしなめる。米は餘す所二日分のみ、よつて赤兀近く迄は一尺一寸でも進んで置きたいといふ私達の希望通りに進行する事になる。

陽光燦たる晝過一時半頃、先づ私達三人より行きかける。砂地を過ぎるとぢきに磧は盡きて、行手の赤抜けは見えなくなつた。上流の景には變つた面白さが現れてゐる。無名澤の山水は矢張り狭く、其邊の山態威嚇的な一要素をなしてゐる。追ひついた人夫の半数以上は其の角立つた壁をへつって先の磧に行つた。一町半以上隔たる。人體が入ると垂直線になつて谷の V 字狀が格別興味深く覺える。私達も殘りの人夫と共にへつり始めたが、オーヴアーハングの下も引懸りは尖つてゐて安全であつた。下りは岩が稍缺けてゐたが、先づ無難に水邊に到り、約十間にして又河岸の上を小さく越す事凡十五間。此足場は太やかな脈の取殘された出つ張りの上を行くのであつた。下流から見た時此下が淺い様に思はれたが、來て見るとどうして中々凄まじい深さであつた。大分谷に慣れたつもりでも我々はまだまだ騙され易いのである。それから磧に取り付

く。此迄のへつりはロープを使はず、先發の人夫が引返して私達の荷を持つて呉れた。

私達が磧に出たのは二時十分過であつた。此處は前のものとは違つて大石は全然ない。よく洗はれた丸石が綺麗に敷きつまつた平で、川の方に斜に上に向つて長く突き出で、其長さ歩測で三十六間ある。砂をも混えて、それには又シヽの跡がついてゐる。本流は此磧の為に面白く曲つてゐる。磧の先に立ち、五間程にせばまつた奔流を隔てて美事な崖谿をそなへた左岸の岸壁に對し、此旅始めてイハツバメ飛び交ふ様を見て、愈々下廊下の感深しと喜んだ。崖は未ださほど高からず赤裸の所凡三十米に過ぎないが、何となく岩の割れ目、崖谿の怪偉な姿は我が旅の益々純化し至高となりゆくを思はしめるのである。深き谷にての思ひは清流一掬の後座して四周を顧る時の景の變化に引かれて、センチメンタリズムの徒らに甘涙を誘ふ様な餘裕は生じない。陽は對岸の影に隠されて、水のどよめきは更に高い氣がする。磧の上手は本流が一の臥岩の為に堰から放たれて直ちに一うねりし、我等の立つ磧を洗ひつゝ半圓を描いてゐる。斯くの如きも黒部にして始めて得らるゝ明媚な奇景である。

右岸は僅かな距離だが全く壁が傳へないので、長次郎は一人磧を離れて岸に上り、上へ上へと林の中を攀ぢて見に行く。百米も登つた頃合圖がある。其處で殘りの者はかたまつて彼の跡にしたがふ。二時二十五分。此の上りは危なげはないが、棒小屋澤左岸の登りよりも總じて急に感じた。上る場所は對岸三角壁の正面よりも少しく下流である。木にすがり奮闘する事少時、崩れさうなガケ谷を一廻りして、本流の溌剌たる麗はしい姿、川中の巨岩轉々たる様、峻直の壁を俯瞰する。二百米近くにしてやがて下りとなつたが、其は餘りへつりもしないで殆ど同方向に吊り下つて行く。汗は瀧つ瀬の如く、咽喉はやゝひりついて來る。

四時十五分、川近くの草生えた白ナギに出る。磧から此の上下に一時間四十分を費した事になる。そして磧との水平距離は恐らく二町にも及ばぬ近さと思はれる。最後の人もそれから五分にして合す。あたりの岩間洩る清水のうまさ。此處は丁度三角壁の直前で、今や其岩山は形全く異り、上方は正しく黒部別山の北峰なる事を示す。休息後岸を傳ひ、二十間にしてロープを用ひる。も早兩岸は純粋の廊下となる。水聲は凄まじい。愈々へつれなくなつた垂直の壁に梯子掛けの作業が始まる。梯子は流木で急造の段梯子、補助ロープで段をくゝつて、長さ凡一間、下四尺は水下に没してゐる。作業は實に速いものだつた。梯子を登り切つてから斑點のある岩を攀ぢる。此は傾斜六十度位。それから約五間へつり、下れば左手岩壁から吹き出した冷泉（八度）がある。恐しい力で噴水の如くほとばしつてゐる。此のあたりから何となく魚臭い。行けば河水は叫喚を擧げて玲瓏たる巖に衝撃し、水魔の聲、精霊の鉾、私達より感覺の分類をなす能力を奪ふのである。

かくて四時四十分、一の磧を得て之を泊場にきめた。すぐ上流の折れ曲りには赤兀の親類筋で裏隣りなる兀げた壁の大崖谿が二すぢ見える。總ての風物は其がたしかに下廊下の核心、黒部別山澤下から長い洞門の出口なる無名澤の落合なる事を物語つてゐる。先づ長次郎と山本と二人丈が先を見に行く。此二人のへつる様は頗る馴れたものだ。忽ち落合迄の三分の二を行つて戻つて來た。曰く「落合より上は兩岸全く垂直の高い断崖で全然廊下が續き、それから又曲つてゐる」といふ。果せる哉、我々は終に來る所迄來てしまつたのだ。其處で長次郎のすゝめに從ひ、今から之を見に行き、明日は尾根から廻ろうといふ事にする。

山本と白川が先頭、私、岩永君、冠さん、青木助次郎等の順で、廊下の裾、川中に伸びた岩鼻の急場下の棚を二町ばかりへつって行く。水面上約四間の行きつまりから上流を見る。此迄のへつりは細木のある所を行くので、まアロープはなくてもいゝ。然し先は大分むつかしい。落合迄は約四十間あるが、日暮近くの危險なへつりは萬全の策ではない。遺憾ながら此處で満足する事にする。落合附近にある小さなタルは磧でも見られたが、其は本流のタルで、落合は其蔭で水も細いらしい。落合の上手に小なる磧あり、其右に少しばかり本流の全く瀞になり切つた油の如き濃色の水面が見える。其上の岸壁は斷落せんとして固結せる力強さ、何とも形容し難き表情を以て我等を睨まへてゐる。傾斜推測八十五度位、水は此岩下を離れると奥は見えない。左岸の壁は七十度位、此も全く裾を缺いた廊下の眞の絶壁である。谷の深刻狹隘になつた故か、私どものしがみついてゐる岩壁の下を流れる水量は、下流より却つて多い様に思はれる。

私の此部分は餘りに記載的な、然も拙なる言葉なる事を悲しむ。然り、既に釣鐘温泉より歩道を踏んで幾

多の勝地を經、棒小屋澤劒澤の本流にクロッスせる世にも珍しき下廊下の關門に來りて落合を乘越し、それより莊嚴華麗なる景の應接に暇なく過ぎて漸くに遡行し、此處に到れば俄然兩岸は相高まり相迫り、共に急峻の度削立の凄さを增して、我等の主觀は正しく大自然の威力に壓せられたのである。只我等は決して陰慘險怪な氣分にうたれたものではないと言ひ得る。下廊下は如何に深しと雖ども、其は誇張すれば水晶宮の奥深き迷路なればである。

私どもは綱で體を結んで此の深奥巍乎たる光景を撮影し終り、程なく泊場へ歸つた。泊場は餘り良好ではないが、上段に一つ私達の天幕を、下段に岩陰を利用してロープを張り天幕をおほふた人夫達の小屋場を作つた。私達の天幕場の下は急な岩場の下りになつてゐる。炊事の火は流近くの岩の間で焚く。緊張の日の夕べ、一服の煙草は思出と此旅の目的半ば遂行し得たる滿足とに味はいは格別である。

今宵も磧にさまよい出た。けれど八時半になつても月は現れない。光は見れど本形なき晩である。さるにても私共の眼は下流黑部別山と仙人山と重りて漏斗狀谷をなし、内側が靑味を帶びた銀色に光り、特に岩壁は鈍銀の樣な輝きを持つてゐるのに吸ひ付けられた。人寰を脫し何のけがれもなき大いなる窮谷の夜の絶景を私達は泌々と眺めた。飜つて上流は背景をギザギザ山でかこつて、月は其背後を忍ぶものゝ如く、か黑い影はいつまでも黑かつた。されど兩岸の漏斗形は却つて下流よりも眞に迫つてゐる。自然に對し人間の餘りに小さければ、萬斛の雪解水、森より滴たる淸水に混じて我等は微細なる粒子に化して行くのではあるまいか。そして只、上空の峨々たる嶮山のみが濾され殘るのであるまいか。

月無き宿りには其代りブトの來襲がはげしかつた。人夫の野口に天幕口に焚火をこしらへてもらつて、九時頃寢に就く。友は早、軽きいびきに眠つてゐる。私はしばし眼が冴えて、落流する水音に私(ひそ)かに我が思ふ山幸ありやなしやを問ひ、明日の運命をよきに考へた。

翌朝クリノメーターで私どもの泊場から四圍の高みへの仰角を測つて見た所、次の樣な数字を得た。

上流谷の上空山々の凹所	二十二度
上流ギザギザ山の高所	三十三度
右岸山額	五十八度
左岸岩壁上	四十八度
黑部別山（漏斗の左上）	二十四度
仙人山	十二度
下流谷の上空山々の凹所	十度
下流漏斗右上	三十二度

六　右岸尾根を迂廻し再び下廊下へ

八月三十一日。此日こそ私等の黑部行に記念すべき日である。食料の關係からどうしても其日は下廊下の冠氏舊知の部分、黑部別山澤落合稍上手なる徒涉點へ出なくてはならなかつた。少くとも早く測量道に出て谷か嶺かへ向はねばならなかつた。若し嘗て冠さんが二夜を過された三角點（二千六十七米）に晩く着いたなら、長次郎は信州路へ國境越えを主張した事だらう。然るに東信電力の大正十四年盆前に付けた測量道は、私達の此の大迂廻をたしかに救つて呉れた。ナアロー・エスケープといふ英語の意味がぴつたりと當てはまる樣な一日の場面であつた。其は次の樣な經過で幕は開き又閉ぢた。

午前四時近く私は一人起き出でて星を仰ぎ、幸福を感謝しつゝ火を焚きつけた。そして煙草一服ふかしてゐる間に人夫も起き出でて私から火種をもらつて行つた。六時頃は全く明るく、皆は支度に忙しかつた。人数が多いと何かと手がかゝつて、出懸けたのは豫定より一時間後の七時であつた。泊場へ別れ間際に冠さんは「大正十四年八月三十一日、棒小屋落合ヨリ川傳ヒニ、日本山岳會員、沼井、岩永、冠」と、味噌の空樽（經七寸位、高さ六寸位）に記して泊場の二三間上方に置かれた。だるま然たる靑木助次郎がいきなり立つて燃ゑさしでもつて、自分達の泊場の壁になつた岩面に簡單な文字を記した。「ナベカズキ」といふ文字が

附け加へられた。其は鍋担ぎの謂で、一行中の長老の一人安川亀次郎といふ男が釣鐘温泉以来鍋を最も貴重な物として責任を持つて担いだからである。安川のおとっつあんは「若い者に任して置けない」と誇りげに言つた。

先づ下流へ戻つて例の梯子を架けた悪場を緊張して渡り、最後の長次郎はダブルロープでやつて來た。そして七時二十分には昨日一安堵した草場へ來る。此處でいづれを登るかが問題であつた。十間ばかり長次郎は其の眞上の岩抜け場を登つて行つたが、岩は崩れ落ちさうで多人数は危ないといふので、山本と私とが同じコースを續けたのみで、他は昨日下りた矢張り急な林の中を登る事にした。此行で始めて二組に分れる。羚羊の様に確實で速い二人の跡を私は稍々あえぎながら踏んで登つた。戦慄に値する程ではないが、崩れさうなとげとげ岩をへつり上つたり、一枚岩を横這ひに越したりして、よい所ではなかつた。成るべく木の茂みを攀ぢて、七時四十五分、昨日の上りと殆ど同高の所迄來た。傾斜地に荷をかばひながら一休みし、他の組のなほ遙か下の林の中なるを待つと共に山を眺めて、新たなる爽快の気分を抱く。黒部別山の白兀や草場や、南方や南方の割れ目や明日行くべき大へつり上の壁などが見える。

之より稍なるくなり、八時、草谷となつた。それより石、草相半ばする崖澤をへつり登り、本流水面から凡二百米の高さの所で休む。他の一行はまだ下である。登る毎に黒部別山は益々大きく立派になつて此處では絶頂の平も明かとなつた。私達の今日下らうとする尾根は谷の上手、黒部別山澤の前に長い肩を現はしてゐる（實際下つたのは此の稜線より更に南の部分で、其間に例の赤兀があるのである）。其のふもと、無名澤落合より上の谷はへつって瞥見した通り、深い青淵が續いてゐる。

それから上は大分なせになつて來た。くぼみの奥の掬林も見えて來る。休めば山鳥の聲。谿音の律調。羚羊の跡を見て山の深さ、嶮しさを思ふ。

其休場からは仙人山の高點も見えた。黒部別山大屋根のなつかしい平とあの針葉樹の森も眼に映る。南方の東尾根の下はいさゝかのゆるみもなき廊下の大壁、縦目の割れすぢ、青き細尾根、影なる巨大の裂けたる岩谿に眼は吸い付く。更に南なる隆起は尖頂塔（ジヤンダルム）にして北側えぐれたるもの、實に凄絶なる風光ではないか。

アマドリ（イハツバメ）の行末追ひ見つゝ憩える時にがらがらと墜石の音が聞えた。人が落したのであらう。其人々は間もなく私達の方へ草を分けて横切つて來た。一人、二人、三人と、かくて九時頃一行は再び一緒になつた。此上はもう登攀の苦しさはない。くぼみを奥へ奥へと進んで掬林の中に入つた。九時半頃少し左へからんで一の開地から鬼ヶ岳や御前谷の下尾根を眺め、本流の廊下の底を俯瞰した。其谷は見えざりし所、行くを得ざりし部分の最も險悪なるものであつた。即ち壁の最下部はオーヴアーハングし、上部は数百米の間削るが如く、少し上手は搭狀の岩塊となつて、すぐ先の曲り角となつてゐる。此より見かけの傾斜、右岸六十度、左岸七十度。實に海内にならびなき深刻な峡谷、單に絶景と稱するのみでは足りない。しばし讃嘆の辭を重ねて、九時五十分發。少し上れば谷の聖なる美しさは見えずなつた。十分間にして北西の方に池ノ平の山が見えて來た。然れば谷の音遠く尾根近くなるのであつた。

十時二十分、終に平になつた。此尾根には妙なくぼみが出來てゐる。羚羊の糞などが落ちてゐる。私達は久しぶりにて牛首山、鹿島南槍、布引の頭、爺等の國境の山々に面する。此等信州境の山脈は黒部別山の壁ばかり見つたけた故か馬鹿におとなしく見える。少し北には白馬の旭岳、清水平の山々、及び黒部下流の奥鐘山、名劔山等が現れてゐた。眺めはあつたが、此れから先は藪がひどくなつてゐた。押し分け押し分けて十一時頃、クロベ、ヒメコマツの寄り合つた地點で休んだ。藪との苦闘は只休息と涼風とによつてのみ辛うじて償はれる。平尾根に出たら東信道に合するだらうとの當てが外れて一同落担したが、時刻なので飯盒に詰めてよくパッキングを施して來た谷の水を少しづゝ分けて、中食の箸を取る。樹間からオホタテガビンの峻直な絶壁を見ると、矢も楯もたまらなくなる。之と相對して黒部川を雄偉ならしめてゐる赤澤岳東尾根の危峰もほの見えた。

十一時三十五分出發。中食の前後に木に登つて三角點へ行く見當はついたので、大分馬力を出して藪山を行く。晝間とて身體は熱し、汗は服の上下とも通して來る。途中に小池が二つ離れて見付かる。水は赤く染

まつて底は泥深くオタマジャクシが泳いでゐるので、飲む気にはなれなかつた。又、或る所からは立山の東面、サル又の大殘雪と大汝とが立派に見えた。私達は只管測量道に出ん事をのみ願つて、稍々あせり気味に押し分けて行つた。

ふと、先頭の人夫から「道だ」といふ聲が叫ばれた。うだつた身體はきゆっと引きしまつて足早に近付くと、たしかに其は東信の新道で、中々よく作つてあり、丁度棒小屋澤の二股（西澤小澤との落合）から上つて來た所なのであつた。千七百米乃至千八百米のあたりである。時に十二時二十五分。いささか悲觀してゐた所へ第二の豫想よりも意外に早く現れたので、一同はすつかりはしやいでしまつた。道のべにゆるゆると腰打ち下し、汗をぬぐつて、牛首山より續く鹿島槍の山肌、森林の美しさ、山姿の鷹揚さに思ひを寛やかにする。私は嘗て溯つた棒小屋澤へちよンちよンと駈け下りて一飲み其の眞清水を含んで來たい心が動く。けれど今は悠々たるべき時ではない。十五分休憩の後には私達から先にぐんぐんと新道を尾根通し登つて行く。

道なればこそ、急ぎの尾根よりも左右及び北の山々が望まれた。祖母谷のイワウ澤、雲かゝつた劒岳、オホタテガビンと重つた立山、黒部別山上の白兀などが印象に殘つた。道は丁度私達の追ひ返された無名澤の直上を廻りつゝある。此澤も左右兩岸の山腹は急峻で崩落し、一寸下れさうにも思はれない。山抜け場を過ぎて上り、一時二十分、三角點の峯を直前にして栂の下で休む。我等が下らんとする尾根は前方に針葉樹瀟洒として立並び、黒部の絶壑をさし挟んで立山、劒の聖壇を見る。立山はカアルがよく現れてゐて面白い。劒は幅廣い黒部別山に下部は隱されてゐるが、其山容は岩峯斷裂して如何にも淋しい景だ。長次郎澤の熊ノ岩は見えてゐる。

道はそれから三角點には登らず、峯を巻いて一時四十分に側尾根に達した。そして之を下つてゐるので、私達にはあつらへ向きだと大喜びし、休んで、劒、立山の寫眞をとつた。人夫達はも一つの飯合水を出して中食を腹に詰めたが、私達はさして腹もへらないのでレモンを切つて砂糖と共に齧り、水を飲んだ。立山に雲がかゝる頃ほひ下り始める。時に二時。

尾根道の下りから劒の全容が見えたが、前よりも更に其岩峯（八峰？）の連立がいかにも淋しかつた。黒部別山の方が谷近くでは覇者の如く見えるのであつた。道は直ちに左に折れて山腹をへつり下る様になる。然し私どもは敢然豫定の如く之を捨て、再び藪行く人となつて、細い急な尾根を下る。も早冠氏、長次郎曾遊の地に入つてゐるのである。涼風にありがたく吹かれて滑るが如く下つて行く。

此の下りこそは本統の愼重な急行であつた。豫定よりは二時間程もおくれてゐる。最後の下り場は長次郎の見る所では只一つよりしかないので、其れも上るより探すに難い事である。奔流の水邊だつて此前は橋を架けたのでよい所ではあるまいといふ。途中には水を得る望みは全くない。食糧も明日の朝きりなので、何としても廊下の裾までは行かなくてはならない。私達は出来る丈奮闘を誓ひ、ひとへに長次郎の見通しに信頼してついて行くべきである。

初めは尾根も急は急だが手放しで歩ける程度だし、ひどい藪も避けられるので容易にはかどつた。大分下つて、昨日今日川岸から見た尾根の肩の上段迄來た。ノートに記す暇もなかつたので、詳しく正しい事は云へないが、一二度行き直した事もあつた。尾根は下るに從つて小骨に分れ、錯雜してくるのであつた。兎角して執拗な平藪を過ぎ、一の草場に出て休む。時は四時二十分。此上から黒部本流の最も險阻にして見えざりし部分（此の迂廻路の登りにて見た險所の更に上流）及び黒部別山の壁を眺める。すばらしい光景だ。

此からロープが取り出され、強さ（速さ）と確實さとの平行しない私達を山人は見まもつて呉れる。美しい針葉樹の生えた縁はも早崩壞し勝ちな崖が出て來て、山の傾斜は眼に見えて落ち來るのであつた。豫程左へ（南へ）移つた様に記憶する。長次郎は常に皆を激まし、急がしてゐた。

五時、水邊からきり立つた壁の最上端、突起の頭に着。右手には通過不可能の谷の部分に抜け落ちた例の赤兀が見えてゐる。明かに逆層の巨大な板狀岩盤を継ぎ合はしたやうな此上もない險惡さである。黒部川は其鼻で見える。此で下廊下は兎に角全部見られたわけで、突端の今見えぬ小部分は黒部別山の上から望める箇所である。私達はさつき飯を食べなかつたお蔭で大分疲れてゐた。就中、岩永君はいつもの遠慮から私達

に義理立てた爲、下りの能率がひどく低減してゐた。つまらない場所で石を落したり、私達が平気で通つた所を逡巡したりした。然し此は決して君の強さを否定する事にはならない。登山者の山の強さの曲線といふものを仮に描いて見たならば其波の高低が甚だしい人と然らざる人とに區別出來るであらう。君は其前者に属し、平均の強さは普通人より遙かに上位にあるが、空腹の時には急激に我々以下に落下する性質を有してゐる。果せる哉、食を摂つてからは俄然頑張り出した。

此鼻での食事は大した満足を皆に與へなかつた。私のリユックサックから取り出された板チョコレートとソールト・フレークスといふ鹽味のついたビスケットが少し宛十一人に分配されたに過ぎなかつた。豫備の食料としては他に上等な貝の柱を持つて來たのであつたが、どうした事か其時は誰一人として思ひ出せなかつた。然し兎に角、急ぎに急いでなほ長次郎の豫定では後三時間はかゝると云つた小休では、私達の心の餘裕は餘りに少かつたのは事實であつた。

其後の下りは危い所を避けて成るべく林の中をずり下りた。五時四十五分、大分下つて川を近く見る所に來た。其邊は尾根は斷落してゐるので、細かに割れた山腹をどうなり傳はつて行つたのであつた。廊下の壁は益々急になる。巧みな長次郎の見通しによつて得た最後の下りは、此前彼が冠さんを導き攀ぢた壁中の溝に他ならない。ロープを垂らし、石を落さない様に慎重に一人宛吊り下つて行つたりして、其崖溝を通過した。實に気味の悪い難場であつた。

それでも終に切り抜けて、到頭望みの谷間に下りる事が出來た。時に六時十五分。先づ物をも言はず思ひ切り水を呑む。うまい、實に美味な水であつた。長次郎の豫定よりも遙かに早くつけたので、彼も頗る上きげんである。私達も安全な泊場を日の内に得て欣喜雀躍、大へつりや徒渉點を打ち眺め、最早平ノ小屋迄行つたかの様な氣分で、右岸の岩棚を乗り越え、下の磧に行つた。磧は冠さんの嘗ての行よりも廣く出て水は遙かに減つてゐた。其故、右岸の橋ごしらへもしないですんだ。

泊場では六時二十分から人夫は野營の支度に急がしかつた。私達は久しぶりで肌を洗ひ、顔を洗ひ、壯絶極まりなき景觀を楽しんだ。此處は昨日の泊場よりは岩は鋭く、裸かの壁ばかりであつて、明るさと廣さと見晴らしは遙かにすぐれてゐる。赤澤岳が上流 V 字狀の空間をひきしめて塞いでゐるのも傑作だ。黑部別山澤の大割れ、高直なる岩の殿堂、緑玉の反光にもたとへつべき滿を持したる蒼水、堂々たる赭黑色の峭壁。其は冠氏「下廊下の記」に簡潔に描寫された所のものであつた。

夕食は晝飯の殘りを雜炊にして食べた。それでは未だ不足なので、人夫達は砂糖湯を作つてがぶがぶ飲んだ。既に夜の帳は峽谷に下り切つて、磧にて營みの焚火のみがめらめらと照り燃える。過激なる投降の後の五體は気持よく伸びて、はてしなき無我の境にさまよひ行く。月明に幽仙の興趣は增す。唄も歌はず、感嘆詞も漏らさず、十一時頃迄、照りて青白き巖に腰かけ、只々岩と水と、光と音のすぐれて調和した永遠の山の生に、我が魂を溶融してゐるのであつた。

泊場より仰角及び見かけの傾斜は次の如くである。

仰角	
上流谷奥のギャップ	十五度
赤澤岳尾根最高に見ゆる頂	十八度
左岸	四十三乃至四十八度
右岸	四十八度
下流上空の山	三十四度
見かけの傾斜	
上流右岸下部	九十度
上流右岸中部	六十度
上流左岸下部	六十八度
上流左岸中部	七十五度

下流右岸下部	六十八度
下流右岸中部	八十五度
下流左岸	六十六度

七　黒部別山澤落合より上流

九月一日。昨宵（ゆうべ）は喜びの餘り興奮した故もあるが、少し暖い様であつた。よい天気が續き過ぎたので變るかも知れないといふ不安は皆の胸に湧いてゐた。果して午前三時半眼さめた時には細雨が泊場をしめらしてゐた。一議にも及ばず早發と決し、白みそめ、細かな水滴のとまつた頃人夫に後始末を頼んで、五六人で黒部別山澤の落合まで見に行く。

磧より後立山側の巨岩の間をめぐり、落合正面の大盤石に攀ぢる迄凡二町、五分位かゝる。此から谷は惡絶な眞の廊下をなし、此時期でも徒渉し得る所がない程に深潭を走る峻流となるので、覗く丈であきらめる。落差は落合附近が特に著しい。黒部別山澤は流石に秋立ちし様の、落合は雪消えて、多からざる水が本流に注ぎ入つてゐるが、少し上からは白凱の濁筋となつてゐる。急傾斜だが、若し落合に渡られるものなら登られさうに見受ける。但其岩壁は灰白色の凝灰岩めいた花崗岩から成つて、右股を行けば、奥迄正しく進むに非れば、攀ぢ難い斷崖のみである。

私達が峯の仰望に水の凝視に心を留めてゐた時、人夫達は「シヽだ」と言ひ出した。見ると灌木の茂みから岩間を傳つて水飲みに行かうとしてゐる可成り大きな羚羊だ。十五分ばかり氣永に待つて、黒部別山澤の左岸、本流との突端、此方と殆ど同高の場所に下りた時、カチリと二つのシャッターは動いた。と同時に用は済んだとばかりわつと喚聲を擧げた。羚羊は驚いて隠れやうとしたが、惡場は流石に此の岩登りの名人にも容易でないと見えて、跳びも出來ずよろめきながら滑稽な姿で高みの木の間に入つて行つた。私達は大に笑つたが、思へばあはれな事をしたものである。彼が絶體安定の棲家なりし下廊下核心はすでに人の香來つて、其生活は精神的におびやかされたに違ひない。恐らく其日は愈々渇してたまらなくなる迄岩間にひそみ、草の揺ぎにも心おぢおぢと落ち付かなかつたであらう。兎に角珍しい見物であつた。

羚羊を驚かした罰か再び小雨が落ち出した。其處で泊場に戻る。用意整つて徒渉點に向つたのは七時五分であつた。此徒渉點は冠氏の記された如く實にうまい所にある。流れは悠然と右岸より川の方向と直角に曲り來つて美しい玉石の磧と磧の間を過ぎ、稍々ざはめいて又直角に折れ曲り、左岸全く裾なき大屏風の下を落ちて行く。だから私達は川の方向に渡を突き切つて渡るのである。（かういふ流路と之を利用しての徒渉は決して此處丈にユニークなものではなく、私共の乏しい經驗でも鹽原附近、大蛇尾（オホサビ）谷を遡行した際にも遭遇した事がある。典型的な V 字狀谷でも有り得る事で、少し谷に注意すれば尚幾多の例を發見する事が出來やう。只、此處のものは我國で最も深刻な大峽谷たる黒部川にあるさへ珍しきに、就中最も景象の非凡な絶險の中心に位せるが自然の妙手至れり盡せりと思ふのである）。

徒渉は深さ膝を僅か越すのみで容易にはかどつた。私の様に輕い者でさへ、人夫に助けられないで直線的に渡る事が出來た。それから少しして大へつりにかゝる。此も總じて言へば、豫想よりらくにそして安全に行けた。岩層の関係からいつても、下流からする方が困難の程度は少いと認められる。ピトンはついに不用であつた。但、此の成就はひとへに水量の減じた事が第一の條件であつた。何となれば大へつりは上部よりはよき足場を備へた水邊を歩む事と、之に出る迄岩稜と岩棚とを超す緊張味との組合せであるからであつた。

七時十分、左岸の行が始まる。一寸棚を上り、長次郎と山本の二人が六十尺のロープを持つて攀ぢ、私達は其によつて安全に行く。次に八十尺のロープを張つた所を越す。其次には殘雪のある大きな割れ谷が來る。上れさうに見える。之より本統の大へづりで本流が少からぬ大きな飛石を洗ひ洗ひ、白熱し、藍青化し、激しく撃ちあふのを眺めながら、行手にわんぐりトンネル様の口を開けた大殘雪がある所まで、傳ひかゝる。

雨はなほそぼ降る。壁の花崗岩はつるつるに磨かれてゐるが、角立つて引懸りは多く、高き岩峰のロック・クライムの気分がする。但ロープは餘り使はず一へつり過ぎる。次に又滑らかな岩を長次郎がいさゝか上で

ロープを支へて、先づ青木長松から先へ上り、一行はダブルロープで一人宛行く。それから数回上下を重ね、行先に丸味ある大岩を眺めて、全く平滑に磨かれた岩の斜面にぶつかつた。傾斜は七十度に垂んとしてゐる。どうするかと見る間に長次郎はわきから四五間上に上つてロープを垂らす。山本は其端をしかと片手で握つて荷を背負つたまゝ裸かの足の親指を二銭銅貨大のくぼみに引掛け、四五回體を動かしたら上り抜けてしまつたには驚いた。私達は腰にロープを結び、用心して引張り上げてもらつた。それから下つた先の所には先年冠さんの通過では見えなかつた小さな磧が横はつてゐる。手前から見た丸味ある大岩は磧に續き、私達は右手に登つて行く。恰かも滑石の如き水蝕の一様な岩場である。凡百二十尺上迄ロープは二度使つた。第一のものはつるつるで七十度ばかりの壁であつたが、辛じて足場はあつた。第二のものは氣休めできる容易なものであつた。

それより又二度ロープを使つて、岩筋横がらみの上下をやつた。終つて現れた灌木の藪を高みに登り、愈々去年の一行が追ひ返された實體なる壁に來た。正に九時。今年は條件がいゝので安心である。細雨も全く上つた。此處の峭壁には著しき石英（？）の脈（ヴエイン）が水平に貫通してゐる。岩面の滑かさは此れ迄のものに優るとも劣らない。一行はロープを用ひ、平らに岩角を縫つてへつった。稍々離れて高みにロープを支持してゐた長次郎は、其惡場をダブルロープなしで（尤も引掛ける所は絶無であつたが）、實に巧妙な腰つき足つきで、手は所謂 press hold を用ひ、見る者の眼にはらくらくとへつり終つた。今更其のバランスの完全な事に感嘆した。今度は脈（ヴエイン）が垂直に下つてゐる所から、危險はなく下つて、さしもの大へつりも終局を告げた。岩永君達が斷腸の思ひで去り兼ねた行きつまりの立場の岩がしかと踏まれた。事實此の大遡行での難場は過ぎてしまつて、私達は溢るゝ歡喜に面を輝かし、萬歳を叫び、谷の響を新たなる気分で聞いた。岩よ、水よ、我等は汝がかたき抱擁より今し離れたのである。うたかたの夢、峡流に添ひへつり遂げたい心は、今より美しい思ひ出と變つて、恋ひ慕ふ憶ひは永遠に生きるであらう。

一同へつり終つたのは九時十分。約二時間にして此の長いトラヴアースは私達のものとなつたのであつた。谿水の狂はんとする姿はも早我が親しき友であつた。下流の空間は右岸八十八度より六十度の面に屈折し、左岸六十六度平均に稍々コンヴエックスに迫つた有様なるに引き換へ、上流は廣く開けて來た。然し對岸（右岸）は既に逆層をなして、其岩壁は傳ひ難い。

間もなく私達は殘雪の窪地に來てゐた。大雪塊の高きは十間餘もある。ひやゝかな雪解け水が流れてゐる。よい休場だ。そして此れから突兀たる黒部別山側へ攀ぢて行つて見たい氣のする所だ。然し山人達は足早に過ぎて行く。平ノ小屋迄行かなければ食を得られないからである。其處に本流が一間ばかりにせばまつて旋風の如く巻き返り突進する奇景を近付いて賞する暇もなく、小藪を越え、山裾を相當らくに歩いた。其邊からかすかな切開が現れた。去年の行よりは高みを行くので、水態をうかがふには不便であつたが、緑深き右岸よりかゝる垂直の高い瀑布、即ち新越ノ瀑上段が眺められた。此は河岸を行けば、下段の低きものと落口とを見るに過ぎないといふ。

やがて一の惡場に達したが、岩へつりはワイヤアと梯子、ボートの組合せで工事されてゐたので、難なく越した。それから明かな道となる。兩岸の山は次第に開き、凄みを失つて來るが、森と水は豊かに接近して來る。急ぎの足、空腹の眼には景色をと見かう見する餘裕はなかつた。道が出來ては簡単にとばして行けるので、以前は夢にも思ふ事の出來なかつた短時間でクラノスケ澤落合に着く事が出來た。十時四十分着。クラノスケ落合附近は流石に下廊下の上の關門といはるべきすぐれた景觀を有してゐる。私達は不思議な窓の様な澤の落口で、立山側から吹きおろす風に震えながら、貧しい中食を摂つた。三人分のソールト・フレークスとレモン水、其れに片栗一袋が全部の分前なのである。此處でもどうしたものか、最後の食料品として用意して來た貝ノ柱は少しも思ひ出せなかつた。（此は千垣に着いて荷物の整理をした際漸く發見出來たとはをかしい話であつた）。

十一時半、やをら立ち上つて、益々作りのいゝ左岸の道を上に向つて歩んだ。クラノスケ澤落合の對岸、曲り角（かど）岩壁の稜線は下より順を追つて傾斜八十五度、九十四度、八十二度と全く鋭い立ち方をしてゐる。

其先は右岸は廊下の壁で感じがよい。忽ち赤澤岳の黒部川へ面する尾根が現れた。針峯（エイギユイユ）の如き尖鋭な亂嶂は黒部別山のどつしりとして力強い削立に對して、又格別の味ひを持つ。黒部別山オホタテガビンは赤澤岳よりの澤（大なる押し出しあり）の對岸でレンズに入つた。谷とあはせ持つた其の獨自の展望はユニークなものであつた。

ゴゼンダンに着いたのは十二時二十五分。稍暗い感じの湧く其落合で十分間休み、又進む。落合の對岸すぐ先に東信道が低く水平に近付いてゐる。無名澤で一休みし、一時二十分には御山澤に着く。落合は大分林が開けて元の如き優婉な趣はないといふが、相變らず富士の折立よりも本山迄の尾根頭が望まれる、黒部川には珍しき遠景をあはせ持つてゐる所だ。高い山は案外大きく見えた。私共は沙洲に休んで、二時十分、平ノ小屋に向つて進んだ。

御山澤の先の吊橋は大分傾いてゐた。谷は益々廣く蛇行大きくなつて、壁の代りに深い闊葉樹の森林が光れる磧迄擴がつてゐる。壁へつりで鋭敏になつた神經は此の優美な溪流と四圍の綠に撫でられるが如くおさまつて、稍々倦怠の脚は平らかに運ばれて行く。いつしか人夫より先んじて中ノ谷先の吊橋を渡り、其れより磧を歩んで平ノ小屋に上つて行つた。三時三十分到着。クラノスケ澤落合からは休息とも四時間、大へつり終局よりは同樣六時間二十分で、道の有り難さを泌々覺えたが、道の上では深い印象と高調した主觀とを與へられなかつた事は否定する能はざるものであつた。

（大正十五年四月二十五日脱稿）

附　記

本編に記した氣温、水温等の温度は皆攝氏で表はしたものである。

又所々に距離、高距等を記したものは殆ど皆目測によつたもので、其れも寧ろ感じといつた方がよいだろう。私は成るべく一行の各人に就て聞き、或は何か長さの分つた物を基準にして對照し、つとめて平均を取る樣にしたが、實驗室に於てさへ我々の量に關する感覺は誤差少からざるに、黒部川の如き平常我々が生活せる所と全く違つた特異なる地形内にあつては、我々素人は其の概数を得るさへ頗る困難に感じた。そして峽谷に於ける感覺の誇張又は縮少は、觀察者の立脚地に速き流水のある事によつて更に助長せられる樣に思ふ。

擱筆するに當つて私は同行の冠、岩永兩氏の懇篤なる御助力を深謝するものである。

15　西堀榮三郎・奥 貞雄 「春の東沢」『日本登山記録大成』第 15 巻 薬師岳・黒部川

1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『三高山岳部報告』第 5 号（第三高等学校山岳部、1927 年)〕

要　約

1926（大正 15）年 3 月 20 日～4 月 12 日の記録。

メンバーは、西堀栄三郎、今西錦司、渡辺漸、多田政忠、酒戸彌二郎、細野重雄、奥貞雄（以上、第三高等学校山岳部)。芦峅寺の案内人・ポーター11 名が協力。

行程は、立山温泉～平～黒部川東沢 BC～水晶岳、赤牛岳、野口五郎岳、烏帽子岳～平～針ノ木谷・南沢～不動沢乗越～濁。

※赤牛岳・野口五郎岳・烏帽子岳積雪期初登頂（水晶岳(黒岳)については 1924(大正 13)年 4 月中旬、伊藤孝一らが黒部五郎岳の小屋をベースに往復している)。

※旧制第三高等学校（略称・三高）は、現在の京都大学等の前身校のひとつ。

この登山の計画は昨年の秋、今西が初めて言い出したもので、それからは雪に埋もれたゆるやかな東沢の流れと、それを取り囲む黒、赤牛、野口五郎等の山々は常に自分達の憧れの対象として頭の中に描かれていたのである。ただここに自分達の最も頭を悩ましたのは雪崩の危険と、これらの山々への登山を行ううえについての根拠地をどこに置くべきかという問題である。平の日電の小屋は勿論、現在の日本の山小屋としては最上級に位する。しかしながらこれらの山々、ことに我々が主眼とする黒岳へは惜しむらくは、少しく距離が遠きに過ぎる。しかるに東沢には積雪期に使用出来るような小屋は一つも無い。従って我々はどうしても東沢にキャンプを張ってそれを根拠地としなければならない。しかしながらかなり永い期間に亘る雪上の野営はともすれば身体のコンディションを悪くしがちで、そのようでは到底日々の激しいアルバイトに堪えることは不可能である。それで我々は出来るだけ野営を完全にすることに努力した。そしてその結果は予想以上に良好であった。次にかなりに永い日数を要する登山であるのに穂高における上高地の如く便利に食糧を途中で補給する場所がないので、この食糧の問題についても大いに頭を悩ましたが、平で日電の松岡氏等が米、その他の点で種々便宜を計って下さったのではなはだ助かった。最後に大町から入るか、芦峅より入るかという問題であるが、これは人夫その他の都合で最初から文句無しに後者を取ることに決定した。

かくて数回の準備会を経、パーティのメンバーにも種々変更のあった後、いよいよ西堀栄三郎をリーダーとし、今西錦司、渡辺漸、多田政忠、酒戸彌次郎、細野重雄、奥貞雄の七名が京都駅を出発したのは大正十五年三月十九日であった。

平小屋まで

三月二十三日　出発（五・三〇）―ブナ坂（九・五〇）―刈安谷（一〇・五五）―桑谷（一二・二五）―弘法茶屋（二・二五）

芦峅に一泊、藤橋に二泊の後、この日自分達はようやく立山温泉へと向った。

材木坂はスキーを担いで進む。雪はかなり深いが前日荷を担いで登った人夫の足跡があるので大いに助かる。中腹まで来た頃、既に夜は明け来って、暁の曙光に映ゆる鍬崎の頂には絶えず雪煙が上っていた。久し振りの晴天に我々の張り切った登高の念は一層煽られる。しかしそれも東の間、美女坂を登る頃から、天気はまた次第に悪くなりついに雪がちらつき出してきた。刈安谷、桑谷を過ぎ一時雪も止み空も大分明るく成ったが、弘法の小屋の二三町手前まで来た時、突如として称名川の方から押し寄せてきた濃霧のために前途を阻まれて、一夜の宿りを弘法に求める。小屋には富山スキー倶楽部の平尾氏の一行がおられた。

三月二十四日　出発（一〇・三〇）―追分（一一・四〇）―松尾峠（〇・二〇～一・三〇）―立山温泉（四・三〇）

昨夕に引き換え今日はまた素晴らしい天気だ。新雪の粧いをこらした立山、薬師、大日等の山々が黎明の陽の光を浴びて心憎いまで我々の心を魅する。十時半出発。ジリジリ照り付ける太陽に汗を滲ませながら、交替にラッセルをやって松尾峠に着いたのは十二時過ぎ、温泉側の斜面はかなり急で、左手の断崖からは小さな上層雪崩が出ている。クリノメーターで計ると、最上部の傾斜は五十三度。下の方の雪質も見たかったのでシュラーフザックを先に転ばすと、物凄い速力で飛んで行ってしまう。幸い日が影って、雪崩も治まったので今のうちにと斜滑降で下り始める。雪が余りよくないうえにデブリのために滑り難いことおびただしい。板倉氏の遭難の後を弔って、立山温泉へ着く。温泉の建物は屋根まで埋まっていたが、先着した人夫衆は既に雪を掘って入口を作っておいた。夕陽の鬼、獅子、龍王が堪らなく良かった。

三月二十八日、三日間というもの夜昼となく降り続けた雪もようやく止んで太陽は再び我々に微笑みかけた。温谷の雪崩の危険もあるので、今日は滞在に決めて、人夫衆に途中まで荷を揚げさしにやる。

外へ出ると暗黒に慣れた自分達の目は強烈な太陽の光線に眩暈(めまい)がしそうだ。見ると三日間降り続いた後にこの天気だので、松尾の断崖からはほとんど一分ごとに雪崩が出ている。傍の小丘に上ってスキーを走らせながらそれを見ていると中々壮観だ。中にも午後三時頃天狗平の三角点の辺から出た奴はとても素晴らしかった。

パウダーの軽い雪に思う存分スキーを楽しんだ後、四面雪の堤でかこまれた露天の温泉に浸って温いクリームなどすするとまた捨てがたい情緒がある。空は満天星、十四夜の月が美しく照り輝く。明日も天気だ。皆準備に忙しい。

三月二十九日　出発（七・〇〇）―大鳶と小鳶との鞍部にて昼食（一一・四〇～一二・〇〇）―越中沢乗越（二・〇〇―平小屋（四・三〇）

夏道を行かずに温泉の東南、参謀本部の地図にガレの印のある谷の右の尾根を行く。スキーを担いで昨日、人夫の踏んでおいた後を行くので、行程は思ったよりはかどった。こっちは余り風も無いのに薬師は盛んに雪煙を揚げている。大鳶の右手に出たのが十一時半。尾根をトラバースして進もうとしたが、大きなコルニスが出来ておって不可能なので、一旦、少し下ってからまた登って越中沢乗越へ出る。尾根の上はすこぶる風が猛烈なので、四囲の眺望をほしいままにする暇も無く、直ちに温谷を下り始め、小さい雪庇をくだき最上部の急斜面を過ぎてスキーを穿く。南向斜面の雪はクラストだが、北向斜面はパウダーのとても良い雪だので、調子に乗ってブンブン飛ばす。しかし転倒した際に各自五貫からの荷物を背負っている我々には起き上るのがひと苦労。雪崩は中ほどの所に、左手より三個所、右手より一個所ばかりかなり大きな上層雪崩が出ていた。余り斜面が長いのと、途中から雪が悪くなったのとで、しまいには足が疲れて滑るのが厭になるくらいだった。ヌクイ谷も終りに近くなった頃、ぶな林を抜けて、午後四時半、平の日電の小屋に着く。

この小屋は日電が黒部測量のために建てたもので、松岡、宮本の二氏が芦峅の宗作、嘉左衛門、重吉、徳蔵を連れて入っておられた。自分達は話には聞いていたけれどもこれはまた予想以上に立派なものだ。二階建で畳も敷いてあれば、なんとまあ窓硝子まではめてある、防寒、採光、煙抜きの装置に至るまでほとんど完全に近い。温泉と違ってここなら何日でもおられるなんて皆勝手なことをほざく。それにつけても冬季登山のことを思えば日本の山小屋も早くこの小屋をもっと山小屋らしくした程度のものになって欲しいものだ。実際現在の日本の山小屋の大部分は、積雪期においてはその内部は昼でもほとんど真暗で、煙抜きの装置も充分なものは滅多に無い。十日間も悪天候が続いて小屋の中に押し込められていれば、煙のためだけでも身体はすっかり参ってしまうのである。

三月三十一日、自分達の連れて行った四人にここでお借りした宗作、嘉左衛門を加えて六人の人夫衆は早くから橇を掛けに出掛ける。自分達も十時頃から米を肩に黒部を遡る。朗らかな天気。時々吹く風にも、もう春の近づいたことがうかがわれる、呑気なプロムナードの気分で広い河原の上を緩やかにスキーを運ばす。陽光を浴びた木々の影が雪面上に鮮やかな輪廓を投げ掛けている。

東沢の出合までに橇は五つばかりかけてあつた。両岸をへつらされた所は二個所、共に雪崩の後で一つは

平からすぐの所、他は東沢の出合近く、前者は右岸を後者は左岸をへつる。米は一ノ沢の出合まで持って行った。帰りは人夫衆と一緒にブラブラと帰る。

夜あまり良い月夜なのでスキーを穿いて外へ出る。ここから見た立山はことに美しい。黒部の奥には多分赤牛だろう、真白な山が見える。脚下には黒部の流れが、快い響きを残して原始林の間を縫って行く。そしてそれらすべてを照らすこの十六夜の月。何という恵まれた我々だろう。

いかに散文的な自分といえどもちよつと詩でも作りたいような気持になる。しかしそれも成らぬままに、ただ涙ぐましい感激の中に、声高く唱いつつ、彼方此方へとスキーを走らせた。

東沢ベースキャンプ

四月一日、人夫衆は朝早くキャンプを張りに出掛ける。自分等も松岡氏等にしばしの別れを告げて東沢へと向う。キャンプは予定通り、二ノ沢の出合に張られていた。重いのを持って来ただけあつて中々立派なものだ。これなら確かに粗末な小屋なんかよりはるかに勝ると大いに気を強くする。

キャンプに着くとすぐ今西、渡辺、多田、酒戸の四人は黒岳のレコノイットリングに赴く。もう人手もいらないので、四名の人夫のうち福松と由三とは最初の約束通りここから帰ってもらった。間も無くキャンプの中には樅の葉が敷かれ、その上に各自のシュラーフザックが並ぶ。それには西堀手製の組立式ストーブが真中に座を占める。今年の気温の高かったためもあろうが、キャンプにおける八日間の雪上生活において、馴鹿(となかい)のシュラーフザックさえあれば他の防寒具は一切不要であったくらい、このストーブの効用は大であった。

今西等の一行は地図上の東沢谷の東という字と、沢という字との間くらいまで行って五時頃帰って来た。でも目ざす黒岳はその姿をまだ見せなかった。

夜は初めて自分達の本当の住家に帰って来たような、暢(の)び暢びとした、しかし前途の希望に輝く張り切った気持で、赤々と燃えるストーブをとり囲んで今後の計画について語り合った。

四月二日

出発（六・〇〇）―赤岳下約二、六〇〇米の地点（スキーデポット）（一一・三〇～一一・四五）―尾根（〇・二〇）―黒岳頂上（一・〇〇～一・二〇）―スキーデポット（二・一五～二・四五）―キャンプ（五・四五）

今日こそ憧れの黒岳へ登る日だ。谷の朝はまだほの暗かった。しかし夜の間、音もなく谷々を埋めておった霧は、次第次第に空へと舞い上って行って黎明の冷たい空気が頬に快い感触を与えた。

午前六時出発、静かな谷の朝の和やかな空気を破りながら、自分達のスキーは硬いクラストの上を微かな音を残して進んで行く。ともすれば自分達の歩調のテンポは速くなりがちだった。幾度か左岸より右岸へ、また右岸より左岸へとスノーブリッジの上を渡って進むうち、背後に黒部別山、続いて立山が見えてきた。朝の陽を受けた峰々は皆桃色に輝いて飽くまで美しく、到底我々の形容を許さない。しかしこの深い東沢の谷底を登って行く自分達はまだ直接に太陽の光を享けることは出来なかった。しばらく谷底を離れて左岸の森林中を行く。森林中の雪は一昨日、昨日の晴天にも融解することなく、まだパウダーの状態を維持していた。森を抜けるとパッと眼前に、東沢の水源を為す高原が横たわる。それはもう今までの景色とは全く異なった、夢の国、お伽噺(とぎばなし)の国のそれともいえるような、夢幻的な、エキゾチックな風景だ。名も無い火打(しのへち)なんかいう山まで素晴らしく立派に見える。そしてまた赤岳と火打との間のコルの美しさは!!

やがて黒岳もついにその姿を現わしてきた。眩(まぶ)しいばかりに輝いた純白の雪、それに心憎いまで調和した漆黒の岩壁。この東沢の奥深く、王者の如く横たわっておる黒岳は今やその飽くまで均勢のとれた姿を、我々の眼前近く、澄み切った天空に高く聳立せしめている。自分達の期待はついに裏切られなかった。

自分達はなおも赤岳と火打との間の鞍部を指して、真一文字に登って行った。雪はほとんどぶからないので、スキーはトレナナージュして進む。傾斜が次第次第に急になるとともに先頭の交替が段々早くなってくる。二千五百米辺りからようやく左へ折れ、約二千六百米の地点で昼飯をしたためる。南の方の空にちょっ

と怪しい雲が現われて来たが、天気は先ず今日中は大丈夫らしい。ここをスキーデポットとしてクランポンを付け、両杖はピオーレに持ち代えられる。そして再び真一文字のひたすらなる登高が続けられて、ついに赤岳の東なる鞍部へ出る。真正面には穂高より槍、槍より更にその北鎌に続く一線がその英姿を現わして、積る雪も積る雪も振るい落して、大地の骨組ともいうべきその鋭い岩壁を誇っている。そしてその左に乗鞍、御岳を隔てて、笠が独りその純白なる秀麗の姿を示して、前者と良きコントラストを呈している。

今日は風が無いので尾根の上も暖かだ。ただ無言のうちにクランポンの刻み行く快い響きを残して自分達は歩みを運ぶ。雪が岩に凍り付いていないので予想された困難はほとんどない。かくて午後二時、思ったよりもはるかに容易に自分達はついに黒岳の頂に立つことが出来た。ただ我々の日から洩れる歓喜の叫びのみが静かな午後の谷々に響き渡る。北方遠く聳ゆるあの白馬の頂にも今日あたり四手井、山本、雨宮等のパーティが登っていることだろう。そして同じような思いをもってこの黒岳のあたりに眼を走らせているかも知れない。そして自分達も明日は赤牛へ、明後日は野口五郎へと、まだ人の足跡を知らないその頂上の雪を尋ねて登ろう。

喜一、栄作の二人は晩飯の都合もあるので、やがて直下の急斜面を飛ぶようにして下って行った。

かかる一万尺に近い山々の頂においてはその積雪期において滅多に得られないような割合に暖かい、風もあまりない天気を自分達は持ったので、平和と満足とに満ち満ちた頂上の憩いを思う存分楽しむことが出来た。

約一時間の後、登りよりも一層の緊張をもって降り始める。登りと同じコースを取り、尾根を離れてからは、スキーデポット目掛けてほとんど走るように一気に降りる。スキーデポットでまたゆっくり休息をとって、スキーに臘を塗ったり腹を拵(こしら)えたりして後、再びクランポンはスキーに、ピオーレは両杖に代えられていよいよ滑り始める。雪はウィンドパットに所々パウダーを交えて、余り快い滑降は出来ない。下の森林までほとんど全部斜滑降と横滑りのコンビネーションだ。下部の雪は一層悪く全く腐ってしまってほとんど滑走を許さないくらいだ。これは太陽のためよりもむしろ、この日昼頃から吹き出したフェーンのためらしかった。

自分達は疲労した身体を愛する二個のプランシュの上に乗せ、しかし満たされ切った心を抱いて、ただ黙々とベースキャンプへと滑り続けた。

この夜はこの時まで大切に持って来られたウィスキーの口も明けられ山旅にふさわしい豪遊の宴が夜遅くまで続けられた。

四月六日

出発（六・一五）―スキーデポット（七・五〇～八・一〇）―赤牛頂上（一〇・四〇～一一・〇〇）―スキーデポット（一一・一〇～一一・四〇）―キャンプ（一・三〇）

天気は余り思わしくない。しかしキャンプの食糧もようやく残り少なになったので多田、酒戸、細野、奥の四人は喜一を伴って赤牛へと向う。クラストの上へ昨日降ったパウダーが二寸ばかり積っていて、スキーはかなり後滑りする。約千七百七十米の辺りをスキーデポットとして、クランポンを付け、赤牛のすぐ北から出た尾根を登る。最初三百米ほど森が続く。時々日の光が樹氷を付けた木々の間から洩れて来て美しい。雪はかなりぶかるが思ったほどのこともない。森を抜けると素晴らしい斜面だ。やはり無理をしてもスキーを持って来たら良かったというような気もする。ただ無闇に登り続けて十時四十分頂上。ひどい風だ。楽しみにしていた黒岳の眺望も霧の中にぼんやりと見えるばかり。弥陀ヶ原が手に取るように見える。自分達も二週間前には東沢の奥に思いを馳せながら、そこを通っていたのだなあと、ちょっと感慨に耽る。

風も強いし、眺望も霧のために余り利かないので、直ちに降り始め、下の森まで五百米を一気に二十分で駆け下る。ここまで来るともう風も穏やかだので、昼飯をしたためる。先へ降りて行った喜一が何か叫ぶので見ると向いの尾根に羚羊(かもしか)が走っている。

雪はすっかり水気を含んで軟かくなり、クランポンに付着して歩き難いことおびただしい。まるで高下駄

を穿いてべた雪の上をいくようだ。幾度か転倒しかけながら、上りの足跡を辿って東沢まで下ると、西堀、今西、渡辺が遊びに来ているのに出会った。クランポンをスキーに穿き代えて一緒にぶらぶらとテントへ帰る。

二三日前に人夫衆がキャンプの傍に、雪を二間ばかりも掘り下げて、その上に携帯天幕を張って立派な炊事場を作っていた。雪の下から出て来る水がまたすぐに雪の下へと隠れて行くのもちょっと面白い。

この東沢のキャンプは薪木だけはすこぶるもって豪遊だ。今日も帰って来ると栄作が元気な顔に汗を流しながら、うんと積み上げて薪木を割っていた。

四月七日

出発（七・〇〇）―スキーデポット（九・二〇）―野口五郎頂上（一二・〇〇～〇・一〇）―スキーデポット（一・一〇～二・四五）―キャンプ（四・〇〇）

久し振りの快晴だ。パーティを二つに分けて一つは鳥帽子より三ツへ、他は野口五郎より三ツへと向う。

七時キャンプ発。黒へ行く時はかなり長く思った東沢の奥まで、今日は知らぬ間に来てしまう。野口五郎の北から出ている尾根に取り付いて、百米足らず登った森の端をスキーデポットとし、クランポンを付ける。半ば凍った雪上を歩むたびに発するクランポンの音が快い。ふり返って見ると、黒岳が眼前近く真正面に横たわっている。ここから見た黒はまた一段の美しさだ。単調なジッグザックを幾度か繰り返し約八百米ばかりの登りを二時間半ばかり費して上の尾根へ出る。とても風が猛烈だ、身体を風の方向に倒しながら進む。それでもなお吹き飛ばされそうなので、五六歩走っては身体を伏せなどして進む。顔の筋肉が硬化したようでまるで感じがない。頂上十二時。三角点は全く露出し、付近の土も現われていた。寒さのために飯を食う気もしないが、それでも露出した土の上に寝転んで、わずかに風を避けて四囲の眺望を貪る。東沢に比して高瀬の谷は驚くほど雪が少ない。西堀等の一行が見えないかと三ツの方を探したが見当らなかった。

風が強いので、三ツは抛棄して降り始める。途中で飲んだ暖かいテルモスの紅茶でやっと人心地がつく。一時十分スキーデポット。ここまで来ると上の風が嘘のようだ。朗らかな天気で昼寝でもしたいくらい。ゆっくり昼飯を食ってから東沢まで降り、ここでまた煙草を吹かしなどして休んでいると、鳥帽子から三ツ、野口五郎と縦走して、五郎のカールから降りて来た西堀、今西、渡辺の一行に出合う。自分達はスキーを穿いているので、 一足先にキャンプへと滑り帰る。

ベースキャンプ―大町

四月八日、快晴。志して来た山々も、今はすべて登り尽くしたので、今日は休養日に当てて平へは明日帰ることにする。午後からキャンプの後ろのタンネの林中にシュラーフザックを持ち出してティーパーティを開く。雪焼に真黒になった顔が七つ、皆いかにも嬉しそうだ。寝そべりながら煙草を喫(くゆ)らしていると、紫の煙の中に火打の姿が見える。暖かい紅葉を啜って雑談に耽るうち、いつか華胥(かしょ)の国に遊ぶ。

夜はキャンプの最後の夜とて、皆有らん限りの声を出して知っている限りの歌を合唱する。窓には星暦が降るばかりに輝いていて、いかにも最後の夜にふさわしい。

四月九日、八日の間自分達に愉快な褥を与えてくれた、東沢のキャンプも今日はいよいよ引き上げだ。そこにおける懐かしい生活はよき思い出の一つとして自分には一生忘れられないであろう。 さらば黒岳よ!! 東沢よ!!

雪は来た時に比べればかなり少なくなり、スノーブリッジも大分落ちていた。それに来る時に架けた橋もほとんど皆流されてしまって、所々へつったり徒渉したりしながら平小屋へと帰る。

四月十二日

出発（六・四〇）―南沢出合（八・〇〇）―不動沢乗越（一〇・五〇）―濁（一・二〇～二・〇〇）―笹平（五・〇〇～八・〇〇）―大町（一〇・〇〇）

永々御世話になった松岡氏始め宗作、嘉左等に別れを告げていよいよ帰途に就く。最初は針ノ木を越える

つもりだったが、東電の小屋に来ていた兵三郎が南沢を登って不動沢を下る方が、雪崩の危険も少ないし行程も楽だというのでこれに従う。

南沢はスキーは担いで登る。下部の方にかなり大きな雪崩が出ていた外、無数の小雪崩が谷を埋めていた。

最初から怪しげな空模様だったが、乗越の少し前からとうとう雪が降ってきた。乗越における温度零下七度。不動沢はとても悪い沢だ。到る所デブリが充満していると云ってもあえて過言ではあるまい。中には高さ一間ばかりの堤を築き輝いて、数十の大木を引き倒しているのもあった。天気の日なんかには危くて到底通れるような沢ではないが、幸いこの日は天気が悪く、気温も低いので雪崩は先ず安心だ。

幾度かデブリのためにスキーを脱がされて濁へ着いたのが午後一時、東電の小屋で休ましてもらって飯を食う。野口五郎から見た時にも余り黒いので驚いたが、高瀬の谷は山一つ隔てた東沢とは比べものにならぬほど雪が少なく何となく汚い。それに水力電気の鉄管は厭だ、あれではもう高瀬へ入る気もしない。鉄管のあたりには水なんかてんで流れていないのだからひどい。それよりもう所々雪が消えて、下のトロッコの軌道の出た歩き難い道を笹平五時発の東電の貨物電車に乗せてもらおうと急いだが、ついに遅れ、笹平でまた茶の接待を受けながらゆっくり飯を食う。ここまで来るともう雪もほとんど無い。荷物は翌朝の電車で送ってもらうことになったので空身でテクテク歩いて大町の対山館に着いたのはもう十時に間も無かった。(奥)

黒部川の冬は事実我々の期待に背かなかった。

我々によって積雪期の初登攀をなされた黒岳はどちらから入るにしてもかなり奥まっているので多くの時日を要する。たとえ毎日快晴ばかりとしても予定のルートを行けば芦峅から大町まで十日ほどかかる。例年のあのシーズンの天候は、三日のうち一日だけが晴という統計になっているので我々のルートを完行するには三十日を要することとなる。

この長い間の食糧等を運搬するに要する多大の費用について我々は次のような計画を立てた。一行の荷物は米を省いて最小限四人の人夫を要す（積雪期は一人約六貫)、この荷物は人夫共十一名の一行の副食、糖分、天幕、ストーブ等で、その他の露営地用具やスキー修理具等は全部我々の分担とした。我々はこれらの外に主食たる米をいかにして運ぶか。

立山温泉には充分な蓄えがあるので温泉までは運ぶ必要がないが平には米が無いと考えねばならない。この平よりの米は温泉から運ぶことにした。即ち二度温泉から平まで通い一度は各自の荷物を、一度は米を運ぶ。そしてこの四名の人夫のうち二名は東沢でベースキャンプを張れば直ちに芦峅へ帰らすことにしていた。

こんな方法でしかも充分日程を切り詰めてちょっとの天気を逃さないように計画を立てかつ、平の日電で予期しない米の補給を得てさえ一月を要するほど我が黒岳は奥深かった。

それにこんなにまで荷物や天候に拘束された我々にはまだ雪崩からの危険がある。しかしこの危険は予期していたように恐ろしいものではなく、充分な注意があれば避け得る危険の一つだということを知り得た。我々は一体どんな雪崩を見たかについて、今西の詳細なるノートを左に引用する。

立山温泉にて見たる雪崩（二月二十八日正午)。場所立山温泉北、松尾峠より続く尾根、種類乾燥新雪表層雪崩。

二十五日から降り出した雪は二十六、七と続いて二十八日に快晴となった。雪崩は午前中も出ていたらしいが丁度十二時過ぎ我々が温泉から出て付近の岡に練習に行った頃、真南よりやや東に向った松尾の断崖からほとんど連続的に表層雪崩は落ち始めた。急なバーンはこの斜面だけで大きいのが四つほどある。一つのバーンにおいて例の「数分おきに落ちる」雪崩を見た。が数分を待たず一分間に二つくらい続いて落ちることさえある。二時頃太陽がやや西に傾くと共に今まで落ちていた斜面はようやく止まり、尾根一つ越した少し西向になつた斜面で今度は盛んに落ち出した。この雪崩について気のついたことは一つのバーンに出てくる雪崩は太陽の直射と関係がある。即ち太陽が或る位置にある間はこれに面している雪が崩れ落ちて雪崩を起す。この雪崩は何回も引き続いて起る。そして太陽が運行するうちついに止んでしまう。がこれでこのバ

ーンの雪崩は止ったと思ってはならない。或る時刻を経て太陽の位置が変ると、今度は前には静止していた雪が直射をうけて雪崩れ出し再び連続に雪崩は起り始める。かくの如き雪崩はその時の温度よりも日光の直射により大なる影響をうけるらしい。という根拠は我々が弘法から松尾峠を越して温泉へ下ったのは丁度三月二十四日でその前日は正午前から雪が降り出した。また藤橋に二日いた間も弥陀ヶ原は雲に掩われていたから多分雪は降っていたものであろう。これらの降雪をうけて二十四日天気になった。松尾峠へ着いた時十二時半、この時峠の三角点の北にある隆起を越した鞍部の断崖でこの種の雪崩が連続におちだした。我々は非常に不安になったが一時過ぎまで待っていると太陽は曇り、かつよほど傾いたためとみえ、ついに中止するに至った。峠から下るクーロアールは東向きだった関係上もっと早くに出たものと考えられる。もっともこの両日はともに非常に風が少なかった。この種の雪崩は、続いて雪の降る時積り切れずにずって雪崩を起す。我々が温泉に滞在した二日間は絶えず雪が降っていたから雪崩も度々出ていたものらしい。昼間は物音に紛れて聞こえないが、夜一人寝二人寝して、一番遅くまで残った二三人がポツリポツリ語る山の話の絶え間には例の底響きのする気味悪い音をしばしば聞いた。ただしこの種の新雪雪崩は降雪後の一日の快晴でほとんど出尽くすらしいから、その翌日を選んでかつ、日射を念頭においていたなら、危険をほとんどなくすることが出来るのでなかろうか。この点で松尾峠をスキーで越すことは危険地域ではあるが立山温泉へ越すルートとしてこれ以外にない以上、承認さるべきであると思う。ただし雪崩のデブリがよほど邪魔になって困った。峠の直下は五十三度もあるのでここはしばらく右手の尾根を絡んでクーロアールに下りた。

松尾峠及び温泉付近は先にあげた滝のような雪崩ばかりであるが、二十八日午後一時四十四分天狗平の直下に出た表層雪崩は実に素晴らしい大きいものだった。その濛々たる雪煙と何者をも呑み尽くさずでは止まないという巨龍のようなツンゲの起ったのにはただ感嘆の声をもって接するのみであった。この雪崩は小さな谷を一つ越えた対岸の低い尾根を完全に乗りあげてしまった。これは断崖に見るものと全く異なって積雪斜面が大きく続いて立派な Abbruchkante（切断面）を残すたちのもので一層恐ろしい奴である。ただ一回しか出たところは見なかったがこの種の雪崩の存在は後にヌクイ谷や東沢でそのデブリとカンテから推察することが出来た。ただしこの天狗平の奴はスキールートから遠いから危険はない。またスキールートになっている所にはかかる大斜面なく、例の「滝」ばかりだ、もっともこの滝は二十八日にも松尾付近で随分出たことと思うが温泉からは陰になって見えなかった。

ヌクイ谷。三月二十九日、温泉から越中沢乗越を越えてヌクイ谷に下る。ヌクイ谷の如く理想的なスキールートは日本アルプス中のあらゆる谷の中でもほとんど五指の中に屈すべきものであろう。人夫達は右岸から大きいのが出ると言っていたがこれはまだ出ていなかった。左岸で地図に一、八〇〇米の標高ある点で出合う上部にガレのマークある枝谷からすばらしい表層雪崩が出ていた。これはデブリの表面が浸潤して少し透明であったところから察し、この日出たものとは思われない。ただ二十八日以前のものならもっと雪をかぶっているはずだから我々は二十八日天狗平下の大雪崩と同時期のものと判定した。ここより下流にこれよりやや小さいのがやはり左岸の枝谷から二つの表層雪崩が出ていた。これら三つの雪崩はいずれも完全に谷一杯を乗り切ってしまっていた。（以上今西ノート引用）

東沢も大体そのデブリから察すると、新雪雪崩が大部分を占めていた。

概して、これらの新雪雪崩を二大別することが出来るようだ。一つは新雪が或る程度まで降れば、何度でも出るというもので例の「滝」のような雪崩や、東沢の下流の方や黒部川に多かった地形の小さな所に出る雪崩がこれに属する。他の一つは普通の状態ならば一年に一度しか出ないもの、即ち一度雪崩れたら二度とはなかなか雪崩れないものでこれはその地方の人達が「いつもここには大きな雪崩が起る、今年ももう出てしまっている」などというもので上部さえ急斜面なら随分遠くまで押し出す種類のものだ。例の天狗平下の大雪崩、ヌクイ谷、東沢上流のもの、また、中谷の雄山沢から越すコル付近から黒部川との出合付近まで来ている大きなものなどこれに属する。

これらの新雪雪崩のメカニズムについて、前者は、古い雪の上に新雪が一尺近くも積ってその新雪の表面

のみが日射によって融け比重を増し中間のまだ融けない粉雪が一種の滑剤のような働きをするのではなかろうか、これはフェーンの影響よりも日射により大なる影響がある事実とよく一致する。また、こんな雪崩は風などのため雪全体がしまれば起らなくなるし、快晴一日をおけば日向の雪崩れるべき場所はほとんど皆雪崩れてしまうものだとも考えられる。後者は積った雪が或る一定の条件に当てはまって初めて出るもので、この条件なるものは適確に解らないが、天候の或る長いセリーズによって作られるもので、多分この長いセリーズは一冬に四度も五度も繰り返し得ない、即ち一冬かかってはじめて出来る長いセリーズであるようだ。この雪崩は前者に比してはるかに大きく恐ろしいものであるが一度出てしまったらかなり安心だし、また出る場所も地方的に定まっているものだから、まだ出ていなかったら充分の注意が必要だと思われる。

東沢の上流にあるこの種の雪崩は正確には解らないが、枝谷のかなり高い所から多量の雪が雪崩れはじめ非常な速度で出合近くの平地になった所を通り過ぎ三、四町も離れた場所に岡のようなデブリを残し付近の樹木は枝を奪われているなど数多く見受ける（挿入地図の→印）。

この度の東沢行においてはあまり旧雪雪崩は多くなかった。ただ我々の天幕（二ノ沢出合上流二町右岸）の中から四月三日午後一時過ぎに目撃した湿潤旧雪表層雪崩がある。これは三、四両日のフェーンで出来た、所謂グラニュラー、クラストがかなり深く、なおその下に湿った粉雪があって意外な急速度で幅十間くらい雪崩れたものだった、この外東沢に二三黒部川に二三あった。多分同時期のもの之察せられる。

これらの旧雪雪崩はさきの新雪雪崩と異なり気温の影響を多分に受けるものと思われるから新雪雪崩が出なくなってから旧雪雪崩が盛んに出るようになるまでにはかなりの時日を要するらしく思われる。私が五月下旬劔沢三ノ窓の出合で二三日いた時に絶間なく旧雪の落ちるのを見たが、多分あの時期が旧雪雪崩の全盛時代だったのだろう。東沢はまだその時期ではなかった。そしてまだ全盛時代に至らぬ時にも事実起ることは起るが、それは気温からこれに対する危険を予知することが充分出来ると信ずる。この点において我々が楽しい東沢の天幕生活をおえて四月九日平へ引き上げた日は連日の快晴のため気温が高かったのに旧雪雪崩の危険地域を通過したことが（東沢出合下三町ほど右岸）あるが、これは我々において唯一の恥ずべき行為であった。ただ僥倖にも雪崩れなかったまでである（挿入地図↝印は旧雪雪崩）。

以上はすべて表層雪崩である。あの地方には全層雪崩はほとんどなくただ極小規模（面積一坪位）のものが一二あった。

私はいろんな写真などで見る広い面積の全層雪崩はより標高の低い草山では度々見た（関温泉やまた例の横山岳のなど）。しかしまだ日本アルプスでは見たことがない。日本アルプスでは大きな全層雪崩はないのではなかろうか。表面の雪崩れるべき雪は冬、春の間に雪崩れて下層の雪は地肌の関係上そのまま消えたり、また夏雪渓として残るのではなかろうか。これはまだ残された問題の一つである。

我々が平より大町へ出るべく取ったルートの南沢は「滝」に属する雪崩で充満していると言っても過言ではない。不動沢は南沢より雪崩も大きく旧雪雪崩であったょうだ。また右岸からは素晴らしい全層らしい雪崩が出ていた。多分この不動沢は低地の影響を加味しているのであろう。一度高瀬川に出ると恐ろしい全層雪崩につづく山崩れが軌道を深く埋めていた。

私は「雪崩の危険は低地ほど多い」とあえて言いたい。

以上のような諸種の雪崩の危険のある谷を通過せねばならない時その困難を支配するものは実にその水量と雪量にある。黒部川は我々が予想していたよりはるかに水量多く、夏期と大差ないように思われた。川幅は三四間あるうえに雪の堤が高さ七八尺はある。しかも我々が利用し得たスノーブリッジは雪崩のツンゲで出来たものがただ一つあっただけである。無謀な冬期の渡渉は許されない。我々は架橋せなければならなかった。幸い日電の宗作、嘉左衛門の二名を加えた六名の人夫があったので丈夫な橋を四つまで架け得られた。これらはすべて二間以上あった。帰りなど唯一のスノーブリッジが落ちていたために我々が冒さねばならなかった危険があった。東沢は幸い、数町のうちには必ず安全に渡り得るスノーブリッジがあった。もしあの時期より半月も遅かったらこの困難は数倍されたであろうと思われる。

かくして東沢に入るとしても我等は日々のアルバイトに対して充分の慰安を与えてくれるキャンプを持たねばならない。それには十二人が楽に寝られる大型天幕（五貫）と折畳式ストーブ（一貫五百、煙突共）及び各自馴鹿（冬毛）のシュラーフザックを用意した。そしてそれ以上何物も必要とせなかった。雪を踏み固めて樅の葉を敷いて作った褥とよく枯れた唐松を焚くストーブとは我々には有り余る安息を与えてくれた。

東沢には燃料、水利、雪崩安全地域など積雪期の天幕生活にふさわしい所はいくらでもあるが我々の、二ノ沢の出合のタンネの森の端れに立てられた丈夫な天幕はどの山小屋よりもゆったりした、明るい、温かい、煙らない居心地のよい八日間の楽しい生活を与えてくれた。私は以上のような準備をして積雪期の天幕生活を味われんことを望んで止まない。

このベースキャンプからは軽い一日のアルバイトで各々「黒岳」「赤牛」「野口五郎」「三ツ」「鳥帽子」等へ登れた。

憧れの黒岳へ登る時が来た。全く記載にない積雪期の谷を遡る緊張した気分が漲った。最初はスノーブリッジを右左に渡らねばならないほど谷は狭く雪崩の跡も多かった。赤牛頂上より出ている大きな谷のデブリを越せば谷は広くなり、左岸の森林を通りまた右岸の大雪田など通って火灯のコルへ一直線に進む。雪は堅くてトレナージュした。ついに見る憧れの黒岳！　それはかつて「冬来りなば……」と想い、ふりかえりふりかえり下った、あの夏の日とは全く異なった魅力を投げていた。我々が案じていた雪庇はちっともなかった。一体雪庇は余り強い風では出来ないため、南北の尾根には少ないようだ。積雪期の尾根はロックでない限りどこも歩きやすい。クランポンを軋らせながら狭い頂上へ馳せ登る。

歓喜に溢れた雄叫び。頂上はわずかに石を露出していた。気温に恵まれて充分な頂上の憩いの出来たことを心から喜ぶ。帰路は登路と同じ。ただフェーンのためスキーは充分味わえなかった。でも雪崩の心配はなかった。ついに黒岳は登られた。その夜の天幕は歓喜に燃えていた。赤牛はその裾が東沢へドッカと落ちているためちょっと取り付き難い。しかし尾根へ上ってしまえばスキーゲレンデとしてもよい山でスノードームであるところが黒岳とよいコントラストをなしている。

鳥帽子岳や三ツ岳は谷からすぐ急な木の多い痩尾根を登らねばならないし、また日本アルプスの通性として西斜面は雪が少ないので全くスキーの使用を許さない。我々の登った時も天幕を出るなりクランポンをつけ少し二ノ沢を登って左側の尾根を無闇に鳥帽子へ登って、強い強い風に倒されながら、広くバルコニーになった尾根を三ツ岳へ縦走した。野口五郎や三ツ岳から見た雪の山々は決して忘れられないものの一つだ。

野口五郎は三ツ岳や鳥帽子に比してはるかにスキー味がある。例のカールに大きなスプールを印して下ったらきっと面白いに違いない。

一般にこれらの東沢を守る山々は決してスキーの面白味はない。ただ山そのものに対する満足を与えてくれた。かくて目的のすべてを果した我々は心からの援助を与えて下さった日電観測所で再び山の饗応をして頂いた。この観測所は静かなブナの林と黒部の流に挟まった平にある二階建のバラックで我々の行った時には階下が八分通り埋まっていた。保温、採光共に完備し正に至れり尽くせりである。加うるに松岡、宮本二氏の手厚い歓迎、我々は心から感謝したい。

我々の成功は一に新旧雪崩の中間静止状態及び冬、春の転換期の好天気を利用せることと平で充分な米の供給を得たことに帰すべきである。　（西堀）

16　冠 松次郎 「春の後立山」（部分）『立山群峯』

1929（昭和 4）年 5 月 25 日刊　第一書房発行

要　約

1927（昭和 2）年 6 月 15 日の記録。

メンバーは、冠松次郎、岩永信雄、宇治長次郎（大山村の案内人）。

行程は、12 日に平を出発、13 日に小スバリ沢を遡り、14 日にスバリ岳のコルを経て針ノ木峠を往復し、赤沢岳手前でビバークし、翌 15 日に赤沢岳頂上から西尾根 3 峰（猫ノ耳）まで往復。

※赤沢岳西尾根 3 峰（猫ノ耳）初下降、初登攀。

※冠松次郎と岩永信雄は日本山岳会会員。

赤澤岳に登る

六月十五日　午前七時泊場發、八時五分赤澤主峯頂上、八時四十五分出發十時十五分第二峯を經て第三峯の猫の耳の上に登る、十時四十分發、十一時四十五分赤澤主峯歸着、午後零時四十分發、一時四十分鳴澤岳頂上、三時岩小屋澤岳頂上、四時三十分棒小屋乘越の一つ手前のオク小澤上の鞍部泊

月のよい山上の天幕の中でまどろんでゐると、焚火の周りに蹲（うづくま）つてゐた人夫が切りと騒いでゐる。首を出して何だと聞くと、今雷鳥が來ましたと云つて一人はその方へ立つて行つた。人を恐れない高根に棲む鳥は、珍らしい物を見たさにこの野營地を訪れたのであらう。

あまり騒がれたのでまごついてゐたやうであつたが、やがて月あかりの下を雪の上を靜かに歩みながら偃松の中に隱れてゐつた。昨夜はカモシカの泊場を騒がせたが、今夜は雷鳥が訪れてきた。明日あたりは熊に行き遇ふことかもしれない。

午前四時。天幕を出て西方を見ると、白雪に蔽はれた萬山の姿は、初冬の朝のやうな冷たさ視界に充滿してゐる。

山上だけに氣溫は隨分低く、手足はこごえるやうであるが、快晴の氣は身に浸みて壯快極まりない。

やがて東天からオレンジ色の光りがたなびくと、立山群峯を中心とした奥越中の大山岳の氷雪は華やかな色彩に甦つて來た。

黑い菱岩と殘雪との面白い隈どりを爲した立山本峯の巨體は、淡紅色に匂ふ萬朶の櫻のそれの如く絢爛として澄み切つた朝空から大きく浮び出てゐる。

あまり氣持がよいので尾根上を遊歩してゐると、足許から微妙な音響が渡つてくる。山稜に打ち寄せてくる朝風に、波の如く動いてゐる偃松の幹や葉ずれの音が、爽やかな奏樂となつて私の身邊をとり巻いてゐるのである。

高根の叢松、それを弄んで造花は無絃の琴を彈じてゐるのであらう、松風、爽籟その美しい聲を聞いてゐると、樂園の中をさまよつてゐるやうな氣持がする。

日輪が昇り始めた。爺ヶ岳の右の大スロープから、眞紅にきらめいてゐる大塊の躍動につれて、千山萬岳皆その光りに折舞して生々の氣は山谷に漲つてくる。

午前五時半、野天に車座となつて、雪を溶して炊いた飯と味噌汁をすすり込み、茶を煮、甘味を味はつて朝食を終つた。赤澤岳が天幕の上から悠然として聳えてゐる、その眞中に垂れてゐる大きな雪の縞が朝日に輝いてゐる樣は頗る壯麗に見えた。

午前七時野營地を後にして、山稜を越中側を絡んで行く。一時間程で赤澤岳から三つ程手前の隆起にかか

ると、そこからは山の色が著しく赤味を帯びて、名の如く赤澤岳の領域に入つた。

立山の方を見ると、サル又の大雪窪の下に御前谷の深い溝が、新緑の尾根の中から口を開いて、中央部の御前ノ瀑とその周圍に立て廻された立派な岩壁とが鮮かに見える。行く手には赤澤の第一、第二、第三の峻峯はすぐ鼻先に峨々として、黒部谷を目がけて薙ぎ込んでゐる。

午前八時五分赤澤岳の頂上に登つて、三角點の處に荷を下ろして休みながら黒部本流の川筋を見る。

上流は針ノ木岳で見たものを縦觀する位置にあるが、下廊下の方だけはこの山頂に登つて初めて視界に現はれたので、廊下の徒渉點、黒部別山澤の落口附近が、脚下數仭の彼方に、深い岩壁の底を殘雪と奔流との錯綜を見せてゐる。

第三峯の猫の耳の岩頭を極める爲、私等は國境の山稜を離れて、黒部谷へ向つてロープと寫眞器丈を携えて、赤澤の主峰を發つた。

赤澤岳の頂點から廣い岩稜を下つて、第二峯の突端に登り、山脊を離れて南側に下ると涸澤の上に出る、大スバリ澤源流の一つで、澤の中に丸い脊を現はした巨岩が瀧のやうにつづいて、その窪や割れ目に枯草や灌木がしがみついてゐる。

辷るので注意しながら約四五十間も降つて山側にうつり、偃松を分けて右の方へ廻つて行く、處々に露出してゐる岩壁を昇降したり、横に廻つたりして又偃松の藪の中をその枝をたよりに横にへつつて行く内、第三峯から南に出てゐる小隆起にとりつき、二つ程それを越すと殘雪のある處へ出た。

もうそこからは猫の耳は手のとどくやうに近く、第二峯の赤澤に向つてそぎ落された赭黒色の堅剛な大絶壁は、獸の脊のやうに美くしい皺を左右に彫飾して、直立數十丈のその稜角は、力の漲つた偉丈夫の筋肉のやうなたくましさをもつて谷に向つて蹈み止まつてゐる。

この側壁は猫の耳の左側の岩稜八十度位のものと門柱のやうに相對して、大きい窓となつてゐるその間から、遠くは白馬、清水平の山々の殘雪、近くは牛首の尾根、東谷山、奥鐘山につづく尾根が美しく重錯して、左手から仙人岳のカンドウ尾根、黒部別山の壁尾根が磊々として相寄つてゐる。窓の底をのぞくと、そこには赤澤の源流が雪溪となつて遙か下方に小さくつづいてゐる。

殘雪で渇を醫して、又偃松に縋つて登り、猫の耳の股の處へ辿りついたのは午前十時十五分であつた。この登りは偃松がある爲に安全であるが、傾斜が急なので岩ばかりではロープを用ひなければとりつけない處が多い。

猫の耳と名づけたのは立山方面殊に内藏ノ助澤方面から見ると、この岩峯の整つた二つの岩頭とその間のたるみが、丁度猫の耳とその頭とによく似てゐる爲であつて、登つて見るとたるみには偃松が疎生して殘雪が少しあつたが、二つの峯頭は全く岩石によつて組み立てられてゐた。兎に角この峯は私等が黒部川を渉つてゐるとき一番氣にかかつてゐたもので、今度は漸くその上を極めることが出來たので頗る氣持がよい。

この峯頭から黒部川に向つて削立してゐるスラップは、鰹節を立てたやうな奇拔な山壁を爲して、その峻しさは第二峯の大絶壁を凌ぐ程であるが、頂上からは却つて岩のヲデコに隱れて見えない。

私等は左峯の頂點の僅かばかりの岩の間に立つて、黒部谷を中心とした山谷の雄大と岩壁の壯麗とを賞した。

赤澤岳も第三峯迄下ると、對岸の山々は近く聳えて、その岩壁は益〻雄峻を競つてくる。丸山がすぐ鼻先に駱駝の脊のやうな瘤をつらね、黒部別山との間に内藏ノ助平が眞白に窪んでゐる。その下からかかつてゐる内藏ノ助谷は、黒部川の落口近くまで雪溪がつづいて、兩岸の新綠は雪に映じて目覺めるやうだ。

黒部別山は赤裸の全容を擴げて、我と對頭に蟠踞してゐる。大タテガビンから徒渉點に至る間の岩壁の大露出や、黒部別山澤左岸にトサカ立になつた、魚のヒレのやうな縞を現はしてゐる、壁尾根の側面が鮮かに見えて來た。黒部別山澤の雪は瀧の如く急激に落ちて、斷落してゐる間のクレワ゛スや、渦の如に黒く滲んでゐるヌマの痕も物凄いやうだ。

黒部別山の左上に池ノ平の窪が眞白に光つてゐる。その左には劒の巨體がのしかかつて、右には仙人の三

山、毛勝の連峯がやや霞んで後立山側の長大な尾根と相對してゐる。

白馬三山、旭岳、清水平は白雪の世界で、奥鐘山が餓鬼岳の尾根の先から瘤のやうに飛び出してゐる。黒部谷も大分雪が消えたので、あの下あたりでは日電の人達がそろそろ仕事にとりかかつてゐたらう、小屋場に山側に或は川筋に蟻の如く蠢いてゐるその人達の集團を思ひ浮べて夏の谷旅を回想した。

猫の耳から見た黒部谷の眺は赤澤の主峯からのと略ぼ同じであるが、谷に向つて可なり下つてゐるだけ、森林や川瀬が鮮かに見える。もう赤澤岳を越せば優美な上流の溪觀を見られないので、私らは展望に撮影に時をうつして名殘りを惜んだ。

歸りには第二峯に上らずに、斜に偃松を横つて、涸澤からザレの山坂にうつつて、午前十一時四十五分に赤澤岳の頂點に戻つた。

照りつける山頂で雪を溶して茶を煮、中食をすませて鳴澤岳に向つて下る。

行く手には鳴澤、岩小屋澤、爺、鹿島鎗の大岳が、右から左へとカギの手に折れ重なつて、漸次山勢を強め、殘雪も從つて深くなる。然し鳴澤岳のみは殆ど殘雪をつけずに、磊磊たる赭岩は信州側に向つて壯大な崩崖を爲して、この春出たと云ふ大雪崩れで、籠川谷に下りてゐる大屋根は慘たらしい程赤裸に剝がれ、數千數萬本の大木は、皆枯木のやうになつて算を亂して仆れてゐる。

反對側を顧みると、鳴澤が可なり大きな雪溪を造つて黒部谷の方へ落ち込んでゐる。この方面の支流は谷底からのみ見るとどれもあまり狹くなつてゐるのでだまされ易い。

岩稜を傳つて午後一時四十分鳴澤岳の頂上に着いて、直ちに岩小屋澤岳との鞍部に向つて下つて行く。山々は著しく霞んで、尾根上は風が強烈になり、雨くさい雲が四方で騒ぎ始めた。

クレワ゛ス(原文ママ)で段を爲した黒部別山澤の雪溪、その上に夥しく印せられたヌマの痕や、劒澤の『大瀑』の下手で仙人山から入つてゐる涸澤のタルなどが益〻手近に見えてきた、黒部別山の大岩壁は何と云ふ立派さであらう。ロツクハンターに見せてやりたいくらいだ。

脚下からつづいてゐる新越澤の長大なのに驚かされる。二俣の少し下の赤ガレの中を、谷底に刻みつけられてある東信道もその邊は隨分昇降が甚だしい。

岩小屋澤岳の黒部向の支脈、二〇六七米突の峯に到る大尾根は、堤のやうになつて峽谷に向つてなびいてゐる。皚々たる白雪に埋めつくされてゐるその中を、唐檜や栂のの大森林の集團が、美しい隈どりを爲してつづいてゐる。廊下の徒渉點に向つてゐる壁尾根も、棒小屋澤落口にまで延びてゐる大尾根も、棒小屋の二俣に下つてゐる櫓のやうな尾根も、その突端は皆膝を立てたやうになつて、谷に臨んで危く止まつてゐる。

雄大緩慢な大尾根も、廊下の上に到ると皆その先から斷ち截られ、菱壁となつて削げ落ちてゐるので、もう脊梁の山上からは容易に黒部の川瀬を望むことが出來ない。

漸く新越乘越へついた、唐檜と白樺のこずんだ森林が美しく配置されて、その間から雪山の豪麗さを眺め得らるるこの鞍部ほどよい感じのする所は、針ノ木岳から白馬山に到る脊梁にはないであらう。

岩小澤屋の登りにかかると雪が頓に深くなつた。もう間もなく解けつくさうとする名殘の雪は、大分弛んで足が可なり潜るし、雪解の跡のザレの斜面は無性に辷る。切開けはその軟かな雪に埋めつくされてゐる爲に、ザレと偃松とを絡んで行く我等の歩行は困難の割に捗取らない。立山側の山稜ならば可なり低い丸山の山脊でさへ、數丈の深雪の上は非常に氣樂に迅速に歩くことが出來るのであるが、後立山側は主脈の脊梁でさへ雪解の後の泥路を行くやうな處が多い。

新越の左俣がすぐ下に、これも長大な雪溪となつて、なだらかに黒部谷へ落ちて行く、二俣の上流で谷筋は尾根の間にかくれてゐるがその下暫くの間はまだ可なりなだらからしい。然し黒部谷近くなると山勢は急迫して、廊下に向つて峻しい壁尾根の先が幾つも入り組んでゐるのが見える。あの下は瀑布の連續である。

岩小屋澤岳の一峯を越すと、その先に又二六三〇・三米突の最高峯が聳えてゐる。峨々たる赭岩をもつて丸く蟠つてゐる鳴澤岳を越して頭の小さいすつきりと延びた、岩小屋澤岳の雙峯に達すると、殘雪は信州側に堤のやうにつづいて偃松はそれに竝走して越中側を領してゐる。そして周囲の情景は北に進むに從つて著

しく高山的の色調を增してくる。

棒小屋澤の大谷を隔てて、牛首岳がすばらしい殘雪に粧はれて、夏には見られない程の雄大な姿をつらねてゐる。その左下につづく二三〇二米突の峯から十字峽に向つて落ちてゐる大尾根のつくるあたりを見入つてゐると、私等はそこまで引き入れられて行くやうな魅力を感ずるのである。實際牛首から黑部谷の方へ暫く下つて「劒ノ大瀑」を見ることがこの旅行の豫程に入れてあつたのであるが。途中の滯在が多かつた爲、食糧の餘裕がなくなり止むを得ず中止したのであつた。

岩小屋澤岳を降り信州側の雪上を辿つて山稜の藪の綠を傳ひ、棒小屋乘越の一つ手前のオク小澤上の鞍部に辿りついた頃には、霧風は一杯に山上を蔽つて、小雨は霏々として降りかかつて來た。

白樺の大木の下に小さな池を見出して、その傍の唐檜の林の綠に、雪上に偃松の枝を折り敷き天幕を張つて最終の泊り場を營んだ。午後四時三十分。

雲霧は益〻深くなつて午後六時半頃から大雨になつた。陰鬱な山上を、乘越を吹き捲つてくる信州風はみぞれのやうな寒雨を伴つて天幕を飛ばさんくらゐに吹き荒んでくる。

漸く火をもしつけて、えぶい煙の中で暖をとり、形ばかりの夕飯をすませて天幕に潛つたが、一晩中豪雨はその上を叩きつけるので、雫は身體にも荷物に滴つて氣分は甚だ惡い。風の煽りが強くなつたので、人夫は表へ出てロープを周りの樹幹へしつかり張り渡して天幕を飛ばないやうにする。

轟々と山上に響いてゐる烈風が、棒小屋澤の谷底へうなりながら消えて行く後の瞬間の沈默は、薄氣味惡い程で、私等の心を奈落の底へ引きずつて行くやうだ。林の荒れ狂ふ音、風に飛ぶ雪煙りの色はさなきだに凄慘の趣を添へた。

17　塚本繁松　「黒薙川柳又谷」『山岳』第 26 年第 3 號

1931（昭和 6）年 12 月 30 日刊　日本山岳會発行

要　約

1931（昭和 6）年 8 月 6～14 日の記録。

メンバーは、塚本繁松、此川新作（案内人）、瀧林耕平（同）。

行程は、黒薙川・柳又谷下廊下～ナル谷乗越～大ナル谷～猫の踊り場～蓮華谷（命名）～白馬岳～柳又谷上部探査。

※黒薙川・柳又谷下廊下初遡行。

※塚本繁松は日本山岳会会員。

昭和六年八月六日――八月十四日

黒薙温泉――北又柳又合流點――カシナギ深層谷落口――オウレン谷――ゼンマイ谷――ナル谷乗越――ナル谷落口――猫の躍り場――清水平――蓮華谷落口――蓮華東谷――白馬岳――柳又――ナル谷落口――長池

参照地形圖　二十万分一、富山。五万分一、白馬嶽、黒部、泊。

人夫　黒部保勝會案内人此川新作、瀧林耕平

合流點へ

私は白馬岳以北の山と溪谷に異常な興味を持つてゐるので、十數年前から幾度となく朝日岳を中心とした漂泊の旅をして來たが、多年の宿望であつた北又谷（キタマタダニ）の遡行はいつも失敗に終つてゐた。それが昭和三年八月になつて、漸く水源迄遡行する事が出來て、多年の念願を一先づ果す事が出來た。そこで翌年の八月末今度は柳又谷（ヤナギマタ）を水源白馬岳から下降せんとして先づ朝日岳に登つたが、同行者に故障が起つたのと天候不良のため一先づ下山して天候の回復を待つ中に時期を失してしまつた。昨年は遂に機會を得なかつたし、今年こそと思つて七月の長雨の晴れるのを待つてゐた。七月下旬に家族連れで白馬岳に登つて、頂上の下から柳又の谷へ長い果て知れぬゆるやかな雪溪の下つてゐるのを眺め下すと、心は遠く幽谷の彼方に走つて、もうぢつとしては居れなくなり、歸京早々にして旅嚢を改めて出發した。

八月六日の朝宇奈月（ウナヅキ）に着いて見ると餘りよい天氣ではなかつたが次第に晴れて來る模樣が見えた。七月の長雨が晴れてから已でに二週間足らずになり、その間に小さい夕立が一二回あつただけと聞いて先づ水量の心配も大した事はなからうと思はれた。下立（ヲリタテ）から來る人夫が二人共電車に乗り遲れたので七時發の日電のトロには間に合はなくなつた。宇奈月驛で會員吉澤庄作氏に會つて今度の旅の話などをしてゐる中に人夫の準備も出來上つたので十時一寸前トロで宇奈月を出發した。黒薙驛（クロナギ）へ下りて邊りを見廻して見ると、變り果てた黒薙川の姿に今更乍ら傷ましい思ひをせずには居られなかつた。多量の水流を持つて悠々として本流と合流して居た頃の壯觀！　黒薙川のあの盛んな有樣は今は過去の空しい夢となつてしまつたのである。音もなく岩壁を摩して流れてゐた跡引（アトヒキ）の青流の跡は無殘にも白い河身を天日に曝してゐた。私は長く見るに忍びない氣持で早々にトンネルの中へ逃げこんだ。トンネルを通つてゐると何時しか黒薙温泉を通り越してしまつたので、後戻りして温泉へ下つた。水流のなくなつた黒薙の温泉場もまるで魂のぬけたやうに活氣がなくなつてゐた。昔は物靜かな落付のあるよい温泉場であつたのだが今では一泊したい氣も起こらなくなつた。帳場で少しばかり買物をしてお茶を飲んで休んでゐると、古い會員であつた依託經營者佐々木君（經營は黒部鐵道）が出て來て色々山の昔語りをした。私達は柳又を遡るのだと言ふと、「今夜測水所でお泊りになれば明晩は白馬へ行けませう」と言つて私を苦笑させた。

二見(フタミ)溫泉場を越え、大深層谷(オホフカソウダニ)の手前の日電の取入口を過ぎると、此處に初めて昔乍らの黑薙川の姿を見る事が出來た。八月のまぶしい太陽が花崗岩の巨岩の磊々とした河原一杯にふりそゝいで、溪流はごうごうと轟く音をこだまして落走し、淸風は滴るやうな兩岸の若葉をゆり動かして冷々と過ぎ去るのを浴びては、これだこれだと手を打つて喜ばずには居れなかつた。私共は荷を下して晝食を取り、思ふ儘に涼風を浴びて休んだ。道は右岸の河岸に沿つてついてゐる。涼しい木立の中へ入つたり、河原近く迄下つたりして行くと、道の左側に倒れて荒廢した小屋の跡を見る。これは音神鑛(ヲトガミ)山の事務所の跡である。猪頭谷(キノガシラ)の一つ手前の澤の附近は岩壁が少し惡いので、澤の手前で初めて道は左岸へ移る。併しずつと昔はその儘右岸許り通つてゐたさうである。此處の釣橋をよく眺めて見ると十數年前その儘のやうな氣がする。低い所に架つてゐるが余程強い橋と見えて、この七月の洪水にも何ともなかつたらしい。左岸へ移つてからは西日を受けるので非常な暑さのために三人共可なり弱らされた。やがて今は廢坑となつた音神鑛山坑道の下の平を横切り河原へ下つた。この下り口の棧道が破損してゐて少し許り惡場らしい感じがした。この附近は石英斑岩の露出を見る。此處の對岸は猪頭谷の落口である。

十年許り前迄は此處から一本の鐵線によつて右岸へ移り、道は可成り高く迄山を登つてそれから十六谷へ下つてゐたが、富山縣電氣局の測水所が柳又北又の合流點に出來てからはこの道を通る者は殆んどなくなつて、今の道はその儘左岸を通つて居る。私は十年程前に友達と二人で小川(ヲガワ)溫泉から北又谷に入つて黑薙溫泉へ出やうとした事がある。猪頭谷まで來て、其處から對岸へ架けてあつた筈の鐵線を尋ねて見たが見當らなかつた。それは數ケ月前の猪頭谷の出しの爲に、花崗岩の大岩へ打ち込んであつた鐵のボート（鐵棒）が外へ出てゐる處だけ綺麗にぶち切られて、鐵線と共に流れ去つた爲で、岩へはまつてゐる部分だけ赤錆を流して殘つてゐるのが發見された。當時の物凄かつたであらう有樣は、堆高く本流迄押し出した山のやうな押し出しで想像せられたのであつた。

その爲にその時は行先を遮ぎられ、川を涉らうとしたが出水の後で水嵩が多くてどうしても涉れず、その中に日が暮れたので河原で野宿を余儀なくされた。その晩は無數の藪蚊に攻め立てられて殆んど眠る事が出來ず、次の日腹をへらして這々の態で小川溫泉へ逃げ歸つた。その翌年春黑薙溫泉から此處迄遡つて見たが矢張對岸へ渡る方法がなかつた。さういふ思ひがけぬ苦しみを嘗めた事があるので、この附近は私に取つては思ひ出の深い地である。私は今何故こんな古い事を持ち出すのかといふと、この道は誠に變遷激しくあてにならない危險な道である事を後で詳しく書かねばならぬからである。

猪頭谷から上流は河身が急に廣まつて廣々とした河原を持ち水流は悠々として流れて行く。この附近は黑薙川唯一の廣河原である。この川の沿岸には天然の杉がかなり多いが、この附近は特に目立つて多く見受けられる。道は河原から數間高い所を森林の中についてゐて、測水所の二町程手前で河原へ下り釣橋を渡つて右岸へ移つてゐる。橋は二間程も高い岩壁の上に架つて居り、橋の下の岩壁はすべすべとした花崗岩で下からは直接取りつきやうがない。見ると右側の岩壁の上から五六間のロープが下つて居り、それにつかまつて壁を上り、壁の上の立木につかまつて釣橋迄下つて漸く橋を渡るのである。重い荷を擔いでゐては越す事が出來ない。これには全く面喰つてしまつた。昨年迄はこの釣橋の下の壁に棧道がかゝつてゐたさうで難なく越す事が出來たさうである。人夫の此川(コノカハ)が昨年の夏、蕗を十貫程も擔いで通つたさうだが、一ケ所も危い思ひをする所がなかつたと言つてゐた。それがこの冬の雪崩でか、或ひは七月の洪水でか、きれいに流されて跡方もなくなつてゐる。ロープは岩魚釣でも掛けて行つたのだらうが、これがなかつたら此處を空身で通行するだけでも容易ではない。私共も此處を通り終るのに一時間も掛つたのと、可なり骨が折れたので、今日の豫定がすつかり狂つてしまつた。私の考へでは測水所を越えて一寸でも柳又の谷へ入つてから泊る積りであつたが、之では人夫に氣の毒で測水所より先へ行つて呉れとは言へなくなつたので、少し早かつたが測水小屋泊りとした。冠氏もこの釣橋を越える時、上から石が落ちて來て、思はぬ所で手に怪我をしたと言つて居られた。私は十數年この方この道（小川溫泉から越道峠(コイド)を越え北又を通つて黑薙溫泉に至る道）の變遷の甚だしいのに今更乍ら驚いたのである。この道は營林署の林道であつて黑薙溫泉から猪頭谷迄は舟見(フナミ)の

擔當區（舟見擔當區は今は廢止せられたらしい）受持であり、猪頭谷から先は山崎（ヤマザキ）擔當區（今は泊（トマリ）擔當區）受持であつたのだが、近年は兩方共に毎年定まつて修繕をする事がなくなつたらしいのである。その爲にこの道で思ひがけぬ苦しみをした話や、行けなくて引返したといふ話を毎年のやうに聞いてゐた。私だけでさへも今度のを合せて三回も思はぬ苦しみに會つてゐるのだから。處が數年前から測水所が出來て人が住むやうになつてからは通れないといふ事が先づなかつた。それが今年から又測水が中止となつたので又もや、北又のサカサマ谷と日電取入口との間は廢道同樣となるであらうと私は思ふのである。だから今後入谷の方は十分の用意をして入つて頂きたいと思ふ。然るに陸地測量部では今年發行の白馬岳及立山近傍圖にこの道を堂々と赤線を引いて立派な登山道らしく記入したのは何としても輕卒であつた。一般登山者のために實に危懼の念にたへない。陸地測量部で何故この道を登山道としたかといふと、それは朝日岳登山道としてその登山口を宇奈月としたからである。朝日岳登山道は小川の左岸の山崎村で昭和三年に開鑿したもので、サカサマ谷合流點から朝日岳へ、そして白馬岳へと道を造つたのである（この道も今の所上の方はまだ不完全で分り難い所が多いが、その事は又の機會に述べる事とする）。

柳又北又の合流點は海拔五〇五米で、本流に比べて著しく落差の大きい事が知られる。測水所は合流點下手の右岸に建てられた堂々とした太柱の建築であり部屋が三つあつて緣側付の中々洒落た建物である。今年は測水が中止で無人であるが、この儘うっちやってあつても此處數年は倒れまいと思はれるので、この方面への登山者に取つては誠に得難い根據地である。

私は測水所に荷を下してから合流點へ下り、すっ裸となつて清い水に一日の汗を洗ひ流して、すがすがしい氣分でこの二つの神秘な流れの落ち合ふ樣を眺め入つた。柳又は眞正面の谷蔭から勢烈しく流れ來り、北又は小瀧のやうになつて落ち合つてゐる。二つの流れが落ち合ふと河身が急に廣まつて水流の幅が七八間位に廣まり洋々とした靑流となつて靜かに流れて行く。周圍の山は茂り合つた翠綠の濶葉樹林の中に杉、ねずこ、栂などの針葉樹を交り合せて、言ひ知れぬ靜寂境を形造つてゐる。此處迄來ただけでもこれだけ幽玄な深山の氣を味ふ事が出來るのかと私はせい一杯山の氣を吸ひ邊りの風光を味つた。私はいつも二つの大きな流れが合流する狀景を眺める毎に何かしら深いものを暗示させられるやうな氣がして深い瞑想に耽らせられるのである。そしてこれから先にあるであらう憧れの未知のものを心に描いて何となくわくわくとした氣持に心を躍らせられる。北又の奥は知りつくしてゐるので、心眼に映る奥深き幾つも幾つもの秘景を幻のやうに心に送り迎へ乍ら數日の後には再びそれ等の秘境を訪れるであらう事を山靈に約した。柳又こそはすぐ其處の谷蔭にさへどのやうな驚異すべき絶景が秘されてゐるのか見當もつき兼ねるので、たゞ遠い白馬岳の水源に迄思ひを馳せて戰き慄へるやうな憧れの念に胸をどきつかせてゐた。そして明日こそはそれ等の只中に沒入する事が出來るのだと思つた。谷には夕暗が迫り、隙間なく晴れた空を見上げると一つ二つ星がまばたきしてゐるのが仰がれた。

私は此處の二つの流れの落ち合ふ樣を見て、柳又の水量が北又のそれより遙かに多いといふ事に驚いたのであつた。以前に見た時には北又の方がずつと多かつたと憶えてゐるので、何時もさうとばかり信じてゐた處、今度見ると確かに柳又の方は北又の倍はある樣に見受けられた。して見れば以前に見た時は夕立の後か何かで一時的の現象であつたのであらう。併し乍ら奥行の深い點でも又水を集める面積も何としても北又の方が大きいと思はれる。けれども七八月の候には柳又は多量の殘雪を持つてゐるに反して北又は水源近くにも殆んど殘雪を持たないので、その爲に七八月の候は柳又の水が遙かに多いのであらう。それが九月頃になつて山の殘雪のなくなる頃になると、反つて北又の水が多くなるのではなからうかと私は思つてゐるが果してどうであらうか。

私が水の流れをみつめて考へに耽つてゐる間に二人の人夫は岩魚釣りに忙しかつた。然し日が暮れて歸つて來たのを見ると一匹も下げてゐない。どうしたと聞くと、七月の洪水ですつかり流されたと見えて一匹も見えなかつたと言つてゐた。柳又へ行けば思ふ存分、岩魚を食へると思つてゐた樂しみもこれでどうやら夢に終るらしい。日が暮れても空一杯の星空なので、明日の天氣は大丈夫と、心も輕く樂しい山の第一夜を過

した。

カシナギ深層谷まで

八月七日。目を覺して見れば見事な青空なので心を躍らせ乍ら飛び起きた。川面には朝靄が煙のやうに棚引いて居り、川瀬の絶え間絶え間には、早くも駒鳥が來て囀つてゐるのが聞えて、爽かなリズムは私共の出發をせき立てた。午前七時過ぎ出發したが小屋の前の長い釣橋が破損してゐる爲に、直ちに本流を渉らねばならなかつた。朝の水は冷かつたが割合に淺くて膝の上迄しか濡れなかつた。先に渉つた人夫は何時の間にか岩魚を一匹釣り上げて頻りに喜んでゐた。直ちに柳又に入る。落口から間もなく谷は右へ廻つて、その背後に釣橋が架つてゐる。併し最早破損してしまつて渡る事すら出來なくなつてゐた。其處で一寸、先の樣子を見ると、矢張り右岸へ移らねばならぬらしい。しかし釣橋の上の徒渉點は淺いので難なく渡る事が出來たが、僅か數十間遡つて忽ち行手を封ぜられてしまつた。釣鐘狀の岩壁は左程に高くはないけれども、激流が岩脚を洗つてゐて全く手懸りがない。左岸ならば暫く行けるが間もなく行手が塞る樣子、しかも釣橋の所迄戻つて徒渉するより外なく、渉つても直ぐ惡い所が一ケ所ある。さて如何にすべきかと出發早々にして協議を初めねばならなかつた。人夫の此川は、この奥は餘程惡いらしいので測水所の人達も行けないと言つてゐたと言ふ。何ならば尾根の道を行つて廣河原へ下る事にしてはどうかと言ふ。出掛けた許りで飛んでもない事を言ひ出したので開いた口が塞らなかつた。その尾根道といふのは縣の電氣局が作つた道で、釣橋を渡るとすぐ山へかゝり横山（ヨコヤマ）の尾根へ出て柳又乘越と合してヲル谷を下り、廣河原へ出るもので、廣河原迄三時間程で達せられるさうだが、その代り柳又の秘景の大半は見逃してしまふ氣がして谷狂ひの到底滿足出來る道ではない。そこで空身でへつりの樣子を見に行く。大した大廻りではないらしいので早速荷を背負つて草付きを登り初めた。三十間程登つてから次第に右へ廻つて尾根を越し、明るみへ出て見ると、右岸は可成り河原が廣くて相當先迄行けるらしいので、木につかまつて河原へ下つた。岩魚釣りのらしい足跡がある。一町餘り河原を行くと一旦岩壁が岸へ迫り又その先で河原が廣くなつてゐる。見ると大きな岩の上に一本の細い流木を架けて對岸へ渡してある。岩魚釣りの架けた橋らしいがまだ先へ行ける樣子なので、その儘うつかり右岸を遡つた。分流してゐる流れを渡るのに簡單に架橋して、それからどんどん二町程も河原を行くと俄然行手が塞り、いよいよ本物の壁にぶっつかつた。百數十尺の立壁が一町餘りも續いて先は見えなくなつて居り、水の上四五十尺は草一本ない程にむき出しの壁である。この壁の下を水は盛んな勢で落走してゐる。初めて柳又らしい壯觀に接して歡呼の聲を擧げて喜んだ。併しそのすぐ後で、先程の流木を渡してあつた處に架橋して對岸に移るべきであつた事に氣がついたが今更戻る氣がしない。休憩の後此川はロープを卷いて對岸に渡り先の樣子を見に行く。左岸は狹い河原が續いてゐて當分行けさうである事が分つたので、早速架橋作業に取りかゝつた。四五十間下つた處に架橋出來さうな處があつたので、其處と定めて、大きな流木を拾ひ架橋して見た。一旦は巧く架つたが、その上を此川が對岸から縛つて來る間に先の端を水中に落してしまつた。その際此川は危く激流に落ちる處であつたが突嗟にロープにつかまつて事なきを得た。お互に笑つてはゐたが、山のアクシデントは一瞬にして來り一瞬にして去る事を思へば餘りいゝ氣持がしなかつた。

そこで此處の架橋を中止して先刻の架橋點迄下る事にした。荷が重いので確かりした橋を作らねば通れないので二本の木をロープにしばりつけて安全な橋を作り上げた。渡橋を了へて左岸を二町程も遡るともう十一時を過ぎてゐた。架橋點をうつかり通り過した爲に三時間程無駄をしてしまつたのである。この附近で谷は思ひ切つて右へ迂回してゐる筈なのだが目にはさう見えなかつた。圖面を見ると、私共の今朝から歩いた距離はまだ七八町にしかなつてゐないので、その足の捗らなさに三人で大笑ひし乍ら晝食を食べる事にした。陽は眞上から照りつけて奔流にまぶしく反射し、全谷は朗らかな明るさに滿ちてゐる。對岸の岩壁や綠林に見惚れ乍ら、今朝釣つた岩魚を燒いて素晴らしく美味しい晝食を濟まし、早くも谷の氣分を滿喫した。

對岸の壁は斷續してゐたが絶えず行き詰りがあるし、徒渉點もないので午後は左岸許りを行つた。左岸は壁續きであるが草付きが多いので、骨はれても通れない事はなかつた。二十間程河原を行つては一町も草を

へづり、下れば又登るといふ具合で、汗にまみれて草につかまつて行つたが、苦しくても時間が掛つても通れないよりは有難い。途中河原で休んでゐると、空罐にみゝずを入れてあるのが見當り、みゝずはまだ生きてゐた。岩魚釣りは此處迄來て引き返したらしくその先には足跡がなかつた。余程慣れた岩魚釣りでなければこんな處迄入り込む筈はないので、誰だらうかと人夫達は訝つてゐた。午後三時頃草付から降りて見ると、行く先の壁は高くなつて直立し木も生えてゐないやうな惡場となつた。溪流は逆光を受けて金龍の躍るやうな盛んな景觀をなしてゐた。そこで右岸はと見遣ると、壁はなく廣々とした河原で、何本かの川楊が煙のやうな柔かい姿で立つてゐた。そして行き詰りから十數歩戻るとどうにか徒渉出來るらしい所があつた。此川は勇敢に眞先に渉つて行つた。流れは中々激しくて、私の右の腋腹迄打ち上げ、幾度か足の不安を感じた。一度は危ふく體勢が崩れやうとしたので瞬間に冷汗が出た。しかしこの邊でも八月下旬頃になれば易々と渉れるに違ひないと思つた。この徒渉點は、地形圖で見ると、大體左岸の壁の記號の終りの邊りであるやうに思はれた。併し左岸の壁は實際はもつと先迄續いてゐた。右岸の方は之に反して大體河原續きで行き先を遮られる所もなく、足は大いに捗つて十町餘りの間は忽ちに進む事が出來た。陽は山影に隱れ始めて、漸く涼しくなつた頃再び前面に兩岸共岩壁が迫つて來た。時計は四時を指してゐる。それでも今朝合流點出發以來どうにか一里餘りを來た譯である。

溪流は麗はしい花崗岩の岩槽に圍まれて大きな淵をなし、その淵へは激しい勢で流れが落ち込んでゐる。そしてその先には、左岸の岩影から大きな流れが一枚岩の上を滑り落ち乍ら瀑布となつて本流にかゝつてゐる。之はカシナギ深層谷の落口であつた。流石にこの附近は谷に活氣が滿ちて全谷はち切れさうな勢が漲つてゐうやうに思はれた。柳谷又はこの落口に到つて最も豪壯な景觀を展開し始めるらしい。私共は感歎の聲を上げて磨き上げたやうな麗岩を眺め、華々しい溪流の狂亂に見入つてゐた。カシナギ深層谷は暗い壁の間から落走して來てゐるが、數十間にして岩壁の影に曲り、その先はどのやうになつてゐるのか知る由もなく、只左側の奥に高いガレの下つてゐるのが見上られた。如何にも物凄さうな谷で水量は可なり多い。ふと足許の淵を見ると、渦巻く激しい流れの中に大きな岩魚の群が浮き上つては沈み、沈んでは浮き上つて居た。三人は顔を見合せてにつこり笑ひ、早速糸を取り出して釣りにかゝつた。十分許りにして忽ち一尺足らずのを一匹釣り上げたのでそれに勢を得て熱心に糸を流してゐると、一尺二三寸もあるやうな大きな奴が悠々と水上に浮んで、殆んど動かないで鰭を動かしてゐる。此奴を引き掛けやうとして針を流してゐる中にとうとう此川の針に食ひついた。愼重に淺瀬に流して來て、さて引き上げやうとしてぐいと竿を上げると水上一尺程迄上つたと思つた瞬間、ぴちりと一跳ね跳ねて糸を切り忽ち流れの中へ潜つて行つた。此川は竿を振り上げた儘、大きな目をむき口を開けて、水を睨んだ儘で一分間程も物さへ言はなかつたのは余程口惜しかつたのであらう。岩魚に氣を取られて時間の經つのを忘れてゐるうちに六時になつた。ともかくも泊り場を探さねばならぬので慌てゝ出發した。柳又には岩魚が少ないのか、それ共岩魚が利巧なのか、昨年大井川の東俣で七十何匹も釣り上げたのに比べて今夏は、全く不漁も甚だしいと思つた。一寸行くと、兩側を巨岩に取り巻かれた砂場があり、絶好のキャンプ場なので此處を今宵の宿と決めて天幕を張つた。夕方は相當に雲も出たが夜が更けるとすつかり晴れ上つて、狹い谷から見上げた空は星で一杯であつた。此處で雨に降られたら實際閉口せねばならぬので、有難い事だと思ひながら、轟轟と響く瀧津瀬の音を聞いてゐるとその中に何時しか夢路に入つて居た。

オウレン谷に至る

八月八日、晴。此川が昨日大きな岩魚に針を取られたのが口惜しいので夕暮に一回、今朝又一回行つて、何としても物にしようと一生懸命になつてゐたが結局針を三本取られ損で歸つて來て、あの岩魚もさぞ口が痛い事だらうと負惜しみを言つてゐた。出發の用意をしてゐる時私は誤つて味噌を砂の上へ引つくり返したので、これにはすつかりへこたれてしまつた。仕方がないので洗つて食べる事にして砂だらけの味噌を持つて出掛けねばならなかつた。河原は直ちに盡きて壁となつたので藪へ入り、段丘狀の壁の上へ出て先の樣子

を見る。この附近は兩岸共數百尺の高壁となつて、全く通過不能のやうに見えるが、不思議にも我等の立つてゐる段丘は、壁の中頃にあつてずつと先迄續いてゐるらしい。荷を下してへつゝいて行つて見ると木に鉈が入つてゐた。これは電氣局が測量した時通過したものに違ひないと思つて、尚少し上り進むと急斜面の草付となり、その草付にも十分な足場があつて一町程の割れ谷へ出られさうである。割れ谷の先の壁は一枚岩が高く立つて、それを廻るとすれば余程大廻りをせねばならぬらしいが、一先づ割れ谷を下つて見て谷の樣子を見る事にして、先づその割れ谷迄行けるかどうかを瀧林が見に行つた。

暫くして下の方からオーイといふ聲が聞えて、もう彼は流の傍に立つてゐる。「どうだい」と聞くと「大丈夫行けさうだ」と言ふので引返して荷を取りに行く。荷を置いた處から少し下つて下を眺めると、カシナギ深層谷の上でぐんと左へ曲つた流れは一町足らず先で又急角度で右へ廻つてゐる。兩岸の壁の間は四五間位、流れは澁となるかと思へば又急になぎ落ちて、誠に變化が劇しい。

荷を脊負つて草付をへつり割れ谷へと下つて行く。割れ谷から本流へ下つて見ると、行く先も亦仰げば高い、壁又壁の連續で、暗い岩影から奔落した水は谷一杯に擴がつて深い澁をなし、今しも森影からさしこんで來た朝日を水面に受けてきらきらと輝き乍ら流れて來る。それが私共の前で急に左折し數尺の瀑布となつて急落し、眞正面の眞白に磨かれた花崗岩の大壁に殆んど直角にぶっつかると、猛烈な勢で白泡を飛ばして沸き返り、左へ迂回して盛んな泡哮を續けて落ちて行く。何とも言ひやうのない壯觀である。見上げれば對岸の岩壁の上高く、ねずこの大木が亭々と立つて空を被つてゐるさまは黑部なればこそといふ深翠な趣である。少し落ち着きのある斜面には栂や澤ぐるみの大木が森閑として靜まり返つて密生してゐる。これを上から見下した景觀と言ひ今又谷底にあつて見上げる風光と言ひ、それは全く想像を超へ因襲を絶して、魂に迫る風景で、谷を愛し谷を禮賛する我等に取つては眞に歡喜の極致である。今こそ私は久しき憧れに夢に迄見た柳又の深谷の只中にあるのだ。私は驚異の眼を打ち開き時の經つのも忘れて、谷の氣分に思ふ儘に醉つてゐた。

さて私共は如何にして前進すべきであらうか。出來るならば上を廻りたくないと思つたので何とかして瀧の左端を涉り越す事を考へた。そこで人夫達はどんどん瀧の中へ石を投げ込んで、その上へ大石を一つ轉がし落したので大分淺くなつたらしい。瀧林が入つて見ると股迄しか水に浸らない。そこで向ふの岩に登り先の樣子を見に行つたがすぐ引き返して「とても面白い所ばかりだ」と言つた。早速先へ行つて見ると、洞穴のやうになつた岩の間から躍り出て來た水は白龍の踊り狂ふが如くに奔躍し、鳴り響いて、私等の見てゐた瀧へ落ちてゐるのであつた。その上は又「く」の字形に谷が曲つてもう先の模樣が知れない。草付から木立へ入つて七八十尺ばかり登ると、先に行つた此川がほうと感歎の聲を放つてゐるので慌てゝ行つて見ると、此處にも亦絶妙な天工を見せて柳又谷絶景のクライマックスを思はせた。此處は極度に谷幅が迫つて僅かに二間許りとなり、兩岸の直立した高い岩壁の上には枝振りのよい栂の木が立ち並んで流れの上を被つてゐる。左から折れ曲つて出て來た溪流は先づその曲り目で一條の小瀧となつて落ち、それが直ちに二段三段四段と繼續して落ちて來る。木立を洩れて來る日の光が銀鱗のやうに水面に落ちて輝く樣は誠に言葉を絶した美しさである。私は此處に腰を下して又もゆつくり眺め入つた。人夫達はここに名を付けねばならぬと騒いでゐたので思ひ付く儘に飛龍溪（ヒリウケイ）と名付けて置いた。

後で分つた事であるが、カシナギ深層谷からカシナギ谷迄の間は、柳又中での最も高潮した景觀の集りであつた。そしてこの附近は柳又谷の下廊下と呼ばれるべき所であらう。廊下としては壁の續き方にいささか不足があるかも知れないが、それなればこそ何時も水邊近くで豪壯な流を賞し得るのである。僅か半里餘りの間であるが森林と壁と流れと三つ揃つて味はへる完全な溪谷として申分がないと思ふ。

飛龍溪の先には小さな割れ谷があつて、此處は思ひ掛けない氣味の惡い惡場であつた。短かい間だがロープを賴つて恐る恐る通過した。此處を通り過ぎると先はもう大した惡場がないらしいので、大きなしなの木の下に荷を下して休んだ。そしてまだ少し早いが晝食を食べた。カシナギ谷近くで河原へ下り、茅の生へた斜面の中を行くとカシナギ谷落口の下に出た。カシナギ谷は押し出しの谷で、幅が廣く、流れは急な斜面を

どんどん落ちて來てゐるが谷が開けてゐるので見通しがよく、惡い澤のやうには思はれない。水量はカシナギ深層谷に較べると遙かに少ないのも當然であらう。落口の上の本流は、急に水量の少なくなつた氣持で、流れも緩かになり、川幅は左程廣くはないが岸には川楊が立つて稍々のんびりした感じを味ふ事が出來る。もう本當の豪壯な所は通り越したやうな氣がしてならなかつた。併し先はまだ五六町の間岩壁が續いてゐた。壁の高さが低いので上を廻つても大した苦勞はないらしいが、此處の花崗岩の岩壁は不思議に相當な手懸りも足懸りもあつて岩壁ばかり傳つて行く事が出來た。この位の壁だと岩傳ひといふものは如何にも面白いものだといふ氣がする。岩壁を通り抜けてほつとした時は十一時半であつた。もう廣河原の一端に出たらしい。

川は二つに分れて右の流れは大きく、左の方は僅かな水が流れてゐて中央は川中島になつて川楊が立つてゐる。私達は歩き易い儘に左の小流を傳つて遡つた。やがて前面が豁然として開けて廣河原へ出た。小流には斷層のやうになつた花崗岩の小斷落があつて、水が美しい幅廣い小瀧を造つてゐる。そして氣をつけて見ると此處は花崗岩の露出の終端であるらしい。この上には御影石の片鱗だに落ちてゐなくて、片麻岩、石英斑岩、蛇紋岩等の散らばつてゐる河原である。赤石斑岩のやうな紅色の石も發見された。この廣河原は柳又及び北又のみならず黒薙川での最も廣い河原で、廣い所は七八町もあらうかと思はれる位廣大に開けてゐて、長さは十數町に及んでゐる。晴れたる日には夕日ヶ原（ユウヒハラ）（朝日岳の支尾根二〇九八米）の頂上位は見えはしないかと思はれる程見通しもきくらしいが、生憎く山頂は何處も雲が深い。四方の山々はどちらを見ても鬱蒼とした濶葉樹が茂つてゐるので、その木の大きさから見て、紅葉の頃の晴れた日には素晴らしい眺めであらうと思はれる。生憎くと今日の光線では左程美はしい眺めと思へなかつたのは河原が廣過ぎるからであらうか。或は又森林の濃密さが足りないからであらうか。流れは左岸の山際を流れてゐるので廣河原の廣さは右岸だけの廣さである。右岸の山麓は濕地の草原で丈高い草が茂り、ヲル谷の流れがその間を流れ廻つてゐて、水邊には見事に大きな蕗が生へ茂つてゐる。そして澤くるみ橡等の巨幹がちらほらと立つてゐて、その枝葉が暗く空を被うてゐる。

ヲル谷の下の小屋を探したところ大きな枯木の傍に發見された。電氣局の造つた小屋は已でに倒壞してその殘骸を横たへてゐた。この小屋場は隨分古いもので、昔から山麓山崎村邊の獵師の根據地であつた。長年の間に獵師、ぜんまい取り、藥草取り等の數多い人々が此處に泊り明かしたであらう事が偲ばれた。そして中には生きて歸らなかつた人もあつたらしく、ヲル谷の右にはシビト谷といふ名の谷もあつて、何かしら傷ましい物語がありさうである。今の小屋は極めて粗末な掘立小屋であるが、この小屋は倒れても又獵師等が立てるであらうから、先づなくなる時はあるまいと思はれるが、保證の限りではない。

この小屋を柳又小屋といふと、小杉復堂先生の大蓮華山遊記には書いてある。復堂先生は越中の人で、明治二十八年八月此處を通過して白馬岳に登られた。恐らく越中側から白馬岳に登つた最初の登山家であらうと思ふ。その後も明治の末年頃迄に此處を通つて白馬岳に登つた人が數名あるらしいが、二十數年この方最早誰一人登山者の此處を通つて登つた者はないやうである。大正六年八月初めかに會員鈴木益三氏が逆に白馬岳からこの廣河原へ清水、猫又の尾根を經て、廣河原の下へ下つたのが唯一の下降記錄であるがその際は已でに道の跡方もなかつたやうである。小杉先生を初め古い登山者は此處で柳又を横切り、猫又山の尾根へかゝり清水（シヨウズ）岳を迂回して白馬岳へ登つたのであつた。今日では越中側から白馬へ登ると言へば、祖母谷（バヾダニ）溫泉から登る事にきまつてゐるやうなものだが、昔は山崎村から此處を經て登つた外に、黒部側の登路はなかつたらしい。祖母谷からの登攀は無論小林區署の林道開鑿後の事で、早くても日露戰爭前後の事であらう。そして山崎村からどうしてこゝの經路を經て白馬岳へ登つたかを考へて見ると、初めて人間がこの深山へ入つた頃の事が偲ばれて如何にも面白い氣がする。近い點では朝日岳を經て行く方が遙かに近いに決つてゐるが、併し越道峠に立つて南方の空を見上げると先づ天空を突く壯嚴な高峰は清水岳の連峰である。朝日岳や雪倉岳は、イブリの山の影になつて全然見えない。誰であるか知らないが、その昔越道峠から清水の連峰を仰いだ人が、その崇高な姿に憧れてその山を目掛け、北又を越え柳又を渉つて猪又の尾根へ掛つたのであらうと思はれる。そしてそれが何時の間にか白馬への登山道となつた事も極めて自然の事と思はれるのである。

此處は黒部の流れであり乍らその下流の内山（ウチヤマ）や音澤（ヲトザワ）の人々が入らず、却つて小川の谷の人々が先に開拓してゐるのはどういふ譯であるか、これも昔は容易に通過する事が出來なかつたであらう黒薙川の險惡を思へば成程と合點がゆく事である。かういふ原始的の登路も、登山の盛んになつた今日かへつて顧る者のないといふ事は何となく侘しい氣がしてならない。今は全く藪が深くなつてしまつて恐らく鉈の跡も分らない位であらう。

然しそれはこの廣河原から先の尾根の事で、越道峠からこの廣河原迄は何しにか折々人が入るやうである。それは無論登山者ではなく獵師とか山物取りとかであらう。登山者として二十數年來久し振りでこの道へ入つた人は、大正六年夏の鈴木氏一行の下降は別として、今年の八月下旬私の通過した柳又に入つた冠氏一人位のものであらうと私は思つてゐる。それ程にこの附近は登山界に於ては人跡稀な靜寂境である。

私共が小屋へ入つて見ると、確かに最近人の居た氣配があつて、河原にも足跡が印せられてゐた。何者だらうかと私共は訝かつた。山物を取る時季としては季節外れであり、獵師としては禁獵期であるからである。この地は海拔約七六〇米で、北又との合流點から二里餘りも距離があり、高さは二百五六十米も高い。電氣局が將來發電するとすれば此處で水を取り入れるさうで、合流點で落して約千尺の落差がつくと言つてゐるさうである。その時は水路は谷には沿はず横山の眞下を掘り拔かれて行く事と思ふ。柳又の流れは合流點から此處迄、半島を巡る海岸線のやうに大迂回して來てゐるので、圖面で見ると實長よりは著るしく短く見誤り易いのであるが、此處から上流は可なり長い間川の方向は眞東から眞西へ向つて流れてゐる。縣電發電の曉には柳又の下廊下の秘境も消滅する譯で、未だ一般には未知の境であるだけに一層殘り惜しい事である。

柳又の名はこの河原に楊の木の多い事から付けられたのであらう。この廣河原に居ると全く安易な氣持で、人里にゐるやうな氣分である。私共は此處でゆつくり手足を伸ばして休み晝飯を炊いて食つた。そしてもうこの先にはさう惡い所はなからうと思はれてならなかつた。何しろ水が少くなるからと私は考へたが然しそれは私の考へ違ひであつた。これから先の谷は岩質は脆くなるし、決して歩きよい所ばかりではなかつた。此處でゆつくり休み過ぎたので出掛けたのは三時に近かつた。廣河原の行き詰りで谷は急に右折して、左岸から下つてゐる尾根は谷の曲り目へ長い出鼻となつて伸びてゐる。眞正面には水の落ちてゐる處などもあつて、一寸見た處谷は何方へ曲つてゐるのか見分け兼ねる位であつた。左から相當大きな澤が落ちてゐる。この澤はヨモギ谷といふ澤に當るらしい。併し或ひはこの谷はシビト谷であるかも知れない。どうした譯かこの附近で私はぼんやりしてゐて、二つの谷をはつきり見別ける事が出來なかつた。この澤この谷に沿つて古い道が一本上つてゐるので、多分柳又右岸にあつた舊道だと思ひそれについて登つた。道は可成り登つてから右へ廻り、本流へ突き出してゐる尾根を越えてゐた。尾根を越えると私共はすぐ道と別れて河原へ下つた。下りた處の河原は可なり廣かつたが間もなく岩壁にぶつかつてしまつた。見た處何となく氣味の惡い岩壁であつたし、折柄盛んに夕立が來たので、三人共誰言ふとなくも一度道へ上らうといふ事になつた。この岩壁では鈴木氏一行も冠氏一行も難儀せられたやうであつた。道へ登つて見ると可なり高い所迄どんどん上りが續いてゐる。人夫は此處を登り乍ら初めて山登りらしい氣分がすると言つて笑つてゐた。この上りは途中一休憩を要した位の登りで、やがて立木の少い峠のやうな所迄登つてそれから先は又下りであつた。此處は水面から二百尺以上も高い處なので、かなり壁は高いものである事が知れた。

道は徐々に下つて大崩れを横切つた。その先は再び河岸を行つた。別に大した惡い所もなかつたが絶えず岩を上つたり下つたりして行かねばならない。その上夕立が再び來て今度はどしゃ降りなので蓐蓙を被つて雨の止むのを待つたが中々はれなかつた。續いて降れば水が增えて來さうだ！　日が暮れかゝつてゐるが一向泊り場らしい所も見當らないので、やゝ黯然とした氣持に襲はれた。人夫の一人は「泊り場所を探さねばならぬから雨がはれんでも行かう」と言ひ出したので、雨中を構はず岩を傳つて行つた。やがて大きな瀧の下へ出た。これは今迄にない本格的の瀧で、瀧の中から岩が突き出てゐて瀧が二つに別れて落ちてゐるが、水量が多いので甚だ勢がさかんで、邊りの空氣を鳴り響かせ乍ら落ちてゐる。雨は霽れたが夕暗が迫つてゐるので遺憾乍らゆつくり見てゐる隙がない。明朝再び見に來る事にして瀧を越え泊り場を探した。瀧を越え

て間もなくオウレン谷が落ち込んで居た。落合の眞正面に砂利の平があつた。止むを得なければ其處で泊る事にして尚先きへ行くと、谷は左へ大迂回して壁が迫り夕暗の中を物凄い流が咆哮してゐた。そこですぐ引き返し天幕を張つた。今日の夕方の數時間は實に慌たゞしいものだつたが、夕食の濟む頃には空がすつきりと晴れ上つて、星が滿天に輝き始めた。漸く氣分も落ちついてこの夜も深い谷間に平和の一夜を過す事が出來た。深夜目をさますと、天幕に月影が映つてゐた。

ナル谷乘越澤迄

八月九日、晴。オウレン谷は小瀧の連續となつて本流に落ちてゐるが思つたより水が少なく、懸谷として立派な瀧のある事を想像してゐたのに、見た所瀧はなささうである。今迄あつた左岸の三つの谷は柳又の支流としては最大のものであるが、何れも豫想外に水の少いのは、長さの割に水を集める面積が少ないからであらう。かくして本流の水は何處迄行つても容易に少くならない。オウレン谷は地形圖にはオレントメン谷となつてゐるが、そんな外國語のやうな變な名前にどうして間違へられたものであらうか。この谷は藥草わうれんが多いためにオウレン谷といふ名がついたのださうである。落口の下の瀧は柳又の岩魚留の瀧ださうで、この瀧の事をオウレンドメの瀧と言ふらしい。それを誤り聞いてこの谷をオレントメン谷と記したらしい。朝食後カメラを携へて再び瀧を見に出掛ける。この瀧は瀧壺も大きくて、それに水の勢が激しいので中々立派で、力強い感じが谷一杯に漲つてゐる。併しこれを北又の魚止瀧に較べては神々しい氣品が大いに不足してゐるのは惜しいものである。その上、瀧の緣を自由に上り下り出來るのも、この瀧の尊嚴を傷つけてゐるやうである。この瀧と北又谷魚止の瀧との氣品の相違は、やがて兩方の谷全體の氣品の相違を彷彿してゐるのでないかと思はれた。何とか不足を言つて見たものの瀧の落ちる壯んな有樣を眺めてゐると時間の經つのも忘れて仕舞ふ。瀧の前に美しい虹がかゝつてゐるのは、瀧のしぶきが絶えず空中に發散して造つてゐるのである。

瀧から歸りがけに瀧林が慌てて駈け出したので何事かと思つて見ると、焚火の傍に乾してあつた彼の背負ひ子に火がついてゐたのであつた。今日は出發が後れて出掛けたのは九時近くであつた。寫眞を取る都合などもあつて谷歩きは多く朝の出發が後れ勝ちになる。そしていつも泊り場へ着く時間が晩いのだから人夫としては有難くないわけである。谷の曲り目へ行つて見ると、昨夕は物凄い廊下に見えた所も大した壁續きではなく案外樂に越す事が出來た。この附近の溪流は美しい。岩傳ひをしたり、一寸ばかり藪へ入つたりして絶えず美しい流れを眺め乍ら行くと、やがて前面に草付が現れ、岩場はなくなつて谷が開け、河原ばかりを行けるやうになつた。オウレン谷附近は柳又の中流では景觀の整つた處であり、一つの景勝を形造つてゐると言へるであらう。廊下といふには谷が廣く壁の續きはないが、それでも中廊下と言へば言へない事もなからう。地形圖には岩場の記號だけあつて壁の記號がないので、うつかりするとこの附近は大變歩き易い所のやうに思ひ違ひするが、決してそれ程歩き易い所ではなかつた。

河原にはいはよもぎが咲いてゐる。前面を見上げると、廣河原以來初めて大きく眼界が開け、大きな高い山が見えてゐる。それは雪倉岳であつた。初めて氣高い高山の姿に接して言ひやうのない嬉しさが湧いて來る。左からミゾ谷の落ち合ふ邊りは谷は開けてゐるが流れは急勾配でどんどん流れるのと、河原に轉つてゐる岩石が大きいので中々豪壯な眺めであつた。高山の崇高な姿と水態の美とを共に味はへるこの附近は愉快な晴々とした處である。岩場を出てからゼンマイ谷迄は、今迄にない歩き易い所だつたので非常に足が捗つた。ゼンマイ谷へ着いたのは十一時頃であつた。地形圖にはゼンマイ谷と赤男谷（アカヲトコダニ）と合流してから本流に落ちてゐるやうに書いてあるので、どの邊りで落ち合つてゐるか見たいと思つて少し登つて見たが、一向それらしい樣子が見えないので不思議に思つて引き返した。それに二つの谷が合流した水としては、餘りに水量が少なすぎるのがをかしいと思はれてならなかつた。ゼンマイ谷の落口の上の所は少し惡いので山を廻らねばならない。そこで先づ腹を詰める事にした。先程から河原に二人の人の足跡を認めたが此處で山を廻つた跡も見える。廣河原の小屋の所にあつた足跡と同一人に相違ないが、何者だらうといよいよ不審の念が湧い

て來る。大汗をかいて山を廻つて河原へ下りて見ると、其處には思ひがけぬ大きな流れが右岸から落ちてゐる。水量はゼンマイ谷より反つて多い。ゼンマイ谷から先一里足らずの間にササゴ又迄大きな谷はない筈なのに、これは一體どうした譯か、して見れば先程の谷はゼンマイ谷ではなかつたのかと、何が何だか分らなくなつてしまつた。これは大變な事になつたものだとよく地形圖を調べて見ると、要するにゼンマイ谷と赤男谷とは落口が別々なのに、地形圖には合流してから落ちるやうに誤り記してあるのだと解釋してやつと安心した。この附近からは朝日岳が頗る間近く仰がれるので、そのすぐ下を私達が通つてゐた事に氣がついて喫驚した。

赤男谷から先は蛇紋岩の崩壞したものが多く、岩質は脆弱で谷全體何となく荒れた感じである。大した大廻りもないけれども河原ばかりも行けず、二時間足らず上つたり下つたりして行くと下(シモ)ササゴ又の落口に出た。この間左岸は岩壁が高くて相當立派な急斜面が見られ、ねずこの枝振のいゝのが流れに臨んでゐたり、赤や黄の花が岩壁高い所に咲いてゐるなどがあつて風景に變化はあつたが、何しろ最早水も少なく、それに右岸一帶に崩れが續き、平同樣の緩斜面で、空が透いて見え、ちぐはぐの調和の取れない風景であつた。それでゐて水が少くなつたとは言へ、徒渉出來さうな處はあまり多くなかつた。上(カミ)ササゴ又は緩斜面の灌木の中から流れ出てゐて一つの纏つた谷といふ感じのしない谷である。途中上流を見上げると鉢(ハチ)ケ岳の一角が仰がれ、そこから右へ下る尾根は柳又の上へ來て、急角度で谷へなぎ落ちてゐるのが見えたので、柳又谷の上廊下の近付いた事が分つた。

上ササゴ又の落口から上流の方を見やると、山容は只ならぬ樣子を見せてゐる。兩岸の壁は急角度に立つて非常に高く、ねずこらしい立木が黑く濃く茂つて居つて、その脅かすやうな岩壁の樣子では到底廊下の中は行けさうに見えず、さうかと言つて上を廻る事も不可能のやうである。いよいよ地形圖にある大壁のある所へ來たのだと思つた。そして豫想してゐたよりは遙かに物凄い山容に、行き先に何となく暗い不安が纏はり始めた。

ともかくも廊下の入口の樣子を見やうと思つて、山を廻り乍ら廊下へ近付いて行つた。廊下の手前の崩れの上へ出た時、對岸の崩れの上に二人の男が歩いてゐるのを見て、私は驚いて立ち止まつた。先方でも氣がついたらしく、立ち止つたので、こちらから合圖をすると先方でも應へた。そして双眼鏡で頻りにこちらを見てゐる。人夫は廊下の樣子を探り旁々對岸の人の何者であるかを見に行つた。人夫の川岸へ下るのを見て先方の人は崖の端へ馳せて來て「其處からは行けませんよ」と注意してくれた。そのうちに人夫達は徒渉して左岸へ移り、上へ登つて一人の男と話をしてゐる。今一人の男は素早く二挺の鐵砲を持つて何處かへ姿を隱してしまつた。密獵者だなあと氣がついた。同時に私達の見た足跡はこの人達のものに違ひないのを知つた。

時計は五時過ぎた。人夫は對岸から廊下の樣子を見に行つたらしく中々歸つて來ない。その中に廊下の端の急斜面の崩れの上に姿を現はし、それを驀地に下つて歸つて來た。人夫の話では水際はとても行けさうな模樣が見えないが、ともかく今夜この附近で泊つて明朝、方法を考へやうと言ふ。そこで左岸へ移る事にした。此處でもまだ水量は可なり多くて、流れの緩い所でも徒渉の出來る見込もない。廊下の入口は物凄く兩岸が迫つて已でにうす暗くなつてゐる。此處の徒渉をどうして人夫達が易々と行つたのかと思つて行つて見ると、對岸に大きな楢の木があつてそれが流れを被うてゐて、その枝に流木が一本引つかゝつてゐるのを利用してうまく渉つてゐたのであつた。左岸の崩れの上へ出て見ると、其處は薄氣味惡い程に地面がぶくぶくしてゐて、一雨來れば拔けさうな處なので到底泊る氣がしなかつたので、その上の緩斜面の藪の中の、小流れの畔りに泊り場所を求めた。餘りいゝ所ではなかつたが木を伐り拂つて一夜の宿とした。夕暮が迫る頃は朝日岳方面は次第に霧がはれ上り、夕日ヶ原、前朝日岳、朝日岳が手に取るやうに間近く尨大に見えて、今更乍らその重厚な大山容に崇高の念を覺えた。今日通つて來た道筋の谷々は、各々その山懷に深く喰込んで溪谷を形造つてゐる狀態も、よく觀察する事が出來た。到着が晩かつたのと、藪の中の焚木は生木ばかりで火のつきが惡かつたので、夕飯を食べたのは九時過ぎてゐた。それでも今日は夕立もなく夜もよく晴れてゐ

たので、天幕は張らずにすつぽり頭から被つて寢込んだ。この夜は時鳥が頻りに樹間に啼いて夢を破られ勝ちであつた。深更になつて出た下弦の月は木の葉の間を洩れ來つて、靜寂な夜を一層寂しいものにしてゐた。

私共の泊つた小溪流のある緩斜面を、假に便宜上「ナル谷(ダニ)乘越澤」と呼んで置く。

猫の躍り場

八月十日。今朝もよく晴れて、柳又谷右岸の山々はその全容を現はし、柳又に向ふ斜面の立木が一本々々數へられる程に空が澄んでゐる。だが行手に難關を控へてゐるので眺望も、そこそこにして廊下の入口に下つた。見ると壁は直立して流れは深い瀧をなし、口元から四五十間奥には立派な瀧が落ちてゐてその先で谷は右へ曲り、そして雪溪となつてゐる。廊下の中はまだ朝日の光も射しこまず、幽暗な氣に心も壓せられさうである。右岸を見上げて見ると壁はとても高くて、壁の上を廻る事さへ不可能のやうである。左岸は右岸程に壁は高くないけれども、二三百尺はあつて、當分は谷を行けさうな見込が全然無ささうである。少し上へ登つて奥の方を窺ふと一旦雪溪となつた流れは、その先で又雪溪が落ちてゐるので、どうにか水面へ下るにしても先へ進む事が出來ない。仕方がないので壁の上を、下り口を探ね乍ら行く事にした。私はこの廊下の入口の瀧を廊下の瀧と命名した。

そこで一旦露營地へ引き返して荷を纏め八時半頃出發した。壁の上の藪は深くて荷が引つかゝり、歩行は容易でなかつた。水面を見失はないやうに、あちこちから覗き込み乍ら行くと六兵衞谷落口の眞正面へ出た。六兵衞谷にも本流にも陽の光が十分當つてゐるので、廊下の中も今度は非常に明るい感じである。六兵衞谷は兩岸が開けてゐるので（雪崩が激しく木が生へぬらしい）、日が當つてゐなくても暗い谷ではないらしいが、殆んど瀑の連續で到底上り下りの出來さうにない谷である。落口は低い瀑となつて奔落してゐるのが見えたが、この附近の本流を十分見通す事は出來なかつた。そしてまだまだ容易に下り口がありさうには見えないので、尾根の上を藪を分ち乍ら行つた。この尾根の最高點へ着いたのは十一時半であつた。僅か半里餘りの處を三時間費した譯である。此處は地形圖の一六六〇米の標高を記してある所に當る譯だが、六兵衞谷からは可なり離れて居り、ナル谷落口の上僅か五六十米位しか高い場所に過ぎないので、地形圖に間違ひがあるやうに思はれた。この頭には鉈が入つてゐた。此處は獵師の重要な展望臺であるらしい。昨夜の露營地から緩斜面を上つて此處の先の鞍部を越すナル谷乘越の道筋は、この附近には珍らしいよい平で、廊下の入口から乘越迄三十分餘りで通過出來やうと思ふ位である。從つて特に六兵衞谷の落口や廊下の樣子を見たくなかつたら、何も苦しんで私等のやうに藪の中を歩く必要はない譯である。この乘越附近を地形圖には草地にしてあるが、實際は可なり灌木樣のものが茂つてゐる。霧のはれ間に此處から仰いだ前蓮華山(マイレンゲサン)（白馬旭岳）は素晴しく立派でそして近かつたが、こう思ひがけぬ程谷が惡く、足が捗らなくては尚幾日かゝつて水源迄行けるのか見當がつかなかつた。晝飯を濟して急斜面の崩れを下り、ナル谷へ下つて見た。最早水源に近い所だからこの谷の落口は瀧ではあるまいとは私の豫想であつたが、下つて見ると落口は二段の大瀧となつてゐて本流の雪溪の下へ落ちこんでゐる。兩岸は削つたやうに立つてゐるので到底下りやうはなく、その上、落口のすぐ上の本流には二つの大瀧があつて、それを越える方法もないやうである。これには全くがつかりしたが、人夫の顔にもありありと不安の色が讀まれた。ナル谷右岸の草地を熊の踏み倒した跡について登つて、本流の樣子を探つて見ると、瀧の上は雪溪が續いてゐるが二町程で谷が二つに分れ、本流は左折して物凄い高壁の間に隱れてゐるので、その先の樣子は全然分らない。右から下つてゐる支流は岩壁の中を急峻な雪溪を垂れ下げて、上の方は霧の中に隱れてゐる。この附近の柳又は言ひやうのない凄慘の氣に滿ちてゐた。人夫達はこんな惡い谷は見た事がないと言つて、流石黑部育ちの山男達も度膽を抜かれて顔を見合してゐるばかりだつた。

ともかくも雪溪へ下る所を探して草付をへつらうと私は主張したが、人夫は中々應と答へて呉れない。どうしても一度空身で樣子を見て來なくては、危險で荷を脊負つては行けないと言ふ。そして何處迄行けば下り場所があるかこの壁の樣子では見當がつかない。恐らく二町程先の高い壁の上を大廻りして越さねば下り

口がないのではなからうか、それにしても今何時だと瀧林が言ふ。時計はもう三時に近い。それでは今日中に雪渓へ下れるかどうか疑問だ。一先づこの附近で泊る事にして、泊り場を定めた上で、夕方迄に壁の様子を十分調べやう。これが瀧林の意見である。私も賛成せざるを得なかつた。そして何處に泊らうかと邊りを見たが一向よい泊場所がなかつた。そのうちに先程から一人で考へ込でゐた此川は、ナル谷の雪渓を登つて清水の平へ行き、其處から下つて見る方が安全でそして早道ではあるまいかと言ひ出した。それは困ると私は思つたが、此川はすぐに、「どうか一ぺん自分の意見を通さしてくれ。先日からあなたの意見通りに、無理をしても通つて來たのだから」と言つた。彼はこの惡場の草付が不安でならないらしいのである。私も困つた。人夫の不安がる處を無理に行けとは中々言ひ難い。それに考へて見れば、先程尾根から眺めたナル谷の雪渓は如何にもなだらかな美しい雪渓に見えた事を思ひ出した。そして猫又の平は又どんなに美しい所だらうか、思ひがけず其處へ行けるとすれば、今度の旅は思はぬ拾ひ物となる譯だなどと思つたのでいよいよナル谷登りと決定した。

落口から三町程で雪渓となつた。所がこの谷は附近の急峻な谷計りの間にあつて、何と伸び伸びしたなだらかな谷であつたらうか。美しい雪渓が何處迄も續いて、兩岸は今萌え出た計りの目も覺めるやうな新緑の草地である。草地には衣笠草が清楚姿で點々と咲いてゐた。緊張した谷歩きの後ではあるし、私たちはのんびりした氣持で邊りの風光を味ひ乍ら登つて行つた。この附近は余程熊の多い所と見えて草地は縦横に草が踏み倒されてゐるし、雪渓の上には熊の糞を何回となく見受けた。これは熊の谷といふのだらうと言つて笑つたが、後で山麓の古老に聞いて見ると、實際熊の多い谷であるが名前はナルダンと言ふのだと知つた。なるい谷（傾斜のゆるい谷）だからナルダンなんださうである。だから鳴谷なんかと書いても當らないわけである。昔獵師や藥草取りは柳又の惡場を避けて、ササゴ又から左岸へ移り、ナル谷の乘越を越えてこの谷を登つたものださうである。ササゴ又迄は道をつけてあつたし、そんな風にして通れば、柳又は通りにくいどころか實に面白い所に違ひない。昨日會つた密獵者もそれをやつて、この谷で熊か猿かを狙らつてゐたものに相違ないと思つた。

私達は非常に愉快な氣持で夕方猫又山へ着いた。この谷の上りに二時間餘りを費やした。猫又の平は素敵にいい所に違ひないと三人共思つてゐたので、愈々頂迄登ると、先を爭ふやうに急いで裏側へ出て見た。案の通り此處は言ふに言はれぬ美くしい仙境であつた。幾つも幾つも廣々とした平があつて、その平のお花畠は今滿開である。中でも夕日を受けた白山小櫻の群落の美しさには三人共聲をあげた。彼等山男の喜びを見よ。彼等は決して金を儲ける爲ばかりに山を歩くのではない。それよりも驚いた事は、劒岳が、非常に間近く、そして雲海の上に空高く突き立つてゐるのを仰いだ時だつた。思はず頭の下るやうな壯嚴な姿で、それはどう見ても高い高いものであつた。日本海上には眞紅な太い一線が爛々として流れてゐた。今しも陽が落ちやうとしてゐるのである。美くしい夕燒のさした平を、私は寒さも忘れて神秘を尋ね美はしきものに醉つてさまよひ歩いた。

割合に風が強いので、風當りの少ない處に天幕を張つた。夜は越中の平野に電灯の明滅するさまが美しかつたが、空模様が少し變つたらしく星數は至つて少ない。私は天幕の中に横たはり乍ら、今日思ひがけず此處へ登つて來た運命を考へた。私はこの樂園を發見した事を無上に喜こびこそすれ、少しも廻り道をした事を悔いる氣などしなかつた。そして近頃は全く登山者から忘れられてしまつたこの平の運命を、人の世の盛衰の姿と比べて考へて見たりした。この平は猫の躍り場といふ怪奇な名をもつてゐる。併しその躍り場の名さへ今は他に取られてしまつたのだ。近頃では、猫の躍り場は祖母谷の夜澤（硫黄澤）の出合でもあつたり、清水の新道の不歸岳の上方であつたりしてゐる。猫の躍り場の傳説については遂に今日迄詳しく聞かして呉れる人はなかつたが、小杉先生の文中には次のやうな意味に書いてある。

或る時金色の毛をした大化け猫があらはれて、盛んに人を捕へて食つたので、藩では獵師に命じて殺さうとした。獵師が八方捜索して此處へ登つて來て見ると、それとも知らず化け猫はこの平で怪奇な踊を躍つて一人樂しんでゐた。（流石の化け物もこの仙境ではすつかり氣を許してゐたものか。）狙ひ誤たず鐵砲で打

つと、化け猫は凄い大きな目で恨めしさうに瞰みつけた。（それがぞつと腸にしみこんでその獵人が……といふ後日物語がつくのであらう。）そばへよつて見るとその化け猫の大きさは一丈餘りもあつたといふ。

八月十一日。朝、目を覺して見ると相当激しい風雨が天幕を叩きつけてゐた。併し此處でいくら大雨に降られても先づ心配はないので、むしろ一日の骨休めにいい位に考へて雨の音を聞いてゐた。そして昨日その儘柳又の奥へ進んでゐたら今頃はどんな處にどんな不安な思ひをしてゐたらうかと、此處へ登つた偶然を喜んだ。雨は日中降つたり止んだりしてゐたので、すつかり御輿を据ゑてこの平の高山植物研究と洒落れた。特に珍らしいものも見當らなかつたが（又見當るわけもないが）既知未知のものを合せて五六十種類を數へる事が出來た。

八月十二日、雨後曇。朝は未だ雨が盛んに降つてゐたので、今日も亦滯在かと思つてゐると九時頃になつてやんだ。先づ黒部川の下流が見え初め、續いて毛勝（ケカツ）連山が悠然として雲を抜いて現はれたので、時間の遅れた序に平一帶を又一巡して見た。カシナギ深層谷は幽深な深さを見せて靜まり返つて居り、左方の尾根は幾つも突起を起して出（ダ）しの突坂山に終つてゐる。思ひついて見れば柳又左岸の大部分の谷はこの山から水源を發してゐるので、柳又の旅をしてこの山を訪れて見る事は相當意義の深いものである事を知つた。猫又谷の霧のはれて行くのを見てゐると、次から次と現れて來る山膚は如何にも廣大な範圍にわたつてゐるので、これは何といふ大きな谷かと驚いたが、霧がはれてよく見ると只それだけの谷で、別に支流といふ程のものも持たない單純な谷で、それが反つてこの谷を大きく見せてゐるのであつた。

白馬岳迄

午前十一時半頃になつて漸く猫又山を出發した。尾根に出てナル谷を見下して見ると、十町程下の雪渓の上に五六匹の動物が盛んに走り廻つてゐた。それは熊ではなく猿であるらしかつたが、此處は熊の歩き廻るのを見るのには究竟な場所だと思つた。清水平迄の三〇〇米程の上りは可なり急峻で偃松も深く豫想よりはずいぶん時間がかかつた。途中ナル谷側の斜面に素晴らしい高嶺きんぽうげの大群落を數ケ所見た。清水の平へ着いたのは三時近くであつた。猫の躍り場からは急いで登つても三時間足らずかゝると思ふが、そのためにあの平が孤立してゐるのだと思ふと床しい氣がする。農商務省の三角點の所へ行つて、何處から下るか谷の様子を見やうと思つたが霧が深くて何も見えない。やがて霧がはれてハヤ谷を見下して見ると、身の毛のよだつやうな凄慘急峻な谷で、雪渓續きだが、下の方の様子がさつぱり分らない。ナル谷の優美に比べてこれは何といふ凄い谷だらうかとその對照の妙に驚いた。この谷を下つて見たい氣もしたが、人夫は、カンヂキを落してしまつたから、この谷は下る見込がないといふので斷念せねばならなかつた。さうなるとハヤ谷の右の谷を下るより外はないが、これはすぐ左折してゐるので先の様子を探る由もない。併しこの谷とやがて合流する前蓮華の手前を下つてゐる谷は、ナル谷乘越からよく見えて、よい谷である事が分つてゐたので、こちらの谷も先づ大した事はないやうに思つた。私はこの谷の名を知る事が出來なかつたので假りに蓮華（レンゲ）谷と呼んで置く。そして便宜上私共の下らうとする谷を西の谷、前蓮華山から來る谷を東の谷として置かう。

さて下らうとして時計を見るともう四時を過ぎてゐる。谷へ下るのには時間が遅過ぎるので今日は清水平泊りとした。ナル谷迄來てからの足の捗らなさは甚だしいが止むを得ない。陸地測量部の三角點へ登つて見ると祖母谷の西の谷がよく見えて、かつて助七と二人で夜澤の出合附近で非常な困難をした事などが思ひ出された。祖母谷溫泉の湯煙の上つてゐるのもすぐ其處のやうに見下された。夕方平一帶を散歩して見ると、この平は實にいい平である事をしみじみ感じた。今は原の中を道が横切つてゐるので何となく中途半端に思はれるが、道のなかつた時代はどんなによい所だつたかと昔が思ひ返された。この美しい高原にも、露營の跡などは一つも見當らない。登山者の多くはこの平の美しさを十分に賞する暇もなく慌しく通つてしまふのであらう。この平で美しいものは高嶺うすゆき草の高雅な姿である。この平附近程この花の大群落を見た事はない。可憐な駒草もこの平の誇りであるが、道傍には可なり少くなつたやうに見受けられた。夕方になつ

て南方の空が晴れて遠く槍ケ岳の尖峰がちらりと見えたが間もなく邊り一帶は霧に隱れてしまつた。今日はまだ十分に天氣は恢復しないやうである。

八月十三日、晴。愈々蓮華谷の西の谷を下り始めた。空がよく晴れてゐるので氣持がよい。どうかしてうまく本流へ下り今日こそは柳又谷上廊下の秘密を探りたいものだと元氣で下りて行つた。雪溪は非常に急で、私はかんぢきを穿いてゐてさへやつとの思ひで下つたが、人夫達がかんぢきなしで下り終はせたのにはすつかり感心させられた。東谷と合流する上部に相當大きな池が見えた。合流點迄は中々遠かつたが、そこへ來て先を見ると本流迄はどう見ても二三町しかないやうに見える。地形圖で見ると十四五町以上もあるやうに思はれるので、一體この先はどうなつてゐるのだらうかと不審に思つて雪溪を下つて行つた。所が二町程下つてから俄然雪溪が急下し、忽ちにして五六十尺の瀧が落ちて下は又雪溪となつて落合迄は間もないらしい。けれどもこの瀧は又もや下降不可能の瀧であつたので又かと大いに失望した。荷物を下して三人でロープを身體に縛りつけて、左岸の急斜面の草付をへつって落口迄行つて見た。本流の兩岸は實に高い壁で、壁はオーヴァハングして對岸に迫り、谷筋は見通せないが、兩岸は極度に迫つて廊下の中は眞暗であり、そして水面迄は非常に深い氣がする。立木の間から雪溪らしいものは見えるが續いてゐるのかどうか見定める事が出來なかつた。そしてどう探しても荷物をもつてはおろか空身でも下れさうな處は見當らなかつた。此處の栂の林の中でおにくを數株發見した。ともかくも引返すより外はない。蓮華谷を相當に上つてから山を左にまき、そして下り口を探して見やうといふ事にして心進まぬ乍ら引返した。併しこの分ではどうやら上廊下の神秘を窺ふ事は不可能なのではないかといふ念が湧き始めた。引き返して登り始めると間もなく右手から長い急峻な雪溪が下つてゐるのが見え、それは中々堂々として立派である。合流點下の川中島の草の上で重い氣分で晝飯を食べた。此處で私共は愈々不審に思つたのはこの附近の地形と地形圖との相違である。目測では合流點から下は約二町、歩いて見て三町より長くない。それが地形圖では半里以上もあるやうに記されてゐる。所が合流點から上、東の谷の長さは大體地形圖位しかないと思はれるので、要するに蓮華谷の長さは地形圖の方が十數町長過ぎる事になる。地形圖ではこの附近の柳又を少し北へ寄せ過ぎて書きはしなかつたかといふ疑念が起つた。そんな事はあり得ないとしても、東の谷と西の谷の合流點から下は實際の五倍以上の長さに書いてある點だけは間違ひない事實であつて、この谷を探る人の再調査を待つものである。

さて私共は晝食を食べ乍らどの邊から山へ入るかについて考へてゐる中に、米は已でに明朝限りしかない事に氣がついた。其で今日の柳又入りは斷念するより外はなかつた。止むを得ず東の谷を遡つて白馬へ行く事にした。

合流緣の數町上には二ケ所に池があつて附近は可なり廣い平である。小杉先生の文中に熊池なる名稱の池のある事を書いてあるが、この附近には此處以外には池がない筈だから、これが熊池だらうといふ事にして置く。併しこの池は尾根から見えるかどうかは私は知らない。ともかくこの池附近にベースキャンプを張つて、附近の雪溪、岩山、柳又の岩壁などを遊び廻る事は非常に面白いに違ひないと思はれた。

合流點から約三四町上を道が横切つてゐるのを發見した。この道は長池から柳又を横切つて來てゐるもので、清水の尾根を越え祖母谷の清水谷の方面へ下つてゐる古い鑛山道である事は以前から聞いてゐた。私達は道を上らず、その儘東谷を登つた。雪溪になつてからも中々尾根迄は遠かつたが、四時頃この谷を登りつめて清水道へ出た。東谷の登りには二時間餘を費した。今日は午後もよく晴れてゐたので何處でも誠に氣持がよく、序にと思つて初めて前蓮華山の頂上へ登つて見た。夕方白馬の頂上小屋へ着いて見ると登山客が五六十人もあつた。晩餐の食堂は奇妙にも酒を呑む人揃ひで、各地の歌が盛んに唄はれて賑やかであつた。

柳又から長池迄

八月十四日、快晴。御來光の雲は高かつたが間もなく空が澄んで來たので、客の去つた後の閑散な小屋の前で餘念なく眺望に耽り、思はず時間を費してしまつた。私は白馬に登る事は九回目だが、今日程富士山の長く裾を引いてゐるのを嘗て見た事がなかつた。そして白馬から見る富士の姿も滿更捨てた眺めでない事を

初めて知つた。

九時過ぎてから漸く出發、柳又へ向つて下り始めた。柳又水源の雪溪は極めて緩斜面で、爽快な氣持でどんどん馳け下る事が出來た。半里以上にも及ぶ長い雪溪の終端迄頂上から三十分餘りで走り下ると、谷は急に迫つて殆んど眞逆樣に下つてゐる。それに反して雪溪の終端附近は如何にも廣々とした平で、言ふに言はれぬ氣持のよい美しい草原である。白馬岳の裏側にこんな優美な平があらうとは今迄知らなかつた。何處迄下られるか分らないが、とにかく荷物はこの平に置いて、ロープと辨當とカメラ丈を持つて下つて見る事にした。これから先は殆んど瀑又瀑の連續でどんどん下つて行き、殆んど逆落しの感があつた。私共は岩につかまり通しで下つて行つたが二三ケ所の他はさして惡場がなかつたので、絶えず不安に襲はれ乍らも、非常に爽快な氣持で下つて行つた。雪溪に到る迄の間には四つの美しい瀧があつた。この中の下から二番目に當るもので、最も幅の廣い瀧らしい瀧を此川新作の名を取つて私は新作瀧と命名した。この瀧の上數十間の所を例の鑛山道が横切つてゐた。この下に長池方面から入る溪流が二つあつて、何れも水量の非常に多いのを不思議に思つた。

愈々溪流の瀧の連續も盡きて雪溪となつた。雪溪は地形圖に、前蓮華から下る尾根に二〇〇〇米の記號があるすぐ右の谷の落口のすぐ下から始まつてゐた。雪溪に入ると急に廊下が高くなつて、谷の狀態が凄慘の狀を現して來た。雪溪の眞中程に何ケ所も穴があいてゐるので誠に氣味が惡く、三人でロープで結び合つて、なるだけ雪溪の緣の方を下る事にした。何時何處で雪溪が切れて前進不可能になるかも知れないので、不安な氣持に驅られ乍ら下つて行つた。それでも蓮華谷の落口に到る迄は雪溪の切れ間がなく、無事に下る事が出來たのは意外であつた。

蓮華谷落口附近は昨日上から見下したと同じく、柳又全谷中で最も壁の高い所であつた。殊に右岸の壁は高く、最も高い所は一千尺を越えて居ようかと思はれた。蓮華谷落口附近に行くと、それでなくてさへ暗い谷間に、深い霧が掛つて闇のやうに暗くなり、人夫達の顏には不安の色が漂つて引返したさうに見えた。そして雨が降りさうだ、先へ行つても大丈夫か知らんと盛んに私に歸る事を間接に促してゐるやうに思はれた。

併し私は此處で歸つては連日の骨折りも空に歸するので、何喰わぬ顏してどんどん先へ進んだ。蓮華谷の落口の瀧は約四十間程合流點から上にあり、瀧の下迄雪溪が續いてゐたので、その上を瀧の下迄行く事が出來た。昨日上から見下した當時は到底此處へ行けるなどとは思へなかつた處である。瀧は水量は少ない乍ら、この深谷の只中に秀麗な姿で堂々と落ちてゐた。瀧下から左岸の壁を見上げると上り下り出來さうな斜めの岩の割れ目があつた。之も昨日上から見下した時はどうしてもこんなよい所があらうとは思はれなかつたのだつた（柳又谷上廊下の壁は片麻岩であつたと私は記臆してゐるが或ひは思ひ違ひかも知れない）。

見上げる豪壯な壁の高さは、霧が深いだけに一層脅かされるやうな感じであつた。蓮華谷落口から本流を四五十間も下ると俄然雪溪が落ちてゐて前進不能となつた、これで愈々お仕舞ひかと思つたが、今少しの處で如何にも殘念なので、右岸の壁に足場を求めて上つて見た。壁の裏へ廻つて見ると幸ひ草付が少しあつたので、それに頼りながら一町足らず下つて再び雪溪の上へ下ると、間もなく左からハヤ谷の雪溪の下つてゐるのに出會つた。見上げる急峻な大雪溪は如何にも堂々として、劒岳の平藏の雪溪によく似て居た。私は今日まさか此處迄下れるとは思つてゐなかつたので、この雪溪の下に立つた時には本望を遂げたと思つた。

後三町餘りでナル谷の落口である。その上手の瀧の上迄行ける事はもう見極めがついた。やがてごうごうといふ瀧の音が死のやうに靜寂であつた廊下に鳴り響いて來てやがて瀧の上に出た。ナル谷落口の瀧は三十間程先に落ちてゐる。そして先日下つたナル谷乘越の手前の崩れが非常に急斜面に見えるのに驚いて、どうしてあんな處を下れたらうと今更喫驚した。此處からナル谷へ越す、左峯のへつりは大した事がない事が、今、下から山の樣子を見て初めて分つた。先日あれだけ大げさに豫想する迄もなかつたのだが、上からはこの附近が非常に惡く見えたのだから止むを得ない。壁は急であるが壁の間に割れ谷があつて、これに足場があるのである。それでナル谷からこの瀧の上へ越すには餘り遠廻りせず、瀧のすぐ上へ下る氣で足場を求め、割れ谷に下れば大丈夫下れると私は思ふ。私はこの瀧を深廊（シンロウ）の瀧と命名した。

これでとにかく私の柳又縦斷の旅は終つた譯である。私達は此處で記念撮影をして引き返す事にした。時計は午後三時を廻つてゐた。上の雪渓の終端から四時間餘かかつて下れた譯である。廊下の雪渓の上には羚羊の毛や皮が數ケ所に落ちてゐたが屍骸は一つも見當らなかつた。恐らくまだ雪の下に埋まつてゐるのであらう。春、雪崩の猛烈な頃には流石岩場の練達の士羚羊も逃げる隙もなく、無殘にも廊下の中へたたきつけられるのだらうと思つた。歸りになると人夫達は流石に喜んではしやぎ始め、ハヤ谷でも何處でも登つて見せると威張つてゐた。

柳又の上廊下約一里程の間は只凄慘な氣に滿ちた處で、到底その壁の美しさなどを讃歎する程の餘裕のある所ではなかつた。只私共はどうにか目的の柳又を通り了へられた事に滿足したのみであつた。この廊下では雪渓の落下といふ事が最も危險であるやうに思はれる。そして九月頃にこの深廊の雪渓も到る所落ちるやうになつたらこの廊下は通行は全く不可能となるであらう。ハヤ谷を上下する事はこの谷では最も痛快な事と思はれるが、とにかくそれは將來の問題である。

私達は新作瀧の上の、道の横斷點迄引き返し、そこから鑛山道の跡を登つて長池の下附近へ出て、それから右へ緩斜面を横切り、荷物の置場所迄戻つた。そして重荷を下した思ひでこの附近の美しい高原狀の廣場の快感を思ふ儘に味はつて見た。地獄の責め苦のやうな凄慘な廊下の上に、之は又何とした美しい樂園が朗らかに廣がつてゐた事だらうか。自然の配合の不可思議、山岳の持つ魅力の複雜微妙なる事に、只管驚歎しないでは居られなかつた。恐らく白馬附近ではこの平程お花畠の美しい所はなからうと思はれた。數町の間續いてゐる南京小櫻の大群落など夢ではないかと思はれる程美しかつた。何時かはこの附近でゆつくりと高原的氣分に醉つて見たいものだと、早くも再遊の氣を誘はれた。全くこの平を發見した事は思ひ設けぬ大收穫だと思つた。夏はあのやうに雜沓する白馬岳のすぐ裏にこのやうな神秘に滿ちた美しい平があらうとは誰が知つてゐたらうか。

繰り返して言ふが、私の過去十數年の經驗に徵して、白馬附近では此處程廣大なお花畠のある所を見た事はない。大池附近などは此處に比べると遺憾乍ら數段の見劣りがする。そして白馬岳のお花畠は美しいなどとよく聞くが、それは一體何處を指して言つてゐるのであらうか。葱平のお花畠などは、美しいお花畠と言ふには餘りにも失望の大きい所だが、今度この平を發見して今こそは誇るに足るお花畠の、白馬岳にもある事を知つた。この平から約四五町長池迄の間も、うまく偃松を避けて行けば、誠に氣持のよい平續きである事も分つた。私共は夕暮迫る頃長池池畔に着き、高嶺きんぽうげの一面に咲き揃つた池畔に天幕を張つた。そして今日の道筋から考へて、朝日岳から白馬岳へ行くには單調な尾根ばかり行くよりは、鉢ケ岳から長池に下り、そしてこの美しい平を拔けて、一里にも近い長大な柳又水源の大雪渓を登つて白馬へ登る方が、時間に於ても大差なく、氣分の上では尾根の上を行くより數倍した愉快なものである事を知つた。そして大山岳としての白馬岳の本領はこの邊り迄探ぐる事によつて初めてその眞價を發揮する事を感じたのである。

私共は翌日此處から朝日岳へ向ひ、イブリ谷を下つて北又谷への旅を續けた。

後　記

柳又の入口から水源迄遡るのに、私共は結局一週間以上費してしまつた。然しこれは三人共柳又入りは初てで、そして何等參考にすべき先行者の文獻がなかつたからで、私も再度行くとすれば決してこんな時間の掛る事はないと思ふ。先づ第二日は入口から廣河原迄、これは少し無理と思ふが、朝餘程早く測水所を出發すれば不可能の事もあるまい。又第一日目の泊りを五六町程柳又へ入つてからにすれば尚好都合と思ふ。第三日目はナル谷乘越迄は行けるであらう。四日目はナル谷を下つて本流の深廊の瀧の上に出て、その先の雪渓さへひどく落ちてゐなかつたら、その日の中に白馬岳まで樂に行けると思ふので、柳又の遡行は大急ぎで四日間、ゆつくりで六日間位かゝれば充分と思ふ。しかし結局一週間分の食糧を用意して行くのが必要な行程である。何にしてもこの谷は豫想外に惡い谷であつた。しかも柳又谷の上廊下の六兵衞谷落口附近は、私の力では到底通過不可能である。この邊は五月の下旬か、六月上旬頃なら雪渓が續いてゐて難なく通過する

事が出來やう。その代り水量の最も多い時季だから下流の困難さが思ひやられる。

私はこの谷を通過し終つてから考へて見るに、柳又の中流は何となく纏りがなく、風景がばらばらに散在してゐる谷のやうに思はれてならない。これに較べて、北又谷は終始整然として一糸亂れず風景が統一され、瀞、瀧、壁、森林が見事に調和されて、優美極りない神秘の谷である事を一層深く感じるやうになつた。柳又谷のこのちぐはぐの感じは、花崗岩の露出が餘りに早くなくなつて、蛇紋岩等崩壊しやすい岩質が谷を構成する爲ではないかと私は素人考へに考へるのである。もしも花崗岩が北又谷の最終露出と同高度に當るゼンマイ谷附近迄あつたら、この谷は餘程引き締つた美しい谷であつたらうと思ふのである。このやうに花崗岩の露出の少いのは、この附近の花崗岩の盛り上りが特に低いのか、或ひはこの谷の年齢が若くて浸蝕がまだ足りないのか、私には固より分らないが、之を示して下さる方があつたら有難いと思ふ。この谷の中流が北又谷に比べて大いに風景が劣るとは言へ、その下廊下の豪壯な溪流と壁、その上廊下の凄慘なる景觀は決して谷好きの人に不滿を與へるものではない。木暮氏は、イブリ谷の遡行は小規模乍ら冒險心を滿足させる事が出來ると云つて居られるが、成程イブリ谷も可なり惡い谷ではあるが、斯る點では、柳又の險惡さに比べてイブリ谷などは物の數ではない。

18　加藤文太郎　「嚴冬の立山・針ノ木越」『単独行』

1941（昭和 16）年 8 月 25 日刊　株式会社朋文堂発行

要　約

1934（昭和 9）年 12 月 31 日～1935（昭和 10）年 1 月 6 日の記録。

メンバーは、加藤文太郎。

行程は、一ノ越～大汝山・竜王岳～平～針ノ木峠～スバリ岳往復。

※針ノ木峠積雪期単独初踏破ほか、全て積雪期単独初登頂。

※加藤文太郎は RCC 会員。

昭和九年十二月三十一日　曇後雪　八・〇〇千垣　一〇・〇〇――一・〇〇藤橋ホテル　一・〇〇材木坂上　二・〇〇ブナ坂小屋

今日は早朝から既に上空が曇つてゐる。之は天候惡化の確實な前兆である。風はなく暖かで山ははつきり見える。富山驛から堀川新へ行く郊外電車の中や南富山から千垣に行く縣營電車の中で見る立山連峰は何時も乍ら雄大な眺だ。

何時も朝食は富山驛前で買つた餡の入つた餅です。この餅は舊正月頃に買ふと何時もの半値で實に安い。餅は食ひ易くて良いが、重いので多量には持つて行けない。富山で買つたのはまだやわらかいので、電車の中で少しと、芦峅から藤橋迄の間で一寸休んだ時等に中食として食べる。

以前は藤橋ホテル等によらず、晝食にも此の餅をたべてゐたが、近頃はホテルに休んで暖い晝食をし、魔法瓶に熱いお茶を入れて貰つたりして出來るだけ樂をする。

正月頃でも去年の様に雪の多い都市や、二、三月頃には藤橋より八町程手前で雪崩のよく出る所がある。其處は高度も低く南斜面の草山なので日が當ると直ぐ雪崩れる。雪崩のひどい年は河原を傳ふ様に道が出來てゐて橋も架つてゐる程である。また材木坂にも雪崩の出る所が二、三ケ所ある。其の中一番大きな奴が出るのは、地圖の材木坂の材の字から南へ出てゐる淺い谷からである。此の雪崩の出る所を越して次の尾根を二、三回キック・ターンをして登り、右へ巻けば清水の出てゐる一番大きな谷へ出る。此の谷はブナ坂の下から出てゐる淺い谷の續きである。清水は眞冬でも埋る事がなく、何時も登山者に元氣をつけてくれる。此處から上は廣い谷なので大きくジッグザッグを刻み乍ら登れる。傾斜は隨分急なので、日當りのよい三月頃はスキーの爲に足元から雪崩れる事があり、下りには特にいやな所である。

材木坂の下りには此の清水の所をよく注意してゐて、之より下へくだり過ぎない様にし乍ら右へ谷をトラバースしないと惡場がある。しかし例年正月頃は雪が少く道が全く出てゐてそれ等の心配がなくスキーを擔いで上下する時の方が多い。

スキーはアルペン擔ぎにした方が兩手が自由なので都合がよい。これは兩スキーの先端を重ねて前皮か適當な紐で締め、兩締具をルックサックの負皮の上の鐶に通して、ルックサックと共に擔ぐのである。もしスキーがぐらつく様ならテールの方も紐で腰に縛りつけるのである。

いつもブナ坂を登り切ると、惡場から開放された安心からレモン・テイ等を沸して暫く休む。今年は新道が出來てゐて美女平を通らず尾根の右端を巻いて小谷にいで、それを渡つたり等して暫くは道もわかつたが、直ぐ道を失ひあとは籔をくゞり乍ら略舊道に沿つて登つて行つた。此處は杉の植林がしてあり、迷へば左の方へ巻く方が樂である。

此處まで來ると天候は全く崩れて豫想通り雪が降り出した。霧のためにブナ林もぼんやり霞んで遠くは見えない。ブナ坂は約一一四〇米から一一八五米位の廣い大きな坂で良くわかる。此の坂は道より少し右寄りに登つた方が樂だ。之を登り切れば直ぐ目の前にブナの小屋が大きく現れる。時間はまだ早かつたが、雪が降り出したので此處へ泊る事にして内へ入る。小屋は二階建の頑丈なもので、どんな大雪の時にも埋つて入

れぬと云ふ事はないであらう。寢具、食糧、燃料等も備へてあり、正月には大抵番人が居るから安心だ。

此の日はお客が僕一人なので儲らないと思つて番人は山を下つてしまつた。天候は益々惡化して夕方から風が吹き出し、夜中には雪が雨に變つて物凄い暴風雨になつた。始め二階に寢て居たが、ひどくゆれて不安なので下の炊事場へ退却した。しかし炊事場も大變いたんでゐてあちこち雨が洩るので一晩小さくなつて寢てゐた。

昭和十一年一月一日　雪　ブナ小屋滯在

朝になつて風は落ち、雨は雪に變つた。しかし、まだ急にはよくなりさうもないので滯在ときめて、食糧節約の爲小屋番の殘して行つたぼろぼろの飯をおかゆにして食べる。晝頃一寸スキーの練習にブナ坂を下つて見る。雪量が少い爲藪が多く、よく轉ぶのと、一人では淋しいので直ぐ止めてしまふ。

此の坂は二、三月頃の雪の多い時は全く氣持の良い斜面で、二、三人も居てスキーの練習をして居れば實に愉快な所である。それに山の方が隨分ひどく荒れて居ても此處は高度が低いのと、ブナの林の中なのでスキーの練習が出來ないと云ふ事はない。僕は去年の正月、此處で一週間降り込められて引法迄さへ行けなかつたが、丁度一緒になつた名古屋三菱のパーテイと共にブナ坂で轉び廻つたり、小屋番や案内人と兎を追つかけたりして遊び、夜はストーブを圍んで山の話にメートルを上げる等實に愉快な合宿氣分を味ふ事が出來た。

案内は色々と面白い話をしてくれた。兎を手摑にする話や、つかまへるとニャンニャンと泣くとか、あれでも中々かしこく自分の行方をくらます爲適當な隱場所があつたらそれを横目で見乍ら、なほ暫くはピョンピョンと飛んで行つて後、附近に恐いギャングは居ないかと周圍をきよときよと見廻し、やをら其の隱場所の所迄前の足跡を亂さない様に傳ひ、其處で大きくジャンプして其の孔に飛び込み、決して其處には足跡をつけない等と云つた。かうして置くと兎の大敵貂等に足跡を傳はれても安全だと云ふ事だ。夕方から氣溫が下り雲が動き出して天候恢復の兆が見えて來た。明日の準備をして早くから床へもぐり込む。

一月二日　小雪後晴　九・〇〇ブナ小屋　一・三〇弘法小屋　六・〇〇天狗平の小屋

今朝は暗い中から出發する豫定であつたが、まだ雪が降つて居るので出足が鈍つた。やつと九時頃になつて時々雲が切れて青空が見え出し、はつきり天候恢復の兆が見えたので急ぎ出發する。小屋を出て大體左寄りに廣いブナ林の中を登つて行く。

雪の少い年は藪がひどく夏道通りしか登れないが、二、三月頃なら大抵何處でも通れる。稱名川は足下はるかに音を立てゝ物凄く落ち込んで居るので、あまり端を通る事は危險である。此の高原にたまつた水は主に右手常願寺川へ流れて居るので、丁度此の端が廣い尾根の分水嶺になつてゐて、此處を通る事はうるさい谷等を越したりする事もなく樂である。ブナの小屋から一時間も來るとシジミ坂と云ふ一寸した登りがある。丁度地圖の一二七〇米附近である。

なほも稱名川を見下し乍ら同じ様なブナ林の中を登つて行く。シジミ坂よりまた一時間程も來ると尾根も多少狹くなり、且、右に此の高原としては割合大きな谷が現れてくる。卽ち此の谷が桑谷で地圖の一四一四・八米の三角點の手前にある深さ四〇米ばかりの谷である。此の谷は上で二つに別れ、左の方は短く、且、谷は稱名川の方へも落ちてゐるので、此處で迷つたら右へ右へと取つて、決して此の左の谷へ入つてはならない。

また此處は尾根が細くなる手前でトラバースしないと藪がひどく、尾根も大變複雜になつて居て厄介である。桑谷へ下りたら谷をあまり登らず、なるたけ早く右手の手頃な斜面か溝谷を登る方がよい。

一四一四・八米附近は伐採されたものか木もまばらな眞白い平原である。この平原を暫く進んで行くとまたブナ林が現れ、其の中を一時間も登ると稱名の瀧の音がドウドウと足元から響いて來る。尾根も稍々狹くなり、針葉樹の目立つ所を過ぎると此度こそ實に廣々とした眞白な斜面が現れる。これが一六一二米の三角點の直ぐ下である。

これを登り切れば直ぐ目の前に弘法小屋が見える。然し今日は霧が深く遠くは見えない。晴れた日ならと

てもよい眺で、南の方には彌陀ケ原の廣い高原を隔て大きく胸を張つた藥師岳が實に雄大に見えるし、東の方には鳶山、鷲岳、鬼一龍王、天狗、別山等が見え、大日一早乙女等と共にアーベント・グリュウエンに燃えてゐる雄大な景色は立山に登つた者に忘れ得ない印象を與へる。

弘法の小屋には何時でも水が出てゐるので、中へ入つてコッヘルで甘納豆をたき晝食をする。小屋には寢具、燃料、食糧等備つて居るので、此處を根據地として立山へ登つたり、附近の高原をスキーで逍ひ歩くのは實に樂しく良い所である。其の上隨分荒れてゐる日でも此處からなら安全に下山する事が出來るので、追分や天狗平の小屋より安心である。

冬期は多く強い西風が吹くのでそれに向つて山を下つて來るのは大變で、一寸荒れても室堂や天狗平から出る事が出來ない。弘法の小屋を出て左に淺い谷を見下し乍ら十五分も進むと、丈の低い針葉樹がまばらに生えた三米程の坂がある。此處を過ぎて暫く行くと右側にも淺い谷が現れてくる。此度は此の右の谷に沿つて進めば一時間半程で追分の小屋へ着く。雪は割合しまつてゐてラッセルは弘法迄にくらべるとずうつと樂であつた。

弘法迄は樹が繁つてゐるので二月頃には隨分深い事がある。追分の小屋には富山電氣局の一行が泊つて居た。一行も立山へ登らうと思つてやつて來たのだが、昨日今日と二日も天氣が惡いのであきらめてもう今日は山を下らうと思ひ其處迄出たのだが、霧の爲方向もわからず今引返した所だと云つてゐた。しかし天候は全く良い方に變つて居て、霧も大分薄くなつて來たし、所々青空さへ見える。で、僕は「天氣はもうぢき良くなりますよ、何んなら僕と一緒に天狗平の小屋へ行きませんか」と誘つてみた。けれど一行はコンディションの惡い人もあるので、天氣がよくなれば直ぐ下山しようと思つて居ると云つた。で僕は「山を下りられるなら今僕の登つて來たシュプールが確實に殘つて居ますから、どんなに霧が深くとも迷ふ事はありませんよ」と云つて元氣をつけてあげた。

追分からは夏道を離れて眞東にコースをとり、湯川の谷の緣へ登つて行く。この附近は之迄と違つて急に針葉樹が繁り、雪が深く、傾斜も急にラッセルがつらい。尾根の手前百米ばかりで左へ方向を變へ尾根を右山に捲いて斜に高く登つて行くと一つの段へ登りつく事が出來る。追分から一時間である。この頃より全く霧が晴れて廣い廣い彌陀ケ原が脚下に展開されて來た。此處は地圖の彌陀ケ原の彌の字から東へ登つた尾根の二一〇〇米位の所である。

此處迄來ると木もまばらになり、雪も締つてラッセルが樂になつて來た。遙か後の方で人聲がするので、振り返つて見ると一行が後を追つて來るのであつた。尾根の下七、八十米位の所をまき乍ら廣い谷を一つ越すと天狗の頂上からはるか下の平迄續いてゐる雄大な斜面に出て來た。此處で一行は追ひついて來て「良い天氣になつたので立山へ登りたくなつてやつて來た」と云つてラッセルを代つてくれた。此の附近は風が良く當るので板狀雪になつてゐる所もある。なほも右山で中腹をまき乍ら進むと、弘法より四時間程で尾根はぐつと右へ曲つてしまひ、前面に天狗平が現れてくる、丁度立山の連峰が夕日に燒けてとても綺麗である。天狗平の小屋は地圖の鏡石から東東南八百米程の所と思はれる。

天狗平の小屋には天狗岳に面した南窓から入る。寢室は二階で、寢床が一部分押入の樣に二段になつてゐる所もある。小屋番が居てストーブは赤々と燃えて居るし、何んにもしないで居て暖い御飯がたべられるので、斯んな高い山の上だとは思はれない。丁度山の先輩杉山さんが泊つて居られて殊に賑やかであつた。杉山さんの話では今日は下の方こそ霧がかゝつてゐたが、上の方は良いお天氣で立山頂上の大觀は素晴らしかつたとの事だ。小屋番はおとなしい男であつたが、若い案内二人と夜晩く迄話をしてゐて耳障りであつた。（然し可愛想にも此の冬東京から來たパーテイのお供をして立山へ登り、途中ひどい吹雪に會ひ、皆と一緒に雪の孔の中に避難してゐたが、二、三日目に到頭此の小屋番丈が凍死したそうである。）

一月三日　快晴　七・〇〇天狗平の小屋　一〇・〇〇立山最高點　三・〇〇ザラ峠　五・三〇刈安峠　九・〇〇平の小屋

今日は實に素晴らしい良いお天氣である。富山組四人と小屋番の案内及僕の六人で出發した。昨日登つた杉山さんと案内のシュプールがあるのでそれを傳ふ。廣い雪原を南よりに東へ向つて暫く登ると淺い谷を渡

る。二六二〇・八米の裾を巻き終るとまた廣い谷が現れてくる。此の谷にはよく雪庇が出來てゐるので、なるたけ右寄りに巻いて谷を渡る方が安全である。

これを越せば室堂の平は直ぐである。天狗平から一時間程で室堂に着く。室堂からは淨土山の北斜面を捲いて行く、急斜面を捲き切ると一ノ越は直ぐ目の上に現れてくる。此の附近は隨分風が強いとみえて雪は固くなつて居るし、淨土側には一部雪庇が出來て其の下には大きなスカブラが出來て居る。一ノ越の直ぐ下の固い雪の斜面をキック・ターンし乍ら登れば室堂から一時間程で一ノ越の上にのぼれる。大抵風は西から吹き上げて來るので風蔭を求めて黒部側へ一寸下り、其處でスキーをアイゼンにかへる。

乳菓等を少したべて元氣をつけてから登る。小屋番の案内はアイゼンを持つて來なかつたので、頂上へは登れない。富山のパーテイも夏山用の不完全なアイゼンを履いて居るので早くは登れない。一ノ越から頂上迄の間の尾根は最初一寸雪のやわらかい所と、岩の出た所があるが大體固い雪の道で、所々風で夏道の出て居る所もあり、夏と殆ど變らない時間で登れる。

然し風は中々強く寒いので、防風用の服を着、顔は毛皮で頬冠りをした上、スキー帽も冠つて登る。頂上の社務所の所はまだ雪がやわらかく所々落ち込む。僕は雄山神社の所へ登つた後、大汝の方へ二十分程縦走して行つて立山の最高點へ往復する。此の最高點から雄山神社を越して藥師岳が見えるし、大汝の上には黒部谷下流の白馬側の山が見える。富山のパーテイの内頂上へは二人しか登らなかつた。他の二人は追分の小屋に居る時から既に消耗して居た人である。頂上へ登つたリーダーらしい方の人は、是で春夏秋冬と立山の頂上へ登る事が出來て本望であると云つて喜んで居た。一ノ越で一行から蜜柑を御馳走になる。

一行がスキーを樂しみ乍ら一ノ越を下つて行くのを見送つた後、コッヘルで甘納豆をたいて晝食をすまし、十一時に此處を出發する。スキーはアルペン擔ぎにし、兩テールは紐で腰に縛り付けてぐらつかぬやうにする。尾根の雪は固く一時間程で龍王岳の所へ來る事が出來た。此處で荷物を置いて龍王岳の頂上へ登つて見る。頂上は別に變つた事もないが、高い所を素通りすると後で心殘りになるからである。

龍王の下りは隨分急であつた。しかし雪がやわらかいので危險ではない。大體にこれから鬼ケ岳へと續いた尾根は右側の湯川へ面した方がひどく落ち込んで居て噴火口壁である事をはっきり現して居る。尾根の雪は意外にやわらかく下りは安全だが、一寸でも登りがあると全く骨の折れる所であつた。然しザラ峠への下りは雪もよく締つて居て、危險もない斜面なので走つて下る事が出來た。一ノ越から此の峠迄三時間半程である。

またコッヘルを使つて輕い中食をし、元氣をつけて後やはりスキーは擔いだまゝ五色ケ原へと登つて行つた。そして五色ケ原の小屋が直ぐ目の前に見える所で初めてスキーを履く。五色ケ原の小屋は大半露出してゐて樂に入れさうである。若し冬期も寢具が置いてあるなら二、三日位泊つてスキーの練習をしたい所である。小屋から斜め左に暫く滑つてゆるい谷を渡り、鳶山二六一四米から一九五一・五米へ下つた東尾根へ取附き、この尾根をドンドン下る。

初めのうちは木もまばらな廣い尾根でとても愉快な滑降を樂しめたが、漸次尾根は細くなり、左側は急に落ちてゐるので右側ばかりまかねばならず、其の上今日は冬には稀な良いお天氣だつた爲、雪が溶けて夕方にはブレーカブル・クラストに變化して來た上、大晦日の雨はこの附近もひどかつたらしく、木の根元に大孔を穿けてゐるので思ふ樣に飛ばせない。一九五一・五米の手前の刈安峠には、四日程前に通つたパーテイ（登山者一、案内二）のシュプールがかすかに殘つて居る。一行は一ノ越から御山谷を途中迄下り、二〇五〇米位の尾根を越して中の谷へおり、後此處へ登つて來たものであらうと思ふ。其の後は此のシュプールに沿つて下れるが、雪は增々ひどいクラストに變り、且夕闇はせまつて來て峠を半分も下らない中に足元も見えなくなつて來た。

なほも懐中電燈の光をたよつて下つて行く内到頭左へ巻く所でシュプールを見失つてしまつた。後返りするのは厄介と思つて其のまゝ下つたら、川の岸はひどい藪の上、急斜面で河原へ下るのは大變困つた。朝の出發をもう一時間早くすれば、此處で迷ふ事はなかつたであらう。河原は隨分廣く川は一部分流れてゐる丈

であつた。

徒渉は一度した丈で一ケ所は丸木橋があつた。やつと左岸の林の中でシュプールを見付け、難なく平の日電の小屋へ着く事が出來た。此處には三人合宿して居られて、色々と御馳走をして下さつた。溫泉に入つたり、ラヂオを聞いて居たりすると全く黑部谷の中とは思はれない程である。

一月四日　雪　平の日電小屋滯在

昨日の晩は星がキラキラとひどく瞬いてゐたが、日電の人が氣壓計を見て明日は雪ですよと云つた通り、朝早くから雪がドンドン降つて居る。滯在ときめて色々山の樣子を聞く。此の平の日電の小屋は社宅で登山者を泊めてはいけないのだが、僕は一人でもあり、隨分晩くやつて來たので氣の毒だと思つて泊めてくれたので、前のパーテイは平の小屋で泊つてゐたさうだ。そして二、三日前、烏帽子へ登ると云つて谷を上つて行つたと云ふ。

一月五日　小雪後晴　九・〇〇平の日電小屋　五・三〇針の木峠の小屋

今日も早朝はまだ雪が降つて居るので出足がにぶつたが、八時頃から雪が動き出して青空が時々見え出したので、色々と御世話になつた日電の人々と別れて平を出發する。黑部の籠の渡しには一寸參つた。スキーとルックサックを縛りつけると乘るのが大變である。此の籠が岸を離れる時の氣持は、アップザイレンの出しなと同樣氣味の惡いものであつた。またかじかんだ手を綱を引張つても中々引掛つて動かなくなつたり、段々登りになつてくるに從ひ動きが惡く實につらかつた。

やつと河原へ降りて暫くスキーで行くと右へ針の木川を渡らなければならない。水量は僅で危險ではないが、靴に水が入るので濡れてもよい一時凌ぎの靴下を履いて行く方が良い。又左側へ渡り等して上つて行くが、隨分以前に一度通つた丈なので道を良く覺えてゐない。その上去年の風水害で橋は全部流されてしまつて居るので渡る所がよくわからない。所々大晦日の雨でと思はれる雪崩が左岸には出てゐる。

今年は積雪量が少いためかあまり大きな雪崩は出てゐない樣だ。大半道は右岸を通つて居る。針ノ木の西尾根には岩場があるから雪のよく降る日は雪崩も多く出るだらう。

一八九二米の出合から一寸上は谷が細く、兩側から雪崩の出さうな所である。此處を過ぎると丈の低い山はんの木のはえた廣い谷で、全く開放された樣な氣がする。しかし雪のよく降る日なら此處から上が最も危險な所であらう。蓮華岳側はあまり問題にならないが、針ノ木側は岩場もあり、その上風蔭なのでよく出るに違ひない。山はんの木が少くなると段々傾斜が急になり、谷もいくつかの小谷に分れる。霧が晴れてきて針ノ木峠の小屋が見え出したので迷ふ事もなく、小屋の右側の小谷を急なキック・ターンを繰返し乍ら登つたが、意外に時間がかゝつた。

針ノ木峠の小屋には黑部側に面した南窓から入る。布團は梁に掛けてあり、其の上にゴザを冠せてあつた。食糧や燃料は無い樣である。雪は南側の窓のある方には隨分入つて居た。

一月六日　快晴　針ノ木峠の小屋よりスバリ岳往復三時間半　一一・〇〇小屋を出發　五・〇〇大町

今朝は素晴らしい良いお天氣なので針ノ木岳とスバリ岳に向つて小屋を出る。隨分風が強く、寒いのと急な登りなので一寸參つた。針ノ木の頂上からスバリへ下る尾根は急に落ちて居るが、風が良く當る爲夏道が出てゐるので簡單に下れる。スバリの最高點は一番北の端なので、其處迄行つて一つのケルンの中に名刺を挾んで置いて引返す。針ノ木峠の下りは張りシールのまゝなので直滑降をしたが、雪がやわらかく雪崩の跡もないので、あまりスピードは出なかつた。

二一五〇米位へ來ると左の方から出た古い雪崩の跡があり、二〇〇〇 ― 一九〇〇米附近は全く雪崩で荒らされてゐた。大澤の小屋によつて夏道を暫く傳つて見たが、藪が多いので谷へ出てそれを下つた。扇澤の手前でまた夏道に戻り、シールをめくつて漕いだが、天氣が良いので滑らず、神の田圃の早稻田のヒュッテで合宿をしてゐた山友達の乘つた汽車に間に合はなくて殘念であつた。（一九三〇・一一）

19　水津景八郎　「積雪期の黒部川」『日本登山記録大成』第９巻 劔岳Ⅲ

1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『関西学生山岳連盟報告』第 8 号（1939 年)〕

要　約

1939（昭和 14）年 3 月 25 日～4 月 5 日の記録。

メンバーは、水津景八郎、山奥（以上、関西大学山岳部)、丸山護（細野の案内人)、丸山鶴喜代(同)。

行程は、弥陀ヶ原～剱沢～仙人池～雲切尾根下降～東谷尾根～東谷横断～牛首尾根支稜～鹿島槍ヶ岳。

※同時期の大阪商大山岳部パーティとともに、本格的な積雪期黒部横断の最初期記録。

従来我々の先輩達は、後立山連峰並びに積雪期における黒部川の偵察に種々努力された。後立山連峰並びに立山連峰を征服した後における我々に対する課題は、積雪期における黒部川の横断及び偵察である。その表われとして、先輩吉田、八田両氏時代より間断なき黒部川の研究がなされていたのである。

積雪期における黒部川の横断は、我々の入部以来の目的であり、黒部の本流、あるいは支流に入るごとにその目的は不動のものとなってきた。大体黒部川の積雪期登山が行われ始めてより残された北アルプス唯一の別天地でもある。勿論御山谷、棒小屋沢、東谷、餓鬼谷、祖母谷、黒薙川等の一部分、並びに平の小屋、祖母谷付近の黒部は積雪期においても既に偵察がなされている。しかし平の小屋より祖母谷出合間の黒部本流たる下廊下はいまだ人々を近づけていないのみならず、積雪期においては後立山連峰並びに立山連峰によってその間を断たれている。

勿論、積雪期における黒部は、天候においても後立山信州側やまたは立山、劔岳等の表側とも大いに異なっており、大体好天気多き春の三月、四月においても完全なる天候が二、三日も続くことは珍しい。我々前数回にわたる偵察の経験によれば、天候が一日毎に変化するようである。我々は黒部に入った時によく言う「劔の頭が隠れた、急がないと雪が来る」。風は少なくことに本流近くはほとんどなく、気温も信州側や表立山側に比較して大変暖かい。そのために春の黒部の名物である雪崩が危険なる落下をもち、本流付近によく降る冷たい春雨は入峡者を驚かすのである。

後立山よりの各尾根は大体において牛首尾根、東谷尾根等緩くて長いが本流近くになって鋭くなり、従って各支流も下流においては本流に負けない、あるいは規模は小さいがかえって切り立った廊下をもっている。故に沢谷の上流は案外広いが、本流近くは連続的に大小の瀑布が続いている。尾根には栂等の針葉樹林帯と山毛欅等の濶葉樹林帯があるが、針葉樹林は大体尾根の中ほどより上部にあり、濶葉樹林は下部に生えている。立山側は後立山側と比べて尾根は短く沢も劔沢、小黒部を除いては短い。従って最初より滝状を呈している。また後立山側と比べてガンドウ尾根等は樹木も少ない。これらの黒部原始林はビバークのための燃料を補ってくれ、ことに栂等の枯れた下枝は雪上のキャンプ・ファイヤーを可能ならしめる。

本流付近は春雨と暖気の関係でか、春における積雪量は割合に少ない。黒部川本流は春の積雪期といえども、やはり水量は多く、その両岸は懸崖をなしことに劔、立山側の岩壁には、黒部川横断の障害をなしている。

黒部本流の渡河は徒渉、吊橋、駕籠渡、雪橋等による方法があるが、徒渉は最悪の場合のみに限られ、しかも本流に雪崩の出た後などでなければ困難であり、本流徒渉後の数日のテント生活は危険である。次に吊橋、駕籠渡であるが、それをかけるには両岸の地形を考慮したうえ、夏期に架けておかねばならぬが、これも難しい。先年愛本村の猟師を訪ね交渉したが要領を得なかった。最後に雪橋であるが、所々雪橋の架かる

可能性のある両岸は絶壁をなしていて渡河前後の降下登攀に困難を感ずる。しかし一昨年の春山偵察において、後述の如く比較的好条件の雪橋を発見した。

まだ積雪期における黒部下廊下への入峡はその数少なく、地位の不便と天候の不良、加うるに雪崩の危険が登山者を寄せ付けない。しかしながら我が山岳部にとっては昔から、積雪期の黒部は懐かしく興味深いものがある。既に積雪期において祖母谷より宇奈月、白馬より黒薙、棒小屋沢、東谷、餓鬼谷等へ先輩諸氏が足を入れられている。

我々はここに黒部下廊下を横断するために、祖母谷落口より平の小屋間の本流の渡河点を過去数年間偵察してきた。最初に我々は大体次の如き数個所の渡河点を地図上に求め、後立山連峰と立山連峰を結ぶことにした。

一　五龍岳―東谷―仙人谷（あるい雲切尾根）
一　唐松岳―餓鬼谷―折尾谷―仙人尾根
一　鹿島槍岳―棒小屋沢―ガンドウ尾根
一　岩小屋沢岳―黒部別山沢
一　スバリ岳―タンポ(原文ママ)沢―土山

勿論前記三コースは劔岳に、後記二コースは立山に出るものである。

我々は一九三六年の夏山において黒部横断の渡河点と取り付き場所の偵察として、宇奈月より黒部入りをなし、仙人谷まで本流を偵察しながら遡った。最初の計画は平の小屋まで遡行する予定であったが、仙人谷までしか水平道路が開通しておらず、それより先は道路工事をしていてダイナマイトを用いている故危険だからとのことで、餓鬼谷、折尾谷、仙人谷、雲切谷落口付近の地形等をしらべてみた。その結果、餓鬼谷、折尾谷落口付近は雪橋のかかるか否かは別として降下登攀が困難であるが、仙人谷、雲切谷付近はどうにかして東谷山尾根を下れば取り付けそうな気がした。故に次の春に東谷及び東谷山尾根に入ることにした。仙人谷は春においては雪崩の危険は多いだろうが夜中に滝を巻いて登れば良いだろう。黒部の原始林は行動を助けてくれるにちがいない。雲切谷は急で登行は不可能であろう。仙人尾根に出さえしたらあとは楽に劔に出られる。

また一九三七年の春山においては、いよいよ東谷付近の徹底的偵察をなし出来得れば黒部を横断して劔に出る予定で八方尾根より唐松岳に登り、五龍岳を経て東谷山尾根を下り黒部本流に入った。この偵察により黒部横断の可能性と東谷及び東谷山尾根、あるいはこれらの黒部本流との出合付近を見極めたし、そのうえ仙人谷、雲切谷、雲切尾根等の下の方をも偵察出来た（次に八田氏の文を略述する）。

春山偵察

パーティ　八田、小川、水津、鈴木、島野、丸山護（人夫）、大谷喜栄（人夫）

一九三七年三月二十八日　晴　黒菱小屋（AM九・〇〇）―唐松小屋（PM一・一〇）

三月二十九日　吹雪

三月三十日　吹雪

三月三十一日　吹雪風強し

丸山、大谷両氏細野に下る。夕方よりいよいよ晴れそうな様子で我々を喜ばせた。明日の天候を祈りながら寝に付く。

四月一日　晴後曇小雪　唐松小屋（AM九・一〇）―五龍岳（PM〇・〇五）―東谷山鞍部キャンプ（一・二〇）

今日はいよいよ晴れた。立山連峰は白雪の急峻な容貌を久し振りに現わし、我々の黒部越えを招いているように思われる。下山さした人夫達の荷物を小屋に残して勢いよく出発する。

尾根は昨日の強風で多少硬い、午後零時五分最後の急斜面の深雪をこいで五龍岳頂上に着く。しかしこの頃より次第に曇り出し風も吹き出した。五龍岳と東谷山の鞍部に来た頃には雪さえ降ってきた。頂上より鞍

部までの尾根は非常に瘠せた狭い岩石の露出があり、下手に降ればアイゼンで引っ掛けて足を挫く憂いがある。尾根の鞍部近くは全く新雪に膝までもぐり、鞍部から東谷山の狭い急角稜を眺めたらもうラッセルがいやになり、そのうえ雪に風さえも加わってきたので、とにかくこの鞍部にテントを張ることにした。

四月二日　快晴後ガス　遅れて来る人夫のため、テントを下に移動させずに、東谷山尾根を偵察に行く。東谷山への急峻な角稜は雪庇さえも出ており、昨日の新雪のため余計にもぐる。東谷山を下れば、もはや今までとは一変して広い尾根となり、小さい平らなる栂の樹の一群をもった所がある。ここではキャンプ・ファイヤーも出来てビバークに好適である。ここから黒部川に突入する尾根はまた狭い瘠尾根と化し、所々黒く開いている東谷へは鋭角をなして樹々も無く、餓鬼谷に面する側は深い密林である。東谷山尾根は階段状をなして、餓鬼谷南沢の頭まで続いている。本日人夫来ず。

四月三日　快晴夕方一時雪降る　唐松小屋に大半の食糧を残しておいたので、米、味噌等少なくなりテントを下ろすことが出来なかった。一人をテントに残し.、人夫の来るを待ちて東谷山下の栂樹のある所にテントを移動するように依頼し、我々は昨日よりも広く東谷山尾根を偵察に出掛けた。一、七七一・六米の三角点付近までやはり尾根通し行く。既述の如く広い尾根よりの瘠尾根は全く小さい階段状となり、小さい雪庇は連続していて東谷側に向って並んでいる。その雪庇の階段を下り、または捲くために栂樹の林の凍雪を踏み、地図上の第一のガレの上に到着する。

そのガレは五十米ほどの急崖であり、なお大きな樹木があるので、どこを下れば下の尾根に出られるのかちょっと見当がつかない。とにかく二手に分れて下る。左側へすぐ下ったほうが良く、右側へ下ったほうは下方で樹木が無くなっていて、ザイルを用いねばならなかった。春暖のベタ雪で少しでも足を滑らせば、雪崩に乗って餓鬼谷へ飛びそうだ。かくてやっと第一のガレは済んだ。

第二のガレはすぐ見透しがついて、下れたけれども百米位はあるだろう。栂樹の中は雪面が凍っており、ワカンをはいた足が滑りそうである。ピッケルを突きさし、樹の小枝を握って下に着いた。下の瘠尾根は第二ガレの初めの三十米位から続いているので案外簡単に下れた。

それからの尾根は前と同様な瘠尾根となり、途中より東谷への尾根を下る。東谷はこの辺りはすっかり割れている。雪崩の音がしきりに遠くから聞こえてくる。がここらあたりは所々雪庇が落ちているくらいで、東谷も余り雪崩れていないようだ。今まで晴れていた青空は再び曇り、劒岳の頭もすっかり雲に隠れたので急いで引き返すことにした。

下りの三倍もの時間を費して、ようやく予定のビバーク地に帰って来た。既に唐松小屋より人夫等が来ていて、テントを移動してくれていた。二つのテントは栂樹に囲まれていて栂の下枝を払って燃すキャンプ・ファイヤーに赤々と輝き映えている。

四月四日　曇後雪　今日はいよいよ尾根の本流に面する森林帯の急崖を、果して本流に下り得るやの可能性を見極めることにした。

尾根の途中までは昨日ラッセルしてあるので容易に危険なるガレも通り、しばらくして二年前の春山において、吉田氏が鹿島南槍を下りこの尾根を通過したとき刻んだ、サインのある山毛欅を見出して懐かしくその当時を回顧させられた。

一、七七一・六米の三角点付近は、さきに通って来た尾根よりも広い尾根となり、兎は縦横無尽に我々の前後から飛び出して来る。

その広い尾根の最後は狭い尾根が双方に分離していて、左の急角度の尾根は東谷の落口に通じ、右手の尾根は長く餓鬼谷の落口に通じている。その二つの尾根の中間は山毛欅樹林の急崖となって、小さな尾根らしきものが本流に落ち込んでいる。夏に予想したよりも密林ではなく、左手の尾根を行けば本流に下り得る自信がついた。

黒部川本流の、岩を嚙み飛沫を揚げて奔流している音がいよいよ大きく聞こえてくる。それとともに我々の心臓の鼓動も同様に躍動してくるのを覚える。少し下ると樹々の間から仙人谷落口付近の一部の碧潭（へきたん）が

覗き見られる。なんと神秘な色を湛えていることだろう。ここより見る黒部本流は非常に川幅が狭いようで、清流の中に大きな深黒の色をした岩石が散在している。何だか容易に渡れそうに見える。全般的な本流の眺望はすっかり樹木で封じられている。尾根の積雪状態は非常に少ないようである。

所々岩石や雑木が露出していて、やはり狭い尾根筋の理由もあろうが、余りもぐらなかった。翌日三角点（一、七七一・六）の広い森林帯にテントを移動して、本流の下まで下ることにし、時間も遅いので引き上げることにした。

四月五日　吹雪　滞在

四月六日　晴後雪　食料や色々の理由で全部本流に下り得ないので、パーティを二つに分けて四人だけ黒部本流に向け下ることにし、食糧補給のため、大谷氏に唐松小屋まで行ってもらうことにした。テントに居残りの二人には、唐松行の途中までのラッセルと、黒部行のラッセルをさせた。昨日の吹雪は完全に一昨日までのラッセルの跡を跡形もなく埋めてしまった。第一、第二のガレを過ぎて緩やかな栂樹の森を行く。餓鬼谷南沢の頭に羚羊（かもしか）の足跡が多い。

朝あれほどに素晴らしく晴れていた空は再び険悪な空模様となってきて、一昨日予定しておいた栂樹の中に第二キャンプのテントを張り終るや、飛雪紛々と降り出した。

四月七日　曇後吹雪、本流にては雨

第二キャンプ（AM八・〇〇）―黒部本流雲切谷出合（一一・〇〇）―第二キャンプ（PM二・三〇）

朝天候は余り良くはなかったが、新雪を膝までもぐりながら左手の狭い尾根を下る。本流に近づく頃より春雨となり、ようやく本流まであと百米の所まで下る。尾根の左手には東谷の落口が良く見える。大体ここからであれば、全般的に本流を俯瞰し得る。本流は東谷の上流より婉曲し、下流は仙人谷落口の下手から左に婉曲している。東谷の付近には大きな雪橋がガンドウ尾根からの雪崩のために架かっている。そして我々の眼前には雲切谷の滝が垂直に雪を蔽って断崖のようになって本流に落ち込んでいる。その下、本流との出合に小さな雪橋がある。仙人谷落口付近にはところどころ徒渉し得るような場所もある。しかし水量は相当にあり、積雪期における黒部の眺めは余り感心したものではない。仙人谷落口の下流、人見平付近にも雪橋が架かっている。

東谷山尾根より黒部川の渡河点として、我々は三個所の雪橋を発見し得た。その一は東谷落口付近の雪橋で、その二は眼の前に見えている雲切谷出合の雪橋である。その三はも少し上より、はっきり見えていた仙人谷落口下流附近の人見平の雪橋である。このうち雲切谷出合の雪橋は両岸の状態が最も良いように見えた。先ほどからの雨は既にヤッケを透かして冷々しく感じてきた。護氏は黒部では雨男らしい。彼が本流に入ると常に雨に遇うと云っていた。彼は何か危険を感じてか、もう引き返そうと云った。既に大体の様子は見極めたし、写真も撮ったのだから引き返してもよいのだが、みすみす眼前に黒部本流を見て引き返すのは残念だからと、彼を促して最後の壁のような急斜面を雪のために倒されている小さい灌木にすがりながら、滑り落ちるようにしてようやく本流に尻餅をつく。この付近の急斜面は一、二米も積雪があると皆本流に雪崩れ落ちるようである。そのために本流の本当に流れている所はごく狭く、約十五米位しかない。川幅の三十米の大部分は雪崩の堆積となっている。雲切谷出合前の雪橋もその垂直のような沢から落ちた雪崩と、その反動による東谷山尾根よりの雪崩のために出来たものらしい。我々はアンザイレンして雪橋を試渡してみる。ゴロゴロした雪塊で歩き難い。

雲切谷のデブリの急斜面を少し登り、仙人谷との間の尾根であるガンドウ尾根の南仙人山の頭より出る雲切尾根に取り付けば、先ずガンドウ尾根の頭、南仙人山より仙人池に通じ得る自信がついた。雨はいよいよはげしくなるので急いで引き返す。途中、登るに従い次第に雨は雪となり、そのうえ風さえ加わり、テント近くの一、七七一・六米の三角点まで来ると俄然猛烈なる吹雪と変り、今まで濡れねずみの如くなっていた服は完全に凍りつき、寒いことはなはだしい。テントに帰り着くや否や、早速吹雪の中で焚木を燃し、濡れた衣類を不完全ながら乾かし、身体も温めて、冷たい一夜を明かす。

四月八日　晴後曇、夕方小雪　第二キャンプ（AM一一・〇〇）―ベース・キャンプ（PM四・四〇）

昨日の飄々たる森林と引きかえて、今日のこの栂樹の森は静かな朝日の光を受け、再びその森らしさを取り戻す。大きな焚木を切り出し、完全に昨日の濡衣を乾かす。

昨日雨と吹雪に痛めつけられた体のけだるさと食糧の不足により、午前十一時第二キャンプを引き上げ、第一キャンプに向った。天気は晴々としているが登りの足は重かった。

四月九日　曇後吹雪　ベース・キャンプ（PM〇・四〇）―東谷山（一・二〇）―五龍岳（三・三〇）―避難キャンプ（五・〇〇）

十日近く黒部のビバークで皆帰心矢の如く、そのうえ、事故者も出来ていたために他の予定も打ち切り、引き上げることに決り、遅いながらも午後零時四十分テントを畳んで出発する。

雪は深く腰までもぐり、進行は遅々として進まなかった。ようやく五龍岳の第二峰を過ぎるや、意外に大きな信州側への雪庇があり、それを巻くために越中側にトラバースするや否や、我々の頭上十米ばかりの雪面が割れて「雪崩だ！」と云う間も無く、先頭を進んでいた大谷氏は雪崩の表面にリュックサックを見せながら、たちまち餓鬼谷の方に消えて行った。残りの六人は危うくピッケルを突きさして止まったものの、半身を雪の中にうずめた。五分間ほども呼べど大谷氏は答えず、遭難？　を思わせたが、後を追って下りて行った丸山氏の悲痛なる呼び声についに反応があった。大谷氏は二百米も流され、幸いにも急カーブの所で雪崩は停止したのだ。背負っていたリュックサックはどこに行ったかわからず、ピッケルは引き返す途中に残っていた。この雪崩は表層雪崩であり昨日より積もっていた新雪が滑り落ちたものであろう。

ついに我々は引き返して五龍岳第二峰の岩影に避難テントを張り、明日の天候を祈りながら一つのテントに七人すがり合いながら寝た。

四月十日　快晴

避難キャンプ（AM八・一〇）―唐松小屋（一一・三〇―PM三・三〇）―黒菱小屋（五・〇〇―七・三〇）―細野（一〇・〇〇）

避難キャンプの苦しく寒い夜は明けて、今日は珍しいほど快晴である。信州側の人里も見えて大変懐かしい。唐松小屋を経て八方を下り、星明りの中を細野に着いた。

今度の春山の偵察によって完全に黒部川横断の目算は解決した。勿論、東谷山尾根の黒部本流に入るところどころに架かっていた三つの雪橋は、来年の春にもそのうちのいずれかは架かっていることであろう。ことに今年は雪も少なかったのであるから、雪の多い時は余計にその可能性が大であると云える。これらの雪橋を利用しての横断は、後立山及び立山連峰を結び付けることの可能性を大とする。

我々は来年の春こそは、東谷山尾根を下り雪切谷出合の雪橋を渡り、この谷を少し登り、右手のガンドウ尾根の支尾根たる雲切尾根に取り付けば、容易に南仙人山に出られるであろうと確信した。また雲切谷出合に雪橋無きときは、東谷落口下流の雪橋を渡り、少し下流にトラバースして雲切谷に出るか、あるいは人見平の雪橋を渡り仙人谷を遡行するかして、仙人池に出ることが出来るであろう（以上八田氏記）。

この春山における目的であった黒部本流の偵察は成功したが、本来の目的である黒部横断は成しとげることが出来なかった。

しかし我々はこの偵察において、黒部本流の渡河に絶対的に必要である雪橋を三個所も発見したし、取るべき正確なるコースも確立した。また一昨年の夏山においては鹿島より中尾根を登り、冷池小屋に出、棒小屋沢に入り、牛首尾根及び棒小屋沢を偵察した。牛首尾根の積雪の状態は春山において見た通り、初めのほうは緩やかな尾根であったが、中ほどより下は偵察は困難であろうというのでやめた。棒小屋沢は西沢小沢出合を過ぎ、廊下をへつり、滝に飛び込んで下ったが、地図上の牛首尾根より入る最後の沢らしきものを二つ見た。

結局、棒小屋沢偵察は失敗であり、積雪期における行動の困難を痛感したに過ぎなかった。

次に前述した黒部横断の五コースについて説明をしようと思う。

前数回の偵察の結果、我々は黒部の横断地点を東谷山尾根、仙人谷、雲切尾根、雲切谷付近に求めること

にした。そしてその大体の積雪期における黒部の状態を知ることが出来た。春といえども雪崩の出た直後ならざる限り、本流の徒渉は困難であり、その両急崖の樹成は降下登攀を助くるも、重荷を背負っての行動は相当のアルバイトである。また尾根や谷における樹林やガレ、滝等はスキーの使用を不可能とし、柔らかい春雪はワカン・テクニックを必要とする。

餓鬼谷、折尾谷付近

先ず後立山よりこの谷に入るには、唐松岳より大黒鉱山跡―餓鬼谷に入るか、または夏路の餓鬼田圃から出ている尾根を通り、餓鬼谷の落口に出るかである。しかし餓鬼谷は吉田氏の学連報告第六号によれば、感じの悪い沢で小さい滝が階段的に落ちており、相当大きな滝もあるように云っている。故に夏路通り餓鬼田圃を通り、しかして餓鬼谷落口に入るか、あるいは一、六六八・七米の三角点より折尾谷落口へ向う尾根を下るのが良いようだ。

餓鬼谷は大黒鉱山跡より下流は滝が多く、南沢との出合付近は少し良いようであるが、雪崩の危険などもあり好天気続きでないと行動は出来難い。

黒部本流側へ走る尾根は森林帯で雪崩の心配は全然ないと云って良いと思う。故にその森林帯をどうにか通過し得れば、簡単に餓鬼谷下流に出られるも、落口付近には大きな滝もあり、谷通しで本流まで出られるかどうかわからない。また一、六六八・七米の三角点より左手の折尾谷落口へ向って走る尾根を行けば、本流のすぐそばまでは行けるが、最後の下りは樹木の無い限り相当難事である。しかし本流に下り得たとしても、雪橋や徒渉に可能なる地点があるだろうか、雪橋があったとしても折尾谷へ結ぶことは不可能のようである。何故となれば黒部本流は渡れたとしても、折尾谷の落口より仙人尾根に登ることは出来ない。即ち水平道路までの折尾谷の落口付近は絶壁をなしており、そのうえ水平道路の所には大きな五つの滝がある。これらの滝を捲き、谷の両側の尾根に取り付くにしても、から身ならばどうだか知らないが、重荷を背負っては全然可能性がない。また最初より、仙人尾根の三角点（二、一九九・一米）よりの尾根に取り付くことも相当困難である。ことに折尾谷は雪崩の危険が多いし、森林帯の両岸の尾根は階段的に絶壁をなしている。このことは大体黒部川筋の有用性とも云えよう。結局、黒部は渡れたとしてもその後の行動が難事である。

東谷、雲桐谷、仙人谷付近

この地点に入峡するには、五龍岳より東谷山尾根を下るか、餓鬼谷南沢の頭より東谷に入り本流に下るかであり、吉田氏は鹿島槍より東谷に入られたこともある。東谷は三、四月の積雪期といえどもところどころ割れている。上流中流はほとんど雪崩れておらず、容易に下ることも出来ようが、落口近くはさすがに廊下状をなし、幾つかの滝と雪崩の危険が人を寄せ付けない。東谷山尾根は前述の八田氏の記録にあるが如く、黒部の本流近くまでは雪崩の心配もなく、唯一、二個所ガレの悪場があるだけである。この尾根は一、七七一・六米の三角点より左右に分れており、右は餓鬼谷落口に、左は東谷落口に走っている。またその間にも小さな尾根が幾つも急崖をなして黒部本流に落ち込んでおり、いずれも樹林帯で樹より樹へつたって下ることが出来る。その対岸の阿曽原谷は落口の上流付近に雪橋の架かる可能性がある。また傾斜も案外緩やかで、そのうえ樹も多く雪崩の心配はなく絶好であるが、仙人谷、阿曽原谷の間の仙人尾根の支尾根に取り付き、仙人山までの途中はガレと懸崖の連続で登行は困難である。

仙人谷落口付近は仙人谷の本流との出合下流の人見平付近に雪橋が架かる。ここへ東谷尾根より下るには、左方へ走る尾根の途中より真直ぐに下る道と、雲切谷落口前に下り黒部本流にそってトラバースする二つのコースがある。前者は昼間は雪が柔らかく少しでも足を滑らせば本流にたたき込まれる危険がある。

後のルートに於ては、本流までの降下は容易であるが、これまた昼間のトラバースははなはだ危険である。人見平には昨春の報告によると、日電の小屋が出来るとのこと。ここの雪橋を渡れば仙人谷の水平道路下の滝は右に捲くことが出来そうだし、水平道路より上の大小の滝も、はっきりとはわからないが捲けそうである。この仙人谷とても昼間の行動は絶対に危険で夜間でなければ登行は出来ない。故に前記人見平の小屋があれば大変便利である。雪切谷落口付近には本流との出合の所に小さな雪橋が架かる。四月ともなり雪が少

なくなれば、雲切谷より雪崩が出る。そしてその反動で東谷山尾根側の雪も雪崩れて出来るであろう。この雪橋は常に架かるとは云い難いが一昨年の春山には前記の如く架かっていて試渡してみた。東谷山尾根よりここに行くのは最も容易で左方に走る尾根を左にすぐに行けばよい。雪橋を渡って対岸は雲切谷の雪崩れた跡を登り、ガンドウの支尾根である雪切尾根に取り付くことが出来る。雲切尾根は左向き、くの字形に曲っており、曲っている所より上は大変よさそうに見え、曲っている所よりやや下に一、二個所、またずっと下の方雲切谷側にある山毛欅樹林に取り付く所に悪場があるようである。その外は大体において良く、この地点横断に最も良きコースであろう。

東谷落口付近は東谷出合下流に大きな雪橋がある。この雪橋は絶壁をなしているガンドウ尾根の懸崖と、東谷山尾根の急崖によって作られるものであって、幅も大きく、三、四月頃は常に架かっていることと思われる。ここに下るには七十～八十米程の急崖を樹につたって滑り下り、あるいは懸垂せなければならぬ。この雪橋を渡れば、ガンドウ尾根の懸崖の麓に出来ているデブリの急雪面を下流にトラバースして行けば、雲切谷に出られ、前記のコースを通ることが出来る。我々は一昨年の春山の偵察により、黒部の渡河点をこの東谷山尾根、仙人谷、あるいは雲切尾根のコースに決定したが、このうち雲切谷落口の雪橋があれば横断は最も容易となり、次に人見平の雪橋、最後に東谷落口下流の雪橋の順である。この三個所の雪橋はそのうちいずれかは毎春架かっていることであろう。ことに人見平、東谷落口下流のそれは確実性がある。

十字峡及び黒部別山沢付近

これらの付近は下廊下中、最悪の場所であろう。あの南仙人山より黒部に落ちているガンドウ尾根は黒部本流に絶壁をなしている。また黒部別山よりの壁も厳然として人を寄せつけない。十字峡に入るには、鹿島南槍岳より牛首尾根を下り一、九〇〇米の所より左に棒小屋沢落口に出るか、あるいは冷池より直ちに棒小屋沢に入るかであるが、牛首尾根は中途より下は痩尾根であり、行動は不便である。棒小屋沢はこれまた途中より廊下状をなし、大小の滝は連続していて、前述の餓鬼谷、東谷以上である。その途中より西沢小沢に登り、この大廊下を捲くにしても不可能である。

一方十字峡、劒沢、ガンドウ尾根、黒部別山付近は懸崖絶壁で、到底積雪期の登攀は困難なること云うをまたない。東谷落口上流のガンドウ尾根と、牛首尾根との出合う場所には雪橋を見たが、それより上流は全然手が付けられず、従って偵察も牛首尾根、棒小屋沢の途中までしか出来なかった。

黒部別山沢への入峡は岩小屋沢岳よりの尾根を通ずるもので、この尾根は割合に広い尾根のように思われ、黒部本流に出ることはそう至難ではないようだが、黒部別山沢の登行は相当困難の如く、まだ我々によっては偵察はなされていない。

タンポ(原文ママ)沢付近

この横断地点は簡単にスバリ岳より入峡し得るし、タンポ(原文ママ)沢も割合楽に立山に登行し得られるようであり、面白いコースであろう。しかし十字峡より上流については、まだあまりよく偵察がなされていないので詳細なる説明が出来ない。

黒部横断について下廊下の偵察は、積雪期の入峡の不便と、夏山における偵察がその地形のみしかわからず、針葉、濶葉の樹林はガレ、懸崖等を見極めるに不便であり、積雪期の状態とは大変異なっていて相当困難である。

我々は前記の如く東谷山―雲切尾根のコースを選び、今春の成功を期したのである。

積雪期黒部川横断

我々は前数回の偵察により、黒部横断地点を仙人谷、雲切谷、東谷付近に求め、種々の事情により、富山、弥陀ヶ原、劒沢、仙人池、南仙人山、雲切尾根、東谷山尾根、五龍岳、唐松岳、八方尾根か、あるいは東谷山尾根の餓鬼谷南沢の頭より東谷、牛首支尾根、鹿島槍南岳、鹿島長ザクと逆コースを行くことにして去る三月二十四日夕方大阪を出発して、富山に向った。

パーティ　水津、山奥、丸山護（人夫）、丸山鶴喜代（人夫）

またこの補助パーティとして信州側より、八方尾根、唐松岳、五龍岳、東谷山尾根、黒部本流、東谷落口に第二班が入峡した。

パーティ　白柳、渡辺、大谷喜栄兄弟（人夫）

一九三九年三月二十五日　雨後雪　富山（PM三・〇〇）―藤橋（六・〇〇）

三月二十六日　晴後曇、吹雪　藤橋（AM八・二〇）―ブナ小屋（PM一・二五）

三月二十七日　晴天　山毛欅小屋（AM七・一〇）―弘法小屋（一〇・一〇）―追分小屋（一一・五〇―PM〇・三五）―天狗小屋（三・二〇）

三月二十八日　晴後曇、吹雪　天狗小屋（AM九・〇〇）―雷鳥沢（一〇・一〇―一〇・三〇）―乗越小屋（PM一・四五）

今日から自炊だ。いよいよ仙人池に近づいた。劔岳は雲に隠れて、劔沢は吹雪に暮れてゆく。商大の人達が仙人池までの荷上げから帰って来た。

三月二十九日　快晴　乗越小屋（AM九・〇〇）―二俣近藤岩付近（一一・〇〇―一一・三〇）―仙人池付近テント（PM三・〇五）

昨夕は少々吹雪いたが、今日は雲一つのなき晴天である。乗越小屋で味噌、米など買い足して荷物はますます重くなる。今日は仙人池までの行程で、本日より本格的ビバークである。九時乗越小屋を出てスキーをはき、広い白銀の劔沢を下る。雪が硬くて斜滑降の足が痛い。

劔沢はあちこち小さな雪崩跡を見せていた。しかし好天候続きで大きな雪崩は出ていなかった。二俣で大半の食糧を残して、池ノ平へは寄らず、真直ぐに尾根を仙人池まで登る。二俣よりしばらくは急斜面をジグザグに登り尾根に出る。真昼の太陽は赤々と照り輝いて熱く、雪が柔らかくてキック・ターンに苦労する。ようやく尾根に出たが風はほとんどない。尾根は細尾根で、時々雪庇の上を歩かねばならない。

春山は池ノ平を廻るよりは、この尾根を登るほうが早いようだ。しかし下りはスキーで池ノ平を廻るのが早くて楽である。

尾根を登り、あるいは捲き、午後三時過ぎようやく仙人尾根に出た。この尾根は思ったより長かった。仙人尾根に立って後立山側を見ると、懐かしい唐松小屋が見える。早く黒部に下りたい。どうにか黒部を渡りさえしたら、後は旧知の所で元気が出るだろう。大阪商大の人達は尾根を登りきった見はらしの良い所にテントを張った。我々は南仙人山よりガンドウ尾根の支尾根である雲切尾根を下る予定であるため、南仙人山近く、大きなダケカンバの一本ある所へテントを張る。明日は雲切尾根の偵察をすることに決める。

三月三十日　晴　山奥と鶴喜代は荷上げに下り、自分と護は雲切尾根の偵察に行くことにする。

南仙人山を越えて、雲切尾根を下る。昨日よりの雪盲はまだ痛んで、満足に目が開けていられないのでスキーをぬぐ。仙人、雲切の両急谷は既に雪崩れはじめていた。しばらく下ると東谷落口付近の黒部本流が見えてきた。予期していた通り、ガンドウ尾根の大岩壁よりの雪崩のため、本流に大きな雪橋が架かっている。一昨年より雪が多いようだ。仙人谷の湯の出は眼の下に吹き出している。仙人谷はしきりに雪崩れはじめた。さすがに黒部の支流である。尾根を下るに従って本流の河面があちこち見えはじめた。人見平ででもあろうか、工事の音が時々響く汽笛と共に聞こえてくる。すぐ下を郊外電車でも通っているような気がする。まだ雪が多いせいか雲切谷は大きく雪崩れてはいない。しかし小さな雪崩は両側の岩壁より多く雪崩れている。

雲切谷の落口を見ると、この谷の黒部本流に入る所に小さな雪橋が架かっているように見える。我々が一ばん望んでいた雪橋である。が良く見ると中央と向う側のほうが少し割れているようだ。ずんずん下って行くとひどい瘠尾根の大きな雪庇のある悪場に出くわした。一昨年東谷山尾根より見た悪場に相違ない。雲切谷の落口の雪橋は、東谷山尾根側の破れ目は一部分残っているが、中央の割れ目は相当大きいように見える。東谷山尾根側の急崖はまだ雪崩れていない。雲切尾根はこの悪場を除けば、後はどうにか無難に本流まで下りられそうだ。もう少し下りてみようかと思ったが雪盲が激しく痛み、瞳がくらむので引き返すことにした。なお左方の仙人谷落口下流である人見平付近には、飯場の屋根と本流に築いてある堰堤が見え、その堰堤の

下に大きな雪橋もある。東谷山には人の歩いた足跡らしいものは見えたが人影は見えなかった。ようやくのことで眼を冷やしつつ、テントまで引き返したが、山奥等はまだ帰っていない。

今日の雲切尾根と黒部本流の偵察の結果、我々は一昨年発見した本流に架かる雪橋が三つともあるのを見たし、雲切尾根の降下の可能性をも確かめた。しかし一ばん期待していた雲切谷出合の雪橋は中央が割れていた。前述の如く雲切尾根よりの下り、東谷山尾根への取り付きはこの雪橋を渡るのがいちばん楽である。割目が小さければ樹を切り倒してでも渡りたいと思う。第二の手段としては雲切谷の下より仙人谷に入り、人見平の雪橋を渡っても良いが、渡ってより東谷尾根に取り付くまでのトラバースが難しい。また東谷落口下流の雪橋は雲切谷よりのトラバースの困難と、東谷山尾根への取り付きは人見平よりのそれより難しい。故に明日は雲切尾根を下り、雲切谷落口の雪橋を渡ることにし、もし困難ならば人見平付近の雪橋を渡ることにした。

三月三十一日　吹雪時々曇　朝早く大阪商大生仙人谷を登って来る。出発の用意はしたが吹雪はやまず滞在する。

四月一日　吹雪後晴天

仙人池テント（AM九・〇〇）―雲切尾根山毛欅林の上（PM五・三〇）―仙人谷（一一・四五）―人見平排岩穴口前（二日AM三・〇〇）

昨日の風いまだやまぬも、空のあちこちの雲乱れてやや明るい。午後の晴天を祈り、テントをたたんで雲切尾根を黒部本流に向う。南仙人の頭までは相当吹雪く。雪面はウィンド・クラストしていて南仙人山を右に捲いて、取り付く所はシールがきかず、劒沢側へ滑りそうで危険である。ここで仕方なくスキーをぬぎ、南仙人の頭に出る。頭に出ると風は猛烈で息苦しい。ワカンをはいて雲切尾根を下る。天候は次第に回復して太陽が輝き始め、雲切尾根を下るに従い風も少なくなってきた。一昨日のワカンの跡はもう跡形もなく消えている。天候は全く回復して黒部本流が見え始めた。東谷落口下流、雲切谷落口、人見平の堰堤下の雪橋も見える。

雲切谷落口の雪橋はやっぱり中央が割れている。一昨日引き返した途中の悪場にかかる。荷物を下ろしアンザイレンして瘠尾根の雪庇を左仙人谷側に捲く。真昼の太陽は雪をとかして柔らかく、荷物を持っては危険である。護と二人で悪場を捲き雲切谷を下へ下へと下る。途中一、二個所の悪場をアイザイレンして下り、この尾根の下方山毛欅樹林の所まで来る。黒部本流はすぐ側に流れている。雲切谷落口の雪橋の割れ目は相当大きく渡ることは困難であるので、残念だがこの雪橋を渡ることはあきらめた。山毛欅林の中は歩き良いかと思ったが、雪が非常に柔らかく傾斜も急で雪崩を起しそうだ。山毛欅の樹にザイルを捲いてしばらく下ったが、日中の降下に危険を感じて引き返す。

雲切谷落口の雪橋は駄目であったが、その他の二つの雪橋は大丈夫である。しかし東谷落口下流の雪橋は雲切谷よりのトラバースが困難である。ガンドウ尾根の懸崖は垂直に黒部本流に落ち込んでいて下方十五～十六米ばかり雪がくっついており、その下は本流が飛沫を上げて泡を噛んでいる。雲切谷より雪橋までは約百五十米ほどもある。重荷さえなかったら夜中にはトラバースも可能であろう。ここで雲切谷より仙人谷に入る小さな急な尾根を偵察して、これを下ることにし第一の悪場の所に引き返す。昼食の後全員荷物を持ちアンザイレンして第一の悪場を左に捲く。ここで相当時間を費した。最後に尾根に出る所は岩がオーバー・ハング気味になっており、足下にははるかに仙人谷の谷底が見えている。小さな二つ三つの悪場を過ぎて山毛欅林の中に入る。大体この尾根は仙人谷側に向っては短く急斜の小尾根をもち、雲切谷側に向っては比較的緩やかな長い斜面をもっている。仙人谷にしろ雲切谷にしろ右岸の壁が急である。しばらく山毛欅林の中を下り、先に偵察した細尾根の頭に来る。ここでまた荷物を下ろして、足場を作りに下る。仙人谷の谷底近くになって木も無くなり、尾根は五十米程の切り取られた壁状をなしている。この尾根の降下は不可能となり、残念ながら引き返して本尾根を下る。途中仙人谷への小さき各尾根を偵察したが、下が切れていて全部駄目であった。最後にこの尾根は雲切谷側と仙人谷側との左右二方に分れている。我々は左方へ走る尾根を

下る。しばらく下るとまた尾根は二つに分れている。左の尾根を下れば仙人谷に下れそうに見える。再び引き返して荷物を背負い下って来た。六時三〇分我々は急崖の岩の上に出た。日は暮れて次第次第に夕闇は濃くなってくる。リュックサックはザイルに結んで滑り落した。スキーが雪にささってなかなか滑らず約一時間を費やす。水のしみ込んだ靴は冷たくて足が痛い。他の人の降下を待つ時は一層激しく、うっかり足を動かせば滑り落ちる危険がある。ようやくにして下の尾根に下り得た。しかしその下もまた崖が続いている。ザイルを用いて下る。かくすること三、四度、空腹と重荷に苦しみ最後の崖の上に出る。空には月も出て光りが仙人の谷底を照している。谷底まで約四十〜五十米はあるだろう。崖の中途に二個所二本の樹がある。それを伝って下りることにした。荷物を置いて護が先に下る。ザイルを一本にして三十米ばかり下り右側から来ている急な沢へ飛び下りた。「下りたぞ！」とどなる声に元気が出て、次々に荷物をザイルに結び下ろす。最後に下を見ると谷と岩壁との間が大きく開いている。無気味な黒い割目だ。谷は急傾斜をなして本谷へ走っている。おもいきって岩をけり、ザイルを手ばなして谷に飛び下り、滑る身体をピッケルでささえた。全員仙人谷に下り立った時、正に午後一一時四五分であった。

ここは水平道路より下であろう。ずっと上の岩壁の中ほどを白い線が横に見える。仙人谷のはるか上の方で滝の音が聞こえる。ここらあたりは案外に谷幅が狭い。谷底はデブリのため雪が硬い。仙人谷を下り人見平に向う。しばらく下ると滝があり仙人谷が開いている。岩壁と谷との間の雪崩によりて固められた鋭角の雪面を左にトラバースせねばならぬ。再び雲が出て月も隠れ暗くなる。眼鏡を破損したため足場が見えず困る。ここでリュックの上のスキーをはずしトラバースの邪魔になるため雪渓に突き刺して別れを告げる。先ず荷物を置いて足場を作りながらトラバースする。真黒な谷底は所々泡を噛んで白く見える。約五十米ほどしてやっと安全なる場所に着いた。少し行くと岩壁に掘った道があり、仙人谷落口の上まで来ると人見平の電燈が見える。引き返して荷物を持って来る。雪が硬くてワカンがきかず相当危険である。ようやくのことで冷汗をかき、この悪場をトラバースすることが出来た。

黒部本流にそって人見平の電燈を目当てに下ると、掘り取った岩石を排出する横穴の出口に来た。ここで坑夫を待ちながら二時間ばかり寝た。五時頃やっと人が出て来て穴の中を飯場まで案内してもらった。この飯場の人達は皆親切で早速朝食を御馳走になった。

雲切尾根は夜になって雲切谷へ下れば大変容易であろうが、肝心な雲切谷落口の雪橋が駄目で、仙人谷へ下ったため予想外の困難に遭遇した。雲切尾根より仙人谷に入る小さな諸尾根は仙人谷近くなって急崖となり登行は勿論降下も困難であり、我々が下った尾根は幸いにも数個所崖が続いていたが、ところどころ樹木があり降下を助けてくれた。仙人谷は日中は行動出来ぬが、雲切尾根は行動出来、滑りさえしなければ雪崩を起す危険は全然ない。雲切谷の雪橋さえあれば案外楽な尾根であろう。人見平の本流に架かっている雪橋は大きく、横穴の出口にあり少し下流には吊橋が架かっていた。雪橋の上流には堰堤があり、ここに取入口が出来るのであろう。

四月二日　雨雪　朝食を終え人々の働きに出た後の炬燵に入って寝る。トタン屋根に雨の音がする。一昨年においては、少し上流の雲切谷出合において散々な目にあったが、今年は幸いにも小屋の中でまぬがれた。夕方穴道の中の温泉に入り穴道内を案内してもらった。穴道の中は熱気で頭が痛く衣類がしめった。ここの奥には華氏一二〇〜一五〇度の所があるそうである。

四月三日　小雪、曇時々晴

人見平飯場小屋（AM五・〇〇）—東山尾根（七・一〇）—東谷山尾根一、五〇〇米付近（PM三・三〇）

今朝は小雪が降っているが出発することにする。親切な人々に別れを告げて東谷山尾根に向う。岩石排出の横穴の前の雪橋を渡り後立山側に足を印した。雪橋を渡ってより黒部本流にそって約二百米ほど遡り、東谷山尾根に取り付いた。途中の黒部本流に落ち込む長い急傾斜のトラバースは泡立つ黒部本流が良く見えて冷汗が出る。ワカンよりアイゼンをはいたほうが安全であったろう。しかしとにかく、東谷山尾根に取り付くことが出来た時には、樹の根にへたり込んでしばらくは動く気がしなかった。東谷落口下流の雪橋付近の

この尾根側はまだ新雪が雪崩れておらず、やはり登攀は危険のようだ。午後になって相変らず空は曇ってはいるが雪はやんだ。そのうちにところどころ青空も見えてきだした。午後三時過ぎ頃全く疲れて尾根の雪面を踏み固めてテントを張って寝た。スキーは捨てたし一昨年のコースを帰るのは面白くないから、東谷より鹿島槍へ登り大町に出る計画をたてた。今春は人見平に小屋があり、堰堤のため雪橋も大きく安全であった。ただ信州側よりの補助パーティがまだ来ないのが心配だ。

四月四日　曇時々晴、小雪降る

東谷山尾根テント（AM七・二〇）―餓鬼谷南沢の頭（一〇・五〇）―東谷岩小舎付近（PM〇・二〇）―牛首尾根支尾根一、八〇〇米付近（五・一〇）

今日は時々晴れてくる。午前七時テントを出発、一、七〇〇米の三角点を通り、緩やかな一昨年テントを張った栂の森をぬけて、一一時頃第二ガレの下、餓鬼谷南沢の頭に着く。この尾根は一、七〇〇米の三角点までは傾斜が急であるがそれより上、南沢の頭までは緩く大変広い。まだ信州側よりの補助パーティは来ぬも、吉田氏の名前の刻んである樹に「鹿島槍へ向う」旨の貼紙をして、一いきに東谷へ下る。

東谷はところどころ開いてはいるが今年は雪が多く一昨年ほどではない。東谷の岩小舎より真直ぐに鹿島南槍に向っている牛首の支尾根を登る。重荷を背負ってのラッセルが苦しい。この尾根はところどころ階段的になっているが楽な尾根である。東谷山尾根を見るも信州側よりパーティらしき人姿は勿論足跡も見えぬ。一、八〇〇米付近へテントを張る。明日はいよいよ大町まで飛ばす予定だ。

四月五日　吹雪

テント（AM五・〇〇）―鹿島南槍頂上（一一・四五）―冷乗越（PM一・三〇）―スキー小屋（四・四〇）―大町（一〇・三〇）

今日は少し吹雪いているが、帰心矢の如しでテントをたたんで出発する。吹雪の中をラッセルに苦しみながら登る。この尾根もところどころ東谷山尾根の如く階段的になっているが、大したガレなどもなく栂樹があちこち生えていて良い尾根である。鹿島南槍の頂上へ近づくに従い吹雪は次第に激しくなり、頂上は猛烈に吹雪いて眼があけていられないくらいである。急いで布引岳を通り冷池小屋に向って下るも風はやまず、冷池小屋を過ぎて午後一〇時三〇分頃冷乗越に着く。この吹雪では長ザクを下ると危険であり、テントを張ろうかと相談したが、ついに下ることにして尾根を越えて信州側に下りて行った。幸いにも長ザクは午前中にでも雪崩れたものか雪のしまっている所がある。デブリの上を飛ぶように下ると次第に速力が早くなった。谷を渡ってスキー小屋に着いた時には足がフラフラしていた。食糧等いらぬ荷物を捨てて、リュックを軽くして大町まで急いだ。大町に着いたのが午後一〇時三〇分であった。

今度の春山は我々が黒部横断を計画して四ケ年目であった。八田氏は偵察に種々努力されて、成功の可能性を確信づけられて学窓を出られ、現在は吉田氏と共に北満に出征中であり、我々は今度の成功により両氏に報告出来るのが嬉しい。

今年は天候は大変異常で、春山とは云いながら入山してから黒部に入るまで好天気が続いたのは幸運であった。黒部の本流さえ渡れば、あとは旧知の所であるし皆元気であった。雲切尾根―東谷山尾根のルートは黒部下廊下横断の最も可能性多き所であった。信州側よりのパーティは種々の事情で遅れて、補助パーティの目的を果さなかったが、東谷落口付近の偵察をなして無事に帰って来た。

20　西村正己・大橋秀一郎・片山良一　「積雪期の黒部横断」

『日本登山記録大成』第９巻 劔岳Ⅲ
1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『関西学生山岳連盟報告』第 8 号（1939 年)〕

要　約
1939（昭和 14）年 3 月 14 日～4 月 7 日の記録。
メンバーは、西村正己、大橋秀一郎、片山良一（以上、大阪商業大学山岳部)、サポート計 12 名。
行程は、唐松岳～五龍岳～東谷尾根下降～仙人谷～仙人池～別山乗越。
※本格的な積雪期黒部横断の最初期記録。
※下廊下中核部を経由して後立山、立山の両連峰を結んだ初記録。

大阪商大山岳部では今春、積雪期における黒部の横断を行ったのであるが、それはなんら技術的な困難さを包含するものではなく、ことに人見平に飯場の出来上がった今日においてはその感が強い。しかし信州、越中両側よりテントを進めてこの黒部の横断を行おうとする場合、両班の連絡ということは相当困難な問題となる。今回の計画を通じて我々はこの点、相当得るところもあったし、また或る程度成功したと思っている。この意味において、以下両班の行動を日記的に御紹介することとする。

パーティ
〔アタック・メンバー〕西村正己（C・L)、三島義彦
〔信州側サポーティング・パーティ〕片山良一（L)、林　　弘、米井順三、富村恒次郎、大島民夫、川本秀雄、松村健一（O・B)、丸山常夫（人夫)
〔越中側サポーティング・パーティ〕大橋秀一郎（L)、森本嘉一、入江康行、佐伯伊太郎（人夫)
期間　一九三九年三月十四日―四月七日

信州側サポーティング・パーティの行動

信州側のサポーティング・メンバーは黒菱より唐松小屋を経て東谷山尾根へテントを建設するまではアタック・メンバーと共に行動した。従ってアタック・メンバーを送り出した後のテント撤収の他は、サポーティング・パーティとして独立した行動はなかった訳で、いわば間接的なサポートであった。以下、その行動日誌を簡単に記す。

三月十四日　人夫交渉、荷物運搬のため、三島、細野に先着。
十五日　片山、松村、細野に先着。片山、人夫の交渉のため黒菱往復。
十六日　三島発熱、帰阪す。片山、松村、細野に滞在。
十七日　曇後雪　松村、片山、黒菱へ食糧運搬、黒菱に泊る。
十八日　曇　松村、片山、食糧運搬のため、黒菱より細野往復。
十九日　曇　松村、片山、黒菱より細野へ下る。西村、林、大島、川本、細野着。全員黒菱往復、細野泊。
二十日　曇　米井、富村、細野着。これでチーフ・リーダー以下八名の勢揃いが済んだ訳で、午後より全員最後の荷上げのため黒菱往復。黒菱、細野間は連日の新雪で愉快な滑降を楽しむことが出来る。
二十一日　晴午後よりガス、終日強風　天候悪く全員黒菱までとし、午後は新人のスキー練習に過ごす。
二十二日　晴時々曇

黒菱（AM七・三〇）―中継小屋（一〇・一〇）―唐松小屋（PM一・〇五―一・五五）―中継（二・三〇）―黒菱（三・二五）

黒菱より唐松小屋往復、第一回の荷上げを行う。前日の風で尾根は完全にクラストしておりスキーが使えない。黒菱の頭でワカンに穿きかえ、八方池付近からアイゼンで歩く。そのため、時間は思ったよりかかった。松村は下山、西村は人夫のことで細野まで下る。他は黒菱泊。

二十三日　吹雪濃霧　天候悪くスキー練習。西村、人夫を丸山常夫と決定して黒菱へ来る。十六日発熱して帰阪した三島、再び来る。

二十四日　晴　黒菱（AM八・二五）―中継（一一・〇〇）―唐松（PM一・二五）

黒菱より唐松まで第二回荷上げを行う。今日はスキーを用いず、小屋からワカン。川本下山す。これで唐松までの荷上げは完了。全員唐松小屋にて待機の姿勢をとる。

二十五日　終日濃霧　滞在。

二十六日　曇後吹雪　滞在。

二十七日　晴　唐松小屋（AM七・五〇）―白岳（一一・〇〇）―五龍頂上（PM一・〇〇）―唐松小屋（三・二五）

東谷山尾根キャンプに必要なるテント、食糧の半分をもって全員五龍まで往復。五龍の頂上より約五分程東谷山尾根を下った小さな鞍部に荷物をおく。人夫常夫、唐松へ来る。この日関西大学の方が一人、人夫二人を伴って唐松へ来られる。

二十八日　晴

唐松小屋（AM七・三〇）―五龍頂上（一〇・一五）―荷物置場（一〇・二〇―一一・二〇）―東谷山（PM一・二五）―キャンプ建設地（三・四〇）

全員残りの荷物を持って五龍への尾根を飛ばす。五龍の荷物置場にて二隊に分れ、西村、三島のアタック・メンバーとテントで直接のサポートをやる林、丸山の四名は必要な荷物をもって東谷山尾根にキャンプを建設する。片山以下四名はアタック・メンバーの成功を祈りつつ、越中側パーティへの伝言等を托し、しばしの別れを惜んで五龍より唐松へと引き返す。キャンプ建設班は相当なラッセルに悩まされながら、東谷山尾根を下り瘠尾根の白樺の林の中に前進キャンプを建設する。テントは前面には劒が見え、後方には白樺越しに鹿島からキレット一帯が手に取るように見える気持のよい所である。

二十九日　晴　唐松小屋班は滞在。テント班はアタック・メンバー西村、三島が東谷山尾根及び本流の偵察に出る。仙人池付近に越中側前進キャンプらしきものを見て喜ぶ。午後八時、発火信号を行ったが越中側よりの応答なし。

三十日　午前中濃霧、午後より晴　唐松小屋班は十一時頃より新人のアイゼンのトレーニングかたがた不帰往復。テント班は林、丸山のサポートを受けて、西村（L）、三島、テントを出発して黒部横断、仙人池前進キャンプへと向う（別項）。午後八時、以前より打ち合せておいた赤色発火信号を東谷山尾根テントよりあげる。仙人池の越中側前進キャンプより応答あり、これは唐松小屋からも見えて両班とも非常に喜ぶ。

三十一日　ガス強風　各班滞在。

四月一日　ガス後晴　唐松（AM一一・〇〇）―五龍（PM一・三〇）―前進キャンプ地（三・〇〇）

片山（L）、大島、前進キャンプ撤収のためテントに入る。東谷山尾根のラッセルは意外にたいしたことはなく短時間でテント場に着けた。米井、富村は余った器具をもって黒菱へ往復。

二日　終日ガス　唐松小屋班滞在　テント班の片山（L）、林、大島、丸山はくずれかかった天候と食糧の余分なきため、ガスの中をテント撤収して唐松小屋へ向う。風強く、ガス濃く、相当難行であったが、四時過ぎ唐松へ着く。

三日　ガス後晴　懸案の計画もやっと目的を達したかと思うと、全員ほっとして急に浮き足が立ち、細野へ下山、夜汽車で帰阪す。

越中側サポーティング・パーティの行動

越中側サポーティング・パーティは仙人池に前進キャンプを建設し、アタック・メンバーの黒部横断後に

おける行動を援護し、横断の成否を信州側キャンプに通信して撤収を容易ならしめる目的を有していた。日誌を簡単に記す。

三月十八日　人夫の交渉等のため、大橋芦峅へ先着。

十九日　森本、入江着。全員合し、小見にて細野の信州側パーティと電報にて連絡をとり藤橋泊。

二十日　曇時々晴後雪　藤橋（AM九・三〇）―ブナ小屋（PM二・一〇）

旧道に沿い、美女平からスキーを穿いてブナ小屋に向う。

二十一日　快晴　ブナ小屋（AM八・一〇）―弘法（PM一・〇〇）―追分（二・三〇）―天狗平（五・一〇）

冬に引きかえ春の弥陀ヶ原は人の往来がはげしい。快晴の弥陀ヶ原を天狗平へと向う。

二十二日　曇後吹雪　天狗平（AM九・四〇）―別山乗越小屋（PM〇・一〇―〇・四〇）―天狗平（二・一〇）

天狗平まで荷運びのため別に三名の人夫をつれて来ていたのであるが、この日下へ下らし、ここから上は私達だけでトランスポートをやることにした。乗越小屋まで第一回の荷上げ。雷鳥沢の下りはすばらしい。

二十三日　吹雪　滞在。

二十四日　曇後濃霧　天狗平（AM九・一〇）―乗越小屋（PM〇・〇〇―〇・三〇）―天狗平（二・〇〇）

前々日と同様、たいして雪も深くなく、午前中は天候も余り悪くなかったので順調に第二回のトランスポートを行う。午後からはまた吹雪。

二十五日　吹雪　滞在。

二十六日　曇後吹雪　天狗平（AM九・三〇）―乗越小屋（PM〇・五〇）

残りの荷物全部をもって乗越へ向う。昨日の雪で相当ラッセルに悩まされる。日大及び浪高の人達とラッセルを交替しつつ上る。

二十七日　快晴　滞在　天気は好いが昨日相当積もっているので、劔沢の雪崩を心配して、もう一日天気を持つこととする。

二十八日　晴時々曇

乗越（AM六・四五）―二俣（八・二五）―仙人池（一一・四五―PM一・一五）―二俣（二・二〇）―乗越（六・〇〇）

乗越小屋から仙人池まで往復してトランスポートを行う。劔沢のスキーはすばらしい。しかし真砂沢まではさすが雪崩を心配しつつ下る。二俣からは池ノ平を通らず、仙人池への尾根に直接取り付く。池の少し仙人谷寄りにテントを建設することとし、帰りは池ノ平を通って下る。乗越小屋には越中側から黒部横断をやる関西大学パーティが丸山護を連れて来ておられた。護氏を通じて信州側パーティの動静を聞く。

二十九日　晴　乗越（AM九・〇〇）―二俣（一一・三〇―PM〇・三〇）―仙人池（二・一〇）

残りの荷物全部をもって、同じく仙人池へテントを張る関西大学のパーティと一緒に劔沢を下る。二俣に一部の荷物をおき仙人池に前進キャンプを建設する。双眼鏡をのぞくと対岸の東谷山尾根にワカンの跡が見えるのはうれしい。

三十日　晴　気持が悪いほど天気が続く。二班に分れ、二人は二俣まで昨日残して来た荷物を取りに行き、他の二人は仙人谷を偵察する。仙人湯から下は雪崩が心配で日中には下れない。仙人谷と雲切谷の間の尾根を下り黒部本流のスノー・ブリッジを偵察して引き返す。午後八時、東谷山尾根の湾曲点にあがった発火信号はテント内を喜びでわき上らせた。明日の行動を協議する。

三十一日　曇後ガス　この日は黒部の本流までアタック・メンバーのサポートに行くことにしていたが、午前七時、余りにも早くアタック・メンバーがやって来たので十分サポート出来なかったのは残念だ。しかし半年間の努力もこれで報いられた。安心し切った喜びの一日をテントにすごす。午後八時、発火信号を行って成功を東谷山尾根キャンプに知らせる。

四月一日　曇　滞在。

二日　曇時々ガス　仙人池（AM一〇・一〇）―二俣（PM〇・〇〇―〇・三〇）―乗越小屋（四・〇〇）

天気は余り好くないがテントを撤収して乗越へ引き上げる。二俣の辺りは雨でずぶぬれになる。二俣に一

部の荷物をおいて劔沢を上る。よく人が言うように、乗越へ帰ると全く我が家のような感じがする。

三日　曇　滞在。

四日　曇　西村、大橋、三島と伊太郎と昨日残してきた荷物を二俣まで取りに往復。

五日　曇ガス　滞在。

六日　曇　乗越（AM八・〇〇）―天狗平（一〇・〇〇―一一・〇〇）―ブナ小屋（PM二・〇〇）―藤橋（四・〇〇）

余り天気はよくないが引き上げることとする。雷鳥沢はワカン隊すこぶる優勢（アタック・メンバー二名はスキーをもって来ていない）。ブナ小屋で泊るつもりであったが、足に任せて藤橋までとばす。

七日　芦峅に立ちより、すべてを済ませて夜帰阪す。

アタック・メンバーの行動（黒部本流の横断）

三月三十日―三十一日

東谷山尾根キャンプ（AM一一・〇〇）―東谷山尾根末端（PM四・四五―五・三〇）―黒部本流（六・〇〇）―仙人湯（一一・〇〇―三十一日AM二・〇〇）―仙人池キャンプ（七・〇〇）

前夜十二時頃おきてみると空はどんより曇り星も見えぬので、出発は一応見合わすこととする。六時頃にはいまだ曇り、雪もちらついていた。八時頃から晴れ出したので、このチャンスを逃してはと信号など待てずにとにかく出発する。昼の間に尾根を出来るだけ下り、日がかげってから黒部へ下り、仙人谷は夜でも迷うことはないので、ゆっくり登ることとする。携帯品は食糧各五食分、ツェルト、ザイル、防寒具等で各々三、四貫程度。

一、七七一米のピークまでは前日ラッセルした跡があるので早く約一時間。このピークから黒部までの東谷山尾根は悪場はないが、大体階段状をなして落ちている。くさりかけた雪の上を黒部までワカンで下る。丁度仙人谷出合の少し上へ出る。仙人谷出合の人見平には日電の大きな飯場が出来ており、積雪期にも勿論下界と隔絶はしているが相当の人が働いている。これは全く思いがけなかった。とにかく尾根の末端のピーク（黒部の川面から百米程上）に来たが、河原までは雪がゆるみ、危険なので日がかげるまで待つことにする。スノー・ブリッジは人見平（仙人谷出合）にも雲切谷出合にもかかっているが、雲切谷のは中央部がどうもあやしいので人見平のブリッジを渡ることにして約二時間の後出発する。この間、よくもこれだけ出るものだと思われるほど、素晴らしい雪崩の音を聞く。全く雪崩の交響楽だ。ブリッジのかかっている所まで行くには雪崩路をトラバースせねばならず、相当緊張する。ブリッジは人見平のダムの作用も手伝って完全なのがかかっている。横断後は仙人谷を上りつめることとする。出合の滝は上半分が出ているが、右側を捲く。後はただ仙人谷を上るばかりで、肩の重荷が下りたようなホッとした気持になったが、非常にあっけなく、やり甲斐がなかったような気もした。夕食後のんびりと仙人谷を上る。滝状の急斜面を上り、やがて水平道の付近に出る。上の滝は出ており、大体夏道に従って右側を高捲きする。天気もそう急に悪くなりそうもなく、気温も相当高いので仙人湯でコッファーをわかしてゆっくりと食事をとり、二時再び歩き出す。仙人湯からしばらく上ると越中側サポート班のらしいシュプールを見出す。目と鼻の先に仙人池のテントがあるのは判っていながら、テントまで仙人湯から五時間かかり、サポート班が前夜の信号を受けてサポートに出かけている時に、テントの見える所まで着いた。テントからスキーで下りて来たサポート班と、大阪で分れて以来の握手を交し、お互いに成功を喜びながら七時テントに入った。

21　宍戸 元 「偵察のすすめ方 まず文献の検討を」『岳人』第 139 号

1959（昭和 34）年 11 月 1 日刊　中部日本新聞社発行

〔初出『関西学生山岳連盟報告』第 9 号〕

要　約

1956（昭和 31）年 3 月 20 日～4 月 5 日の記録。

メンバーは、岡田博司、西川元夫、宍戸元、サポート 6 名（以上、大阪大学山岳部）。

行程は、鳴沢岳西尾根下降～黒部川～内蔵助谷～立山。

※鳴沢岳西尾根下降は積雪期初踏破。

※積雪期の黒部川で十字峡より上流域の下廊下に横断地点を求めた初めての試みか。

山行前の偵察は、現地に行くことだけではない。先蹤者の文献を検討することが、先ず大切である。日本の山、とくに積雪期に対象となる日本アルプス地方ではよく捜せば、その山の文献は必らずあるはずである。山登りは経験の集積なのだから、これをおろそかにするわけにはいかない。しかし、山に関する文献をよく整理された図書館がない現状では、平常から機会をみて文献に眼を通すことが必要だろう。私たちは三十一年春、黒部下廊下の初横断に成功した。記録のない当時だけに、かなり系統的な偵察をくり返したので、その経過から偵察のすすめ方を述べてみたい。

はじめに手がけたことは文献の検討である。文献としては戦前の関大、大阪商大の仙人ダム附近を徒渉地点とする黒部横断、戦後再び同じルートを関学、東大によつてトレースされた報告がある。これらの文献を参考とし、私達は黒部横断は徒渉点をピークと考えた一つの山を想定し、計画をたてた。さらに古い記録としては立教の東谷から鹿島槍往復があり、これで黒部の積雪状態を予測することができた。しかし、下廊下の十字峡から上手では積雪期の記録はまつたくない。ただ冠氏（註・冠松次郎氏）らが六月に内蔵ノ助沢を下降、御山谷まで溯行された記録と、浪高中村氏らが横断を目的として三月に下廊下偵察を試み、十字峡附近にスノーブリッジのできることを確認した記録があるに過ぎない。

それで私たちは下廊下にできるスノーブリッジを利用して横断することを考えた。しかも御山谷から仙人谷にいたる下廊下は記録がないことから、この間で、少なくとも十字峡より上手で横断すべく偵察隊をだした。立山側は内蔵ノ助沢の通過が最も容易なので、後立山側の下廊下右岸の壁の下降ルートの発見、第二に下廊下の徒渉点の選定、第三に徒渉地点から内蔵ノ助沢出合にいたる下廊下の通過の可能性が偵察の重点だつた。それに下廊下の積雪状態、とくに雪崩の問題もなおざりにできないものであつた。ところがこの雪崩、とくに私たちが横断を計画している春に多い底雪崩については、具体的なことは文献に記されていない。

第一回偵察隊は冠氏の下廊下への下降ルートを頭に描きながら二十九年春、岩小屋沢岳支脈を下り、下降ルートをさがすことになつた。積雪期登山の偵察を無雪期に行う人は多いが、必らずそうしなければいけないとは私は思わない。なぜなら一年中雪のあるヒマラヤでは偵察ができないことになつてしまう。ただ未知のところでいきなり積雪期に登ると予想しない、いろいろな出来事に遭遇することが多いから、それに対処するだけの充分な実力を養つておかなければならない。

この偵察では下降ルートの発見には失敗したが、下廊下の雪の特殊性を知ることができた。その第一は積雪量である。三〇〇〇㍍の山やまに囲れた下廊下は、同じぐらいの高度にある籠川谷の扇沢の出合とか、弥陀ケ原の称名滝附近に比較して、実に数倍する積雪がある。第二の点は多量の雪にもかかわらず、高度が低いためか気温が高く常に雪がくさつている。第三はクラストの時間で、ここでは夜の一二時過ぎから、午前九時頃までがクラストしている。だから晴天つづきでも、夜中に雪崩の音を聞いたが、べつに不思議なこと

ではなかつた。ここの雪崩は冠氏の記録にもあるように雪とブロックの崩壊のようなものが多かつたようだ。

この三つの点から、第一に相当なラッセルを覚悟しなければならない。また、雪がくさつているということは、足場が不安定でピッケル、アイゼンがききにくいということを意味している。さらにズクズクにぬれた装備が、雨で稜線に登つたときに凍つてしまうことを考えねばならない。これは身体の面から考えると、もつとも凍傷にかかり易い状態である。そのため防寒の目的でなく、防水の意味で私たちはオーバーシューズを着用した。テントは下廊下というアプローチの長いところへ、しかも少人数でスピードをもたらすために、重量を制限したため、雨に対する居住性を犠牲にしてナイロンテントを使用した。第三の夜半の雪崩についてはクラストした時間に行動することにして慎重を期した。

冬山を前に

最大の問題の下降ルート発見には、どうしても下から右岸の壁に登つてみる必要があつた。それには自由に動ける無雪期に偵察を行わなければならない。そのため二十九年夏に第二回の偵察隊をだした。

この頃、御前沢出合にダムを作ろうとする関西電力の黒部第四発電所建設の測量工事が本格化していた。工事用吊越が十字峡の下手、新越沢出合と鳴沢小沢出合とそれの中間と鳴沢小沢出合、鳴沢出合に両岸を結ぶ吊越が四ケ所あり、右岸にも測量用の夏道が一部つけられていた。これを利用しようという気持と、早くやらなければ……という二つの気持が重つた。その年によつてあるかないかわからないスノーブリッジを使用するよりも、吊越を利用した方がはるかに得策だつた。そこではじめの方針にしたがつて内蔵ノ助沢にもつとも近い鳴沢の吊越を横断点に選んだ。つぎに、私たちは鳴沢右岸をなす尾根を「鳴沢岳西尾根」と呼んだ。この下降ルートをひらく段階にきた。

下廊下のようにスケールが大きく、しかも地形が複雑なところでは、実際に取りついてルートを捜す前に、全体が一望のもとに見渡せる場所を捜す必要があつた。私たちはそのため二十九年夏には黒部別山を大ダテガビンの真下まで登り、同年秋には、立山稜線上から鳴沢岳西尾根の地形を観察した。このとき真砂岳頂上で撮影した後立山西面の写真は非常に有益だつた。最近は山登り仲間の中でも相当カメラが普及してきたが、やはり地形観察のためにはスケッチが重要である。とくに細かい点を理解する意味ではスケッチが優れている。私たちはこの偵察と並行して、同じ年の夏、秋に鳴沢岳西尾根に上と下から二つのパーティをだして下降ルートの偵察を完了した。しかし、これだけの偵察にもかかわらず、三十年春鳴沢出合にやつてきた私たちは大きな誤ちに気づいた。それは吊越の滑車が立山側に埋つていてどうすることもできなかつた。それは下廊下の積雪が予想よりもはるかに上まわつていたからである。積雪量はその年によつて、差が激しいものだから、雪の状態を予測することは難しい。その結果三十年秋には、いろいろな面から考えて、吊越の補強を行なつた。その結果、私たちは三十一年春のささやかながら輝かしい成功を収めることができた。

以上、私達が下廊下横断計画をおし進めるために行なつてきた偵察のあらましである。ここに述べたように、決してただ一回の偵察で成功したわけではない。どうしても未知なところに計画を展開するには偵察の失敗は避けられないものである。

これから偵察を行い、冬山に登ろうという若い人たちに文献の検討を第一にあげたが、注意しなければならないことは、文献に読まれてはいけないということである。とくに冬山は気象の変化が激しく、先人の記録通りに計画がすすめられると考えたら大間違いである。また、どんな権威のある人の文献でも誤りがないとはいえない。要は文献の裏の裏まで読みとることが大切である。

つぎに現地のルート偵察では、第一に一望できる地点をさがし、ここで詳細なルート図を作ることである。もしそれが無雪期であれば、そこに雪がつけば、あそこのブッシュはすつかり埋るだろうとか、あの岩は雪はつかない、あのルンゼの雪崩はどう流れるだろうといつたことまで考えるべきだろう。その点で写真を撮るよりもスケッチの方が優れている。写真ではどうしてもそのような細い点にまで考えている閑がない。そ

こではじめて自分たちの計画にマッチしたルートを重点的に偵察していけばよい。積雪期に自分たちのルートを中心に広範囲に熟知していることは心丈夫なものである。吹雪などでルートをはずれたとき、また、尾根で行動中スリップなどのアクシデントがあつて横の沢に下る必要ができたときなど、非常に役立つことがわかる。

（阪大山岳部ＯＢ・和歌山県田辺市紀南病院外科内）

22　日本大学山岳部「春の北アルプス横断 内蔵之助平、スバリ谷をへて 1958年3月の記録」『岳人』第132号

1959（昭和34）年4月1日刊　中部日本新聞社発行

要　約

1958（昭和33）年3月26日～4月6日の記録（報告は熊谷義信）。

メンバーは、熊谷義信、山崎隆史（以上、日本大学山岳部）。

行程は、剱沢下降～ハシゴ谷乗越～内蔵助平～御前谷乗越～御前谷下降～大スバリ谷～スバリ岳～針ノ木峠。

※同コースでの積雪期黒部川初横断。

春の剱岳生活につづいて、薬師岳―槍の縦走と、剱から鹿島槍までの縦走が部としての最初の計画であつたが、都合によりこの二つの縦走ができなくなつたので、部の計画としてではなく、個人的な計画として、剱生活のあと、内蔵之助平からスバリ谷を経ての北アルプス横断の計画をたてた。

剱沢から内蔵之助平へ入り、御前谷を下つて、タンボ高地へ登りまた御山谷へ下り、大スバリ谷から針ノ木岳を越える計画である。しかし、前半の悪天候で、日数がなく、タンボ高地へは行けなかつた。パーティは山崎と私の二名。

剱沢へ

三月二十六日　今日からケーブルの運転がはじまるとのことである。合宿を終つた部員の見送りをうけて藤橋を出発した。美女平からは間組のウィゼルカーに乗せてもらう。追分でウィゼルにわかれ、さらにつづくウィゼルの道を行く。二人分の食糧とはいえ十日間の用意となるといささか荷は重い。

美松坂には素晴しい小屋ができている。道はこの小屋から下を大きくまいて天狗平（てんぐびら）につづいているが、スキーでさらにトラバースをつづけた方がよさそうなので、小屋からスキーをつけた。天狗平からは夏のように地獄をへて行くよりウィゼルの道を室堂へ行つて、そこから雷鳥荘へ下つた方が早そうなので、再びスキーを背負つて道を行く。約一時間ほどで、室堂の横へ出た。雷鳥荘は下に見える。適当にルートを選んで雷鳥荘へ下る。天候が悪くなつてきた。

二十八日　この二十八日という日はわれわれの仲間にとつては一つのタブーになつている。やはりこの日に一人の仲間をこの剱で失つている。行動を慎しまざるをえない。それで今日は雷鳥沢を登つて剱沢にはいるだけにした。

雷鳥沢の登りは、夏は左岸の尾根について行くが、積雪期はスキーで右岸を登り、上部で大日岳へのルートと合して乗越に立つことが多い。しかし、昨日までは降雪なしの曇天で、クラストしている上に、昨夜五㌢ほどの積雪という状態なのでスキーは極度に使用しにくい。そのためアイゼン、ワカンで右岸の尾根を登る。ダイレクトに登るので、この方がかえつて早い。乗越に立つたら、それまで晴れていた空は、すつかり雲におおわれ吹雪と化していた。剱岳も見えない。

乗越には今度の生活であまつた石油がおいてあつたので、それをつめて剱沢へ下つた。下つて間もなく私のザックのバンドがプッと切れた。昨年の秋、大修理をして、くる前にも充分点検してきたのであるが、それが切れたのである。背負つているザックのバンドが切れたなどというのははじめての経験だつたので、少々あわてたが、考えてみれば今日は“魔の日”である。朝、出る前に、今日は事故がなければ、アイゼンのバンドが切れるか、なにかあるだろうから気をつけようと話しあつたことを思い出した。

まだ時間は早いが、剱沢の小屋へはいる。

二十九日（風雪）気温はぐつと下つて冬山のような寒さである。大陸の高気圧がはり出して冬型のような天気になつてしまつた。すぐ近くの劔も見えず、しきりに雪が降る。昨日までの天候によつてクラストしていた上の降雪なので雪崩の危険がある。この劔沢での雪崩は、小屋から下は両岸からの危険だけを考えていればよいと思い、視界がきけば行動はできるだろう……。いずれにせよ二〇㌢もの積雪ではあまりよい気持ではない。待機していたが、雪は一日中降つていた。

三十日　昨日の停滞で、少々落ちつかなくなつてきたのに、今日も風雪。また停滞かと思うとたまらない。気温は低く、シュラーフにはいつていても寒さが肌をさすほどである。

食料、日数を考えると、この二日間の停滞は大きい。明日から晴れて行動しても実動に三日は必要である。本劔の登頂は、今回の合宿生活もあつたことだし目標にしていなかつたので割愛。こうして停滞していても、もし明日も天候がよくならず、行動できないとしたら、予定の横断はできなくなるのではなかろうか、などと心細くなる。しかし計画を打切つて、再び富山駅ホームを歩く時のことを考えるとやりきれない。食糧、石油をきりつめて、早々にシュラーフにもぐる。

内蔵之助平へ入る

三十一日　今日も風雪である。三日も吹かれると、空虚な気持になつて、何も考えたくなくなつてしまう。もし午後からでも晴れば針ノ木を目指して行動できるが、もし、一日吹雪いたら横断は断念せねばなるまい。何度か外へ出てみたが、雪は降りガスは濃い。いよいよだめかとなかばあきらめてシュラーフにはいる。一一時三〇分頃。突然ガスがきれ青空が出てきた。「しめた！」と大急ぎで支度をする。ガスさえきれれば雪崩の危険があつても見通しがきく。何とか避けられるだろう。

二日間、厄介になつた小屋に別れをつげるころは、風こそ強いが空には一片の雲もないまでの快晴となつた。スキーをつけて出発。雪崩をさけるため、できるだけ右岸によつて滑る。平蔵谷の出合はデブリで沢が丘のようになつている。少し右上の方へ行けば、ここも足下から雪崩そうな雪質であまりいい気持はしない。雪崩の巣へはいつたようである。

平蔵、長次郎を過ぎ、真砂沢の出合まできて、どうやら雪崩の恐怖から解放された。

しかし、快晴だつた空も、また一面に雪に蔽われてきた。ハシゴ谷は真砂沢から三つ目は沢であるが、劔沢を下つて行くと下方にそれらしい沢をみとめにくい。ハシゴ谷より一つ下の沢が尾根も顕著で間違いやすい。また、出合もうつかりしていると通り過してしまいそうである。出合からシールをつけて登ると、やがて沢は右折し急になつてくる。雪は重く六〇㌢近くもぐるのでラッセルはとても苦しい。雪崩の危険はそれほど感じられない。両岸には大きな雪面はなく、沢自体が雪崩出す危険も（上部をのぞいては）考えられない。ハシゴ谷乗越が間近にせまつてくると沢が二分される。右でも左でもよさそうだが、左の方が近いように思われたので、左にルートをとつてジグザグに登る。

乗越に立つた時には、劔、立山は雲にかくれ、薄暗くさえなつてきていた。足下には内蔵之助平が無気味な静けさで、広がつている。ちよつと気やすくおりて行けそうもないような感じだつた。今日中に内蔵之助平へ下りたいと下降路をさがしたが、沢は極度に急で、雪崩の危険も感じられるし、尾根といつても明瞭なものはない。沢をおりるべく木の根につかまつて雪の状態を見ようとしたら、ピシッという音をたてて五㌢ほどの亀裂が、足下から沢いつぱいにはいつた。“危い！”今日は内蔵之助平いりをあきらめようと、乗越に雪洞を掘つた。

四月一日　今日は待望の内蔵之助平へと勇んで雪洞を出てみると雪がシンシンと降つている。視界は全然きかない。やむなく停滞である。夕方、雲は消え、遠くの針ノ木あたりも見えるようになつた。明日御山谷まで行けたとしても、日数はぎりぎりのところ、もし明日動けなかつたらすべては終りである。今日の停滞が悔まれる。夜空に輝く星が、せめてもの希望をもたせてくれる。

二日　明かるくなるのをまつて出発する。少し立山の方へよつた所から下り出す。下におりればスキーで

快適に滑れる。御前谷への乗越も、急な登りである。ワカンにはきかえて登る。雪質が悪く、登りにくい。右手に大きな斜面があつて気持のわるい一時間半であつた。

御前谷乗越に立つと、針ノ木が目の前にせまり、大スバリ谷、小スバリ谷ともよく見ることができた。乗越から少し下つた所でスキーをつける。太陽がジリジリと照りつけ、左右は雪の斜面でせばめられた谷底は、むし風呂にはいつているようだ。途中、滝のかかつた左俣をすぎて、黒部の対岸がかなりせまつてきたところで再びワカンにはきかえ、しばらく行くと滝の上に出た。滝の下が見えないのでその大きさは判らないが、大きな滝のように思えた。いま少しで黒部という所なのだが残念。やむなくタンボ沢と御前谷の尾根へ上り、その尾根の末端を黒部川へ下つた。

針ノ木岳を越えて

三日　今日は、いよいよ最後の針ノ木への登りである。心配した黒部川の渡りも、大スバリの出合に吊橋があつたので、なんなく通過できた。

出合附近は雪がわれ、流れをのぞかせているが、少し行つて左折するころには谷全体が雪にうもれて谷幅も広くなつて歩きよくなつた。左岸の台地を行く。日が谷にささないうちなので、ラッセルもなくピッチはあがる。しかし、谷が九〇度に右折するところから、しだいに急になつてきた。

黒部の谷がぐつと下になり、なお急な登りになるところで、第一の滝にぶつかつた。高さは一〇㍍ほどここは左岸をまく。滝ツボのすぐ左に小さな沢がはいつていたので、それを一〇〇㍍ほど登り、尾根をトラバースし落口にで、二〇分ほどでまくことができた。第一の滝から急な谷を四〇分ほど登ると、両岸が大きな壁になつていて、極度に狭くなつた所に第二ノ滝が大きな流れを見せていた。一五㍍ほどの落差である。滝の附近は青黒い壁で、登れそうにない。まさに行手をはばまれた感じである。滝の下流二〇〇㍍ほどに右から大きな沢がはいつていたので、とにかくそれを登る。かなり急で雪崩のでそうな沢である。

日に照らされながら、雪の重いラッセルはなかなか苦しい。スノーボールがしきりと落ちる。三〇分ほど登つた所で尾根にあがつてみたが、本谷へ下れそうもないので、さらに登る。稜線がすぐ上に見えるぐらいまで登つた。

やがて右から顕著な沢がはいつてきた。これはスバリ岳から出ている尾根にあがつているようだ。この沢の少し上でスバリ谷が二つに分れ、右俣はスバリ岳と赤沢岳の中間にあるピークのスバリ岳によつた稜線にあがつており、左俣はさらに上部で幾つもの沢に分れて、赤沢岳よりの稜線に消えている。われわれが第二ノ滝をまいてくだつた所は二俣の下の沢であつた。それもかなり上部だつたのでさらに下つて本谷へ出、左俣へはいつていつた。二俣から少し行つた所で右の沢へはいる。このあたりから沢はますます急になり、また、雪が重くて登行ははかどらない。二時間近くの苦しい登りで、やつと森林帯をぬけ、赤沢岳よりの稜線に出た。立山、劔をはじめ後立山の山々が見え、そして下には待望の信州の谷が黒い山の間へ消えていた。

御山谷の小屋から約八時間を要したわけである。今日中に針ノ木を越える予定だつたので、稜線を急ぐ。しかし、スキーを背負つているのでスバリの登りなどは、とくに歩きにくく、思わぬ時間を費し、針ノ木岳の下にきた時は薄暗くなつていた。針ノ木峠から下るより、ここからの方がよさそうなので雪洞を掘る。

四日　朝、針ノ木岳を往復して下山、スキーで扇沢の出合附近まで下つた。

この山行は前半を悪天候にたたかれて、思うように進むことができなかつたが、後半は晴天にめぐまれて短かつた。しかし、苦しくも、また楽しい思い出をつくることができた。

（熊谷義信記）
（事務所・東京都千代田区西神田二ノ八、同大学内）

23　大阪大学山岳会　「赤沢岳西面 一九五八年四―五月の記録」『岳人』第247号

1968（昭和43）年4月1日刊　中日新聞東京本社発行

要　約

1958（昭和33）年5月2日の記録（報告は玉井康雄）。

メンバーは、宍戸元、広瀬茂、玉井康雄（以上、大阪大学山岳部OB）。

行程は、赤沢岳西尾根3峰（猫ノ耳）ダイレクト尾根。

※赤沢岳西尾根3峰（猫ノ耳）ダイレクト尾根初登攀。

『岳人』二三九号に先輩の宍戸（元）さんが「猫ノ耳を登ったころ」という思い出を書かれていたが、このときの記録は部報に発表されただけなので、もう十年前になるが、あまり知られていないところだから、以下に記す。私はまだ二年部員だったときである。

昭和三十年の春、大阪大学山岳部は黒部下ノ廊下の横断を目ざして、鳴沢西尾根を登降した。そのとき、尾根を一つへだてて南に見えたいわゆる“猫ノ耳”の魅惑的なスカイラインは、一部の部員の心に残った。

それから三年後、黒四ダムの工事は本格的にはじまっていた。われわれは発破の音が谷から谷へこだまするのを聞きながら、赤沢の雪面を登っていた。

この赤沢岳は後立山でももっとも西に、剣岳にせまって位置している。その頂からは黒部に向かって二本の尾根が落ちこんでいる。やや北へ向かうものは、樹木におおわれた比較的単調な尾根で西北尾根と呼ばれている。他の一本はこれとは対照的な西尾根で、“猫ノ耳”と呼ばれる奇妙な岩峯をもっている。この西尾根には二つのピークがあって、主峯側から第二峯、第三峯と呼ばれている。“猫ノ耳”として知られているのは第三峯で、東西に猫ノ耳のように張り出した美しい双耳峯になっている。一方第二峯も東から、たとえば立山や内蔵ノ助平などから見ると、これも南北に張った鋭い双耳状のピークである。このためか、以前の記録などでは第二峯と第三峯（猫ノ耳）の呼称もしばしば混同された。猫ノ耳も相似峯とか双耳峯などと記されたこともある。しかし、よく眺めたところ、どうも第二峯を猫ノ耳と呼ぶには、きびしすぎる。第三峯を“猫ノ耳”と呼ぶなら、第二峯は“山猫ノ耳”とでも呼ぶべきであろう。一方この二本の尾根（西北尾根と西尾根）の間には赤沢が深く切れこんで、ダムのすぐ下流にそそいでいる。われわれはこの赤沢から西尾根への登攀をねらったのである。

記　録

五八年四月二十七日―五月四日

メンバー　大阪大学山岳会　宍戸（ＯＢ）・広橋（ＯＢ）・田村・玉井・田井・笠松（以上二年）

四月二十七日　みぞれ・強風

まだ怪しげな二年生四人が神様のようなＯＢに連れられて、弥陀ケ原ホテルの横に着いた。大町トンネルが貫通したことは知っていたが、通してもらえそうにもなかったので、立山を越えて行くことにしたのである。われわれは雪上車から下りた。

この日は御山谷出合まで行く予定であったが、悪天候だったので天狗平で幕営することになった。風が強く、設営のときにあおられて古い方のテントの支柱が折れてしまった。全員ブツブツ言いながらずぶぬれで四人用テントにおさまった。

二十八日　晴のち曇

ぬれ物を干すため、出発が遅れた。この日は御山谷を下りてタンボ沢出合に出たところで日没となった。

御山谷には工事用資材の切れはしが散乱していた。

タイム　天狗平一二・三〇、一ノ越一五・一〇、タンボ沢出合一九・三〇

二十九日　曇

黒部まで出て驚いた。御山谷出合から下流へかけて自動車道路が走っている。なんだか奇妙な感じである（現在はこの道はダムの底に沈んでいる）。赤沢近くまでやって来ると、ダムらしいものはなにもないが、いろいろのバラックやテントが建っていて、ヘルメット姿の人びとがいそがしそうに働いている。赤沢出合には小さな釣橋がかかっていた。それを渡って出合につく。沢はそこまでデブリが押しだしていたが、雨でまるくなっていたので楽に登れる。すこし上ってゆくと工事の人びとがなにやらけとばしながらおりてくるのに会う。フトンの包みである。大町から飯場用にもってきたものだという。主トンネルの黒部側出口がまだ工事中で、まず赤沢下部に小さな横穴が開いたわけである。

四〇分ほど沢をつめると、その小トンネルの口に着いた。ここで聞いたところこの出口も二回ほど雪崩にやられたらしい。話をしている間に大町への帰りには、この穴からトンネルを通してもらえることになった。この口から約三〇分登ったところに荷をおき、沢の上部を偵察する。しかし、適当なキャンプサイトを見つけることができず、やむをえず雪渓の左岸よりにテント一つ分を切り出して天幕を張った。すぐ横の西尾根からおりている沢の末端が水場になった。どうも絶対安全な場所とは言えないので落着かない気分である。

タイム　タンボ沢出合一〇・〇〇、黒部出合一〇・二五、赤沢出合一二・〇〇、トンネル横穴一四・四五、幕営一六・一五

三十日　晴のち曇

本日は偵察である。赤沢をさらに二〇分つめると開けた二股に出る。ここからは赤沢西面の全貌がよく見える。二・三のコルはオーバーハングにかこまれていて無事通れるものか心配になる。ここで二手にわかれて、田村・玉井は雪渓づたいに左俣をつめ、一・二のコルまで登った。コル付近は狭いルンゼで傾斜が強い。最後のところはステップを切って、ドッコイショと雪の塊をのりこす。他のパーティは右俣を猫ノ耳の下まで登り、猫ノ耳へのダイレクト・ルートの取付きと、西耳（猫ノ耳の黒部側のピークの仮称）の右に上っている雪のついた浅いルンゼをしらべた。

タイム　出発六・三〇、左俣より一・二のコル一一・〇〇、帰着一四・〇〇

五月一日　雨のち晴　停滞

午後には雨はやんだが落石が多い。西北尾根の側壁から赤沢本流へかけてかなり大きいのがどんどん落ちる。

二日　曇時々晴

二人ずつ三パーティにわかれる。

猫ノ耳（西耳）ダイレクト尾根

パーティ　宍戸・広橋。

右俣から猫ノ耳の西耳直下まで雪渓をつめて岩場にとりつく。足下には二股の広い雪面が見え、黒部をへだてて剣が偉容を誇っている。浮石が多いし、また岩は逆層なので慎重に登ったが、とうとう大きな石をはがしてしまいセカンドが「山をこわして登るのか」とどなる。二ピッチで西耳から北へダイレクトに出ている尾根の上に出る。ここから見える第二峯の右俣側の赤茶けたハングだらけの逆層の壁は圧倒的にすさまじい。以後コンティニュアスで順調に西耳ピークに出る。ここでおくれてついた右ルンゼ隊と合流し、東耳ピークからはスバリ側をブッシュ伝いにからんで雪のつまった二・三のコルへ下る。ここは両側がハングした壁にかこまれたひどいキレットである。このコルから右俣を下ると、雪渓が二カ所ほど切れていたので、スタカット四ピッチで下る。あとは快適なグリセード。

タイム　出発五・三〇、西耳ピーク一二・〇〇、右ルンゼ隊と合流一三・一〇、二・三のコル一四・四〇、帰幕一八・〇六

左俣から主峯、第二峯

パーティ　田村・田井。

雪のしまった左俣を順調にとばし、一・二のコルへ出る。前に見た雪の魂は雨でおちてしまったらしい。ここからは乾いた岩と草付を楽しみながら小さな岩峯づたいに主峯に出る。いったん一・二のコルに戻ってから稜線づたいに容易に二峯に立つ。昼食にかかっていると猫ノ耳の上にＯＢたちが見えた。下りは一・二コルから左俣をグリセードで下る。

タイム　出発五・三五、一・二のコル八・一五、主峯九・三〇、第二峯一二・二〇、帰幕一四・三〇

右俣右ルンゼより猫ノ耳

パーティ　玉井・笠松。

右俣をつめて、偵察しておいた猫ノ耳直下から右に上っている浅いルンゼに入る。登るにつれて傾斜は急になる。稜線から約五〇㍍下にあるクレバスにはばまれたが、ブッシュをつかんで右へはい上りブッシュの中を登って再び雪面におりた。うすく雪をかぶったスラブをすこし登るとブッシュの中の西尾根稜線の小さなコルに出た。ここから猛烈なブッシュを漕いで西耳の頂についた。ここで待っていてくれたＯＢたちと合流する。

タイム　出発七・〇〇、西尾根上のコル一一・〇〇、西耳一三・一〇

右俣より第二峯・主峯

三日　晴

この日も同じパーティで動く。きのう下った急な右俣をつめて二・三のコルへ出る。ここからは二峯へリッジ沿いに登ったが、予想していたより簡単だった。ところどころスタカットをまじえながら明るいリッジを登る。第二峯頂上で左俣から来た笠松、玉井と合流、一・二のコルを経て主峯へ出る。下りは左俣をグリセードで下った。

タイム　出発六・〇〇、第二峯一四・三〇、帰幕一七・四五

右俣より猫ノ耳・西尾根下降

ＯＢたちのトレールを伝って右俣をつめ、二・三のコルへ出る。ここからスバリ側のブッシュの中を登り、東耳に出る。昼食後、西耳ピークからブッシュの中をどんどん下る。右ルンゼからのルートをのぞいたあと、再び尾根づたいに下る。標高二一〇〇㍍付近から北に向かい二股をめがけて支稜を下る。末端近くで雪田に出たが、ここがやがて滑滝の上部につづいていたので、これを右にまいて二股のすこし上におりた。

タイム　出発九・〇〇、東耳ピーク一一・四五、帰幕一七・三〇

四日　雨

夜半、水場にしていたテントの近くの沢が雪崩れて、不気味である。まだすこし未練が残ったが、一応西尾根をトレールしたので引上げることにする。雨の中でテントを撤収し、工事場の人のご好意で赤沢側から大町への主トンネルにつづく小トンネルに入る。すこし進むと本トンネルに合流する。トンネルの中はまだかなりの部分が水びたしで、天井からシャワーのように水が降っているところもあった。言われた通り、全然休まずに歩いて約一時間で信州側へぬけた。

タイム　出発一一・五〇、赤沢側トンネル入口一二・一〇、大町側出口一三・〇〇

終りに黒部からのルートについて述べると、無雪期には取付きがすべて沢登りになる。そしてその沢から尾根、もしくは壁への取付点のブッシュ、そしてさらに上部のブッシュをどう処理するかが問題となる。古くは赤沢から登った冠松次郎氏の記録があるが、完登はされていないようである。積雪期には大きな雪崩が

一応出つくした五月頃が最適である。

キャンプサイトはわれわれの幕営した場所よりもすこし上の二股付近がよいと思うが、いずれにしてもブロックを警戒する必要がある。雪の多い年ならばアプローチが長くなる欠点はあるが、やはり赤沢出合に幕営する方が無難であろう。西尾根から赤沢側に派生している尾根は、いずれも黒部側が赤茶けた逆層の岩壁からなっていて登攀はかなり困難であろう。われわれがルートにした以外には第二峯の直接尾根がまず取り上げられるバリエーションであろう。

厳冬期に黒部側から西尾根を通って主峯へ登る試みはかなり以前に阪大パーティによってなされたが、赤沢下部に集中する雪崩のために取付くことができず、失敗におわっている。

（玉井康雄・記）

24　大阪大学山岳部　「積雪期 黒部川上ノ廊下横断

1959年3月の記録」『岳人』第143号

1960（昭和35）年3月1日刊　中部日本新聞社発行

要　約

1959（昭和34）年3月11日～4月2日の記録（報告は野田憲一郎）。

メンバーは、野田憲一郎、米林外茂男、広橋茂、その他サポートなど合計33人（以上、大阪大学山岳部）。

行程は、烏帽子岳～赤牛岳～北西稜下降～スゴの頭南稜～スゴ乗越。

※スゴの頭南稜積雪期初登攀。

※上廊下中核部の黒部川積雪期初横断。

★まえがき★

積雪期の黒部川には、大阪大学山岳部の創立以来関心が寄せられ、昭和三十一年春に黒部川下ノ廊下横断に成功した。それ以来、目標は上ノ廊下に移り、同年冬の双六―薬師の試み、三十三年冬のラツシユ・タクテイクによる双六―赤牛の往復をへて、三十四年春に黒部川上ノ廊下を横断する計画がすすめられるようになつた。

積雪期に上ノ廊下を横断するにあたつて問題となる主な点は、

①谷が非常に深く、両岸は相当の急斜面または岩壁でこの登行は困難である。

②文献は大正十五年の西堀氏らの記録ぐらいしか得られない。

③陸地測量部の地図は谷の周辺では全く不正確で信用できない。

④アプローチが長く、ＢＨを稜線に上げることが必要である。

⑤春は増水するので、徒渉が可能か、またはスノー・ブリツジがかかつているかどうかわからない、などであつた。

このような問題をかかえて三十三年夏から四つのパーテイが上ノ廊下一帯を偵察、第四のパーテイは三十三年十一月、ここにのべるルートのトレースに成功した。この結果、これがただひとつの可能なルートとわかつたわけである。

『岳人』一三九号、「秋の黒部川上ノ廊下横断」。『登山』五号、「スゴ・ルート紹介」参照。

★行動記録★

ＢＨを烏帽子小屋、ＣⅠ野口五郎岳、ＣⅡ赤岳、ＣⅢ赤牛岳、ＣⅣは赤牛岳の北西稜二二一〇㍍三角点（赤牛岳北西稜Ｐ6と仮称する）とし、ここから三人でアタックし富士へ下山、メンバーは山本信樹（ＣＬ）、野田憲一郎、米林外茂男、広橋茂（ＯＢ）＝以上三名アタック＝、兼清喜雄、平田彰（以上ＳＬ）ら合計三三名。なお十一月に烏帽子小屋に約四〇〇㌔の荷上げをした。

3月11日　先発隊野田他五名濁小屋入り。珍しく濁まで非常に雪が少ない。

12日（晴）全員で濁―烏帽子小屋。ブナダテ尾根の取り付きに六〇㍍、尾根上部に一五㍍のザイル・フィックス。

13日（風雪）停滞。

14日（晴、強風）先発隊用の荷物が一部濁に残つているので、三名が荷上げをするが、強風で消耗し、ブナダテ尾根に荷をデポして烏帽子小屋へ戻る。三名はＣⅠ予定地に荷上げに向かうが、猛烈な風にはばまれ、三ツ岳にデポして帰る。本隊大阪発。

15 日（晴）風はまだ強いがブナダテ尾根の荷物をＢＨに入れたあと、ＣＩ建設に出発。三ツ岳の下で不調の者がでたので二名をＢＨに帰し、四名でＣＩまでいこうとしたが、消耗を心配して三ツ岳に雪洞を掘る。本隊二三名は平均四五㌔の荷をかついで濁にはいる。

16 日（快晴）先発隊の四名は野口五郎岳の北ピーク直下に雪洞のＣＩを建設。入山以来初の微風快晴。遠く富士から越後の山波までくつきりと見える。本隊はＢＨまでボッカ、ＢＨに四人がはいつて秋にデポした荷物をふり分ける。

17 日（小雪、ガス）ＣＩで二名が雪洞の拡張、二名が東沢乗越へ偵察に向かうが視界が零に近く途中から引き返す。ＢＨ、濁は停滞。

18 日（晴）ＣＩから再び二名で東沢乗越附近のザイル・フィックスに向かう。東沢乗越の手前の悪場ではきのうの新雪が氷の上にふんわりと乗つており、アイゼンも効かない。風向きもよく変わるらしく、ところどころ岩が露出した細い稜線で、これから相当ボッカすることを思うと緊張する。

東沢乗越手前の岩場に一〇㍍、乗越からの登りに五〇㍍、それから赤岳までの間に三〇㍍と一五㍍のフィックス。ピンとしてハイマツを使えるところはよいが、ハイマツのないところでは岩がピトンを受けつけず、七分目ほどしかはいらない。四月二日の撤収の際はリスの中の氷がとけてグラグラになつていた。ＢＨからは山本ほか三名がＣＩに荷上げ、濁から全員がＢＨにはいる。

19 日（快晴）ＣＩは入山以来一日の休みもなく、全員疲れたので晴天停滞。ＢＨからＣＩに一〇人がはいり、予定のＣⅡ建設はできなかつたが先発隊の任務は終わつた。ＣＩのメンバーを包んでいた重圧感がやつと解けた。ＢＨにはアタックの広橋、米林がはいつて活気づく。

20 日（雪、強風）ＣＩは停滞。雪洞の入口が全く埋まつた。最初に作つた雪洞の天井沈下がはなはだしい。ＢＨからは強引に荷上げを試みるが三ツ岳から引き返す。

21 日（快晴）ＣⅡを建設し、四名がはいる。東沢乗越のあたりはきのうの強風で雪がよくしまつて条件がよい。赤岳と黒岳の中間、黒岳よりに四人用テントを張る。ここは最も雪庇が発達した部分である。サポート隊に設営をまかせ、二名が黒岳のザイル・フィックスを偵察。黒岳の登りの粉雪一ぱいつまつたルンゼに三〇㍍、下りのテカテカの斜面に五〇㍍のフィックス。ＣⅢ建設は順調。

一方ＢＨから一四名でＣＩへ荷上げし、ここへの荷上げを完了した。全員が揃う。

22 日（風雪）全員停滞。ＣＩの新人が腹痛を起こす。盲腸ではないようだが、悪天候でＢＨと連絡できない。

23 日（風雪）風は西から北によつてますます激しい。全員停滞。

24 日（小雪のちガス）午前一時風がおさまり月がでたので直ちに二名でＢＨに連絡。ＢＨではすぐ大阪の本部に報告、病人の運搬用具を上げるため四名が葛へ下る。幸い病人は歩けるようになり、七名がつきそつてＢＨに収容。一方、広橋、米林、平田がＣＩにはいり、山本Ｌと今後の計画を再検討。中堅部員中に故障や学校の都合で下山する者が数人出たため、ハイキャンプのメンバーが不足し、やむなく新人三人を起用する。

ＣⅡのメンバーは赤牛岳へ向かうが天気がくずれ、二七七一㍍のピークに雪洞を掘る。風はでないがガスが深くなる。

25 日（快晴）病人を無事下山させ、新たに兼清、田村がＢＨからＣＩにはいる。荷上げが予定以上に好調なので影響はない。ＣⅡに新たに五人用のテントを張り八名がはいる。

ビバークしたパーティは赤牛岳まで一時間たらずの行程、ＣⅢは赤牛岳の頂上から北西稜を少し下つたところ。ＣⅣ予定地のＰ6とスゴ沢がかなり下の方まで同時に見える絶好の場所である。口元のタル沢側に雪庇が発達している。

26 日（ガス）ＣＩでは午前中視界一〇〇㍍以下、風がでればあぶないので午前中は出発を見合わせる。午後になつてＣⅡへはいる山本Ｌと三名のサポートがガスの中を出発。ＣⅡに着くころ一時的に晴れたが、

サポートが引き返すには時間も遅く、三人がCⅡに泊まり、超満員のテントで窮屈な一夜を送る。CⅡ、CⅢは停滞。BHはきのう七人、今日は三人下山、帰りの食糧予備を残して撤収。

27 日（快晴）CⅢでは二名が雪洞を掘り、二名がCⅣ予定地偵察、P6 まで秋には一日かかつたのにブッシュの埋まつた今はわずか七〇分で下れる。P3 から森林限界までの急な大斜面はテカテカで下りは足首が笑う。森林帯にはいるとすぐP4、木は樅と岳樺が主である。P6 はキャンプとして申し分ない場所。カスミ平へはすぐ下れるだろう。スキーがあれば面白そうなところである。スゴ沢の二つの滝も見える。ここから見た薬師岳は一段とボリュームがある。さらに標高二〇〇〇㍍ぐらいまで下ると、本流がみえるが、樹の間からでは様子がはつきりわからない。ここまでくるとさすがに暖かく、アイゼンがダンゴになる。ウサギやタヌキの足跡がそこここに見られる。

CⅡからきのうのサポート三人がCⅠに残つていた一名とともに下山、CⅠ撤収。アタックの広橋、米林がCⅢにはいり、七名がサポート。

28 日（曇のち晴）CⅢでは少し曇つているが、気象通報によると日本海に高気圧があるから大丈夫と考えCⅣを建設、スゴ沢出合を偵察する米林ら三人がはいり三人がサポートする。CⅡからは山本Lほか三名がCⅢへはいる。条件がよく二時間四五分の記録をつくつた。

29 日（曇、稜線は強風）CⅣの三名はスゴ沢出合まで下る。P6 からルートはすぐに急な下りとなる。最初はずつと右寄り、廊下沢の方を向いた尾根を下る。ブッシュは完全に埋まつて下りは楽だが、尾根があまり明瞭でないうえ、放射状に広がつておりちよつと誤れば高さ一〇〇㍍以上もある壁のうえに出てしまう。林間から見当をつけて下るのは容易ではないが、中のタル沢の右岸沿いに下れば正確にスゴ沢出合の川原へおり立つことができる。スゴ沢と中のタル沢は黒部の本流のちようど同じところへ両方から流れ込み、十字形をなしている。川原の積雪は一㍍を越す程度で、気温は相当高く、雪がくさりかけている。

出発前、ここにはスノー・ブリッジを期待していたが、二十七日の偵察の際にスゴ沢のF1とF2が露出していたので渡渉を覚悟していた。はたして川は幅四〇㍍ぐらいでゴウゴウと流れている。とにかく右岸よりの中州までカンバの木を渡して橋とし、試みに渡渉すると意外にも水深は膝ぐらいしかない。これで渡河の見とおしはついたが、アタック隊のとるべきルートは予定のスゴ沢がF1、F2 の露出、雪崩の危険などで全く不可能。結局スゴの頭への急な尾根（スゴの頭南稜）を四〇〇㍍ほど登り、そこからスゴ沢上部の広い斜面をトラバースして、スゴ乗越へ出るのがよいとの見とおしを得た。

CⅢから三名がCⅣ入り、アタック成功のときの信号方法もきまる。いよいよ終盤戦である。

30 日（風雨またはみぞれ）全員停滞。恐ろしく気温が高く稜線でも雨。黒部川の増水と雪崩の危険が思いやられる。各キャンプとも浸水。

31 日（快晴）アタック隊＝早朝ガスがかかつていたが七時ごろ晴れてくる。天気図をみてもここ二、三日は晴れるに違いないというので、出合にキャンプするという当初の計画を変更し、一挙にスゴ乗越へ登ることにする。偵察の結果から八～一〇時間でスゴ乗越へ出られるだろう。しかしきのうの雨で黒部は相当増水しているに違いない。実際望遠鏡でみるとスゴ沢の二つの滝はかなり水がふえている。雨水の凍りついたシュラフザックなどを干したあと、アタック三人、サポート三人が出発。雪は表面がうすい氷となつて、ワカンではかえつて歩きにくい。

黒部川の水量は心配したほど増してはいないが、川幅が五〇㍍以上にひろがつて、偵察隊が中州にかけた橋も流失している。まず米林が空身でザイル（テリレン八㍉）をつけて渡り、全員がつづく。流れは相当に早く、最も深いところでは股あたりまである。オーバーシューズ、アイゼンをつけたまま渡つたので水はそんなに冷たく感じなかつたが、水から上ると足先がキンキンと冷たい。あわただしい記念撮影ののち、サポートは赤牛側へ戻つて中食。

靴下をとりかえ、靴やオーバーシューは水をきつて、スゴの頭南稜を登る。尾根の下の方は大きな枝の交差があるため、ストックが引つかかり、三〇㌔の荷物がこたえる。傾斜が急なのでワカンもストックも使え

ず、アイゼン、ピッケルで膝を越すラッセルにあえぐ。しかし高度をかせぐのも早く、標高二〇〇〇㍍ぐらいから夕闇せまるスゴ沢を横断、岳樺の梢が雪の上に一㍍ほど出ている。雪はすでにしまりはじめ、雪崩の危険は去つたようである。

スゴ沢直下で七時、信号の時間である。成功の合図にヘッド・ランプを赤牛の方に向ける。とすぐ応答のランプが赤牛岳のシルエットの中腹に、つづいて頂上にともり、明るい星のように輝いた。思わず皆が、“バンザーイ”“ヤッタゾー”とにぎりこぶしをふりまわす。入山以来の思い出が一瞬、頭の中をかけめぐる。五分間の点灯がやけに短い。

スゴ乗越に出たころから濃いガス、コンパス航法で慎重にスゴ沢へ向かう。途中に立命大山岳部の雪洞があり、すすめられて泊まる。（CⅣ発 11 時 30 分、出合 12 時 20 分、渡渉昼食ののち出発 15 時 20 分、スゴ乗越 19 時 10 分～19 時 30 分、雪洞 20 時 30 分）

一方、CⅡからは二名が鷲羽岳を往復した。

4 月 1 日（晴）アタック隊＝成功の喜びを胸に稜線をたどる。スゴ小屋は完全に雪の下、その位置もはつきりしない。ここからスゴのルートにはいり樅の林を快適に下る。尾根の下部は雪が非常にくさつていて、幾度もひつくり返る。スゴ谷支流の渡渉は飛び石づたいに問題なくすむが、火薬庫のコルへの短い登りはひどく急なうえ、くさつた雪でトップは相当に苦しめられる。ここから先は既に発電所工事がおこなわれていてにぎやかだ。北電の水力取入口に泊まり、久しぶりの電気、風呂、畳。（雪洞発 10 時 20 分、スゴ小屋附近 10 時 45 分、スゴ谷 14 時 10 分、北電取入口 16 時 50 分）

CⅣ、CⅢはのんびりと撤収、CⅣのメンバーが登つてくるのを待つてCⅡまで戻る。

2 日（晴）アタック隊は例年より一ケ月ほども雪どけの早い軌道を桜の咲いていた千寿ケ原へ。

CⅡは東沢乗越のフィックスをはずしながら夕方BHへ戻る。天気が不安なので濁まで下る。

★あとがき★

好運にめぐまれ、とくに後半の好天で積雪期黒部川上ノ廊下初横断に成功した。相当慎重に作つたプランだつたが、やはりいくつかの不手際は避け得なかつた。

登山の成功は一に事前の周到な研究による。あくまでも慎重な準備の上になされた山行でなくては“すべてよし”とはとうていいえないだろう。

＝野田憲一郎・記＝
（事務所・大阪市北区常安町三三、同大学内）

25　酒井国光　「黒部川横断山行の記録年表」（部分）『黒部雪山』

1988（昭和 63）年 3 月 1 日刊　酒井国光発行

〔記録部分：初出『時報』（AAVK(関西学生山岳連盟)〕

要　約

1959（昭和 34）年 3 月 15～28 日の記録。

メンバーは、山下怜三、川西昌博、ほか 15 人（以上、関西大学山岳部）。

行程は、葛温泉～船窪小屋～針ノ木岳西尾根下降～平～五色ヶ原。

※同コースでの黒部川積雪期初横断。

はじめに

一、「黒部側流域の山々」と言う広い範囲を対象としているため、積雪期をいつからいつまでと一概に規定するのは難しい。正月でも好天に恵まれれば五月の状態になり、五月でも崩れれば三月頃の状態になる所もある。ここでは十二月から三月（一部四月初旬）までの記録を収録した。

一、「黒部川横断」の規定についても同様に難しいが、ここでは、後立山側（または立山側）を越えて入山し、黒部川を横断し、反対側の稜線まで攀った記録のみを収録した。

一、記録の孫引きはしないという方針で極力当事者が書いた文献に当ったが、一部、種々の文献から山行の期間、ルート、パーティ等が明らかなものは収録した。

一、横断者名は氏名を示すよう努力したが、不明なものもあった。サポート隊については、「他サポート隊」「他サポート隊何名」とした。

一、地元の案内者、人夫等は全て氏名を示したいところであるが、文献に当っても誰が横断山行として最後まで行を共にしたのか不明なものが多かった。このため、「他」「他何名」とした。今後の研究を待ちたい。

一、ルートは、その概略がわかるよう、山名、尾根、沢等を部分的に示した。

……　中　略　……

一九五九年（昭和三四年）

◆三月一〇日～四月二日。大阪大学山岳部・広瀬茂、米林外茂男、野田憲一郎、他サポート隊二九名。烏帽子岳～水晶岳～赤牛岳～上ノ廊下～スゴ沢～スゴ乗越～スゴ尾根～千寿ヶ原

（『岳人』一四三号）

◆三月一五日～二八日。関西大学山岳部・山下怜三、川西昌博、他一五名。葛温泉～船窪小屋～針ノ木岳西尾根～平～五色ヶ原～弥陀ヶ原　（ＡＡＶＫ『時報』一五号）

……　後　略　……

26　酒井国光　「黒部川横断山行の記録年表」（部分）『黒部雪山』

1988（昭和 63）年 3 月 1 日刊　酒井国光発行

〔記録部分：初出『京都大学山岳部報告』第 8 号（京都大学山岳部）〕

要　約

1960（昭和 35）年 3 月 16 日～4 月 7 日の記録。

メンバーは、塩瀬捷一郎、原田道雄、松井千秋、安田隆彦、田村孝夫、笠目進、田中二郎、ほかサポート 3 人（以上、京都大学山岳部）。

行程は、鹿島槍ヶ岳～十字峡～北尾根～黒部別山～真砂尾根～剱岳。

※積雪期に十字峡を横断地点とした初の黒部川横断。

はじめに

（本部分は、本誌 No.25 に含まれているため、ここでの再掲は省く。内容は該当頁を参照。）

……　中　略　……

一九六〇年（昭和三五年）

◆三月八日～四月三日。関西大学山岳部・川西昌博、藤村、亀田、他サポート隊一三名。烏帽子岳～東沢谷～木挽山～薬師岳～槍ケ岳～燕岳～唐沢岳西尾根～濁　（『岳人』一五六号）

◆三月一六日～四月七日。京都大学山岳部・塩瀬捷一郎、原田道雄、松井千秋、安田隆彦、田村孝夫、笠目進、田中二郎、他サポート隊三名。赤岩尾根～鹿島槍ケ岳～十字峡～北尾根～黒部別山～真砂尾根～剱岳～早月尾根　（同部『報告』八号）

……　後　略　……

27　「《対談》 黒部十字峡横断の記録 鹿島と剣を直線で結ぶ！」『山と渓谷』第 280 号

1962（昭和 37）年 6 月 1 日刊　山と渓谷(原文ママ)社発行

要　約

1962（昭和 37）年 3 月 11～26 日（報告は小林信三と岩田克夫の対談による）。

メンバーは、小林信三、岩田克夫（以上、昭和山岳会）。サポート 4 人は牛首尾根の途中までで、あとはふたりだけでの行動。

行程は、鹿島槍ヶ岳～牛首尾根下降～十字峡～ガンドウ尾根～剱岳。

※ガンドウ尾根の積雪期初登攀。

昭和山岳会の小林信三氏と岩田克夫氏の二人が、鹿島槍と剣を直線で結ぶ新ルートを開拓した。久々に聞く北アの快記録を対談方式でご紹介しよう。

剣、鹿島の直線ルート

編集　そもそも黒部十字峡横断という計画の発端からお願いしましょうか。

岩田　去年三月私たちが宇奈月から黒部、毛勝三山、剣北方稜線を、三〇日間ノン・サポートの記録があるんですけれども、そのときに相棒と二人で鹿島を毎日見ながら、また目的の剣を見ながら、両方を何とかして直線的につなぎたいという気持があったんです。幸い入山前に京大の記録を見てたんですよ。彼らができるんなら、われわれだってできるんじゃないか。それでは来年やろうというので、問題を検討していたわけなんです。それで帰ってきてからいろいろ準備を経て、私たちが今度やったんです。当初四、五名で、縦走隊はできるだけ機動性の高い隊を考えたけれども、要するに社会人団体では、日数的な制約で多くの第一線メンバーは得られない。それで日数は二〇日間、リーダーの小林と私と金子という三人になってきちゃったんですよ。

そうなってきたところにまた金子が、大学を卒業して就職問題でいけなくなった。最終的に二人になったところにもってきて、小林の日数は一五日になるし、二人になっちゃったものですから、不本意ながらサポートの使用ということで、それでもなお私は東尾根か鎌尾根からを固執したんです。というのはなるべく最短距離を一直線に結ぼうという計画を満足させるためなんですけど‥‥。だけどサポートには八年会員のリーダーと、新人が三人ですから、それでは東尾根自体の登攀も無理だ。日数も一五日じゃ無理だから、赤岩尾根から入って十字峡を横断し、ガンドウ尾根、池ノ平、小窓尾根を経て剣の頂上から早月尾根を下るという計画で妥協するようなことになってきちゃったんです。

もちろん一五日間というのが大きな障害で、機動性を高めるために、二人のボッカ能力からしてテントは使えないし食糧の軽量化も切実な問題であったわけです。

編集　その前に、一応小林さんは秀山荘にお勤めということで、ある程度一五日の休暇ということはわかるんですけれども、岩田さんは‥‥。

岩田　私、ことし学校を出てあとは家を継ぐ立場から、ひまはありました。

小林　今聞かれたこととまるっ切り逆なんです。実際には僕の方が日数が得られなかった。一五日でもやっということで強引に押し通して行ったという工合なんですよ。

編集　従来の記録とか文献についてはやはり京大の‥‥。

岩田　そうですね。京都大学山岳部の部報の八号からです。それから私、去年の三月、毛勝から縦走のときに、京大山岳部の人に会って、いろいろ話を聞いたんですよ。僕たちも行きたいという気持があったものですから‥‥。そのときに、京大山岳部は非常に食糧の軽量化が進んでいるわけです。それで自分たちの食

料を提供して、ペミカンとかルーとかいうものの作り方とか、自分たちの使っているものを批判してくれという手紙をリーダーあてに出したら、その人は食糧に対してはそれほどじゃなくて、田中健一君という、ことし卒業された方ですけれども、紹介下さったわけです。要するにいろいろな情報を京都大学から受けたわけです。それが第一の資料提供であって、次に「岳人」の記録速報一一月号に東海大学で行ったという記録を読んだんです。自分たちはできるだけの情報がほしいから、それに連絡をつけて、そのときのリーダーの星野君にお会いして、それで棒小屋沢の吊橋のくずれていることを星野君から最終的に確認していったんです。そんな状態で、行く前にはつり橋がないということはわかっていたんですね。

編集　少し飛躍するけれども、積雪期をねらったというのは、黒部の水の問題なんかも。

小林　水の問題というより、それに達するまでが問題なんです。それからその上のガンドウ尾根ですね。普通のルートと違って登山路がないから、積雪期をねらってやるより方法がないわけですね。

サポート隊と別れる！

編集　それでは日程に入ることにしましょうか。

岩田　初日からかいつまんで申しますと、**三月一一日**は無風快晴で、入山日としては暑苦しいような天気でした。荷物は軽量化して大体平均二五㌔くらいの荷しかなかった。それはほかの会の記録から比べると異例だと思うんです。その日は夜行の疲れや何かで、高千穂平に一時ごろ着いたんですけれども、イグルーを二時間ほどかかってりっぱに作って泊まったんです。次の日はあいにく出発のころから雪になっちゃって、冷小屋に着いたのは九時ごろ。そのときはちょうど風雪で‥‥。

編集　その日はそこに泊まって‥‥

岩田　小屋を掘り出して泊まったんです。そのときも新人が二人ほど調子をくずしてしまったものですから、沈澱というような形になっちゃったんですね。

編集　サポートを含めて何人のパーテーだったのですか。

岩田　六人です。本隊は小林リーダーと私、サポート隊は柴田、沢田、桜井、榎本の四人計六人なんです。九時ごろ沈澱したから、次の日はライトの明かりで四時ごろ歩き出そうじゃないかという予定でいたわけです。それがちょっとおくれて四時三〇分、ライトの明かりで出発したんですが、そのころはまだそれほどの風雪じゃなかったんです。鹿島の稜線としては普通くらいだと思うんです。出発して鹿島槍の頂上付近になったら、猛烈な風雪になっちゃったんですよ。

編集　頂上からは未知の牛首尾根というわけですね。

岩田　ええ。

編集　ラッセルは？

小林　割合と快適におりていかれたですね。状態としては。

編集　牛首を越えて二、三〇〇峰でこの日は‥‥。

岩田　その途中で鹿島から小一時間くらいまで下ったところ、霧の中で五里霧中、暗中模索でした。小林がちょっと調子が悪くて、私がトップになって、それからサポートのリーダーと入れかわりになって、ここの稜線を歩いてきたのですが、私は一番雪庇側を歩いていて、その右側にみんな歩いてもらったんだけれども、私が雪庇を踏みはずしまして、一〇㍍くらい落ちて、吹きだまりに幸いにしてとまったわけなんですよ。そのときにみんな心配しておりてきてくれて、そこで一応休もうという調子で、そんな状態ですからもうその先がわからないわけです。これからどんなことが起きるかもしれないので、それじゃ大へんだからということで、九時から一一時近くまで、そこで待機したんです。それで雪洞を掘って完成まぎわ、ようやく晴れ出したので、それ行けというので二、三〇〇峰まで下ったんです。鹿島と牛首との稜線は両面雪庇のところが多いんです。それとこの二、三〇〇㍍付近が入り組んでいて、自分らも霧の中を歩かなくてよかったと思いましたね。

小林　**一三日**はここで泊まったんです。

岩田　それで四時の天気図をとったところ、前の風雪は寒冷前線の通過だったんですね。一人顔面凍傷にかかっちゃった。

小林　翌日の**一四日**は二、三〇〇峰を出発してすぐ樽沢に下ったんですが、これは予定のコースじゃあないんです。

岩田　正直いって尾根を歩いていたんじゃあ時間もかかるし、それに雪の状態もよくて雪崩の危険もなさそうでしたからね。

小林　大体標高一五〇〇㍍くらいの地点まで、二時間近くかかって谷から尾根に登り返しそこでサポート隊と別れたんです。

編集　結局そこから二人だけになっちゃったわけですね。サポート隊は帰っちゃうし、精神的な不安はなかったですか。

岩田　精神的な不安はなかったけれども、さびしいんですね。一緒に騒いでいた連中と別れるというのは。これは人間だれしも感じることだと思うんです。

小林　話は違うんですけど、ちょうど彼らと別れるときも十字峡の下流が見えたんです。そのときはスノーブリッジもかかっているように見えたんで、まあまあ渡れるんじゃないかと、割合楽観的だったんですね。

編集　十字峡に着いたのは何時ごろでしたか。

小林　四時半ごろですね。

岩田　みんなと別れて一三〇〇㍍近くまで下って、二人ともうんざりしちゃった。そのときも無風快晴といういい天気で、ここらで荷をおろしてザイルだけ背負って、一応十字峡まで下ってみようというわけです。河畔に着いたのは一時ですね。偵察して、とにかく急斜面で荷物背負ってはなかなか困難だよね。

小林　まあ下れないことはないけど。

岩田　ほとんど切れ落ちているんです。十字峡の標高が九六〇㍍、要するに一四〇㍍の標高差のところが非常に困難でした。

編集　荷物をおろすのにかなり時間を食ったわけですね。

岩田　ザックをザイルをつけて雪面を滑らしたのですが二人だから途中だれもいないので、小林のザックが途中ぶら下がっちゃったんで、それを撤収するのに一時間くらいはかかりました。

渡河工事に立木の登場！

編集　結局十字峡のほんとうのいいところで、雪洞を掘ったわけですね。そのときの十字峡を見た感じとしては、渡る可能性の問題ですが、どういうふうに考えましたか。

岩田　可能性というか、大体そのときは私たちは初めに牛首を下っているときに、信ちゃんがおれは隅田川で寒中水泳するように、あすこを泳いで渡ってやるから、スノーブリッジが利用できなければ、それでお前をチロリアンブリッジで渡らせるからまかしとけというんです。ところが黒部川にかかっていたスノーブリッジは、こっち側の山陰で隠れてくっついているように見えたんです。一つ五〇㍍くらい下流にスノーブリッジがあるんです。あれを利用しようかといったけれども、壁が非常に急峻で、そこに行くまでは困難というよりは危険だね。でそれは使えないという話で、そのときはそのまま雪洞を掘って‥‥。

編集　棒小屋沢の方は。

小林　棒小屋は一応見て回ったけれども、この沢は出合い間近にきてもすごく悪いんです。おそらく困難でしょう。

岩田　二人ではね。三人だと両端をびちっと張ってザイルをうまく使えば、ある程度危険なところというか、困難なこともできますけれども、二人だと片っ方が出ていくと片っ方の支点しかないから、非常に制約される。それで**一四日**の日は寝ちゃったわけです。**一五日**の日は朝起きたら、流れるような豪雨なんです。

編集　雨でだいぶ増水しましたか。

岩田　増水して、その頼みのスノーブリッジが流されちゃったんですよ。

小林　最初から使えるとは思っていませんでしたけれどもね。

編集　それでいよいよ十字峡に取り組んだんですね。

岩田　十時から一時ごろまで、小降りになったから、その間を利用して何か橋になるものはないかと探したんです。そうしたら、うまいことにちょうど川岸に適当な松の木が生えているんです。「こいつだ」とばかり、その木をノコギリで切り始めたんです。

編集　松の木というのは行く前からわかっていたんですか。

岩田　わかっていません。

編集　利用しようという気持はなかったんですね。

岩田　そうです。しかし雪洞を掘るためののこぎりだけれども、木を切るのにいいだろうと持っていったんです。幾らかでもそれを考慮して‥‥。

編集　結局橋をかける作業に二日間費しちゃったわけですね。

岩田　その日の三時間と**一六日**の五時間くらいですね。

編集　今から見てそのときの心理状態としてどうですか、見通しというのは。

小林　悲観的な材料は何もそろっていなかったですね。僕はそうなってくると割合普段している仕事とか、過去にやっていた仕事というものが、何か山というのに役に立つので、僕の場合は不安はなかった。前に木を切るというほどの商売じゃなかったけれども、ある程度関係していたような商売だったから、そういうことに対してはあまり不安はなかったですね。

編集　不安がないということは、木を切れば自然に向こうにかかって、あとは渡ればいいという状態だったんですね。

小林　そうです。僕は山に行くようになって十年近くなりますけど、過去にもどこかで小枝を落として簡単な橋を作って渡ったようなことがありますから、ただ水というだけで、流れとか水深とかは問題じゃないと思っていたから、割合渡れるという気があったんですね。

編集　岩田さんの方はどうですか。

岩田　私の方は橋のないことがわかっていたし、自分はものすごく仲間の間でものんき者の方じゃないかと思うんです。去年も三〇日間二人で出かけて何でもなかった。そんな状態だったから、私は何ともなかったですね。

編集　結局**一七日**に橋をかけて向こうに渡ったわけですね。その間のことを少し話してくれませんか。

岩田　何しろ倒そうとする松がかかえきれないような木なんですよ。その木の幾らか自分たちの切りやすいところは、その前の日に切ったんですけれども、次の日は切れなくなったから、二人の全知全能を傾けて、まずロックハーケンを打ち込んだんです。それをピンにして、片っ方は壁だから、山側にいて自分の手前の方は切れるけれども、反対のところと壁に面したところは切れない。小林君がハーケンを打ち込んで、あぶみを作ってそれに乗っかって切ってみたりしたんだけれども、一かかえもある木だから、僕らの長さ三八㌢、幅が五、六㌢程度のノコギリでは、芯と向こう側がどうしても切れないんですよ。

小林　切っていくうちにだんだんノコが入らなくなってくる。そういうところに逆にアイスハーケンを楔に使っていくんです。

岩田　二時ごろ、半ばあきらめかけたんです。それでも枝の方は切りはらってハーケンと縄を利用して、隣りの木にたなを作って初めて向こう側が満足に切れるようになった。それで切りましたけど、三時ごろになると――その日は降雪ですけれども、一日吹雪いて、視界もそれほどきかないし、いやになっちゃってというか、彼、雪洞を整備しに帰っちゃったんですよ。僕一人が残されちゃって、ここを渡らなければと思うと、そのときはだいぶ悲観的だったんです。それでも縦にナタ目を入れながら削って、自分一人で上からか

まわず何がなんでもと思いながらやっていたら、ミリミリと二、三度音がして、倒れたんです。そうしたら小林が大丈夫かというわけで飛び出した。それで喜んで握手‥‥。

「天は我に味方せず」

編集　それでうまくかかったんですか。

小林　ところがかからなかったんです。枝や何かがじゃまして。川に対してほとんど平行して倒れたんです。

編集　とんと予想もしていない倒れ方をしたわけですね。

小林　その辺が傑作といえば傑作ですがね。

岩田　とにかく川のほぼ中央に木が倒れたんですが、その先に三〇㌢平方ぐらいの石がその少し先に顔を出していたんです。

小林　ですからこちら岸からは枝伝いにまず木の幹に渡って、そこからその石まで木の枝をかけたんです。

編集　その木の安定はよかったですか。

小林　枝が下に広く出たような状態になっていましたから、横ぶれはなかったですね。

岩田　石にかけた枝は一升ビンぐらいの太さだったんですが、それを大木の上に乗ったままで工作するのが大へんなんです。そういう点、信ちゃんは身軽だしうまいんですよ。

小林　枝を切る場所に行くためには、ある程度、岩壁？　の技術もいるんじゃないかな。

編集　石から先はどうなったんです。

小林　剣側まではわずか二、三㍍しかなかったのですが、雪庇が張り出してるもんですから、垂直に近いようなハシゴをかけなくちゃあいけないんです。

岩田　ハシゴは四段なのですが、例の軽量化で、余分なものは一切持たなかったんです。ですからヒモ一本にしても、ワカンとかザックのヒモを外して使ったんですが、それだけに撤収の方法もいろいろ考えました。

小林　全部外していかないことには、それこそヒモなしですからね。

岩田　結局、全部を剣側にはこんでから、またハシゴの下までおりて、下の方からハシゴのケタを外し外し登ったわけなんです。

編集　これで最難関と思われる渡河が終わったわけですが、**一七日**迄そこに‥‥。

岩田　**一五日**が雨、一六、一七と雪が続いたもんですから川岸からちょっと登った台地に雪洞を掘って寝ちゃったんですが、灌木が出たりしてあまり快適な一夜とはいえませんでしたね。

編集　十字峡に結局五晩寝たわけなんでしょう？　冠さんの「十字峡の一夜」とかいう文章がありますけど、ああいう感じはなかったですか。

岩田　雪洞に入っちゃうと、川音なんか聞こえないんです。それに雪のときは外と遮断してしまうと積極的に注意しない限り、外の音とか天気とかは聞こえもしなければ見られもしません。

小林　要するに普通の冬山と同じじゃあないかな。

岩田　帰ってきてから、よく人に聞かれるんですが、その晩は乾盃もしなけりゃあ、特別なゴチソウを食べもしなかったんです。食料表をみていただけばわかりますが、とにかく極度の軽量化で、ラーメン、乾燥玉ネギとかベニーポッテ、ペミカン、ルー、ポタージュといったもののローテーションではどうしょうもないんですね。

一日で五〇メートルの登高

編集　さて、ここから岩道尾根を上がるわけですけれども、初登攀ということになるのですか。

岩田　僕らはそうじゃないかと思っているんです。

小林　おそらくやったとしますと、京大山岳部が向こうからおりてきて上がるというような方法しかなかったんじゃないですかね、やるとすれば積雪期に。夏場はやぶでほとんどできないと思うんです。

岩田　五月ごろの残雪期を利用するほかにないと思うんです。一月には気象条件でどうしても困難だと思うんです。

編集　また行動の方に話題をかえますが、結局尾根の取っつきからジャンクションまで停滞を入れて五日かかっているわけですね。

岩田　停滞一日、行動四日。

編集　ジャンクションまでにこれだけの日数を費すということは、相当悪いといえるのでしょうが、天候も悪かったし、未知のルートというので、かなり不安だったのでないですか。

小林　牛首尾根からプリズムで見たときは、ものすごく悪いとは予想したんです。でも、迷うということは考えませんね。

岩田　黒部の渡河に四日もかかるとは予想もしていなかった。せいぜい二日くらいだと思っていましたし、それに今度はガンドウ尾根が意外に悪い。自分たちの想像以上に困難だから、**一九日**は何とか過ぎて、**二〇日**というと核心部に入って尾根自体に行けないんですよ。キノコ雪の相当困難なところがあって、しようがなくて小林が経験豊かなルートファインディングで、剣沢側に一本懸垂で六〇㍍おりて、岩峰はキノコ雪がまとって、直登不能なようなところを乗っ越して、それを何とかごまかしても、おりるときには何の支点もなく、事実稜線通しは行けなかったという状態です。**二一日**は停滞で**二〇日**の日がそれを乗っ越すのに三時間半、**二三日**はまた別のピークで四時間半かかったわけです。

編集　高度差にしてどれくらいですか。

岩田　**一九日**泊ったところが一五〇〇㍍地点くらいだと思うんです。次の**二〇日**は一六〇〇㍍地点、高度差で一〇〇㍍、距離にしてもほんのちょっとです。直線距離でその日は四、五〇〇㍍くらいじゃないですか。**二三日**は四〇㍍懸垂を二回と、それから一五〇くらい上がった。それに四時間かかって、それも六〇度近い。懸垂でおりるような斜面で、なだれが起きたあとなのですので、すごくクラストしているのでアイゼンで歩いた。高度の関係で松が生えていたから、雪がさらさらと落っこってくる。いやな気持です。それで**二二日**は四時間かかって一六五〇㍍地点に達して、高度は五〇メートルしか稼げなかった。**二〇日**、**二二日**は雪が降って視界はきかないけれども、**二三日**になると、前の日とその前の日の雪洞がすぐ見えるんです。

編集　その辺で日にちが自分たちの計算よりだいぶ狂ってきた。冬山をやっていらっしゃる方々ですから、そう大きなあせりはないと思うけれども、やはり一五日というきめがあったわけですよね。黒部を渡る前は逃げ道を一応考えていたけれども、そこから先は結局逃げ道はないわけですね。梯子はこわしてきちゃったし、どうするつもりだったんですか。やはり日にちが幾らかかっても‥‥。

岩田　要するに食い延ばしていた。それが**二三日**に天気が久しぶりによかったんです。そうすると目の下に仙人ダムが見える、おやっと思うとトロッコが動くのが眼下に見えるんです。とても人くさいんですね。僕らそんな心配していなかったけれども、もし何だったら、あそこに逃げ込もうというような‥‥。

編集　ガンドウ尾根の稜線まで達する間の問題といったら‥‥。

岩田　稜線にとりつくまでの傾斜が四五度以上もあるんです。急傾斜だから胸近くまでラッセルがあるのは当然なんですが、なにしろ二人でしょう。だから荷物を置きまして、一人が念のためにザイルをつけて、四〇㍍、テトロン編みザイルでいっぱいまで登るわけです。今度は相棒を引き揚げて、自分は荷物を置いたところに戻ってきて、また追いつく。この間に休んでいたのが四〇㍍いっぱい上がる‥‥。

編集　まるでしゃくとり虫ですね‥‥。

さてと、池ノ平山からはすでに通ったルートであって、剣から早月尾根を下る間は、不安な個所はなかったですか、小窓王周辺あたりは‥‥。

岩田　そのときは困難なルートもトレースしちゃいましたから、それほどの‥‥。でも小林が調子をくず

しましたし、**二三日**ですか、仙人近くでピッケルを折っちゃったんですよ。それで応急処理をして、その次の日も調子が悪いというので、池ノ平までずっとラッセルをやったんで、**二四日**に小窓の尾根まで行ったけれども、そのときちょうど一時ごろ、急にガスってまたわからなくなっちゃった。小窓尾根は一応記録や何かでは悪いんですよ。去年通っているけれども、ちょっと霧の状態が不安だから、慎重を期してここで**二四日**は泊まっちゃったんです。

編集　小窓王から、早月尾根を通ってバンバ島までどれくらいかかっていますか。

小林　バンバ島着が六時半です。

岩田　出たのが五時半ですから、一三時間くらいのものですね。

編集　積雪期にしてはずいぶん早い！

小林　ええ。でもだいぶ荷物も軽くなっていたし‥‥。

編集　**二六日**、入山以来ほぼ半月ですね。そのときの気持はどうですか。

小林　そういうことが過去にも何回かあったせいか、一番感激したのは黒部を横断したとき、剣の頂上以上にそのときの方が何か感激しました。渡ってしまえば何とかなるという気持もありましたからね。バンバ島に着いたときは、正直いって何といったらいいかな、僕ら比較的ぴしっぴしっと会自体がしているもんですから、やれ着いたという気持より先に、連絡しなければならないというような気持で、安心感というのはもっとあとですね。

岩田　電報を次の日打った、そのあとですね。感激といえば、下りのバンバ島近くになって、夕日が日本海の方に沈む、二人のんびりザックを雪面にもたせて、たわいもない話をしているのが印象深かったくらいで、着いたときはそれぞれ飯の用意だ、東京の連絡はという調子でね。

編集　東京の方は心配して‥‥。

小林　電報があと半日おくれれば出た。そんな状態にしていたらしいですね。

編集　それでは最後に、このルートを踏破してみて、近い将来に、棒小屋沢、剣沢を結んだルートとか、あるいは別山の壁といった見通しというのはどうですか。

岩田　剣の大滝にしても、現在京大の手で解明されつつありますから、一番早く開拓されると思いますね。早ければ五月、あるいは七月ごろには。ところが、この大滝は、冠先生の三段説のほかにも二段説、それに京大が今主張している四段説など、真相がはっきりつかめていないんです。

小林　まだ何段かわからない滝があるというのは一つの魅力ですが、あの近辺はまだまだということなんでしょうね。ですけど、棒小屋沢に比べて、少ないながら資料もあるし、現に京大が入っていることなんかを考えると、大滝を中心として剣沢が一番早く手がつけられるでしょうね。

編集　棒小屋沢の方はどうでしょう。

岩田　あそこは下の方が悪いというのが定説になっていますし、事実おくれるんじゃあありませんか。

小林　黒部のダム工事が終わって遊歩道ができ、アプローチが短くなって人がたくさん入るようになれば別ですがね。

岩田　それより黒部別山の岩壁が魅力ですね。優に五、六〇〇㍍の壁がいくらでもありますからね。

小林　それも遊歩道が簡単に利用できるようになればの話ですがね。

岩田　でも、その時代は遠からずくるでしょうね。

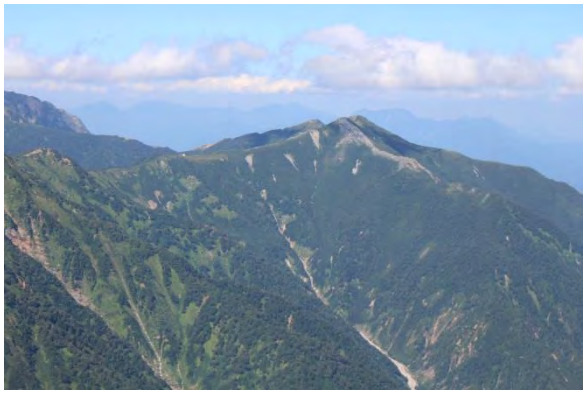
編集　どうもありがとうございました。

後立山南部地域の登山史年表

※No.1の前、1889（明治22）年9月9-18日の登山に関して、報告掲載の文献を資料2（白馬岳周辺登山史）ですでに掲載しているため、資料3では収録を割愛した。同様に、No.1の前、1911（明治44）年8月3-18日の登山、No.5と6の間、1925（大正14）年4月14日の登山に関しても、報告掲載の文献を資料1（鹿島槍ヶ岳登山史）ですでに掲載しているため、資料3では収録を割愛した。

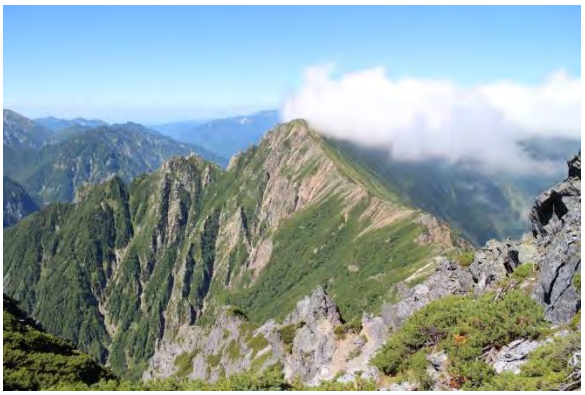
No.	登山年月日	登山内容（登山史上の事象・出来事）	報告者	報告掲載の文献
–	1889（明治22）年 9月9-18日	北アルプス北部踏査の端緒となる山行	大塚専一	「信飛越山間旅行談」『日本登山記録大成』第11巻 白馬・後立山Ⅰ（同朋舎出版、1983年）〔初出『地学雑誌』第2集19・20号（地学会、1890年）〕
–	1911（明治44）年 8月3-18日	種池～鹿島槍ヶ岳～烏帽子岳～槍ヶ岳縦走	榎谷徹蔵	「後立山山脈 峰伝いの記」『山岳』第7年第2号（日本山岳会事務所、1912年） ほか
1	1913（大正2）年 7月27日-8月4日	大沢～針ノ木峠～蓮華岳往復～針ノ木岳～新越乗越～爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳～五龍岳～大黒岳縦走～四ツ屋～白馬岳往復	百瀬慎太郎	「後立山連峰逆走記」『山を想へば』（百瀬慎太郎遺稿集刊行会、1962年） ほか
2	1915（大正4）年 7月14-22日	針ノ木峠～烏帽子岳～槍ヶ岳縦走（第2記録）	一戸直蔵・河東碧梧桐・長谷川如是閑	『日本アルプス縦断記』（大鐙閣、1917年）
3	1920（大正9）年 7月11-16日	冷池～鹿島槍ヶ岳往復～爺ヶ岳～針ノ木峠～蓮華岳往復～大沢（女性による後立山連峰初縦走）	竹内ヒサ	「鹿島槍から針ノ木へ」岡田汪編著『夫婦登山ことはじめ』（岡田汪、2004年）
4	1923（大正12）年 7月29日-8月7日	針ノ木峠～平～五色ヶ原～薬師岳～双六岳～笠ヶ岳縦走（同コースでの女性による初踏破）（竹内ヒサ・岡田李）	竹内鳳次郎	「針ノ木峠、薬師岳、笠ヶ岳」岡田汪編著『夫婦登山ことはじめ』（岡田汪、2004年）
5	1925（大正14）年 1月4日	針ノ木岳積雪期初登頂	小笠原勇八 （早大山岳部）	「一月の針ノ木岳スキー登山」『日本登山記録大成』第11巻 白馬・後立山Ⅰ（同朋舎出版、1983年）〔初出『リュックサック』第4号（早稲田大学体育会山岳部、1925年）〕
–	1925（大正14）年 4月14日	爺ヶ岳積雪期初登頂	石原巌 （一高旅行部）	「雪の鹿島槍ヶ岳」『一高旅行部五十年』（第一高等学校旅行部縦の会、1968年）
6	1925（大正14）年 12月29日	蓮華岳積雪期初登頂	四谷龍胤 （早大山岳部）	「厳冬の大沢生活」『日本登山記録大成』第12巻 白馬・後立山Ⅱ（同朋舎出版、1983年）〔初出『リュックサック』第5号（早稲田大学体育会山岳部、1927年）〕
7	1926（大正15）年 1月8日	スバリ岳積雪期初登頂		
8	1927（昭和2）年 1月6日	鳴沢岳積雪期初登頂	森田勝彦 （早大山岳部）	「第三回大沢小舎生活」『日本登山記録大成』第12巻 白馬・後立山Ⅱ（同朋舎出版、1983年）〔初出『リュックサック』第6号（早稲田大学体育会山岳部、1928年）〕
9	1930（昭和5）年 7月16日	スバリ岳西面中尾根初登攀	藤田喜衛 （京都帝大旅行部）	「赤沢、スバリ西尾根」『日本登山記録大成』第12巻 白馬・後立山Ⅱ（同朋舎出版、1983年）〔初出『関西学生山岳連盟報告』第2号（関西学生山岳連盟事務所、1931年）〕
10	1930（昭和5）年 7月21日	スバリ岳西尾根主稜初登攀		
11	1937（昭和12）年 1月3日	スバリ岳西尾根主稜上部積雪期初下降・積雪期初登攀	磯野新一郎 （立教大山岳部）	「厳冬のスバリ岳西尾根と赤沢岳西尾根」『日本登山記録大成』第13巻 白馬・後立山Ⅲ（同朋舎出版、1983年）〔初出『立教大学山岳部部報』第8号（立教大学学友会山岳部、1937年）〕
12	1937（昭和12）年 1月4日	赤沢岳西尾根上部積雪期初下降・積雪期初登攀	須賀幹夫 （立教大山岳部）	
13	1958（昭和33）年 8月5日	スバリ岳西面中尾根奥壁初登攀	仲条竹治 （山学同志会）	「スバリ岳の西面」『山と溪谷』第232号（山と溪谷社、1958年）
14	1958（昭和33）年 8月	赤沢岳西尾根2峰南稜第1グラート初登攀（同時期に第2グラートも初登攀か）	登嶺会	「赤沢岳・スバリ岳・針ノ木岳周辺」『岳人』第260号（中日新聞東京本社、1969年）
15	1960（昭和35）年 3月14～17日	針ノ木岳西尾根登攀（初登攀か）	酒井尚平 （京大山岳部）	「黒部中流合宿」『日本登山記録大成』第15巻 薬師岳・黒部川（同朋舎出版、1983年）〔初出『京都大学山岳部報告』第8号（京都大学山岳部）〕
16	1960（昭和35）年 3月14・15日	赤沢岳西尾根登攀（末端部からの初登攀）	小浜維人 （京大山岳部）	
17	1960（昭和35）年 3月15～17日	スバリ岳西尾根登攀（末端部からの初登攀）	大森義次 （京大山岳部）	
18	1961（昭和36）年 4月29日-5月1日	赤沢岳西尾根3峰（猫ノ耳）ダイレクト尾根（オリジナルルート）登攀	石井順一 （フェルス登攀会）	「赤沢岳猫ノ耳第二峯直登尾根（仮称）」『岳人』第160号（東京中日新聞、1961年）

後立山南部地域の山岳環境写真

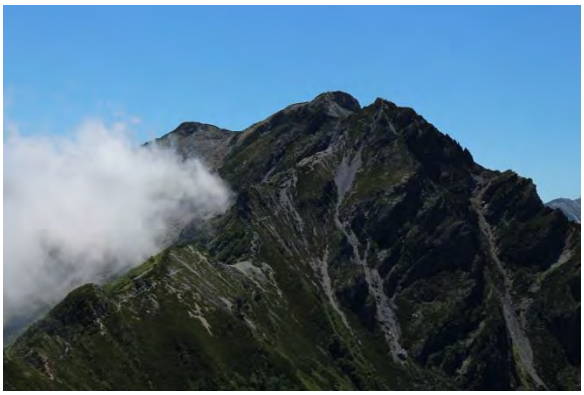


爺ヶ岳（針ノ木岳山頂から）

鳴沢岳（新越乗越から鳴沢岳へ至る登山道から）



赤沢岳（スバリ岳山頂から）



スバリ岳（赤沢岳山頂から）

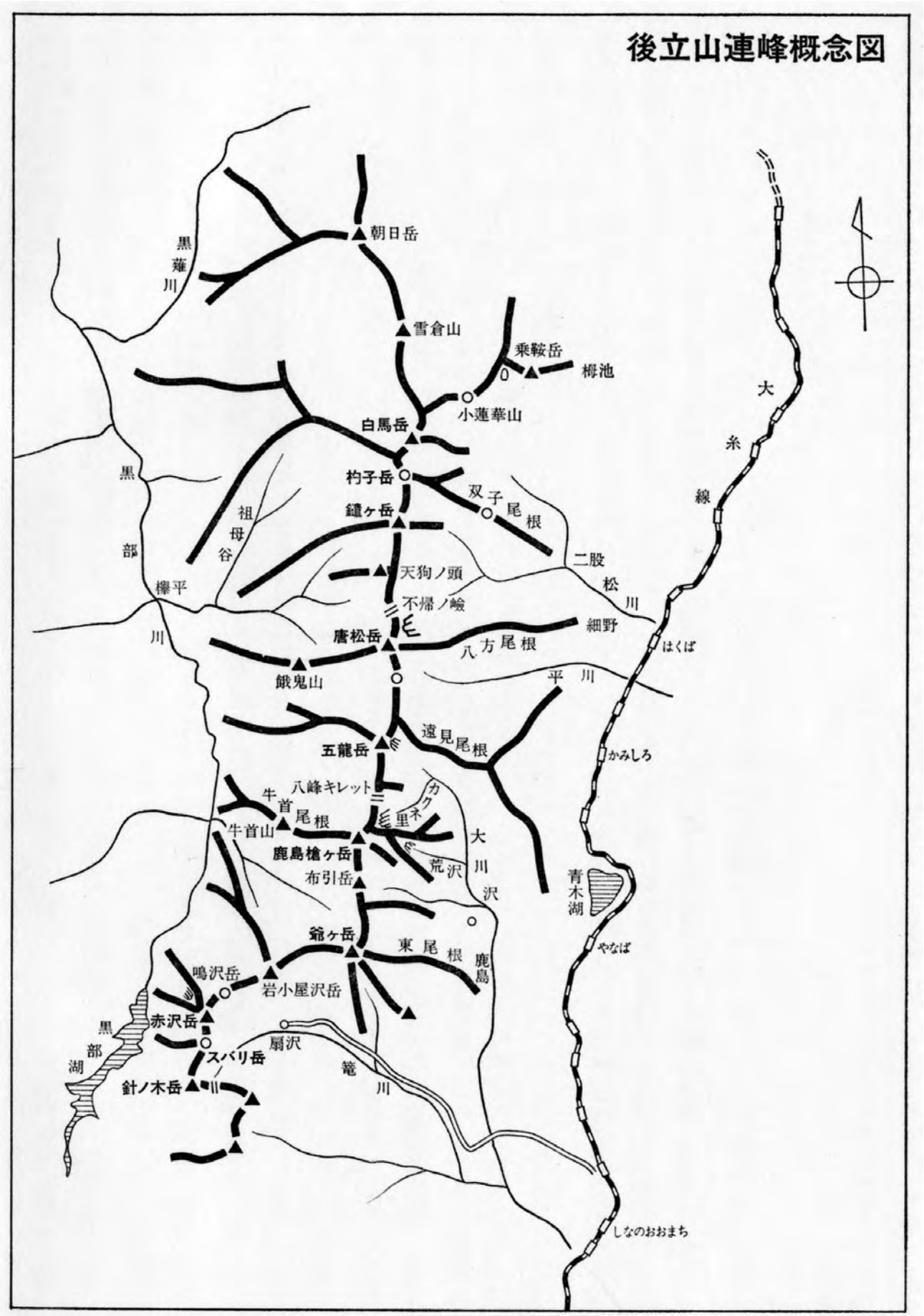
針ノ木岳（スバリ岳山頂から）

針ノ木峠（スバリ岳から針ノ木岳へ至る登山道から）

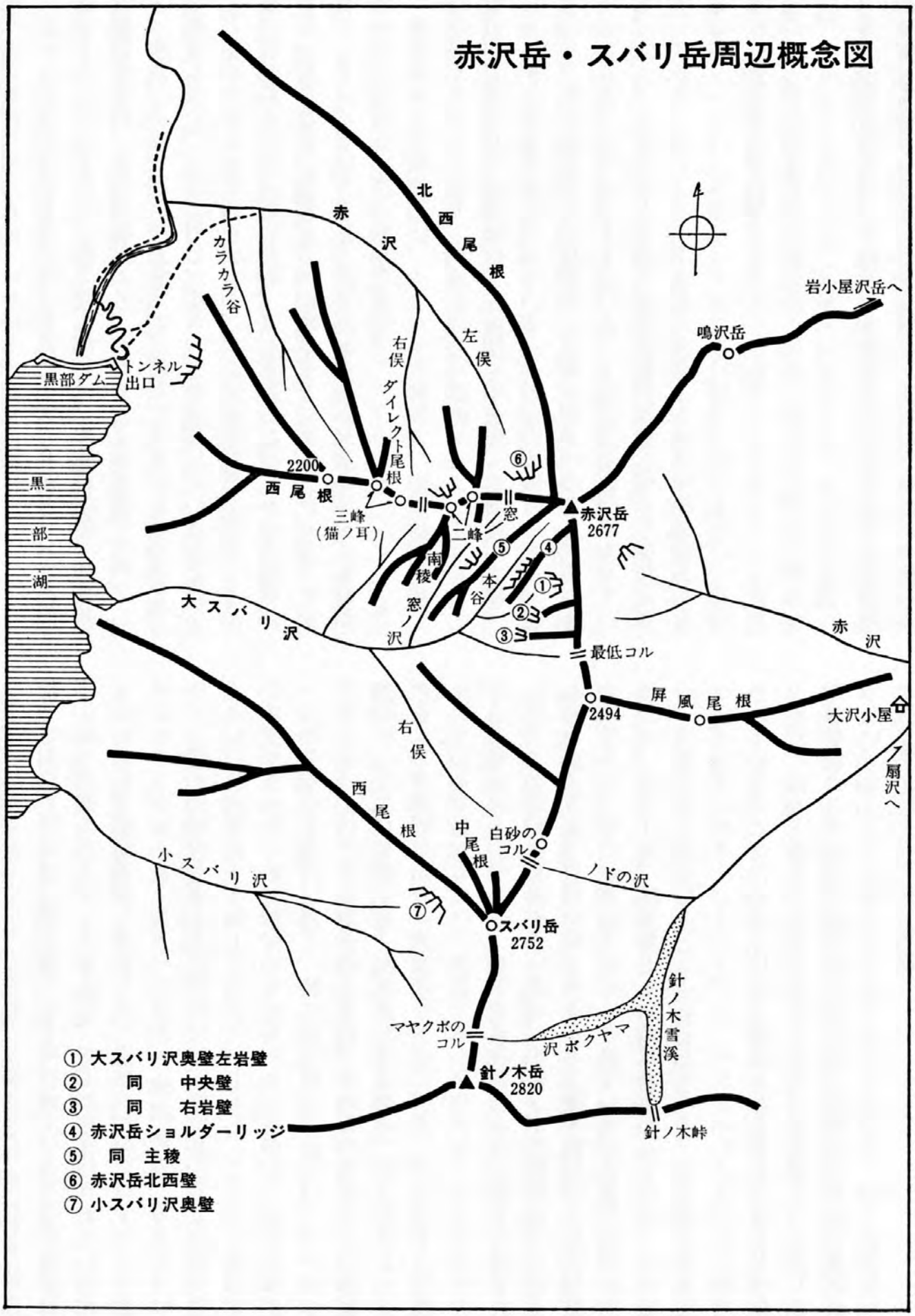
蓮華岳（北葛岳山頂から）

船窪岳（左：七倉岳山頂から　右：針ノ木峠から）

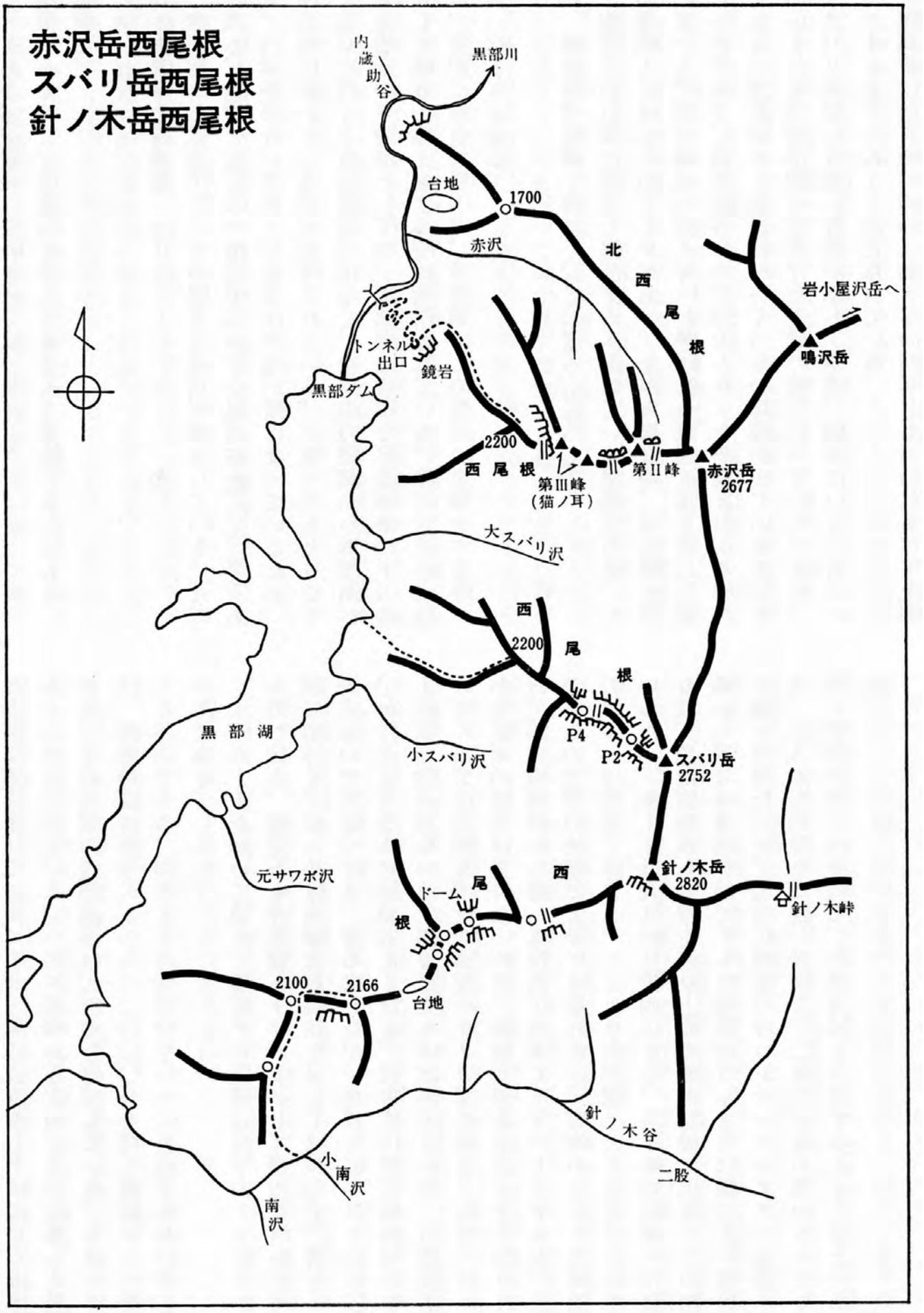
後立山南部地域の山岳概念図



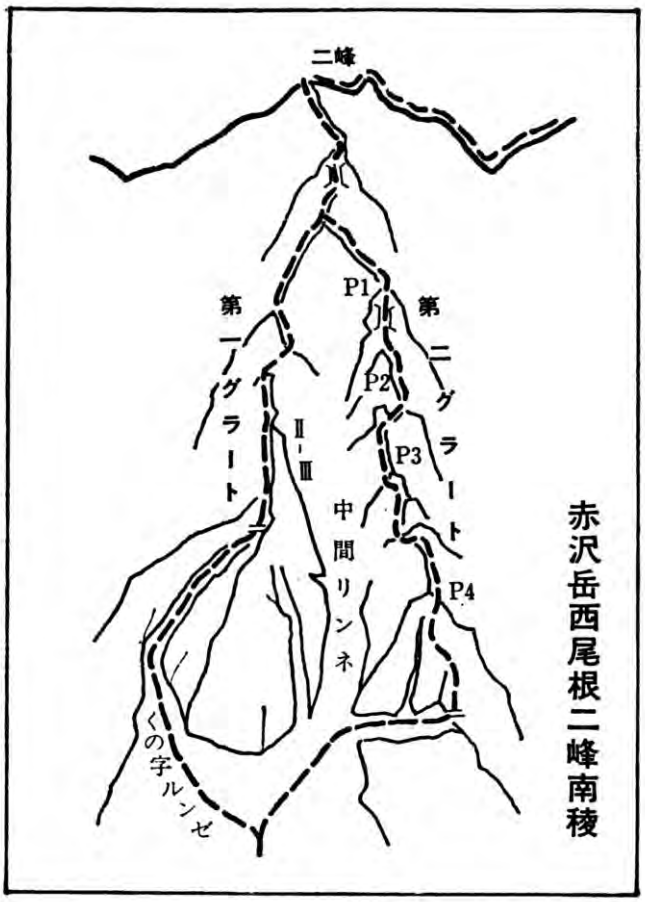
出典：『日本登山大系』第 6 巻 後立山･明星山･海谷･戸隠（白水社、1981）p.18「後立山連峰概念図」



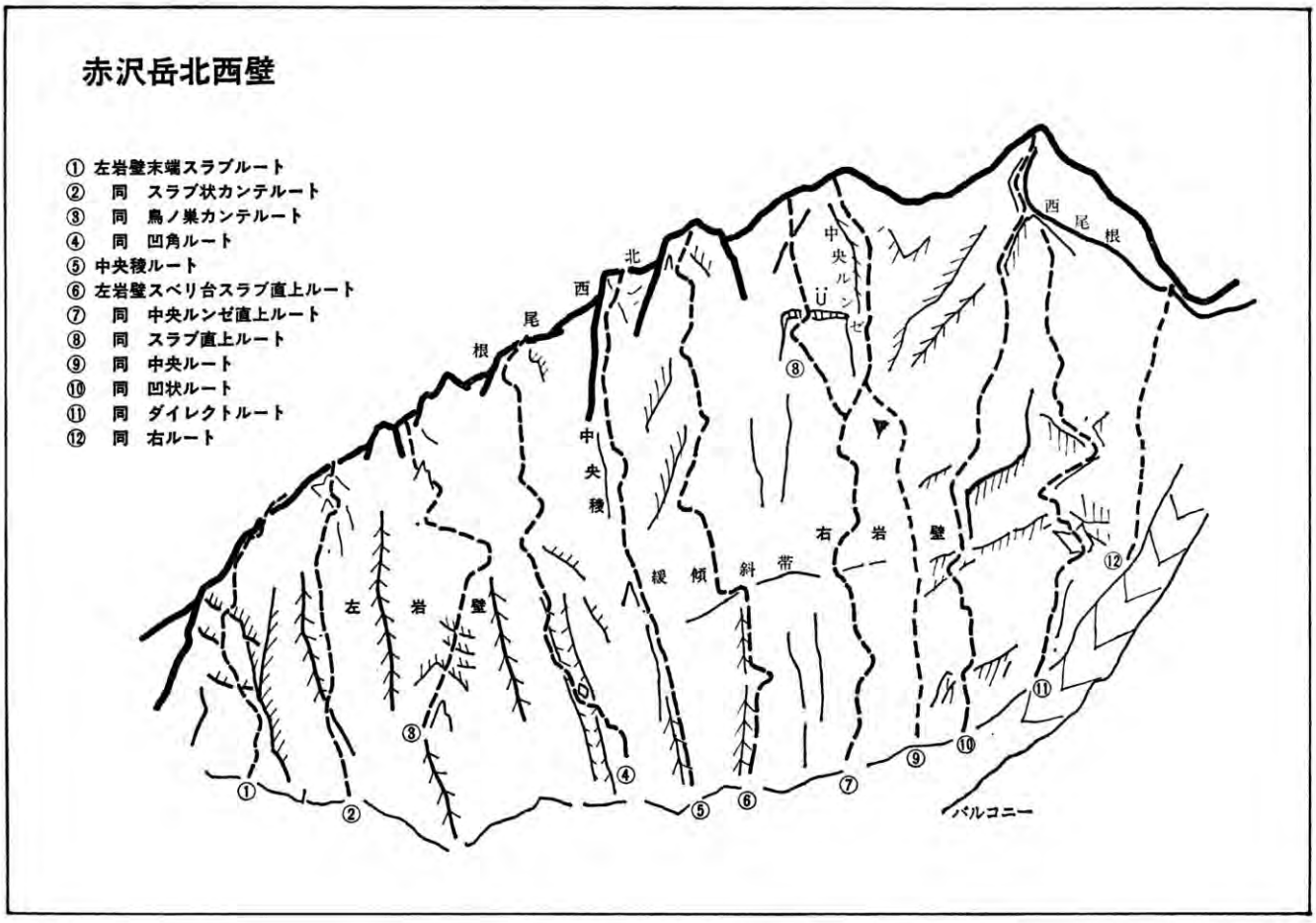
出典：『日本登山大系』第 6 巻 後立山･明星山･海谷･戸隠（白水社、1981）p.99「赤沢岳・スバリ岳周辺概念図」



出典：『日本登山大系』第 6 巻 後立山･明星山･海谷･戸隠（白水社、1981）p.136
「赤沢岳西尾根／スバリ岳西尾根／針ノ木岳西尾根」



出典：『日本登山大系』第 6 巻 後立山･明星山･海谷･戸隠
（白水社、1981）p.111「赤沢岳西尾根二峰南稜」



出典：『日本登山大系』第 6 巻 後立山･明星山･海谷･戸隠（白水社、1981）p.113 「赤沢岳北西壁」

1　百瀬慎太郎　「後立山連峰逆走記」『山を想へば』

1962（昭和 37）年 8 月 15 日刊　百瀬慎太郎遺稿集刊行会発行

要　約

1913（大正 2）年 7 月 27 日～8 月 4 日の記録。

メンバーは、百瀬慎太郎、秦四郎、勝野玉作（大町の案内人）、伝刀林蔵（同）、伊藤菊十（同）。鹿島槍ヶ岳まではアレキサンドル・グーセフと荻御常太郎のほか、そのポーター2 人も同行。

行程は、大沢～針ノ木峠～蓮華岳往復～針ノ木岳～新越乗越～爺ヶ岳～鹿島槍ヶ岳～五龍岳～大黒岳～四ツ屋～白馬岳往復。

この記録は「未完」となっており、種池を過ぎて爺ヶ岳南峰山頂へ向かう手前にある線状凹地に至った 7 月 30 日までの様子が記されている。

※百瀬慎太郎は信濃大町の旅館・對山館三代目主人、秦四郎は大町中学校教師（旧制大町中学校は、現在の長野県大町岳陽高等学校の前身校）。

※アレキサンドル・グーセフはロシア人商人。

冒頭に山を賛美す。

山国と呼ばれる信州の、然かも此の大山脈の膝下に生れて、二十余年の生を私は送った。

一枚の障子を開けさへすれば、一歩門を出さへすれば、威圧する様に迫る北アルプスの連峰は物心の付く頃から、常に私をチャームして、私の全心を奪ってゐた。春が来て、薤の菜の花が黄色くなっても、彼は容易に雪の衣を脱がうとはしない。此の時山は遠い遠い蒼空の奥に描き出された幻想の様であった。夏が来て此の小さな高原の町を囲む野や丘が緑に変った頃、彼は深い紫色に輝いて、全身に溢れる血を制へ切れない様に見えた。とびついて甘えたい様な懐しさであった。漸く秋になって野の川に水が涸れて木の葉が散る頃、彼は退紅色の衣に着変へて、丁度凋落する人間の姿を見つめる神のおももちに悲しい色を見せた。それは私に深い哀傷を覚えさせた。到頭冬が来た。彼は一斉に白い雪の衣をまとって、其の余瀝を裾の高原に撒きちらした。そして真昼の太陽や、蒼白い月光に冷酷な表情を見せた。此の時山は私に無限の恐怖と崇高の念を与へた。山は私の厳格なる父であった。慈愛の母であった。ある時は恩師でもあり、ある時は恋人でもあった。万有であり、神秘であり、無限であった。

あゝ、無窮に偉大なる山の人格よ。

尠くとも私は、大自然の玉座の前にひれ伏して執実な祈禱を捧げ得るだけの真心と信仰を有ってゐる。さり乍ら感ずるまゝに発表する事が出来ない事が残念である。美しい山の讃歌が歌ひたい。

我が安曇野の西空に信越の境堺を高聳する一帯の雪嶺は、日本北アルプス主脈の一なる後立連峰の颯爽たる雄姿に外ならない。仰げば夕陽に美はしい蓮華岳の先端から北へ北へ馳りゆく山波は、奥ふかく皆もゝ色に屏風の連嶂を画き、爺岳の温容を作り、鹿島鎗の豪宕な姿を彫み乍ら、暗雲に閉され勝ちな怪塔五竜岳に続いて、果てはピラミッド型の鑓に消え入る。あの山脈を逆走したらどんなに愉快だらう。あの濃青な空と山とのアウトラインに沿って、偃松から岩に、岩から草野へと辿りゆく自分を想ふと、もううつゝなくひたすらに山が恋しい。此の連峰の鹿島鎗、五竜間の国境山稜は幅二間ばかりの割目がある為、リッヂを伝ふ事は出来ないといふ所で、八峰の難場である。八峰縦走の記録は白馬岳方面からのもののみで、未だ嘗て我が大町方面から逆走した者はない。是非一度此の八峰を在来の記録に習はずに南から北へ渡り了へ、尚白馬峰頭にまで縦走を続けようと私は計画したのであった。それ故にわざわざ逆走とこそは名付けたのである。私の持っている地図はたゞ日本山岳会製の日本北アルプス一部、臆測図一枚のみ。之に因って鎗以北は知るよしもない。

さて案内者はといふと、猪狩や駒草取を業とする野口村辺の山人達にも此の八峰を渡ったものは無い位、大町の強力は勿論鹿島槍以北は盲である。案内者も頼るべき地図も持たず、此の不要意の中に早くも出発すべき日は定められて仕舞った。

同行者は大町中学校教師秦四郎氏、人夫は伝刀林蔵、勝野玉作、伊藤菊十の三名、尚我々一行の外に、露国人アレキサンドル・グーセフ及其従者荻御常太郎、両氏は人夫二名を連れて鹿島槍まで同行を申込んだ。

七月廿七日、連日連峰を包んで低くたれたまゝ、我々の気をもませた雲も珍しく晴れて、見あげる大空は紺青に輝いてゐる。

総勢九人、午前八時大町を発して愈々後立逆走の途にのぼる。青田の畔路には昨夜の露も干き切って、新しい草鞋から軽い砂塵があがる。田の草取りのすげ傘が真青の稲田の中に白く見える。「此度こそ百日晴れだんね。」と玉作が呼ぶ。「俺が山へのぼるといふと必度(きつと)こんな晴れるんだから。」自然にこんな事も言ひたくなって、今夜はもう大沢泊りと定まってゐるのだからといふので、至極ゆっくりしたもの。路ばたの桑畑から桑摘の女たちが、異様な一行の姿を見送ってゐる。河原の松原を通って長い鹿島川の板橋を渡り終ると、大出の部落に達する。此処から高瀬川入りを左手に見て、路は右方の蓮華と爺の裾に囲まれた籠川谷に向ふ。暫く道傍の廃堂の縁に腰をかけてゐる間、人夫等は朝小昼だと言って大きな飯桶(めんつ)を拡げる。大出をではづれると上ッ原といふ林の中の爪先のぼりの路に入る。肌の白い白樺の木立が多い。

「ヴィリオザ、コレワタシトモダチ、ワタシクニタクサンアリマス。」とアレキサンドル君は喜ぶ。山の鼻を右に曲ると、左手に真白い籠川の河原を見乍ら路は右手の広い裾野の草原に続く。日向山という野口村辺の草刈場であって、穂ののぞき始めた苅芽も、快くふくらむ桔梗の苞も、松虫草の紫も、女郎花の黄も、此の日ざかりをなく夏虫の声さへも、今日ゆく路には限りなくうれしいものであった。左は蓮華の足と、右は爺岳の裾とにおし迫られて、籠川の谷は進むにつれて次第に狭くなってゆく。振りかへると、いつの間にか我が来し路は山の鼻の扉に閉ざされて、もう一行は大山の捕虜となって仕舞った。谷の奥、空のあなたに、岩小舎沢岳、鳴沢岳の連嶂が夢の様に浮んでいる。瀬の音がサァーッ、サァーッと谷一ぱいに響き渡っては、又遠くなる。何処かで駒鳥が啼く。私はたゞ無性に楽しくなって来た。山の空気、山の空気、見上げる空には先刻までとんでゐた白い雲のちぎれも姿をかくして、愈々濃青を増すばかりである。立どまっては汗を拭ふ度、昼近い夏の日が遠慮なく照りつける。此の暑さには路傍の芝生まで、葉を凋めて息づいてゐる。

日向山の原を通り越すと赤茶けた岩屋に沿って、立派な林道が通じてゐる。右手に峙つ爺岳から一散に飛下る白沢を渡って、岩茸岩の下まで来ると、少し早いけれど水があるからといふので此処で昼飯をすませる。此処から畠山の岩小屋までは十分ばかりの路である。岩小屋から少し草の中路を分けてゆくと、草刈の小屋がある。此の辺一帯を花見と呼んで大町近辺の植林地になってゐて、切り残された大木の根が草原の中の所々にニョキニョキと立ってゐるばかりで、木蔭を求むる事もならぬ。林道は此の辺で途切れて此度は石の上を飛んでゆかねばならない。真白い花崗岩の河原の石に反射する日の光は帽子のひさしではよける事もならず、暑いのとまぶしいのとで汗の流れる事おびたゞしい。急に右手から磊々たる大石をおし出して流れ落つる扇沢を渡ってから、籠川の本流は少しづつ南の方へ迂回してゆく。これまで此谷をゆく登山者の宿った丸石の小屋はもう跡もない。岩小屋沢、鳴沢とすぎてゆく度、左手の蓮華の肩から赤沢岳、スバリ岳を順を追って現はれて来る。そろそろ溪の雪も鮮かに見えだすと秦先生は始めて見る夏の山の雪に思はず快哉を叫ぶのであった。流石に長い夏の日も漸く傾き初めて谷の底は日の陰が消えてゆく。栂や樅の茂り合った前尾根の頭に爺岳の先端があかい夕日をあびてゐる頃、大沢の合流点附近に着いた。此処が今夜の泊場である。直き前方に始まる雪溪からは冷たい夕暮の風を吹き落すので、兎に角テントを張って、人夫は各々焚火をしたり、夕飯の米を磨いだりする用意にかゝった。その間河原に下りて冷たい石に腰をかけ乍ら、静かに暮れてゆく谷あひの黄昏に身をひたしてゐた。(テントの中で見たバロメーターは一六四〇米突(メートル))

二十八日、第一夜の谷間の夢は醒めた。テントからとび出すと今日も亦絶好の晴天らしい。朝霧が風に追はれて、とんでは消えてゆく。今新しい日の光は前面の雪溪に輝き初めたばかり、朝食を終り、用意をとゝ

のへて出発する。七時半。見上げる空につゞく赤沢からスバリとだんだん懐しい山の肌が近づいて来る。相変らず話好きなアレキサンドル君は長い鳶杖をゴトンゴトンと突きながら、「キョウ、テンキタクサンヨロシイ、クモミナミナサヨナラ。」と後に続いて来る。大沢からは間もなく雪渓にかゝる。雪渓は白馬のそれにもおとらない位に雄大だ。両側の山には岳白樺やハンノキが雪におされた体をのめらせて茂ってゐる。おいおい高山という感じが強くなって来る。左手蓮華から落ちる赤石沢や、右手スバリ沢から崩れ落ちる石ころや、風にとばされた枯枝が雪の上に散らばってゐる。

三十度から三十五度位の傾斜で大波の様に谷一ぱいうねって続いてゐる。のぼるにつれて渓流の音はだんだん後へすさって、山面を撫でる風の音にまぢって、かすかに聞えてゐる。時折沢をころげる石の音がカラカラと谷の静かな空気をふるはせる。大沢から二時間ばかり行手は漸次南方に向って、漸く針ノ木岳も峠も見あげられるようになると、右から流れ込むマヤクボの大雪渓と分れて、左手の本谷にかゝる。此の前少しの間、イワカガミやコマノツメの咲いてゐる草野の急斜をよぢて、再び雪渓の登攀を続けるのだ。此度の傾斜は少し急になって、鳶を突込んで頼りながら攀ぢる様な所さへある。秦先生が「青いというよりむしろ黒いネ。」といはれた澄徹した空色は、峰まで続く雪のアウトラインに限られて、此の白とコバルトの際どい対照が何とも言はれず素晴らしい。岩間にほとばしる雪解の水に喉をうるほしてゐた間、いつか先をこしたアレキサンドル君は、早くも峠に辿りついて、偃松の蔭から小さな石をころがし落してゐる。「危い、悪戯者！」と叫ぶと、「ハヤクコチライラッシャイ。」と手を打って興がる。

峠の上に着いたのが十一時十五分、バロメーターは二四八〇米突（メートル）を示してゐた。暑い日は今頭の上から照りつけて、偃松や石楠が偃ってゐるばかりで日蔭のない赤土の峠には休む場所も見つからぬ。兎に角こゝから今度の縦走の軌道に入ったのだ。人夫も背負梯子（しょいこ）をおろしてここで昼飯をしたゝめることにした。水が無いので、雪を解かす為、すげ笠の中には雪が一ぱい運ばれた。西方に突立つ針の木岳（原文ママ）から滑り落ちて蓮華に続く山稜の一窪地としては、此の針ノ木峠の眺望は思ひがけなく闊達である。眩しい真昼の雪渓を登りつめて、急に南方にひらけた日本アルプス中部の壮観には、誰もあっと謂はずには居られない。すぐ目の下に落ち込む迷宮の様な谷は、針ノ木沢に沿って、やがて黒部渓谷に達するもの、一昨年の晩秋初雪の此の峠に立って眺めた荒寥の気も想ひ出される。すぐ目の前に七倉岳不動岳は黝んだ針葉樹に包まれて立ってゐる。其の続きは烏帽子五郎に走って、末は屹然天を摩す大槍にさへぎられてゐる。其の左肩からぬっと窺き出すは穂高の明神岳である。燕、蝶、大天井、常念群峰は槍の王座に従侍してそゝりたつ。左手に赤牛、黒岳は昨年の山行を想起させる。其の向うに美しいカールの雪を見て蜿々と走駆するは薬師岳に外ならぬ。十重二十重の波の様な白雲のあなたに、裾淡にぼかされて浮ぶ美しい芙蓉の姿不二はまさに我が日本の代表者である。秦先生もアレキサンドル君も写真機の組立を忘れはて、たゞ恍惚と眺めてゐる。時々「八ケ岳はあれだ。」とか、「甲斐の日嶺が見える。」とか叫ばれる。山の色、雪の輝き、山皺の落具合、数千年の歴史が大宇宙に画き込んだ劃線は、あるひは高聳し、あるひは低走して黙々の山を現出させてゐる。此の圏内にあらゆる神秘は蔵されてゐるのだ。嘗て烏水氏は、ベンガル峠に立って人世の無常を泣いたバイロンの叫びを、大自然のインスピレーションにうたれた人霊の情哭であるといはれた。ベンガル峠ならぬ針ノ木峠に立って慟哭せではおかぬ。私の心は厳粛な山の洗礼を受けて、全く淀みなくたゞ粛然と襟を正さずには居られない。粛然として涙下るの境地とは此の場合の謂であらうか。

振り返ると国境山脈は、針ノ木岳、小スバリ大スバリ、赤沢、鳴沢、岩小屋沢、扇沢岳、爺と続いて鹿島鎗の豪宕なる容姿は扇沢岳の頭を圧して聳えてゐる。鳴沢岩小屋沢の連峰を岨（さばだ）てゝ長馳する一帯の山脈は日本北アルプス北部の重鎮白馬連山の模湖たるものである。見下す籠川の谷は足もと深く我来し方を語る。「水が出来ました。」と叫ぶ人夫の声に夢から醒めたやうに、ふと気がつくと身は八千尺の峠に拡げかけた弁当の風呂敷を膝にしてゐるのであった。山上のディナーがすむと秦先生と私とは人夫林蔵を伴って蓮華に向った。峠続きを左に伝って偃松や石楠のやぶの中をくゞってゆく事暫し、例に因って切石の河原の様な山の肩を進んでゆく。灰色の岩の間に可憐なコマ草が朱唇をふるわせてゐる。此の辺キバナコマノツメが多い。

後から来ると言ったアレキサンドル君は到頭見えない。

目の前をふさぐピークに引よせられて足を急がせる。漸く辿りついた峰に立つとまだ三角点は向うに見える。また一息、漸く絶頂に立ったのが一時五十分、丁度峠から一時間かゝった。峠では見えなかった劔岳の雄姿は沢山な雪に彩られて、ぬっとばかり針ノ木の横に姿を現はしてゐた。眼下には安曇野が展開されてゐる。見る限り緑のたゞなかを白布の様な高瀬川が南へ南へと流れてゆく。池田、大町、穂高の市街は糸の様な街道に連結されて、僅かに点の様に見える。家にゐると東に仰ぐ千曲山脈一帯もたゞ丘陵の様におしつぶされて善光寺平も一眺である。浅間は紫色にかすんで噴き出す煙の果ては、漠の雲と結びつけられてゐる。飽きぬ眺めにしばらく恍惚としてゐる間に、秦先生はしきりにピントグラスを窺いてゐる。いつの間にか測量台の下の石を枕にいびきをたてゝゐる林蔵をゆり起して山を下る。

峠に下ったのが三時半、待ちあぐんでゐた連中と又一緒になって、今夜の泊地を定めたマヤクボを指して進まねばならなかった。正に四時。峠を西に偃松の根の張りあがった急斜を分けて、リッヂを伝ってゆく。アレキサンドル君「ハイマツタクサンワルイ。」とまたこぼす。針ノ木の絶嶺を極めてもあまり面白くはなし、荷が大きいから北側の急斜が下りにくいといふ人夫の言葉に因って、之は割愛して信州側を絡む事とした。磊々たる石のザクを走り下って、タカネキンポーゲの咲き乱れた草原からマヤクボの沢の急な雲の上を足を踏みしめ踏みしめて斜断すると、スバリからつづくごろごろの岩の尾根に出る。二六四〇米突、此針ノ木、スバリ間のリッヂは少しの窪地もなく、どうも思はしい泊場も見当らぬ。以前に誰かが泊った跡と見えて越中側に大きな石ばかりの斜面に石の畳で石の囲が出来てゐる。みなで岳つばめの巣の様だと笑ふ。

漸くテントは越中側の短い偃松の中にはられて火は風をよけるため信州側で焚かれた。飯の煮える頃夕方の霧がそろそろ足下の黒部の谷から湧き起って、立山、劔の群峰があかい夕映の空を背景に暗くなってゆく。越中沢、中ノ谷、御山沢などの雪がまともに青色に条だって見えた。人夫の中三人ばかり火のそばに油紙をかぶってねると、玉作、菊十の二人がテントの中に一緒にもぐりこむ。夜が更けてゆくと物凄い風がテントをハタハタ揺し初めた。支柱がミキミキと鳴る。毛布の中に頭を埋めて強いて眠らうとするけれど、やっぱり喧しくて喧しくて容易に寝付かれない。それでもいつかうとうとしたかと思ふと、「テントが倒れた。」と秦先生が叫ぶ声に眼を醒まされて見ると、あまり風が強いので到頭吹き倒されて仕舞ったのだ。起きる元気もないので其の儘テントに圧しかぶされてゐると、玉作が「かたらもねえ、ごうたれ風だな。」と呟き乍ら出て行って改めて細引を張ってくれた。

此の夜は一晩中風の音に悩まされて山の夢は途切れがちであった。

廿九日、夜の明け方になってから、グッスリ寝込んで仕舞ったので、揺り起こされた時は朝飯がもう盛られてあった。山の事だから顔も洗はない。そのまゝ落し味噌の汁を啜る。昨夜から雪を解かして炊いてゐるのだ。

今朝起きた時から、昨日針ノ木を絡む時、アイスアックスの先を打ち込んだ足の膝頭がひどくうづいた。ゲートルをつけるにも痛さが堪へられない程だ。之に大いに悲観した。此度の縦走も不成功かと秘かに気はもむものの、皆の前弱音も吹けず、跛をひき乍ら一行の後に続かねばならなかった。出発前針ノ木岳を仰ぎ見た時、絶頂の岩上に二三人の人影が見えた。（後で之は山岳会の関口泰氏等一行と判明した）小スバリ岳も大スバリ岳も、積み立った様な灰黒色の岩山である。その岩かげをあちこちと伝って行くと所々から頭上を圧してぬっと出る岩瘤にともするとゴツンとやりかねまじい。今日から劔岳はいつも左手に我等の行を見守ってゐる。八時半大スバリの絶嶺着、二七五〇米突。暫く展望をほしいまゝにして八時五十五分、山稜を伝って赤沢岳に向ふ。赤沢岳は名の如く山肌は赤褐色に染まってゐてこれは此の連山中で最も歩行が容易である。十一時半赤沢岳嶺着、二七〇〇米突。頂上に三等三角点がある。汗を拭うて立どまると腹は大分北山になってゐるので、三角点の北へ下った一寸窪地で昼食が始まった。弁当箱のまはりに五月蠅く蠅がまとひつく。相変らず水は無い。コップにとった雪に、クリモラと砂糖をまぜて食ってゐると、アレキサンドル君が又真似をし乍ら、「アイスクリームタクサンヨロシイ。」

秦先生は先刻つひに其処で採って来た大きな虫取菫を手帳にはさんで喜んでゐる。

一時半此の辺を発足、そろそろ偃松が行手を邪魔しだして、先に立つ自分はよく迷ひ込むので、此度は玉作を先に立てゝ従ふ。黒部川の白い河床が薬研の様な深谷の底に一部顔を出してゐる。西の方に雄山の雪が美しく輝いてゐる。望遠鏡をのぞくと雄山の社も手にとるやうである。振り返ると、赤沢岳から西黒部の谷に落ちる山稜の峨々たる奇岩は、唐人に画かしたらさぞ大喜びだらうと思はれる態。

赤い土がだんだん黒味勝な岩に移ると、鳴沢岳はもう直きである。絶頂へ攀ぢのぼったのが二時半、偃松と岩が此の山の全容を掩うて農商務省の三角点が見すぼらしく立ってゐる。爺ケ岳と蓮華岳とに区切られて其間から見える大町平には相変らず明るい日が漲って緑野の中に大町の板屋根や街路が白く光って見える。半時間ばかり立尽して此度は偃松の茂り合った急崖を降る。此処はまた難場で有名な所だ。こそっぽい偃松の幹にすがり乍らおづおづ踏み下す足先が一寸滑ると思懸けなく腰のあたりまでスッポリはまり込んで仕舞ふ。其度冷たい偃松の葉がいやといふ程顔をうつと、黄色い花粉が眼つぶしの様にとぶのにむせ返って仕舞ふ。こんな時の用意にと出がけに買って来たポリス式の安手袋には、訳もなく穴があいて指がとび出す。

信濃側は削れたった様な絶壁である。国境測量の時の切りあけも長い年月を経た今日では頼りにもならぬ。時々石楠の花がほんのりと偃松の茂みの中に笑ってゐても、それに気をとめては居られぬ程うるさい路である。

山稜に添って、小刻みのピークを幾つものぼったり下ったりする苦は堪へられぬものゝ、尚執念深く国境の杭に引連られてゆくのだ。大丈夫と思って足をまかせた偃松の幹は思ったよりも弾力が強く、十三貫足らずの痩軀は訳もなくはね返されて、あわてゝすがりつくその格好がおかしいと後の人に笑はれる。何の事はない。一行九人の荒男はいい具合に偃松に嬲られてゐるのだ。此苦戦奮闘は約一時間も懸ったらうか。漸く急な崖を降りつくすと、皆がやにだらけの両手をこすり乍ら、うらめし気に後の方を振返った。左手越中側の山背には風雪に撓められて妙な形をした唐檜が多い。黒部の別山。内蔵之助平の緑野も霧の間から望まれる。内蔵平(原文ママ)は、劒岳の東南麓、内蔵沢(原文ママ)のほとりの深谷に拡がる小高原である。昔内蔵助という落武者が暫く隠れて住まったとか、何時の時代か、何の士かも知りかねる。黒部に流れ込む新越沢と籠川谷に落ちる鳴沢との分水地、越乗越(のつこし)は此処である。

おひゝと霧が立て込めて昼の汗にぬれた肌に冷たく風があたる。此のあたり一面に柔らかい草が生へて、土堤の様な山尾根の蔭、信州側の窪地にテントを張る。此処は二五二〇米突、明日越ゆべき、岩小屋沢は前方の夕空に、偉大な軀をうそぶかしてゐる。人夫等が夕食の用意に取かゝると、秦先生と二人、今夜の褥にするため沢山な草を刈り集めて運んだ。たけよもぎの束を作って枕にすると、秦先生が「草枕ってこの事だなあ。」といふ。今宵は快い草の香に身をひたして温い夢を結ばうと思ふのだ。新越の風趣は真にうれしい。山の野陣場には格好である。直ぐ草野の下に横たはる残雪の下に、はんの木の皮で小さな筧を作った。すぐ後に鳴沢の削壁をバックにして、風露草や、キンポウゲ、ハクサンイチゲなどの高嶺の花に取り囲まれた白いテントは、すぐ撮影慾を喚かした。

籠川谷から舞ひあがる霧と、黒部谷から吹きあげられる霧とがもつれ合って、視界がだんだん塞がれて行くと、足もとの叢もいつかしっとり露ばんでゐた。

雪解の水で炊いた飯は仲々の美味である。夜の霧は静かに静かに我等にせまる。焚火の灯影に頬の赤い人の顔には、たゞ天真の稚気が漲ってゐる。こんな晩に人夫の他愛もない物語りに聞き入り乍ら、煙草を喫い乍ら、たゞ無性に和んでゆく山の旅人の心には、何等の不安も慾望もない。夜のテント内では種々な仕事が始る。日記やら、種板の取更へやら、夕食後の一時は忙しい。蠟燭が短くなってユラユラ瞬き始める頃、かすかな渓流の響きに誘はれて、いつか夢路に逍遥(さまよ)ふのである。風もあたらぬ此の泊場は案外温い。

卅日、草の褥に草枕、かうした信越の一夜が明けると、テントはしっとりと露にぬれてゐた。「霧小便が降ってゐる。」と飯の鍋を下げた玉作が油紙を冠り乍ら入口に窺き込む。

濡れて歩くも折角の山行を空しくするからといふので、今日一日は滞在の覚悟で、飯がすむと九人がテン

トの中で支柱をとり囲み、ズラリと並んだ。霧小便はやがて本物の雨になって来た。焚火の生命も覚束なくなって、一同気の抜けた様に黙り込んで仕舞ふ。足もとの叢に、雨にうたれてなよなよとうなだれるふうろう草の外、眼に入るものは霧の世界である。斯うして正午前は空しくテントの中で暮して仕舞った。午後二時といふに少しの時間を見て結足して立つ。霧の中を草むらの露にぬれ乍ら進む。千草の根は水に湿り切って踏む足も滑り勝である。行手は相変らず霧が騒いで時々日蝕の時の様な太陽がぼんやりと浮び出す。一時間を要して岩小屋沢の三角台下に達した。此処は海抜二六四〇米突、屏風連嶂中の巨漢である。霧の中では仕様もなく早々に此処に袂別して、一散に石ころをとばし乍ら降ると又美しい草野に出る。そこは細い路型さへついて、丁度公園でも歩くやうな心地、晴れてゐたらドッカリ腰を据ゑて、そのまゝ足を立てる事もいやになる所だ。

こゝから越中側の沢の斜面を、身の丈にも達する大きな羊歯や、名も知らぬ雑草の茂みを分けて降ると、行手はミヤマハンノ木やタケサンショウなどの灌木にさへぎられて、どう切り抜けたらよからうと思案する。「ゴラ先生」(山の意) と名づけられた玉作が漸く道を探し出したその後に続いて藪の中にくゞり込む。たゞさへ霧に湿り勝ちな所を雨の後の茂みをこね廻るのだから、たまったものではない。白樺やハンノ木の枝葉に溜った露が障る度にハラハラと落ちて来て、見る間に服はビショビショに濡れて仕舞ふ。頭条から垂れて、はてはシャツの中まで沁み通る。此処を抜けて一寸した雪の沢を横切るとまた其の次はやぶである。どの位続くだらうと根気も元気も失せ果てゝ了ふ頃、やっと扇沢を絡み終って種池平に続く山背に出てほっとする。と又ハラハラと霧の雨に煙草を喫ふ暇もない。時計を見ると扇沢を絡み終るまで約二時間半かゝったわけである。

種池平は今や真白いチングルマの原である。草の中に青草に縁どられて三坪あまりの池が二つ並んでゐる。爺が岳の所謂種蒔爺にゆかりのある種池は此れである。どんな日でりが続いても此池の水ばかりは乾かぬと人夫の話、池の近く青草の土堤と、トウヒモミの木立に囲まれた窪地は格好の露宿地である。つい二三日前誰かゞ宿った跡と見えて、小屋の棒がそのまゝに取残されて、傍の杭には生々しい兎の頭が吊り下げられてゐた。こゝからしばらく種池平の草路を植込みの様な偃松の間を通り抜けると、爺岳の南腰部にあたる窪地に達する。此処は丁度国境脊稜から少しく越中側に滑った斜面が急にえぐった様にV字の底部に残雪があって、その雪解の水溜りは細長い池を作ってゐる。辻本工学士の雪濠と名付けられた地形で此の辺の所々に見受けられる。脊稜がダヴンになって平行してゐるのだ。第二脊稜には例の穂先の荒んだトウヒモミが並んで、横で見ると岬の様に見える。時計は五時二十分を示してゐた。此の池は先刻見た種池よりも水が美しいといふので此処に荷を下す。二四六〇米突。早速焚火をして、濡れた体を乾すに忙しい。無遠慮なアレキサンドル君は真先にいつも大きな体をドッシリ据ゑ込んで、いゝ場所を占領して仕舞ふので、皆がテントには入り切らない。成程ロスケは侵略はうまいもの、其れ故今や新たに偃松の小屋まで新築された。偃松の長い枝を幾本か組み合して上から大きな油紙を冠せると、丁度エスキモー人種の氷小屋の様な形だ。静かに音もなく霧は降りつゞける。たゞ八角形の布の中が我が世界である。足の長い秦先生は、ロスの体が邪魔だといってむかつくと、「アナタコマル・ワタシコマルオナジコト。」と憤慨する。危く日露戦争が始まらうとしたが、汁鍋からぷんと玉葱の香がすると、もうスプーンを握り乍ら、「日本ソースヨロシイ」と和らいで仕舞ふ。

エスキモーの小屋の中からは、早くも鼾の音が聞え出すと、つい誘われてあくびが二つ三つ、やがて湿り勝ちな霧の夜は更けて行く。(未完)

(大正二・八)

1-2　百瀬愼太郎　「會員登山報」（部分）『山岳』第８年第２号

1913（大正２）年８月 31 日刊　日本山岳會事務所発行

要　約

1913（大正２）年７月 27 日～８月４日の記録。

メンバー及び行程は、前掲 No.1 の記録に同じ。

八峰キレットは稜線通しではなく黒部側を巻いてるが、その通過のためのルートファインディングに５時間を費やしている。当初この縦走では、大町から入山後、鹿島槍ヶ岳から五龍岳まで踏破し、さらに白馬岳山頂へ至る予定であったが、大黒岳まで来たところで取り替え用の草鞋を切らしたため、やむなく四ツ屋へ一旦下山して仕切り直している。

△去る七月廿七日大町發大澤泊廿八日針木峠より蓮華を極め針木岳を絡みスバリ裏泊廿九日大スバリ小スバリを赤澤鳴澤を經て新越泊卅日午前雨午後發扇澤を經て爺ケ種池より十五分ばかり前進南峯尾根裏の池に一泊

卅一日此日も午前中雨の爲休午後一時發霧の中を爺岳を超えて鹿島槍南槍西裏三角池に泊八月一日七時發北槍に至り八ケ峯の模様を展望し岩石の急斜面を尾根傳ひに降下し燕岩の嶮崖をすぎて第一のギレツト（原文ママ）八峯の難場着九時

此處にて路を探すに五時間を費し漸く越中側の偃松ハンノキの葉尾根を下り（キレツトより小さい尾根を三つばかり南を）對岸のピークより落つる空澤をのぼりそれより二つばかりの峯を超えて五龍より三つ目の峯の尾根に着五時

八月二日五龍を極め國境山梁を傳ひ大黒岩の頭の偃松を切り拔け鑛山の道に沿つて平川の雪溪を降り四ツ屋着午後九時半三日第六回白馬登山を試み昨四日山頂より下り午後九時漸く歸宅仕り候最初の目的は大町より鹿島槍五龍間逆走の新レコードを作り縦走を白馬絶頂に終らんとせしも大黒岳に至り草鞋の欠亡の爲遺憾乍ら四屋に降りしものに候も後に細野人夫より大黒鑛山に至れば草鞋米の上げ置きしもの有る由を聞き及び候も今更の事と相成殘念に候ひき人夫は勝野玉作傳刀林藏伊藤菊十の三人同行者は大町中學校秦教師に候二つ目のキレツトとは五龍の南二つ目のピーク邊の事と考へ申候此は岩を絡んで渡り得べく候八峯の渡場所は白馬方面より來る人には大町方面よりするものに竝べて割合に發見し易きよしに候こはキレツトの南（大町側）尾根は築が繁く尾根上より下方の谷の様子は展望し難く北方五龍方面よりは河原小屋谷に落込む數條の澤及尾根の容子を瞰取し得る故に候

前年中村氏の縦走の折の困難も思遣られ候鹿島槍絶頂にて數日前五龍より來られし高橋氏の名刺を見申候此度の逆走は思慮深き林藏と玉作の猛者との調和により成功せしものに候小生等の渡り場所は山稜より約二百二十米突を降りし所に候

スバリに泊りし時翌朝針木岳三角點に望みし二人ばかりの登山者の姿は後にて關口泰氏等一行と察し申候鹿島槍うら泊りの夜藥師岳北尾根に野營の焚の見え候折玉作が近藤さんならんと申居候

白馬岳にて信濃山岳會の矢澤氏一行に會し申候も善き方にて候ひき榎谷氏は一昨日立山方面へ小島様御令弟も同日御出發いたされ候由小生留守にて兼て小島様より御手紙頂き居候も御拜面仕らず失禮致候（大町百瀬愼太郎）

2　一戸直藏・河東碧梧桐・長谷川如是閑　「日本アルプス縦斷記」『日本アルプス縦斷記』

1917（大正6）年7月23日刊　大鐙閣発行

要　約

1915（大正4）年7月14～22日の記録。

メンバーは、一戸直藏、河東碧梧桐、長谷川如是閑、伝刀林藏（大町の案内人）、黒岩直吉（同）のほか、ポーター5人が同行。

行程は、針ノ木峠～烏帽子岳～槍ヶ岳。

※針ノ木峠～烏帽子岳～槍ヶ岳縦走の第2記録。

※一戸直藏は天文学者（理学博士）で科学ジャーナリスト、長谷川如是閑は大阪朝日新聞記者、河東碧梧桐は俳人。

行　程

△七月十四日　半晴　（午前九時十五分）大町發針の木峠に向ふ（午後六時）籠川谷を溯り大澤野營地著

△同　十五日　晴　（午前七時）大澤發（同十時四十分）針の木峠頂上（午後四時二十分）蓮華の一峰野營地著

△同　十六日　晴　（午前六時）蓮華岳發（同十時四十五分）北葛澤岳頂上（午後三時三十五分）七倉澤岳頂上（六時）夜叉澤野營地著

△同　十七日　晴　（午前八時三十分）夜叉澤發（午後三時半）舟窪岳頂上野營地著

△同　十八日　晴　（午前六時）舟窪出發（同十時五分）不動岳頂上（午後二時十分）南澤岳絶頂（同三時）烏帽子岳麓（同五時）烏帽子岳野營地著

△同　十九日　晴　（午前七時）烏帽子岳野營地出發（同七時四十分）三ケ岳頂上（同十時）野口五郎頂上（午後一時五十分）眞砂岳頂上（同三時）赤岳頂上（同四時）黒岳（同五時二十分）赤岳麓野營地著

△同　二十日　晴（風強し）　（午前六時三十五分）赤岳野營地出發（同七時十五分）ワリモノ岳頂上（同八時五分）鷲羽岳頂上（同十時半）蓮華平（午後二時半）雙六池（同三時三十五分）樅澤岳頂上（同四時五十分）硫黄澤乘越野營地著

△同　二十一日　晴　（午前七時）硫黄澤發（八時四十分）鎌尾根通過（十時十分）槍岳頂上（同午後十二時十分）坊主小屋（同二時三十分）赤澤小屋（同三時二十分）二の俣合流點（同九時）上高地温泉著

はしがき

日本の本土を脊椎のやうに縦貫してゐる大山系は、所々で關節のやうなジヨイントを作つて、特別の瘤起を形作つてゐる。此の瘤起のうちで、本土の殆ど中心に位してゐる邊に作られた山脈の大關節が卽ち人のいふ日本アルプスである。此名は始めて「日本アルプス」といふ書物を書いたウエストン氏から出てゐるといはれてゐるが、ウエストン氏自身が小島烏水氏に語つた所によると、此の名稱をウエストン氏に薦めた人は明治の初年に大阪造幣局の御雇として來朝したウ井（原文ママ）リアム・ゴウランド氏だといふ事である。ゴウランド氏は當時日本に來たミルンといふ地震學者の爲に今いふ日本アルプスを踏破して一切の學術上の材料を蒐集したといふ篤志家である。さうして「日本アルプス」の命名者たる榮譽をもウエストン氏に讓つて、自分は全く隱れたる日本山岳研究家として終つたのである。されバウエストン氏の以前にも多くの外人旅行家は、既に所謂日本アルプスの探究に十分の手を染めて居た。昔から日本の山岳は文明の先驅者によつて開かれた。僧侶が文明の先驅者であつた時代には、山は皆僧侶によつて開かれた。明治文明の教師であつた外人が、僧侶の開き殘した此の大山系を開いたのも歴史に外れた事ではない。

今では日本アルプスを山岳家の間で赤石山脈、木曾山脈、飛騨山脈の三系に分つ事が定論になつてゐる。卽ち第一を南アルプス、第二を中央アルプス、第三を北アルプスと稱するのである。が科學的の類似を差し措いても、日本アルプスといふ名の最も適はしいものを求めれば、無論飛騨山脈が夫れである。從つて此飛騨山脈を狹義の日本アルプスといふ事が出來るのである。

飛騨山脈といつても實は、東海道の美濃の一端から起つて、北陸道の越後越中に終つてゐて、日本を南北に横斷してゐる大山系である。從つて其の山系の領域は美濃、信濃、飛騨、越中、越後に亙つてゐる。之を飛騨山脈と唱ふる從來の地理學上の慣習は、畢竟、飛騨が此の山脈の中樞部分に中つてゐる上に、飛騨全國が地形上又地質上此の山系の組織内に包容されてゐるから出たものであらう。

此の飛騨山脈を概觀すると、南方の重鎭たる木曾の御嶽から北端の巨頭たる白馬嶽まで現に信飛兩國の境界線を作つてゐる通り、大山系の一線を引く事が出來る。次ぎに此の一線の中部から西方に分れる弧線を描くと夫れが藥師岳、立山等の名山を列べてゐる一大山系である。更に此の弧線の反對の側に同じく弧線を描くと、夫れが常念、燕の諸山を列ぬる一系である。試みに其の概念圖を作つて見る。（圖參照）

圖の直線は元よりＳ字形以上に彎曲した山脈を引伸ばしたもので△形は重な山だけを記したのである、重な山だけでも是れだけの數があるのを以て、如何に其の山系の混み合つてゐるかゞ想はれる。此の想像線を實際に見ると直線の實現せられてゐるといふ場合には決して出會はない。如何なる短距離の間にも、必ず猛烈な上下動乃至左右動を爲して地震計のレコードのやうに交錯した曲線の混亂を示してゐる。山といふものを升に盛つて其處にブチ撒いたといふ外に形容の言句はない。

私達の此度の計畫は、右の想像線の中樞部分を占めてゐる針木嶽（7）から槍ケ嶽（18）迄の間の國境線上を縱走しようといふのである。此の縱走は、明治四十四年に大阪の山岳會員榎谷徹藏氏が試みた事がある許りで、殆んど處女徑路といつてよいのである、其の中最難路といふのは、蓮華（8）から烏帽子（10）に到る間である。假に蓮華の頭から烏帽子の頭まで總てを一直線に引いて其の長さを計つたら恐らく三里とはあるまいと思はれる短距離に過ぎないが、其の間の縱走に三日を費すといふによつて、此の山稜線の何う曲折してゐるかゞ想像されやう。もし其の上霧や雨に出逢つたら其の續く間殆ど前進を阻碍されてゐるのである。＝如是閑

前記　一

私自身は、針木峠といふ名に一種の憧憬を持つてゐた。けれども其の理由は自分にも諒解されて居ない。山に對する私の憧憬は、科學慾からでもなく、審美慾からでもなく、又世間にいふ山岳家と稱する人々のやうに此の二つの慾望に合致した動機からでもない。針木峠の科學や美學には私を引付ける力のありやうがない、何故ならば、私は夫れ等に關して一切無知であつたから。強ひて云へば、針木峠といふ名は、私の神經に一種の刺戟を與へる響を持つてゐる。北アルプス方面のいろいろの峠の名は、夫れ夫れ違つた刺戟を私の神經に與へてゐるが、針木峠の夫れのやうに、峠といふ文明から除外された荒廢した交通路の感じを強く私に與へるものはない。島々から上高地へ行く德本峠の名にも一種の感じがあるが、私は其の名に、山の人が暢氣らしく煙草を燻らしながら上つて行く峠路を想起する。安房峠、野麥峠、檜峠、燒岳峠……何うしても針木峠といふやうな、荒んだ寂しい感じを私に與へない、私は針木の名が私に與へる幻想に捉はれない譯に行かない。

此の荒廢の感じは、此峠が明治の初年に加賀藩の士によつて一度開かれた事があるにも拘らず、其の後何時とはなしに荒廢して、初期の外人山岳家などは多く此の峠を登山術を超絶した嶮路のやうに記載してゐるといふやうな話と一致して私の幻想は薪を添へられた。けれども、私の幻想は、何時でもさうである如く、此處でも山と人とが始めて出會して出來た、所謂山のロマンスに醉ふといふ質のものではない。私の山はまだロマンスの技巧を知らないたゞの山でなければならない。私はヒストリーのない國に行きたいのである。荒れて廢れて、人間が其の上に作つた歷史の頁がズタズタに裂かれて打ツちやられた處を、私は針木に見

出さうとしたのである。人間の足跡を拭ひ消して、原始に歸らうとする自然の努力――といふよりは好みは、さうした深い山國の澤の奥へでも入らなければ到底見る事が出來まい。私は夫れを針木に行つて味へると空想してゐた。もし私がさういふ境地に入つてさういふ自然の強い好みに同情する事が出來たら、私自身も、私といふものを蹂み躙つて、私の上に慘たらしい印を止めてゐる人間の足跡を拭ひ消して、さうして私のまゝの私、ほんとうの私だけの私を私に見出す事が出來やしまいかと空想してゐた。斯うした憧憬が私の胸に迫る時に、私は何時も、丁度衣服にふりかゝつた雪を振ひ落すやうに、身を慄はせて、私の身體についてゐる、私の外のものを振ひ落したい氣がするのであつた。人間を振り棄てゝ自然夫れ自身だけになつた自然は、屹度斯ういふ私に深い同情を持つて呉れるであらう、私は針木峠に行きたい。

私の果敢ない空想は、つひに私達の旅行日程の基點になつて仕舞つた。私は日程の大體を定める役目であつたので住友の今村幸男君と相談して定めようとした時、第一案、第二案と案はいろいろ出るが、私は何うしても針木を基點にする、今村君に『君は何うしても針木を止められないのかい』と云はれて、私は『何うしても針木はやめられない』と答へながら、私はもう、荒廢した自然の裡に荒廢した私を見てゐる幻を描いてゐた。

夫れで針木は私達の日程の基點となつたが、針木から蓮華を通つて七倉、不動と尾根傳ひに烏帽子に出る例の處女徑路を選んだ時にも、信州大町の山岳會員百瀬氏から、其の尾根傳ひは、北アルプス縱走中の最難路であつて、然かも比較的興味の薄い部分であるといふ通知が來た。私は判斷に困んだ。併し今からの回想によると七倉不動間の山稜は、北アルプスの中央山系中では、最も高度の低い邊で、針木峠の頂上から見ると、四方の山々の裾を廻つて或は槍の頭のやうな、或はピラミツドのやうな、或は鉢を伏せたやうな、いろいろの小山が連續して其の山と山との連接部は、所謂脊尾根と稱する砂礫や、壞れ易い岩石から成つてゐる山稜で、荒廢に親しみたいといふ自然の好みが最も能く見えてゐるのである。殊に其の間の山系が、四方の高い山々の蔭に忍びやかに隱れてゐて、深い澤の間に消えて行く枝山の流れのやうに見えてゐる執拗を、私は心から無理もない態度だと思つた。針木の頂に立つて眼の下に此の山續きを眺めた時、私は私を微笑ませるやうな興味を感じた。さうして『お前もか』と云ひたかつた。

で私達は此の徑路を捨てなかつた。さうして始終滿足を持つて其の難路を通つて行つた。＝如是閑

前記　二

大町まで

私の山へ行く時の沈み勝ちの氣分は世間の山へ！山へ！といふ聲と餘りに懸け離れたものである。私はいろいろの感想をソツト自分の胸に抱きながら荒れ廢れた自分の故郷に歸らうといふ時、私を送る仰々しい萬歲の聲や煙火の音を聽いたら、私は旅裝をかなぐり捨てゝ、『私はモウ歸るまい』と兩の手で私の頭を掻きむしるであらう。此の夏の山岳に對する世間の流行――私は夫れを流行といふ事を許して貰ひたい――は、私達と同じく山岳に興味を持つ人達の熱心な皷吹に基いたもので、もし夫れに罪があるとすれば私達も同罪でなければならないが、私自身としては、山岳に對する興味を世界の人達の間に喚び起す場合に、決して其の興味の性質を忘れて貰ひたくなかつた。私が人に淸涼劑を薦めたのに、其の人が夫れを飮んで醉ツぱらつて放歌高吟したら、私は失望せずに居られない。山岳といふものが與へるいろいろの印象は、丁度優れた藝術品が與ふる夫れと同じやうに、街頭の群衆の前に廣告のイルミネーシヨンの如く掲げ出さるべき性質のものではない。――さうはいふものゝ醇なる興味を持つ者は斯ういふ征服された多數者の間から精選されて出て來るものと思へば、決して此一般の傾向を悲觀するには當らない。

兎に角私は、何時ものいらいらした、物と物との間を斷えず撥ね返つてゐるやうな氣分を沈滯させて、まだ梅雨の上り切らない、七月十二日の朝木曾の谿谷の、空も見えない位深い綠の蔽ひかぶさつた雨の景色のうちを通つてゐる。木曾川の水と共に此の谿谷の間を古い歷史が流れて、所々に停滯して出來た、くすんだ色の古い町々を摩りながら私の列車は走つた。私は斯うした谿谷の間の街道を上り上つて、つひにくすんだ

色の町々さへ無くなるやうになつた其の果てに私の行手があると思つた。

汽車が木曾のの谷から松本平（マツモトタイラ）のあかるい平野に出ると、私は何時ものやうに、此の山岳の凹地に出來てゐる文明の疣を不平に思ふ。長さ十數里幅三四里に亙る松本平は、古い昔は湖水であつたといふが、何故今も湖水でないのであらう。松本といふ其中心の市街の文明は、私はまだ研究した事はない。けれども、何年か前までは牛肉に乏しくて馬肉に富んでゐて、今も旅人に、其の旅人よりも前に其旅人の來た方面から、矢張り汽車で來たといふ魚の肉を薦める事を誇りとしてゐるやうな街は、寧ろ湖水であつて澤山の生きた淡水魚を養つてゐた方が好くはあるまいか――と私は、此地の宿屋で肉の柔かになつた海の魚を喰べさせられる度にさう思はない事はない。もし私達が木曾の端から其の湖水に出て、深い碧の水に周圍の黑ずんだ高い山々が浴みしてゐる、音と香と動搖のない靜かな重い景色を眺めたら、私達は、昨日までの都會の生活から年代で數へられないほど遠く離れたやうに感じて、何んなに蘇生の息を吐く事であらう。それだのに私は此の松本平の、安ぽい白壁を見るやうな明かるい薄ぺらな感じで、木曾のイルージヨンを打ち破られた上に、昨日都會に居たならば、さういふものは既に過去に葬つた筈の魚を、此方まで運んで來て、夫れを私の膳の上に眺めなければならない。文明は鼻と同じで置き所によつては鼻であり得るが、置き所によつては瘤に過ぎない。

私は松本平の人達が、此の私の我儘な、失禮な言草（いひぐさ）を氣にかけない事を希望する。私は、山に行く途中なのである。山に行く時、私は私についてゐる私の外のものを皆振り棄てたいと思つてゐる事は既に斷つてある。私は私の周圍の空氣が次第に透明から希薄になつて行くといふ感じを續けたいのである。木曾から松本平に出た時の逆戻りの感じは私を不平にする理由である。其の代り私が山の生活から都會の生活に歸らうとする時には、松本平は、私の脊を叩いて私を生氣づけて、私を都會の人にして呉れる。夫れも不平でない事はないが、此の不平は、私の日常の生活で私に付き纏つてゐるので、松本平のみが私に與へたものではない。＝如是閑

前記　三

私達の出發の基點になつてゐる大町は、松本の二つ先きの明科（アカシナ）驛から五里の、絲魚川（イトヰガハ）街道に添うた小都會でやつぱりくすんだ色の沈んだ町である。此の街道に沿うた村々の生活や、山や澤の間の生活が、享樂を要求した時には、此の町が、其の時代遲れな、つゝましい、粗野や享樂を提供する所になつてゐて、其の傍を流れる高瀨川の對岸にある松本平の文明とは、年代で餘程の隔たりのある大町平（オホマチダイラ）の文明の中心である。

周圍の山々は、其の脚下に生存してゐる人間の生息圈を地上何尺かの所に限つてゐるかの如く、此の大町は、ひしやげたやうな低さを以て發達してゐる。紐育の發達が一方の極端なら、此の大町は他方の極端であらう。雨の國でゴシツク風の鋭角が發達するに反し、雪の國の此の大町では鈍角の平たい屋根が、左右に張つて其の下の空氣を常から薄暗くしてゐる。私は車で往來を通りながら、左右の家の屋根を上から眺めて、其屋根に順能く列べてある石塊を數へる事が出來たと感じた。

此の周圍の山々の威力を承認してへり下つた發達をしてゐる町の姿は、私の山へ行く氣分と優しく擦れ合つて、私は此の町のスグ後ろに私の行手が無ければならないと思つた。四方の山は今は夕立雲のやうな濃い雲に頭を掩はれて、唯其の裾が、町の往來の果て、屋根の上、森の上にドス黑い幕を張つてゐるのみで、私達が今にも其の中の人にならうと云ふ山の何れであるかも解らないが、私はモウ此の沈んだ町に入つたばかりで、山の使ひに私の消息を通じて遣つたやうな氣がした。忘れて仕舞つたのか、考へ込んでゐるのか、何も知らないのか、知りぬいて仕舞つたのか、兎に角落著いた寂しさの裡に目をねむつてゐる此の町の靜寂に打たれて、私は昨日までの私の周圍の都會の大混亂を、遠い日の夢のやうに回想した。さうして、恐ろしい夢から醒めた時のやうな動悸を胸に感じた。ガタ馬車が吹いて又吸ふやうな時代を超越したラツパの音と車輪のけたゝましい騷音を響かせて、町の沈んだ空氣に一時恐ろしい波動を立てる。夫れが行つて仕舞ふと再び重い空氣に壓せられて靜かに眠つてゐる町を見る。

私達の宿の三階は、此の大町の低い發達に唯一の凸起を描いてゐるが、其の眞黒な薄黒い座敷に、私達は壓へ附けられたやうに坐つて、矢張り大町にゐるといふ感じを失はなかつた。宿の若主人は山岳會員で日本アルプス通を以て聞えてゐる。十三日一日此處に滯在して日程を協議したり準備をしたりしてゐるうち、一戸（イチノヘ）、河東（カハヒガシ）兩氏も東京から來た。

十三日の天候は絶えず私達を不安にしてゐた。碧梧桐は來るなり雲の事ばかり云つてゐた。物乾しに何度か上つて、白馬が見えるとか見えぬとか氣を揉んだ。『一週間以上も山に入つてゐて、雨に會はないといふのは、到底望まれる事ではありません』と若主人は度々さういつてゐる。私達もさう思つてゐるが、山の災害といえば殆ど雨の外に何もないといつて好い位のものであるから、夫れに會ふ事の確實なのは、私達を安心させる種ではない。モ一つ私達を不安にしたのは、案内者である。蓮華から七倉不動を越えて烏帽子へ出る道を知つてゐる案内者は先年榎谷氏の伴れた又七、玉作の兩人しか居らぬ。然るに此兩人は既に夫れ夫れ先約があつて、私達の案内者は、全く始めて其處を通る男である。其の男は林藏といつて、年は四十で案内者になつてから十數年といふと永いやうだがこれでも山の人間としては新しい方だ相である。後に至つて、此の男は可なり思慮も周密で用心深く、其の補助たる直吉といふのは若いだけ蠻勇の強い大膽な男であつて、二人合せると、最も安全なガイドたる事が解つたが、此の日の評議では、私達は此の男等によつて、果して守備能く、其の徑路を通過し得るや否や、全く不安であつた。

私達は食品、防寒具等の準備によつて此の不安を忘れようとした。私達は取り散らされた夥しい食品を見て『まるで山へ物を食ひにでも行くやうだ』と笑つた。碧梧桐は、其の携帶品の目錄を作つて見ようと書き出した。

食　品

▲ビスケツト四斤▲米五斗四升▲味噌三貫目▲昆布一袋▲茶一斤▲乳パン十包▲キヤラメル二十三箱▲牛肉罐詰四▲鮭罐詰四▲鰹デンブ二罐▲福神漬三罐▲海苔佃煮三罐▲おたふく豆二罐▲桃罐詰一▲ウヰスキー一瓶▲酒四合瓶二▲コンデンスミルク三罐▲ドロツプ二斤▲チヨコレートミルク四罐▲氷砂糖一斤▲煮干一罐▲海苔五帖▲ハム二罐▲ウニ一罐▲鰹節一本▲干瓢一束▲食鹽一瓶▲味の素一瓶▲其他人夫用副食物若干

藥　品

▲カスカラサクラタ一瓶▲フルートソルト一瓶▲假製マグネシヤ一瓶▲下痢止藥一瓶▲淸涼劑數種▲アルコール一瓶▲香水一瓶▲蚤取粉一罐▲絆創膏二種▲繃帶ガーゼ若干

器　具

▲テント一張▲アルペンストツク一箇▲普通鳶口一箇▲飛驒鳶口一箇▲カンジキ三箇▲毛布製スリーピングバツグ三枚▲毛布一枚▲寫眞機械二箇▲フイルム二十五卷▲望遠鏡二箇▲懷中電燈二箇▲小田原提灯一箇▲蠟燭一斤▲ピストル一挺▲マツチ和洋數箱▲呼子三箇▲油紙百二十枚張二枚▲草履三足▲桐油六枚▲防水大袋一箇▲草鞋百五十足▲大小鍋三箇▲瓶一箇▲茶碗三箇▲飯盒一箇▲辨當箱二箇▲細引數條▲其他各自冬洋裝一式及防寒防水具▲人夫用品具澤山

これを七人の人夫に擔がして行くのであるから總勢十人となつた譯である。碧梧桐は私の事を準備狂だといつて笑つた。けれども此等の用意の品の中不要であつたものは殆ど無く、殊に食料品は豫期したよりも早く消費して、もし途中で雨にでもあつて停滯したら、副食物缺乏の難に逢ふところであつたと私は後で私の準備狂を誇つた。＝如是閑

籠川の谿谷　一

山へ立つ朝の混亂した心持は、經驗しない人には語られない。宿の對山館の人達に送られて門を出ると、何れも嵩高（かさだか）の荷を脊一杯に積んだ七人の案内や人夫が林藏を頭に一列になつて、馬がダクを踏むやうな足どりで歩き出した。昨日までの梅雨景色は今朝は拭ひ取つたやうに晴れて、山を見て天候を直覺し得る人達

も、これならば天氣は當分大丈夫と云つて呉れた。未來に横つてゐるいろいろの危難や困苦やが、私自身の之に打ち勝ち得る自信の波動的に弱められたり強められたりする度に、或は眞黒な暗のやうな塊になつて私を不安にしたり、或は見え透いた硝子板のやうになつて私を安心させたりした。啓行の刹那には、其の闇の塊と硝子板とか、目まぐるしいほど迅速に私の前で交代してゐる。私の胸は落ちつかない不安と、動かない自信とで壓へ付けられたやうな抑壓と、突き上げられるやうな勇躍とを覺えた。此の矛盾した二つの感じを私の胸の裡に調和させてゐるものは私の沈默であつた。一行が皆、私とさう違つた感じを持つて居なかつた事は、私と一樣に撫でられたやうな其の沈默で察しられた。

大町の宿を立つたのは九時半であつた。

私達は郡役所の前から蔭のない田甫道に出た。日は灼くやうに直射する。晴れたといふに對する感謝はあつても暑い事は暑い。碧梧桐は洋傘を差してゐた。山へ蝙蝠傘を持つて行くといふ碧梧桐の主張は山通の哂ふ所であつた。けれども碧梧桐は、已を得ざる場合の外、山中とうとう蝙蝠傘を差し通した、私も亦帽子は水泳帽の樣な頭にヘバリついたのに限るといふ定説に反對して大きいヘルメツト帽を被つた。「ヤブ」（山でヤブといふのは密集した林叢の意）を潜る時にひつかけられて始末に終へぬといふ事は懸念せぬでもなかつたが、實驗の結果却て此のヘルメツト帽でヤブを押分ける便利を得た。一戸博士だけは正直に軟かい帽子の外光線に對して少しも顧慮しなかつた。さうして三人共同じやうに顔の皮が何度となく日に焼けて剝落しては又日に焼けて、終ひには笑つても顔が痛むといふ事になつたのを見ると、山では紫外線から掩護される手段はないといふに歸著する。けれども如何なる場合にも光線の直射を避け得た私のヘルメツトが稍有效であつた事は、外の二人の顔の皮が剝落し出してから三四日遲れて私の顔の皮の剝落が始まつた事によつて證據立てられた。

大町から一里餘りを歩くと鹿島川に渡した長い橋を渡る。磧越の背景一帶は鹿島槍から尾根續きの山々が、粗い襞も細かい皺も、太い細い綱のやうな雲の筋に包まれて立ち廻らしてゐる。其山稜が南へ走つて籠川の谷を包んだ名もない幾つかの山の流の間に隱れて行く邊に私達の目指す針木峠がある。幅のひろい刃物を逆に立てたやうな雪溪が其の奥の山の割れ目割れ目を埋めてゐる。

鹿島川が高瀬川と落合ふ三角形の突端なる一群の人家は大出である。蔭のない長い途に疲れても、私達は此邊の道端の道祖神が夫婦で手を取り合つて立つてゐるのに感興を起して、其の前に立つて色々と批評したりする餘裕はあつた。大出の外れの小さい佛堂の緣は籠川谷に入る人達の必ず腰をやすめる所である。私達も其處で、最初のキヤラメルを口に入れて、最初の水筒の水を飲んだ。佛堂の前に小林區署の新しい小さな官舍がある。大町の宿の若主人は、自轉車で先廻りをして私達の置き忘れた砂糖の袋を持つて來て呉れた。私達は危く山を鹽ツ辛い所と印象させられるのであつた。アレ程沈著な外觀を持つて居た私達の出立にも亦幾何かの倉皇があつた事を私達は訓へられた。

大出から道は二つになつて、右が籠川左が高瀬川の谷に入るやうになつてゐる事は、見渡した山の姿で歷然としてゐる。前面に混み入つてゐる青い山々の脈絡は、自から股になつた二つの峽谷を作つて、夫れが奥深く其の山々の裾に入つてゐるのが、此處から指示される。私達は其の右の方の峽谷に入り込むのである。大出の村を外づれて廣々とした草の野の道を可なり長く辿ると、漸く籠川の磧が草の間から左手に見える。此の草原を流れて籠川に落ち込む小さい澤の水音ばかりが、繁つた草の間から爽やかな響を傳へてゐる。＝如是閑

籠川の谿谷　二

黒部のヌシ品右衞門

草いきれのする籠川谷の入口で一休みした時、どこで晝飯にするかといふ口の下で、先達の林藏は『白澤でへー』といつてゐた。『さうなるかどうか』と相棒の直吉が危んだ返辭をしてゐた。我等は後できくと奥蛇澤だといふ小さな谷で閉口してしまつて、姑らく人夫の來るのを待つて辨當にしてしまつた。それから

白澤まではホンの一ト息の道であつたので、これなら辛抱して來られんでも無かつたと思つた。花崗岩の眉高かに積み重なつた、其間を豊富な水の迸ばしつてゐる、くわつたりした胸の透く澤だ。勢ひのいゝ水のせいでもあるか、何處からともなく風が吹く。楊(やなぎ)の木蔭に腰を下ろすともなく休んでゐると、小さな菅笠を被つて、可なりな釣竿を手にしてゐる年寄りが側へ來た。我等の一行よりも一足先きに立つた一高生の先達だといふ玉作と今までついそこで話をしてゐた男だ。腰に下げてゐるビクに、銀蠅や黒蠅がブンブンたかつてゐるのが我輩の目についた。

『イワナ釣れるか。

今晩のテント生活第一夜に、先づ齒觸りの不愉快な鍋飯を想像してゐた我輩は、少くも生きた肴を箸に上せることの痛快さをすぐ直覺したのだ。

『もう大きくなつているだらう。

『ナアに……粒の細かいものばかりで……。

何氣なく答へた年寄りは、静かに腰を我輩の側に下ろしながら、ジロジロと我輩を始め一行三人の業體を見廻してゐる。我輩は白澤の積み重なつた岩にノシかゝつてゐる高い山の頭から、次第に左手へ見上げて往つて、其蒼黒く禿げた崖や、處斑らに殘つた雪を印象しながら

『あれはスバリ岳か針の木かね。

と籠川谷の行く手に立ち塞がる峰の屏風を指で差し示しながら聞いて見る。イワナ釣りの年寄りは

『スバリや針の木はまだ見えねえだ、あれは鳴澤(ナルサハ)に牛小舍(ウシゴヤ)、岩小屋(イハゴヤ)といふだへー、スバリや針の木のこつちの山にかくれて見えねえだ。オイ澤も見えるかノ。悠長な詞でノンビリした調子で教へて呉れる。さうして一言いふ毎に、我輩を顧みて顔中の皺を動かして見せる。皺が縦隊横隊の聯隊演習的に生きて動くと同時に、其一つ一つの深く刻み込まれた皺にも何やら言外の暗示があるやうだ。

『どちらへ行きなさる。

『蓮華(レンゲ)から尾根(をね)づたひに烏帽子(エボシ)に出て、それから槍(ヤリ)に行かうといふのだが。

『ホー、蓮華から尾根づたひに……そりやアえらいことでへー。

年寄りの乙な皺枯れた聲で、「えらいことで」と言はれると、多少豫期してゐた冒險が一層重大な意味を附け加へるやうだ。乙な皺枯れた聲が、其難場(なんば)を茶褐色に際立つて彩つてしまふ。

『へー、誰が行くだね。

『林藏がまだ行つたことは無いが、是非往つて見たいといふのだが……玉作も又七も外に約束が出來てゐる……。

『フーム。

年寄は姑らく深い考へに沈んだ。冒險というても、どういふ程度の冒險なのか、奇怪な岩石が恐ろしい崖をなしているのか、偃松や熊笹が身を沒する高いヤブをなしてゐるのか、それとも鎌の齒のやうな殺ぎ立つた脊越しをするのか、更に見當のつかない我輩には、年寄りの深い考へが、どの邊に彷徨し粘著してゐるかゞわからない。

『險呑だらうか。

『ワシもへー、ことしすりやア四十五年黒部にへえるだが……この邊の山アどこ知らねえといふもねえだが……四十五年の間タンダ一年も缺けたことへーねえだが……。

年寄りの深い考へは、自分の四十五年間の昔に遡つてゐたのだ。我輩が明日明後日の近き將來のことを案じてゐるのとは、まるで方向が違つてゐたのだ。が、四十五年の昔に遡つて考へて呉れた處で、我輩の明日明後日のことには何の足しにもなりさうにない。我輩は物を言ふ度に顔中口になる年寄の顔を氣抜けした心持で見守つてゐるより外はなかつた。

そこへドヤドヤと遲れてゐた人夫共が來た。林藏は威勢よく『ヤア、早えな』と年寄に詞をかける、年寄は輕く首肯いて、口をもごもごさせる。

『これが大町で評判の品右衞門爺さんでへー。

『黒部のヌシだア。

林藏と直吉は我々に紹介の意味の口をきく。上高地(カミカウチ)の嘉門次(かもんじ)、中房(ナカフサ)の誰、大町の品右衞門と言やア、山通の大元老、山の神の申し子で通つた天下の三大關だといふ位は、我輩も仄かに耳にしてゐた。上高地の嘉門次は日當三圓やらうと、誰彼の差別なく案内に立たない位權柄ぶつたものだといふやうな話を聞いて、少々癪にしてゐた我輩は、其同格の品右衞門君が、今もイワナ釣りの天分を忘れないで黒部には其悋を上せた留守中でも、かうやつて近海ぢやアない近澤漁業に從事してゐる心がけを有難く思つた。

『蓮華から尾根越しする……なアに大したことでもねえだが……ちつとばかりワル場があるで、へーそこに頭が見えてゐて、かうかうかうオネるで、手の届きさうな處がなかなか……ヤブが高いでへー。

品右衞門だとわかつて後の年寄は、慈愛に富む親が其子を膝下に寄せて話をきかせるやうな態度になつた。詞の調子が一層柔かになつた。胸を濶けて十人の一行を抱擁するやうな心持がほの見える。林藏の問ひ質することには、一々丁寧な説明をしてやる。我々の方を向いては

『ガンジキ持つてゐなさる？。

とまだ雪の多いことを語つてきかせる。さうして空を仰いでは

『かたまつたノー。

とこれから自分も一行に加はつて行く者のやうに安心の色を浮べる。くはへ煙管へ、燧石で火をつける老練な手つきまでが、この親しみ易き而して犯し難き山の父を懐かしがらしめる。何だか始めは冒險の程度を探りかねて疑心暗鬼を生じてゐた我輩も、品右衞門の裏書きによつて、慥かな證文を握つた心持になつた。前途の山々が判然と明るみへ開放されてしまつた。隅から隅まで雪明りのさゝぬ隈もなくなつた。

ビクに釣つてゐたイワナや鱒の子の二十尾餘りをいふまゝの値段で買つて、いざ別れようとする時も、品右衞門は

『まだ日は高い、ゆつくり行かつせえ』。と自分は籠川の水に下りて、囂々と泡立つてゐる奔湍の中へ竿をふりかざしふりかざしてゐた。

我々一行の發程に際して、品右衞門に會うたといふことは、道を失うた山中で、忽然として一人の老翁に出會したやうなものだ。でなくば飢渇に迫る身に一服の神藥を惠まれたやうなものだ。之を誇張して言へば神仙的にも妖怪的にも信仰的にも傳説的にもなつて來る。白澤の磊塊な石、籠川との出合ひの相搏つ水の怒號する様も、このローマンス背景にそぐふ力強い道具立てゞある。＝碧梧桐

籠川の谿谷　三

私達が晝飯を喰つた奥蛇澤(オクヘビザハ)の手前から、道は木蔭の間を籠川に添うた細い林道に入る。籠川に注ぐ一々諒解し難い名のついた多くの澤を渡つたが、大抵土橋か丸木橋がかゝつてゐる、道は上りといふ事を感じないほどの緩傾斜である。

奥蛇澤の幅二間ほどの谷の向ふと此方とに、今朝私達より少し早く宿を立つた一高の生徒五人の連中と私達とが向ひあつて晝休みをした。谷の水音が高いのでお互の顔を目の前に見ながら話聲はまるで聽えない。其の五人のうちに、谷本富博士の子息が居るといふ事を私は宿で聽いたので、其の人を尋ね出して、さうして、お父さんは私と同村、しかもお隣り合ひで、時々私の處に氣焔を吐きに見えるし、私も時々氣焔を吐かれに行く事などを話した。一高の連中は、針木を越えて劍嶽(ツルギダケ)に上る計畫で此五人は其の第一班だといふ事であつた。

白澤のドウ（谿谷の合流點の事である）で碧梧桐は其處に著くなり小さい蓑のやうなものを著けた山で年を取つたとも見えないやうな優しい小作りの爺さんに目を付けた——といふよりも其爺の腰にブラ下げた魚籠に目をつけた。さうして敏捷(すばし)こく夫れを買ふ相談をして、最初の野營の夕飯に、生の魚が喰えると喜んだ。私は其の食慾の衝動から出た敏捷を感服した。

白澤(シラサハ)からの道は鹿島槍(カシマヤリ)から針木に出る山稜の屏風を立てたやうに谷に迫つてゐる其の裾を行く。一時間ほど進んだ山腹の岩石に間口四五間奥行二三間もある窟があつて、岩小屋と稱して小屋の代用をしてゐる。其の上の澤を岩小屋澤(イハゴヤザハ)といふのである。自然が人間から超越しようとして凸起した山といふ世界では、下界にあるやうな人間の住居は絶對に許されない。人間は此の山の峻拒に逢うて、山頂は愚か山の麓にさへ、家らしい家を作る事が出來ないで、山が作つて呉れた岩窟を住居とする。此岩小屋と同じやうな岩窟を小屋として宿を借る場所としてゐるのが澤山ある、槍ケ岳の下にある坊主小屋(バウズゴヤ)、赤澤小屋(アカザハゴヤ)も夫れである。此岩小屋の近所に人間の作つた畠山(ハタヤマ)の小舍(こや)といふ植林人夫の小舍は潰された屋根ばかり路傍にへたばつてゐた。道が籠川の磧に出ると、路といふ路はなく、巨きい岩に縋り附いたり、倒れた流木を攀ぢたりして進む。

扇澤(アフギザハ)のドウの凄じい水勢が急坂のやうな磧の中央を深く穿つて瀧になつたり淵になりしてゐる。其の淵から瀧と落ちる上にかゝつた細い丸木橋を渡つて、籠川の本流を沿うて上つて私達の最初の野營地の大澤に著いたのは六時近くであつた。

谷は急に迫つて兩岸に平地らしい所はなく、對岸は削立した崖に樹木が密生して、此の春の雪崩(なだれ)に撫でられた樹木が横倒れとなつて、崩壞した土砂の走つた跡もあざやかである。谷の兩岸には腐つた雪と此邊でいふ土氣色の殘雪が谷の流の上に床のやうに浮いてゐる。谷の水に手を入れると、斬られたやうな冷さで手先は忽ち感覺を失つてしまふ。

野營地といつても二三坪の小さな凹地があるばかりだが、其處は既に一高の連中が占めたので、私達は其の上の崖の傾斜が一寸段を作つた所の樹木を斬り拂つて、其處にテントを張つた。谷の日は早く暮れて眼の前の屏風の山は、大きくうねつてゐる雪溪を白く殘して、次第に黑ずんで行く。波動を爲した重くるしい水音ばかりが物の音であつて、飯を炊く煙のあわたゞしくたち上る渦巻のみが動く形であつた。最初の野營の物珍しさにざわついてゐる私達も叢のうちに埋れて谷の靜かな空氣に何の波動をも與へる事が出來なかつた。

テントの中につるした小田原提灯の光りで、初めて野營の飯を味つたうまさで、私達の味覺も私達と共に既に登山の氣分になつてゐた事を發見した。其の味覺にとつては品右衞門から買つた岩魚(いはな)は非常な山間の奢侈であつた。＝如是閑

ハイゴサマ

籠川に添うた林道が盡きて、磧の所謂「澤傳(さはづた)ひ」をするやうになると、もう定まつた道も、人の通つた足跡も見つからない。銘々勝手に踏み易い砂と、足がゝりのいゝ石とを飛び渡るのだ。林道には時々側澤(わきさは)へ入る紛ひ道があつて、どちらを行くべきかに迷はされることもあるが、澤傳ひには、道がないだけ、もう側道へ反れる心配もなくなる。たゞ目の前に押開いてゐる磧を何處までも踏み詰ればよいのだ。磧に道がないといふより、磧全體が道其物なのだ。

道が澤傳ひになつて、始めて山深く入つた心持になる。草鞋ざはりの石にも、日本アルプス地帶を踏む響きを傳へるのだ。

段々澤傳ひの石が荒く大きくなる。流され殘つた根こぎの木が白骨と晒されて岩と岩との間に嚙みついてゐる。澤の勾配が二十五六度から三十度近くに進んで來る。今まで左岸（上流より下流を見て）ばかり辿つてゐたのが、切立つた岩石に阻められて、泡立つ水を徒涉して右岸に移らねばならぬ。何處から吹き颪すのか、木々を鳴らす峰颪(ねをろし)の風も顔あたりが却々に手強い。

我輩はこの澤傳ひになつてから、細かい砂の押(お)し平(な)らしたやうになつた處に、きつと丸い凹みのあるのを注意して來た。始めは先きに行つた人の金剛杖をついた跡だらう位に思つてゐた。が、金剛杖の跡にしては、其の丸さが餘りに幾何學的に過ぎる。さうして杖をつき立てた痕跡もなく砂が乾き切つてゐる。同じ處に二つも三つも同じ丸さの凹みが並んでゐる。金剛杖の跡でなければ、岸に垂れた枝の雫の跡だらうかとも疑つて見たが、其處等に木一本ない磧のたゞ中にも見える。それが林道の盡きた澤道になつてから、早や二時間

近くも歩んだ、この急勾配と、この僅かな岩石の間の一二尺の砂の中にも、絶えず見えて來たのだ。

岩石の荒さ、水勢の強さ、それが相鬩ぐ素描畫の書きなぐつた魁偉な色と線との錯綜する中に、篩にかけて水で磨ぎ、澄したやうな微妙な砂が、直徑一寸内外、深さ三四分の自然の小さな臼を築いてゐるといふことは、今後の豪壯な凄慘な光景を豫期する者の目に、到底無關心に見過せないアイロニーで無ければならぬ。

何であらうとの疑問を抱きながら、我輩は隨分長い時間を堪へて澤傳ひをしてゐた。それでゐて、蝙蝠傘の先でつゝいて見ることもしなかつた、指でそれをほぢくることもしなかつた。澤山な中には、草鞋で踏みにぢつたのもあつたであらうが、それも成るべくは避けてあるいた。それをほぢくつて早く解決を得るより長く疑問を疑問として、そこに山としての神祕の片影の宿るものゝ如く味つてゐたかつたのだ。其微妙な巧緻な、とても人工には出來難い膨らみと柔かみを持つた臼の線味を、一つなりともあらけなくつき壞すに堪へなかつたのだ。其まゝ疑問の解決がつかないで、いつか籠川谷を通過した所で、我輩は強て憾みとも思はなかつたのだ。

不圖我輩の頭に或る直覺が閃めいた。我輩は無言の叫びを發した。蟻地獄！蟻地獄！

蟻地獄といふ解決を得ては、もう寸時も猶豫は出來なかつた。岸に生えた気を伐り倒して、それを丸木橋にした處に來た。一人々々渡るのに手間を取つてをる間に、我輩はそこらを走り廻つてゐる山蟻にも似合はぬ小さな蟻を一疋摘んで來て、彼の微妙なる臼の中に投げ入れた。案の通り臼の中心に噴火か地震かとも思はれる砂の大動搖が起つて、地獄の黑ずんだ、周圍の白砂の中には餘りに醜い爪が其馬脚を露はした。臼が淺い爲であらう、蟻は容易に這ひ上つて來る、何の苦もなく逃げてしまふにも關らず、地獄は尚馬脚を虚空に振り廻すのであつた。我輩は其刹那、淡いユーモアを感じて、二度蟻を捕へやうとした時

「旦那……ハイゴサマでねえか。

と言つたのは若い人夫の一人であつた。

籠川谷に栖む無數の蟻地獄、夫を蟻地獄といふのは何となく鹿爪らしい。鹿爪らしいといふよりは、其微妙な臼に對して形にそぐはない。鳥地獄、地獄溫泉は山につきものゝ名であつても其の赭黑な其の醜怪な焦土にはさもふさはしいのだ。籠川谷に無數に印する其砂紋は、尊稱の寧ろをかしげなハイゴサマで無ければならぬ。＝碧梧桐

針木の雪溪　上

雪田の櫻

大澤の叢の中の私達の夢は、濕ツぽくて、さうして冷たかつた。夜中のテント内の最低溫度五十三度といふのは寒いやうでも、尚狹い澤の空氣の割合に溫い事を示したものであつた。夫れでも、冬のメリヤス襯衣と毛絲のシヤツと英ネルと三枚を重ねて、スリーピング、バッグにモグリ込む必要があつた。テントの裏を見ると驟雨に逢つた洋傘のやうに、滲み通つた夜露が粉を吹いてゐる。

モウ朝飯の用意が出來てゐた。一種の香氣のする野草を入れた味噌汁を味ふとまだ覺め切らない夢のうちの食物のやうに、私の幻覺はそゝられた。

此處を立つたのは七時であつた。腐つた雪を踏んで磧に出ると、籠川の傾斜はモウ石段のやうに急になつて、水嵩も減つて、幾度か右に左に其の水を涉つては其の石段を攀るのであつた。

谷の傾斜が愈々急になつて少しく右の方へと崩壞したやうに、大小様々の花崗岩の堆積が廣がつて行くのを見上げると、私達は、頭の上に雪の傾斜面が、中世期の城壁のやうな彎曲を以て聳えてゐるのを仰いだ。針の木の雪溪を見ないでは——と對山館の若主人の幾度私達に繰返した言葉を、私は更に頭腦の裡で繰返した。

兩側の山腹から舐めたやうなカーブで谷を埋めた雪は、山峽の稍廣くなつた間に平坦な高い舞臺を作つて其の谷に下る面は壁のやうな急傾斜になつてゐる。此の眞白な舞臺の背景は、谷のうねりに伴つて上つて行く雪溪が裾廣ろに絞られた白いカーテンのやうに垂れ下つてゐる。私達よりも早く立つて行つた一高連の人

夫の其のまだ裾の方を辿つてゐるのが、まるで白い布に蠅が止つてゐるやうに見えた。

眞白ろな舞臺の適當の場所に此舞臺の中心となるべき偉大な超人の凭れかゝる卓子のやうな巨岩がある。其處から又舞臺面が急に傾斜になつて、やがて右方の山腹からこぼれ出た岬のやうな土の上で、私達は今更のやうに下を見て、又上を見た。

此の少し土の上で、人背に稍高い位の櫻の木が、細い淡紅の花を枝一杯に咲かせて居た。其花を透してバツクに眞白ろな雪田を見た時には、私の感覺は混亂して、迷妄の世界を覗いたやうな感じがした。虐げられたやうな此淋しい花と、其の慘ましい周圍とが、私の頭腦に刻まれてゐる晴れやかな櫻の花の印象と撞著して、私は其の何れかを迷妄とせざるを得なかつた。私は虐げに屈しない此の淋しい花のつゝましい誇りに同情せざるを得なかつた。櫻の花の因襲に背いて、うら淋しい反抗を誇つてゐる此の花の運命を、私も經驗したいと思つた。＝如是閑

針木の雪溪　中

人夫の危難

碧梧桐を先きに私達三人が籠川の谷を歩いて居た時、一戸博士が何か落ちたやうだと云つたのを碌々氣にも留めずに行つた碧梧桐は、長い雪の傾斜面を上つて漸く櫻の花の開いてゐるところまで來てガンジキを落したと云ひ出した。夫れを拾ひに行つた人夫に落とした場所を指摘すべく、私は殘つたガンジキを穿いて、其の雪の傾斜を驅け下りて——といふと景氣が好いが、足になれないガンジキが捻(ねぢ)れて半分は滑つて居るのだ。程經てガンジキを拾つて上つて來た人夫は、五十錢ガタの仕事をしたとコボした。私は自分の二十五錢ガタの仕事を、人夫の五十錢に加へて七十五錢だけ餘分の價格を持つた贅澤なガンジキをガンジキなしに上りかけた碧梧桐のアトを追ひかけて手渡して、さうして頭の上に空から落ちて來る白い瀧のやうに懸つてゐる雪溪を一人で上つて行つた。

雪溪の上の方は三つにも四つにも分れてゐるが、私達は其中の稍左方に迂廻してゐる幅のひろい雪を上るのであつた。風と光線の作用で出來た雪の波紋が足場になつて、始めのうちは調子よく上つたが、頂上近くなるにつれて、上から凭(もた)れ出したやうな雪の壁が私の額を壓してゐるやうに感ずるほど傾斜は之に伴つて非常に急になつて來る。僅か一二間の上りが、其處だけ三四十度の傾斜かと思はれる位に突ツ立つてゐる。私はアルペンストツクの嘴を雪に突つ込んで、夫れに引掛かるやうにして、一步一步上るといふよりも縋り附いて行くといふ形であつた。私は一人離れて上つた爲に方向を間違つたのではないかと思つて、ズツト下にゐる人夫等を呼ぶと、遠くて能くは解らないが、モツト右に廻れと呼んでゐるやうに聽える。サア間違つたと思つたがモウ遲い。雪の傾斜は上りより下りが危い、下りよりも横に傳ふのが危いと聽いてゐた私は、其最も危い藝當をやらねばならないのか。上を見るとモウ遠くはないが、下を見ると目が眩むほど高い。私はまるで白壁に守宮(やもり)のやうに取り付いてゐるやうな感じがした。其時下の方からかすかに、夫れで好い、其處を上れといふ聲が聽えた。私は其處に引張り上げられるやうな氣持になつて、渾身の力をアルペンストツクにこめて上つた。さうしてたうとう頂上の平たい雪の舞臺に上りついた時には、覺えず私のアルペンストツクを振り廻して、下の連中をさし招いた。

今自分の上つて來た所を見下ろすとまるで此の雪のバルコニーを支へてゐる壁のやうに切り立てになつてゐて、自分ながら能く此處を上つて來たと思つた。

私達一行始め一高連の人夫等が、私の上つたよりズツト右の端から雪の消えた岩石を傳つて上つて來た。私の上つた所は、上るべき所ではなかつたのだ。夫れにも拘らず下から、其處を上れといつたのは、一高連の人夫頭の玉作であつた事を知つた。玉作は私のアルペンストツクを手に持つて、『コレがあれは、どんな急な所でも引掛けて譯もなく上れますに』と易々と云つた。

『人夫がスベツたぞ』

とけたゝましい聲が聽えた、『人夫がスベツた』『人夫がスベツた』と口々に云ひながら、皆が雪の舞臺の

端の方を走つて行つて今上つて來た谷を見下ろしてゐる。

私はハツと思つて走りよつて谷を見下すと、遙か下の方の雪の中に黒い塊が二つ三つ見える。能く見ると、其上の方は荷物で、下の方のが、人夫のやうだ。蠢動してゐる所を見るとヒドい怪我もしなかつたらしい。

一同が狼狽へ氣味で茫然下を見てゐる刹那、私達の人夫頭の林藏は、私のアルペンストツクを私の手から奪ふやうに取るなり、私が上つた所と同じ急斜面の雪の上へ飛ぶやうに下りたと思ふと、左の方へ逆にアルペンストツクを突立つて身體を夫れに後ざまに凭(もた)せかけて、形容の出來ない速さで滑り落ちて行つた。矢のやうに飛んで行く彼れの身體から雪の飛沫が彗星のやうな尾を引いて、逆に突いたアルペンストツクは弓のやうにしなつてゐる。一同は其壯觀に打たれて、息を呑んだ。

數町下の人夫の居る地點まで、林藏は瞬く間に下りて行つて仕舞つた。

一時間もかゝつて落ちた人夫は上つて來た。怪我はなかつたらしいが、汗まみれの顔は土氣色をしてゐる。脊負つてゐた固く縛つた柳行李の中に雪が夥しく入つて居たので、滑り方の烈しかつた事が察しられる。

『能く怪我せざつたノ』

『工合よう荷ははづしたノ』

と一同は激勵するやうに口々に彼れを慰めた。

『荷を壞しちやなんねへと思つて、すべりながら一生懸命で外づしたぞいノ』

と彼れは雪に塗れて濡れしよぼたれた身體と一伴に其の聲を顫はせながら

『荷を外づしたぞいノ、荷を外づしたぞいノ』

と繰返して居た。＝如是閑

針木の雲　下

落したガンジキ

ガンジキには積んで間もない冬の雪を踏むのと、既に根の締つた春の殘雪を踏むのとの二通りある。冬のガンジキは、木の枝を楕圓形に曲げて作り、春のガンジキは爪を三本持つた鐵でこしらへる。冬のガンジキは柔かい雪を深く踏み込まない爲に穿き、春のガンジキは堅い雪を辷らない爲につけるのだ。我々が大澤の野營地を出發するに際して、銘々に持つて行けと宣告されたのは、言ふまでもなく、春の鐵(かな)ガンジキだ。蟹の胴のやうなものに、鋭い爪が鼎足的に三本立つた、さうして草鞋の土ふまずの處へ、結びつける環と麻緒のついた、隨分と不恰好千萬なものだ。それを仰向けて置くと、爪の鋭さは、一本々々何かを突き刺したいやうな血に渇いた樣にも見える。三本の爪の鎬を削るのが、觸るゝ物を摑んでそれを八ツ裂きにするぞと威嚇するらしくも思はれる。何の事はない、龍の畫の雲間に漏れる一本の脚を聯想せしめる鋭さだ。之を身につけるのか、と稍無氣味でもあつた、こんなイヤな物を穿かねばならぬのか、と歎息もして見た。針の木の雪溪、ことしは殊に殘雪の多い雪田の大偉觀、言はゞ山岳の床の間に白皚々たる雪景の大幅を懸けた自然の大廣間、そこへこんな不恰好なこんな無氣味なものを穿いて通ることが、果して滑稽でなく無作法でないであらうかを懸念もして見た。が、先達林藏の宣告は、此際大審院の判決よりも嚴として犯し難い。我輩は如是閑の穿く分と二對のガンジキを左手にぶら下げて野營地を發した。ぶら下げてるガンジキが相觸れて濁つた憎さげなガランガランといふ音を立てるのも不愉快であつた。

雪田にかゝる前に二三度川を徒渉した。振り返つて見ると、頂きの尖つた祖父(ヂヂ)岳だといふのが、更に祖父(ちゞ)むさくもなく、さも化粧を新にした若々しさで、正しい圓錐狀を突き立てゝゐる。それを撮影する爲に、場處を選定したりしてゐたので、一行には餘程遲れた。

間もなく雪田にとりつくと、緩勾配の踏み心地のよい雪の原だ。原といふよりは、態々人の踏むに都合よくした雪の床なのだ。堅くも柔かくもない脚ざはりの中庸を得た眞に藁蒲團のやうなものだ。暑さに熱し切つた身體は、其まゝの臥床にもなるのだ。我輩はこんな雪の床に、何のガンジキの必要があらう、通人の其道にかけての考案の過剩の例に過ぎない、と思ひつゝ、一行の休んでゐる土の露(あら)はな左岸に著いた。

其處には櫻が咲いてゐた。雪に押されて這つたやうになつた幹の、やうやう這ひ上つた形の櫻が、枝々一杯に花をつけてゐた。花の間に若い芽も吹いてゐた。花の色の桃のやうに赤みを帶びてゐるのも物珍らしく眺められた。

既に一息入れた人夫が、二三百歩進んだ時、我輩のぶら下げて來たガンジキがたゞ一對しか無いことを發見した。雪上の櫻を見た我輩は、更に通人の其道にかけての考案の過剩を信じて、落したのは結句厄介拂ひをしたやうに思つてゐた。ガンジキを落したと云ふ聲に、副先達の直吉が一散に驅け下りて行くのも、事仰山は思はれた。何處で落したか、落したら寫眞を撮つた邊だが、もう可なり遠い下流になつてゐるといふのも構はず、雪田の上をまるで鳥の飛ぶやうに飛んで往つた。如是閑も、ガンジキの落ちた音がした所を知つてゐるといふので、ヨタヨタ驅け出した。我輩はこの事體から超然として、一戸博士と一所に、眞逆の時は片片を穿くつもりで、そろそろ雪田を上りかけた。

白馬山(ハクバサン)の雪田を知つてゐる我輩は、白馬の雪田が、日本アルプス中でも、最も壯大なる雪田であると知つてゐる我輩は、針の木の雪溪を多少見くだしてをつたやうだ。もう此邊で盡きるであらうと思つてゐた左の谷の懷ろへ曲ると、其處には一層勾配の峻嶮な雪田が、今までよりはより長う、より高う、頭の上へ押ツ被さるやうに押し懸つてゐた。こゝに穗高祭の作り物にも幾千幾萬倍する長大な大蛇があつて、それが一杯に大きな口を開いたとする其上腭の裏面がありありと見えてゐるのが、これからの雪溪なのだ。穗高の里人が、大蛇の下腭の上へ踊り舞臺を立てゝ、五人十人が一所になつて踊つて見せるのと同樣、今の我々は其下腭の上を、一生懸命になつて辷るまいとあせつてゐるのだ。これは大變だわい、と少々怖氣ついて來た。最初は雪の床で人を釣り込んだ、山岳のペテンにかゝつたやうな腹立たしさも、既に鬱憤の漏らしやうもない、憐れ敢果ない運命に弄ばれてゐた。

若し此時落したガンジキが、再び我輩の手に戻らなかつたならば、我輩は其上腭にとりつく機會を失つて、身體は下腭に釘づけにされてゐても、心は穗高の里人とは別な踊りを躍らせてゐねばならなかつたであらう。＝碧梧桐

針木峠の頂上

雪溪を上り了うせた私は、緊張した努力から放たれて身の浮くやうな弛緩を感じた刹那、人夫の危難が、私の周圍の空氣を攪亂して、私の弛緩した感覺を震はせた。一同が其の浮き足から沈まつた時に、私も永く其の名に憧れてゐた針木峠の頂上に立つてゐる事を思つた、同時に私は或る偉大なる政治家が、演壇に立つて、其の脚下に惑亂してゐる群衆を見下ろした時のやうな氣分で、前面に重疊し交錯してゐる山岳の群衆を見渡したのである。

峠の頂上は、針木岳と蓮華岳との鞍部(あんぶ)になつて居て、平地といつては、其の細い脊の上に少しの凹地があるばかりである。信州側は私達の上つて來た雪溪の上部が平らな床を爲してゐて、越中側は崖のやうな急斜面の間に黒部(くろべ)川へ下る道が隱れてゐる。山の群が、音のない波濤のやうに起倒してゐるのは其の越中側の方面なのである。襲ひかゝる山の波を堰き止めるために、針木岳と蓮華岳の間に作られた閘門が此の針木峠である。

私は豫期してゐなかつた此の山の動態を觀て、不思議なものを見せられたやうな珍らしさを感じた。けれども其の珍らしさは、甚だしく私の豫想を損じなかつた。私は海岸に立つて果しない海面の動搖を見てゐる人のうつゝ心とは違つたうつゝ心で、此の峠の上から山の混亂を見下して、夫れを自然が人間を離れて誰れにも會釋のない時の、濶ろいだ姿であると思つた。自然が人間の鑒賞から離れて、樂屋に入つた役者のやうな自由を感じた時の、取り亂した姿なのである。

私は其の群れてゐる山々が一つ一つ名を以てゐる事を強ち不自然には感じなかつた。さうして其の山々が絡み合つて寢そべつたり、跳ね上つて相撲つたりしてゐるのを解放された自然の人間に見せない遊戲のやうに思つて、其の山々の名に一種の親しみを覺えた。藥師(ヤクシ)岳、赤(アカ)岳、黒(クロ)岳、三ツ岳、野口五郎(ノグチゴラウ)岳、槍(ヤリ)ケ岳、穗(ホ)

高岳等は、夫れ夫れ特徴のある態度で、山々の遊戯を見物すべく取圍んでゐる、其の肩越しに差覗いてゐるのは、乗鞍岳であらう。左の端の方からは霞澤岳、大天井岳、常念岳、燕岳、餓鬼岳なども頭を上してゐる。峠の後からは遠く白馬岳、祖父岳、鹿島槍岳、扇澤岳、大スバリ岳、小スバリ岳等が棧敷に並んだやうに肩を列べてゐる。

此等山々が作つて居るアンヒシアターの中に、七倉岳、北葛、舟窪、不動澤、南澤、烏帽子の山々が、足と頭とを絡み合つて轉がつてゐるやうに混亂してゐる。私達は其の山稜を或は波濤の上を行くやうに或は鋸の刃の上を渡るやうに行かうといふのである。

私は針木峠の路が、さうした山の混亂のうちに通つてゐる事を思つて、此の峠を人間の意味でいふ交通路から、人間を堰き止めた自然の安息の場所に通ふ峠であると思つた。此の峠の頂上の感じは、私には一方に出世間的の寂しさと冷たさとがあると同時に他方に世間的の賑かさと溫かさとがあつた。此峠を何方に下りるかゞ私の爲に夫れを決するものゝやうであつた。私は後を見ると、人界の自分を發見し、先を見ると私孤りの私が居ると思つた。

私達は針木岳に上りかけたが雪の爲に道を碍げられて、灰色の崩れ易い岩壁を攀ぢてゐるうち手間取つて、濃い霧に圍まれた。針木岳の信州側の急傾斜は氷河の痕跡てふカールであるといふが、方言でマヤグボと稱してゐる。其の凄じい半圓形の窪みは雪に埋もれて、其の雪から出る煙のやうな霧が見る見るうちに、私達の高く仰いでゐる峰を包んで、私達を夢の世界に包んでしまつた。私達は峠に引返して蓮華に向つた。十五日の泊は其の頂上の豫定であつた。＝如是閑

峠のバルコニー

針の木峠の頂上にヤツト攀ぢ上つて見ると、峠の向ふ側、方角でいふと西南に當る方には一片の雲もなくて、かねて牛を通したといふ針の木谷への道さへ九十九折りにありありと見えてゐる。さうして我等の上つた此方側には、峠の水平面に、如何にもブ厚な雪が、加茂の祭の掛出し棧敷か、伯林王宮のバルコニーかと言つた風に、可なりの廣場を作つてゐる。この棧敷に立つて見ると、信越國境の最北に當る日本アルプスの山々が、白馬の鋭鋒を始め、北城鎗、後立山、鹿島鎗、祖父岳、鳴澤、赤澤と、それそれ鉾を立て、騎物を擬して、けふの久々の晴れに行列を仕立てゝゐるとしか思はれない。このバルコニーに蔭んで、左右の峰々から放射する谷々の、この雪田になだれ込み落ち濺いでゐる襞績の輻まりを瞰下ろすと、形のない群衆が眼下に渦巻き立つて、聲のない叫喚を揚げてゐるやうな大氣のくるめきがある。

人夫の話によると、このバルコニー的廣場の雪は、やがて解けて無くなるもので、ことしの時候後れの爲に、まだかやうな春さきの様をしてゐるのだといふ。針の木越えに登山者を案内して、これ程の雪を見たのは、ことし始めてゞあるといふ。

尤もこのバルコニーは三和土で固めて、其上に石を敷いたやうな眞平ではない。一方蓮華岳の上り際に寄つて次第に爪先き上りになつて、他方針の木嶽の方に、なだらかな傾斜をしてゐる。こゝで一寸斷つて置かねばならぬが、針の木峠の頂上と言つても、名詮自稱眞に針の木の頭なので、蓮華岳と針の木岳の間に介在するといふよりも、蓮華岳と針の木岳の尾根の分れ目、たゞ尺寸の地に過ぎないのだ。普通に鞍部といふ、ほんの馬の背越しの鞍を置くだけの餘地なのだ。

我輩は其峠の土に爪先立ちしてをるよりも、この或る廣袤を持つたバルコニーの方が、立ち心地がよいので、姑らく左り右と、體操教師の態度で、雪の上を往つたり來たりしてゐた。見ると、バルコニーの雪の上には、今まで登つて來た雪田の雪が、其解け具合と、其上を渡る風具合とでこしらへたらしい波のやうな凹凸の絣目とは少し趣を異にした、一種の凹みを持つた縞目をなしてゐる。雪田の波紋は一波々々に角目が立つてゐる。さうしてそれが縦に横に斜に錯綜してゐる。バルコニーの縞目は、波と波との境目の丸味を持つた、さうしてそれが横に整然と略同じ距離に織り出されてゐる、雪田の絣目は、同じ敷石であつても、不規則な鑿目を省いた石の積み立てなのだ。バルコニーの縞目は、年古く舗かれた敷石を、何人かゞ同じ方面

に踏み減らした自然の凹みなのだ。雪田の絣目は、砂や埃や木の葉の彩るに任せてある。バルコニーの縞目は、いつか箒を使つたことのある掃き目が殘つてゐる。我輩は油然として湧いて來る雪女の聯想を、それからそれと絲巻の絲をほぐすやうに後を追つた。

「北越雪譜」にある、月の明らかな夜、降り積つた深雪の中に、白衣を裾長に引いてゐるといふ雪女が、山には往々に口碑の殘る猿馬場(サルババ)とか、猫の踊り場とか、いふ風に、このバルコニーに現れたのではないであらうか。「腹つゞみ妖怪全書」といふ書には「雪女郎の舞臺顔の美しさ」と時代的に洒落れた文句を並べてゐる。が、このバルコニーの位置からいうても、雪女がたゞスーツと現れたきりで、澄まし込んで立つてをらうとは思れぬ。舞踏といふ程でなくとも、このバルコニーにふさはしい舞の一手をかざしたといふことが、餘りに不自然にも感ぜられないのだ。其縞目は、其足跡ではないであらうか、其箒使ひの跡は裾の摺目ではないであらうか。＝碧梧桐

蓮華嶽

我々が針の木峠を見棄てゝ、一歩蓮華嶽に取りつく時の心持は、丁度鞍の乘り工合に馴れた馬を騎り棄てる時と同じであつた。今迄未熟な騎手の心をも迎へて、左までに不愛想に振舞もしなかつたのであるが、乘り換へた新しい馬はどんなツムジ曲りであるかも知れない、と云つた不安も伴つて居た。

取りつきの崩れ易い砂を踏み占めて手に觸れる偃松に縋つて、一歩一歩をエンヤラヤツと運んで行くザラ場、それは其後二三日間、北葛、七倉、東澤の諸峰の國境線を行く「偃松の拷問」と名づけた枝の蟠屈する中を泳ぎ漕ぎするものに比しては、何等言ふに足るものでなかつたとしても、新たな馬背に手を懸た身に取ては、其嫌な乘り工合、それが唯だ今後に起伏する波瀾の前提としか受取れなかつた。

が、其の不安は軈て我々の杞憂に過ぎなかつた、さる杞憂を懐いたことが寧ろ滑稽を感ぜしめた程、打つて變つた踏み易い山になつた。我々は新たな毛並の美しい女馬に乘り換へてゐたのであつた。

總てが輝石安山岩の破片であらう、鹽煎餅に似た薄いガサガサな石原になつた。それが踏む度に崩れるやうな唯振り撒いたものでなくて、土臺の締つて居る、根はコンクリートで固めたらしい石の堆積であつた。それが痩せ尾根めいて削ぎ立て居るのでなくて、太い丸味を持つた豊頬を思はしめる山の脊梁であつた。偃松の低い緑が其の小石を綴つて居る間に、今迄見ることの出來なかつた草花が、一歩を轉ずる毎に微妙な色彩を散點せしめた。白い冷たいつやつやした花もあつた。眞紅の筒型をした花のギザギザに切れた、火焔を想像せしめる花もあつた。黄の濃い黑斑の混つた、お互に物を咀くやうに群生して居るのは、我々の辛うじて名を知つて居る菫であつた。其の中を、風も吹かぬのに、又此の邊には有り得べからざる木の葉が飛ぶと思つたのは、妙に澁い枯色をした蝶々であつた。蝶々は偃松にも、石の間にも、又草の上にも、三つ四つが飛び交はして居た。下界で見るやうな、色の裝飾をした長閑な蝶々でなくて、何の愛嬌も素氣もないソヽクサな蝶々であることも、兎もすれば山を恐れやうとする我々の氣を引き立てた。

嘗て白馬山で、其の古代の樂器に似た花の形、其の淡紅色の底深い色彩、さうして其の葉の人參に似て更に藥草味を帶びた床しさに驚歎した駒草も、唯石ばかりの高原の脚下に見出すやうになつた。それは唯愉快なる花の色でなくて、濃艶なる幽玄趣味を漲らして居るものであつた。世間的色彩の中に、出世間的我を見せしむるものであつた。我輩は改めて其の花を見詰めて、昔と同じ驚歎の胸を躍らせた。

何時となく峰ともつかず尾ともつかず、丸味を持つた一つの頂に辿り著いて居た。振返つて見ると針の木峠からは見る事の出來なかつた立山(タテヤマ)の連山が針の木、スバリの連峰の上にニヨツキと頭を突き出して居た。劒嶽(ツルギダケ)の鉾(ほこ)の群衆のやうにギザギザしたのも、雄山の鎧の片袖を思はしめる、其の縅(おどし)の絲の雪白な一々の縅目の鮮かなのも、我と殆ど鼻すれすれに立つて居るのに驚いたのだ。針の木岳の中腹で、立かゝる雲間にチラと見た、それ等の連山が、今は何の憚り氣なく全容姿を露出して居るのだ。其の光背(くわうはい)と立騰(たちのぼ)る眞白に燃ゆる雲も、次第に影を潜めて、夕の靜かさを支度して居るやうにも見えるのだ。アルプス地帶中でも、東に高瀬(タカセ)の溪谷西に黑部(クロベ)の溪谷、此の兩溪谷は、郊外電車の市内の引込線のやうに、深く深く山岳の骨組にま

で割込んで居るのである。其の大溪谷黒部さへ、今は我等の眼から奪ひ去られて、針の木連山と立山連山と唯一つの屏風になつて我等の額の前にそゝり立つて居るのである。驚いたと云うても、其の威容の嚴肅さに打たれたのではない、其の平和な親しみ易き溫容に面喰つたのであつた。

立山の左に伸びた尾根傳ひに、今迄目馴れて來た黒岳(クロタケ)續きの赤牛(アカウシ)と略ば相似た。赤牛が耕牛なら是はゼルシー種の乳牛とでも云ひたい、更に大きな背をなして居る山が横に這つて居た。それは云ふまでもなく、越中の藥師(ヤクシ)岳なのだ。藥師と立山の間には五色ケ原の高原も見える。其の右下にザラ峠も見える。ザラ峠は針の木越の時に、立山溫泉に越す唯一の通路なのだ。其の右上に龍王(リウワウ)と云つたか、立山の淨土(ジヤウド)山續きの突起も立つ。それはいづれも立山の主峰に隷屬する婢僕の態度で、唯々として命を聽いて居る。立山の溫容を傷けるものでなくて、更に山の溫みとやさしさを附け加へるものであつた。

ずつと見廻すと、針ノ木峠で既に忘るべからざる印象を與へた南端槍(ヤリ)ケ嶽から、北は白馬(シロウマ)の端に至るまで、これでアルプスの大パノラマは完成したと言ひたげに開展して居るのだ。吾等はアルプスの赤道の上に起つて、其南極をも其北極をも見透して居る、其膝下に据られた膳部の御馳走に一として箸のつけられないのがない、謂はゞ餘りの大饗應に先ず飽滿の情に堪へない最初の經驗を十分に味つた。

蓮華の頂上手前のなだらかな頭に、案内者も曾て見たことのないと云ふ大雪田が殘つて居た。一方は籠川の谷にずり落ちて居る凄じい峰頭ではあつたが、雪の消えて居る石原は、偃松の間に石楠木(しやくなぎ)の咲く、吾等の來るのを遠くの昔から待つて居たと言はぬ許りの平地であつた。人夫は逸早くそこに天幕を張つた。如是閑のアルペンストツクで雪の融けつゝある水を溜めようと、石原をガチガチ掘る音も勇ましく聞きなされた。＝碧梧桐

蓮華といふ名

「蓮華は大きい山ですぞ、へー、こゝが頭かと思ふとまだ先きにある、まだ一つむこにある、本統に大きい山ですぞ、へー。

林藏がこんなことを言つてゐた。我輩は輝石安山岩の破片がガラガラに積み重なつた頂上の近い、賽の河原とでもいふ處を強い日光に晒されながら、一歩々々をゆつくり運んでゐた。偃ひ松はもうこの邊には跡を絶つてゐる。青い芝に似た草が處々にかたまつてゐる。始めて見る黄色い菫が二本三本づゝ眞盛りの花をつけてゐる。駒草の薄桃色もとびとびに見え出した。かういふ草の離々としたガラガラな石を踏むのは、丁度白馬(シロウマ)の越中乘越(エツチウノツコシ)から其石室を經て、三角標のあるテツペンに登る道と大差はない。かういふ頂上近い道になると、いづれも似たり寄つたりのものだ。白馬に上つた時は、道を知らない越中の案内者が、散々一行に不安の念を驅つた後であつたから、たゞわけもなく嬉しさに、躍り上つてゐた。さうして其日すぐ麓の北城(ホクジヤウ)に下つてしまふといふ前途の希望に昂奮してゐたから、ガラガラな石が安山岩であつたか、花崗岩であつたか、草は何であつたか、どんな花をつけてゐたかも、ろくろく質してゐる遑もなかつた。が、けふはこの頂上近い處に野營をする豫定であり、天候は大凪ぎの保險つきであり、それに尚多くの危險と困難を日程の中に抱擁する自重すべき時期であるので、一歩から一歩に轉ずるにも、如何にも餘裕のある、我ながら悠然たるものだ、と自問自答しつゝ、身の九千尺近い山巓にあることを忘れてゐたのであるが、いつか林藏の言つた詞を思ひ出して、白馬山を越中方面では大蓮華(ダイレンゲ)、其從峰朝日山を、同じく小蓮華といふことに考へ及んだ。

さう言へば、この北日本アルプスの連嶺中には、蓮華を名に呼ぶ山がいくつもある。丁度槍を名に呼ぶ山がいくつもあるのと同比例である。中でも白馬の大蓮華、針の木の――現在我々の踏みつゝある――この蓮華、それに此度の第六日の日程中に含まれてゐる信越飛三州の國境に中る蓮華岳、この三つが聞えてゐる。槍は形の上から來た名であるから、其名の由來を尋ねるまでもなく、誰にも簡單明瞭であるが、蓮華といふのは眞逆に蓮の花の形をしてゐるとも解されないので、山の名前に困つた時のとつておきの名である如く、殆ど無意味に呼ばれてゐるとされる傾きがある。尤も、かゝる深山大澤は、昔諸國修行の僧によつて開かれた歷史があるので、總てに佛法臭い名前のつけられた慣例がある。噴火口の跡を地獄と言ひ、小石のガラガ

ラな原を賽の河原といふ如きで、四萬六千日の當日でなければ餘り口にしない名までが、どこの高山にも既に通有の名詞になつて、地獄賽の河原がどんな處だといふ位の概念をさえ作つてゐる。自然蓮華といふ名も其同列で、佛説に因む由緣に胚胎してゐるといふことは爭はれない事だ。が、山の頂上の朗らかな眺望があり、そこに登山的滿足の胡坐をかくといふので、蓮の臺をきかしたとするのは隨分と理窟ツぽい。若し地獄の熱閙に對する極樂の意味であるとすれば越中立山の如きは、立山禪定（タテヤマぜんじやう）として殊に聞えた山であつたから、疾くに蓮華と呼ばれてゐなければならない筈だ。のみならず、蓮華と呼ばれる山に、どれも別に地獄のつきものゝ無いのを以て見れば、さる意味上から出た名前だとはどうしても想像されない。他に何か直覺的に來る實際らしい理由はないであらうか。

之を白馬の大蓮華にしても、杓子（シヤクシ）とか北城（ホクジヤウ）鎗とかいふ特別の名のあるものは兎に角、其從峰中には名のつけやうのない突起がいくつもある。大蓮華が多くの從峰を供につれてゐるのでなくて、多くの山の寄り集まりの中に、大蓮華の一番高い突起があると見た方が、山としての狀況には適切なのだ。其山の寄り集りも、一峰々々が深い鋭い谷を隔てゝ各が孤立するものでなくて、淺いナルイ凹地はあるものゝ、それは大洋の穩かな日のウネリのやうに、ノタリノタリ起伏してをるので、さも山々が手をつないで聯立するものゝ如き親しみを持つてゐるのだ。今我我の踏みつゝある蓮華も、最初の一峰にとりつくまでは、可なり這ひ松にすがらねばならぬほど嶮阻であつたが、其頭に攀ぢてからは、左右の崖に膨らみのある、言はゞ肉づきのいゝ肩を渡るやうな小石の磧になつた。幾分の下降と上昇はするものゝ、それは肩胛骨を覆ふ肉瘤の起伏に過ぎないのだ。信越飛三國の國境に立つ蓮華も、こゝから遠望すると、まるでバアクシヤ種の乳豚の水平的背線を引いてゐるやうだ。この三つの蓮華の形から歸納して、一つの峰ではあるが、其頂きが、孤立にならない程度の數峰に分立してゐる、言はゞ何處を其頂點とも指示し難いやうな、さうして他に目に訴へる色なり、頭に訴へる性質なりに特徴のない、何處ともなく親しみ易く近づき易い山に、蓮華の名を與へたのでないであらうか。卽ち、其外形に矢張蓮華の名を生む理由が存在してゐるのではなからうか。

これが蓮華の名に由る、此度の登山によつて得た我輩の研究の一つだ。＝碧梧桐

蓮華の峯傳ひをして、山頂の高原ともいふべき平地を三人でぶらぶらやつてゐる。蓮華の頂上には三角點の跡があるといふから、今一上りする向ふの峰が其頂上であらうなど語つてゐる左側に、こんな山の頂きには殆ど有り得べからざる可なりの凹地がある。まるで山の頂を藥研に掘つて、そこを鍬と鋤とで手を入れた、手短く言へば、四方に風防ぎの障壁の立つ自然の避難所になつてゐる。人の數にしても、少くも四五十人を容るゝに足るであらう。それに野營地に無くてかなはぬ必要條件の水、其水の代用をする雪も、藥研の一方口を出た處に、ナイル傾斜で約千疊敷も殘つてゐる、今夜の野營地！と三人の口から同時に歡びの叫びが出る。蓮華頂上の野營、といふ豫定を作つた時、草も木もない突兀とした山の上に、この支柱の弱々したテントを張るのは、大道でする輕業の一本竿のテツペンの藝當のやうだ、と其のテントが山岳の一塵埃の如く不自然に乘つかつてゐる處を竊に客觀視してゐた心持が、この避難所を發見して、改めて又新なものゝ如く想ひ出される。我等は尚其邊散步がてらに、七八町も進んでゐると、林藏がいゝテント場を見つけたというて呼びに來た。それは先刻承知のことだと、先きの避難所に引返して、殘雪のある藥研の口から軟かい草を踏みつゝはいつて行くと、我輩の足もとをチヨロチヨロ掠めて片方の偃松の中にかくれたものがある。何だか黄色いワタワタな、黄繭を卵なりにふやかしたものだつた。其中又ピーピー泣きながら走つて行くのは、慥かに鳥の雛なのだ。英語では鳥の雛の雌雄いづれともわからぬ時はシー（彼女）といふ代名詞を使ふやうに覺えてゐる。同行した人夫の荒くれ男の外には、其代名詞は英語の發著もギゴツチないヂエイの外には、總べての女性らしいものと自然に緣を斷つたこの無人境に、シーの厄弱（かよは）い姿と、シーの蚊細い聲を聞くのは、眞に豫定のプログラム以外に、視聽を蘇生せしめる舞踊と音樂の挿入されたやうなものだ。雛は姑らく藥研の土手の小石の上を敏捷に走つてゐたが、我輩の姿に驚いたものか、いつか偃松の中に隱れてしまつた。と見ると、我輩を三間とは離れてない處に、鳩を大きくした、山鳥を小さくした、羽色の茶と黒の段だらに染んだ一羽の鳥が、さも注意深い樣子で立つてゐるのだ。時々ゴツゴツと濁つた喉聲をして、蹴合ひにかゝる

前の軍雞の態度で、優然といふよりは、さも嚴然としてあるいてゐるのだ。相手の驚かない樣子に比して、そを迎へた我輩の方がどれ程とり亂してゐたであらう。やうやう其翼の端の方がまだ眞白で、丁度レースで白く緣どりしたやうになつたのを見出して、鳩でも雉でも山鳥でもない、この日本アルプスの雪線に栖む雷鳥だといふことを知つた。二三十步後れて來た如是閑を靜かに靜かにと制しながらそこに雷鳥のをることを語つた。この際この鳥をどうしようといふ咄嗟の考へは浮ばない。二人で又姑らく、其の鷹揚な樣子と睨みくらをしてゐた。相變らずゴツゴツ喉を鳴らしては、一步二步を轉じて行く。立山越しの穩かな夕日、一日照り輝いてもまだ照り足りないやうに、名殘りの一線をも投げかけようとしてゐる夕日の輝きを背景にして、張り切れさうに首を延ばした雷鳥の姿は、眞に舞臺一杯になつてゐると言ひたいのだ。少し後れて來た林藏と直吉は

『雷鳥なら、ワシ等がとらア。

と馬鹿にいきり立つてゐた。我々はそれに關はないで他の人夫共の選定した、この藥研の避難所とは、千疊敷の雪一つ隔てた向ふ側の野營地に引上げた。其處には更に靜かな穩かな夕日が、我等の住居の中庭にさすものゝ如く地上に擴がつてゐた。雷鳥が巢立ちの雛をつれて、言はゞ親らしい逍遙遊びをしてゐるといふことが、この雪線以上の穩かな夕日に織り込まれてゐる天の慈味でないであらうか。＝碧梧桐

第一の難關

きのふ日暮に、明日行くべき峰傳ひの見透しをつけて、かう蓮華の尾根を下りて、北葛乘越（キタクヅノツコシ）から其頭に、北葛の峰を下りた、七倉（ナヽクラ）にかゝらうといふ處にザラ砂のクラがある……ナントまア鎌の齒のやうなクラぢやないか、インにやそれよりかう蓮華の尾根が馬鹿に岩立つてゐる、あの岩をどう下つたものか、と思案に餘つてゐた、其かう蓮華の尾根を下りる岩組みが、今眼前に差迫つてゐるのだ。

針の木峠からとりつく表方面の蓮華は、比較的に女性的な、踏み心地のよい砂か、安山岩の磧であつたものが、この裏方面の蓮華は、輝石安山岩でも、こんな岩組を露出するかと疑はれやうな、肌荒な大岩奇石がニヨキヒヨキ突立つてゐて、馬鹿に男性的に緊張してゐる。さうしてそれが、四十五度以上の角度で、馬鹿に急勾配を削ぎ立てゝゐるのだ。始めて人を阻む、此行冒嶮の第一關門に出會したのだ。岩の形も尋常なのは一つもない。風の鋸と、雨の鎗先きと、それに雪の鐵板で散々責めさいなんだ苦患と叫喚とを印する、大惡鬪の遺物なのだ。身を伸して下を覗いて見ると、巨大な醜怪なつぐね芋めいた頭を突立て突立て、交互に錯綜してゐる岩の一つ一つが、己れ通さねえぞ、と大町訛りの語尾の「へー」などは抜きにして、さも頑張つて叫んでゐるやうだ。

人夫共は、かういふ難關を、ワル場とか難場とかいふ。さて難場に來たとすると、それをどう行くべきか、どう潛りぬけるべきか、又其の難場を避けて、他に道を求むべきかに、先達としての責任を重んずる一大思量を費すのだ。一つ間違つて、飛んでもない處へはいつてしまへば、お客樣を困らせるよりも、其先達としての技倆の信用を失墜することが、彼等の堪へ難い苦痛なのだ。彼等の山案内も、半分は山好きの道樂に過ぎないが、かういう難場、それもまだ一度も通つたことのない、程度の知れない難場に出喰はしては恐らく地球上にまだ知られない發明をする位の、彼等にとつては命の縮まる思索と考量とに耽けるのだ。林藏は背負つた荷物を卸ろす間も、左右に鷹のやうな目を配つて、「オイ、黑！」と直吉を呼んで何やら相談してゐる。

岩組の右側は、下に下に尚ほ聳立する岩があつて、それが中凹になつた程の懸崖をなしてゐる。どうにも足の踏み場はありさうにない。左側は偃松で盛り上つてはゐるものゝ、其の偃松を少し漕いで行けば、下には草ずりの踏みよさゝうな凹が見える。あの凹にとりついて、さうして左側の脇をマクやうに行けばこの難場もどうにか切り抜けられさうに思はれる。

岩の影に姑らく身を沒して、道の瀨踏みに下りて往つた林藏は、上の方に待つてゐる我等を見上げて

『大丈夫ですぞ、ナアに樂に行ける』と怒鳴つた。さうして右側にも左側にも曲らないで、矢張り醜怪な

岩の間の、この尾根を縫うて行かうといふのだ。岩の頭にすがりついたり、其の脇腹を這ひ渡つたりするかと思ふと、身を沒する偃松の中を潜つたり、脊の低い唐檜(たうび)に身を吊つて四五尺の高さを辷り落ちたりする。さうかと思ふと、蓮華の頭にあるやうな、がらがらな小石の原があり、砂と石とでずるずるに辷る崖もある。が、どうかかうか綱も下ろさないで踏んで行ける。イヤ危ない藝當がつゞけてやつて行ける。かうなつて來ると、もう他人がどうだといふやうなことは顧みて居られない、もう自分一個をどう處分すべきかの問題以外に頭を往來するものは無くなつてしまふ。絶對な個人主義ではあり得ない。が、我々の頭に往來する考へが、主として個人主義が基調になつてゐることを爭へないのだ。こんな時に、犧牲的精神で、自分はどうなつてもよい、といふ如きは、頭に往來する考への基調を糊塗した、道德の虚僞でなければならない。林藏は先達として我々の生命を與つてゐるやうなものゝ、かういふ難場に處しては、矢張自分自身がうまく切り拔けたい一心で行動してゐるのだ。林藏も個人主義、我々も個人主義それでよいのだ。イヤ其個人主義の基調が嚴然と存在してゐなければ、其個人主義同士の接觸して生ずる社會道德も確立しないのだ。こんな山の中で社會道德もないとは言へ、小なりとも十人の人間が、一社會を形づくつてゐる事は慥かだ。外に人類のないこの山中では、ノアの時代よりも遙に進んだ社會を形づくつてゐるのだ。それにつけても、今日の個人主義を惡魔か何かのやうに恐れてゐる、今日の多くの政治家教育者宗教傳道者等は今少しこゝの眞理に徹底する必要はないだらうか。彼等は常に道德の基調となるべきものを無視して、其基調の接觸上に生ずる末端に拘泥してゐる。そこに目が覺めなければいつまで經つても、思想上の問題に根本的解決のつけようはない。かういふ命がけの其基調と末端との色分けの最も鮮明に理解される場所に來て、自分の頭にどんなことが往來するかを十分に研究する必要があらうといふものだ。

先達が又た停滯した。又た瀨踏みに下りて行くらしい。振り返つて見ると、何處をどう下りて來たのかわからないが、嘗て上の方から見下した醜怪な岩石、己れ通さねえぞ、と叫んでゐた岩共が、今は背ろを見せて、たゞ底深い沈默で我等を威嚇しつゝある。通さねえぞ、と叫んでゐる動搖には、ナニ通つて見せる、といふ反抗心の賑やかさがある。たゞ永久なるべき沈默で見守つてをられる靜止と寂寞には、我等も同じ心に引き入れられてしまふ淋しさが伴つて來る。最早行くことも歸ることも出來ないのではないか、左側の草ずりの凹に辿りついた方が安全ではなかつたか、といふやうな暗鬼も襲つて來る。

が、それは石を落しては先に下りた者が危嶮だといふ、ザラザラな踏み場のわるい角の立つた石の崖に逢著したので、一人々々十間餘りの處をズラらせてゐる爲に手間どつてゐるのだ。北葛乘越がもう脚下に見えるやうになつては、よしんば岩石の裂罅で肩や腰をガリガリずらせた處で、又それが爲に、洋服やシヤツを引裂いた處で、もう難關通過の大安心に比べては、物の數にも足らない出來事なのだ。「ヤレヤレ」と吐息をつくのが關の山の一行は、北葛乘越に圓坐を作つて休みながら、言ひ合はしたやうに、今下りて來た岩組を、たゞ氣拔した顏で見上げてゐる許りだ。前途はまだ遼遠であるとは言へ、先づ第一の關門を無事に通過した歡びは、氣拔けしたというても、それは華やかな麗かな日永顏なのだ。＝碧梧桐

北葛岳、七倉岳、葛倉キレト

北葛乘越に一休して後に、すぐとりついた山は、先達林藏も明白な説明を與へなかつた。たゞ北葛澤(キタクズサハ)の頭(アタマ)とのみ言つてゐた。何々のアタマといふ方が、何々のノツコシなどゝいふのと關聯して、所謂ローカル・カラを帶びてゐる、ノツコシを鞍部と意譯したり、アタマを何々岳と命名するなどは、山を踏み荒らす都會人の一種のローカル・カラの征服に類する、と我輩はかねて主張してゐたのであるが、實際山に入つて、何々の頭を口にしてゐるのは、言ひ馴れない者の舌に甚だ煩はしいこだはりがある。それで何時となく、北葛澤のアタマを、簡單に「北葛岳」と呼んでゐた。

北葛岳の頂上に立つて見ると、其尾根は長く左にも出張つてをり、又右にも延びてゐる。左の出張りは長く、右の延びは短い、片々なV字形に峰分れをしてゐる。が、長い左線の果は、其眞下に迫る高瀨谷で中斷されてゐるので、我等の行くべき道は、短い右線の方向であることが首肯かれる。一行が山の中腹で、大町

平らなどを見下して休んでゐる間に、獨り其頂上に辿り着いた我輩は、これだけの觀測をして、さうして、皆に右へ這ひつくやうに注意した。

其右線のアタマから削ぎ立つた尾根を下る時から偃松の拷問は始まつた。下るに隨つて偃松が高くなる。幹が大きくなる。頭から身を沒するやうになつては、基幹を足で探りながら、其枝に身を吊つて下るの外はない。時には踏む足場をドンと落されて、其まゝ絞首の刑に會ふことも度々なのだ。辛うじて急勾配を下つたと思ふと、其處は樺林の丈の立つ熊笹原だ。五段目の猪が稲村を潜るやうにして、其葉ざはりの獰猛な音をガサガサザワザワ立てゝ行く。

かういふのが山の者のいふヤブ潜りなのだ。ヤブ潜りは、何よりも其脊負つた荷物を引かけるので、人夫の最も行き悩むものになつてゐる。假令多少の迂廻路でも、ヤブ潜りを避け得るならば、其方が却て捷路のやうな顔を平氣でして見せる位だ。が、左右の谷のせり上るたこの一筋の脊梁線、其左右の谷は更に樅栂(もみつがかば)樺などの欝々たる森林で、到底一歩も踏み込めない大ヤブである以上、血路はたゞ一つこゝに開かれねばならない。偃松の拷問を手輕く脱し得る輕罪者と、いつまでもそれに捕つてゐる重罪犯とでは、一條の血路を行くにも、もう散り散りばらばらになつて、互の聯絡も絶えてしまふ。呼子を吹いて方向を警めたり、注意を與へたりするのも、亦苦患の中の樂境であらうなどゝ苦しい慰安を強て求めしめる。かういふ時の先達の足は殊に神速を極めるものだ。

散り散りばらばらになつた一行が、とある林の中の草場に集合したのは、きのふ針の木から見透して置いた、鎌の齒のやうなクラのアタマに出たのであつた。我等の行きついた時は、既に林藏が其瀬踏みに渡つてゐたらしい。ガラガラ石の落ちる音がする。濠々と砂烟りが立つてゐる。

斯るクラのアタマをキレトと言うてゐる。灰色の砂と石とが、丁度二枚立て合せた板の上から振りかけられたものゝやうに、兩方の谷へずり落ちてゐるのだ。下の方に落ち溜つた石礫も、尚何處までも落ちんとする運動をしてゐる、キレトに蔑む兩方の崖も、刻々に剝落せんとする戰きを見せてゐる。さうしてこのキレトを渡る何者をも其渦中に卷込まうとする魔力を顫はしてゐる。

キレトを辛うじて渡つた一行は、すぐ又七倉澤のアタマだといふ七倉岳のヤブを潜らざるを得なかつた。

途中殘雪を發見して晝飯を喫した後、七倉岳の頂上に又偃松の拷問をつゞけて行つたが、それでも人夫の二三人が雷鳥を追つかけたりするだけの餘裕はあつた。

こゝで一應辨じて置かねばならぬことは、北葛岳、七倉岳と我等の稱へて來た山の名稱である。我等は曩のキレトをも、位置を知る便宜の爲に、之を葛倉(クツクラ)のキレトとさへ呼んでゐた。が、中村清太郎氏の「山岳」雜誌の地圖にも、亦先年此處を通過した榎谷徹藏氏の記録にも、北葛岳といふものがない。中村氏のは「北葛の頭、(乘鞍岳)」と記してあり、榎谷氏は「七倉岳」として、全く北葛の頭を省略してゐる。さうして榎谷氏は我等の七倉岳とする者に「不動堀澤岳」といふ名前を與へてゐる。(中村氏の七倉岳と記するものは、我等の七倉岳と一致す) 我等は強て山岳に一定の名を欲するものではないが、この國境線を通過した唯二の榎谷氏と我等とが、其の名稱を協定して置くことも、むつかしく言へば一種の山岳道德であると思つて、親しく榎谷氏を尋ねて其意見をも聽いたのであつた。尤も右の七倉岳の所在に就いては、既に數年前山岳雜誌上で論難したとのことで、榎谷氏は大町よりの眺望、案内者玉作又七等の證言、實地の踏査等によつて、自己の命名を正當とは信ずるが、併し名稱だけの事ならば、強て主張しないとの事であつた。若しそれが高瀬の一分派なる不動澤を精密に實測した上で、それがいくつ分派をなしてをり、又た夫發源が何處々々であることを明かにせられたのであれば、我等も其説に服從することに敢て吝かならぬのであるが、遺憾ながら榎谷氏の説も、國境線通貨の時の概測によつて定められたので、尚校合の餘地は十分にある。それで我等は、その判決を今後に待つことゝして、何人にも早く了解され易い、鞍部のノツコシと相對する名前を選んで、山中口になれた通り、北葛岳、葛倉キレト、七倉岳と呼んで置きたいと思ふのだ。 ＝碧梧桐

Ｓ而形とW字形

山岳の連亙する様は、或る場合村落の配置に似てゐる。何村といふ總稱はあつても、其中には、散在する大字小字がある。若し大字小字を一つも踏み落とすことなしに其村落を通過しようとすれば、それは複雑に彎曲した弧線を描くに相違ない。それと同じ様に、信越國境の山脈というても、それが小中學の地理書などに出てゐる單純な直線をなしてゐないことは何人にも想像し得られやう。大小チグハグな蛇行線を劃して、呼べば應へられさうな處が、大迂廻をしなければ到達し得られないやうな所が隨處にある。それを簡單に説明すれば、Ｓ字形をなしてをるといふのだ。村落の道であれば、耕地整理的な、若くは露國皇帝のモスクワ、ペトログラード間の鐵道の豫定線のやうなワキ目も振らない一直線を引いて、そこに人道でも車道でも勝手に通ずる事が出來得るが、山岳のＳ字形は、左右に深い谷と、危嶮な崖が掘り込まれてゐる。一旦Ｓ字形の其一端に立つた者は、否でも應でも、其字形上を一分刻みに踏んで行かねばならない運命を脊負はされる。丁度高い横木の運動具に放り上げられた新兵が、其梯子をとり去られて、是が非でも其横木を渡らねばならぬと同じ様だ。それは併し山岳の横斷面であつて、鳥瞰圖的に見下した時の狀況であるが、山岳には尚別に、村落の平面地の有しない立體方面を持つてゐる。それも横斷面と同じやうに、大きな山にはそれぞれの名前はあつても、其外に大字小字的に存する名もない突起が無數に起伏する。之を縱斷面としてわかり易く言へば、或はM字形をなし、又たW字形を形づくつてゐるのだ。試みに横斷面Ｓ字形と縱斷面W字形によつて、用器畫の投影を作つて見れば、山岳が如何の實質を持つてゐるかゞ略わかる。尤もそれは單なる國境線の、全然幅員を除外しての話であつて、假令ば山岳を屛風の如き脊も腹もない物に見立てゝの説明である。若し山岳の擴げてゐる翼、尾等を勘定に入れようとすれば、それは到底羅馬字などの形容し得る所ではない。が、今度の信越國境線の縱走は、殆ど一歩も國境線以外に出たくとも出ることの出來ない程、足の自由を束縛されたものであつたから、Ｓ字形が示す横斷面を、W字形が示す縱斷面に連れて、迂廻し上下したと言つても大なる誤りではないのだ。殊に新製五萬分一地圖にも、名前の記してない、この國境線中の暗黑境に立つ、北葛澤の頭――我等は之を北葛岳と呼ぶ――、七倉澤の頭――我等は之を七倉岳と呼ぶ――、それから舟窪乘越の頭――我等は之を舟窪岳といふ――等の、言はゞ蓮華岳以南の不動岳に至るまでの――之を蓮不間國境線といふべきか――國境線は、其Ｓ字形に於て、其W字形に於て、就中複雑な、さうして字形上より言へば畸形な迷妄な狀態をなしてゐるのだ。

それに實際山を踏むと、人跡を絶つたこの蓮不間國境線は、大體に足手に絡みつく偃松で覆はれてゐる。偃松の拷問は、少しも其手を緩べない。それに山と山との間には、さも山の縁を絶つかの如きキレトの難場がある。眞に交叉線に使ふレールのやうに、兩側から山の肌を磨り減して、その刃の向きに押し立てゝゐる。絡みつく偃松は、言はゞＳ字を華文字にして、それに朝顔の蔓見たいな飾りを纏はせたやうなものだ。キレトの難場は、W字の中央のＶ字の逆さになつたものと、左右の傾斜面との縁を切り放したやうなものだ。華文字のＳ字形、切れ切ればらばらになつたW字形、それがこの國境線の象徴である。＝碧梧桐

夜叉澤

七倉岳の頂上で、直吉が雷鳥を取つて來た、というて我等の前に誇り顔にぶら下げて見せた。前日蓮華岳でとり損じた復讐をやつたやうな氣分が、眉宇に閃いてゐる。林藏が、何だか偃松臭いもので、餘り甘いものぢやない、と打消しに力めても、我等の味覺は、今夜の燒鳥の御馳走に扇動されざるを得ない。豫定の野營地舟窪乘越まで、まだ日のある中に著かねばならぬ、と大きに勇み立つてをる上に、樺の大樹の林の中を潜る道は、今迄のピリピリ照りの尾根越しに比べては、何だか人を蘇生せしめるやうに冷や冷やする。

『何だか道が馬鹿に樂ぢやないか。

『へー、この邊は……案外なもんで、へー。

一方左側は、七倉澤の眞白な花崗岩帯と見える山の脾腹が、土砂のずり落ちた跡の生ま生ましい色を露出してをつて、それが眞白に目まくるしい程の急勾配で高瀬入りの谷にどつと吐き出されてゐる。さうして其

崖には一面に鉈目をつけたか爪で引掻いた襞褶が、縦にも横にも斜めにも滅多矢鱈についてゐる。目に餘る爪の跡は、まだ其のホメキの冷めぬものゝやうに陽炎ひつゝ、吹き上ぐる風は目にも腥い。其瀧長(たきなが)の澤の頭から裾まで切りつけられた縦襞褶(たてひだ)の中には、絶海の孤島的にまだ眞青な草と樅栂類の針葉樹とがへバリついてゐる。それがさも斯くさいなまれない昔のこの澤の欝々たる様を物語り顔でもある。猪の蹄の跡を見つけて、四つ足でさへあるいてゐる、と空身なら行き得ない處はないと威張つてゐる案内者も、この澤許りは、骨まで粉微塵になつてしまふと悚毛を顫つて眺め下ろした。が、この尾根傳ひは、一方右側は針の木谷に落ちてゐるらしい、言はば劒の刃渡りのテツペンではあるけれども、案外にナルイ、草づきの瑞々した風薫る道が開けてゐるのだ。人の踏んだ道があるのではない。たゞ今迄の偃松の拷問とはうつて變つた別世界をなしてゐるのだ。七倉澤の腥風に面を煽られながら、其恐ろしい谷に落ちる心配もない、それとは沒交渉に通過し得る樂な尾根なのだ。

こゝにどんな難場があらうと、誰に文句の言ひやうは勿論ない。信州側の其爪の跡が、越中側にも其餘勢を伸べて、こゝに理想的のキレトを現出してをらうと、それを訴訟に持ち出すことも出來ないのだ。「へー、案外なもんで」といふ林藏の詞には、包み藏されない喜ばしさが籠もつてゐるのだ、と我々の足も自然に浮き立つて來た時、遙に遲てゐた如是閑が、一寸待つて呉れと言ひ出した。腹を病んでどうにも苦しいといふ。さうして、自分でミルクキヤラメルや雪を食ひ過ぎたと後悔してゐる。

この午後位力ぬけした、淋しさと心細さに襲はれたことはなかつた。舟窪乘越までは、もう日も暮れかけたので、とても行き著くことは出來ない、と言つて、この劒の刃渡りでは、野營に恰好な場處も見出されない。どうなるとも見當のつかぬ暗澹たる心持は、一行の胸に深く喰ひ入つた。今までの歡樂の派手やかな喜劇に、忽として悲劇の灰色の幕が下りたのだ。が、兎に角何處までか、野營地を發見する迄あるいて行かねばならない。足が急に重くなつて、トツト日が暮れが急轉直下的に押し迫つた。とある突起の樅の林を潜つて、次の突起に移らうとする時、

「黒！其澤を見て來い。

と既に熊笹を分けて上りかけてゐた林藏が、下を振り返つてのどら聲は、悲壯の顫へを帶びてゐた。それが更に一行の腦天へ、恐怖と覺悟とを宣告した。一二町も下りた處に幸ひ雪を發見して、何はともあれ其處にテントを張つたものゝ、かねて樂しみにしてゐた、雷鳥の附燒きも、林藏のいふよりずつと味のない、サクサクなものに思はれて、何の氣力も生色もない夕餉を終つた。さうして脱殻のやうな空洞のやうな一夜をテント内に過した。

テントを張ると間もなく、狹い闇い谷に、上から一抹の霧が流れかゝつた。林藏は

『明日も大丈夫天氣ですぞ。

と喜びの溢れるやうな聲を立てた。林藏の説明する所によると、霧が山から澤へ吹き颪す時には、どんな雨中でも晴れる、霧が谷から山へ吹き上げるやうでは、どんな日和でも雨になるといふのだ。さういふ口の下で、これから是非何處かの人里へ出なければならぬとなれば、先きへ往つて、烏帽子岳の濁(ニゴ)り澤を下つて葛(クヅ)溫泉に出るよりも、こゝから來た道を引返して、針の木に出る方が、まだ一番早いといふやうな心細いことをつぶやくのだ。我輩の頭にきのふけふ通過した難場や、針の木の大雪溪が走馬燈のやうに閃めいた。さうして更に暗いイヤな心持を唆つた。

この野營地は未だに名前のつけやうを知らない。何でも夜叉の木の樺交ぢりに茂つた、さうして其の夜叉の一部は、まだ固い雪の中に封じ籠められてゐるが、やうやつと雪から放たれて、力なげに枝の頭をもたげてゐる、眞に陰森とした澤だつた。テントを張る爲に、其の樺や夜叉を幾本伐り捨てたか知れなかつた。其附近は可なりな雪の廣さであつたが、其少し下は、漏斗の口を締めたやうに狹められて、それが何處で針の木谷に合してゐるかも知れない、何でも末は瀧の如き垂直になつてゐるやうな谷だつた。之を「夜叉澤」といふのが、我輩の感じには一番うつてつけなのだ。＝碧梧桐

身體の疾病か精神の疾病か

夜叉澤に泊まつた日

私達が葛倉のキレトと呼んだ砂糖岩の危い斷崖に來懸つた時である、私は自然が斯ういふ風にして私達を阻むのは、畢竟私達の目的通りの道具立を私達の前に作つて呉れてゐるのだと思つて、來るべき困難を前にして、少からぬ滿足と興味とを感じたのであつた。針木峠の頂上から此處を見ると、丁度七倉、北葛の兩つの岳の頭を大きい兩手で引捉へて、グイと引裂かうとした其の割れ目のやうに見えた。砂礫の斜面は其の裂け目から流れ出た灰色の血のやうに一直線に深い谷に走り込んで居た。私は削ぎ立つた岩壁や、偃松の懸崖を長い間攀ぢ上り這ひ下りた揚句に、此の岳と岳との裂傷に出會して、ココだなと思つた。

私だけ遲れて其の手前の小高い岩の頭まで來ると、一同は腰も下ろせないほど狹い脊尾根の端に立つて向ふを見ながら不安な沈滯に陷つてゐた。先達の林藏、直吉兩人は空身になつて、觸りさへすればザクザクと碎け落ちる砂石が刃のやうな薄い尾根の先きに屏風を立てたやうに聳えてゐるのに取り付いて、身體を動かす毎に崩れ落ちる石塊や砂礫が炎のやうな煙を谷から上に吹き上げる中を、足場を作り作りとうとう道を求め得た。重い荷を脊負つた一同は、身體中の注意と力とを手先と足先に集めて、一つ間違へばといふ懸念には目も耳も塞いで、山の腹へ身體を捻ぢ込みでもするやうな態度と意氣込みで一人一人其處を渡り出した。

私は局外者のやうな興味を持つて、局外者の居るやうな岩の上から此の光景を眺め愉快がつた。私は私のカメラを夫れに向けながら、土塀に取付いた守宮（やもり）のやうな影像が私の種板に現れる事を想像して珍らしがつた、私はとうとう皆の渡り切るのを待ち兼ねて自分も其の砂糖岩に嚙り付いて、後ろに監視してゐる直吉の注意に從つて手足を動かしながら無事に通過した。渡り終つてヤブを潛りながら、私は自分の後に、逡巡してゐる人夫を激勵する直吉の叫び聲を、幾度も聽いた、さうして何の氣なしに聽き過した。

私はフト自分の舌が急に硬くなつたやうに感じた、口の内が藁を一杯塞められたやうに硬ばつて、叫ばうとすると、聲が咽喉元まで來て、口の内で、乾燥して無くなつてしまふやうだ。私は直に雪水を濫用した爲に粘膜を損じたので、これは屹度下痢が來るに違ひないと氣が付いた。何う手當したものかと思案しながら歩いてゐるうち、岩の懸崖にかゝり、注意を外に惹かれてゐた故であらう、思ふさま膝頭を打つて、關節の運動毎に堪へ切れないやうに痛み出した。とうとう下痢が始まつた。

一方は信州側の灰白色の削り立つた絶壁で一歩を誤れば、底の知れない谷まで、摩滅した身體が轉がつて行く。一方は越中側の密林で、これも樹木の幹が土地の傾斜面と殆んど並行してゐる位の切ツ立てゞある。信州側の崖が刻々に崩れ落ちる爲に、越中側の雜草の生えた地殻は「つ」の字形に灰色の崖の上に乘り出してゐる。尾籠な話であるが、私は、其の「つ」の字の突先に踞つて便を足した時には、前と後の恐ろしい威嚇を侮蔑してゐるかのやうに感じて、苦しいうちに一種の誇りとさうして滑稽の感に堪へ得られないで、獨りで笑つてゐた。

私は一回の下痢で非常の疲勞を感じた。私は疲勞した身體を其處に横へて、自分の身體と意志の欲するまゝに身動きもしないで居たかつた。けれども一行には一行の豫定がある。私は一行の後から疲れた身體を運ばせながら、始めて自分の身體と意志との欲しない囚人の苦役のやうな歩行を強ひられてゐる事を感じた。私は、自分の身體と意志との堪へ難い仕事がドレだけ私に強い反抗心を起させるかといふ事を經驗した。夫れならば何故私は、一行に私の欲するまゝに止まる事を求めないのだらう。夫れは解り切つた話だ。私は一同の健全な身體と意志とを、私のやうな破損した身體と意志とに服從させる譯には行かない。私は其の理由を持つてゐないと同時に其の力を持つてゐない。だから一同が休まうかといつても、私は強ひて行かうといふ。一同が夜叉澤に泊る事を餘儀なくされたについても、林藏は、私の身體の加減といふのを避けて寧ろ外の理由に求めた。其の取つて付けたやうな辭令に私は滿足した。

けれども、私は斯ういふ自分の抑損に非常に苦痛と反抗とを感じたのである。

私は自分の疲れ切つた身體と弱り切つた精神とが、一行の他の人の強い身體と精神とを呪つてゐるといふ事に氣が付いた。私は力のぬけた、二つに疊まれて了まひ相な虚脱した身體の感じと、歩む度に關節を挫き

折られるやうな膝頭の痛みとに惱みながら、夫れよりも強く自分の不對等の今の地位を苦に疾んだ。さうして私の病氣などについてはまるで無關心で歩るいてゐるやうな一行の人々を憎らしく思つた。其の癖一行の中の一人でも、私の病氣を氣にかけてゐるやうな事を云ふと一層強く其の人を憎らしく思つた。さうして一行が豫想外の難場に遭遇した爲一日だけ日程を延ばさなければならない事になつたと云ふ時、其のうちに私の病氣を計算に入れないやうに注意して話してゐる先達林藏の話振りに私は感謝してゐたのであつた。夫れは私の不對等の地位が、一行に認識される事を私は一層苦痛としたからだ。誰れも彼れもモウ夫れを十分認識してゐる事を私は知つてゐないではないが、夫れが表面に現れないのを、責めてもの慰みとしたのである。

けれども斯ういふ人工療法は、下手な鎭痛劑を用ひたと同樣で、夫れが利かなくなつた後の苦痛を更に甚だしくするのみであつた。

私は何故ソンナ取繕つた忍耐をしなければならないのだらうか、虛僞同樣の我慢をしなければならないのだらうか。私は何故、自分の弱つた身體と精神とが要求する事を正々堂々と要求しないのだらう。私の態度は強者に對する卑屈な服從ではなからうか。弱い者が強い者の間に、平氣で生きて居られるやうな顏をして生きて行く、其の痩我慢は、勇氣でなくして怯懦ではないか。

私はいらいらして何も彼も忘れてしまひながら歩いた。身體の惱みも、周圍の嶮怪な自然も、全く私の感じに乘らなくなつてしまつた位私は考へながら歩いた。

私はフト、先きのキレトを越した時に、直吉の激勵の聲に振り返つて見ると、一人の人夫が崩れかゝつた砂石の上に蹲つたまゝ立ちも得られず、さりとて臆病と嘲けられるにも堪へないといふ風で、齒を嚙ひしばつて力んでゐる姿が目に入つた事を思ひ出した。同時に、私は其の少し前に斯う云ふ人夫の一生懸命の場合を、岩の上から面白がつて眺めてゐた事を思ひ出した。

私の胸は震撼(ゆす)られたやうな動悸を感じた。

人夫どもは丁度今の私のやうな怯懦な勇氣を誇つてゐるのだ。自分の身體と意志とが肯定しない仕事を強ひられて、夫れを否定する勇氣を持つてゐない人間である。しかも夫れを否定しない事を勇氣と心得てゐるのだ。ソレを世間の道德家は犧牲的精神と稱して、誰れでもさういふ心懸を實行し得た人を尊敬してゐるのだ。夫れでも好い。ソレならば、誰れの爲の犧牲なのだ。少くとも此の場合、誰れの爲にソンナ犧牲心を發揮してゐるのだ。……私の爲なのだ。ソレをさせてゐるのは私ではないか。彼等を命懸けの崖の上に立たせて齒を喰ひ縛らしてゐるのは私ではないか……。

私は、自分の犯した罪惡の證據を目の前に付きつけられた囚人のやうに感じた。

私は今、自分が弱い者になつて、何故、強い者に反抗しないのかと自分を叱つてゐた。彼等も何故私に反抗しないのだらう。私は子供のうち東京の日本橋通で鐵道馬車の馬が眞夏の日中に虐使されて打ち倒れたのを見て、馬は何故人間に反抗しないのだらうと子供心に疑つた事を覺えてゐる。私は今でも此の幼い質問を撤回する事が出來ないのだ。

數時間前に弱い者を笑つたり樂しんだりした私は、自分の弱い事を感じた刹那から、彼等の卑屈な勇氣を憎まざるを得なくなつた。さうして彼れ等の卑屈な勇氣を、感服したり賞揚したりした自分を氣恥しく思つた。

夜叉の樹の繁茂したジメジメした澤のテントの中に疲れた身體を横にしながら、私は宙に吊られてゐるやうな焦ら立たしさを感じた。岩の上で笑つてゐた自分が、アンヒシアターの裡で人間の死を弄んでゐる羅馬の暴君のやうに見えた。荷を脊負つた人夫は、阿弗利加の炎天の下を鞭ではたかれながら歩いてゆく狩り集められた奴隷のやうに見えた。私は今日ほど、平生の自分を蹂み躙つた事はないと思つた。若し私は身體を痛めなかつたらば、私は尚此の驚くべき自分の憧著に氣付かずに過ぎたのであらう。私は毛布を被つて齒を喰ひしばつた。＝如是閑

其の夜と翌朝

夜叉澤の夜營で

雪を融した水で煮た粥とチヨコレートミルクとを注意して啜つて、一戸博士の持參の下痢止めを飲んだが、三回の下痢で身體は脱殻のやうに精が無くなつた。博士と碧梧桐とが頻に明日一日此處で休養したら何うだといふ。林藏に相談すると、何しろ一番近い人里が、矢張元來た針木へ引返して籠川谷から大出に返るので三日の行程である、先へ進んで烏帽子まで行つて、其の先きの濁澤を下つて高瀬川へ出て葛の湯へ行くのも同じ位であるが、烏帽子迄の道が不明なので、何ういふ難場があつて停滯しないとも限らぬ、安全なのは元へ引返す事だといふ。進退兩難だのデイレムマだのと、平生無暗に口にしてゐるが、實際さういふ場合に陷つた時には、却てさういふ言葉を口にしないものだ。私達は互に平氣な顔をして何うでも好い事を相談してゐるやうな風で「明日一日雨でも降るとイヤでも此處に滯在する事になるのだがナア」などゝ勝手な事を云つて見たりした。珍らしく霧が深くなつて來たが、林藏は、霧が谷に吹き下される時は天氣は屹度大丈夫だと頻に保證してゐる。

私は夫れ等の相談を寧ろ人の事のやうに聽いてゐた。晝からの昂奮した私の精神は、虚脱したやうな身體の感覺と反比例に強く私を刺戟してゐる。アルコールでも飲んだかと思ふやうに、私は私自身の今の運命に無頓著になつて、私が急に弱者に陷ちた其の悲痛と、夫れに導火されて燃え出した反抗心とを貪るやうに味つた。さうして夫れが平生の生活の回想——といふよりは寧ろ——反省と混交して、私の胸は熱い湯を充して攪拌されてゐるやうな悲痛を感じた。涙は止度もなく私の頰を潤した。私は私の身體が物理的に力のぬけてゐる事を少しも感じないで、必要があれば誰れとでも摑み合ふと思ふまでいらいらしてゐた。

明日の行動に關する私達の相談が、不得要領に終つて、三人が眞暗なテントの裡に枕を列べた時に、フトした拍子から、私は私の此の堪へ難い問題を、今此處に思ひ出す事も出來ない朦朧とした意識狀態の下に論じ出したのであつた。私の混沌とした頭腦と焦ら立つた言葉とが、何を説明したかを覺えないけれども、私は何か云へば云ふほど、まるで身體の利かない醉どれがたゞ聲を揚げて滿足せざるを得ないやうな意氣地のない自分が忌々しくて忌々しくて堪らなかつた。

私は鬱結した熱が一時に發した跡のやうな疲勞を感じた。博士と碧梧桐とが私を諭したり慰めたりする言葉を、私は同じ焦ら立たしさを以て聽いてゐたが、其のうちに屢々繰返された、「其の感情だけでよい」といふ意味の言葉が、吹き殘された木の葉のやうに私の頭腦に殘つた。

私は平生疑つてゐるといふよりは寧ろ信じてゐたのだ。弱い者が弱い事を自覺した爲に生じた悲痛の感じと反抗心とは、其弱い者を強い者にすると。其弱い者は弱いまゝで強いのである。何んなに強い者でも、弱者の此の悲痛と反抗心とを征服する事は出來ない。昔の酷ごたらしい男は、弱い女を吊し斬りにしたけれども、終ひに其の女の貪り味つた悲痛の感じと其の屈しない反抗心とを何うともする事も出來なかつたのである。「夫れで好い」と私は疲れ切つた私自身を慰めた。

深更から眠つたので翌朝一番遲く起きた私は、全く平生と變りないやうな身體の調子を寧ろ不思議に思つた、昨夜のやうに淡い粥とミルクチヨコレートとを注意して啜るのが物足りないやうに覺えた。昨夜は不得要領に終つた今日の行動の豫定は、苦もなく解決されて、私達は大分遲れて八時過ぎに此の澤を立つた。私は色々の難路を經た末また自分の平生の地位に返つたやうな氣分で、昨日の事を回想した。さうして少しも後悔しなかつた。寧ろ斯ういふ經驗の繰り返しが私の生活の全部であるかの如く感じて、丁度昨日通つたやうな難場を、今日も明日も繰り返すのと同じやうなものだと思つて微笑んだ。＝如是閑

東澤の頭の難場

私達が夜叉澤と呼んだ無名の澤から直ぐ急激な上りになる。依然として信州側の灰色の崖と越中側の密林の懸崖との中間の一線を辿るのであるが、其の一線は昨日の七倉の上りにも增した仰角を以て空に向つてうねつてゐる。例の崖の上に「つ」の字形に張り出した地表が往々崩れ落ちて灰白色の砂の崖を樹の枝に縋り

ながら横に歩む事もあり、夫れも不可能になるとイヤでも越中側に移つて其の密樹の枝から枝へと不器用な猿のやうに絡らまつて行く。此の枝渡りの方が灰の崖より危險は少いが、荷を負つた人夫が其處に入つたら空身のものには想像されない難儀に陷る。そこで彼等は危險が極度に迫るまでは、開けた崖の方を選ぶ、傾斜の度が之を横に渡る事を不可能ならしめる場合にも、一歩々々足場を刻んで其處を行く。「勞力の多い安全」よりも「勞力の少い危險」を選ぶ彼等の心理狀態は、より複雜な社會の人間が、生活の道途を歩む場合に常に最小抵抗線に進むといふ頑強な傾向を説明してゐる。さうして又最小抵抗線に進む爲めに最大抵抗線に出會する（生命を棄てる）事は厭はないといふ投機家や殉教者や革命家の態度と一致してゐる。私達の人夫は一歩を誤れば必ず命のないに定まつた滑り易い崖を辿つても、尚樹木の枝を傳ふ束縛から自由でありたいと願ふのである。斯ういふ風に最小抵抗線にあこがれる人夫を私は非難する事は出來ない。まして最も安全に最小抵抗線に進みつゝある人達は、何うして私の人夫を非難する事が出來やう。彼等が投機家であるにしても、殉教者であるにしてもだ。

私達は永らく鋭角三角形の頂點の延長した一線を上つた。草深い崖を滑り滑り信州側の不動澤の最末梢の東澤の頭に出たのは十時頃であつた。舟窪岳は眼の前に見えるが、夫れに行くには、更に底深く舟窪乘越まで下らねばならぬ。が夫れに下る前に、脚下に見ゆる今一つの突起を越す必要がある。所が此處の脊梁線は急に脚下の突起に向つて切ツ立てに下ると同時に線が逆に捻ぢくれたやうになつてプツリ切れて仕舞つて、何うして脚下のピークまで出られるか解らない。林藏直吉の兩人は空身になつて下つて行つたが、脚下に見える白い砂石の屏風のやうな脊尾根の中途に足場を作るより外はないとなつたが、其處まで來るに小さい氷の澤の頭が邪魔をして、何うしても荷を負うては其の氷の頭を越されぬといふ。けれども、林藏直吉は、何時の間にかこの砂の屏風の中腹に出て私のアルペンストツクで足場を作り出した。

下れといふ信號に應じて一戸博士と碧梧桐を先きに私も下つて見たが、殆ど垂直の崖を樹の枝から枝へと暫く下るととうとう其の氷の澤に來るともう樹がなくて裸の岩が意地惡く突出てゐる。夫を二つほど廻る爲に、細引を數條束ねて上の樹の幹から下げて、夫れに縋りながら越えるやうにしてあつた。此の裝置で難なく越えて砂の屏風の腹を横に渡つて密叢を傳つて行くと今度は全く裸の砂石の脊尾根が僅か五六間ではあるが曲りくねつた刀の齒のやうにソギ立つてゐる。下へ行つて樹の裡を行かうかと思つたが、私も「勞力の多い安全」は身體の疲れてゐる場合好ましくないので「勞力の少ない危險」を撰びたくなつて「此處を越えたか」と姿の見えない碧梧桐を呼ぶと「越えた」といふ答を得たので、能く見ると成程踏み崩した足場のアトがある。私も其處に足場を作りながら誰れも見てゐるものもないので、卑屈な勇氣を示す必要もなく、醜態を極めてゐると獨りで思ひながら越え終つた。＝如是閑

舟窪岳まで

Ｚ字崩しの裸尾根を漸く越した私は眼の下に深い東澤の谷を見たので、密林の急傾斜を例の枝から枝へと傳はつて下りて見たが何時まで下りても、舟窪乘越らしい鞍部に出ないのみならず脚下が急に削立した崖になつて其の下に雪の澤が逆落しに走つてゐるやうだ。これは路を違つたのかと思つて呼笛を吹いて見ると、ズツト右手の方から二度三度答があつた。其の方に寄つて見ると、遙か右手の下方に、此の東澤の頭と舟窪岳との接續點になつてゐる舟窪乘越の疎らの濶葉樹林の細長い平地のあるのを見た。荒れた公園の片隅のやうな雅致さへ揃つてゐて、先行の二人の姿を其處に少さく見出した刹那の感じは、時代の違ふ野外劇のバツクを見せられたやうであつた。

舟窪乘越には五年前に榎谷氏が野營した跡があつた。同氏は此處で水を得るに困難したといふ事であつたが、今は雪が多いので、少し谷に下れば其の融けた水も得られるのであつた。

私達は此処で晝飯を取つた。此處の草木は五年目で再び人間の燃やした火の煙にむせんで、さうして再び少さいざわついた人間の群と周圍の押し默つてゐる大きい山の群との對照を味つた。

私の上の所の樹の枝に腰をかけながら辨當を食べてゐた一戸博士が、其處から大事のバロメターを谷にこ

ろがしてしまつて、一種の叫聲を發した。海苔の罐詰でも落したのだと思つて、其の叫聲の不均合を笑つた私達は、夫れと知つて言葉だけで頻りに狼狽へた。林藏直吉の兩人が深い谷を雪の上まで降りて、二つになつた其死骸を上げて來たが、もう用を爲さないと聽いて落膽した。人夫達はバロメターを落した先例の多い事を今になつて私達に警告した。山が自分の祕密を闡く鍵を人間の手から奪ひたがつてゐるといふ事に、私達は今氣の付いたのは遲かつた。

此處から舟窪岳へは一氣の上りであるが、道は雪に撫でられて地面にへばりついた枯草のぬるぬると滑べる傾斜を草の根や樹の枝に縋りながら這ひ上るやうな所が多い。私の昨日の疲勞は大分癒つたが、尚日光の直射をうけると眩暈を覺ゆるほど苦しい。大きい蕗の葉を頸に挿して後頭部を掩うたが、しまひには手當り次第に木の葉や草の葉をむしつて身體中に當てがつた。夫れでも足りなく、雪を手拭に包んで、頭に卷いたが、其の融けた水が脊中から腰まで流れてゐると見えて、人夫達は其不衞生を私に注意してくれた。私は雪の水が既に甚だしく私を苦しめた事を忘れたのではないが、内科的に私を苦しめた雪の水が更に外科的に私を苦しめる事が出來るか何うかを疑つた。雪の水が之を私に證明しない間は、私は雪の水を輕侮した。其うちに雪田に出會したが一同は前のやうに無暗に其の融けた氷のやうな水を貪らなかつた。私は私に依つて示された敎訓の外の人に對する威力を見たのであつた。夫れにも拘らず、私はまだ誰れによつても示されない雪の水の外科的の威力を侮つた。歷史が縷々人間を殘酷に取扱ふのは、要するに、人間が示されない威力を輕侮するから、歷史は巳を得ず、現實に其の威力を人間に示すのである。けれども此の雪の水はもう其の上の威力を私に示さずにしまつが。

舟窪岳に取付く邊から越中立山の連峰を望んだ光景は、今度の脊梁傳ひのうちの壯觀の一つであつた。東澤の頭から高瀨の谷が一直線にアルプス中央系と傍系の燕（ツバクラ）岳連峰との間を上つて黑ずんだ森の底に白い水の輝きを見せてゐる景色は、私達を沈んだ濃い山の氣分包んだが、更らに反對の側に聳え立つた立山連峰の雄勁な曲線と奇拔な陰影の長い波を見た時には、私は深い海の底から引上げられて雲の上の偉い世界を指さゝれたやうに感じた。

舟窪岳の頂上は、南北に細長く延びた草原で、唐檜が並樹の樣に西日を蔽うてゐる。中間に小高い叢があつて、細長い頂上を南北に區劃してゐる。南の端に立つと行手の不動（フドウ）岳や南澤（ミナミザハ）岳が手に取るやうに見える。時はまだ三時半だ。アノ不動の肩までは今日のうちに行けるやうに私達には見えたが、林藏は何うしても三時間はかゝるといふ。殊に私の疲勞を斟酌して一同は此の舟窪岳に泊る事になつた。さうして翌日其の不動の肩まで三時間餘を費したので矢張林藏を山の人間であると思つた。

野營地は北側の雪のある邊りの叢の裡で、針木蓮華の雄大な傾斜が褐色に夕日をうけて、私達の面を被ふやうに聳えてゐる。後ろの崖は身を投げても三尺とは落ちないやうな雜樹林で、山烏のギヤアギヤアといふ聲に山の奥らしく暮れて行く。＝如是閑

不動岳から南澤岳

十八日の朝は舟窪岳の野營地を六時に立つて、細長い頂上の南の突先から下りかけた。信州側は無論依然たる灰砂の崖なので越中側の密林の中を行くのだが、此の下りは昨日と違つて、比較的傾斜の緩い山腹が高い唐檜や白樺の森で、偃松や、夜叉や、熊笹などの人を焦らすやうな障碍物が少いのみならず、其の森林中に獸道といふやうな道がついてゐて、時々朽木や切ツ立の崖に妨げられながらも、昨日の脊梁傳ひに比べて難易の差が甚だしい。殊に日光も通じない暗い木の中を行くと谷から氷のやうな風が吹き上げて、可なりの速度で歩いても汗の出ない位である。けれども森の中の道は元來何ういふ目的で誰れが作つたといふ類のものでなく、もし此道に生物の意志が加はつてゐるとして、其の生物は私達とは違つた目的と違つた方法で山を歩いてゐる違つた形態の生物なのだから、動もすれば其の道を垂直の崖に絡ませたり、頭の上の懸崖に飛ばせたりしてゐるので、私達は幾度も後戻りをしたり、一つの路を「エ」の字形に繰り返したりさせられた。

舟窪岳と不動岳の中間の不動乘越まで斯ういふ風にして下つたが、此乘越は舟窪の夫れと違つて野營の餘

地もない位狹い、さうして夫れからクズ不動岳への上りになる。密林は漸次下へ延び脊梁は縷々露出して、例の砂の崖と密叢とのピラミツドの延長になる。砂の絶壁が次第に直角に近くなつて來て何うしても猛烈な偃松の中を潜らせられる。「勞力の少ない危險」から「勞力の多い安全」に追ひやられて私達は蜘蛛の巢にかゝつた蚊蜻蛉のやうに悶いた。所々に切り開けの跡があるが、其の折れた枝を渡るのも焦れつたい仕事である。

夫れを出ると眞黑に風化したいろいろの形の大きい花崗岩の堆積——たゞの堆積でなく、態と角と平面とが接觸するやうに積み上げた、空隙の多いピラミツドを上る。人夫たちは、其の腹を廻つて行つた、が、私達三人は其のピラミツドの尖頭に上つた。矢張總ての岩が其の角によつて互に支へてゐるので、疊一枚の平面もなく、全くの尖頭である。これが不動岳の頂上であつた。

斯ういふ尖頭であるだけ、頂上の展望は舟窪岳のやうに斷片的でなくてパノラミツクである。後を見ると、今迄私達の通過して來た針木から蓮華、北葛、七倉、舟窪の脊梁線が「S」と「Z」の連續のやうに屈曲して辿られる。其の延長され屈曲された三角形の片面の灰白色の砂の崖は、丁度鋭利な刃物で山を竪に削いだ跡としか見えぬ。

此の尖頭から石の多い頂上が行手に延びて、振り返ると、不規則に盛り上つた岩の山が、偃松や密叢の凸凹ばかり見馴れた眼に珍しく映る。行手の烏帽子岳は巨大なる一箇の岩石を竪に置いて其の頭に斧でギザギザを作つたといふ形であるが、此の不動岳は、いろいろの角度の多數の石を盛り上げて出來てゐる。前者は一人の山であるが、後者は群衆の山である。其の今にも崩れ相な不規則の堆積を危ぶむ事はない。何ういふ形に崩れ落ちても、夫れが又次の不動岳である。之に反して烏帽子の一つ岩が倒れたら、モウ烏帽子岳はないものである。不動がジヨンブルの國ならば、烏帽子はカイゼルの國である、などゝ考へて見た。

不動から濁乗越（ニゴリノツコシ）までの下りは一時間内外に過ぎなかつた。此處は少しばかりの平地はあるが、元より野營に適するほどの餘地もない。私達は此処で晝飯を喫して直に、南澤岳の上りにかゝつた。私達は何時までも捻じ上るやうな同じ登りに飽き飽きした。人夫たちは矢張山腹を廻つて烏帽子の裾に向つた。私達は直吉だけを連れて南澤岳の頂上に達した。

眞白に輝いた石英の砂が僅か數尺平方の間に美しい人の爲に設けられた蓆のやうに敷かれてあつた。頂上は一帶に赤白い長石の砂地で外の岳と同じく矢張南北に延びてゐるが、盛り上げられた砂の柔かい曲線で、何處にも角のない、偃松のムラもない、舐められたやうな山態である。

斯ういふ柔らかな温かな山の姿を見ると、私達はモウ北葛七倉の嶮惡な脊梁に打勝つて來たといふ、一種凱旋の人のやうな誇りと安堵とを感じない譯に行かなかつた。さうして脚下を見ると烏帽子の裾は、庭園のやうな美しいうねりを持つた綠色の野に見える。烏帽子岳其のものが、其の庭園に適當に布置された大きい捨石の感じである。岳といふ粗な自然でなくして、装飾としての石塊になつてゐる。背景を爲してゐる三ツ岳の風貌に何の威嚇も虚喝もないのが、一層此處の穩かな氣分を落付かせてゐる。＝如是閑

烏帽子公園

南澤岳の頂上は光明赫奕とした白砂の露出であつた。それに眞白な、砂と光りを競ふ岩石も處々に組み立てられてゐた。殊にこの岳には、其砂に織り込まれた綠の鮮やかな偃松があつた。それは中腹の濃き偃松帶が、さも巨大な十指を擴げてるやうに、次第に細り行く指の先が頂上近くに際立つた段々羅を染めてゐるのであつた。それは強い白と強い綠との、目もさめる許りの取り合せであつた。色の取り合せでなくて、其強い白と綠の戰ひを意味する段々羅であつた。南澤を下りた、其處に開けてゐる高原も、亦其段々羅の餘勢を享けて、白砂と偃松の色の褪せない古代の錦を織り出してゐた。其一針の繍目にも、細心な注意と、無計算な勞力とが籠つてゐた。もつれてゐた絲はたゞ解けたまゝではない、其末は次第に目を樂ます様々な色で染め織られて行くのであつた。

この白砂と偃松の取り合せは、やがて烏帽子公園の優嫻靜澄な一天地を現出する序開きであつた。讀者幸

ひに、烏帽子公園の文字の奇工を咎め給ふな。山岳がありたけの親しみとやさしさを盡して、其滑らかな革のやうな草を延べ、其草には一面に惜氣もなく白と黄の花をつけっせてをる間に、飛び飛びの殘雪と、其殘雪の雪解の水を湛へた池沼が穿たれてゐる。さうして地面はよき程の凸凹した屈曲線を劃して、歩々に新たな雪と新たな草とが開展して行く。冬の原の強みに張つてゐる力に、春の野の和らぎを味づけた美妙の空氣の漲つてゐる其眞中に、烏帽子岳が孤城の殘壘と言つた風に、總てのこの光景を纏める中心に聳えてゐる。大阪の町を離れて天王寺公園に入るよりも、東京の塵を避けて飛鳥山公園に上るよりも、それは遙に我に媚び我に形づくる、否我を乳抱し我を嬰前する慈母の暖かみに充ち滿ちてゐるパラダイスであつたものを！。烏帽子公園は文字の奇工でなくて、我等の情趣から生れた自然の詞であることを容し給へ。一行三人は時の移るのも知らず、この公園の草場に寢轉んで、銘々勝手な感懐を吐くのであつた。

この夜の野營地は、烏帽子公園の一角、三岳の麓に營まれた。＝碧梧桐

技巧に過ぎた自然

私達が烏帽子岳の東の裾に出て、削ぎ立つた其の岩の頭を仰いだ時に、誰れも其の岩の頭に上らうといふものがなかつた。槍ケ岳の尖頭のやうに、周圍の山々を拔いて高く天空を突いてゐる岩の頭ならば、私達は少くとも自分を周圍の山々より高い所に上げて其の山々を見下さうといふ願から、其の巖に嚙り付く氣にならぬ事もない。けれども、此の烏帽子岳は周圍の山々に圍まれた庭園の中心を爲してゐる捨石といふ風に、岳夫れ自身が全體の繪畫の燒點であるから、丁度石燈籠を中心とした庭を見ようとするものが、其石燈籠に上つてはならぬやうに、此の烏帽子岳を中心とする天然の庭園を見ようとする私達は、自づと夫れに上る氣にならなかつたのかも知れない。

私達は長い鳶口やアルペンストツクを突いたり、物々しく脊の上に荷物を積み上げた苦し相な風をしたりして此處に入るのが似合はしくないと思つた。岩と岩との迫つた路を過ぎると、芝地のやうになだらかなうねりを以て、所々に大きい池、小さい池を湛へた平地に出る。池の邊の作意を以てされたにしては餘りに自然な大小いろいろの岩石の配置や、芝を植ゑて庭木のやうな樹木を所々の其の位置より外にあつてはならぬやうに植ゑられた小丘や、水晶のやうな水が工夫されたやうな屈曲で岩の落ちて來る小瀑（カスケード）や、私は今迄の、我儘勝手に暴らされてゐるやうな自然の荒々しい一面と、此の天才をさへ敎へようとしてゐるやうな崇高な藝術を持つた自然の優しい一面との對照を餘り短い時日の間に見せられて、醉はされたやうな惑亂を感じた。さうして、餘りに技巧の勝つたやうな此處の自然の藝術が、私の幻像を人間界に近づけてゐる事を知つた。私は、草の丘を眺めながら古い独逸風の、鋭角や直角の勝つた赤い色や青い色の混つた建物が、アノ邊にあつても、優さしい調和を感ずるに違ひないと思つて、此處にホテルが出來て日本アルプス登山の中心地になる日が遠くないやうな事まで空想して見た。

けれども私は反省した。技巧は自然が之を弄した場合にも、技巧的であつてはならぬと思つた。此處の庭園の技巧を私はさうアーテイフイシヤルであるとは思はないけれども、夫れから呼び起された私の幻像の性質によつて、私は自然が弄んだ技巧の性質を疑つた。さうして烏帽子公園と呼ぶのが矢張一番適當だと思つた。＝如是閑

三ツ岳から野口五郎まで

烏帽子公園の八つの池を縫つて私達は幾度か雪田を踏んで進んだ。中央山系に沿うて東を流るゝ高瀬川の支流の濁澤（ニゴリザハ）の幾つかに裂けた水源の一つに當る深い澤の頭で兎の子を追ひ廻して、直吉の難なく捕へたのを碧梧桐は大事相に抱へて歩いた。此丘を南へ下ると人工の公園の片隅にでもありさうな雜木の繁つた曲折のある草原に出る。濁澤を上つた人の野營地になつてゐるのだ相だが、私達の人夫は、私達が烏帽子公園の鑑賞や批評に時を移してゐる間に此處も通り過ぎてしまつたらしい。私達は直吉に續いて、更に進んで、三ツ岳の麓近くの藥研の底のやうな窪地に、人夫達が野營の準備をしてゐるのを發見した。

「今晩は上等の風呂がありますぞい」と林藏の云ふ意味を解し兼ねて私は四方を見た。今迄の野營地の多くは、雪解けの水の、貴い滴りを器物に受けたので、舟窪岳の頂上だけに少しの水溜りを見たのみであつたが、此處は雪の傾斜の裾が鏡のやうな池を二つも作つて、上の一つを飲料の池、下のを洗物の池にした。林藏の言葉は、水に乏しいのを常とする山上の生活で、入浴の出來さうな位豊富な水を野營地に發見した事を祝したのであつた。

私達一同の打ち寛いだ氣分は、此の野營地の空氣を今迄に例しのないほど賑かにした。今度の縦走の最も不安な部分は、此日で全く通過して、南澤岳を越えてからは、林藏、直吉の兩人は、まるで自分の村に歸つたやうな物馴れた調子で私達を引廻した。濁澤から此處に上つて槍ケ岳に行く脊梁傳ひは、彼等には職業上の公道であつた。北葛七倉の險を、彼等は決して異常の冒險であるかの如くに云はなかつたのみならず、時には「御茶の子」といふやうな誇張した自信を以て語つてゐたのだが、夫れでも難局に遭遇して責任者であつた林藏が如何にも愼重らしい顔の色を見せた事は縷々であつた。さうして何時もさういふ場合に、用意周到の林藏が大膽な直吉よりも、先きに進んで活路を求めようとするのを見て、私は彼の責任者たる自覺に富んでゐる事を心の裡で賞揚した。

「何うせ落ちたつて下へ行くべいだ、上へは落ちねえから安心しろい」

と逡巡してゐる人夫を叱りながら、林藏は、其注意深い眼で、危い業をしてゐる人夫の一擧一動を睨んで、縷々注意の聲を發するのであつた。私は彼れが斯ういふ責任者の重大な負擔を、事もなげに擔つて、皮肉な警語を頓發させる其の才氣に驚いたのである。が夫れよりは、さういふ才氣を持つて、責任者たる負擔を忽せにしない棟梁らしい其の人格を掘出物をしたやうに珍らしがつた。

私は何時も斯ういふ風に人を見たがるのである。さうして夫れが事實上の當の人と全く違つたものであつても構はない。さうして私の斯う見た林藏は此處の泊り場で、半ば其の責任を果した人のやうな快活さを以て、例の警句で人夫達を引廻した。山の社會では、私達も彼れの氣分の些かの波動に浮沈せしめられるのであるから、今日の彼れの快活さによつて、私達も來るべき運命の安樂さを悦ぶやうな、暢んびりとした氣分に浮かれた。さうして敵から逃れて家に歸つた人のやうな、夢もないほど穩かな睡眠に落ちた。

十九日の出發は、今日も亦上天氣だといふ毎朝の口癖を殊にのんびりと繰返して、一種緊張から放れた、だるいやうな氣分を持つてゐた。

道は此氣分に適應すべく作られたかと思はれた位、應揚な抵抗の少いものであつた。三ツ岳の頂上の三角標を見るやうになつて、破片石の長い尾根が緩やかな傾斜で其の頂上まで續いてゐるのを見た。歩行の勞苦の少い爲に私は強い日光の下で「寒い寒い」といひながら歩いた。

三ツ岳の頂上に近い所の三角點の下で一同は寒い風に慄へた。私は其東の外れの岩の蔭で毛のシヤツを著た。

此處の展望は低い脊梁の縦走から、始めて空濶の高峰に出た感じを與へた。西北には淡靄の間に始めて富(ト)山(ヤマ)平原を見る事が出來た。さうして其上に一抹に引いた淡藍色を日本海と聽いて眼を見張つた。其の正反對の側には、藍色の山の波の上に淡墨を引いた霞の地平線を抜いてコバルト色の富士山が山の圓卓の主人公のやうに聳えてゐる。其の東には、富士の座側の香爐のやうに淺間山が薄い煙を靡かせてゐる。

私達は今迄の頭を壓へつけられてゐたやうな山の威壓から脱れて、夫等の山々を私達に從順な強者のやうに、眼の下に見る愉快さに堪へなかつた。

これから先の脊梁は、細石やごろた石の小山の連續で、まるで平地を行くやうであつた。さうして上るともなしに野口五郎岳の圓頂に出た。＝如是閑

野口五郎岳よりの眺望

キレトや難場の續出する未開地帶を行く間は、寸時の雲霧にも心を動かして、明日の日和は、とのみ話頭の結末は、いつも同じ處に落ちてゐたのであるが、連日の高晴れは、もう明日の日和は、を口にするにも飽

いてしまつた。日和の事を考へることさへ、何の刺戟にもならない程頭が鈍つてしまつた。我等が二十日間山中生活をしようと、それが一ト月二タ月に延びやうと、天候はいつまでも、こんな底晴れの上々照りで釘づけにされてゐるものとしか思はれなかつた。

針の木峠で最初見參した山々、それから蓮華の頂上に登つて見晴らした峰々、遠いのも近いのも、それがこの順路の明かな文明地帶を辿るやうになつても、相も變らず眸界に開展して來る。相も變らずと言つても、落語家の話には、まだ其の日其の夜の出來榮えがある。雲霧の衣裝と、風雨の化粧を奪ひ去つた赤裸の山岳は、ノツポな正直者を眼の前に立たせたと同樣、裏も表もないたゞ棒を呑んだそれきりの姿なのだ。成程日を數へて見れば、山中に五泊はしてゐる。針の木、蓮華以南、我等の通過した北葛、七倉、東澤の諸突起は振り返つて見る脚下に、幾分の親しみを持つて大蛇行線を描いてゐる。が、それはい行の棧敷をろ行に移つたまでのことで、我等はいつまでも幕の下りない活人畫の舞臺を眺めてゐるものとしか思はれないのだ。勿體ないが、少々飽きが來る、鼻について來る、何が好きだと言つた其何責めにする田舍料理を思はしめる。立山連山はそれを横に見るのと、縦に見るのとで、どのやうな形の變化があるか、といふやうな畫人的センチメンタルな觀察も大した問題にはならない。この澤はどれどれの集りで、どう高瀬谷に落ちてゐる、といふやうな測量師的メキヤニカルな測定は固より柄にない。程の可い一時的な雲霧を捲き起すといふことが無理な注文であるならば、不安を感ずる程度に風雨の襲來するのも、亦一つのエピソートになるではないか、と山に狃れた我等の横著さが贅澤を言ふのであつた。

が、變らない時は變らないものだ。惡口をいふと影がさすかも知れない、とゆふべも散々お天道樣の蔭口をきいたのであつたが、そんなことを聞く耳は持つてゐないと言つた風に、隅から隅まで透き通る大高凪ぎの晴れになつてゐる。雲とか雨とかいふ荷物を何處にか忘れた空身で來てゐらア、とはゆふべの人夫の警句であつた。

烏帽子の小屋場を出發して三ツ岳の頂きを越え、野口五郎岳の頂上に著いた時人夫が大勢雷鳥を追つかけまはしてゐる間に、いくら眼に馴れたとは言へ、これほどの隈もない眺望が、さうさうザラにあるものでない、と我を圍繞する周圍の山岳をノートブツクに書き留めた。之をわかり易く遠近によつて圖示すると、右のやうな圓周圖が出來る。

尤もこゝに記錄し得ない、名も知らぬ峰頭の出沒してをることは特に言ふまでもないと同時に、こゝに記されてゐる山名が、臺灣の諸島山を除いて、日本山岳の巨擘を攅めてゐることも亦特に附記するに足らぬことだ。＝碧梧桐

赤岳と黑岳

＝眞砂岳、ヒノハチ岳＝

野口五郎岳の剃つたやうな頂きの三角標の後にある岩の蔭に、私は一人で強い日光を避けながら、其の強い風に慄へた。山の光線の強さと、其の風の寒さとを同時に感じた時には、誰れでも其の一つを避けると、他の一つを避くる事の出來ない矛盾に陷る。暑がりながら、さうして寒がりながら、此の岳の裾を西南に廻つて下つた。此の山腹は、岳の頂上から鞍部の窪地まで、一直線に急角度に走つて向ふの眞砂岳の裾に續いて、壯大な彎曲した傾斜を爲してゐる所は何うしても、一大カールとしか思はれない。學術上此處がカールと認められて居るや否やは知らないが、地形上は此の山系での雄大なカールの一つと思はれる。

其のカールの底になつてゐる窪地は、草木の配置や池の模樣などに纖弱な一種の趣味があつて、周圍の荒涼たる破片石の大曲線に威壓された私達の心を融和させて私達を其處に引付ける力がある。其の力に引付けられたやうに、一戸博士と碧梧桐とは、石の大傾斜面を其の窪地まで下りて往つた。さうして五郎池の邊を彷徨してゐる二人の姿は、此處から見るとまるで遠い星のやうに見えたり見えなかつたりする位小さくなつて居る。山では線の延長やカーヴが、下界での標準を離れて宏大になつてゐるので眼も心も其の宏大に馴れて、私達は此のカールの底を小さい盆地のやうに見て居たが、今下り立つた二人が、其のうちに點のやうに

消えたり現れたりしてゐるのを見て、始めて比較級によつて、此のカールの宏大さを感覺する事が出來た。

私は人夫達と共に、眞砂岳續きの美しいシナノキンバイの黄い絨氈を布きつめた細い尾根の偃松の蔭に寢轉んで晝飯の粥の炊けるのを待つて居た。私は腹を痛めてからは、粥を常用としてゐたが、モウ危險の去つた後も、「粥の旦那」といふ人夫達の私に與へた稱號に執著するやうに粥をやめなかつたのである。

眞砂岳の中腹を廻つた私の印象は、只行手の赤岳の裏側の眞赤な砂の懸崖が岳の名を裏書してゐるだけであつた。さうして圓滿な尾根が此の邊から稍不安な屈折を示してゐるやうに感じた。赤岳の手前から、今迄の破片石の柔かい曲線が磊磊たる巨岩の堆積のうちに入つて行つた。其の岩傳ひから時々削り立つた砂の崖に出で、僅の間に今日の日程中の難路があつた。が南澤までの險怪な生路を踏み破つたといふ感じに充ちてゐる私達には、此處の難路は何の抵抗をも感ぜしめなかつた。此岩の堆積が遂にピークを爲してゐる手前から、其の頂上を仰ぐと、まるで大きい鷲が止まつたやうな岩を見た。私は直吉と二人切りで、遲れて此處にかゝつた。場所の名稱について無神經な直吉は此のピークの名を私に教へる事が出來なかつた。後で林藏に聽くと、夫れはヒノハチ岳では無かつたらうかと曖昧な事をいつた。ヒノハチ岳とは、今公にされてゐる地圖に其の名稱の記載されてゐぬ山で、山岳會の地圖にも其の名がないが、「火打岳」と書いてヒノハチ岳と讀むのださうである。

其の石の鷲尾を廻つて、更に進んで、破片石の障壁のやうな延長を此方から越すと、其處が赤岳の頂上であつた。

黒部五郎岳は、西南の空に雄大な背景を描き出してゐる、其の岳と此の赤岳との中間の大きい空間の底部を作してゐるテーブルランドを雲の平又は蜘蛛の平と呼んでゐる。山々の圍んでゐる卓のやうな茫漠たる高原で、其の一方は雪田の傾斜面のやうな柔かい曲線を以て澤に落ち込んでゐる。二重舞臺のやうな高低を以つた其の高原は脚色されて山のロマンスが演出される場所のやうに感じられた。人格は其の居る場所として必らず平地を要する。自然が決して平地を作らない場合は、人格を回避する意志があると見なければならない。從つて自然が此の山の中に斯ういふ平地を作つたのは、如何に人間をふり棄てゝも、なほ自然の衷心にはペルソーナ（人間か或は人間以外かの）に對する憧憬があると斷定しなければならない。丁度私自身が、私の尻に常に條蟲のやうにぶら下つてゐる世間といふものを振りすてる爲に山に入つても、矢張り腹の中に殘つてゐる條蟲が、何時も私を支配してゐるのと同じではあるまいか。さういふ風にして自然は、此の高い所に廣い平地を作つて、非人格の世界の奥深く、人格の世界を作つてゐるのではあるまいか。斯うして原始時代の世界が阿弗利加や南洋に殘つてゐるやうに神話時代の世界が、此の日本アルプスの奥に何時迄も殘されてゐるのである。＝如是閑

クモノ平

野口五郎岳を下りて、眞砂岳の肩の邊を通過し、赤岳――測量部の五萬分一地圖にこの名はない、却つて槍ケ岳の麓硫黄岳に並んで赤岳の名がある、が、山岳會の地圖にも、亦た人夫の説明にも、眞砂の西南、黒岳の東南の落合ひに赤岳がある――の鐵氣を含んだ足場のよくない、さうして意外に峻嶮な尾根をかき上ると、眼下に黒部川の本源流かとも思はれるタル澤が落ち込んでゐる。其澤の深い中に、丁度臼を据ゑたやうに丸く根を張つてゐるのがかねてアルプス地帶中での大高原として其名を耳にした事のあるクモノ平だといふ。重疊たる山岳の總てが暗灰色にぬたくられてゐる中にも、かゝる餘裕のある白地の空虚を遺すと、山岳小説中のローマンチカルな一齣とも想像してゐた、其の記憶が油然としてこゝに喚び起された。

山岳小説は、どちらかと言へば、コナンドイルの書くやうな戰爭物に近い。岩石と言ひ、砂礫と言ひ、急峻な勾配線と言ひ、斧鉞を知らぬ森林と言ひ、之に風雨雷鳴の囃子を入れて、如何にも旗鼓堂々として陣に蒞むの觀がある。カールの雪田に陷穽を思ひ、噴火の轟聲に地雷を想像せしめる。いづれかと言へば血腥い道具立に充ちてゐる。其中にあつて、際立つた色彩を帶びてゐるのが、山上の高原、瑞々した柔かい草で覆はれてゐる坦々たる平原なのだ。白馬山に清水平があり、立山に五色原があるやうに、其處には消えて

行くに隨つて、黄紅白紫様様な百花が目もあやに地に敷いて咲く。山岳の髯武者が臂を張り目を瞋らしてゐる間に、平原には美女の美しさと若やいだ戀の甘さとが、春風駘蕩として打ち漂うてゐるのだ。少々史劇の型に嵌つた嫌ひはあるが、それは時姫や初菊の囚はれた道徳に支配さられてゐる無自覺な行動でなくて、それはモンナワ゛ンナやジヤンダークの自己を立てやうとする光榮ある情緒の流露を彷彿せしめてゐるのだ。ローマンチカルな一齣に相違はないが、それは類性的に目の前を通過するものでなくて、深刻に我等の胸腔に喰ひ入る力と熱とを持つてゐるのだ。

クモノ平も亦其重要な一齣を占めてゐる、さうして餘り多く人間の視聽に觸れずに、永久に祕密を保ちつゝある平原なのだ。我等は赤岳の小屋場を立つて、ワリモノ岳や鷲羽山に攀ぢて後、其裏面の様をも顧みたのであつたが、始めに臼を立てたとのみ見えてゐたこの平原は、其臼の半周を覆うて出張つてゐる山の根に限られて、其全姿容は食ひかけの西瓜の切れのやうに、半楕圓形を描いてゐるものらしいのだ。寧ろある山の脾腹を鋸と斧とで殺ぎ取つた、中段の平原と見るのを適當とする程、山の根を取り巻いて擴がつてゐるのだ。清水平（ショウヅダヒラ）が懷（ふところ）の廣い祖母谷（ババダニ）の傾斜地であつたり、五色原がたゞいびつな三寶を据ゑたゞけの抑揚も頓挫もないものであつたりするに比して、クモノ平は先づ其形に於て、遙に美術的であると言ひ得る。さうして、右にはタル澤、左には本澤、それは共に黒部の源流をなす大溪谷が、其脚下に底の知れない溝を穿つて取り廻はしてゐる。この平原あるが爲に、黒部の源流は更に洪邃祕奥の幽幻味を深うしてゐると言つてよいのだ。若し夫れ其の平原の一端に立つて、近く藥師岳の獰猛な山皺と相對した時、恐らく何人も深い塹壕を構へた要害の地であることに想到するであらう。クモノ平には、單に甘い戀がある許りではない、又美しい犧牲の精神に充ちてゐるのだ。

我輩は今までこの平原を「クモノ平」と書いて來た。山岳會及五萬分一の地圖等に「雲の平」と記してあることを閑却したのではない。又別に説があつて「雲の平」の漢字を示す意義を絶て排斥したのでもない。先達林藏はこんなことを語つてゐた。この平らに殘つてゐる雪がすべて消えてしまふと、其處には草の見えない土の露出地と水の溜つた沮洳地とが殘つて來る、それが綠の滴たる草の間に明かな線を劃するが丁度蜘蛛の手足を伸べたやうな形に見えると云ふのであつた。山岳の殘雪が駒の形や人形の姿に見える、それに伴うて傳説や口碑の殘つてゐることなどを思ひ合せると、雲の平も或は「蜘蛛の平」が本來の意義であつたかも知れないのだ。「雲の平」は漢字趣味に馴れた者の頭には響き易い。が、「蜘蛛の平」には原始的なさうして傳説的な煤けた匂ひがする。態と「雲の平」の字を避けて、姑らく疑ひを存する所以である。＝碧梧桐

黒岳（水晶岳）から鷲羽岳

北アルプスの中央山系は、赤岳附近で西に向つてK字形の支峰を分派してゐる。私達はK字の垂直線を下から上へと歩いて行つたものとすれば、下の方が黒岳から赤牛岳に亙る一線で、上が黒部五郎岳に至る一線である。私達が赤岳についた時は此の下の線の黒岳まで行くだけの時間の餘裕があつた。人夫を赤岳の小屋場へ廻して、私達だけ直吉をつれて黒岳に向つた。

赤岳の西の肩を其まゝ北へ進むと、扁平な細石の傾斜が、何時か巉巖の細いヲネになつて、黒岳との東側の縫合點が驚くべきカール式の大雪田を作つてゐるのを發見した。熱帶の山のやうな眞赤な赤岳の懸崖を見たばかりの眼で此凄しい雪の溪を瞰下して、私の感覺は燒かれて又冷やされたやうな痛みを感じた。

尖り立つた、岩の山脈に沿うて幾何かのピークを横にからんで最高峰の下まで行つた。其の鞍部に裂傷のやうな細石の傾斜がある。直吉の教へるまゝに、私達は、其の細石を掘つて水晶や柘榴石を拾ひにかゝつた。水晶は掘るに從つて細い小さなのが幾何でも出て來る。私達は、河原で石を拾ふ子供のやうに、互に口も利かないで掘つてゐた。片手に大事相に拾つた水晶を握つてゐる氣分は、そゞろに子供心の昔の自分を私に想はせた。私は淡い樂しい幻を懷しがりながら、失はれた遠い昔を夢に見てゐるうら寂しさに堪へなかつた。

私達の水晶掘は際限がなかつた。私達は、自分達を此處からモギ取るやうにして立ち上つた。此處に意外の時間を費したので、私達は頂上まで行かずに此處から引返さなければならなかつた。

赤岳の下の小屋場は三方を赤岳とワリモノ岳との尾根續きで圍はれて、西は偃松の低い堤に防がれた、好野營地であつた。その中央に池があつて、「今日の風呂は湯加減が好いぞ」と林藏の云つたやうに、其の水は生溫るかつた。從つて盛夏には枯れてしまふやうに思はれた。

寒い風がテントを煽つて始めから危ぶまれてゐた其の柱が折れたので、鳶口やアルペンストツクを縛りつけた。碧梧桐は天文のいろいろを一戸博士に質しながら夜の更けるまで其の寒い風に吹かれてゐた。私はミルクにウ井スキーを入れ過ぎた爲め朦朧となつて、二人の話聲とテントのハタハタといふ音を夢に混ぜて聽いてゐた。

二十日の朝は晴れた寒い朝であつた。人夫達は直ぐ鷲羽(ワシハ)岳に向つてワリモノ岳の中腹を進んだが、私達は其のワリモノ岳の石の多いヲネを上つて一時間足らずで頂上に出た。

白山の穩かな姿が、此處に來て始めて十分に大觀された。珍らしく雲の海が其の下半身を隱して綿の花のやうに輕い波紋を重ねて飛驒高原を蔽うてゐる。

下りも石の多い斜面で、下り切れば鷲羽岳への上りである。花崗岩の細石の圓いヲネを上つてワリモノ岳から一時間許で、頂上の三角點に達した。

鷲羽岳の展望の特徵は、眼の前に硫黄(井ワウ)岳の、地獄のアルプスのやうな剝げ爛れた赤肌の山脈を見て、夫れから西南に直ぐ煙を吐いてゐる、といふよりも寧ろ煙に蒸されてゐる燒(ヤケ)岳を見せられる點にある。さうして其の生を呪つてゐるやうな動いてゐる荒涼と進行しつゝある破壞との活畫に、更に外の意味を加へてゐるのは、直下の鷲羽の池である。噴火孔の跡らしい窪地に溜つた水が、眞圓に蒼く、水の面の小ゆるぎも見せずに澄んでゐるのは、其の上に破壞の手が今作りつゝあるやうな赤肌の硫黄岳と、岩が燃えてゐるやうな燒岳とを、軈て永久の沈靜の中に葬る池ではないかと思はれる。さうして其の水の蒼さは此の池が今迄葬り去つた祕密を決して語るまいといふ色である。向ふの動いてゐる荒涼と進行しつゝある破壞とは、何れ此の動かない荒涼と破壞の終りの沈靜との裡に、其の殘酷な歷史を沈め去るのであらう。＝如是閑

蓮華岳から雙六池まで

＝蓮華平の水葵＝

鷲羽岳の頂上から、今後行くべき道をどう取つたものか、と一鞍部を隔てた向ふの雪の多い山を見通しての評定が始まつた。向ふの山といふのは、又の名を三ツ叉ともいふ飛信越の三國境に立つ蓮華岳と、それとヲネつゞきになつてゐる雙六(スゴロク)岳だ。――因に陸地測量部の五萬分一地圖には鷲羽岳の名が間違つて記してある、鷲羽岳とあるのが、この三ツ叉の蓮華で、其右上に無名の一ピーク 2944,2 とあるのが鷲羽岳である。自然山名は順送りになつて、其蓮華が雙六岳であり、其右下無名の一ピーク 2754,とあるのを樅澤(モミザハ)岳と呼んでゐる――蓮華と雙六はそれが同一の山の擴がりであるやうに、横に伸びた柔かい地平線を引いて、蒲團著て寢たる姿と言つた風に横たはつてゐる。あの頂上に登つてヲネ傳ひをしようか、それとも蓮華平らにつゞく雙六平らの殘雪帶を横に卷かうかといふのであつた。尤も横に卷くとしても、餘程頂上近い處でなければ、處々に瀧のやうな懸崖があるので踏んでは行けない、横に卷くのもヲネ傳ひをするのも、左程の相違ではないといふ。今までがさも山のピークに呪はれたやうに、下りては上り、上り盡きては下りるといふ上下動許りを繰返して來たものが、時折りの澤傳ひも亦必要な變化であらうといふので、一先づ評定は打切られた。

鷲羽の輝石安山岩のザラ場を辷るやうにして、其の間に新しい草鞋を穿き潰して、蓮華の偃松帶に入ると、其處には處斑らな沮洳地があつて、今までに經驗しない生溫い水を踏ませられる。水は生溫い許りでなく、ぬめぬめした水綿も足に纏ひついて來るやうだ。爪先き上りのなだらかな平原を行くさへあるに、冷たい堅いものを踏み馴れた足の感覺を覺醒するといふよりも、之を誘惑するこの生溫い水は、我等の手を取つて夢の世界へ引張つて行くやうな變な心持にしてしまふ。

が、さういふ沮洳地には、きつと水葵であらうと思ふ葉張りの豊富な、皺目のついた綠の滴る許りのが、他には見せられない珠でも抱いてゐるやうに芽生えしてゐる。他の葉はまだ雪のすべつた跡の著るしい枯葉

を地にへばりつかしてゐる間に、水葵のみは單り瓦礫中の翡翠と光つてゐるのだ。それが二本三本と寄り合つて立つ處もある、何だか土中の力と熱とを象徴する草木の王者らしくも見えるのだ。ともすれば夢の世界に引込まれさうな、倦んだダルイ氣分が、其水葵を見る毎に後へ引き戻される、我に返る心の驚きが閃めく。

姑らく上つて、もう頂上も一呼吸の近さの處まで來た。其處には雪田の一角が手を伸べて、始めて新しい冷や冷やする水を流してゐる。我輩の幻覺はもう醒めたけれども、早晝を喫した後の一行は、又別な幻覺に押し包まれたらしい。一人倒れ二人倒れして、一行はこの蓮華平らの草の上に一時間の甘睡を貪つた。若し逸早く目覺めた如是閑が大きな聲をして起して廻らなかつたならば、我等は夕風の冷たさに襲はれるまで、こゝに著のみ著のまゝの醜骸を横へてゐたであらう。

醜骸といふ詞は妥當を失するかも知れない。が、物を考へないといふことが頭の保養になるといふことは別にして、夜叉澤の野營で感傷的なことを言つた如是閑も、舟窪乗越でバロメーターの羽翼を失つた一戸博士も、亦た始めから山に上るといふことのみ興味を持つて來た我輩も、たゞ食に飽く肉體の放恣に使役されてゐる動物性のみを殘留した一肉塊に過ぎなかつたのだ。平生の一戸氏でも如是閑でも我輩でもない、長大な痩軀の一人と中肉中脊の二人とが、拔殻な胴體を伸ばしてゐた、それが眞の事實なのだ、大に哀れ果敢ない氣がせんでもない。が、其醜骸になり得た當時が、今日の我輩には甚だしく戀しい。

蓮華の澤傳ひは、偃松と雪田の織り交せであつた。やつと偃松を潜り出るとすぐ雪田を渡らねばならぬ。雪田は大抵三十五六度の急勾配を横に渡るのであつた。それがいつまでも同じ處をどうどうめぐりしてゐるやうに、偃松と雪田とが入りかはり立ちかはりした。雪田を渡ること約十回に及んで、到頭しまひには、雙六の池を下に見下す偃松の最も獰猛なヤブの中にもぐり込んでしまつた。雙六の池にほとりして、そこに可成の平地をなしてゐる石原に仰臥した時、何だか偃松と雪田のチグハグに出て來る活動寫眞の最長尺を見た後のやうな、欺かれたやうな、殘つてゐる好奇心を拂ひ去られないやうな、倦怠に羞恥の彩られてゐる苦しい心持を味はざるを得なかつた。これが今までの動物的な醜骸に人間らしい平生の我が魂の還つて來る最初の芽生であつたかも知れない。＝碧梧桐

樅澤岳から硫黄澤乗越まで

神祕的な傳説に富んだ飛驒の雙六谷をのぼりのぼつて、其の谷の奥の奥の雙六の池に出て、濕めぽく黒ずんだ雙六平の殺されたやうな靜かさを味つたら、何んなに此處の自然が隱してゐる意味を探り得たであらうか。夫れを私達は逆に放漫な粗大な剛膽な、生鑛（なまがね）のやうな自然に接して、夫れが次第に人界に近いてロマンスの谷を産み出したといふ其の谷の源へ、いきなり出てしまつたのである。雙六岳と樅澤岳との柔かな曲線が靜かに交叉した中間の陰濕な平原の感じは、冷たい靜かさの裡に私達を漬けて、今迄の奮闘的な登攀によつて起された私達の灼熱を冷却せしめた。ジメジメとした草を踏む時の私の足の冷たい感觸は、私を身慄ひのするほど鎭り返つた氣分にさせた。海の底にゐるやうな重い冷たい感じが私を壓しつけて此の小天地から流れ出た雙六谷のロマンスが持つてゐる血しほの温かさを想ふ事が出來なかつた。

樅澤岳（モミザハ）の上りにかゝつて一時間餘りで頂上に出た。偃松に蔽はれた狹い尾根は左右の展望を自由にした。鎌尾根（カマヲネ）のキザキザな、さうして曲折を極めた巉岩の連續の果てに、槍ケ岳の凄じい鋒鋩を見上げた心持は、雙六平の重い空氣に鎭められた私の落著た氣分を震り搖がした。燒岳は私達が手を延して香を投ずる香爐のやうに鼻の先に燃えてゐる。穗高岳（ホタカ）の頑強な巖の群は、槍ケ岳の肩から混雜した群衆の列のやうに西に走つてゐる。穗高の蠻氣を笑ふやうに乗鞍岳（ノロクラ）が鷹揚な姿を其の奥に見せてゐる。笹岳（カサ）は此の兩者の中間の趣味を持つたやうな姿で、仲裁者のやうに其の横に聳えてゐる。

槍ケ岳から東には常念（ジヨウネン）山脈が、殆ど平均した高度で、大天井岳（ダイテンジヨウ）から燕岳（ツバクラ）まで眞赤な硫黄岳（井ワウ）が吐いてゐる毒氣を防ぐ障壁のやうに續いてゐる。

樅澤岳の直ぐ前の俗に金平糖坂（コンペイタウザカ）といふ細石のピークのツルが樅澤谷へ落ちて行く其の尾根に、私達は二人の人影を發見した。林藏は望遠鏡で辛うじて判斷して岩魚釣（いはな）であらうといふ。此處から高瀬谷へ下りても、

谷傳ひで葛の湯まで下るのは不可能であつて、此谷に下りるのは岩魚釣の外には無いといふ。夫れも殆ど上高地の嘉門次親子の獨占になつてゐて、嘉門次が作つた道もあるのだが、決して人には教へないといふ事である。アノ二人が嘉門次親子であるか、或は彼等の獨占が破れたのか、などゝ山の内の超絶的な原始的な生存競爭の狀態を想像して見た。

今夜の野營地の硫黄澤乘越についたのは五時に近かつた。硫黄の臭氣は思つたほど強くはなかつた。夕飯を濟ました頃から珍らしく濃い霧になつた。山に入つて霧の魔力をも美化力をも知り得なかつた私は、今少し早く此の霧の現れなかつた事を、惜しがつた。夕暮れの暗さは、霧が見せる變化を十分に窺ふ事を妨げた。夜に入つてからは愈深くなつて、彼等が霧小便といふ雫のやうな雨もポツポツ落ちて來た。斯うなると明日の天氣が私達の間に問題になつた。大丈夫と自信のある林藏も、一旦寢てしまつた人夫達も、起きて來て其の自信を捻戻した。林藏はもう此處まで來れば、假令大前に會つた所で左俣の谷を西に下つて蒲田温泉まで飛ばすに雜作はないと事もなげに語つた。けれども今迄の晴天續きで、全く天候其の物を信認してしまつた私達は、林藏の此言葉を信認する必要もなかつた。私達はもう明日の天氣を疑ふ能力をさへ失つたやうに平氣になつて山で雨に逢つた林藏等の話を他事のやうに面白く聞いて寢た。＝如是閑

槍ケ岳

霧は昨夜の宵のうちに晴れて二十一日の朝は、乾き切つたテントに日が差してきらびやかな光線が周圍の岩の山を紫色に染めてゐた。今日は槍ケ岳に登つて梓川に下つて赤澤小屋に泊る豫定であるが、若し日が高かつたら、上高地まで一氣に下る事にした。硫黄澤乘越の野營地を七時に立つて、間もなく名高い鎌尾根の縦走にかゝつた。

金米糖のやうな細石から出來てゐるといふので金米糖坂と呼ばれた脊梁を横ぎると、同じく食慾的の大煎餅坂小煎餅坂にかゝる。煎餅のやうな破片石の堆積から成るピークであつて、鎌田温泉へ下る谷の左俣の頭に當つてゐて三角標もある。私達は、其の山腹の、踏めば崩れる岩の崖を横にからんで行くのだが、ソレは私達には、もう危險といふ範圍には入らなかつた。

鎌の刃のやうなので鎌尾根といふ岩石の屈曲した尾根は、縷々其上を傳ふ事が不可能になつて、信州側の滑らな草の上や急傾斜の雪田を横ぎる。これが最初の經驗であつたら、殘酷な印象を私達の頭腦に殘したのだらうが、私達は殆ど無意識に當然の平易な運命であるかの如くに、攀るといふよりは、歩るくといふ氣分で辿つて行つた。人夫達も難路に於ける私達への斟酌などは忘れてしまつて、岩の蔭を蝙蝠のやうに飛んで行く。

鎌尾根の嶮しい刃の上に立つて、自然の斧が、彫みあぐんで滅多打ちに碎きかけたやうな巨岩の突起を仰いだ時に、私は槍ケ岳を自然の技巧の及ばないほど獰惡な材料だと思つた。技巧に對する叛逆は、二十世紀の人間の藝術の特徴ではない。太古からの自然の藝術にも夫れがあつたと思つた。烏帽子公園で其の技巧を誇つた自然が、ココで屈古垂れてゐるのを見て、私は愉快だつた。

軈て、槍ケ岳の中腹の鞍部に出た。此處から槍ケ岳の頂上を見ると、背面から見た時のやうな獰猛を失つて、彼にも幾分表裏のある事が看取された。少くとも私の登攀心を唆つてゐる事が夫れを拒否してゐる裏面の野生とは正反對であつた。私達はピラミツドの一角に沿うた殆ど垂直に近い凹線の中を攀ぢる。足は劍を束ねたやうな岩の尖を踏んで、手は其劍先を摑んで上る。上の人が踏み崩す岩塊が凹線の中を彈丸のやうに落ちて來るので、上で行動してゐる間は、下では岩蔭に身を潜めて居る外はない。

けれども私は此處の岩石登攀が私を機械體操をしてゐるやうな氣輕な心持にしてゐるのを好まなかつた。夫れは私の足下に不可解の世界がないからだと思つた。北葛、七倉の登攀には常に不可解の谷や澤を脚下に瞰下してゐたが、此の槍ケ岳の表は、梓川の下りまで公道のやうに私達の前に展開してゐる。身體の周圍の不可解の天地を持つてゐない時は、私達の興味に奥行がなく、感覺に深みが足りない。北葛七倉の登攀は私達を不思議の岩石の龍卷の裡に吊した。槍ケ岳の登攀は私達を機械體操の鐵の棒に吊した。斯ういふ私達の

感じは、頂上に出た時の、私の感觸に影響した。馬の脊のやうで、さうして馬の脊位の廣さに思はれた頂上の東の端に小さい宮があつて、西の端には折れた三角標があつた。脚下は崩れた石垣のやうな削壁で、私は唯高い岩の上に立つてゐるといふ外、自分の居る所の威嚴を感ずる何物もなかつた。私は自分の標高の高い事を利用して展望した周圍の光景のうちに、私を投じた。經過して來た中央山系のうねりが、見えつ隱れつ、遠く蓮華まで走つてゐるのを辿る事が出來た。槍の肩から岩石と細石との脊梁で續いてゐる穗高の深い山容は私を恍惚とさせた。さうして梓川の溪谷や高瀨の谷を見下した時に、私は霧の魔力を知らない明瞭さの沒趣味を惜しんだ。

再び槍ケ岳の肩に下りて晝飯を濟まして、三十分程晝寢をして、飛驒乘越に下つた。其處の石窟の坊主(ボウズ)小屋は半ば雪に埋もれてゐた。此處からガンジキを必要とする急傾斜の雪田になつて瞬く間に谷に下りた。此處で槍に登る一組に逢つて、私達は半ば山間の氣分を離れた。雪田が二つに割れて梓川の青い水が白い泡を吹いて流れ出してゐるのを始めて渡つた時に、私はもう山を出たといふ寂しい感じに打たれて、ふり返つた。赤澤(アカザハ)小屋を過ぎて梓川の兩岸を右に左に渡る。丸木橋を渡る事三度、徒涉五六度、其の中には、下手の水流に人夫が垣を作つて、私達の流されるのに備へる必要のあつたほど危險な激流の徒涉もあつた。殊に最後の夜に入つてからの徒涉は、山の歸りの慌たゞしい氣分を遺憾なく味はせた。さうして夜の九時近くに上高地溫泉の灯影を木の間に見出して、私の胸は遠い世界から歸つた賑かさと、懷しい世界の遠くなつたうら寂しさとて一種の抑壓を感じた。＝如是閑

僕の様な筆の立たない人が、山登りをしても紀行などゝ云ふべき程のものが出來ない。針の木雪溪を見れば、雪の中に生れた身のことゝて、なつかしい様な氣を起したり、故鄉での春の暮れに段々と消えていつた後の、根雪を思ひ出したりすると共に、登つて行く雪田の如何にも雄大であることに感心したり、其勾配が急になつて、殆んど絶壁の様な所に行けば中々困難だと思ふが、是等の思想を形容する言葉も出ないし、さればとて科學的に面白く説明する腕もをも持たない。書くと約束した爲に書く丈のことで、若し之を讀まるゝ方が一人でもあるならは、有難いと謝せねばならないが、其方には御氣の毒である。幸に長谷川如是閑と河東碧梧桐の兩兄が、私の述べたいと思ふ所も、又自分では対して氣にも留めなかつた微細な事件をも其眞相を穿つて、成程さうであつたかと僕にも面白く讀ませるから、自分の役目は割合に輕い。只責塞ぎまでに書くまでのこと、讀者諸君の諒察を望む次第である。（一戸）

滿年雪

針木(ハリノキ)の雪溪!!!僕等一行の登つた時に、籠(カゴ)川の水源たる此溪に、雪が縷々寫眞で報ぜられて居る通りに非常に澤山にあつた。第一日の夜營地迄達せぬ中に、溪流は土で以て汚された岩の様になつた雪で、蔽はれて仕舞うた。自分は常に頭の内に入れて居る新高山に登つた際に、陳有蘭溪に沿うて次第に登り、溪が段々と狹くなり、兩岸が相迫り、一方の岸によつて一二町行くと、今度は他の岸に越さないと一歩も進めないと言ふ様な所に行く。止むなく殆ど腰までも水に浸たつて越す、そして又數町時としては一町も行かない間に、又もや他岸へ涉ると云ふ様な鹽梅に、苦しんで登つたことを思ふと、針木の此の溪も、若しも雪がないならば、同様の經驗を繰返すであらうとの想像が心の中に浮んで來る。

そして更に新高山に登る、あの溪にも此様な雪があるならば、其頂上に自分の絶えず夢想して居る様な天文臺が出來た日に、荷物の運搬に如何に幸福であらうと、自分の希望と矛盾した考へを起しなどもした。若しも其處に萬年雪があるならば、其頂上が冬期天文の觀測をなし得ない程に塞いであらうのに。併し登山中の空想などは兎角互に衝突する思想を起すものである。山の下に居ればこそ、面倒な理窟も列べねばならないが、山に來ては天下泰平で、丸で晝寢でもする様な鹽梅である。丁度夢の世界には論理の束縛が實在せぬ様に、山に居る間には勝手な想像が、勝手に往來するのである。

針木の雪田を踏むと、一體此雪は何時雪の形となつたものだらうと思ふ。勿論僕等の足にふれて居る雪、僕等の荷物を擔うてくれた人夫の一人が辷つた雪が、段々と融解し其下なる雪を通じて段々と下に行くであらう。勿論一旦解けた水の凡てが下なる雪を甘く通りぬけ得るか、それとも其一部分が融解する時に折角吸収し得た潜熱を、通行中に奪はれて仕舞うて、途中で再び凍るかは保證されない。それにしても、下層にある雪がどんなものであらう。今年の冬が到來するまでは、此雪溪が其雪の量を減ずる一方である。論より證據、先達の林藏が時々言うた。今年は例年に比べて雪の消え方が十日も遲れて居るので、雪が非常に多いと。僕には十日後の雪の量がどの位か分らないが、十日もたつと、林藏が滿足する樣に雪が少くなるに相違ない。

さうすると、問ひたくなる。冬が再び來て新しい雪が、此雪溪を蔽ふ時からは消え殘つた雪が其儘百年も千年も又萬年も其儘に雪の形で殘るだらうか。併し一般に萬年雪々々々と言はれて居る。此萬年雪と云ふ言葉は何となく、僕の頭に能く響く。之が人類が永遠の生命を希望する爲であるかも知れない。此樣に貴とい萬年雪には上の樣な疑問があつても此紀行などには宜しくさけて置かう、其方が自分の精神を滿足させるから。只玆に一種の怪しげな謎の解の樣なのを上て置けば、萬年雪は人間の如しと言ひたい。人間の身體を組成する物質は新陳代謝する、或る時を經れば、其組織中の物質は殘らず入れ替ると言はれて居る。それにも係らず、其人の個性が其儘續く樣に、よし萬年雪の成分が新陳代謝することがあらうとも、萬年雪を萬年雪として通したい。＝一戸

測量師に感謝す

蓮華の頂上は陸地測量部の三角測量で精密に其の高さを測量された。二千七百九十九米突は其の結果で、同部で發行した五萬分一の地圖に記されて居る。山に登る人々のアムビシヨンの一は高い山に上つたと云ふ自信である。又或種の人々にとりては前人未到の山に登つて見たと云ふ記錄である。又或種の人々には絶頂から見た山の景色の雄大で壯嚴で而も亦美しいのを見て、自我を離れて、自然と一體となる樣な得も言れぬ精神狀態を實現して見たいとの希望が、最も強烈であるらしい。さりながら、其何れの場合でも、山の高さが冥々裡に其人の心を左右する。一千尺の山に登つたと云ふ丈では、フーンと言はるゝ位のことで、能く登つたなあと言うて呉れる人もない。それで山の誇の一は高さにありと言うても宜しからう。

蓮華卽ち針木峠から登つた此山が二七九九、言ひ換へれば三千足らずの數字で表されることは、我國の一般の人を滿足せしめるだらうか。一米突は三尺三寸で今日では尺の方よりも、米突の方が我國でも長さの單位で、一米突を三尺三寸として、然る後一尺を割出して居ると云ふ現狀であれば、地圖には二七九九の四字を列べられても不服は言へないが、尚暫時は九千二百三十六尺とでも言はないと高い山に登つた氣になれまい。一萬尺近い山、一萬尺以上の山が登山家の頭に響く。登山家の尊號を受ける資格なき僕にも矢張り響きが良い。

山の高さと言へば、讀者諸君が造作もなく決定し得るものと思うて、居るかも知れないが、此點は測量師に謝せねばならない。之を決定して呉れた彼等が、其爲に如何に困難を感じたであらうかは、一度信越飛の國境を縱走して見れば分る。僕は今此點を特に注意して置きたい。山に登る時に其山が前人未到のものであれば、之を敢てする人が或意味に於て勇者である。彼は其爲に如何に辛苦艱難するかは容易に推し得る。或山の頂上へと果して通過し得るか如何は、彼の一擧で判斷せらるゝより外ないとすれば、彼は凡ての困難を凌ぎ得る位置に立たねばならぬ。一旦登れると決定された後は、よし一度登つた人が案内の勞を取らないとしても、後に登る人々は其の心的狀態に於て雲泥の差がある。例へば今度の旅行で一行の通過した蓮華から北葛、七倉、舟窪の諸岳を經て不動に拔けた道は、前に榎谷氏の一度縱走した所である。加ふるに縱走でないにしても、山林局の測量師や、陸地測量部の人々が、其の尾根を傳うて立派な道までもつけて居る、併し讀者諸君が僕が玆に立派な道と云ふたのをば、平地に於ける道の樣に思はれては迷惑である。最も困難な所を何とかして拔け得る丈の設備を指すのである。例へば身體の通れない「やぶ」の木を一本切るとか、辷つて歩み得ぬ坂に、足をふむ所を設けるとかゞ、精々である。それにして僕等が、鉞を以て枝が一本切り落さ

れて居る痕跡を捜し立てた時に、殆ど知己に會うた様な快感を享け得るのである。

測量師等が此の如き困難を敢てし、或は先頭第一の登山を實行し、加ふるに精密な地圖を與へたのである。測量には種々の階級がある。又種類もある。一等三角測量、二等三角測量、三等三角測量などや一等水準測量、二等水準測量などは階級や種類を表はすものである。

日本アルプスの地圖を展開して見ると、越中の立山の雄山（二九九二米突卽ち九千八百七十四尺）に一等三角點が一つある。二等三角點は割合に多數である。僕等の踏破した所丈でも針木の隣の蓮華岳、南澤岳、野口五郎岳、雙六岳、槍ケ岳の五山頂に二等三角點を見る。三等三角點に至りては一層多數ある。併し僕等の進んだ道では三等測點は針木岳、北葛岳、不動岳、三ツ岳、黑岳、鷲羽岳、蓮華岳、小煎餅坂の頂に過ぎない。更に水準測量の點もある。例へば島々から德本峠を越えて上高地へ出る途中林道の側に二等水準點などと云ふ木標を見出すであらう。是等外にも尚測量者の困難の記念は、地形測量の爲に無數に設けた旗を立てた跡である。石を重ねて其上に小さな木を立てゝ居る。恰も山の間にある無緣佛の塚の様に見える。世人の餘り觀ないのも、稍似て居る。＝一戸

三角測量

我國の一等三角測量は、地球上に於ける我日本國の位置を決定するものである。併し僕は玆で特に注意して置きたいことがある。三角測量を以て、日本の位置を全然疑が起らない様に決定するのには、最初に一つの一等三角點の經度と緯度とを精密に定めなければならない。これが測量の根本で、之を司るのは應用天文學の範圍である。日本で此基礎となつたのは東京天文臺である。其處の大子午儀の中心の位置が、グリーニチから東百三十九度四十四分三十秒、赤道の北三十五度三十九分十七秒とせられて居る。若し此値に差があれば、自ら地圖から求められる凡ての經度や緯度に差が起る譯である。其經度の方が水路部の研究で差があるらしいと疑はれて來た。

三角測量は要するに、三角形の網で日本全部を蔽ふ仕掛けである。而して之等の三角形の形ちと大きさとを適當な器械と方法とで定める。三角形の頂點には其三角形が出來得るだけ正三角形になる様な所で、而もよく見通しのつく地點を取る。一等三角測點は大きな一邊の長さが十數里にも及ぶもので、遠い所が見通しが能くつき、三角形が奇麗なものになつて、而も其處には大きな又精密な器械を運び長い間滯在して測量に從事し得る様な高い地點を選ぶのである。此様に言ふと富士の頂上が一等測點かと云ふ人があるかも知れないが、高いのみが能事でないので、富士の頂上は三角測點としては格の低い三等測點（？）に過ぎなかつたと記憶する。

一等測點で、日本の國々の大略の形狀が決定されると、此大きな三角形を更に小さな數多な三角形となし、又もや三角測量を行へば、日本の形狀は勿論此の目に附き易い地點の位置が分る様になる。之を更に一度小分けすると、例へば北日本アルプスの鷲羽四周の如くに、黑岳、雲の平の高き地點（二四六四米突の所）、黑部五郎岳、西俣岳、蓮華岳、樅澤と硫黃澤との間にある山（二五一九米突）其他の如くに比較的近距離の地點が明瞭に其位置を決定せしめる。

然るに是等の見通しの良い所は明らかに高さを異にする山又は平地の何處かである。登山者の誇とする海拔一萬幾千尺の如きは其高きものゝ尤である。然らば此海拔とは何の事であらう。地球は其兩極が扁平な球卽ち橙狀のもので、其大さが或點まで精密に分つてゐる。勿論此形は山や谷などがない様に平らかな狀態である。其様な形が何處を通るものとして宜しいかは一寸知るに六ケしい代物であるが、面倒なことは言はないで、海の面が如何にも尤もらしく見える。

海の面とても時を異にして考へると高低の差がある。即ち潮の滿干がある。海岸にある一定の高さを有する地點に照らして、海水の高さを注目してゐると、一日の間にも高低がある。僕等のやうに夏が來たと言ふので、山に出かけて草鞋を穿いて時には汗を流しながら、空中を泳ぎ廻る臆病者から見れば、高い所ほど水に溺れない安全な所はない。大地は堅固なもので要するに、不動のものと考へられる。潮の滿干の如きも、

魚の様な乃至は海を我家の如くに心得てゐる或人々の如きは、却てそれが一日中に陸地が沈んだり、浮いたりすることを浮島と同じだと考へるかも知れない。そんな事は比較の標準の採用次第であれば、宇宙の現象が外にないならば、どちらの主張も尤もである。幸にこゝに月様が出て來て呉れて、「動くのは海水の方で、之を動かすものは自分だ」と教へて呉れた。それで天文の教ふる所を信じて、永い年月の間動かないと思はるゝ様な地點に照らして、海水の高さを觀測し、之を平均して平均海面を計算する。我國に於ては參謀本部の庭に水準の原點が設けられてある。此點が所謂水準測量を行なふに當て、對照の基をなしたのであるが、これは勿論平均海面ではない。東京灣で實測した結果は、東京灣での平均海面は參謀本部の原點の下方二十四米突半に位することを教へた。尚我國では其外に全國に十數箇所の驗潮所を設立して絶えず自記驗潮儀で潮の現象を記錄し、是等を基礎として一層正しく我國全部に能く合ふ様な海面を計算する事にしてゐる。＝一戸

縱走した山々

東京灣の平均海面がとりも直さず山の高さを計る基となつたものであるから、槍ケ岳が三千百八十米突高いと言ふのは、要するに東京灣の平均海面を丁度通る様に且地球の形ちに關する種々の條件を滿足する様な、楕形を描いたと假定して見れば、槍の穗先が其面に垂直に三千百八十米突登らなければならないと云ふ事である。されば日本全國、否全國とは言はず、單に北日本アルプス丈に就いて考へても、東京の參謀本部から出發して、水準器で無數の測點で、一々精密な水準の差を決定し、遂に三角測量の測點の位置までに達するには、中々のことでない。幸ひにして數年前アルプスも亦遂に陸地測量部の人々の努力で其事業が完成された。其中僕等一行の通過した山の頂きや峠の高さを玆にあげると、次の様になる。玆では學者からは叱られるか知らないが、自分の頭に響く様に之を尺で示した。尚序に各の山に對する自分の感じをも附記した。

針木峠　八三八五尺、始めて日本アルプスの壯觀に接す。身體の存在をも忘れ、心はアルプスと一體となつたかの觀があつた。

針木岳　九三〇八尺、一行は針木岳では頂上まで上らず、上凡そ九千百尺の所まで登つて引返した。午後の雨の爲めであつたが、雲の力の相變らず、強い力を持つて居るには一行も如何ともするによしない。

蓮華岳　九二三六尺、丸で自分の鄉里にでも歸つた様で何とも言へないやさしい山である。タカネスミレの花や、コマクサの花は何とも言へなかつた。

北葛岳　八四一八尺、唯々進みにくい所を進む丈が能事である。特別の樂しみも風景もなければ、何の趣味もない道である。

七倉岳　約八二五〇尺、此山頂から舟窪乘越に到一帶亦趣味を覺えないと言うてもよからう。

舟窪岳　約八〇六〇尺、一行はこの山に野營した。林藏に其名を尋ねたが無名であると答へた。山岳會の或圖を見ると、「舟窪の頭」とのみある。一萬尺を以て山の誇りとする人々には、八千尺の此山如きは恐らく眼中に無らう。が、立派な山の形をして居る此山、而も午後三時過ぎから、小春の様なうらゝかな日和に、雪の解けて流れ出す水を溜めては、或は炊部に或は冷水浴に利用し、其夜は長谷川君と種々の問題に就いて愉快に話したこの山頂、私にとつては無名の儘で過されない。僕はそれで兜山といふ名前を一行に謀つた。一行が同意した。僕は名前は拙いとしても無名で殘るよりもよい様な氣がした。併し其際も言つた、この山に名前がないならば、兜山として置かうと。外にあれば後につけたものは無論撤回である。歸京後東京朝日に僕が之を假りに兜山と命名したと出てゐるから、特に之を紹介して置くのである。其後志村氏の紀行中に何の苦もなく之を舟窪岳と稱してゐる。舟窪の頭を舟窪岳とするのは兎に角、要領を得た様に思ふ上に其名は誰の發案かは知らぬが、前に用ひられてゐることを見る以上、兜山の命名は撤回する。これで矢張一行の愉快に暮したこの山頂は矢張無名の山ではなかつた、僕の心は之で淸々する。

不動岳　八五六四尺、頂上に布かれてある大粒の眞白い花崗岩から出來た砂を見ては、玆は龍神の里ではないが、浦島太郎が龍宮城に行つた時に、こんな氣持はせなんだかと思ふ程に、其奇麗なのに感心した。此

山頂の他にも、此様な白砂がないではなかつたが、此處の白砂が後までも一番美しいと感じた。

南澤岳　八六五四尺、頂上は矢張白い砂を布きつめられてゐる。南澤岳の頂上から急なざらざらした粗彩の砂を辷り下りて、深い偃松をくゞつて雪田に出でたのは中々氣持がよかつた。凡そ急性の困難は壯快なものである。

烏帽子岳　八六四九尺、不動から烏帽子までの道、風景に富む。僕等の一行は烏帽子の頂上には登らうともしなかつた。烏帽子は烏帽子として見ればよいと思うた。

三ツ岳　九三八七尺、烏帽子の方から悠々と登つて行ける。どつしりした恰好の良い山である。

野口五郎岳　九六五〇尺、三角測點の邊で休んでゐる氣持は中々よい。黑岳の黑味がゝつたのと、赤岳の赤いのは讀んで字の通りに眼前にせまつてゐる。五郎岳の西北のカール、其最低部の池は美しい、五郎池と稱した人がある。

赤岳　約九五七〇尺、黑岳と連絡してゐるので獨立の資格がないか知れない。九五七〇尺もあつた所で、居候はあはれなものである。色が赤くでもないなら、尚一層知られないであらう。

黑岳　九八二六尺、一萬尺に段々と近い。併し此山が僕等にも恐らく他の登山者にも頂上近くから美しく結晶してゐる水晶の拾はれるので記憶されるであらう。之を拾うてゐる時の心持は丸で小供の樣である。天國に入ることを得るのはこんな氣持であらうか。

赤岳から九千三四百尺の峰を三つ位越して遂に鷲羽岳九六五〇尺、に到れば東南八百尺餘低くなつた所に、鷲羽の澤と云ふ舊噴火口がある。形狀は楕圓狀で中央部には水が溜つて居る。鷲羽を南にして下りて行く途は、石がざらざらして、うるさい氣がした、陸地測量部の地圖では鷲羽が無名山で殘され、蓮華岳の方が鷲羽となつて居るのは、恐らく測量師の連れて行つた案內が間違つて敎へたものであらう。

蓮華岳　九三七五尺、一行は其東側に進んで頂上に行かない。踏み行く雪田は中々趣味がある。直吉が先鋒をなして雪田の一角を進行中、其上方の岩から大きな石が飛び出して、落下し來り直吉の前方數間上方二三間の所で、ひたと止まつた。危いものであるが感心に人に當らないものである。大石にも慈悲心があるのかも知れない。之に反して一行が引續いて登つたり、降りたりする時に、手や足が過つて、落した小石の中には、復讐の氣があるのか、我等に痛いと叫ばしむるものがあつた。

雙六岳　九四三九尺此山にも登らない。

槍ケ岳　一〇四九二尺、雙六から尚山が若干あるが、大して注意すべきものもない。一行の登山した最後のものは槍で、高くて日本アルプス一帶を見るに良い。

此樣に數へ立てるも、疲勞を覺ゆる程くさくさした峯が、尚澤山にあるのに、年が年中山に登つて測量をする人が、中々煩はしいことであらう。併し色々人に尋ねたり又自分で經驗した所によると、どの職業も勵んでやつて見れば、趣味が出でゝ來るものである。餘計な話だが——餘計と云へば僕の話してることが殘らず餘計なことで——僕が明治四十年の夏、米國のウイスコンシンの首府マヂソン市の、メンドータ・レークで、釣をしたことがある。當時同市に夏休みを過ごされてゐたシカゴ大學の敎授であつた家永博士が、僕が同市に一週間程行つた時に、靑書生の僕をも、大いにもてなして呉れ、釣に誘うて呉れた、僕は從來釣を厭うてゐた、併し僕は、自分の厭うてゐるものをどの位熱心にやれるものか、試めしにやつて見たいと思ふので、直ちに同行の榮を願うた。そして雨を冒して二日間熱心に釣をなした。幸にして僕も亦三四尾の大きな二尺位の魚（カマスの一種）を釣り得た。平常いやに思ふ釣も魚を捕へると面白い。尤も聞く所によれば、釣の道樂は待つてゐる間にあるといふが、僕が其域には勿論到達し得なんだ。兎に角趣味のあるなしは、其道に對して努力を向ける度によつて或程度までは養はれるものであらう。先天的だか、後天的愛著だか知らないが、林藏も時々云うた、「山に來るのは勿論お金も欲しくないではないが、自分が山が好きだから來るので」と、成程尤もなことである。人夫を見て彼が金が欲しいからとのみと解し、判任の測量師が千辛萬苦をなめて、山野を跋涉するのを見ては、少し許りの月給で憐れなものと、佛の樣な慈悲ある言葉で、言ひ棄てるのは、宜しくない。其樣な考へから見れば、世に時めく人程氣の毒なものがあるまい。彼等の多くは自

分の心からでない事柄に、自分の力を注ぐ様に束縛されて居るではないか。併し又彼等の身になれば、彼等相應に其二重乃至三重人格を樂んで居らるゝのであるかも知れない。＝一戸

新層気象研究の必要

兎にも角にも山での大敵は暴風雨である。測量師等が此の困難に幾回となく遭うてゐるであらう。然るに僕等の一行は一度も雨に當らない、午後に雲の出た事一回、夜雲の出たのは二回で、共に一寸の間丈であつた。天幕の内で、愉快に豫定通りの計畫を豫定よりも一日丈早く實行し得た。天佑と言ふべきであらう。天氣晴朗で薪を採るに都合もよく、火も燃える、加ふるに碧梧桐君の注意が行届いて飯もよく炊けて甘い。副食物も薤もあれば其他の草も得られたので――多少ごろごろして舌ざはりがわるいが、それは文明病の結果だ――丸で遊山の眞相を發揮した。之を明治四十二年に於ける僕等（小倉理學士、鴻農巡査と僕との三人）が新高北山頂で低氣壓に襲はれ、あやしげにテント（天竺木綿で其時々に急造したもの）は勿論破壞し盡され、大雨と暴風とに玩弄されつゝ霰にさへも頭を打たれ、二日程、餘りの事に苦笑しつゝ暮した當時に比べると、山もこんな穩やかなものだらうかと思はせる。實に山には英雄の相がある。笑ふ時は三歳の兒童をも喜ばしめ、其怒るや三軍の將とても如何ともする事が出來ない。併し度量の大きな英雄と言ふのは、笑ふと何日迄も笑ひつゞけるにや、今度の場合などは、却て山の變化がないので餘りに單調なのに飽かしめた。

少しは降られたいがと云ふ聲が一度ならず出た。併し大粒の滴が激しく降下したら何と言ふであらう。山登りは天氣の良い時にしたいのは勿論である。これにつけても、氣象の進歩は望ましい。飛行機が出來たので、平地以外の高い所の風も注意せなければならない事が一般の人々にも分つた、併し乍ら一層氣象の研究、高山氣象の觀測は依然として我國に餘り開けない。政治家も毎年々々同じ様な爭をして居たら飽きるだらうが、チト高い山にでも登つて、見て自分の小さゝ加減を自覺したら如何であらう。思ふにさうすると、長命もするし、達者にもなり、大臣になる資格があるものなら必ずなれるでもあらう。あせらずに蟷螂のやうな爭ひをせずに、世界の大局を見て國利民福を謀つたならば、氣象の研究なども等閑に附されまい。ちと論法が科學偏愛とけなさるゝ傾きがあらうが。

僕は槍の頂上で其處に殘されてゐた登山者の名刺を檢した。そして其人々が天氣について書いたのを帳面に拾ひあつめた。天候が記入されて居なくとも、あの鋒先に登れる位の日は、天氣がよかつたであらうが、玆には天氣のノートがあつた分丈を紹介して置く。少しは後の參考となるだらう。

大正二年八月九日晴
大正二年八月十日晴
大正三年八月六日午前十時四十分晴
大正三年八月七日午前九時晴
大正三年八月七日午前九時半晴
大正三年八月十日午前八時晴
大正三年八月十二日午前十時晴
大正四年七月十七日晴
（一行の分大正四年七月二十一日午前十時十分快晴風北稍強し）

澤山の名刺から拾ふことの出來たのは八つ丈で、其他は登山したと云ふだけしか書いて居ない。どうせ名刺を殘すなら、一寸天氣模様を書き加へた方がよいと思ふ。これ丈の材料からでも、昨年の夏には八月六日から十二日頃まで、日本アルプス一體が晴れて居たかも知れない。との想像位は出來る。一昨年にも其頃は日本アルプスの跋渉に良好であつたらしい。＝一戸

山上の光線

僕等一行は何れも黄國人種の子孫で、中には好男子もあつたらうが、何れも普通一般の日本人らしい皮膚

を示してゐた。大町を出る頃には林藏等よりもいくらか色が薄かつた。それは其實何の誇りでもない、文明の中毒した爲めに、又た自然ならぬ都會に、深い深い塵埃や煙の底に生きてゐる爲に、太陽が絶えず我等に供給して呉れる清い光線に浴する事が出來なかつた爲めだ。僕等は山上りをすると、丁度長く放つてゐた畑で雜草の背の高い叢に包まれて、青白く細長くなつてゐる里芋を救つてやつた場合の樣で、山の光線には文明病に中毒してゐる皮膚は小なからず惱まされた。併し夫れが凡てゞない。西洋には日本の人々が裸の足に足駄をはいてゐるのを畫いた繪や寫眞を見ると、眼を大きくして驚くレデーさへある。彼等は絶えず自分の足の皮膚を見てゐるが、他人の而も成人の皮膚を見ると、目前に雷でも落ちた樣に思ふ。足の皮に何の罪があらう、折角五本の指を以て生れた足をば、罰の深い殺生をして獸の皮で被はねばならないとは何たることであらう。我が同胞も段々と此文明病に感染して靴は絶えず穿くべきもの、帽子は是非冠らねばならぬものと思ふ樣になり、僕などにも此病氣が可なり浸み込んだ。此文明病の爲に足を保護するにも注意を拂ふこと甚だしくなつた。元來足の底は厚い皮で包まれて跣足で石の上を歩かうが、雪の上を歩かうが、大して不便のない筈、論より證據私等が數多の生蕃と一所に、新高山を登つた時に生蕃はレデー等でさへも平氣で林の中も溪流の岸も歩いたものである。之に比べると我等の同胞は如何に文明に毒されて居るかゞわかる。と言ふのは生蕃等は我同胞を見てお前等は自分等と親類だ、早い以前に同じ祖先から出來た兄弟等が、海を越へて日本に行つた、彼等がお前等の祖先だと云ふ言葉に照して、何千年か以前には矢張り跣足で平氣で野や山をかけ廻れる勇者であつたに相違ないと思はれるからである。併し此樣に言ふと、同胞から叱られるかも知れない。すると僕は只々御免なさいを繰返し且山の上での思想は論理學の範圍外であることを述べ得るに過ぎない。が、今でも我國の何處かも之に類した風俗があると言ひたい。

文明病にかゝつたものゝ、西洋人の樣な碧白い皮膚にもなれぬ、あはれな黄色い顔は山を歩いてゐる間に、丁度火あぶりの刑にでも處せらるゝやうに、變色し始めた。一體之は何の爲めであらう。山否一萬尺にも高い山は天に近い筈であるとは能く聞く所である。正午頃になれば太陽にもより近いことであらう。太陽が天文學者の云ふ樣な白熱した瓦斯體で包まれた大きな球であれば、一萬尺も太陽に接近したらば少しは熱くなる筈であるらしいのに、事實僕は東京から山へと出發した時に、家の中に坐つた儘——坐つた儘と言へば夏の日に行儀正しく勉強でもして御座るかと賞めて下さる方があるかも知れないが、其實寢たり起きたりして暑さに苦しんだことは何十回だか知れない——大汗をかいて居たものである。大町は二千尺以上高い所であるが、其處から山へと動き出した時には汗も出たものゝ、次第に高くなると歩いてゐても、汗さへ流れないと云ふ有樣になつた。天に近くなり太陽に接近して却つて寒くなる。茲に於て天文學者のいふのが間違で太陽が其實寒い球でないかと言いたい氣がする。

さりながら左樣でもなさゝうなのは日陰に行つて見ると、一層涼しくなることだ。不動の三角點で休むとき、如是閑君は蔭がないかと探し歩いてゐたのも、太陽から何だか知らないが、顔や手の皮をピリピリさせる痛い或物が送られてゐるのを楯で防がうと云ふのである。且不思議なことは、東京などで外に立つてゐる時よりも太陽から來るものが山ではより烈しく顔を刺す。茲に於て太陽が矢張熱いものとして置いて良ささうである。只解し得ないのは山では寒いといふ現象と、此刺戟性の光線の性質である。

僕はこゝで一寸學者の言ふことを少し眞似て見樣。山の中を睡遊病で歩いてゐるものが言ふ事であれば、果して彼等の言ふことを其儘傳へ得るかは保證の限りでない。併し僕が其誤りに責任のないのは丁度帝國議會の議員が大日本帝國憲法第五十二條によつて議院に於て發言したる意見及表決には院外に於て責を負はないのと似たものだ。まるで眞人間と資格を異にしてゐるのだ。太陽から來る光線は中々複雜なもので、種々の色の光線が一所になつてあの樣に白く見える。而してこの光線が太陽から時々刻々出發する。而して太陽と地球との間は三千八百萬里である。こんな遠い所を光線はタツタ八分十八秒位で旅して來る。何たる事であらう、僕等は蟲の這ふ樣に十日に近い日數を費してこの山脈を縱走して、さも鬼の首でも取つた樣に思うてゐるとは。併し天地人各差があることを考へると、當たり前のことで各其分に安んずべきである。

光線が非常な速さで物質の存在してゐない、エーテルの中を波打たせて寄せて來る。其波が地球の近くに

來ると之を包んでゐる大氣に會ふ。この大氣は高い處では殆んど全部輕い原素の水素であるといふ話である。而して其上部は非常に稀薄で段々と地球の表面に近くなると共に、其密度が濃厚になり、且其成分にも差が生じて來て、今度は窒素が殆んど其大部分を占め、更に地表に接近すると酸素が增して來て地上一里半、尺で言へば一萬尺位までは吾等が地表であると同樣に大體窒素七八、酸素二一、アルゴン一、炭酸瓦斯少量といふ樣な割合になつてゐる。只大氣中の塵埃の量には市街であるのと、山であるのとで非常に差がある。東京から晴れた日に青空を見ると、青いには青いが、美しい青色ではない。田舍の田や畑へ出でゝ青空を見ると、何とも言へぬ程奇麗な色をしてゐる。更に僕等のやうに一萬尺も山に上ると、眞上の空の色は深い紫色になる。之は主に空氣中に含まれてゐる塵の量による。紅塵萬丈といふのは其著しい例で、空氣中にある塵埃が小さい波を起して、エーテルの海を進んで來る青や紫の光りを反射して、再び大空に返して仕舞ふ、うまく塵埃の充ちてゐる大氣を通り拔けたものは、大きな波の黃や赤などであるから塵の下から見れば、紅の塵が萬丈程高くまではびこつてゐると言ひ得る樣になる。山に登る時は反對である。大きな塵が段々と少くなる。光線の通過が段々と樂になり、たまにある小さな塵埃に反射されるか、又は空氣の分子に反射される、非常に波の小さな光線に限らるゝ樣になる。それで空の色が小さな波に特有な深い紫色の一點になる。

日光を七色に分解して見れば、一方は深い赤色できれて仕舞ひ又一方は紫の濃いものになつて切れて仕舞ふ。吾等が光線と呼んで居るのは勿論目で見得るからのことであるが、人間の中にも紫の方を普通の人よりもモー少し見得る人もあるし、又反對に赤の方に其樣な能力を有する人もある。それであるから今は見得ぬものは光線ではないななどゝ野暮なことは云はずに、日光には赤よりも奥の方にも或種の日光がないのであらうか、又同樣に紫の奥にもありさうなものと疑を起して見る。すると不思議紫の奥は寫眞で之を見ることが出來、赤の奥の方は寒暖計で熱があると知れた。吾等は光あれば熱あり、熱あれば光りありと思ふ傾きがあるが、目に見える光を發するまでに至らない一種の波がある。日光は其樣に大小無數の波を起してゐるが、前に述べた所によつて、平地では波の小さい方のは大部分届かないので紫の奥のもの所謂紫外線が至つて弱い。それで熱を伴ふ分は割合に強い。山に登つて寫眞をとるに平地と同じ氣では、よいものは出來ない。山では紫外線が強いのである。寫眞に感ずる光りが割合に多いのである。

紫外線といふ代物はつまり化合力が強いのである。目にこそ見えないが、其勢力が大したものである。之は醫療用にもなれば、又衞生上にも種々の菌類を殺すのに使用して居る。此樣に大切なものであるが、菌類を殺す位の力のあるものであれば人間の皮を害ふ位は勿論出來る。僕等一行が火あぶりの刑にかゝり始めたのは熱のある黃色や赤の光線の爲と云ふよりも寧ろ紫及紫外線などが文明病にかかりかけて居た皮膚に射込んで化學作用を誘起したのであらう。皮膚病にでもかかつて居樣ものなら、其處の病菌が死滅するので早く直るでもあらうが、青い皮膚も所きらはず刺すのだ、たまらない。況んや紫外線がX線程でもないにしても組織までも刺し込む力がある。幸にして此樣な有毒なものに會ふと、身體には夫れ相應に之に抵抗する仕掛が出來ると云ふ。僕等は一回、二回と顔や手の甲の皮をむかれて居る間にも早林藏等と同樣な色合になつた。金時其儘である。これが天が人類に與へた天然自然の保護色であらうのに、山の下で怪しげな光線に浴し、山の上では何處の水も金明水であるのに下界の所謂天然の水には矢張り怪しげな病菌が充滿して居ると云ふので淨水といふことをやり、水道を設け近頃では例の紫外線を水銀燈のやうなもので發せさせてまで淨水をやると云ふまでになつた——これは佛國などの事で我國ではない——所に歸ると又々幽靈みたやうな色に退化して仕舞うであらう。＝一戸

山上の溫度

地球上の人類がアダムとイブから傳來したものであるならば、東西の人種皆親類である。其子孫が東と西とに別れる間に、皮の色が或は黃に或は黑に、或は碧白になつた。僕は其祖先のアダムとイブとが、どんな皮膚を有してゐたか知らない。が、併し恐らく北日本アルプスに於ける人々の膚色位は請合だと思ふ。彼等卽ち我等の祖先は智識の木の實を食ふまでは、自分の裸體でゐたのを知らないといふではないか。太陽の照

る下で裸體でゐて、碧白にあらう筈がない。故に僕は曰く黒いのは、又た赤いのは祖先の色だと。さるにしても世は末になつた。皮の色一つで相爭ふ世となつた。女は顔の白いのを以て誇り、大の男までが之にかぶれて騒ぐ。それはまアよいとしても、世の先達と言ふ様な大きな顔してゐる西洋人等がアダム・イブの子孫たる事を承認しながら、世の中は人類の競爭だと得意になつて、祖先の色よりも一段と西洋化した連中を捕へて有色人種などと稱し排斥して來た。ひどい奴等だ、併し此様に憤慨して見ると、岩圖らんや、此東洋にも否我國の連中にも、隣の支那人をも人間らしく思はないものが澤山なのに氣がつく。困つたものだ、聞く所によれば、日東の國は君子國だと。君子國の人々が中華の國の人々と親しくされないとは何のことだらう。こんな蝸牛角上の爭ひも、何のことはない、原始的の皮膚をとり得る様に、日本アルプスに行きさへすれば直るであらう。世界の人々が誰れも彼れも同じ色になつたならば、戰爭もなくなるかも知れない。

學者らしい事を眞似て見てゐる間にも、日本アルプス熱に浮かされる。蓋し登山の效能の大なる察すべきである。併し尚一つ學者の言ふ事を拾ひ讀して見る。平地では空氣が種々の塵埃で充されてゐる爲に、太陽から來た光線が山上よりも弱い。學者が苦しんで實測した結果は之を證明してゐる。併しながら、山上の大氣の溫度は日中でも遙かに下の方よりも低い。これは學者を煩はす所以であるが、學者はそれは六ケしい事でもないと言うてゐる。一體空氣の様な透明なものは日光が通過する際之を殆んど全部素通りさせる。コンミツシヨンを取る事を知らない正直者である。それで日光が地面に達すると、始めて地面が熱せられる。地面の方は熱せられると、又熱を出す。其出す方にも二種あつて、地面の熱は熱線となつて射出すると共に、又た自分と接してゐる空氣の分子に熱を傳へて熱くする。其後のものが大氣の溫度を高める有力な原因である。それで山の上でも此様にして大氣が熱せられるものゝ、山になつてゐる高い處の面積は狹い、そして其四周には深い深い大氣の海がある。それで狹い地面がやつとのことで溫めた空氣も、一寸した風があると、四周の冷たい空氣と入れ替る。とても大氣が十分に溫まらない、故に山の上では溫度の差が少ない。蔭さへ見出せば汗を流す必要はない、否な蔭を探さんでも少し風があると、日がかんかんと照つてゐても寒さが身にしみる。

生活難が次第に激しくなつたなどといふ間にも、遊山熱が大きくなつて、やれ活動やれ帝劇、やれ何と、惜しかるべき筈のパンとなるべき筈の金が、一層はげしき道樂の爲めに費やされてしまう。而して金がないと青くなつたり赤くなつたりする。又一方には轉地療養などと大袈裟なことが流行する。どうせ金のない人の大様のことが出來やう筈がない。八疊に八人などと狹いそしてきたない部屋に多額の賃料を出して人込のはげしい所に苦しむとは、さてもさても人界は末になつた。若し魂を入れかへて、高き天に近き高天原に立ち返るならば、夏だとて苦しむ必要もあるまい。冬が來て寒くなつたなら下界に下つて宜からうし、又天の岩屋に立ちこもつて居てもよい。こんなことを云ふと、今の世の人かどうしてそんな眞似が出來ると大喝されるかも知れないが、不思議なもので、段々と山登りする人が多くなつた。赤澤の小屋で中房の人夫が言つたツケ、妙な事が流行つて來ましてへー、毎年々々登る人が增して來ましたと。今に夏が來ると、山へ山へと女も男も大騒ぎする時が來るであらう。而して其山も富士などはフンと鼻であしらはれて日本アルプスといふ言葉が普通な平凡なものになるであらう。＝一戸

3　竹内ヒサ　「鹿島槍から針ノ木へ」『夫婦登山ことはじめ ―袴で登った剱岳―』

2004（平成16）年10月12日刊　岡田汪発行

要　約

1920（大正9）年7月11～16日の記録。

メンバーは、竹内鳳次郎、竹内ヒサ、伊藤菊十（大町の案内人）、倉科智永（ポーター）、西沢国一（同）。

行程は、冷池～鹿島槍ヶ岳往復～爺ヶ岳～針ノ木峠～蓮華岳往復～大沢。

針ノ木岳山頂は通過せず、スバリ岳を過ぎた後はマヤクボ沢を経緯して針ノ木峠へ至っている。

※女性による後立山連峰の初縦走。

一九二〇（大正九）年七月一一日～一六日

《解　説》

この登山記は、ヒサが使いかけの女学校のノートに書きのこしたもの。題は仮題。全記録⑨参照。

〈メンバー〉

竹内鳳次郎　ヒサ　（ガイド伊藤菊十　ポーター倉科智永　西沢国一）

〈本　文〉

七月一一日　雨

ざわざわした対山館の庭を離れたのは七時四〇分でした。この日の幾組かの登山隊の先発でした。時々ポツリポツリと落ちてくる空を眺めては、雨にならなければよいがと思うのは、誰も同じことだったでしょう。大町を離れて一軒屋、大原を過ぎて二つ屋にかかるころには時々落ちてきた雨粒がだんだん激しくなり、とうとう私たちはゴザを着なければならないようになりました。大きな松の木の下でしばらく休みましたが、雨は容易に止みそうもありません。遅れていた人夫たちも追いつきましたので、着ゴザにくるまって雨の中を歩き出しました。

伸びそろった稲の青葉のなくなる所あたりからは行きあう人もなく、やぶ鶯の声をめずらしく聞きました。一〇時四〇分、要橋を渡って広い河原に出ました時、刈草を沢山馬につけて引いてくる人に五、六人会いました。皆珍しそうに私たちを振りかえっては見ておりました。私どももまた草と石との中で突然出会うこの人々をなつかしく思いました。なお三〇分ほど進んでいよいよ鹿島の村に着きました。雨はなお止まず、ゴザの外に出たところはぐっしょり濡れて袴の裾に水がたまって気持ちが悪うございました。行きあった村人が槍へ登るときいてびっくりして「この降りゆえ、ここで泊ったらよいでしょう」とて、この先に木こりの休む小屋のあることまで親切に教えてくれましたので、ちょうど昼飯を済まして五、六人の木こりが炉のまわりに集まっているその小屋にて、人夫たちの来るあいだ暑くるしいゴザや帽子をとって袴の裾などしぼっておりました。

間もなく人夫たちもまいりました。案内がとにかく鹿島神社(註1)までというのでまた出かけました。村を外れたところにこの神社があります。御籠堂のような所に、ここでも数人の木こりが炉をはさんで昼飯を喫しておりました。そこへ私たちは寄せてもらいました。一休みした彼らは雨の中をミノや笠をつけてまた木を切りに出かけました。お堂はいつか私どもの専領する所となりました。一行五人、炉のまわりに集まって、燃えのこりの火に新しい木をくべてお湯をわかしながらお弁当を開きました。いつまで待っても晴れそ

うもありません。信用のないバロメーター(註2)もこんな時には頼りにせられ、五分おいては一〇分たってはバロメーターと空のみ眺めておりました。ちょっと空の一端に雲の切れ間が出来て、青空がほんの少し顔を出したのをやれ嬉しやと見ている間に、もう他の雲のためにつがれてしまいます。とうとうあきらめてここに一夜を過ごすことに決めました。

いつのまにか横になった者たちはかすかな寝息をたてております。一人の人夫はしきりにナタでお箸(はし)を作っておりました。静かに降る雨の中、谷川の瀬音とはるか遠きあたりにて木を打つ音のこだましてひびくほかには、足もとに鳴く虫の声よりほか何の物音もいたしません。静寂(せいじゃく)として、まだ村をはなれたばかりですのにもう深山に分け入ったような感じがいたします。西又に野営しても明日の登りはかなりきついそうですが、ことに今日ここで泊ってしまったのですから明日は思いきって早くとのことに、かなり早くから寝につきました。

真夜中ふと眼をさましましたが、第一に頭に浮かんだのはやっぱり天気のことでした。ザーザーと音するのをまだ雨かと空をあおぐと、嬉しや二つ三つ星がきらめいておりました。あゝやっぱり流れの音であったかと、ふと足もとを見ると何やら青く光るものがある。懐中電気(かいちゅうでんき)をつけて見ると何もない。消すと光る。これがかねて聞いていた光ゴケ(註3)というものかと珍しく思いました。真夏というのにこの夜はかなり寒うございました。最低六二度。

七月一二日　曇時々雨

人夫たちも昨日のうめ合わせに今日は四時半から起きて、まだ晴とも雨ともつかない空を気にしながら朝食の用意を急ぎました。顔を洗いに御手洗(みたらし)へ行き、手を切るような冷たさに驚きました。六時一〇分、このお宮に拝礼して別れました。こんな早くにもう刈草を沢山馬につけた村人に四、五人会いました。皆犬を連れているのをちょっと変に思いました。露をふくんだ夏草の中を朝早く歩くのは非常に愉快でした。七時五〇分、小ツメタへ着きました。時々ちょっと太陽が照りましたがじき曇ってしまいました。今日は曇っても明日からは天気にしたいものなどと話しながら、昨日の予定の野営地、西又へついたのは八時二〇分でした。荷を降ろしてしばらく休みながら「ここに野営していても今朝発つのは今ごろだ」などと人夫たちは話しておりました。前の川を徒渉していよいよ冷沢に入りました。

雪どけの冷たい水に時々足をひたしつつ、大きな石をとびながら沢を登りました。九時四〇分、ようやく雪渓にたどり着きました。白馬や槍の雪渓よりほか知らない私は、やっぱり雪渓といえば大きなそしてきれいなものとばかり思っておりましたのに、ここのはあまりに小さくそして非常に汚いので少し意外の感じがいたしましたが、しかしこの雪渓は長くは続きませんでした。まもなく左に折れて消えてしまいました。

それから先はかなり急な登りでした。そして雪のとけたあとに小さな角ばった石がゴロゴロしていて、その上その石はみな不安定なのです。なるべくしっかりしていそうな大きな石をよって足をかけますが、その石が体の重みで少しでもずりますとその上二尺位までの間の石が順にずり出します。びっくりしてあわてて手をつきでもいたしますと、手をついた石が動きます。その上や横、自分のまわりたたみ一畳ぐらいの間の石が全部ぐらつきます(註4)。三足登ってもようやく二足ぐらいしか登れません。端の方をチロチロと少し水の流れているところで、やっぱりこの傾斜の急な危ない石の上へ人夫たちは器用に荷を降ろしてお弁当を開きました。この時ちょっと太陽の光を見ました。この朝より西又付近でちょっと日光を見たきりでした。時にはすっかり霧にまかれてしまって、あとさき二間位の間がほの白く見えるだけ、両側の山が見にせまってくるようで恐ろしく思ったこともありました。話し声だけして人夫の姿の見えないことはよくありました。

ほとんど高い山は見えません。こんな時によく沢を間違える恐れがありますので、ちょっと休んだ時にも案内はよく荷を降ろして小高い所へ登っては見ておりました。ある時は先へ登った私どもは呼びもどされて隣の沢へ移されたこともありました。たえずクリノメーター(註5)と地図のみを眺めながら進みました。どうもガスがあるので山がよく分らないといいながら案内はかなり不安げな様子でしたが、ほんのちょっと霧がはれ

て山の姿が見えました時、高いところに雪が見えました。「あれが布引(ぬのびき)の雪渓だから」とようやく安心したように私どもに話しました。晴れていれば頂きが見えて、もうどの位まで来たかがよくわかるのですが、こんなにしじゅう霧の中にばかりおりますので、時々時計を見たりバロメーターを出したりして地図の上で見当をつけておりました。時々霧雨にあうので着物も袴もかなりしとってまいりましたが、日光に照りつけられないおかげにて息切れのするようなことはなく、ほとんど水筒の水さえのむことがありませんでした。

ようやく上にハイマツらしいものが見えた時、「もうじきだ。こんならどんなにゆっくりと行っても日のあるうちに野営地につける」と人夫たちは荷を降ろしてかなり長く休んでおりました。もう安心したのでしょう。私どもはまた少しづつ登りはじめました。ハイマツにたどりついた先登者の「オーイ早くこーい」という声をきいて、下に人夫たちが休んでおりますのでなるべく石を落とさないように気をつけながら、なにごとかとハイマツへと急ぎましたが、ガラガラ石とハイマツとの取つきはまだ雪がとけたばかりで水を流したようにグチャグチャしていて、葉の弱い草がみな下をむいて勢いなく土についております。危うく滑りそうになったのをアルペンストックに助けられて、ようやくハイマツにすがりつきました。

ハイマツを分けて出ると、「マァ！」、目の前に展開されたパノラマは、山の向うにこれほどの景色が待っていようとは今の今まで思いもおよばなかったことでした。雪の多い立山、別山、劔の連山がさながら絵のように無言で屹立(きつりつ)しております。崇厳(そうごん)といいましょうか優大と申しましょうか、「アヽ」と歓(よろこ)びとも驚きともつかぬ感嘆の言の口から出るのをどうすることも出来ません。しばしは呆然(ぼうぜん)として立ちすくんでおりました。何の考えもなく頭のなかが空虚になって、ただ山を見ているだけでした。つぎの瞬間、苦心して登ってきた甲斐があったと非常に嬉しく思いました。時に午後二時二五分、「やっぱり劔はいいなあ！」という声をきいてはじめてそばに人がいるのに気がつきました。

「立山はいい山だ、ここで見てもよいがそばに行くとなおいい」「今年は雪が多い」などと話している案内に「野営地は」と問えば、「あの木の間に一寸平らの所が見える。あそこです。もうわけはない」といいながら指す方を見れば、なるほどさほど遠くもない所にいくぶん平らな所が見えて、人夫たちは荷を負うて走るように尾根を下りました。私どもも後に続きました。今まで劔の方にばかり気をとられてこれまでのことをすっかり忘れておりましたが、この尾根を下るときに見ましたら信州側から吹き上げてきた霧は、越中(えっちゅう)側から吹く風のためにこの峯頂に来てまた舞いもどってしまいます。それで信州側ではあんなに霧や霧雨の中におりましたのに、越中側はこんなによく晴れているのです。この尾根は信越の境で、越中側は傾斜はなだらかで一帯にハイマツが生えております。信州側はほとんど絶壁です。雪さえつもらないほどです。この崖は毎年崩れるので、越中側はだんだん狭くなることと思われます。越中側のハイマツの中を通る時はさほどでもありませんが、信州側の崖をへつる時はかなりに緊張して足もとに注意に注意をしてつたわります。「ここで落ちたらまた今のガラガラ石の所を登ってこなければならない」などと、案内は冗談(じょうだん)のようなことを申しました。信越の境は生死の境と某氏の記事(註6)を読みましたが、実にもと感じました。なお晴曇の境とも申したいと考えました。

一旦かなり低くまで下りてまた少し登ったところに今日の野営地はありました。冷池(註7)と申します。二つの小さな池がございます。いずれも蛙の卵が浮いており、ヒルかなにかの死体がそばにあったりして、あまり気持ちのよい感じはいたしませんでした。時は三時二三分、二つの池の中間に天幕が張られました。すぐに一人の人夫は薪を集めて火をたきはじめました。一人は米をといで食事の用意に取りかかりました。夕日を受けた山の景色は非常に美しうございました。ことに小窓、三ノ窓などは一層快い感じを私共に与えました。「劔はいいなあ」というような言葉は幾度かくりかえされました。振りかえって信州側を見ますと、やっぱり蒸風呂のように霧が昇ってきてはこの峯から吹き返されていきます。だんだん寒くなってまいりました。食事の用意も出来ました。火のそばへ集まって食事ののち、しばらくは下界の話などしてあたっておりました。七時一五分にやすみました。はじめての野営(註8)でした。思ったより寒くはありませんでした。バタバタと風に天幕のあおる音が恐ろしいようにもひびきましたが、いつのまにか昼の疲れに寝てしまいました。

最低五一度。

七月一三日　晴、曇

四時三〇分、ふと目をさますとまだバタバタ天幕があおっております。人夫たちはもう起きて朝食の用意にかかっておりました。日はまだ昇っておりませんでした。昨夕の景色を思いだしてすぐ起き出でました。ちょっと天幕の外に顔を出しますとそれは冷たい風にあてられました。外套(がいとう)などを着て外へ出ました。雲があったためご来光は拝めませんでした。また蛙の卵の湧いている水にて顔など洗い、朝食を終えました。一人の人夫を昼食の用意やその他後始末に残して、七時一三分鹿島槍へと発ちました。

また信越の境を尾根づたいに進みます。越中側はハイマツの中を進みますが、風が寒くて手袋をつけていても手がこごえるようでした。ちょっと松をわけて信州側に出ますと、日の光を受けて風をよけてそれは暖かです。そのかわりにはかなり急な崖にて、滑らないためにはかなり注意を要しました。八時十三分、布引の頭にて雷鳥がひなをつれているのに出あいました。人夫がすぐに追いかけましたので(註9)逃げてしまいましたが、ひなの方は逃げおくれて、とうとう人夫につかまりました。雀ぐらいで大変かわゆらしく思いました。ちょっと抱いて写真をとってから放しましたら、すぐ親鳥が来て連れて行きました。非常に子を思う鳥だとか聞いていました。

また寒い方のハイマツの藪(やぶ)をくぐったり、暖かい方の崖をへつったりいたしましたが、多少の上り下りのある所は一度下りたらまた上まで登らなくとも中腹を行ったらよくはないかと思うような所でも、案内がまた上ったり下りたりして進みますので、私どもも黙って後につきました。この時突然はるか西南の方にあたり、物の爆発するような音が聞えました。その方を眺めますと砂けむりがモコモコと立ちあがっておりました。「何かしら」と案内に聞きますと「多分山崩れだろう」と申しました。新越(しんごし)のあたりだとすぐつけ加えました。

九時一三分、鹿島槍の頂上につきました。信州側はまだ霧に包まれて昨日と同じように何も見えません。越中側は相かわらず立山、劔の諸山が美しい姿を見せておりますが、惜しいことには頂きの雲がなかなか退きません。ちょっと晴れたと思ってレンズを向けますとシャッターを押すまでにはもう雲が来てしまいます。持ってきたお弁当など開きながら、心ゆくまでこの景色を眺めておりました。あかぬ眺めを惜しみつつ一〇時六分ここを離れました。帰途は思いのほか早く、一〇時三〇分には布引岳につきました。一人の人夫は非常に早くずんずん先に進みましたが、行きに私が思ったようなのと同じ考えらしく、尾根まで登らなくとも中腹を進んだら楽に行けると思ったのでしょう。そのままを実行して行ったようでしたが、それはやはり間ちがいらしく雷鳥に出あったあたりでまごついておりました。案内から「どうした。先のカラスも後になる」などと笑われておりました。一一時四〇分、前の野営地につきました。もうきれいに天幕がたたまれて食事の用意も出来、荷物も負うばかりに出来ておりました。ここで第二回の昼食を済ませ爺岳へと発ちました。

これよりは大方越中側のハイマツの中を進みました。ハイマツというのはだんだん頂きになるほど丈が低くなって、その低い枝を踏んで歩くのはちょっと弾力があって快く感じます。そして踏みそこなってもヤニのある葉の上を滑るのでさほど危険なことがございませんが、少し低いところになりますと枝も高くその上太くて強く、私などが一寸踏んだり手で下げようとしてもなかなか思うようになりません。案内たちがまたいだりとび越えたりするところも、機械体操(註10)をしたことのない私には意気地なく、とぶこともできません。しかたなく大方はくぐりましたが、くぐるには低すぎ、またぐには高すぎるような時は本当に困りました。その上長い杖を持っておりますので、それがかなりにやっかいに思いました。しかし荷を沢山に負うた人夫でさえずんずんくぐって行きますのに、女だとて自分の体だけだと思ってどうにかこうにかくぐり抜けました。こんな時にも思い出しては松の枝にかたくつかまりながら立ちどまっては美しい山の姿を眺めました。二時五〇分爺岳頂上につきました。立山や劔の頭は雲にかくれてしまいました。信州側は相かわらず蒸風呂のようです。

またハイマツの中を五〇分ほどにして今日の野営地の扇沢の頭、種ケ池につきました。越中側のハイマツと信州側の断崖までの間の、一段低くなったやや広い平地です。この崖によった所に小屋と少しはなれて池があります。小屋は桁が落ちたり板が折れたりしてこわれかかっておりました。人夫たちは外の柱で桁を支えてこの中で火を燃しはじめました。天幕は小屋のすぐ前に張られました。池は冷の池を二つ合わせたくらいの大きさでしたが、まだ一面に雪がとけないでおりました。ただわずかに端の方のとけかかった雪の下から水を汲みました。小さなサンショウウオがたくさん雪の下から出たり入ったりしておりました。

大分寒くなってまいりました。小屋へ帰って火にあたりながら窓からながめますと、鹿島槍が雲から出たりかくれたりしておりました。食後はまたお茶を飲みながら下界のうわさなどいたしました。議会がどうあっても、普選が否決されても、ストライキが起きても(註11)、ここまでは世の中の煩雑(はんざつ)の音はひびいてきません。山を眺めて雪を踏むよりほか何の考えも起こりません。それでも時々は今頃は家の者はどうしているかしら、父母が心配をしてはいないかなどと思うこともありました。八時に天幕に入り毛布にくるまってまたバタバタと天幕の裾が風にあおる音をききながら、いつか寝てしまいました。「明日の野営地新越まではごく近いから、明日の朝はゆっくりでよい」などと人夫たちは話しあっていたようでした。

七月一四日　晴

五時起床、非常によく晴れて日の出など美しゅうございました。はるか遠くの雲の上に形のみははっきりとそれと分かる富士山も見えました。煙を吐いている浅間も見えました。重なりあった山々はとても下では想像も及ばない景色でした。蓮華岳も針ノ木岳もきれいに姿を見せております。昨日の山はと振りかえれば、爺も鹿島も美しくはっきりと出ております。七時五〇分、ここを発ってまたハイマツの中や崖をへつりはじめました。相かわらずハイマツの方は風が非常に寒うございました。崖ぎわの道が崩れてしまってハイマツのすぐ下が絶壁になっているような所を通る時は、一生懸命で松につかまりながら歩きました。しかしやっぱり恐いもの見たさに時々下をながめました。まだ今年は誰も通らないらしくハイマツの中の道も大分不明になっていて、昨日よりもよほど骨がおれました。

一〇時五〇分、岩小屋沢岳につきました。これから先は信州側もそう絶壁ばかりではなく、草なども生えており花なども美しく咲いていわゆるお花畑があります。高山植物の知識のない私も案内から一つ二つ教わりました。全部信用することは出来ませんが、シラネアオイやミヤマツメクサなど。この花の中に座して開いたお弁当はことのほか味よく思いました。みな食べてしまいたい所を、第二回のに半分残しておきました。真昼に近い太陽から送られてくる熱線はポカポカとちょうど小春ぐらいの暖かさです。何の苦もない静かなこの花の中に横たわれば、自然に眠りをもよおすほどよい心地です。時に一一時、一眠りもしたい所をまた歩きださなければなりませんでした。

これから先はこんなよい所はありませんでした。やっぱりハイマツの藪をくぐったり絶壁の縁をへつったりして、ようやく予定の野営地、新越につきました。時計を見ればまだ一一時五〇分。黒部の渓谷をへだててここから見た劔と立山はまた格別でした。長次郎沢や平蔵谷が手に取れるように見えます。熊の岩までが、もし今登って行くものがあればそれまで見えはせぬかと思うばかりにはっきりと見えました。いつかの『山岳』の登山図で見た(註12)絵と少しも変りません。特徴のある枝の逆さに出たような針葉喬木までが、その図にあったのと同じようでした。「実際劔はいいなあ」という言葉がまた繰りかえされました。人夫たちも荷をおろして山の姿を感心しあって、火をたこうともせず天幕を張る用意もせず煙草などのんでおりましたが、やがてお弁当が取り出されました。景色にのみ気をとられて今まで忘れていた食欲が急に動きはじめました。水はと見ればすぐそばのほんの雨降りあとの「にわたづみ(註13)」ほどの所から汲(く)んでまいります。この水がと思いましたが、聞けばこれしかの水ですが一年中消えることがないのだそうです。あまりに時間が早いのでもう少し進むということを案内が言いはじめました。これより先には適当の野営地のない事を聞いておりましたので案内に念をおしましたが、いくぶん心当たりのあるらしいようなことをいっておりました。

ここを出てすぐ信州側の雪のバルコニーの上をかなり長く進みましたが、その他はおおかた越中側のハイマツの中を行ったように覚えております。鳴沢岳(なるさわだけ)まではじきでした。二時一三分にはもうその三角標(註14)の所までまいりました。ここから行く手をながめますと、そう遠いとは思われない所に赤沢岳の三角標が見えました。劔岳や立山は相変らず頭を雲から出したりおおったりしております。針ノ木も蓮華も美しゅうございました。蓮華の中腹は雪が横たわっておりました。針ノ木岳は頂きまできれいに見えます。遅れてきた人夫たちはこの三角標までは来ず、越中側の中腹を通って先のハイマツの中で休んでおります。私たちもそばに行って休みました。「いつもなら今ごろポカンポカンとダイナマイトが爆発して気持ちがよいんだが」ということを案内が話しました。「あそこに黒部川が見える」と指す方を見れば、山と山との間に澄んだ空の色をそのまま写したような水の色が見えました。ちょっと気味悪いような恐ろしいような気がいたしました。その西に緑の若草の萌え出たかなりに広い平らの所が見えます。これがいわゆる内蔵ノ助(くらのすけ)平だそうです。すぐ目の下で、鳥ならば一息に飛んで行かれそうに思われるぐらい近く見えます。ここから流れ出している川なども手に取るように見えます。それより北によって低い峠のようなものが見えます。「ほら、あの峠の手前に小屋らしいものが見えましょう。あれがもとの鉱山の事務所(註15)でさあ」と案内が申しました。その西には劔の大きな姿が立っております。平蔵谷や長次郎沢はますますはっきりと認められるようになりました。

「さあもう一息、あの山を越して」といいながら人夫たちは荷を負いはじめました。赤沢岳の三角標はもうさっきから見えております。そう大した登りもなくハイマツの中もそんなに困難するほどの所もなく、二時三〇分、この赤沢岳の三角標までまいりました。ここから見た景色は鳴沢岳で見たのとさほど変りはありませんでした。今まで西に向かって進んでおりましたのを、ここから急に南へ向きをかえました。このところから案内は時々ハイマツをわけて信州側をのぞいたり、または下りて行ったりしてよい野営地をさがしておりました。だんだん寒い風が北の方から吹き出しました。野営地はまだ見つかりません。少し不安になってまいりましたが、山には慣れた案内にてその上この辺にて野営したことのあるらしい様子に、案ずることはないと自分で打ち消しながらその後に続きました。しばらくしてまた私たちを待たして見に行った案内はやがてハイマツの下から顔を出して野営地の見つかったことを告げました。

この野営地は丁度スバリ岳の北にて、すぐ南にはゴツゴツしたスバリ岳の岩石が見えます。信州側に土手をつくったような窪地で、風をよけて非常によろしゅうございました。ただ水がないのです。今年は雪が多いと聞いておりましたがここにも沢山に雪がございましたので、この雪をとかして用いました。しかしこの雪は土用に入ればじきに消えてしまうのだそうです。天幕を張りかけておりますと、怪しくなってきた空からポツリポツリと落ちてまいりました。その上雷までが手つだってまいりました。大降りにならなければよいがと話しあっておりましたが、幸いそう大した降りにもならずに止みました。雪をとかした水でしたが、御飯の味はそんなに変わりませんでした。もう山も明日一日、明後日はたたみの上に寝られるというのを楽しみに天幕に入りました。ここは四方に風よけがありますので、天幕にはさほどあたりませんでした。最低五二度。

七月一五日　雲多くして晴

きらきらと朝日の射してくる東側の堤の上にのぼって信州側を見下ろすと、すぐ目の下に針ノ木峠が見えます。北向きのこの峠にはまだちょっと日光のかげもなく、雪渓のみが冷たく光っておりました。またここから見たこの雪渓は非常に急に見えます。今日はあれを下らなければならない、どうしたら下りられるかしらと思いました。北側の堤をのぼってハイマツの間からちょっと越中側をのぞきますと、それは冷たい風に顔をこすられます。が劔や立山はやっぱり昨日のようによく晴れて、美しい姿で日光を受けております。見下ろすと山のかげからちょっと黒部川が見えます。南側にはスバリのゴツゴツした山が見えました。

七時一〇分、ここを発ってまたハイマツの薮をくぐりはじめました。時々サラサラした砂と石との道をシャクナゲの枝につかまって登ったり下りたりしました。こんな所にはコマクサがかわゆらしい薄赤の花をつ

けているのをよく見つけました。九時七分、スバリ岳につきました。「針ノ木峠を登って来る」と人夫の一人が叫びましたので峠の方を見ますと、あそこにあそこにとしきりに指さしますがなかなか見当たりません。ようやく見つけました。真白な雪の中にビロードのような黒点が、見ているうちに少しずつ動いております。一人二人、少し離れて荷を負ったような形をしたのが一人。先頭のは非常に早く、見ているうちにずんずん登ってゆきます。オーイと呼ぶとしばらくしてこだまが返ってきます。もう一度オーイとよぶと、風は東に吹くので登る者には聞こえたらしく、一寸立ちどまりました。人夫たちはなお案内人の名などをきいておりましたが、むこうからの返事は聞こえません。「これからが大変なところだ。返事どころではないだろう」と人夫の一人がいいました。だんだんはっきりと登山者がわかってまいりました。あんな急な雪渓をよくあんなに早く登れるものと感心いたしました。後の一人はころびました。また一人、人夫らしいのが後から登るのが見えました。ほんのわずかの間でしたが、一行の者のほかには人に会わなかったので、なんとなくなつかしく思いました。

一寸足をかけてもすぐボロボロと崩れるようなもろい石の上や、またはその崩れた砂ばかりの足のもぐるような所を通りすぎてやや安全な所に出た時、人夫たちは荷を下ろしてそこの岩についている黒いカラカラの苔(こけ)をとっております。岩ブスマといって食用になるのだそうです[(註16)]。ここからは劔、立山、五色ケ原、薬師、赤牛、黒岳など、よく晴れてきれいに見えました。五色ケ原はまだ一面雪で真っ白でした。針ノ木岳はすぐ前にとがっております。その肩から上の方が急に立っているようで、その上ここの石と同じらしく小さくかけた石と砂でズルズルすべりそうに見えます。なお馬の背のようで両方すぐ坂になっておりますので非常に危険らしく見えます。案内にたずねますと「ちょっと悪場(わるば)がある」と答えましたゆえ、「針ノ木の頂まで行かずに峠の上に出られるか」と問えば、「マヤクボへ下れば」とのことに、針ノ木をかけずに蓮華へ登ることに決めました。針ノ木岳の方へちょっと登りかけた所から東側へ出て、マヤクボの雪渓を下りました。これはちょうどスバリ岳と針ノ木岳の間にあるかなりに急な雪渓でした。大町を出る時、もしも針ノ木峠を下るようになればと用意してきたカンジキが、はじめてこの時用いられました。今度の旅行ではじめての雪渓下りとて、始めはカンジキが足にあわず具合が悪うございましたが、二、三度直してそれでも無事に下りおわりました。

一〇時三〇分、ここで第一回の昼食をすませてから二人の人夫は針ノ木峠の中途へ出て先に大沢へ下り、私たちは案内と蓮華の方へ向かいました。この時二人三人蓮華に登る者を見ました。雪の上や、雪がとけたあとのよく滑る草の上を通ったりして峠へ出たのは一一時三五分でした。ここで先刻峠を登ってきた人に会いました。立山へ行く方だそうです。ここに立って信州側を見渡すと、足もとから一間ほど下った所にいかにも分厚な雪がちょうど廊下のように平に幅は三尺ほどに長くつづいております。その上には今登って来た人たちの脱ぎすてたワラジが乱雑にほうりだされてありました。雪渓はそこから始まっております。北向きのこの雪渓は真昼の日もほんのわずかしかあたらず、冷たい感じを私に与えました。中腹にあった雲がだんだん上がってまいりました。私は急なこの雪渓を二、三時間の後にはどうしても下らなければならないと思ったとき、何となく怖ろしいような感じがいたしました。

こんなことを思って下の方ばかり見ていた目を峯の方に転じますと、針ノ木とスバリとの間に今下りてきたマヤクボのカールが半円形にくぼんで、いかにも急に見えます。なおスバリ岳、赤沢岳、鳴沢岳、岩小屋沢岳、爺岳、鹿島槍など今まで歩いてきた山と、それよりなお北に五龍山、北城鏈(ほくじょうやり)[(註17)]などいわゆる後立山の峯々が順々に肩ごしにのび上がっているように見えました。白馬は白雲につつまれて頂きが見えませんでした。振りかえって越中側を見ると、薬師、赤岳、黒岳などは頂きが見えておりましたが、それより南は雲の中にありました。目の下はすぐ崖のような急傾斜で、ザラザラした砂に滑った跡などがありました。

道は九十九折(つづらおり)についておりますが、蓮華の取りつきは崩れやすい砂に滑りそうになるのをあわてて岩にかじりついたり、ハイマツにすがって機械体操式にとびあがったりしてちょっと悪場でしたが、それはほんのわずかで間もなく広い石原に出ました。種ケ池から見たときも鳴沢岳でも赤沢岳でもスバリでも、この針

ノ木峠を見る時その両側に立っている二つの山が一方はゴツゴツととがっているのにひきかえて片方は丸みのある暖かみを覚えるような形なのを対照して不思議に思っておりました。今その丸みの上に出て見ると、うすいガサガサした白い石が下の方から積み重なって広い石原になっております。ハイマツもその石の間に見受けました。薄赤のかわゆらしいコマクサをここでも所々に見いだしました。

南の方にとがった山が雲をついて出ました。槍かしらと案内にたずねると「笠」だと答えました。ここでさっきマヤクボから見た登山者に出あいました。三高の生徒です。八泊の予定で尾根づたいに白馬まで行くのだそうです。白馬はまだ白雲につつまれておりましたが、その他の後立山の諸峯はみな頭を見せておりました。振りかえって見ると、針ノ木とスバリの間に立山の連山や劔岳の鋭鋒などが頭を突き出しておりました。このガサガサした石で出来あがっている小高い山を頂上かと思って登りつめると、また先に同じような小高い山があります。その頂きに登りつめるとまた先にあります。こうしていくつかのラクダの背のような所を通りこして初めて三角点に出ました。時は〇時四三分、山の間にちょっと籠川(かごかわ)が見えます。「あの大きな岩のある所が大沢の野営地でさあ」と案内の指す方を見ると、なるほど大きな石らしいものが見えます。この尾根を少し下った所からきれいな雪渓がその方に向かって走っております。ここの石の山をいくつも越してあの急な針ノ木峠の雪渓を下りなくても、ここから大沢へすぐ下りたらよさそうなものと思いました。後を見ると北葛乗越(きたくずのっこし)へ下る尾根がきれいに続いておりました。遠くは燕岳、穂高岳などらしい山が雲の中に見えておりました。この美しい山々の姿を北と南とこもごも眺めながらその場をもとへひき返しました。「槍が出た！」と案内がさけびました。いそいでレンズを向ける間にもう隠れてしまいました。「あすも天気だ、槍に雲があかかる時はいつも晴れる」と申しました。帰りは割合に早く、一時四三分にはまたもとの針ノ木峠の上に出ました。

ここで二度目の昼食をしているうちに北側の雪渓から雲がのぼってきて、今まできれいに眺められた雪渓が急に怖ろしく見えて、その上先刻蓮華で会った三高の学生たちも針ノ木の方へと立って行かれましたので私達三人になってしまい、急に人里恋しくなって早く山を下りたいという心にせきたてられてワラジをはきかえ、二時一三分、いよいよカンジキをつけてこの雪渓を下りはじめました。雪渓は波状をしておりますのでちょうど足をかけるのに具合よく出来ており、思ったよりも楽に下ることが出来ました。はじめのうちは心配してそばについていた案内も「案じるじゃない」といってずんずん下って行ってしまいました。

この雪渓が終ってちょっと林のなかを行った所の左側に小屋(註18)があります。ここに先に下った人夫はもう火をたいて湯を沸かして待っておりました。時に三時三一分、「今に傳刀(でんどう)（註19）が来るそうだ」ということを人夫から聞きました。河原に出て雪どけのつめたい水に口をすすいだり顔を洗ったりしました。また小屋へ帰り、そこに貼ってある登山者の名前など読んでおりました。しばらくして一高の生徒四人が林蔵(りんぞう)（註19）の案内でまいりました。劔へ登るのだそうです。なお慶應の登山隊も多人数にて河原に野営しているとのことでした。これも劔登山だそうです。食後しばらくして案内人同士の話しあうのを夢のように聞きながら、明日は里に出られるというのを楽しみにいつか寝てしまいました。

七月一六日

目のさめた時にはもう一高の学生たちはみな出立(しゅったつ)の用意をしておりました。また河原に出て冷たい冷たい沢の水に顔を洗いました。登るほうの方は先に食事を済まして出かけられました。一時にぎやかだった小屋がまた急に淋しくなりました。七時三九分、ここを発っていよいよ里へと帰りはじめました。ここからは大方川にそって草の中に道がついておりますが、草が非常に成長しておりますのでどこが道かちょっとわかりません。先へ行く案内の踏みたおしていったあとを通りますが、すこし離れると案内人たちの笠も見えないほどにイタドリとかいう草が伸びております。

九時六分、岩小屋沢を渡るときからポツリポツリと大粒の雨が降ってまいりました。白沢を渡るころには黒い雲が低くなってだんだん降りが強くなってきました。かげも何もない草の中を夢中で走って、ようやく

枝を傘のように広げた一本の木を見つけてその下に走りよって人夫から着ゴザを受けとって着ました。人夫たちもその下で荷に油紙をかけたりなどしておりました。広い草原の中には色も種々の花が雨をうけて美しく輝いておりました。岩タケ岩の所では道が壊れていて一寸困りましたがそのほかは何のさわりもなく進みました。雨もだんだん小降りになってまいりました。人夫たちは道々家への土産に山蕗(やまふき)を折りながら歩いておりました。

草原をすぎて両側に林のある所からは車でも通れるような立派な道になりました。ここでまだ濡れている草の上へ着ゴザをひいて昼食を取りました。日が照りだしましたがまだ時々ポツリポツリやっておりました。瀬音はすぐそことばかり響きますが、川からはよほど離れているので水を飲むことも出来ませんでした。大出のあたりからはカンカン照りつけられて、先刻の雨など忘れたようでした。「平に出ると暑くてかなわない」といいながら人夫たちも日かげをよっては休みました。時々振りかえっては山の姿を眺めながら進むほどに、一時五五分に無事対山館へ帰りました。

(註)

1 茨城県鹿島神社の末社。

2 鳳次郎自製の携帯用気圧計。

3 コケの一種。透明な細胞膜を通して葉緑体が光って見える。長野県佐久市の光ゴケ産地の洞穴は天然記念物に指定されている。

4 この道は長ザクと呼ばれていた。ザクは砕けた岩石が堆積した地形。現在登山道がある赤岩尾根は長ザク尾根と言っていた。

5 傾斜計。地層や岩石の傾斜を測る簡便な器具。登山ではあまり実用にはならなかったのではないか。

6 「後立山縦断記、上」三枝威之介他、『山岳』第六年第一号(一九一一〔明治四四〕年五月)
「信州側に一歩を誤れば生還到底(とうてい)見込みなし。信越の国境は同時に死活の境界なり」
なお信州側から吹く風を内上(うちあげ)、越中側からの風を外上(そとあげ)と呼んだ。

7 同右、「一行これを冷(つめた)の池と命名せり。池水の冷きに非ず、冷沢(つめたざわ)の上部にあるが故なり」。初期の地形図では「喰ノ池」となっている。

8 前年の白馬岳、槍ケ岳の時は小屋泊りだった。

9 大正一二年の天然記念物指定まで、ライチョウを追いまわすことはよくあり、食べた記述もある。長谷川如是閑は護身用に持っていたピストルを撃っておどした。狩猟法では保護されており、大正六年に京大生が石を投げて一羽を殺し、取調べを受けている。

10 鉄棒など器具を使う体操。

11 高額納税者だけが選挙権を持つ制限選挙制から、満二五歳以上の男子全員が選挙権を持つ普通選挙制(普選)への改正の要望が強まり、市民集会や議会の混乱で当時世間は騒然としていた。また不況による解雇や賃金カットと、これに対抗するストライキが多発した。メーデー集会もこの年に始まった。

12 『山岳』第一〇年第二号(一九一五〔大正四〕年一二月)付録の地図の挿絵。

13 雨の後に庭土の表面にたまった水をいう古語。

14 地図作成の測量で、三角点など測量点の位置を遠方から確認するために立てる三角形の標柱。北アルプス一帯は明治二〇〜四〇年代に最初の測量が行われ、当時はまだその柱が残っていた。

15 北アルプス北部には銅やモリブデンなどの鉱山が点在していた。小黒部鉱山、白馬の瀬戸川精錬所などは登山者の宿泊の便宜を図っていた。

16 地衣類の一種、タカネイワタケか。味噌汁や雑炊(ぞうすい)に入れる。今はまぼろしの食材といわれる。

17 白馬鑓ケ岳か。

18　一九一七（大正六）年に大町の百瀬慎太郎が建てた初代の大沢小屋。

19　傳刀林蔵。大町のガイドのリーダー格で、仲間から一目おかれていた。ヒサたちのガイドの伊藤菊十は、本業は猟師でこのとき五六歳ぐらい、百瀬慎太郎の評価では張出し横綱格のガイドだった。

4　岡田 汪 「針ノ木峠、薬師岳、笠ヶ岳」（「付 1 全記録」内）

『夫婦登山ことはじめ ―袴で登った劔岳―』

2004（平成 16）年 10 月 12 日刊　岡田汪発行

要　約

1923（大正 12）年 7 月 29 日～8 月 7 日の記録。

メンバーは、竹内鳳次郎、竹内ヒサ、岡田李、案内人 1 人、ポーター3 人。

行程は、針ノ木峠～平～五色ヶ原～薬師岳～双六岳～笠ヶ岳。

この記録は、竹内鳳次郎が山行の行程と時間を記したもの。

※同コースでの女性による初踏破。

⑳「針ノ木峠、薬師岳、笠ケ岳」1923 年 7 月 29 日～8 月 7 日

（註　同行　ヒサ、岡田季（スエ）　案内 1、ポーター3）

薬師岳、笠ケ岳

29th July 1923　（大正十二年）

鹿嶋橋ヨリ駒、仙丈、北岳、間ノ岳見ユ　雲多キ好天気

8－21	A.M.	對山館発	2450ft
1－30	P.M.	扇澤	4300
2－45	〃	大澤小屋着　泊	5420
9－00	〃	就寝	

30th

雲多キモ峠ヨリ燕、大天井、槍、烏帽子、三ツ岳、黒部五郎、遥（ハル）カニ富士モ見ユ、午後時々雨来ル、雲東へ走ル迅（ハヤ）シ、南澤ニテ晴ル、又曇ル、夜川原ノ野営風穏（オダヤ）カ

7－20	A.M.	大澤小屋発	5500
10－00	〃	針ノ木峠頂	8180
		針ノ木岳中腹マデ行キ引キ返ス	
0－38	P.M.	針ノ木峠発	
1－15	〃	紫帳場	6650
2－30	〃	カラ澤	
3－25	〃	南澤	5180
4－37	〃	黒部川着	4730
5－00	〃	籠（カゴ）ニテ渡ル	
5－12	〃	川原ノ野営地	

31st

天気好ク雲東へ走ル、平ノ小屋建築中、ザラ峠西風強ク寒シ、曇ッタリ照ッタリ、五色原風寒シ、大毎ノ北尾氏等活動寫眞ヲ撮リツヽアルニ逢（ア）フ、夕方ヨリ風強シ、鷲岳ヨリ日本海、能登半島ヲ見ル

（註　北尾氏：北尾鐐ノ助　大阪毎日新聞の記者で写真家、紀行家。大毎は翌年五色ケ原、劔沢に小屋を

建てる）

7－28	A.M.	野営地発	
7－55	〃	平小屋発（休憩後）	
9－25	〃	刈安峠	6120
10－38	〃	〃 発	
10－55	〃	中ノ谷 晝飯	
11－45	〃	〃 発	
1－50	P.M.	ザラ峠	7670
3－00	〃	五色原野営地着	8100
3－45	〃	鷲岳ニ登ル	8530

1st Aug.

雲多キ晴レ、大鳶眺望ヨシ、越中澤岳へ登ル、ハイ松ノ原気持ヨシ、10－00 頃ヨリ曇ル。越中澤岳降リヤブ多シ、午後又好天気ニナル、夜ハ静ナリ、10－00P.頃ヨリ又風強ク支柱ニ杖ヲシバ(原文ママ)縛リツク、夜中テントヲアオルコト頻(シキリ)ナリ、

7－39	A.M.	野営地発	
8－10	〃	大鳶	8600
9－20	〃	越中澤岳北鞍部	7830
10－36	〃	越中澤岳	8850
11－20	〃	越中澤岳南鞍部ニテ晝飯	
0－35	P.M.	最鞍部	7700
1－50	〃	薬師北鞍部	7180
4－48	〃	薬師北肩野営地着	8220

2nd

朝風止ム、好天気、薬師北尾根ヨリ（9－30）有峯ヲ見ル、薬師岳能ク晴レテ眺望ヨシ、
太郎兵ヱ平及上ノ岳ハ草原ニ花多ク苔青クハイ松マレニ気持ヨキ處(トコロ)ナリ、夜霧来ル

7－20	A.M.	出発	
7－37	〃	三角点	8520
10－45	〃	薬師岳ノ頂上、食事	9620
11－35	〃	〃 発	
1－00	P.M.	薬師岳南鞍部	7640
1－45	〃	太郎山	7900
3－58	〃	上ノ岳	8750
4－15	〃	上ノ岳南肩野営地着	8470

（註 この秋伊藤孝一が上ノ岳〔北ノ俣岳〕に小屋を建設。小屋は後に太郎平に移される）

3rd

朝霧深シ、8－00 霧一寸晴レテ鹿嶋槍ヲ見ル、10－00 頃ヨリ霧晴レ雲多キ好天気ニナル、笠ヶ岳頭ヲ見セズ、3－00P.ヨリ霧、双六平ハ霧ノナカ、小石ノ原ヲ青苔トハイ松デ彩ル美シキ原ナリ

7－08	A.M.	出発	
8－50	〃	2577 点	8550

9－11　〃　　黒部五郎頂上　　9330
0－30　P.M.　三俣西鞍部、晝飯　　7800
1－15　〃　　〃　　発
3－20　〃　　三俣三角点　　9360
4－38　〃　　双六岳　　9450
5－25　〃　　双六野営地着　　8850

4th

好天気、アマリノ好天気ニ会ヒ槍行ヲ止メテ笠ヶ岳ニ向フ、ヤブ多ク困難ス、午後霧捲キ来ルモ天気ヨシ、笠ヶ岳頂上ハ霧ノ為僅(ワズカ)ニ穂高ノ麓(フモト)ト穴毛谷ト左俣谷等ヲ見ルノミ、

（註　鳳次郎は双眼鏡で下降路を探し、穴毛谷を下りるしかないと思ったと言っていた）

7－10　A.M.　野営地発
10－00　〃　　2588.4 三角点　　8600
11－41　〃　　笠ヶ岳北鞍部ニテ食事
11－41　〃　　〃　　発
0－15　P.M.　北最鞍部　　8400
1－38　〃　　2812.8 三角点　　9280
2－20　〃　　野営地選定
2－48　〃　　〃　発
3－46　〃　　笠ヶ岳頂上　　9600
4－30　〃　　〃　　発
5－12　〃　　野営地へ帰ル　　9000

5th

好天気、急ナ毛穴谷ヲ降ル、8－30 人夫達ハ降路ヲ探シニ降ル、ソノ後降路益急ナリ　11－20、6950 ノ處ニテ晝飯ヲ焚(タ)ク、最上通過シ得ベキ路ヲ見出セシト云フ、1－30 ヨリ雪渓、カンジキヲツケテ下ル、

7－10　A.M.　出発
8－10　〃　　8100
8－30　〃　　休ム、道探シ　　7900
9－20　〃　　発
10－00　〃　　7550
10－40　〃　　又路探シ、食事　　6950
0－28　P.M.　出発
1－30　〃　　6400
2－00　〃　　5800
2－40　〃　　5350
3－40　〃　　左俣　　4500
4－15　〃　　右俣　　4000
6－00　〃　　蒲田温泉着　　3350

6th

午前雲多シ、午後晴レタレド尚穂高ノ頂雲ニ包マレタリ、6－00P.頃ヨリ雨

7－38　A.M.　温泉発

0－22　P.M.　焼岳峠、食事　6900

3－18　〃　大正池

4－00 頃　五千尺

5－50 頃　明神池ニ行キ五千尺ニ帰ル　泊　5000

7th

6－30　A.M.　上高地発

8－45　〃　徳本峠　6950

10－00　〃　岩魚留（イワナドメ）、食事　4300

10－40　〃　〃　発

1－05　P.M.　島々

1－35　〃　〃　停車場　2630

5　小笠原勇八　「一月の針ノ木岳スキー登山 ―その記録と生活など―」

『日本登山記録大成』第 11 巻 白馬・後立山Ⅰ（同朋舎出版、1983 年）
1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『リュックサック』第 4 号（早稲田大学体育会山岳部、1925 年）〕

要　約

1925（大正 14）年 1 月 4 日の記録。

メンバーは、 舟田三郎、小笠原勇八、藤田信道、森田勝彦（以上、早稲田大学山岳部）。

行程は、大沢～針ノ木峠～針ノ木岳往復～大沢。なお、一行は、1924（大正 13）年 12 月 28 日に大町を発って畠山小屋泊、翌 29 日に大沢石室へ入り、年を越した 1 月 5 日まで 8 日間滞在し、同日に大町へ戻っている。

大沢石室をベースとし、ガイドレス、ノンサポートによるスキーを活用した厳冬期登山の試みで、同部による第 1 回目の大沢入り。その後、同部による大沢入りの厳冬期登山は、雪崩遭難が起きた 1927（昭和 2）年の第 4 回目まで続けられる。

※針ノ木岳積雪期初登頂。

針ノ木岳など、それらの後立山山脈の登山は夏季においてはほとんど著しい興味を惹起していない。いわんや大沢小舎を中心として冬季の放射状スキー登山ということは特にその形式を目的として行われたこともない。困難ということもあるがその原因としては人々に気付かれていなかったことのためである。

輓近（ばんきん）スキー登山の発達につれて各方面において色々な形式のスキー登山が行われてきてはいるが比較的、かかる初期時代においては先ず初めは容易なる地点において拓かれていかれるものである。ここにラ・アーテ・モンターニュ（山だけ）の狭い範囲に限ってみても立山にせよ、槍ヶ岳にせよ、容易（たやす）くと取り付くことが出来、従ってそれらに対する設備等も次第に考究せらるるに至った。スキー登山の初期時代は今もなお続いて、今後かかる山岳においても幾つもの新しい登攀が記録づけられるるであろうが、パイオニアの視野は常により新しき登攀へと求めていくのである。大沢小舎を使用して針ノ木連峰に新しいスキー登攀を試みるということは私共の予想もしなかったのであるが、舟田氏のいつも確実性のある新計画によって、この行程を進めることに決定したのである。そしてその時までなんら想い浮ばなかった、冬季の針ノ木峠のスキー登降と、アレートにおける長時間のトラヴェルセ（縦走）とが非常に楽しい想像を巻き起こしたのである。

無論籠川谷の積雪期の通過はその以前においても記録せられてある。冬季においても春季においても、あるいはスキーを使用し、あるいは輪樏を使用することによって数度に及んでいる、しかしながら、その目的が所謂純粋に登山目的でなかったり、もしくはスキーを使用せざる多数の山案内人を伴っての横断的スキー行であって、私共この度の登山とは種々なる点において著しく相違している。彼を非としてこれを是となすが如きことを避けるが、純然たるサン・ギイド、サン・ポルツー（無案内、無人夫）の立場から約十日に近い日数をあのように不完全なる小舎を利用して、更に厳寒のアレートに困難なエスカラード・ラッシュ（岩稜攻撃）を行い得たことの大きな経験を非常に喜ぶのである。

針ノ木連峰のスキー登山については先ず大沢小舎の如何が大部分の重要さを占めるものである。以前伊藤氏の一行が信州側より入ってこの小舎を利用した時には多数の人夫を利用しながら非常に困難を嘗（な）められたと聞いている。無論それが積雪の量多き二月であったにせよ、それも小舎の不完全さに原因したものと云わねばならない。その他はいずれも越中側より籠川谷を下るものであって、いつも大沢小舎は使用しておらない。即ち積雪多量であって常に容易く雪に埋没せられるのである。これを掘り出すことの困難は想像外である。人夫の力を借らずして小舎を掘り出すことは人夫を伴わざるキャラヴァン（登山隊）の、しかも真冬

の日中の短さにおいては、ある時はほとんど不可能であるかも判らない。このような時には登攀そのものの力以外に、種々なる肉体的消耗を要する労力が加増される。これは時としては全体的登攀を左右することもあるほどのものであるが、私共は忠実にサン・ギイドに従ってこの忍び難い労力までも負担していくことになった。

小舎を掘り出して入ることそれすらが既にきわめて困難なるうえに、最も重大な冬季登山に対する準備の何物もないことが非常に私共の頭を悩ましめた。自分らの荷物の負担力に限度があり、これに反して冬季設備にはかなりの程度にまで必要を認めるものとするならば、その間における条件の適合は逆にならなければならない。登山小舎の設備は登攀者の力を与えるものでなければならない。冬季における荒天の連続と、人界の連絡の皆無という不可抗的な条件にあっては、登山小舎の設備のみによって登攀者の生活は維持せられていくのである。大沢小舎には何物の設備があるか？　防寒具も無い。煖房装置など無論ありようはずがない。小舎その物の体をなしておらない。雪が風が右から左へと吹き過ぎて行く。

果してこの登山小舎を使用して幾日間を過ごせるか否かが第二の困難となったのである。無論多人数の人夫を使用するキャラヴァンであるならばこれらは単に杞憂に過ぎないであろう。暖かい毛皮のサックがあるならばそしてまたストーブを持ち上げ得るならば、これらの無駄にみえる労力が取り除かれるであろう。そのような場合には私共の諸々な雑用などは一切人手によってなされ、登攀のすべての動作がキャラヴァン以外のある異なれる人々の補助をうけることとなり、何とはなしに支配者の持つものを私共もまたひそかに感ぜられるのではないだろうか。そしてまたそのような時には、なんらの人夫を伴わないキャラヴァンが、そのすべての登攀的いとなみを彼らの全体的の力と総合することによってのみなし続けていく時の全幅の合致とを感ずることが出来ないのではないだろうか。かの純白な雪の山々に幾人かの人夫に囲繞されて行く幾組かのキャラヴァンを見る。そしてまた小さなキャラヴァンではあるが、各人がよりはっきりとつきつめて相い抱いていくものをもみることが出来る。かかる時に何故魂の底を揺さぶるほどの感激が各人の心臓をより強く打ち合うものであろうか。

このようにして私共は非常に困難な条件を甘受しなければならなかった。そしてそのためには私共は厳しい寒気に堪え忍んでいかねばならない。各人が寒さから自分の身を保護するためにほんの一枚の毛布と一枚のセーターとのみが与えられたのに過ぎない。多くの山々に登る人の用意の仰々しさに較ぶべくもない。保証せられぬ身ごしらえではあったが十日間のブロヴィズイオン（準備）とその他のエキプマン（装具）との外には、これ以上の追加は過重であると見なされた。私共は単純に堪え得らるるだけの限度においてこれを整えたのに過ぎなかった。これらの整備についてもその保証的な断然たる決断は舟田氏の与えられたものであり、実際にその効果は私共の一様に認め得て当然なものであった。

以上述べきたったように、登山小舎の設備上に関する不完全さがこの登攀についての最も大なる支障を与えたものであるが、これを除いては私共の心は全く自由に愉快な登攀を想像することが出来た。ただ恐らくは若い森田君がこの困難な新しいスキー登攀に参加するに至ったことは、その年の秋も来、新雪の氷りついた槍ヶ岳北鎌尾根の長時間の登降に強い力を私共キャラヴァンに与えたこともあったので、私共はカマラード（仲間）としての喜びを持ったのである。山への道伴れの選択ということは困難な登攀においては考慮せられねばならないことである。ことにアクシダン（事故）の多い冬季の山岳において、しかも技術を要することの大なるスキー登山にあっては常に閑却し得ないことであるが、私共のこの行にはこれらのむずかしい事柄が容易に決定されてしまった。その後には私共は全く伸び伸びした気持ちに充たされて自由に思いを高き山々とその生活との描写に投げ込むことが出来る。旅立ちの前に抱く何かなしの心の思いの暇にも、地図の上にひろげる幻想の実体を私は捉えることが出来る。

籠川谷の通路については夏季の登山路を忠実に辿るならば、十二月の末より一月初めにかけては積雪量も比較的少なく大した困難なしに大沢小舎に達することが出来る。しかしその行を計画した時には、麓の人から大沢小舎が雪に埋没していやしないかという予告をうけた。それはごく極少な例示によったものであって、

その日に至るまでの積雪量により一様に断定し得ないとは思われたが、小舎の存在地点が冬季の用意を考慮せらるることなしに建設せられたものであって、埋没の可能性が充分あるものとすればその当否は雪量如何のみによらなければならない。それは事実その地点に到って初めて知ることを得るものであるからシャベルの用意は無論しなければならない。小舎の埋没ということは立山に登った時にもひどく頭を悩ました。かかる場合には小舎を掘り出す時間を一日行程に加算して予定しなければならないから一日の行程を短縮するか、あるいは身軽に装って小舎の存在と、埋没の状態とを探索しなければならないことになる。これは天候の激変しやすい冬季の登攀において登山の機会の捕捉を左右する重大な要素ともなるが故に、長時間をこれに充てるのでなければ、ことに機会の逸散の可能性が高まる。

かかる場合においてはこれらの探索の起点となるべき小舎がきわめて必要となる。即ち早朝発して夕刻までにその使命を終えて帰着し得る範囲内にある小舎と限定せらるるものである。立山の室堂に対して弘法小舎があり、槍沢小舎に対しては止むを得ざるものとしてワサビ沢の石室がある。しかし前者は天候と、雪量、雪質により、後者は日中の短き真冬においては時として不可能となることを予想し得るが、この点において籠川谷にはきわめて便宜なる地点に畠山小舎が存在する。畠山小舎は白沢を越して数分を要するならば到達し得る。小舎は大町にも近いから食糧の欠乏を補い得る。かつまた大沢小舎に対する唯一の基点ともなり得る。小舎の構造も大沢小舎よりも完全であり、ことにこの度の行程においては幸い山人の使用中らしく布団その他の設備もあり、登山小舎としてもきわめて愉快に使用し得らるるものであった。なおこの辺りは積雪量も少なく、恐らく長き期間に亘って埋没の憂いはないと思われる。この谷を登降するに当り大沢小舎が不完全なる時期にあっては常に最も欠くべからざる効用を持つものであろう。私共は先ず基点をここに求め、大町に着いた日に直ちに籠川谷に入り畠山小舎に到り、更に身を軽くして大沢小舎を見出すことに一日を費し、山々の登攀はその後における天候と諸準備の適合の状態によって決定することに大体の予想と計画を樹てたのである。

キャラヴァンは舟田、藤田、森田諸君と僕の四人、コルドは三十米と二十米の二本、他の一切のエキプマンなどはいつも慣れて整えた。藤田君だけが草津白根、関温泉を経て松本に待ち合わした。十二月二十七日夜、私共は旅立った。

十二月二十八日（大正十三年）。晴。大町へ下りたのが丁度正午であった。雪はわずかに地上に積んでいるだけ、冬はまだ浅い。夏時には賑やかな山の街も冬は寒さに閉じ籠ることと、それに山の客の無いのとのために、軒並の暗さにも冬の冷たい色が濃い。路は色褪せて干からびた凍土に靴音が不調和な高さに響く。山の街には草鞋穿きの姿もふさわしい時もあったろうに。長いプランシュを背負って、膨らみきったザックに傴僂（せむし）のような前屈みの山男がゴツゴツ歩いて行く恰好は誰の眼にもふさわしく映るだろうか。幾度来ても見知らぬ人ばかりの街をじき抜け出て、遮るものも無く伸しかかってくる鹿島連峰の雪の峰々に立ち塞がれる。その山々はひどく厳しく聳えている。頂は真白い、祖父から鹿島へ、更に唐松のベットリと白い雪の量も高く深い山々には厚い雪の積み重なりのあることを想わせる。いつも冬の山岳に会う時には夏の青い山膚の誘惑よりももっと厳かに壮んな存在に胸をうたれる。それは近づき難きものへの怖れではない。自分の胸に湧き起こさるる力に疼かれるのではないだろうか。闘い、或る人はかく云う。だがまことに自分達は山と相闘うのであろうか、己の力によって山々を征服するのであろうか。我に答えるものはしからずとの答えではないか。無想でも良い、登攀のみは現実に自分の心を最高の喜びにまで引き揚げていく。山に向って語ることは饒舌でない。わが心に語るだけのものにて足る。そしてまた親しき山の道伴れの熱情の交響、それだけでも足りる。藤田君のスキーが遅着となったので、私共はとある雪の上に立ち止まって山に入る時の色々な思いに時を費していた。冬まだ浅い雪の上に今日は暖かい太陽が照りつけて張り詰めた水田の氷もパチパチ解ける。その薄青のアトモスフェールの中に彫られた巨大な山々の連なりはもっともっと深く雪に埋もれていくであろう。山国に住む人々に山への雪が初めて降った時には冬の来たことに気づいて色々ないとなみを始めるのであろう。長い真冬が過ぎて薄暗い家ぬちから外へ出て霞んだ雪の山々と、雪解けの音を耳にす

る時に冬の解放と、春の廻り合いに胸をとどろかすであろう。山々はかほどにまで人々の心に親しまれて深い。ゆくりなくかかる山国を通り過ぎてこのような山々の厳かな存在を嘆賞する旅人にも、そしてまた都会から山に来て驚異の言葉を発する通りがかりの登山者の胸にも、かつて山に住む人々のように己の日々の生活が不可離にまで親しくとり入れられることがあるのだろうか、そしてまたいかような登攀を試みる人であったにせよ、山に入り山を出づる日にこのような傷心に呼び醒まさるることが何故無駄になることが出来るのであろうか。都会に住みなれては私共の心に失われていく数々のものがある。そしてかかる土地に来て山々を見詰める心は、いたずらに都会を逃避するのではない。忘れかけた心にはっきりと山々を刻みつけるのである。心に物珍しさを持ちたくはない。明るい午時のほてりに身を投げて短い憩いの間にも遠き思いに浸る。ゆくりなくも私の遠いゆりかごのさまざまな山々へのたたずまいと、その冬のありさまなど。

藤田君のスキーが遅着をしたが、ともかく今日中に畠山小舎に到着しなければ、更に大沢小舎までの行程に狂いを生ずることになるので、ともかくも舟田、森田の二君のみが先発することになった。ただ二人だけが高い山へと歩いてそれが小さくなって見えなくなる姿は力の強い者の親しみに打たれる。それは午後二時頃であった。急ぎ足に自分らの道を切って行ってくれた。その日の暮れ時は急に迫ってきた。スキーが着いて残った私共が大町を出たのがもう四時を過ぎていた。山村の夕暮の無風景な冷たさ、やっと路の上に雪が積み重なってくる。すっかりと雪がとりまいた幾つもの人家が固く閉ざされて夜は漆黒の寒さになってくる。鼻を突き合わせるように行き当ったのは遅帰りの村の男であって行きずりの言葉を交える。赤い焚火と、ランプの光のとある家を外へ出ると、再び深い闇の中にもうランテルヌ（燈火）を頼らねばならなかった。籠川谷は大出から寂しい村人がと絶える。ランテルヌの明るい光に照らされる雪は美しい白さであった。黒い森の中にやがて先立った友のトレースが、今印されたばかりの鮮やかさに見出された。このような夜の行進には、ことに雪野原ではトレースでもなかったならば、何を頼りに行くことが出来るであろうか。柔かな雪の感触だ。プランシュの優しい踏み音。友との二つの黒い影がゆらゆら揺らめく。過ぎ去った日である。その時もこのような雪の山の夜を行ったことがあった。徳本峠を越して上高地へと入る日に真冬の短さに行き暮れて、ただ独り穂高から梓川の森林を吹きゆすぶる吹雪の中に寂しいランテルヌを頼ったこともあった。トレースが風に吹き消されて、その度にそちこちと探し求めて行った。身を雪に投げ出して疲労を医している時にも独りなる心に的もなく暗い空などにとらわれることもあった。星が吹き消されながらもちらちらと仰がれた。あらしの夜だった。だが今夜は何という静かな夜であろう。ランテルヌの蠟燭を継ぎ足している友の親しい顔がこちらに向いて話が交される。力に張り切った面貌であるが、深い安けさを看取る。しっとりとした夜の大気。いつしか森を抜け出て籠川谷の河床が近づいて水の音がはっきりする。道の辺りに小さな流れがある。そこに荷を下ろして休んだ。蠟燭が明るく光り一杯に燃えている。空は広く開けて良い星の夜である。人と人とが雑然と密居している生活では空を、星を見つめることなどがなんでそんなにあり得よう。星の名など呼びさした遠い日がどんなにか忘れられてあることだろう。ここに来て初めて星を見上げることが出来る。夜の行進は星の行進である。ランテルヌがまた行手を明るく照らし出す、暗がりの中に消えることもなく、二条の友のトレースがまた私共も導いてくれる。雪の上に映った脚の奇怪な影絵の動きを時々私は興じていた。森林から台地を過ぎて道は次第に狭まってくる。丸太橋に掛かる、私は友を待たして渡り終える。振り向いてランテルヌを高く翳す、友はその明るみの中を渡ってくる。また一緒になって行く。雪の中に一つの藁小舎が冬でも残っている。その小舎を過ぎると右手から山が迫った崖と、左の川の流れとの狭い道を抜ける。そこからしばらくの間急傾斜の山腹にアヴァランシュ（雪崩）が出て道を所々埋めている。籠川谷を通じてわずかな雪の量でもアヴァランシュを惹き起こす部分はここと、白沢を越して進んだ所だけである。融雪期においてはかなり所々に出るだろうと思われるが、冬まだ浅き日には往路も帰路も単に前述の部分だけであった。このようなアヴァランシュの上はスキーを脱いで通過した。白沢を越せば小舎はじきあることを知っていたが白沢は中々遠い。夜になってからもうかなりの時間が経過したのに。だが私共二人は良い、とにかく友のトレースがあるから。しかし先の二人はどんなにか心を苛立たせて行ったことだ

ろう。友の背負ったザックも重そうだ。ポルツーを持たぬ苦しみを友に負わしても友は甘んじてそれに耐える。雪に佇んで休むと立ち上がる時に手を取ってもらわなければ起き上がることが出来ぬほどの重さだ。今夜はトレースのある限り友を追ってどこまでも山へ入って行くであろう。

白沢の凹凸な雪の上に出たのはもうかなりの時間が経って後である。沢を越すとアヴァランシュが出ていた。皆今日の暖気に押し出したらしい。もう小舎が近いと思ったので私はいつものように“ヤッ・ホー”と谷の暗がりに呼びかけた。とじき近くから同じような答えが聞えた。もう小舎は近い。身を起こして急いだ、うら枯れた疎林の中に涙のような赤い灯がぽっちりと透かされるではないか。

「やってきましたよ」

目の前まで舟田氏がスキーを走らしてきた。

「なあに、元気ですから」

手を取らるるような気持ちで小舎の戸口まで行ってスキーを脱いだ、歓喜のときめきが胸を溢るるほどに充たした。十時半頃だったらしい。荷が重かったので思いの外に時間がかかった。大町を出てから夜の行進ばかりを続けてきた。先発った二人の友もまた谷に入って夜になったとの話であった。それにしてもこんな夜の暗さを新しいトレースをやりながら谷深く入った舟田氏の元気に驚かされる。いつもただ一人の舟田氏が親船のような安心をキャラヴァンに与える。森田君も手伝って身装えを解いた。赤い焚火の炎も勢いよく燃えてもう暖かい夕飯もすっかり出来ていた。思いがけないもてなしに感謝する。暗い小舎に着いて焚火から、食事の用意までの二人の労作は友以上のものがそうするのかも知れない。それからまた一しきり賑やかな談笑に、久し振りで山へ入った気持ちが深められていく。山に来た初めの一日、それはなんとなしに気恥しさといったようなしっくりしないものがあるにしても、強い愛の抱擁に取り縋った甘えるような心安さと喜びとに揺すられる。山へ入った初めの日に立山の小舎で夜を語り明かしたことが思い出されてくる。

小舎には折よく布団もあった。明日は早く発って大沢小舎を探索しなければならないし、夜もまた遅いのでもう眠ることになった。外ではやはり疎な林の梢に星が燦めていることであろう。焚火の焔が静まって友の安らかな熟睡につれていく。

二十九日。昨夜は夜遅くまでの行進のためか、今朝は少し寝過ごして目が醒めた時にはもうかなり明るい朝になっていた。外へ出てみると雲が低くってじきに雪になりそうに思われる。何となしに重苦しい気持ちがしてならない。不快な天気の日に感ずるそれである。だが今日一日はどうしても大沢小舎に行って小舎の存在と様子とを探って来なければならない。それは既述せる如くに大沢小舎の埋没と、そしてまた長い登攀生活に堪え得るだけの設備如何とを知るためである。小舎の埋没は多くの場合労力の問題となり、小舎の建設様式と、その設備は登攀に対するエネルギーの問題となる。前者の問題は改めて述べるまでもなくわずかの労力をもってしては長時間を要し、しかしていまだ全部を終らずして再び根拠地に帰っている間に続いての降雪のために既に払った労力を無に帰してしまうこともあり得るが故に、大なる労力をもって比較的短時間に労作を終えて直ちに小舎生活を営むようにすべきであると思う。しかし雪が案外少ないから小舎が全然埋没しているということの懸念はやや薄らいだが、後者の問題のみは確実に私共の懸念したものであった。冬季における登攀は快晴の日でなければ敢行することが出来ない。そして快晴の日はきわめて稀であって、いずれの時においても連続した長い時日を小舎において暮らしていなければならない。ことに多くの場合冬季の登攀は露宿の不可能と、カヴァンヌ（山小屋）の利用不可能とのために一日の労作に長い時間を必要とし、従ってまたエネルギーの最も良き貯えとが欠くべからざるものとなる。しからばこのエネルギーの損耗を防がんがためには小舎生活における様式に完全を求めなければならぬ。寒気による睡眠不足が最も大なる原因であり、これに対しての良き準備が必要であるが、既述せる如き理由によって私共はこれに対する完全なる用意を所有しておらない。ただ私共の所有しているものによって堪え得らるる程度の限界を制定することがこの場合の唯一の主要なる目的となるのである。私共はそれを恐れた。あるいはほとんど不可能に近いのではないかと危んだ。冬季における予想しあたわぬ荒天のためにそのような状態に陥るのではないかとい

う懸念もあった。で先ずこの出発のためには大沢小舎まで三時間を要するとして往復六時間を予想し、この時間内にて万一の場合再び畠山小舎に帰着し得る限度にて幾分の荷物を持参しよう。小舎が埋没して掘り出すことが出来なかったならば、再びその荷物を持ち帰れば良い。幸い小舎に入れるものとしてならば持ち上げた荷物を小舎に置いて帰って来よう。いずれにしても夕刻までに帰ることとして今日一日のプランを立てた。寒気がひどくって小舎の中で仕事をしていても指先がかじかんでしまう。鈍重な空からは静かな雪が降ってきた。もうかなり深く積もった雪の上の疎林が皆うら枯れて細い雪片がチラチラ落ちてくる小量は、平生の生活においては枯淡な味いであろうものを。この静けさの中にいつも抑えている情熱、それはどうして単純な枯淡であり得ようぞ。高い山々には雪と氷とが吹き荒れているであろう。谷間だけに静まり返っているだろうが。セーター一枚と、幾分かの食糧とをサックに入れて小舎を出たのがもう午前九時になっていた。ともすれば冬の出立は後れがちである。皆荷が軽いので思ったように進んで行く、雪が次第に量を増して降ってくる。だが谷伝いに山を登る時にはさほどまで感じない。これはルートを谷にとった場合常にそうである。かつまた方向測定に関する困難も除くことが出来る。ただ融雪時においては雪崩の危険は非常に多いが、初冬にはこれらの心配は不要である。しかしそれも日中における温度、傾斜、積雪量等の状態において必ずしもかく断定することは出来ないが、であるから放射状登山の場合におけるカヴァンヌが谷伝いによって求めらるる時には単にカヴァンヌに着いてからの天候のみが登山を決定するのであるから、これを反対なる場合、即ちカヴァンヌに到達するまでに谷伝いの不可能なる時、例えば立山の例をとるならば室堂に達する途中の阿弥陀ヶ原の登行の如き場合には、室堂に達するまでに天候に左右せらるることが非常に多い。故にかかる時の登行にはこれに対応するだけの条件を加えなければならない。あるいは多人数のポルツーを使用するとか、長い時日の余裕をみるとかしなければならない。かくの如くこの二つの異なれる条件が登山の可能性を決定する要素ともなり得る。

日中の温度は次第に高まっていった。明るい太陽が透されて今朝までの粉雪がスキーに粘着するようになってきた。そして同時にサックの重さと疲労が感ぜられてわずかな距離に思いがけない時間を費消するようになった。所要時間の予想において次第に違算を生じてきた。小舎の埋没に対する懸念は積雪量の少ないためにやや希望が起こってきたが、時間の違算は日中の短い冬の日には非常に重大な結果を呼び起さぬとも限らない。扇沢に出たのがもう正午。冷たい水を飲みながらパンを食っていた。友らはこの休憩のわずかな時間を滑走したりなんかする。雪がチラチラ降る。太陽が明るいのだ。ひるをまわった一時頃までの休息に再び気力をふるった。祖父岳への高い峰々の乳色の煙。雪は高きに狂っているのだろう。谷の向う側の林にもまた雪と風との狂燥が巻き起こっている、扇沢を越してもなお雪は湿っぽくスキーに付着して著しく行程を阻害する。スキーを脱いでシーレ（蜜蝋）を塗ったがそれでも急ぎの仕事だったから滑りが良くない。時間の経過ばかりがあるので、その後は雪が付着したままの重いスキーを堪えて行った。扇沢から一時間前後に森林から籠川谷の河床へと出た。雪がもうほとんど谷を埋めてしまっている。だが今まで森林の中で弱められていた風が遮るものもない川床では物凄く荒れてきた。谷の上からは真向に吹きつける雪に帽子を目深に被って代る代る深い雪を踏む。山へ来てまだ練れ切らぬ身体に疲労が段々加わってきた。気持が何となしに苛立ってくる。時計ばかりが進み過ぎる。扇沢から一時間か、一時間半で到達し得るだろうと思った予想ががらり崩れてしまった。重くもないサックがひどく重さを感じさせたり、雪の付着したスキーが腹立たしく疲労を感じさせる。この経過と共に山々は次第に吹き荒れてくる。飽くまでも今日中に大沢小舎を探索しなければならないという使命のために懸命の努力が雪を押し切って進む。風雪の中に立った時に小舎は大方あの高台の林の中であると指呼してそこまでは時間のみ費して中々着き兼ねる。空腹と疲労とのためにキャラヴァンはようやく乱れがちになる。友を呼び合いながら行く。キャラヴァンの離散ということは絶対的に避けなければならないものであるが、ある例外的な場合、即ち急迫の事情と、また多少の距離の隔りが特にキャラヴァン全体的の行動に差し支えなき場合には止むを得ずこれを認めねばならない。努めて相離るることなしに吹雪の日の暮れやすい峡谷を荒るるがままに委せて、行き暮れた雪の旅人の如き足どりに深い叢林を

潜り、腰も埋める深い雪を踏みつける。雪に塗れた真白い体ではあるが、懸命の強い命のうごきがある。藤田君が少し後れてこまった、空腹を覚えて食事をしているらしかった。声々呼び交した。赤沢岳の尾根からくる大沢に出た時にはもう四時近かった。大沢に出たならばこれより沢伝いに少し入り込んでから小舎のある高台へと登って行く方がむしろ楽だったかも知れない。がこれらは大沢小舎の所在判定の目標とした大石が籠川谷にあるが、それが雪の中にまだ露出していたのでこの石まで行ってから台地へと急斜面を登った。案外登り悪かったが多少の時間を費して登り終えた。だが小舎は容易く見当らなかった。懸念したことさえもあったからこの雪に埋められたのではないかと思った。ともかくも注意深く探し求めた。疲労がはなはだしいので板チョコを嚙る。それにしても今日は畠山小舎まで帰らなければならない。それはよし夜になったにせよ、不可能ではなかろう。だが小舎の所在と様子とが判明せずして引き返すことは、再びこの使命のために努力を繰り返すとしてもしかもはなはだしく失望しない訳にはいかない。いかにしてもこの高台の狭い面積の中に探し出さねばならないと思った。皆疲れ切ったのに舟田氏のみがサックを投げ出して索し歩いている。じき帰って来て見当らないと答える。行き過ぎたのかもわからないと思ったので再び後退した。盛り上った雪をバトンでもって突いてみた。それは幾度も無益に繰り返された。突然、私は咄嗟にそうだと思った。飛んで行った。間違いなかった。ほんのわずかだけ雪に露われていた。覗いて見ると雪が吹き込んではいるが使用には充分である。私共は喜び合った。自分達の住居が得られた。疲労も忘れた安堵である。このような時に私共はいかに私共の嚮導者に感謝をして良いのであろうか。そこにまた長い日数を重ねて自分の生命を保護してくれるカヴァンヌを求め得た味はどんな強い保証を与えらるるのであろうか。カヴァンヌの獲得は自然の一つの力によってのみなされる。だがキャラヴァンのあらゆる望みと行動と力とは私共を導く人によってのみ得らるる。それによってもキャラヴァンの力は各人の力を総合したものよりも以上の強さをもって現われてくる。強い嚮導者の下には全くの自然一致と協力と飽和とがある。それは没我的な点まで進められる。各人がその人の広い翼の中に全く抱き込まれてしまう。そのようなキャラヴァンは、山々の嶮しい登攀と、その生活とが全く終りを告げた時には何よりも先ず嚮導者に対する感謝と、その享けためぐみとを覚える。今このカヴァンヌを見出してもう夜が近い。畠山小舎まで帰ることも不可能ではないが、一夜をここに明かすことの方がよりキャラヴァンを救うことが出来るであろう。よし持ち来った防寒具は皆無に近いにしても、私共はこのようにして一夜を明かすべく決意をした。山に来て若い森田君が喜んで心を協力してくれたのに感激した。すぐ戸口に廻ってシャベルを振るい雪を掻き除けた。友はまた薪をとり、あるいは反対の側から内に飛び込んで吹き込んだ雪を掃き除けるなぞ目覚ましいいとなみが協力して行われた。

それは氷るような冷たさであった。床板の上に敷いたにしてもじめじめ湿った茣蓙は不健康な冷土を刺し込む。壁の尖った石の積み重ねは牢獄のような苛酷な底冷えを発している。ランテルヌに照らされたその石の黒い光は見るからにもの厳しい。石を抱いて明かす一夜だ。幸い隅の所に枯れた薪が使い残されていた。勢いよく燃え上る火の温かみだけが快い。雪を融かして湧かすココア。疲労と空腹と、そして張り詰めた心が伸びやかに解かれて健闘の一日を感謝する。このような味に私は一つのロマンテイツなシーンを想像することが出来る。それは彼らの中の彷徨者であった男が己の家に帰り親しい身内の者に犒(ねぎら)われてその吹雪に濡れた顔を微笑の手もて拭うことだ。だが全くそれはこのような時には一つの架空な想像であることに違いない。冬の高い山々の登攀者にはそのような憧憬などはない。こんな冷たい石の壁に寄りかかってピオレの白光に無言な頬ずりを与えている男だけが存在する。その黒く煤けた顔に吹き込んだ粉雪が冷たく引っ掛かかる、だがこうした男が集まって皆が何故こんなにも断ち切れぬ強さの親しみに慈しみ合うのか。

セーター一枚しか着重ねることが出来ない。持って来なかったんだ。それに雪が開け放しの破風の下から始終吹き込んでくるので、茣蓙を立てかけたり、吊したりして小さな囲いを拵えた。皆が体を押し合って寝転んだ。もしかすると偶然明日は良い天気になるかも知れない、などと考えた。その時ばかりは寝付かれない心に訳もなく躍り立つものが感ぜられた。だがこの恐ろしい底冷えの寒さは何という虐み方だろう。真冬だ。厳寒の真夜だ。人間の薄く弱い肌を恨んでも仕様のない現実の寒さだ。体を起き直して消えかける焚火

を継ぎ足す。その時だけが暖まる。だが眼をつぶっただけで眠ったのか、眠らないのか判別もつかぬほどの速さで眼が覚めて寒い。外へ出るとひどい吹雪だ。止みそうもない。また寝苦しさに輾転する。眠ることは安息であるべきであるのにその一夜は眠ることが苦痛である。着たままの寝すがた。友の寝返りの微動にも鋭敏に眼が開く。いたわられ、いたわり。移り難い夜の経過を待つ。

三十日。吹雪。ただ一夜を明かすことがどんなにか待ち遠しかったのかもわからない。このような時に明るみということが本当に自分達を生々と甦らせる。だがあれだけの薄着にもかかわらず、この厳しい寒さに堪え忍んで夜を明かし得て自覚するほどの不利な影響を蒙っておらないということは経験として得た一つのものであった。

終夜の吹雪が今朝もなお続いている。高い峰々への登行は僥倖にも望み得ない。今日一日はカヴァンヌの生活を続けるための色々な目論見と、実行の日である。舟田氏と私の二人は畠山小舎まで下降し、残りの品を持ち上げることと、友の二人は燃料の用意をすることとなって、午前九時私共は吹雪を衝いて谷を滑降した。身軽な粉雪の滑降は川床から森林へと入るまで素晴らしい直滑降であった。途中まで藤田君が見送ってくれた。いつものように相離れた時に交す呼び声は姿を消した吹雪の中に幾度も繰り返された。かなりその距離を相隔てても谷のエコーによっていつまでも離れ難く相呼び合った。畠山小舎まで全く愉快な滑走を続けられる。一時間半ほどで畠山小舎に着いた。正午過ぎ三十分頃に引き返した。昨日長い時間を費したので今日は出来るだけ切りつめようとして急いだ。二時間半を要しただけで大沢小舎より二、三町に近い大沢に着いた。丁度スキー練習に出かけてきた藤田、森田君の二人に会って練習をした。思いがけない速さで二つの小舎間を往復することが出来て、所要時間上の観念に資するところが多かった。畠山小舎より大沢小舎に到る所要時間は身軽ならば三時間を要しない。距離としては短い。要はその時の色々な状態によるのである。その後藤田君らがやはり同じ目的でその地点を往復した時にもやはり同様の時間を要したに過ぎなかった。

一時間ほどの練習を済まして小舎に帰った。この夜からはしばらくの間、この冷たいささやかな小舎生活に閉じ籠るのである。吹雪は夜に入るまでも続いて常に弛められることのない登攀の心もやや寛ろいで、いつの登山にも繰り返されるあのファミリエの団欒がしっくりと四人をとりつつむ。

小舎生活に落ち着いて私共は静かプランについて語り合った。先ず最初に針ノ木岳と蓮華岳とを求めよう。それにしても針ノ木岳のアレートのトラヴェルセ（縦走）は蓮華岳のそれよりも先に選ぶべきものである。ルートは無論針ノ木峠よりすることとなる。これについて先ず私共はこの全体の所要時間幾何なるやを考慮した。針ノ木峠に到る時間は夏季の大雪渓登行に約三時間を要するものとして、冬季深雪にては少なくとも五時間を要するであろうという計算をした。針ノ木峠より針木岳の頂に到るアレートの往復には四時間をみるとしても、あるいはコルニシュ（雪庇）、またはヴァラップ（岩登り）の困難等のためにより長き時間を要するかもわからない。その他あるいは休憩の時間等を加算して充分なる時間の余裕を得るために、午前三時または四時をもって出発の時間と予定していた。しかしながらこの時間の予想が結果においては大いなる誤算となってしまった。針ノ木峠に着くまでの時間は途中食事をしてなおわずかに二時間半にて登り終えることが出来た。無論それは私共の非常な努力の結果ではあったが、意外な事実であった。これがために私共は一度登攀の機会を失うことになった。時間上の一つの誤算はこのようにして恵まれた機会を失うことが始終起ってくる。三十一日に私共は完全に蓮華岳に登ることが出来たのであったが、多くの時間を要することを予想したために途中から引き返してしまった。しかしこの誤算は私共にとっては避けることの出来ないものであった。それは長い間の降雪の後などに深い雪を切ることは非常な労力を要する。この故に多人数の登行はこの点においてきわめて有効であり、事実ある時においてはきわめて少数のキャラヴァン等は思わざる長時間を要するがために失敗することもあり得る。しかしこの多数の登行は反対に不利なる結果をも惹起する。雪を切ることにおいて労力と時間とを節約し得るが、アレートより頂に到る困難なるヴァラップに際して経験されるところのものである。私共四人という人数をもって最もよく有効に登行し得るものと信じていた。ただスキー登行範囲においての幾分の時間の過剰をみることはこの場合不当ではないと思った。一つの

例証として三十一日のスキー登行時間は四日の登行における同一距離にて既に著しき時間の差異を示していることを私は挙げる。あるいは四日の登行は異例的に良好なる経過を示したのかも知れない。

次に私共は針ノ木峠のコルニシュについて充分の考究をなさねばならない。常に積雪時においては針ノ木峠の籠川谷側にはコルニシュの形成がある。コルニシュの形成は登降に際して色々な困難を生ぜじめる。これがために私共は長い登山綱の携行を必要とせられた。三十米と二十米のものを用意した。が冬もまださまで深くない今はコルニシュもきわめて小さく、従ってその登降も思ったほどに困難ではなかった。

更に私共は峠からのトラヴェルセに際しての困難を予想した。それは真冬の山々が持つ独自なものである。寒気と烈風とである。前年の冬槍ヶ岳の肩で吹き飛ばされそうになった。槍ヶ岳の頂までのヴァラップは岩蔭に氷の飛びっ散りを避けることが出来るが、針ノ木のアレートは全くこれに曝されなければならない。それはある非常に恐ろしい苦痛を想像することも出来る。

だがカマラード（仲間）は皆強い力に燃えている。そしていつも出発の用意の間に小舎に着いた夜から直ちに一切の整備をなすことを忘れなかった。一日登攀に要するエキプマンと、食糧を各自に分担した。

黒く煤けた太い梁に吊されたランテルヌの光に、立て並べてあるピオレが熒々（えい）の反射をしている。手をこまねいで焚火を囲む皆の顔は語ったり、押し黙ったりしている時にも山への心に断ち切らるることもない。一しきり薪をくべたりして爐辺に寝転ぶが毛布一枚の温かさも真夜の寒冷には眠りが浅い。戸を出ると、いつもの執拗な雪が吹きまくっている。でも小舎の周りだけが幾分かの静けさをぬすんでいるのではあるまいか、高い山々のうなりを感ずる。頭からすっかり雪を被って戸を閉じる。

「駄目だ、止みそうもないや」

誰も投げかけるように云い切ってしまう。仕様ことなしに火を燃す。こうして頭を押さえつけられていると、もう馴れっこになって諦めと忍苦とを続けるようになる。幾度このような山生活を経てきたことだろう。今度もまたこのようにして何日か続くかわからない。それは失望ではない。落ち着いた山々への物思いを培ってくれる。通りすがりの旅人の気持ではない。自分のものだというものに対する親しみの気持ちである。物珍しい小舎住いではない。真実のものに帰った気持ちである。幾度となく代る代る外へ出て空を見上げることを怠らなかった。眼が醒める。誰かが眠りを妨げないようにして外へ出ている。火がまだ消え残っている。小枝を折ってパチパチと燃える音に、冷えきってしまった肉体を温める。皆が一様にむくむくと起き上った。そこでまた暗い闇の中に寝息をひそめてしまった。

三十一日。吹雪後晴。小舎の中に仄明るい光が流れる時には乱れやすい眠りも朝の眼覚めである。だがやはり雪が降っているではないか。また諦めるか。いや明るさが違う、筋金の入った強い光だ。雪の向うに太陽が輝いて、空は青いんだ、だから空が段々色づいてくるじゃないか。晴れるのかもわからない。糠（ぬか）悦びかもわからない。だがそうして疑いの時には必ず出発の用意をしていなければならないものだ。皆が仕度を始めるともう出掛ける時の気分に変って引き締められる。希望が輝いてくる。雪の降りようが弱められた。晴れる気勢だ。……確かに晴れ上った。ただ雪の一片二片だけがおちる。スキーを戸外に持ち出した。軽い粉雪だ。だがもう時間は十時だ。こんなに遅くってはとても高い山の頂までは行けない。何故なれば私共はそのような計算をしていなかったから。そして今日はただプロムナード（散歩）だけに止めておこうということになった。ボンヌ・シャンス（良い機会）を逃がしてしまったのだ。だがそれは止むを得ない。誰が天候それ自身のようにこれを予想し当てることが出来るものか。

軽快な粉雪へ滑り出したのが十時半であった。明るい雪の輝き、雪晴れの強い光、煌（かがや）かな姿態を誇示するは吹雪の後の山々。そしてまた登攀者の心にも己独りを充たす悦びが盛り上る。木立を出て広い谷の海へと滑降す。白光の海の眩燿、その長大な雪の拡がりの高きを画るものは青い大空の澄みきった鮮やかさである。単純な描きなぐりであろう。だが何という厳粛さが存在するのか。力が躍動しているのだ。動と生との息づまるような混交だ。美と力との名工の粗削りだ。そしてその点景は友の黒い影の動きである。四十分ほどは直線に登って行く。気軽なプロムナードに語る山々の壮美だ。雪は全く降り止んで鋭いアレートは多様

な直線を紛糾せしめている。風は爽やかに汗ばんだ身ぬちを撫でる。谷が狭く迫って急傾斜のゴルジュとなる。細い電光形を刻む。このゴルジュを境界として上下著しい変化を示している。これより下は深い粉雪であるが、上方はアレートから吹き颪す強い風に作用されて堅いクルートに変化している。二度の登行において常に同一の状態を示していた。堅いクルートには粉雪が這い飛んでいる。マヤクボへの分岐点にまで近づいてから引き返した。午後一時近かった。蛇行形のトレースが直線に変って矢のように飛んで行く。眼も眩むような直滑降である。じきカヴァンヌの赤い旗が見える。プロムナードの終った日はまだ高い太陽がある。スキーを雪に突きさしてカヴァンヌに入ると明るい午後の光が留守居をして、焚火の消えた白い灰が萎れている。私共のフィデイルなどピオレが端然と立て掛けられている。外へ出て暖かい太陽に身を投げ込み、上衣を脱いでギラギラ眩しい雪の反射に細目な上目をも使いながらパイプをくゆらす。かけがえのないほどに慕わしい一日。谷の開けて行く空を見ると、あの青い空の下にあるであろう村への生活に思いを寄せてみる。山と山の間を出て行った遙かなる彼方の村とそして町と、寒い冬の日にも歳晩の飾りものがあるであろう。年の暮も今日は大晦日である。家内揃っての年越しも楽しげに想い出される。色々な年の暮の遊びごとなども。だが今こうして深い山の雪の中に暮らしていることの方が何故に強い満足に私をひき入れるのであろうか。それは気障（きざ）な隠遁でもなく、いたずらな回避でもない。このような時に私は遠く過ぎ去った日の私の生まれ国を思い出す。雪の深い寒い私のふるさとに幾度も重ねて忘却し難い冬の生活と焚火の夜話とに帰って行くことが出来る。ともすればこのような生活それだけを求める好奇的な気持ちに捉われてはいけない。生活がいつも自分のものでありたい。パイプの青い煙が香やかに立ち昇る。胸のすくような、涙ぐましい山の陶酔である。永遠への静思と、幸福の追想に私共はカヴァンヌの生活を楽しむ。

明日は楽しいお正月だ。御祝いをしなければならない。だがもしかして明日もまたこのままの良い天気だったら閑がないかも知れない。今日中にすっかりお祝いをしようじゃないかということに誰も賛成して、丁度まだ陽も高いので各々が直ちにそれぞれの仕事にとりかかる。薪を集めるもの、料理をするものなど働いている。折々の音が響いてくるカヴァンヌの床板に坐って肉を切ったり餅を焼いたりして雑煮を拵えている。皆仕事が済んでカヴァンヌに帰って来る。そして熱いとろけるようなうまさを讃える。皆がありったけの喜びで話している。夕暮が静かに漂ってくる。祖父岳のアレートにだけ雪が煙のように飛んでいる。それから皆で綱祭りフェテ・ド・コルド（ザイル祭）をやろうじゃないかという。スキーを立て並べる。黒いゴツゴツした壁石にクランポンと、ピオレを置き、その上にコルドの輪を飾りつけ、赤い旗などが愛くるしく彩る。梁にはいつものようにランテルヌを吊し、一枚の残片に

山々にての良き幸福な新年を祝福する

と横文字で書く。室が整って私共は自分の信頼するエキプマンのために感謝の心もて山の言葉を親しい友と交そう。綱祭りは今日から以後私共にとって楽しい追想と、未来への憧れの高められる日となるのであろう。

夜の訪れがある。ランテルヌの灯よりも焚火の焔の明るさが良い。こんな夜には騒ぎ、賑やかさというものは皆遠く持ち去られてない。四人だけのつつましやかないとなみだけがいつも変らない。“ア・ボートル・サンテ”（健康を祝す）など云って祝いものを飲む。軽いほてりに幸福が身ぬちを突き廻るようだ。それから何を話したのだったろう。何をつぶやいたのだか。それは何であっても良い。皆が他愛もなくそうしていた。消えかかっては薪をたきくべる。誰か熱いコーヒーを拵えてくれた。凝乎と火を見つめながら飲む。夜が更ける。もう寝ようかという戸口を開けて外を見る。いつの間にかまた曇った雪催いだ。月光があるんだがぼやけている。

「また明日も雪だよ」

そう告げ知らせてきちんと戸を閉め切ってしまう。寝る前に、それでもいつものように明朝の出発の準備だけは怠らない。毛布を取り出してくるまる。ランテルヌを消してしまうとただ焚火だけの明るみがある。寒いので背中を焚火に向けてくの字形になる。継ぎたした薪の小枝が思い出したようにパチパチ鳴ってその度にボーっと明るくなるんだが、じきまた暗くなってしまう。真暗闇の中を目を覚ました。少し寒いな。ま

た燃やそう。だがなかなか燃え上らない。でもようやく火になった。友もまた起き上っている。戸も開けて見る。もう雪になっている。

「いけない。雪だ、雪だ。」

また寝転んでしまう。

大正十四年一月一日。吹雪。吹雪のまま夜が明けはなれた。でも仕度だけはいつものように整えていた。何時間待ってみたってやはり止みそうもない、何日続くのだろうなどと無益な当て推量をする。針ノ木峠までならば谷の登行であるからいかようにしても登ることが出来るであろう。だがトラヴェルセは絶対に不可能である。晴れるのを待とう。

今日は元日だ。去年の元日は上高地だった、素晴らしい青い空に穂高のアレートが雪煙を吹いていた。五千尺の常さんのもてなしも身にしみている。だが今日は何という変り方であろう。石と板との粗雑な造りに、雪が吹き込んで人の寝起きがあるなどとは思えそうもない。だがこんな日には閉じ籠って吹雪の音でも聞いているんだ。雪国のふるさとを出てからいつも忘れかけた吹雪の音である。自分の気持ちが外へ発散せずに、じりじり内方に喰い込んでくるのが吹雪の日であった。その日は外出をすることが出来ない日だったから、今このようにしている時にはやはり親しい回想を持つことが出来る。いつかまた吹雪の音を聞く生活がただ山に来た時のみの短い日数だけの時でなく、もっと日常の生活に触れてくる時があるのだろうか。都会に住むことに馴れて自然の音に耳が塞がってしまう。人間の持つナイーブな気持ちが失われることは寂しい。吹雪の音はかかる寂しい男を救ってくれる。開け放しの棟下から煙のように吹き込む。

今朝もまた雑煮に舌鼓をうった。喜びと希望とが新しい年の初めの日の皆の顔に溢れる。誰もがそのように振る舞っている。戸を開けて雪を掻い取っては鍋に入れ火にかけて水をこしらえる。夜となく昼となく、火のある間は誰かがきっとそのようにして水を造っている。今日は良い日だ。煤けた汚い顔を洗ってさっぱりする。だが鬚は伸び放題だ。でも剃ることの必要がない。手持無沙汰な時には剛い針のような鬚を撫でているのが良い。山男にふさわしいとも思わないが、あるがままにしておくことで充分である。ココアを拵えて飲んだらコップの中に大きな木屑が入っていた。そのままうまそうに飲んだ。溶かし水の鍋の底にも色んな芥が一杯沈んでいる。でもちっとも構わない。

朝の黒パンを焼いて食ってしまうともう九時になっている。夜の明けるのが遅い。そして冬の一日は暮るるに早いのだ。物憂い日を感ずる。藤田、森田の両君が吹雪を衝いてスキーの練習に出掛けて行った。呑まれるように。友を外に送ってからまた戸を閉め直して爐辺に釘付けにされてしまう。いつになったら雪が止むのだろうかとは考えてみるんだがちっとも当てになんかしない。夜が良く眠れないせいか、いや退屈めいたものがこうするのか、眼が渋くなっていく。眠気がさしたのだ。辺りに散ったままの毛布を被って眼をつぶる。安らかな小舎生活だ。眼が覚めては話し込む。山での話は爐話にもふさわしい。かつて幾度も山小舎の生活に浸った時には友の数多い山の話と、その思いなどを聞くことによってどんなにか豊富な山の世界が啓かれたことだったろう。山々の遊歩から今の嶮しき峰々への登攀に至るまでの色々な変化がそこに起こってきた。思いも付かなかったこの山生活と登攀への味到は皆私にそれを教えてくれ友の言葉の力によって得られた。大きな感謝を私の人生を啓いてくれた友に捧げる。私もまた今、このような登攀こそより大きい真実の山の悦びを与えるものであると信ずる。論議は無駄に繰り返さずとも実感はかく私を言わせる。ただ山々を登る者が常にこのような登攀をのみ重ねることが出来ないであろう。或る時は平坦な一筋道を行き、或る時は丘稜を行くであろう。否、かようなことすらも与えられずに、ただ山への思慕のみがある時もあるであろう。だがかような時にはなお最も大きい山の幸福が何であるかが想像し得られる。しかしながら山の幸福は数よりも質である。いつかこのような登攀の形式を離れて住む時にも稀薄になり得ない山の思いはあるはずである。登攀者の生命はその形式にのみ存するものではない、形なき深き心にまでとり入れられてある。

焚火を囲んで語る時にはきまっていつもするように小枝を拾って灰を掻きたてたり、散らばった小枝をか

き集める。そうして長い時間蹲っている物憂さの後には寝転んで胸を往来する色々な相を放心したかのように見送っている。

練習から友らは帰って来る。一日が暮れる。夜は享楽への転廻ではない。厳粛と静謐の領域へと続く。ランテルヌに灯を入れるとピオレがピカリと光る。その変に誰かが戸を開けて見る。いつまでも大気が乳色に煙らされて本がザワザワ揺れている。雪が吹き込んでくる。戸を閉じて早く寝よう。だが二、三時間だけが死んだような眠りである。寒い。こっそり焚火を燃して空気を温める。うつうつとする。

二日。吹雪。まだ暗い午前二時に起きて外へ出た。真暗だが雪が止んでいるらしい。皆の心が躍り上った。今日こそ、そしてこのような偶然が与える希望にどんなに信頼し得ることであろう。いつかも山に長い間閉じ籠った時に幾度急ぎ発ちの準備を繰り返したことだったかも知れない。今もまたそのように甲斐ない望みであることを気付かない。焚火を燃しつけて、パンを食べた。三時という暗さにランテルヌを灯して雪の長大な谷を登って行くだろう。出発の緊張さに燃えていた。だがまたそのうちに雪になってしまった。時間を後らして待っていたが、それからの雪が一日一杯続いていった。何日降ったって良い。そのうちには晴れるだろう。それにしては食糧が少し減って足りなくなってしまった。藤田、森田の二君が気の揃った若い元気で一杯になって九時というのに食糧補充のために畠山小舎へと下りて行った。じき帰って来ることだが友を見送ることは寂しい、でも元気で帰って来るであろうが、それまでが何となく気遣われる。時々の呼び声も吹雪の中に消えてしまった。

小舎に閉じ籠る日の佗しさ。懐からノートなど取り出してみる。とりとめのない思いにとりとめのない書きなぐり。否、もっと良いことは黙って寝転んでいること。複雑な気持ちか、単純な気持ちか。昼は少し暗いせいか、それとも夜が寝足りないせいか、毛布をひきよせて眠ってしまう。

ひる時に何も食べなかった空腹などを知らない。約束の通り薪を集めておかなければならない。食物を持って帰って来る友のために、焚火と、温かいココアを進ぜよう。外の深い雪に腰までもぐって薪を取り入れる。その仕事が済めば雪の降る日のいとなみが段落する。焚火をめぐって話し込んでいる時にふと人の呼び声を耳にした。吹雪を衝いて来る友の声であることを知った、谷を下りて行った友らがまた何日かの生命の糧を荷って帰って来るのである。この雪に悩んでいやしないだろうか、舟田氏が声を聞きつけるとすぐスキーを走らして迎えに行った。小舎に私は残って充分の火をこしらえておこう。そしてまた温かい飲物なども。吹雪を通して来る友の声は次第にはっきりと近付いて聞こえる。私は山で友との呼び声を交すことを好む。それは疲れたる者の声か、否、相会うことの親しきが故に。相会うことの喜びは先ず呼び声に始まる。親しき者相会いて顔の見定めのつかぬ時にても先ず声々呼び合うことによってのみその人の識別とより速やかな牽引とを覚える。野良に呼ぶ声、山を下りて呼ぶ声、閉ざされた冬に呼ぶ声、それがどんなにか忘れ難いものなのであろう。相隣る者互いに斥け合う都会生活などにて人は皆隣人に呼びかけることに怯える。そのようなこととは余りに大きな隔りとを私は感ずる。

雪にまみれた友が戸口に立ってその背中のサックが膨んでいる。ココアをうまそうに啜っている。パンも食べる。自分の待っていたものが皆与えられる満足。強い元気に、帽子を解いた君らの顔は上気して良い血色だ。健康の言葉では足りない、力が漲っている。だがやっとそこそこだ。こんなにも早く頑張って来てくれたのか。

「雪はどんなんだったね？　深くって苦しかなかったのか？」

「いや吹かれたが大したことは無かった」

と答える友の声はよりかかるような懐かしさである。良い火を燃そう。温まって休み給え。

夜に入る時にはまた好みの雑煮に皆、楽しい晩餐をもった。

三日。吹雪。午後になって雪を衝いて練習に出掛ける。すぐ近い斜面で深い粉雪を飛ばしながら滑った。だが雪が一層ひどく吹きつけるようになったので、夕方早く切り上げてしまった。今日も暮れてたべたものが再び乏しくなってきた。いつまで続くのかも予想出来ない吹雪と、限りあるプロヴィスオンとが競い合わ

ねばならない。またそうなったら谷を下りて取りに行こうと思った。蠟燭もまた欠乏したのでランテルヌの光もほんの必要な時にだけ利用しなければならない。焚火の辺りだけが明るい。でも気持と生活はいつもと同じように繰り返される。

四日。雪、後晴。いつもするように午前二時というのにきまって起き上る。焚火がほとんど消えかかって真暗な小舎の中は戸外と同じように厳しく冷えきっている。寝ついてからかなり時間が経ったと直覚するには天気がどうか、を見定めようという意識が物の怪に襲われたように自分の胸に、はっきりと兆す。むっくり起き上って外へ出ると雪がなお降っているが、不思議に風が止んで真夜の静寂にほんの思わせ振りの降り様だ。今日は晴れ上るのかも知れない。と思いながらも高い峰に攀じる日の周到さを忘れなかった。もっと充分に確かめてからにしようと思った。また寝転んだ。が何となく希望が疼いているのを感じた。

夜明けまで待ってみた。雪は明るさが生まれる朝になってもなお降りつづけているが、それが幾分か小降りになっている。風はやはりなく谷全体が静まり返っている、晴だ！　出立だ！。もう新しい食糧を補足するのでなければ、恐らく今日一日が一つのテルミニュス（最後）であるような時の焦燥、それが今日この天候の転回を予想し得て希望に輝いてくる。仕度は敏捷に運ばれる。登山綱を二本、クランポンや、ピオレも携えた。パンを軽く食べて外へ出た。雲がぐんぐん切れて行くではないか。そしてその切目からチラチラ覗かれる青い空は、良き一日がしるされて太陽に輝いているではないか。

「よし、行こう」

純白な新雪の深まりの上にプランシュ（スキーの板）を滑らした。午前九時。深いトレースが誰が先に立つということなしに刻まれていく、木立を出て夏路の針ノ木雪渓に出た。祖父岳連峰のアレートが光っている。空の和やかさ、降り残りの雪が思い切り悪く降りかかるが、もぅ胸一杯の悦びがある。出立が予想より後れて時間の見当がつかないのでほとんど全く休みなしの登行を続ける。登るに従って意地悪い霧が巻いてくるんだが弛まず登る。約二千米高度のブルジュは連日の雪によって大分変化を見せている。片側が凹んでスキー使用の部分はほんの少ししかなかった。三十一日のプロムナードの地点へは三十分短縮して一時間にて到達した。雪面を拭って氷粒が飛んでくる。鋭い氷雪の反射が眼に痛い。マヤクボへの分岐点を過ぎても谷は再び傾斜度を増し雪が深まる。アレートが近い。接空線が迫る。針ノ木峠のコルニシュは果たしてあるがまだ小さい。丁度二重雪庇をなしている部分が二個所ほどあった。切り砕くトラバイユなしに私共は十一時半峠に着くことが出来た。約三時間半を要したのに過ぎなかった。予想時間は裏切られたが、かえって明るい希望に輝いた。この時間で峠を登りきることが出来るなら、なお多くのことをなし得たであろうに。だがなんという素晴らしい真冬の山々の大観であろう。山は皆鋭い白刃の如く凄い輝きをしている。雪が所々巻いている。槍ヶ岳の頂には錐状の黒雲が搦みついていた。ここで私共は蓮華岳と、針ノ木岳のいずれに登攀すべきかについて語り合った。が蓮華岳へのアレートはきわめて容易であり、ことに黒部谷側の斜面は雪が吹き飛んで地肌が出ているからなお登り易く思われた。無論私共は針ノ木岳へのトラヴェルセをなすべきであると決した。何故なればその方がより多き登攀の困難を予想し得たから。ここをデポとし、プランシュを雪深く突き刺し、クランポンに穿き替える。凍えるような寒気の中で私共は板チョコレートを噛った。冷たいソーセージであった。味も覚えぬ黒パンであった。少ししか食えなかった。すぐコルドに結び合った。オードルは舟田、藤田、森田、小笠原であった。踏み出した最初のパントは深い雪であった。短い最初のパントはこの故にかなりの労力を要したが、結局それは短かった、登り切ってからクランポンのポアント（歯）がぐいぐい利く堅雪の上に立つことが出来た。それから鋭いアレートになる。東側を絡めば楽に思われるが、身を没するほどの深雪が急傾斜のパントをなしているので忠実にヴァラップを続けなければならない。幾つもの鋭いペンテ・ラッシャ（急崖）にピオレを打ち振り、確実な確保によってカマラードを安全に登り終えしむる。友はまたその次に到る者に、このような方法をとる。太陽が明るい光を投げかけるが寒冷はやはり温められることなく厳しい。だが困難なヴァラップには時として手袋が不確実なプリズを与えることがある。そのような時にカマラードへの絶対の確実さが保証されなければならない。オードルを変えて私が先頭にあ

ったので手袋を脱ぎ取った。ほんのわずかな岩の先端も鋭敏な感覚を与える。キャラヴァンヌが皆安全に登り終える。また続く氷のパントに良きマルシュ（足場）を刻み、ザイー（瘤）あるいはポイント・ド・ロッシュ（岩角）、マーシ・ド・ピオレ（ピッケルの柄）に綱を巻きつけて友を確保する。このようにして私はある一つの頂に立った。ゆるやかな小さな峰頂であった。濃い雲霧がその頂を閉ざしていた。私共はその中に立って一時を寒風に曝されていた。ここから続くアレートが全く判らなくなってしまったからだ。私共は話しあった。シュタイマン（積石）をこしらえようと。雪が風に吹き飛ばされてむき出しになった石が凍りついていた。自分自身を作り上げるような気持ちで、山の石を積み上げた。創造の喜びであって欲しい。雲霧の動きが烈しい。突然私共はまだ向うに一つの雪の光った頂を見出した。針ノ木岳の頂がそれであった。綱を手にたっぷり握って歩き出した。そのシム（頂上）にはコルニシュがかかっていた。順序を変えて舟田氏が先頭に立った。ピオレを閃めかして切り砕いて行く。氷と雪とが火華のように煌き飛んだ。襟首と手首から飛びっちりが入った。眼深に被った帽子から体一杯に真白な雪の砕片がとりついた。コルニシュを切り砕いたが間余の氷壁が遮った。更にそこにマルシュを刻んだ。ここに足場を得、雪の中深くピオレのマルシュを突き入れて登る。そこでは最後の確保が真先に登った舟田氏に続いて一人一人行われた。針ノ木のまことの頂は雪に積み上げられた高まりであった。針ノ木のコルから二時間を経て午後の二時であった。黒部の谷は深い。スバリから鹿島へのアレートも幾つもの低みを隔てて、二、五四一米の自分の立つクレータ（山頂）のみが大空の中に私を最も高きものにしているように思える。霧のすばしこい動きに擦られて巨大な氷塊そのもののような劒、立山が動かし難く私の眼に見え出す。極北にさまよい出た私であるような意識。ヴィクトワールなどを空に叫ばずとも友の手を握りしめるだけで良い。そして氷が厚く張りつめているからシュタイマンをこしらえる代りに折れちぎられて残っているバトンに赤いラムボーを結び付けておこう。その飜りを凝乎と私の心がいつまでも見つめていたい。自分の登った峰の頂であり、自分の結びつけた赤い布片ではあるが、それはこのような時にはいつもプルミエール・アッサンスィオン（初登頂）の時に遇うエトランゼエな気持ちが胸を掠めていくのではないだろうか。雪の真冬の山々のペイザァージュ（景色）も飽くことなくとり入れた。槍ヶ岳のアングル・ポアンテュも別れ難い。

「帰ろう」

十分の後、我らが頂を去った。綱をしっかと握ったまま、切り砕いたコルニシュに来て私は不用意に飛び下りた。確実にマルシュの上を踏みつけたと思った刹那に、雪の上のクランポンが利かずして滑った。次の友の一人を引きずり落さなかったであろうか。でも咄嗟の間に後方で確保があって微笑のまま踏み止まった。それから私共は安全なポアントの音をはっきりと聞き馴れながら下降を続けた。私共の忠実なプランシュの許に帰ったのは一時間余の後であった。山々は既に夕陽に陰っている。スバリは立派な山である。その肩からは劒岳が覗いていた。何となく山々に云い残したことがあるような思いがする。親しい、離し難い私共のエキプマンをサックに入れた。これからはスキーと、二本のバトンだけあれば足りる。四時だった。スキーの先端が下向いた“アーズ、ラツール”（たくみな下降）もう舟田氏は豆のように小さくなっていく。幾つもの連続した曲線が深い雪にはっきりと描かれて、誰もがそのように後について行く。

立ち止まって明るい夕陽をまともにうけて振り返った友の顔は輝いている。曲線から直線と時間の経過も気付かない素晴らしい滑降であった。静かな谷の、私共のカヴァンヌにもまた赤い燃ゆるようなラムボーが揺られていた、コルから二十分ほど経って四時二十分であった。戸口に雪がサラサラサラサラ撒かれている。空気は明るく爽やかである。アレートは今もなおファイメ（雪煙をあげる）しているが谷は甘い静けさ、私共にひそむエスプリの楽しい嚙みしめ。ゆるやかに上るパイプの紫煙。こんなに大きな幸福を抱えきれなかったら。大きな目的がなしとげられた。そして余るほど償われた。焚火を燃そう。話そう。静かな山小舎の夜であった。

五日。雪、後晴。今日は山を下る日である。朝は眠り足りた心安さに明ける。だがまた雪降りだ。食うも

のも尽きてサックは軽い。良き我らの住居を与えてくれたカヴァンヌは立ち去り難い、初めてここに着いた時に比べて雪量が増してもうじきカヴァンヌは埋もれてしまうのであろう。尾根の雪に立てていた赤いラムボーをそのままにして十時半ここを去った。勝手知った帰路である。粉雪にまみれて心のまま直滑降を続ける。谷から林間へと折れる。静かに降る雪が頬に溶ける。明るい雪の光の飽満。扇沢の冷たい水を飲んで腰を下ろした。畠山小舎は冷えきって誰も居らない。こんな山奥に四つの人影のみが動いていたのであった。谷を出て暖かい上衣を脱いでしまった。自分らの心の重みも軽くなる。大出が近づいて黒土がはみ出ていた。重い靴音とピオレの整調、そして皆の呑気な会話が湧く。林の中にポンと銃音がする。誰か村人に

「やあ、今帰って来ましたよ」

と告げてみたいような気持ち。夕方の冷たい風にぬかるみが凍ていく。剽軽な心が大町へと帰って行く。

記述の終りに少しの言葉を補足する。大沢小舎を中心とするスキー登山は色々の意味で教えられた。小舎に着くまでの間に一つの前山を越える労力の要らないことが、後にこの谷に入る人々にきわめて有利である。所謂針ノ木雪渓にスキー練習を試みる目的のためには誰にでもできそうである。ことに登攀を加味するならばアレートに出てなお面白いヴァラップが出来る。針ノ木岳のみならず、スバリの登攀もやってみたいと思った。それだけでなくなお後立山山脈に幾つもそのような頂を求めることが出来るであろう。それらに対する登路の研究などもこれから行われていくことと思う。ただ大沢小舎が不完全であることが幾分障害であるが、それも人々の努力によって完備されることと思う。所謂アルプスを通じて最も入りやすい所であるものをじきここに得られるであろう。サン・ギイド、サン・ポルツーによって最も大きな山の喜びを求めることが出来るであろう。更に厳冬、大沢小舎、平小舎、立山の小舎を連結して新しいルートと興味あるフランシール（縦断）とを得らるる時も遠いことではないであろう。

6・7　四谷龍胤　「厳冬の大沢生活」『日本登山記録大成』第 12 巻 白馬・後立山Ⅱ

1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『リュックサック』第 5 号（早稲田大学体育会山岳部、1927 年)〕

要　約

1925（大正 14）年 12 月 29 日の記録。

メンバーは、舟田三郎、四谷龍胤（以上、早稲田大学山岳部)、西山参次（第八高等学校山岳部)。

行程は、大沢～針ノ木峠～蓮華岳往復～大沢。

※蓮華岳積雪期初登頂。

※旧制第八高等学校（略称・八高）は、現在の名古屋大学の前身校のひとつ。

1926（大正 15）年 1 月 8 日の記録。

メンバーは、舟田三郎、四谷龍胤、近藤正（以上、早稲田大学山岳部)、西山参次（第八高等学校山岳部)。

行程は、大沢～マヤクボ沢～スバリ岳～針ノ木岳往復～大沢。

※スバリ岳積雪期初登頂。

同部による第 2 回目となる大沢入りの厳冬期登山。一行は、1925（大正 14）年 12 月 26 日に大町を発って畠山小屋泊、翌 27 日に大沢小屋へ入り、年を越した 1 月 9 日まで 14 日間滞在し、同日に大町へ戻っている。上記ふたつの記録は、その間に行われた登山。

なお、前回利用した大沢石室ではなく、1925（大正 14）年に對山館が新築した木造の大沢小屋を利用。大沢入りした一行は、上記を含めた同部部員等 7 人のほかに、對山館からのリクエストで小屋番として大町の案内人・勝野玉作と有明の案内人・大和由松が同行している。

準備篇

生死の彼方へ、生命の躍動へ、その強き絶ゆみなき歩みを運ぶ者こそ幸いである。我らが若き日の歓びは、それはただ我らの努力と健闘の前にのみ展開せられるのである。夏の日の鋭き岩稜の或るひと時、さては奇しき氷雪の山腹に刻む小さき歩み、ベルグシュタイガーの心に去来する山頂の甘き夢は、そは果たして暖かき陽光に咽(むせ)ぶ高峰の花か、否、その夢こそは情熱のベルグシュタイガーを駆りて涯しなく未知の頂への戦いに誘うものである。

まこと厳冬の日本の中部の高き山々、そこにはいまだ人間の感触を知らぬ多くの氷雪があり、破れぬ冬の沈黙があった。初登攀の歓びにも似たるもの、それはただ我が国においては冬の山々においてのみ求め得られると云い得ないものか、さらばあの籠川谷を周る後立山の峰々もまたその一つであり山人の心を強く引き付けて止まぬものであった。大正十四年一月四日、旬日に余る劇しき吹雪と襲いくる強烈な寒気との苦闘に酬いられて舟田氏達が針ノ木の氷に強く強く、その貴き最初の足跡を残したのはなお耳新しきことである。

輝かしい山地の朝、紺青の空に静かに雪煙立ち舞う白銀の山々、涙ぐましいまでのあの貴い忍苦の生活、残された山頂への劇しき憧憬、我らは生きねばならぬ。戦わねばならぬ。スバリへ、鳴沢へ、かくして第二回大沢入りのことは決せられたのであった。

しかも根拠地大沢小舎へは、他の上高地や、立山方面に向うのと違って、前山を越す必要がなく容易に到達し得るというところからして、一般部員の山スキー、及びアイス・テクニックの練習という意味を兼ねて、大体の計画を立てたのであった。従って予想参加者の顔振れの中にも、多くの新進な熱心な人達を見出した。

従来小さなグルッペによって行われていたものと異なった大きな団体的のものが行われることになっていた。結果はともかく、我々はこの機会をして有意義なものであらしめたいと希望した。我らにも来るかも知れぬ機会のためにもという大きな望みからして、その準備の組織にも全然新たなるものを試みることになった。これ以前に、第二回の大沢入りを予想して、大沢小舎を中心にスキーコースの調査が行われることになっていたが、或る事情のために中止されたことは残念である。大沢に対山館の手で新しい小舎が増設されたという知らせは、あの古い石室での吹雪との戦いをえがいていた、我々の心に大きな気安さをもたらしたことは云うまでもない。楽しい友らと共に営むヒュッツレーベン、その準備にも一層熱が加わってきた。なぜならば冬の山行において最も重要な意味を持つ小舎、しかも暖かなゆるやかなものを得たからであった。惨めな十日間の生活、貧しい防寒具にくるまって吹き込む雪に眠られぬ幾夜を過ごした彼らの苦痛、我らにはもうそれがなくなったのだ。しかしあの小笠原氏のものしたものの中に漂うムード、我が求むるものへの強き希いは消えたであろうか。

先駆者のみが味うただ一つのもの、我らにもまた新しい境地があろう。生活が待っていよう、我らの生命の新天地までの戦いを試みねばならぬ。

荒天の連続の中に寒気から我らを救う暖かい防寒具、しかし我らには満足なもの、まして暖かい毛皮等は恵まれてはいなかった。このことからして先ず燃料を豊富に得ることが考えに入ってくる。出来るならばストーブを持ち上げたい。

十月の休暇を利用して森田君が準備の第一として、大町へこのことの交渉に出かけて行った。その結果、予想もしなかった寝具を得ることになった。百瀬氏の好意によることは勿論である。燃料についての営林省との交渉、暖房装置のこと、それに小舎の標示のための赤旗のことなどがなされることになった。

準備組織については舟田、藤田、近藤、森田、後藤君等と相談の結果、次のようなものが決定せられた。一、パルティ（パルティの編成、器具、食糧、会計、記録、防寒具衛生）二、小舎　三、頂、谷　四、技術

以上の四部に分かち、更に一部を五つの部類に分けて、その仕事を責任をもって分担することにした。でこの第一のパルティは所謂ビジネス方面一切を研究準備することがその目的である。しかしこのことはこの行における基調を為すものにして、その重要さは他のエキスペデイションにみると同じである、気付かざるほどの小さき事柄が一隊の行動を左右し、事の成否を決定するまでに至ることがある。

一行の健康、経験の調査によってのパルティの編成、目指す山頂への努力、相許す友のみが味う歓びでなくしてなんであろう。次に器具であるが、これはスキー、アイゼン、ピッケル、ザイルその他のものについての調査及び新調、修繕を目的とする。記録は厳冬における天候、温度、積雪量等についての研究、最後の衛生は小舎生活の場合、再び登攀の場合における事故に対しての準備であって、ことに思わぬカタシュトローフェに対してのものが考慮されることになっていた。勿論、食糧の方にても、食糧の及ぼす登攀の際における影響、及びカタシュトローフェのあった場合を考慮して準備すること、第二の小舎の部は、小舎の位置、構造、設備等についての調査並びに行った場合の研究を主としてなすこと、第三は小舎を中心とする峰々へのローテ及び予想時間、頂、谷の積雪による変化等の研究、最後の技術の部は参加者のためにスキー及びアイステクニック等を研究指導すること、以上が準備の大体の方針であった。

後、十一月の下旬、僕と藤田君が上高地よりの帰途、大町に立ち寄ってその後の小舎の準備状態を聞いてきたのであった。小舎に残存せる米、味噌、その他の罐詰類の数量もかなりのもので薪は四間も準備されてあるし、ストーブも高さ三尺のものが上げられてあった。かつ十枚の蒲団が上っていることが判明し、これによって東京から準備して行くものを決定し得ることになったのである。なお小舎への入口は下流に向った方の窓が開き得るようにしてあるとのことであった。

いよいよ十二月に入って参加者も十五名と決定したのだが、例の山小舎建設に関する映画と講演の会があって大分時間をとられたが、それが済むと直ちに準備会がルームに開かれた。先ず藤田君より大沢入りについての目的及び意義を説明し、続いて各部の責任者より、準備の経過及び研究の報告があった。

大沢小舎を中心とする頂、ことに我々が目指す山頂は先ずスバリ岳であった、登路としては鳴沢側よりするものとマヤクボよりする二つがあるが、前者はスバリの北稜断崖を攀じるもので冬期のことにわずかな時間を利用しての登攀には不可能かと思われる。かつ鳴沢、赤沢の登攀が問題のものである。マヤクボよりの登路は夏季に行われる普通の登路で、針ノ木、スバリ間のシャルテまでのマヤクボは本谷よりも傾斜も大でかつ積雪も多く思われるが大したものではなかろう。ただシャルテからのアレートが問題であった。これはアレート通りに行くならば前年の針ノ木南尾根の経験から、少なくとも二時間はかかると思われた。帰路は、頂からスキーを使い得るかも知れないと予想された。次に蓮華岳であるが、前年の観測によれば針ノ木峠からは吹雪でない限り努力を要せず達し得られる。他の道をとるならば小舎の前から直ちに大沢を登って途中から二つに分れて頂に出るどっちかを選ぶべきである。この二俣から上が疑問で未知の沢であるし、傾斜も大である。雪量の多いことが最も注意を要することで、コースの選定次第で容易に達し得るだろう。鳴沢、赤沢は第一回の時には全然、足を入れていないし、聞くところによると春期に恐ろしく大きな雪崩が出るとのことで、アレートから細かい急峻な沢が無数に降りていて登路の選択に迷うほどで、ただ鳴沢によった短い大きな斜面のみが登路としての可能性を有すると予想された。祖父岳は大沢小舎を中心としては少し離れているが、これは別に畠山より扇沢をはいってするか、鹿島から矢沢の尾根を登るかなどが予想のもので、いずれにしても先ず容易な登路をとることに決定されていた。

パルティについても、天候の都合及び経験の多少によってこの十五人を大体四隊に分けておいたのであった。次に一行が大沢に運んだ食糧、その他の大要を述べると、

一、ザイル三十米三本、二十米一本

二、スキー八台、ピッケル八本、輪カンジキ三個、コッヘル大三個、スキー修理具一組

三、黒パン六十斤、バタ十斤、生肉四貫、角砂糖二十四個、ミルク大五個、ココア大三個、ジャム四個、砂糖三斤、板チョコ十二枚、ケチャップ一本、レーズン八個、砂糖餅三升、干物若干、マカロニ二箱、干しウドン二十束、紅茶大一罐、カレー粉四個、キュブ大二個、玉ネギ一貫五百匁、バレーショ一貫、玉菜五百匁、ブラン一本、酒二升、燃料アルコール二リットル、メタ二百個、ローマッチ二十個

等であつた。以上の食糧は十五人全部参加するものとして用意したのであった。

人夫については最初より我々は我々自身の手で一切を行う予定であった。ところが対山館の方から、大沢小舎を使用するなら是非、小舎番の玉作を連れて行ってくれねば困るとの通知があったので止むを得ず玉作を連れて行くことにし、また玉作一人では淋しかろうと思っていたところへ有明の人夫、大和から連れて行ってくれと云って来たので、この二人を使うことになったのである。これらの二人は炊事に対してであったことは勿論である。この第二回大沢入りに対する準備については槇有恒氏から色々御注意を受けたのであって、私達の深く感謝する次第である。

さてかく大がかりの準備の結果はどうであったか、その失敗ともみるべきもの、即ち半数に近き不参加を生じたことは我々のはなはだ遺感とするところである。このことの失敗は恐らく同時に出発しなかったところにあるらしい。即ち三隊日を別にして入るようになっていたからであって、後から来る人ほど若い人々であったのだ。我々が余りにこの人達の自由を尊重し過ぎたためであろうか。登攀に際しての自由、このことに関しては我々も大きなことを云い得ない訳であるが、吹雪の谷の幾日、来るべき友の来たらぬ淋しさ、鳴沢の台地に空しきヨッホが幾度繰り返されたことか。

玉作も大和も共に好く働いてくれた。しかし私らの心に何かしら、もの足りなさがないでもなかった。グルッペ以外の人々を交えての山への営み、私らの希いが余りに純であり過ぎたためか、希うべらざることを望みしためか、おお、雪と風、半月に亘る籠城に私達の希いしものは何か。

最後に一行及び案内人夫等を列記すると、

舟田三郎　鈴木勇　矢島幸助　近藤正　長谷川壮吉　後藤幹次　四谷龍胤（以上、早大山岳部員）

西山参次（八高山岳部員）　勝野玉作（大町案内人）　大和由松（有明案内人）

行動篇

十二月二十六日

昨日一日舟田君を待ったが今朝になってもとうとう来着しなかった。大勢の人達に見送られて、晴れがましい門出、何日目に再びここに帰り来ることか、今朝の安曇野は白雪に輝いて見るほどの人の顔は生気に映えていた。しかし後立の山々は深い雲に閉ざされてそこに我々を待つ山々のくるめきがただ我らの心をひきしめるのみ、想いは早くも大沢に、氷粒とぶ頂に。

スキーは大町の端れから用いることが出来た。大出の村、そこから脛をも埋める雪となる、いよいよ人里を離れると想えばまたしても都のことが心をとらえて離れない、ここにもまた暮れの営みに急ぐ村人の生活があるのだ。しかし我らはまた為すべきことがある、見よあの山々の高き汚れなき姿を、その胸に抱かれんことをのみ希う若人達の心、荒き頂の氷雪の彼方に、戦いの彼方に平和がある、そこに居ての静かな山との語らい、ただ心からの希い「それでは行ってまいります」とのこの言葉はまた誰に向ってのものであろうか。

スキーなんかと云っていた玉作や直吉がぼつぼつ苦しみ出した。荷が少し多過ぎた加減か、しかし大町を出る時の言葉にしては、予期していたもののあまりに気の毒になってくる、お影でさっぱり路がはかどらない、日向山を過ぎていよいよ河原に出るという頃になって二人はついに荷を置いて大町へ人を呼びに行くと云い出した。そして明日再びここにやって来て、私らの後を追うというのである。

二人を残して籠川辺りの深雪に永いトレースが続く、やがて陽は西に落ちて真冬の細い空には空さえ輝き出した。行手には深い雪の峡の沈黙が待っている、そしてそこに歩み行く心は踊っている。ナハトマルシュ、やがて林は月光に照らされて雪面に麗しい謎の世界が浮き出してくる。こんな夜だったろう、小笠原君達の友の跡を追ってこの路を進んだのは。白沢の少し手前だった、後の林から人声が聞こえてくる。ヨッホーに答えてなつかしい舟田君の声が近づいて来た。そして同勢六人が畠山の小舎にたどり着いたのはそれから間もないことであった。

不完全な防寒具、しかし私達はその夜はかなり暖かな心好い眠りを得た。舟田君とは初めての雪の山、二人の話は夜の更けるのを知らなかった。隙間から淡い月光がのぞき込む。

十二月二十七日

昨日の疲れか、今朝は随分寝込んでしまった。外には雨が雪面に音もなく降っている。今日はいよいよ大沢小舎へ、先人が未知の所を行く不安も我らにはない。ただ楽しいヒュッツレーベンを夢想して谷深くスキーの運びが続いていった。扇沢を過ぎて河原に出る頃から雨は次第に雪に変ってきた。その雪足を透かして高い山々のざわめきが映る。その遠い彼方に小舎の台地が見えてきた。とうとうやって来たのだ。この小舎にこれから何日暮らすことやら、新居を得た喜びに似たものが込み上げてくる。小舎は窓の半ばまで埋まって、付近の本の枝に色褪せた赤旗が淋しげに我らを待っていたのも嬉しい。永い冬を一人り残された小舎、木枯しの日、吹雪の日、しかし今は新しい主人を得て、活気は先ず辺りを賑わした、窓は造作もなく開かれて暗い小舎の中には早くも暖かい火が燃え出した。休息が終ると仕事が始まった。戸口の雪が除かれて外の明るい光が内の闇を追い出したのも間もなくである。

住居の整理、銘々がなす事を終えて最後にストーブに薪が勢い好く燃え出した頃には大沢生活最初の夜がもう谷間に、前のタンネにやってきていた、今夜は他人交らずの楽しい夜である。大和は今朝玉作を迎えに畠山から降って行ったのだった。

十二月二十八日

今朝もまた雨が降っていた。厳冬のしかもこんな高い所で雨、鳴沢の下辺りでは小さい雪崩が落ちていた。午後には雨も止んで美しい陽が谷間の雪を輝かし始める、一同スキーを滑らして鳴沢の出合に降りて、久しぶりに気持の好い滑降感をほしいままにする。キラメク針ノ木のアレートには静かに午後の陽を浴びて雪煙が立ち昇っている。三時頃谷の下からホーホーが聞こえて玉作と大和が登って来た、荷を背負って来たのは

スキーを穿いた大和だけで玉作は畠山へ荷を置いてきたそうだ。今の日本の冬山で期待する方が間違っているにしても今何とか考えてほしいものだ、せめて越中や蒲田の人達のように。

しかし小舎は賑やかになったが、また色々な仕事があの人達の手で為されるのを見ていると一種変な気持がせないでもない。

十二月二十九日　蓮華岳へ（行動篇峰の部参照）

十二月三十日

今日は友の一人が都へ帰ることになって淡い名乗りを惜しむ気が誰にもあった、だがまた鈴木君の隊が今日あたり畠山から登って来るのだ。舟田君が帰り行く後藤君を送って谷を降りた、その後を追ってただ一人冷たい谷間のしじまを破って畠山に向って心地好い滑降を続ける、扇沢の辺りから里の空が青く映えて見えたのもなつかしい。やがて小舎に近づくと中から賑やかな笑い声が聞こえてきてうれしくなる。

「迎えに来たよ、誰と誰が来たんだい。」

「ヨウ勇ちゃんしばらく、上の小舎は素敵だせ。」

「都からニュースを持って来たよ。」

など誰はばからぬ会話が交される。去る者、来る者、これもまた人生の一つの縮図と思えば枯林に一人消えて行った友の姿も淋しい。

それから登りの三時間、遠く鳴沢の台地から僕達の姿を認めて二人の友が迎えに飛んで来る。

鈴木、矢島、長谷川の三人を加えて小舎は一更賑やかになる。夕方からまた吹雪がやって来た、更けゆくまでストーブの周りに静かな語らいが続く。

十二月三十一日

吹雪、午後から吹雪を突いて後の林に出てスキーの練習をする。

スキーを走らす足元に、こんもりと雪を被った旧い小屋が吹雪くがままに荒らされて、見る者をしてよくもこんな小舎の中で旬日に余る籠城に耐え得られたものだと感じさせずにはおかない。中には思う存分雪が舞い込んで四囲の石積はひとしお黒く光って冷たい感じは身に浸みてくる、捨てられたものの淋しさ、雪は間断なく吹き積もって瞬くうちに新しいシュプールを埋めてしまう。見れば我らの小舎から吹雪の間に白く煙が立ち昇って、ゴウゴウと燃える赤い火のストーブが目の先に浮かんでくる。しかしこんな劇しい吹雪の中に居ても若人達の胸は燃えていた、たとえ練習とはいえ、これも登高への一つの営みと思えば、吹き来る雪粒をものともせず劇しい練習がいつまでも暗いタンネの林に続けられたのであった。

夜が来る、それは大正十四年の最後の夜である。あの冷たい小舎で行われたように今夜もまたこの新しい小舎の中をザイルやピッケルで飾って山人の心ばかりのザイルの祭りが行われる。補助具、我らを助けて永遠の歓びの栄光にまで導くもの、アルピニストが親しき命の親とも頼むもの、数々の尊き想い出の我らがザイルよ、淡き山ランプの光に映えるピッケルの輝きのなつかしさよ、一杯のコニャックの今宵の心好さ、そしてストーブを囲む人達の眼は光っていた。外には雪がサラサラと戸を撫でて過ぎて行く、誰やらの口から漏れし歌、それは悲しみのためかよろこびのためか、

オオタンネンバウム……

大正十五年一月一日

谷に林に蒼白き黎明の光は輝いて、夜半の寒さに目覚めがちな眠りにありし山人達の面にも今朝は喜びが輝いていた。雪に埋もれた大沢小舎にも今朝は春が来た。夜来の劇しい吹雪もようやく静まって、ただ向うのタンネの木影を掠め散る白き影、思いなしか今日の林の麗しさよ、ストーブの火も身にしみて暖かい。

一日ごとに埋まりゆく木々の姿、何日になれば登高の日がやって来るのか。それにしても今日あたりはまた都から遙遙（はるばる）とこの大雪を踏み分けて若い人達が登って来るはずだが、彼らのために好い路を開いてやらねばならない、また畠山に残して来た食糧も上げねばならない。そこで長谷川、矢島、西山の三君が畠山に向うことになる。降り行く三人の友を鳴沢の出合に送りてそこの台地に残りの者がまた劇しい練習を始める。

午後になると時々その台地から遙かの谷を眺めて、何度か首を長くして、もう登って来る時分だがと待ったのも久しい。親しい山友達の来着がどんなにか寒い丘に立って居ることを忘れさせたことだろう。待ち疲れて小舎へ辿り行く後から人の声、しかし登って来たのは今朝降りた三人だけであった。

夜、小舎の外は蓮華の肩にかかる清らかな月に明々と照らされて木影の闇に雪が独り静かにおちる、いよいよ明日は頂へ、その夜もまたあわただしい気分が小舎中に漂っていた。

一月二日

吹雪が来た、昨夜の夢も全く破られて時機の再来を待たねばならない。今日はまた外にも出られぬほどに荒れている。ストーブの影に物憂げな友の眼のみが光っている、火炎の踊り、こんな嵐の日にじっと見つめていると冷えきった淋しい人の心にどんなにか楽しく映るであろう。忍苦の底からよろこびが生まれる、単純な一日が暮れて闇に狂う吹雪の音が、心の火を掻き立てる。

一月三日

今日もまた吹雪で一日が暮れる。その吹雪を衝いて来るはずの人達を鈴木、近藤、大和の三人が畠山まで迎えに降りて行った。この日もやはり待つこと久し、友の残したシュプールも消えて粒を交えた吹雪が峰から谷へ、谷から峰へと過ぎて、わずかに頭を覗かせた岳樺のみがいたいたしげに打ちのめされて丘の彼方から悲しい声を立てていた。この大吹雪に面と向って登って来る人達は辛いことだろう。僕達も行ってやろう。吹雪の中に喘(あえ)ぐ友の姿が眼の先を行き来する。とうとう舟田、西山の両君と三人が膝をも没する深い雪を扇沢へと降りて行った。だが進むに従って吹雪はますますひどくすぐ眼の前に扇沢の林が見える辺りに来てはカットするのも容易ではなくなった。しばらく待ってみた、ヨッホーも繰り返された。我らの労力は無駄だったのか、姿はついに見えてこなかった。このぶんじゃ畠山で頑張っているのかも知れない、私達も帰ろう。再び小舎へと帰りを急いだのだった、しかし劇しい雪に私達のシュプールはほとんど消えようとしていた。これが低い山々の雪であったら我々はどうすればよかったろう。ようやく鳴沢に帰り着くまで随分時間がかかっていた。私達を認めて駆け来る友、連中はきっと畠山に居るんだ、心配は無用、小舎に帰って暖かいココアでも飲もう、吹雪、音、私達の心にはもしかすると若い人達を連れて登りに苦しんでいるのではないかとの考えが浮かんでくる。この谷のことだから路を間違えるようなことはなくとも、不安な気持が皆を提えていた。

しかしこんなことも間もなくにこやかな鈴木君の顔を降りかかる雪の中に見出して跡もなく消えていく、しかし今日も来るべき人達はやって来なかった。聞けば私達が途中まで降りた跡が一行の苦痛を救ったとのこと、吹雪々々、山頂に立つ日はいつか。

一月四日

雪は今朝も小舎の破風から劇しく舞い込んで来る。昨日掘った窓もまた埋まって小舎の中はいつまでも暗い、数ケ月前友の安田君と二人で大槍小舎に劇しい吹雪に閉じ込められた時のことが想い出されてくる。あの時の印象は今もはっきりと私の胸に刻みつけられている。

ここに着いた日の夕方の晴間に桃色に映える祖父があの窓から覗きこんでどんなに私達を喜ばしたことだろう。風の音、そして友の薪を切る静かな音がいつまでもつづく、この日も午後になると、今日も若い人達がやって来はしないかと思われて、舟田、矢島の両君と扇沢を越えて降って行ったのだった。冷たい吹雪の林の数時間、待ち佗びて空しく友を呼ぶ声を木魂に残して帰途に就いた。

鳴沢に帰って来ると友は皆元気そうにスキーの練習に余念がない、劇しい練習が終って谷に夕闇が来る時分、雪はようやく静まって小舎から漏れる淡い光に映えていた。楽しい夕食が済んだ頃、空には珍しく星さえキラメキ出して私達の明日の準備を促した。無駄かも知れぬ、しかし機会はそう沢山やってはこない、この機会を待てばこそこんな生活に耐えられるのだ。そして意義もあるのだ。たとえ我らの目的が山頂にあるのでなくっても。

一月五日

火も消え果てた冷たい夜半に起き出でて毎夜の如く天気を見て下さる舟田君に私達はどんなに感謝の心を持っていることか。今朝もそれが幾度か繰り返されたが、宵に見えた星はまた暗黒の幕にとざされて雪さえチラツイている、少々吹雪いて針ノ木の峠まで行けるとすれば、マヤクボのシャルテへ行くのも大した困難はないであろう。舟田、西山の両君と私の三人のパルティが鈴木君のパルティに先だって小舎を出る頃には谷はもう全く明けはなれて、雪もかなりに降っていた。ゴージを過ぎてマヤクボへの別れ路が近づくに従って吹雪はますます強くなり、ついに引き返すの止むなきに至った。ゴージの辺りで鈴木君のパルティに出会ってそのまま小舎へと帰って行った。

午後は鳴沢の台地を溯って緩やか傾斜に愉快なシュプルングを楽しんで帰る。鈴木君の一行はマヤクボのシャルテへまで行って帰って来る。明日は鈴木、矢島、長谷川の三君が都に帰ることになって夜はまた名残りをおしむ宴が、荒い小舎のストーブを囲んで開かれた。話は古い山旅のことにまで及んで夜の更けるのを知らなかった。

一月六日

夜来の吹雪に入口は埋まって不便な戸は容易に開かない。すぐ小舎の前のタンネも吹雪に霞んで夢のように見えている。数日の想い出多い生活を共にした人達が帰って行く、送る者の心に淋しく残る友の姿、吹雪の中に小さく消えて行くなつかしい姿は私の心に深く残される。この日は一日外へも出ない。吹雪、こんなにもよく続くとは、じめじめとした小舎の中にしかと強き登高の心もて抱き合う山人達の姿は何を語るか、家、親しきもの、都、そんなものを一切捨てて吹雪の中に結束する山人達、こんな時に浮かんでくるものは決して華やかな都のさざめきではない。それは私が小さい時分よく遊びに行った郊外のどこかの泥臭い小川のほとりに秋の日を浴びたいじけた蓼(たで)の花、どうしてこんなものが私の頭にこびりついていたかは私には判らない。家のこと、それもまた頭の中から離れはしない。かくしてまで私達は山に来なければならないのか。

一月七日　吹雪

一月八日　スバリ、針ノ木岳登攀（峰の部参照）

一月九日

私らはなすことをした、大沢もおさらば、吹雪の中をよろこびに満ちて山を降り行く四人をスキーは運んだ。後から輪カンジキで今日こそ元気な玉作がスキーの大和と降りて来る。半月振りの里の空、浅緑の空がどんなになつかしく感じられたことだろう。人達はやはり変らぬ生活を続けていた。

峰

蓮華岳　大正十四年十二月二十九日　曇　後吹雪

午前二時頃だった。

「天気が好くなりそうだ、星が見えているぜ」

薄暗いランプの光に戸口に立って空を見上げながらこう云う舟田君の姿が見える。

機会はこんなに早く到来したのか、軽い朝食が済んでいよいよ出かけることになったのは五時、しかし空はいつの間にかまた曇ってきた、舟田君は駄目だまた降るよと云う、玉作は大丈夫ですと云う、そのうちにとうとう雪がちらついてきた。まあいい峠まででも行って来ようというので小舎のすぐ上に続く林の中へ五人のスキーは軽やかに滑り出した、雪の起伏、林の木影、先頭の持つ山ランプは、かすかにちらつく雪を照らしている。やがてスキーは台地を降りて谷のしじまに静かなひびきを続ける、我らの所謂ゴージ、即ちあの両方から岩が迫って谷が細くなった辺りへ来る時分には、もう青白い黎明の光に辺りは明るく浮かび出してきた。このゴージは先日来の暖気のためにか大きな雪崩に埋められている、左右の沢から折り重なって、そして最後は谷全体に素晴らしいものである。厳冬にもやはりこうした大きなものが出ることを覚悟せねばならないと思われる、してみるとこの間の雨を伴った暖気は一種のウェツトフェンともみるべきであろう、

固く凝結した、怪しきデブリの泡立ち、その色、このためにコースの取り方に苦心を要する、一足ごとに悩まされて上部のやわらかな雪にほっとスキーを突き入れるまでには随分時間は経ってしまった。進むに従って雪はようやく深く、降る雪も風に送られて激しくなっていく、一面の雪、ただわずかに現われた岳樺のみが山腹とのけじめを見せているだけである。マヤクボとの出合の辺りからは傾斜もまたその度を増してくる、交互にカットする者の足もゆるくなっていく、峠はまだ見えない、上からは冷たい風が頬に吹きつけてくる、ようやく峠に近づくにしたがって道を左にとって進む。気づかっていた雪庇も去年と同じように蓮華側からと針ノ木側からとの二つの雪庇が重なり合っていて針ノ木によった方の二つの間を造作もなく登ることが出来た。時に十時、しかし我らが一歩峠に立つともう風も今までの穏やかさと一変して越中側からは身を切るような物狂わしい風が固い雪のつぶてを我らに叩きつけてきた。針ノ木側の岩影に一同の来着を待つ間、震える身体をおさえて激しい吹雪から逃がれなければならなかった。峠を過ぎ行く吹雪の唸り、山々は今静かな沈黙を破って、その恐ろしき猛威をたくましくしてたけり狂っている、山の生命は最後のものである、こうして冬が来れば、厳烈の氷雪に守られて自然はその尊厳を独り維持していく。人の世の変遷をよそにして、暖かきその塒（ねぐら）を離れて勇々しくも大自然の殿堂に歩み入るわずかな人達だけが永遠の自然の生命に触れ、山岳の尊厳にとけていく、感覚の世界から心の世界にまで。

ここに我らはどう仕様かということになった。後藤君、近藤君の二人は降ると云う、この荒れ狂う吹雪に我らは降るべきであったか、この急阪に滑降するスキーの快味、そして火のある小舎へ、それは当然であらねばならなかったのだ。そして我々は降ったか、ところが舟田君が云った。

「君はどうする」と。

「行ってみようじゃありませんか」と私が云うと、西山君も同意する、とうとう三人はこの荒れ狂う中を蓮華へと向うことにしたのだった。私達はあの時の舟田君に絶対の信頼を寄せていたからである。そしてこの自然の猛威に対して果たして我らがどの程度にまで耐えるかを知りたかったのだ。無謀ともいうべき我らの行為、自然はこの冒瀆者を許容してはくれなかっただろうか。

氷雪との戦い、心は怪しくも打ちふるう、吹雪はかすむ峠を蓮華のアレートへ、急な雪面にツィックツアックが続く、峠からの急な傾斜がようやくゆるやかになろうとする辺りの岩影に、三人のスキーは深く突きさされた。淋しく主人の帰りを吹雪の中に待つ愛するスキーにも心が動く、劇しき寒気にザイルを結ぶ手も自由ではない。再び進行は始められた。携えて来たアイゼンはそのままリュックの中にスキーと共に残して行ったのである、それは使わないですめば補助具はなるべく使わないでおこうということからと、あの嵐の中でゆるゆるとそれを締めていることは耐えられないことだったからである。広やかな蓮華の尾根は今まさに吹雪の乱舞の舞台である。匍うように、しかし強く凹凸激しき氷を踏み砕きながら三人の身体は上へ々々と突き進む、信州側に懸かる雪庇のけじめさえ定かではない。三人をつなぐザイルも横になびいている。強き風、氷粒の乱打、三人の手は期せずして顔を覆わぎるを得なかった。息詰まるばかりの吹雪を岩影に避けるのも瞬時、粉雪は岩を巻き、空に飛ぶ、この世のものとも思われぬ氷のうめき、ああ我らの登高の熱は強かった。グラスにはる氷、顔面の硬直、何ごとかを語る友の声さえ聞こえない。なお強きあゆみは頂へ、そして最後の小さき岩場。

我らはついに勝った。峠から一時間、この頂の氷に人間の最初の足は触れたのだ。平和な静かな登攀を想え。私らは厳冬のこの荒天に、そして無言のほほえみと固き握手とが頂に交されたのであった。風よ、雪よ、さらば蓮華よ、私らの心は今何物にか満ち溢れている。

晴天ならば真冬の山々の大観をつかみ得たであろう、されどそれにもましたものを我らはつかみ得たのだ。頂にあること寸時、我らは引き返さねばならなかった、身体は永らく頂の厳寒に止まることを許さなかったから、再び荒れ狂う吹雪の中を転ぶようにしてスキーデポートへ、もう私達の気分は楽になった。

スキーをかかえて峠へ、そしてさっきの岩影にほっと息をついたのだった。さっきここに登りついた時のここは凄いもののように思われたのに今のこの穏やかさ、蓮華の頂は夢か、ここは暖かだと言う声さえ発せ

られる。我らをしっかりとつないでくれたザイルも巻かれて暖かなリュックの中へ納められた。そして再びなつかしいスキーも足に、峠よさらば、スキーはおもむろに降りつもる新雪をやぶってマヤクボの少し上の岳樺の林にまで大きなボーゲンをえがいて行く、その樺の茂みにわずかに風を避けてパンとハムそして温かな紅茶との甘い昼食がとられた、元気は回復した。三人のスキーも軽くなった。小舎へ小舎へ、一しきり劇しくなった雪を衝いて心よき滑走がつづく、雪崩のデブリも過ぎた。そこから小舎の台地までの素晴らしき直滑降が苦闘の疲れを充分に医してくれた。タンネの森、小舎からは静かに煙が上っている。温かな火、いつもするようにヨッホがさけばれる。薄暗い小舎の中から、さきに帰った二人の友が飛び出して来る。

「ちょっと心配したよ、無事で好かった。先に帰って来て悪かったと想っていたんだ、ココアも作っておいたよ」

「ストーブに薪を入れよう」

山友達のみが持つ暖かな心、うれしくなって無心に固い固い握手が交された。

スバリ岳

鈴木君の一行が連日の吹雪に耐えかねて、とうとう山を降って行った後の小舎は再びもとの淋しさに返って、その日は終日外にさえ出られぬ吹雪に暮れてしまった。ストーブを囲んでの語らいもそうは続かない。大町を出発して以来ほとんど太陽の光を見ることもなく、毎日雪に明け雪に暮れる小舎生活の所在なさ、吹雪の蓮華の頂に立って来たのがせめてもの慰めか、今年の冬はもうどの頂にも立ち得ずして引き返さねばならないのか、それでも好い。しかし私達の目的が山頂に立つことでなくとも、何か知らぬこの物足りなさをどうすればいいのか、しっかりと結び合った山へのいとなみの心と心とが作り出した楽しい小舎生活を想い出として、暖かい陽のかがやく人里に降りて行かねばならないのか。

しかし吹雪はそう何日までも続かなかった。鈴木君等の帰った翌日の午後、とうとう機会はやってくるかのように思われた。今度こそは確実性をもっていた。国境線に沿った山々を数日さえぎっていた灰色の雪雲が美しくバラ色に変化してその影に微かに雪烟を吐く針ノ木のアレートが見え出した。明日こそ大丈夫だろう、今日は早く寝よう、その夜の小舎は賑やかだった。玉作も大和も急に元気づいて明朝の飯の支度に取り掛かっている。いつもするようにポジションを定めておこう、ザイルを巻こう、アイゼンは好いか、明日こそは山に登る誰もが感じると同じように、よろこびと一種の不安とに心は落ち着かない。せっぱ詰まったような緊張に眼はいよいよさえてくる。

舟田君が一人火の気の少ないストーブの影にまた物思いに耽っている。薪をくべよう、そして話し込もう。

一月八日

星は見えない、静かに雪がちらついている。駄目なのかしら、しかし何となく空一面に明りがある。出発だ。

谷の奥へ四人のスキーは黎明の薄光を受けて軽やかに運ばれて行った、まだ山々は曇って見えないが、沢は皆蒼く映えている。この前のデブリも今は全く雪に覆われてスキーを進めるのになんらの妨げとはならない。大きな丘の連続である。順にカットしながら全体の進行は不断に続けられて、マヤクボの出合には案外早くやって来た。ここはやはり予想の通り右方を登って行く方が傾斜もゆるく楽である。雷鳥の雛の啼き声が右の樺の茂みから聞こえてくる。しかし天気は次第に有望になってくる。上の圏谷に出る少し下の左の傾斜はかなりの急で、自分の重量で雪がずりそうである。コースの取り方に注意せねばならない。ここを過ぎるともう広々とした平らな圏谷である。そして私達はこの圏谷のスバリによった一つの大きな岩影に寒風を避けて、軽い第二の朝食をとった。

顧みればかすかに針ノ木の峠らしいものが遙かの下に現われてきた。

油に汚れた薄い労働服を身に纏った舟田君の姿が青く雪に映えて美しく動いて行く、針ノ木の岩壁はけずられたように白雪の中に所々黒いその肌を見せている、シャルテへまでの我らの努力は、それは大自然のかかる輝きのもつ威圧に向って反抗していくところのものであろうか、その尊厳に溶け入る胸の高鳴りこそ嬉

しきものである。プルファに突き入る一つ々々のスキーはこの広やかな圏谷に我らの高度を次第に高めていった。

そして越中側の峻壁を音もなく落ち舞う雪を見たのはそれから間もなくのことであった。このシャルテの固き雪にスキーを残してとの予想は見事裏切られたのであった。しかしこの裏切りはかえって我らから尾根通りに行く予想のアルバイトを除いてくれたのである。たとえ尾根通りに行ったとするも時間そのものが予想通りにはいかなかったであろう、信州側の雪の傾斜は我らを楽にかなりの高さにまで導いてくれるように想われた。困難の予想はむしろ楽なものに代えられたのだ。信州側の素晴らしい急斜面の、ほとんど方向転換をさえなし得ぬような所を私達は登って行った、頂へ、アレートへ。

アレートの固い氷についにスキーは登り詰めた、時に、午前十時、ほんの目の先に頂らしいものがかすかに見える、ついに頂上に来たのだ。そこでひとまず信州側の小さな窪みにスキーを脱いで、鋭きアイゼンとピッケルが取り出された、越中側の堅氷にアイゼンは気持ち好く喰い込む。そしてものの五分もかからずにその一つの頂に達することが出来たのだった。だが余りに造作なく達し得たことから、我らはしばしば茫然とせざるを得なかった。堅き握手、赤き旗を残して行こう、ところが誰かが「どうもこりゃ違うよ、一つ向うにあるらしい」と云い出した。見ると定かではないがそれらしいものが霧の中に隠見する、霧もこのぶんでは間もなく晴れようから、しばらく待つことにしよう、それからでも遅くはないだろう。そこで再びスキーデポートに引き返して昼食の仕度にとりかかることに定める。

ギッフェルの憩い、私達はそこでかなりの時間を過ごした。コッヘルに温かなズッペも出来上った。さあパンを、その頃だった、太陽はついに半月ぶりの輝かしい光を雲間から覗き出してきた。紺碧の空の下に白銀の山々は輝き出した。おお太陽よと叫びたくなってくる。もうパンのこともズッペのことも忘れてアレートに飛び上って行く者がある。

「立山が見えるぞ、スバリも見えた」

さあじっとしては居られない、我れがちにと駆けだして行く、剱、雄山、さては五色にと真冬の山のきらめきは目ま苦しいほどに迫ってくる。長次郎の岩小舎も、そして五色の小舎もはっきりと見えている。黒部を挟む低き山々は全く白化されて美しくも奇しき氷林を現出している。雪烟上る遠き山々のうねり、蓮華のにくらいしほどの落ち着き、この間のことは夢か、嵐は今ここに行ったか、あの氷はる岩影によろめきもがいたことも今は過去のただ想い出か、その山影からは青々と横たわる安曇野が見えている。屠蘇の香りに酔いしれる里の春、明日の日の糧に追わるる人達の生の営み、それらをよそにしてかく努力する登高のいとなみもまた人の世の一つの存在か、しばしこの大観をほしいままにして、再びパンにと帰って来る。

スバリの頂へさっきの一つの峰をからんで頂の直下にやって来た。そこから頂までのほとんど直立の雪面を真直ぐに登りつめるこの傾斜は急に籠川に落ち込んでいるためかかなりの緊張を伴った。ベルグハイル、ベルグハイル、嵐の日の登攀、そして今日のこの登攀、初登攀にも似たるこの歓びを無理なものと云えようか、真冬のスバリはもう完全に私達のものになったのだ。

ここから見る赤沢のアレートは刃物のような凄みを持っている。それにのぞむスバリの断崖は恐ろしき氷と雪をつけて聳え立っている。おそらくこの間の真冬の通過は不可能であろう。しかし赤沢、鳴沢のもつ鋭き雪稜の魅力の強さよ、この不可能とさえ思われる氷雪もまたいつかはベルグシュタイガーの燃える如き登高の焔に溶ける日が来るであろう。暫時にしてこの頂を辞してスキーデポートへ、そしてそこから針ノ木とスバリの間のシャルテまで、落ちるように四人のシュプールは入り乱れる。

針ノ木岳北尾根

スバリから見た針ノ木の雄姿はまた立派なものであった。灰色がかった越中側の峻壁、オレンジ色をおびた頂の雪の輝き、シャルテへ降りて来た私達がどうしてこれを見逃がして降って行くことが出来よう。時間の余裕も充分にある。針ノ木の北尾根へ、そして舟田君にとっては懐かしい想い出の頂への二度の訪れ。

シャルテを少し登った信州側の岩影にスキーを残して、ゆるやかな雪の傾斜を越中側に出て、氷雪にきら

めくアレートの影に沿って登って行った。スバリからはかなりに急に見えていたが、取り付いてみるとそれほどでもない。しかし下方は深い氷谷であるから注意せねばならない。吹き上げる風に怪しく突起した氷は、この登攀を心好きものにしてくれる。頂上近くのほとんど氷化した急傾斜の雪面を二個所ばかりかなりの緊張をもって横切れば、すぐ頂に続く小さな雪庇の下に出た。その中ほどの低い部分を少しカットして登れば、もうそこは針ノ木の頂であった。真冬の太陽は暖かき光を、そして山も谷もやわらかにその下に輝いていた。スバリの雪に我らのシュプールは白銀の美しき線をなして我らの登高を讃えている。東尾根はまるで薄刃を連ねたようである。その一刃々々から静かにかげろうのように雪が巻き上っている。思えば去年の登攀のいかに困難であったであろうかということである。舟田君の感慨もまた深いものであろう。その時共にした小笠原君は今東北に遠く離れてあらず、来たるべき藤田君も来なかった。十数日の健闘に酬われて今なすべきことをなし終えた時、舟田君の胸中いかなるものがあろう。人は去り星は移るとも山は永久にこの厳冬の輝きを失わないであろう。頂の雪に心あらば、今ここに立ちし自分の姿もまた永久にその心から消え去ることはないであろう。

「さあ帰ろう」

降りはアンザイレンすることにして、近藤、西山、四谷、舟田の順に雪烟吹き飛ぶ頂を辞した。急傾斜も無事に、スキーデポートへ足はよろこびに満ちて軽く走って行く。

さてここからあの豪快なるスキーの滑降は始まるのだ、広い圏谷の雪に気持好きシュビングが続く、小舎へ、そして明日は人里へ出るのだ。もう本谷だ、近藤の姿が遙かに小さくなってしまった。耳をかすめる雷鳥の啼き声、岳樺の枝からは音もなく雪が落ちる、明るき谷にスキーアルピニストの活躍舞台は展開する。よろこびに輝く子らに針ノ木の連嶺は静かに沈黙のほほえみを投げかけている。細き急阪に続くシュテムボーゲンもまた楽しきものである。戦いの終りし日の午後の長閑(のど)かさ。

明日はいよいよ人里へ、数多くの収穫を携えて帰り行こう。また訪れる日を楽しみに想い出多き大沢小舎にも別れを告げよう、夜になるとまた静かに雪が降り出した。ストーブを囲む今夜の語らいのいかに楽しきことよ。

吹けよ、荒れよ、明日こそ都へ帰り行くのだ。

【付記】大沢について、この谷から蓮華への発路はスバリを済ました日の夕方舟田君と少し登ってみたが、やはり予想の通りだとしか云い得ない。二俣まではそう時間を要さないが、それから上方は曇ってはっきりと見えなかった。しかし見える程度の所まではそう傾斜も大したことはなさそうである。雪量は準備のところに述べたように多いことだろう。ここを登るとすればそれが最も重要な問題だろう。しかしこの登路の開拓せられるのもそう遠いことではあるまい。

赤沢について、この沢は鳴沢、赤沢の多くの沢を集めて大沢の少し下方にて本谷と合しているもので、或る吹雪の日、一キロばかり右岸の台地を登ってみた。その結果、あのせまい籠川谷にもこんなに広いゲレンデがあったのかと驚いたのである。山岳スキーの練習地として、しかもアルペンの雪に朝夕接し得るという点において、この台地と大沢小舎は価値のあるものであろう。そしてこの台地はかなりの上部まで続いているらしい。少し右へ曲って、最後に急でかつ迫った沢となって鳴沢のアレートに達している。これを登るか、ずっと右の方から沢の上部に出ている尾根に出てそれを登るかであろう。かくしてこの沢からの登路も大体の見当はついたのであるが、アレートに達する急な辺りはかなり研究を要することと思われる。雪積の(原文ママ) 多量であることと、かつ春季この沢から恐ろしく大きい雪崩が出ることからしてである。いずれにしてもこの登路以外の沢はもっと奥へ入ってみない限り私の行って来た辺りからは不可能かと思われた。今年もまた第三回の大沢入りの計画が行われていることだからこの方面に多くの収穫あらんことを希っている。

8　広瀬忠三・森田勝彦・江口新造　「第三回大沢小舎生活 ―当時の日記と記憶から―」

『日本登山記録大成』第 12 巻 白馬・後立山Ⅱ
1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『リュックサック』第 6 号（早稲田大学体育会山岳部、1928 年)〕

要　約

1927（昭和 2）年 1 月 6 日の記録。

メンバーは、近藤正、山本勘二（以上、早稲田大学山岳部)。森田勝彦（同）も同行したが途中で待機し、登頂はしなかった。

行程は、大沢～鳴沢～鳴沢岳。

同部による第 3 回目となる大沢入りの厳冬期登山。一行は、1926（昭和元）年 12 月 31 日に大町を発って畠山小屋泊、年を越した翌日の 1 月 1 日に大沢小屋へ入り、1 月 9 日まで 9 日間滞在し、同日に大町へ戻っている。上記の記録は、その間に行われた登山で、森田勝彦が報告を記す。

なお、大沢入りした一行は、上記を含めた同部部員等 12 人のほかに、ポーターとして、大沢小屋まで有明の案内人・大和由松、畠山小屋まで大町の案内人・勝野玉作と黒岩直吉が同行している。

※鳴沢岳積雪期初登頂。

四谷君の周到な準備と計画によって今年も雪の大沢に旬日を送ることとなり、すべての準備は葉末黄ばむ初秋の頃から運ばれて、小舎生活に対するもの、沢から峰へ、尾根から頂へのすべてのルートに対する準備研究もただ時の来るのを待つばかりとなった。コースについて述べるなら大沢小舎を中心としての所謂放射状的登山の完成という要素が多分に含まれるものであって、スバリ岳、針ノ木岳は去年の舟田君のルートをそのまま用い、蓮華岳へは峠から達する昨年のルートと新たに大沢を登路とするものが挙げられた。大沢については昨年吹雪の中を再三調査され、途中から二俣に分れている右の方即ち西側の沢を登ることが適当なものとされていた。その他、籠川谷のゴルジュと大沢との間から蓮華のアレートへ通ずる赤石沢もあるがこれは余り考慮されていなかった（しかし偶然にもこの年仲間の者によって成し遂げられたのは喜ばしい)。

この年四谷君が最も重要視して目指した頂は祖父岳と鳴沢岳とであった。登路にはどこを取るべきか？鳴沢岳へはやはり昨年充分な観測を成し遂げた鳴沢の本谷を登り鳴沢岳と赤沢岳とのアレートへ出るか、または鳴沢岳の頂を目指して、直接に登攀するかであった。またこの鳴沢岳の他に赤沢岳、岩小屋沢岳への登路を熟慮した。これらの頂やアレートにおいては雪庇も相当出来ていることであろうし、また岩石も巍々としているのでザイルテヒニークが多分に使用されることを予想していた。大沢小舎から祖父岳へは距離は相当にあるが勝手知った籠川谷を下って扇沢を登れば単に所要時間を問題とするだけで、さしたる困難なしに頂に達せられることであろう。いずれの沢においても遭遇する天候と積雪量とによって我々のプランは左右されてしまうという予測は勿論充分に持っていた。

この第三回大沢生活の持つ目的は、単に頂を目指すというのみならず、山岳スキーテヒニークの練習及び冬季登山に対する部員の訓練ということも多分に含まれていた。小舎に対する用意も秋の頃から準備され薪も寝具も前年の通り充分に調えた。食糧、器具も遺漏はない。人夫も有明の大和を炊事にという約束も出来た。これらはすべて過去二回の小舎生活によって得た経験と調査によって立てられたプランなることは勿論である。

参加者　リーダー四谷龍胤、長谷川荘吉、近藤正、森田稔、森田勝彦、広瀬忠三、家村貞治、山本勘二、江口新造、木津誠一、鈴木勇（先輩)、二出川勝（友人)

人　夫　大和由松、勝野玉作、黒岩直吉（勝野、黒岩は畠山まで)

十二月三十日（昭和元年）鈴木、長谷川、森田（勝）、家村の四君は既に東京から大町に我々の来るのを待っていた。一行のリーダーたる四谷君は関温泉における練習中、家庭の事情で一時帰郷され数日遅れて入山することとなった。関温泉の練習を終えて一行は高田から来る森田（稔）君と汽車を待ち合わせて大町へ向った。天気は良い。松本でいくらかの食糧を調えて黄昏近い頃対山館の人となった。

三十一日　晴　町はずれの女学校の前から、あの荷を運ぶ電車に乗って大出に着いたのは、九時半であった。人夫の玉作、直吉の背には十日分の食糧が結ばれている。大和を入れて十二人は追風を受けた帆のようにふくらましたリュックを背にして傴僂（せむし）のような格好をしながらスキーを滑らして行く。積雪の状態は非常に好く輪カンジキを履いている玉作や直吉も苦労なく後からついて来る。照りつける陽は汗をにじみ出す。ヨセ沢の手前と白沢とで一行は中食を摂った。案外時間が早かったので白沢では、一時間余もスキーを滑らして遊んでしまった。それでも畠山の小舎に着いたのは三時二十分。

この大晦日には、今までは大沢の小舎でザイル祭を行っている。今年はまだ畠山の小舎だ。大沢へは明日でなければ着けない。よし今年は目的の山々を極めた後に行うこととしよう。短い昭和元年の最後の日は風もなく静かに山の小舎に暮れてゆく。

一月元旦　雪は降らないが曇っている。食糧の幾分かを小舎に残して大沢へと向う。森の中をほとんど夏道通りに扇沢に着く。祖父へはここから行くのか。沢は随分深く入っている。かなり時間を要することだろう。朝早く帰って行った玉作らはもう大出へ着いたか知ら。さあ行こう。小舎を掘り出さなければならないのだから。

一時近くに憧れの小舎に着いた。埋まっている程度は昨年とほぼ同じであるとのこと。南側の入口を掘る者、屋根の雪を落とす者、誰も労力を供するに惜しむ者はいない。室の整理も終った。ストーブも真中に据え付けられ、はや勢い好く燃え出した。これから旬日この小舎に起伏するのだ。

あんなにこのヒュッテレーベンを口に唱え、この日の来るのを千秋の思いで待っていた四谷君の居ないのが淋しい。大阪に居る彼は今頃必ずこの大沢を心に画いていることだろう。

スバリ岳へ針ノ木岳へ

二日　晴　「天気だ！　上天気だ」谷ではまだ暗い朝の五時頃誰かが叫んだ。冬山においてはまたとない好天気。過去二回の大沢生活でこのような天気に恵まれた時がただの一度でもあったか。機会は去りやすい。峰へ行こう。

十一人のスキーヤーが小舎の後のタンネの森から軽やかに谷へ滑り下りたのは八時に間近い頃であった。交代にラッセルをして、幾度かなされたキックターンの後、マヤクボのテラスへ出ることが出来た。空には一点の雲もない。蓮華、針ノ木、スバリの接空線はクッキリと青空を切り破ってまばゆく輝いている。頂は風が強いのか、黒部側から吹きつける風で盛んに雪煙を立てている。早く頂へ立とう。十一人のスキーは再び一斉に運ばれて行く。広やかなマヤクボの谷を右方にコースを取って、スバリ岳を目指して一歩一歩高きへ進んで行く。スバリと針ノ木とのシャルテを下に見る頃からは傾斜はかなり急でややもすると自分の重量で雪はずり落ちそうである。否、一、二回小さな表層雪崩を起したくらいであった。体重のバランスを失うようなキックターンが幾度か繰り返されてついにアレートへ出た。越中側から吹きつける風を岩かげに避けてスキーをアイゼンに履きかえた時はまさに正午であった。

アレートの雪は固くクラストしている。所によっては青い氷の形状すらなしている。一歩たりともゆるがせに出来ない歩みによって、鈴木君、近藤君らを先頭にアイゼン、ピッケルの響き勇ましく十一人の若者は頂へと運ばれて行く。越中側の斜面はマバラに雪をまとった岩石によって深く黒部の谷に落ち込んでいる。雄山、劒の峰々は白衣を纏って指呼の間に整然と立っている。毎夏ザイルを肩に三田平から一日のアルバイトとして喜ばれている八峰の岩々も今はただ白く輝いているのみだ。長次郎の岩小舎も雪の下に埋もれているか。すぐ眼の下でタンボ（原文ママ）沢を右に分かち左に曲りくねった長い沢は御山沢。五色ヶ原のゆるやかなスロ

ープはシーロイファーを待っているような顔。暗い黒部の谷底から天高く一点の雲もないアトモスフェアーの中に白いすべての沢谷、すべての山峰は平和な新年を迎えている。頂に立った。スバリだ。十一人は堅い握手を交し山頂の唱を叫び赤沢岳、鳴沢岳のキラキラ輝いている雪庇を後にして、頂を辞しスキーデポへ。軽やかな昼食の後、愉快な半制動はひと辷りで針ノ木岳とスバリ岳との間のシャルテまで運んでくれた。

針ノ木北尾根。

再びアイゼンは堅く靴に結ばれた。スバリ岳から見た時はかなり急でアイゼンを要するかの如く見えたが、とっついてみればさほどのこともない。夏ガラガラしたあの岩々は氷で固くコンクリートされて、鋭いアイゼンの歯は気持よく確保してくれる。ただ、底知れず落ち込んでいる越中側の傾斜は登行する者を強く緊張せしめる。頂上近い急傾斜を登り、小さな雪庇を信州側からカットして登れば頂上である。

厳冬に三度我が部員によってこの針ノ木の頂は極められた。過去二回共、登れる者は皆幾日か吹雪と闘い幾多の困難な労苦の後、頂に立ったのであった。それに引きかえ今年のパーティは何と恵まれたことか。しかも昨年一度登行されている近藤君によって、勝手知ったるルートに我々はなんら頭を悩ませることなしに登行し終えた。年の重なるにつれこの大沢小舎に入る者は先人の労苦を忘れ去るのではなかろうか。

森田（勝）君は独りナイフの刃のように鋭く峠へと連なり下っている東尾根を見下ろして感無量の態である。先年舟田君らとザイル、ピッケルで闘った尾根はあれか。今は同じ頂に立って、吹雪の過去と今とを思い合わせる時、君の胸中に何物が映ずる！　人変り時移り吹雪あり雲あって眺望時に変るとも永久に彼の脳裡から消え去らないものは、この三角点ではあるまいか。

尽きざる名残りに彼の袖を引き白く輝ける蓮華岳に見送られて、頂を去ったのは二時。無事にスキーデポに帰りピッケルとアイゼンをリュックに納めたのは、それから十数分の後であった。

近藤君は既に雪烟の中へ消えて行く。続く十人いずれも緊張したシュテムボーゲン、広やかなマヤクボに幾条かのシュプールが乱れ残る。日脚の短い冬の陽はもうスバリ、針ノ木の陰となった。本谷との出合に来たのだ。近藤、森田（勝）の両君はもうゴルジュの上辺りを滑っている。皆は彼らを追った。プルファーな雪はスキーヤーを心から満足せしめる。

紫色の煙は小舎の窓からゆるやかに立ち昇っている。大和のもてなす温かいココアに十一人の山の友達が渇をいやしたのは丁度三時であった（スバリ、針ノ木については四谷君が第五号に発表している故、参照されたし）。

三日　今日も好い天気だ。正月の山としては珍しく続く。何だか冬のような気が少しもしない。昨日アッサリと一山なし遂げたので今日は残りの食糧を取りに六名（森田稔、広瀬、家村、二出川、山本、江口）で畠山へ下ることとした。鳴沢の少し下で独りとぼとぼ登って来る人がある。四谷君だ。いたたまりもなくやって来たのだ。堅い握手が交され、昨日の成功を心から喜んでくれた。これでパーティは全部揃った。彼の周到なプランはこれから優秀に展開していくことだろう。夕刻近い頃落陽に照り輝く祖父に送られて小舎に帰った。

静かに夜が更けていく時、小舎の中ではストーブを囲んで明日蓮華岳へ行くプランが立てられた。一隊は峠から、他の隊は大沢を登るものである。

四日　曇後風　今日は幾分厳冬らしい気分だ。自分は峠から蓮華岳へ行く予定であったが、風邪に罹（かか）り一人小舎に滞在することにした。六時過ぎる頃、四谷君の隊（彼、鈴木、近藤、長谷川、森田稔）は大沢の奥へ消えて行く。森田君の隊（彼、家村、山本、江口、木津、二出川）は九時頃峠へと登って行った。大和も昨日アルペン式のスキーを履いて、大町へ食糧を補いに行ってまだ帰って来ない。雪は伴っていないが峠から吹き下ろす風は小舎の上で物凄く唸っている。無事に頂まで行ってくれればいいが。ことに大沢を登った者は未知のコースでもあり狭い谷で雪が深くて困難しているのではなかろうか。一時前に小舎の上で「ヤッホー」と声がする。帰ってきたな。風のために峠から引き返してきたのだ。温かいココアで彼らの努力をねぎらってやろう。もっと美味しいものがあるなら充分に与えたい。しかし不自由な山小舎だ。これで我慢

してくれ。夕刻には大町から大和が餅菓子でも持ってくるだろう。四谷君も程なく引き返してきた。聞けばほとんどアレート近くまで行ったらしい。風さえ強くなければ頂へ達せられたものを。しかし貴い努力だ。それだけの調査の後には必ず来たるべき年にあの沢も成し遂げられることだろう。

五日　晴　昨日のアルバイトに対し今日は休養の一日と定められた。朝のうちは少し曇っていたが次第に天気は好くなってきた。プロムナードとばかりに正午少し前に鈴木、長谷川、森田（勝）、二出川、家村の五人と大和は籠川谷を登って行った。残った者はそれぞれ大沢の台地でスキー練習をしている。プルファーな雪は日の暮れるのを忘れて我々に愉快な練習を与えてくれる。関温泉辺りで出来ない技術もここではやすやすと出来る。このような雪質のゲレンデが交通便利な所にあったらどんなにか多くのスキー家に喜ばれることであろう。ここに来ている我々は幸福だ。

今朝出て行った連中は小舎にランプが灯される頃になってもまだ帰って来ない。どこへ行ったのだろう。赤石沢を登って行くのを見たと云う者がある。天気の好いのに誘惑されて頂まで行ったのかも知れない。四谷君は、ラテルネを灯して出迎えに行った。

「どこまで行ったの」小舎に帰ってくるや否や、帽子も取らない彼らに聞いてみた。

「御心配かけました。最初峠へでも行くつもりだったが、赤石沢を登ってみたくなったので登ったのさ。思ったより愉快だったよ。かなり急だけれど随分スキーで頑張って二俣を右へコースを取って行った。途中でスキーを脱いでアレートへ出た。そこで頂まで行った。槍が夕陽に照らされて素敵だったよ」

誰もアイゼンを持って行かなかったのでネールドブーツの森田（勝）君はクラストしているアレートでは優秀に展開したとのこと。あのような広い尾根ではアイゼンよりネールドブーツの方が制御しやすいかも知れない。本文の『赤石沢』参照。

蓮華岳へ

六日　晴　四谷君の鋭い予感によって、今日快晴なることが昨日のうちに見定められ、森田（稔）、家村、本津、二出川、広瀬の五名は峠から蓮華岳へ行くこととなりすべての用意は昨夜のうちに整えられた。比較的コースの長い四谷君の隊は六時を過ぎる頃、扇沢へと姿を消して行った。いつも北側の窓から眺められる祖父岳は今朝も相変らず朝日に照り輝いている。あの頂に四谷君らの立つのは何時頃か。ストーブはまだ赤々と燃えている。

「近藤君、それでは夕方コニャックを汲み交しましょう」

互いの成功を夕方、またこのストーブの前で語り合うことを約して上下にスキーを別ったのは七時四十分であった。四日前スバリ岳に行った時と雪のコンディションはほとんど同じであった。むしろ一昨日の風のためか雪はしまって、登行しやすい。勝手知った籠川谷にスキーは一歩々々と高きへ身を運んでくれる。マヤクボの出合から上は谷も狭いし、傾斜も急である。見馴れた祖父岳、岩小屋沢岳、鳴沢岳は暖かそうに思いきり良く陽を受けている。森の上の鳴沢を三ツの黒点が規則正しくジッグザッグを折りきざんでいるのは近藤君らのパーティだ。「ヤッホー」と叫んでみたが、静かな谷に山彦の余韻が後を引くだけで返事がない。呼び交すには、余りに距離があり過ぎるのか。

峠には信州側に向って、雪庇が形成されていた。しかし針ノ木岳寄りから、これを避けて登ることが出来る。丁度小舎を出てから二時間半の後、十時十五分に峠に五名のスキーはささされたのである。蓮華岳への尾根は広いしベットリ雪はついているので、もう少し上までスキーを使えば使えないことはない。岳樺も所々に生えている。アイゼンはつけたが靴の上まで、もぐる所もある。最初の急傾斜の所を登りつめると雪の少ないガラガラの所に出た。これを過ぎると尾根はますます広く赤石沢を左に見下ろす辺りは雪原をプロムナードしているかの如くにさえ思われ、厳冬の北アルプスに立つ身を怪しまずにはいられなかった。昨日、森田（勝）君らはここを登ってきたのだ。幾つもの足跡は入り乱れて、昨日の記録を物語っている。下の方は見えないが、ゆるやかそうな傾斜だ。案外気楽に登ったのではあるまいか。しかし上部がゆるやかな、楽そ

うな沢で下方が滝やタルになって困難する経験は山の男にはよく持ち合わせるものであるから、この沢もご多分に洩れず所々に急傾斜な所があるのかも知れない。

赤石沢と大沢とを区分する尾根を派生している辺りからは幾分アレートも狭まり、また信州側に向って、小さいながら雪庇をなしている。クラストしている雪面にアイゼンは気持よく食い入る。

三角点の標石を中心に五人が車座になって、コッヘルに雪を溶かし、紅茶を入れ、ソーセージに黒パンをかじり始めたのは十一時半過ぎる頃だった。

風はない。勿論一点の雲影すらない。文字通りの日本晴だ。浅間山はまだ老いず煙をはいている。頸城の山々も一目の大気の中に遠く静かに座している。すべてが白い。旬日前多くの友らと頂に立った神奈山は妙高の影か。祖父岳と岩小屋沢岳との間に見えるは鹿島槍、そして白馬で、厳冬のパノラマは赤沢、スバリの間に劒を、マヤクボの上に立山を、そして薬師から槍へと展開していく。この厳冬に幾組かの山の男が頂の喜びに浸っていることだろう。祖父、鳴沢の頂では、今時分我らの仲間が「ベルクハイル、ベルクハイル、ヤッホー」と叫んでいることだろう。藤田君は前穂の頂で舟田氏と握手を交しているのではあるまいか。陽炎の中に薄黒く沈んでいるのは、大町の里であろう。数日後にはあの町の人となるのだ、慎太郎さんは我々の成功を聞いたら心から喜んでくれるに違いない。

陽に輝ききっている扇沢も今日は仲間の者によってルートは印せられただろう。岩小屋沢はブッシュが多いのみならず、急傾斜の上部には岩石が現われている。大沢小舎より日帰りとしたならば鳴沢にコースを求めるより外、岩小屋沢岳へ行くルートはあるまい。それにしてもあの雪庇と闘い岩石にザイルを結びつけなければならないことだろう。また赤沢岳へも、それと同じようなアルバイトを支払わなければならないだろう。今年のように天気が続くならば峠から針ノ木谷に下って平の小舎に一泊して、御山沢でも登って室堂へ出るのもさしたる困難なしに行われるのではないか知ら。蓮華から七倉への尾根にはベットリと雪がついている。所々に岳樺が生えているらしい。眼の下の大沢は一昨日、四谷君らが奪闘した沢だ。下から見ると左右二ツに分れているが、いずれもこの頂に直接来ているのだ。上から見て、左の沢の方が比較的広く登行しやすいように思われる。しかし谷は狭くて傾斜は急であるからスキーによってのこの沢の登攀はかなりの困難を伴うことであろう。

暖かい春のような陽は我々を頂から帰らしめようとしない。先年舟田、四谷両君らはこの頂に幾瞬間立ち得ていたか。同じ正月の蓮華でありながらかくも異なるものか。さりとは恵まれた我々だ。

三十分の後再び峠に着くことが出来た。さあこれからまた愉快なボーゲンだ。雪庇から下りるや、もう転んでいる者もある。幾つかのスプールは入り乱れて谷底深く刻まれていった。いつもするように小舎の上のタンネの丘で「ヤッホー」と叫んでみた。それに答えるのは大和の声。「ああ愉快だった。行って来たよ」四谷君も近藤君もまだ帰って来ない。時計は一時半。

全員三隊がそれぞれの頂から帰って来たその夜、ザイル、ピッケル、アイゼン等を飾り付けて例のザイル祭は行われた。四谷君の口からは彼の脳裡に深く蔵されている冬山に対する抱負が泉の如くわき出てくる。夏山のように毎日続いた好天気は今後幾度、この小舎を訪れてくれるのか。

冬山においてはアブノーマルな天候、しかし山の男にとっては逃がすべからざる機会、その間にあって自分達のプランは目まぐるしいように展開されていった。多年の宿望の放射状的登山もかなり完全に近いまでに行われた。

四谷君よ、今年の君のプランに対して心残りはなかろう。大きなカップにつがれたコニャックは、心の合った友の口から口へと廻わされて行った。

祖父岳は本文の記事『祖父岳』参照。鳴沢岳は本文の記事、森田君の『鳴沢岳』参照。

七日　曇　森田（稔）、二出川の両君が故郷へと大沢を去って行った後、一同は思い思いにスキーの練習を始めた。大沢の台地から一気に滑る直滑降の味は我々仲間にのみ許されるものだ。元気な二、三人は、ゴルジュから思い切った滑走を続けて来る。四谷君と江口君は、岩小屋沢を登ってコースを調査して来た。

八日　昨夜のうちに降り出した雨は早朝雪と変り風さえ加わってきた。隙間から吹き込む風は室に雪を積もらせる。皆ストーブを囲んで物思いに耽っている。過去二回の大沢小舎生活はこのように吹雪で明けて、そして暮れてゆき、わずかな時間を利して、頂へと目指したのだ。それに引きかえ今年の我々はどうであったか。夏山のように慌しいばかりの登行が、それからそれへと繰り返された。これが真に自分達にとって幸か、不幸か分らない。

四谷君は吹雪の中をコース調査に出かけて行った。まだ岩小屋沢岳と、赤沢岳とは残されている。来年再びこの小舎を訪れてもこのような天候には恵まれずに、しかも一の頂へも達せられないかも知れない。がしかしまた、来たるべき年の目的にと残しておくのも良かろう。

吹雪の夜が更ける頃、灰色の都へ帰る話がまとまった。最後の小舎の夜であると思うとわずか十日たらずの生活ではあったが去り難い感がする。心から愛別の辞を捧げよう。

「さらば小舎よ、永劫に幸福なれ」　（広瀬忠三記）

赤石沢より蓮華岳へ

私達があの沢を登ってみることに関しては初めから予定もしていなければ、また正直なことを述べるとあそこにあんな沢があることを私は知らなかった次第です。どうしてそんな沢を登ってみる気になったかと云いますと、一行全部が大沢小舎についた翌日針ノ木とスバリに登りました、その行きがけに遅れて小舎を出た鈴木氏とあの赤石沢の下を通りがけに、「鈴木さんこの沢を登ったら蓮華の頂に近そうですね」と話しながら通った。その翌日は年報にも示す通り一行は二隊に分れて四谷氏が大沢を登って蓮華へ、私達は峠から蓮華へと向いましたが、天候の関係で途中から引き返すの余儀なくさせられてしまいました。その翌日は連日の登高でくたびれたため晴天にもかかわらず安息日と決めました。しかし余りの好天気のため十一時頃から、昨日失敗したコースを、と思って同行者を求めて出掛けることにしました。大和も常に小舎に居て私達の食事の世話や薪切りばかりなので、今日は一緒に行くことにしました。いつも早出の二出川君は私が本谷に出た時はかなり上まで登っておられました。一人黒い姿があの谷を通っているのを見ながら登って行きました。

赤石沢の下まで来た時振り返ると最後に出た大和が、ようやく台地から本谷へ降ったばかりの所にいます。フト見上げると行きづまりのような沢が出ています。急に先日の話を思い出し、登ってみたくなって鈴木氏に相談すると行ってみようと云う。長谷川氏も同じ返事。それで急にコースを変えて赤石沢から登ることになりました。これが赤石沢を登ることになった所以であります。

赤石沢と申しましても御承知のない方が多いだろうと思います。私達も大沢小舎の十日間を終えて大町に出て尋ねるまでその沢の名を知りませんでした。多分蓮華沢とでも云うのだろうくらいに思って百瀬氏に聞いて初めてその名を知った次第です。大沢小舎の在る台地から所謂針ノ木の雪渓に下って二十分も登ると左側即ち蓮華から一つの沢が出ております。取付は大沢よりよほど急で、ちょっと見ると行きづまりのような沢です。それが赤石沢なのです。

その登路は実に簡単です。本谷から見上げて一番高い所に見える所で沢がいわば三つに分れています（下から見上げれば右側の沢は見えません）。その右の沢を選んで真直ぐに登れば尾根に出てしまいます。別に述べることもありません。傾斜は前日大沢を登られた人々の話によると大沢ほどのことはないし、大沢よりずっと広いと云われていました。

一行の用意は実に杜撰（ずさん）極まるものでした。アイゼンもピッケルも誰一人持って行きませんでした。初め峠から尾根伝いというつもりであったので、尾根伝いなら、きっと廊下が出来ていると思っていましたから、靴だけでスキーの両杖を一本でも持っていれば結構と思っていました。また防寒具も峠までは一時間半で行くから峠から蓮華の頂まで往復二時間半としても、四時間半には小舎に帰って来られると思ったので着のみ着のままでした。だからリュックは大和と家村の二人が持っていて、それにわずかばかりの黒パンが入って

いただけです。

私達は好い気持でトボトボと登って行きました。今日は是非とも頂に立たねばなどとも考えていませんでした。気の向くまま足の向くままに歩いているのです。この沢は穂高や劔のように鋭いところは少しもありません。出合から尾根まで見通しの出来る雄大さもありません。しかしなんとも云えぬ暖味、換言すれば深い親しみを感じさせてくれます。太陽は春のような光を投げています。どこにも冬という感じはありません。ノンビリとした静けさが満ち満ちています。私達が針ノ木峠と同じ位な高さに登った時にはもう太陽は大分西に傾いていました。針ノ木の東山嶺の上に劔の頭が夕陽に映えて赤く輝いておりました。後立山の山脈も次第に見えてきました、黒部側は盛んに雲がわいています。それでも何時頃だろうと時計も見ず、帰らねばならぬとも考えませんでした。登るに従って次第にクラストも堅くなってきました。尾根が見え出し傾斜が急になってきたので左側のザイテングラートに取り付きました。

そこへ来て初めて時間の遅くなったのに気付きました。そしてまた不用意なのに気付きました。ネイルドブーツを履いているのは私と大和二人きりです。一歩々々足で踏みつけスキー靴の人達のために足場を作りました。暮色はいよいよ深くなってゆきます。蓮華の頂に立った時は既に太陽は西に入り最後の光を投げていました。槍も見えます。穂高も劔も真紅の雲を背に真黒くクッキリと出ていました。日没の山々、かくも美しい景色を私は見たこともありません。振り返って安曇野を見れば灯が一つ二つキラキラしております。平和に暮れていく冬の日没の山々の眺めは、私がかつて見たどの景色よりも美しいものでした。

日がすっかり暮れると急に風が出てきました。大和に急かれて帰途についた時はわずかに足元が見えるだけでした。初めの予定は峠へ出るつもりでしたが、また赤石沢を降ることに変更しました。

降りはスキーをアザラシの皮で縛りつけて沢を真直ぐに歩いて下りました。尾根から沢に下りた時は、すべてもう闇に閉ざされてしまいました。下から友の案じて呼ぶエホーの声が聞こえてきます。風も沢には吹いてきません。静かな夜です。星が美しく輝き、足場は安全、夕飯後の散歩のような気持でブラブラ歩きました。ようやく本谷の見える所まで下りて来ると、ラテルネの光が見えます。急に友が懐かくなりました。急いで降ると四谷、近藤の二兄です。「有難う」と握手する。四谷君が「昼頃に出て初めての沢を登るなんて困るね」とお小言。近藤は相変らず無言。急に空腹を感じました。

鳴沢岳

赤石沢を登って疲れた体にやっと食糧を詰め込み、ストーブの傍で煙草をつけホッとしたのはもう八時近かった。リーダー四谷君から明日の計画を話される。「明日は三隊に分れて第一隊は峠から蓮華へ、第二隊は鳴沢岳へ第三隊は祖父岳へ、と分けて行ったら良いと思います。それで各人自分の希望を述べてもらいたい、僕は祖父へ行きたいと思うのです」と、そこで明日の鳴沢行は近藤君がリーダーで私と山本勘二君が行くことになった。鳴沢は音に聞こえた雪崩の出場所だ。それに頂近くは一つの岩の塊だ。大体のコースの見当は鳴沢を溯らずに、向岸の台地を登り鳴沢岳から蓮華に向って出ている尾根の付根にある大きな雪渓へと右に入り、下から見える狭い急なリンネに取り付き尾根に出れば行かれるだろうという見当だった。

明日はあの大きな斜面に優秀なボーゲンを画いてやろう。新雪はちっとも降らないし、もう大分雪も落ち着いたから雪崩の心配は先ずなかろう。ただ恐ろしいのは最後のあの狭いリンネだ。

明くれば一月六日、今日は久しぶりで早く起きた。祖父へ行く四谷君の隊の出発が特に早いので、もっとも特に早いといってもラテルネなしで歩ける程度だ。三隊別々に行くので幾分対抗的なところが見受けられる。天気は上等。四谷君が出発してから一時間ばかりして第一隊と同時に小舎を出て右と左に別れた。今日は疲れたためか少しも足が出ない。近藤、山本両君は元気良く登るが私一人は足並みが揃わない。鳴沢の台地を思い切り大きなジッグザツグに登る。傾斜は二十度前後。この辺りは以前にも散歩がてらに来たものだ。第一回に大沢小舎に来た時も先輩の小笠原氏に連れられてこの斜面を登ったことなど思い出しながら重い足を引き摺るように歩く。登りがけからこの足では今日の登攀が気になる。広い斜面を行きづまり近くまで

登ると右に幅二百米もある雪渓が鳴沢のザイテングラートの根元に入っている。この斜面に行きづまりまで行くと、そこから鳴沢岳の二つある頭の間に梯子を掛けたようなリンネが入っている。鳴沢、赤沢間で鳴沢寄りにはここより他は適当な場所は見当らない。「やはりあすこから登ることにしよう」と決定。これからは真南向きの斜面だ。峠の下の雪渓と丁度向い合っている。蓮華に向った一行がマヤクボの下を登っているのが良く見える。この斜面――鳴沢のザイテングラートの根元に入っている雪渓――に取り付いた時には十時半を過ぎていた。雪は大分腐っている。冬でもこんなに雪がなるものかと驚いた。傾斜は二十五、六度、あの急なリンネから落ちてこない限り雪崩は大丈夫と思ったが、それでも注意して右の端の方をジッグザッグに登る。時たま、小さな雪崩が岩の間から落ちてくるのが途中で止まってしまう。この斜面を登り切ったのが十二時丁度だ。ここでスキーを脱いで歩いて急なリンネを登ることにする。ここまで来て私はとうとう落伍してしまった。今日は何だかとても疲れて歩くのが嫌になったから、ここで待っているからと私はついに御輿(みこし)を据えちまった。近藤、山本の両君はスキーをアイゼンにはきかえて二人で登って行く。「ジャ行って来る。泣かずに待っておいでよ」なんて云いながら元気良く登って行く。姿はじきに岩の陰に隠れて見えなくなった。

一人で山の頂近くの雪の中に体を埋めて煙草をふかしているとなんとも云えぬ良い気持になった。辺りの景色を心ゆくばかり眺めた。一等目につくのは昨日登った赤石沢だ。蓮華の頂に人は見えぬかと思ったが、それらしいものも見えない。振り返って祖父の方を見てもやはり人一人見えない。時たまザラザラと雪の崩れる音のするたびに上に行った友の安否が気遣われる。その音を聞くたびに「ヤッホー」と呼ぶと上からも聞こえてくる。大丈夫まだ生きているとヤット安心する。しばらく雪の崩れる音がしなくなる。友のことなども忘れて一人貪るように辺りの静けさを味う。このまま上から大きな雪崩でも出て一時に攫(さら)われたら、こんな上等な死に方も余りないだろうなんて考える。頭のすぐ上からヤッホーと呼ぶ声にハッと我に返る。友は頂に着いたな。割合に早いな。出てから一時間とかからない。もう頂に着いたのか。ではそろそろパンでも切ってお帰りを待つことにしようとする。マァー待て一服喫んでからとゆっくり構えていると、話し声が聞こえて友達は帰って来てしまった。下りは十五分。

「どうだった？」

「劒が手に取るように見えたよ、長次郎の岩小舎に大分雪が積もっているね」なんて呑気なことを云っている。

「あれからどういう風に登った？」

「イヤ、あのリンネを真すぐ登ったのさ、アレートに雪庇が出ていたが、ここもやはりダブルになっていてその間を通ったら楽なものさ。アレートに出てからはもうすぐだ。思ったより楽なもので遠くで見ると凄そうだが登ってみれば大したことはないね」

なんだか鳴沢も至極あっさり登ったらしい口振りだ、帰途は雪がますます悪いので小舎まで五十分、コースは途中から鳴沢に下って鳴沢を飛ばした。今年はもうこれで頂を四つやった。夏のように毎日々々頂に立てるので少し呆気ないくらいな気がした。　　（森田勝彦記）

祖父岳

昭和二年の晩秋の頃。それは山は紅葉が既に散って初雪に化粧され、里では山の好きな友、ことに冬山の魅力を知ってる友達がスキーとか冬山への準備に落ち着かない日を送っている頃の或る夜、巣鴨の下宿の三畳の窓からは寒そうな星が光っていた。その三畳の小さな室でＡとただ二人、Ａも僕も山好きスキー好き、出る話は山の話ばかり、そして昭和元年十二月末から昭和二年一月十日までの第三回大沢小舎生活について色々語り合った。Ａは不幸にしてその生活には参加しなかったけれども、春夏秋の山に憧憬を持っていたと同様に冬山にも心のどよめきを持っていたし、また体験もしていた。ここには主として祖父岳に関連した対話を記述したい。

A　祖父岳にも登ったそうだね。どうだい。素敵だったろう。委しく話してくれないか。とにかく素晴らしい冬の嶺が頭に浮かんでくるよ。あの安曇平野と云っても大町付近から眺めた祖父鹿島槍のあの雪線は胸がすーとする。紺の空の時はその姿が一ツ一ツ田圃の静かな水鏡に映って長閑な牛の啼き声でも聞いていると、キッとあちらの山麓にも、こんな所が否、もっと優秀な所が、近代のセガンチニがほれぼれするような所がざらにあるような気がするんだ。それが初春とか、初冬とかとは時節が違って厳冬だろう。たまらないね。我々だって、時には対山館あたりの静かな三階の眺望の良い室に陣取って雪窓からあの雪線を味いながらチビチビ「イケルロ」でもやりたくなるよ。寒い苦しい山への思いを避けてさ。

僕　君のような奴でもそんな気になるかね。ところで第一回、第二回各生活で大沢小舎を中心とした放射状の峰への登攀も針ノ木岳、蓮華岳、スバリ岳に成功していたので今度の生活中に赤沢、鳴沢、岩小屋、祖父等の未踏の各峰に登ってみたいというのが大部分の目的だった。それがどうだろう。何年目、何十年目と称される厳冬には稀な上天気で期待していた峰にはほとんど登り得たけれども、厳冬の山の荘厳さは真実、体験出来なかった。

A　そんないい天気なら俺も行けなかった故障を投げ出して君達と一緒に行っていたら、こんなに話を聞いて悔みもしなかったろうになあ。

僕　それはそうさ。人に勧められて行く気になった僕があれほど誘っても躊躇して、黒白を決めないのだもの。一月六日午前六時二十分に小舎を出発したのだが、どうして僕がこの隊に参加したかその気持ちを聞いてくれ。君も知っている通り正月に入っても、五日までほとんど晴天で四日だけ峰は曇って、風が立ち雪になっていたと思う。で五日夜、明日の登攀のルートを三つに分け、峠より蓮華岳への第一隊を広瀬さんに、鳴沢より鳴沢岳への第二隊を近藤さんに、それから最後の扇沢より祖父岳への第三隊を四谷さんにそれぞれリーダーの役が割り当てられた訳なのだ。それで一週間ばかり前に大町の寒村から冷え切った冬空の晴間に浮かんでいるあの山に既に心を奪われた僕は、小舎に着いてから、この四、五日、朝な夕な小舎の北窓から手に取る如く目前に映るあの女性的な柔和な山の姿――しかも冬の厚化粧をして――が絶えず気になってあの祖父岳行が成立したら、どんなに骨が折れても、またたとえ全身冷える早朝に出立しなければならないことがあっても、最後に初めての登攀に予定以上の時間が掛かって、夜の雪道を帰るにしても、行きたい心に燃えていたのだ。

A　君のその時の気持ちは良く分る。その五日の夜はまた厄介だったろう。人夫一人除いて、総人数十三名のメンバーを三隊に分けて、誰々を各隊に廻すか非常な問題だと思うんだ。勿論、各人の意見を斟酌してからのことと思う。こんな大勢なメンバーの場合、総リーダーたる人は実際苦しい立場にあるね。あの時は四谷君かい。痩せてるだけ堪らなかったろう。

僕　各人には希望の山があるからね。勿論、各人の意見は尊重するよ。第三回の時は、冬山に対する経験とか技倆の点ではないが、僕達四、五人を除いて他の七、八人が粒が揃っていたのでやりにくかったところもあっただろう。でも一ツ部内の人達だ。顔馴染みだ。他で見られない楽しいユーモアな雰囲気が流れていた。

A　君の他に祖父の方には誰が行ったの？　早く聞きたいね。

僕　いよいよ本論だぜ。先ず四谷龍胤氏をリーダーとして、長谷川荘吉、鈴木勇の二先輩、そして僕という優秀な顔ぶれさ。明けて六日、いい天気だった。小舎を囲む白樺、栂の森も風一ツなく、沈黙の銀世界の首途を祈ってくれた。リュックの中には、黒パン、バター、ジャム、板チョコ、魔法瓶、、セーター、ピッケル、アイゼン、ザイル、それからラテルネ、先々山への必要品だけ。扇沢の出合まではほとんどスキーの滑走感をしみじみ享楽出来る。扇沢へ出る前に少し登ってからむ所があるけれど、小舎からその所までの滑走味で、何でもない。転ぶのは自由だけれども後に独り残されて友達の粉雪の景気の良い所を眺めるのもしゃくでね。扇沢出合には六時五十分に着いて、七時には、いよいよ扇沢の谷に入って行った。

A　越後の関温泉から関山駅まで幾度も幾度も転んでた君だ。目に見えるようだよ。しかし少しはスキーも上達したろう。

僕　馬鹿を云いなさんな。しかし少しはね。扇沢に入るとようやく陽の光が雪を戴いた白樺や針葉樹の森に照り出し、こよなきパラダイスで上衣を脱ぐほど汗ばんできた。パーティの皆がこの谷をこの時節に入るのは初めてなので、どの崖にルートを見出して良いか思慮と決断力如何とが成功と失敗との分岐点になるのだ。扇沢に入って左側に入っている大きな沢（岩小屋沢岳に入っている沢）あたりから水もとぎれて、雪崩の跡が右に左に点々と目につき始めた。三ツ股の右側に着いたのが八時。空はあくまで僕達の成功を祈るように落ち着いている。果たしてこれが厳冬の高き山谷に求められる空模様だろうか。

A　その三ツ股から棒小屋乗越へとっついたのかい。

僕　いや違う。その時リーダーでなかったのでルートの選択に自身直接には配慮しなかったけれども、四谷さんは右側の雪のついた崖を登ろうと提案した。かなりの傾斜で下部は樹木少なく上部にはあるらしい。しかし下部には灌木が多かった。時間の早いのと、天気がしっかりしているので皆元気でジッグザッグに息を切らして登る。凍った雪の上に新雪が積んでいるので、雪崩の小さい奴が絶えず気味悪く音を立てて目の下の谷へ滑り落ちてゆく。四谷さんか誰か、両杖を一本落したら、アッと云う間もなく小さく小さく扇沢の谷へ落ちて行った。この位の傾斜なら人間だって止まらないで下まで滑り落ちるかも知れないと思うと一ツ一ツのジッグザッグも慎重と訓練とを非常に必要とするようになる。その後の登りに四谷さん一本の杖のため大変困却してしまった。ピッケルは樹林間の深雪には全然役立たないからな。

A　両杖が一本折れたり、なくなったりして、後の一本で思わぬ苦労と失敗を嘗めたり、勾配のきつい雪面でのジッグザッグは実に嫌なもので良く経験することだ。でそのきつい勾配は、尾根まで続いていたかい？

僕　ところが普通とっつく下部の急な個所は上部は楽になるし、反対に下部の楽な所は上部になって、滝があったり、傾斜が急になったりするそうな――これは山岳のもつ地質的方面からくるんだろうと思う――その説の通り上部は下部で苦しんだ割に森林の緩やかな登りが続いて、第二高点より東南に派出している尾根に出たのが午前十一時十五分。平和な冬の訪れた大町の里や、蓮華岳から針ノ木岳、鳴沢岳から岩小屋沢岳へのアレート！　かつてかくまで目と心を快くしたことのない眺望を一瞬にして味い得たのだ。さすが、きびしい風と雪と寒気のため夏にはゴロゴロの石塊が皆凍り、白雪にコンクリートされている。吹き溜りには予期しないくらいの積雪で一驚する。その尾根の偃松をスキーデポにした。

A　スキーデポから、すぐアイゼンと、ピッケルで尾根を行ったのかい。

僕　ところが第二高点までは岩塊が凍って雪にカバーされているけれど足場はしっかりしているから、アイゼンは着けなくても良いと云うんだ。つまり確実に行ける所は、登山用具なんてやたらに濫用してはならないという精神からきているらしいのだ。名前は忘れたが良く聞く話だ。瑞西の或る著名な山男が余りに登山用具に頼り過ぎて、或る峰に登攀中ピトンかザイルを落したため、非常な精神的混乱に陥り死に面し救援隊の来るまでは降ることが出来なかったという。余り冬の尾根に暢然としていたのでそんな話をふと思い出した訳なんだ。で第二高点に着いたのが十二時五分。冬の真昼の陽にかがやいている白皚皚（がいがい）のアルプス全山は手に取るように展開され、去る正月二日針ノ木岳の絶頂より喜悦と安堵の声で歓迎された劔、立山全山も真西に面したこの頂よりは、より以上目近かに現われてほしいままにすることを得た。それからリュックより各自アイゼンを出して履き、行手に聳えている祖父岳の頂上へ四谷、長谷川、江口、鈴木の順で尾根通しに行く。大体黒部側のクラストした雪の上を。

A　概して三月の尾根は三ヶ月という長い暴威をこうした冬の天候で雪は青い氷に化し、アイゼンの歯だって気持良く入らないし、滑れば大抵命はないものだ。しかし、違って正月は寒いけれどコンディションは良いだろう。

僕　それは素敵だよ。八本の歯が皆仲良く真白いクラストの雪に根元まで入るし、ピッケルだって快く突き入るし頂に着いたのが十二時二十五分。物凄い雪庇が鹿島側に傾いていた。大抵冬は黒部側から吹く風と、鹿島側の斜面が急峻なため、雪崩の原動力の一ツである雪庇は皆この側だよ。尾根続きの鹿島槍に行ってみたくなったが帰路を考慮すると余りに落ち着いてもいられないのでただ行ってみたいと思っただけなんだ。

風の当らない雪塊の影で軽い食事をすます。冬の山と魔法瓶！　夏山のようにコッヘルでココアや紅茶を沸かすなんてことは冬山ではことに尾根上では出来ないからね。そのコッヘルに変るべき物が相当量の入る魔法瓶さ。乾燥した咽喉に通らないパンを通すには温かな飲み物に限るぜ。その温かい飲み物があったので大助かりだった。帰路は往路を引き返したに過ぎない。午後一時十五分、頂に別れを告げスキーデポに着いたのが一時五十五分。アイゼンとピッケルをリュックに入れる。さすが寒気のため、手袋も洋服もカチカチ、スキーからアザラシ皮をはずす。しばらく休憩の後、四谷さんを先頭に鈴木さんを殿に滑降して行った。

A　それで寒い尾根はすんだ訳だね。しかし、これからの扇沢の所まで降って行くのが見物(みもの)だぜ。凄い顔面制動とそれによる筋肉の倦怠か。

僕「冗談云っちゃいけねエ」と自慢に云うところだが、そのルートの上部は大きな岳樺や栂の林間滑走で良かった。実に広大なボーゲンが描かれた。が下部では密林になると思うと急傾斜の雪面が目の下に蜿蜒と続いている。あんな悪場に行くと技術も上手でまた頑張り強いことも必要だ。朝から皆が同程度に働いているのだ。また疲労も同程度に襲ってきた。それであるいは頑張りは技術に打ち勝つことが往々ある。それで中には木にぶらさがり中々降りて来ない人もあったが、成功の喜びと協力の誇りで元気良く扇沢に降ることが出来た。そこには一本の杖が主待ち顔に横たわっていたっけ。

A　スキーが灌木に突貫して逆さに木にぶらさがったのは君かい。これは優秀な脅迫材料だ。面白い。でも皆が怪我もしないで何よりだった。

僕　僕かも知れない。あるいは僕でないかも知れない。そんなことはどうでも良いさ。愉快な追憶の一頁が増した訳だから。かなり皆が空腹と疲労とで、これから扇沢出合までは自然と滑って降れるとしても、出合から大沢小舎まで登って行くことを考えると辛いなと、云いたいような顔をしていた。でも午後三時二十分には出合に着いて二十分ばかりの間に残りのパンを食ってしまい、三時四十分には早朝の滑走味を思い出しながら本谷を小舎へ遡っていた。

A　先輩鈴木君や四谷君や長谷川君の元気ぶりはどうだった。

僕　皆元気さ。とにかくパーティの中では僕は一番年少者でもあり従って冬山には、入ったこともない未熟者だったから、批評の限りじゃない。しかし、すっかり考えさせられちゃったね。リーダー即ち一言に云えば連れて行く者と連れて行かれる者との心理状態には大きな間隔がある。ことに岩登りとか季節はずれの山行、例えば冬山とかにおいてリーダーの明快、鋭敏、慎重は全員の運命に係わることもある。それが全員の未知の所であればあるほど必要なのだ。この祖父岳だって天気の良い日はアルプスの山見たようではない。人に少しでも穂高を見るような感じを与えない。温和な山だ。だが我々は前夜から準備は怠りなかった。使う必要はないと思ってもザイルを、まさか夜の暗い雪道を遡って帰るほど、時間もかからないとは思ったがラテルネをそれぞれ用意した。結局は不必要だったが、万一の冬山だ。もし天候が崩れかけたが最後あの峰、あのベースキャンプより遙かに遠い尾根には、とても人力では達せられまい。安々と成功した僕達は幸福だったのさ。

A　夏に困難な山は冬にも困難なものだろうね。またこの問題は逆にも云えるかね。

僕　経験の浅い僕には分らないが、夏困難な山は概して冬にも困難であると云える。しかしそうでなくかえって楽に登れる所もあるね。また前穂高のような夏一番穂高連峰中、登りやすい山が冬になると、入り込んでいる急峻な沢、派出している刃のような尾根のため登攀が難しい山もあるだろう。また快活に鼻唄でも歌って逍遙される高原でも（概して、高き雪山への道程にある高原）冬の吹雪に遭っては想像すら出来ない威力があると思う。だから祖父岳だってたとい女のような柔和な姿でも、いつもの正月ならとてもとっつけなかったと思うよ。

A　分った。も夜も遅くなったから帰るが君は学校を出ても、今のような山狂人たり得るかね。

僕　君はどうなんだ。俺に劣らない狂人だからな。

A　君達を連れて行った四谷君は妻もあれば子もある所謂一家のあるじだろう。それに山への愛と熱とのた

めに大自然と雄々しくも闘い、温かい懐にいだかれようとしている。それにもまして先輩鈴木君は三、四年前既に社会人となり自活の道をたどりながらも、浮世を知らない若い部の連中とこんな厳冬に行を共にしたいと希う人だろう。偉いよ。もう奥さんでももらっていい歳だ。学校を出ると職業の如何によっては、今までの猛烈な山行が圧せられて、学生のような自由な身になれない。それでも熱のある人は冬山なんて大々的な活気に満ちた山行は出来ないので、土曜、日曜、祭日なんて、チョビッとした休みに少しでも自然に接せんとするのが落(おち)だ。だが死ぬまで山行には熱がありたい。そして憧れたいもんだ。

僕　賛成、賛成、異議なし。案外君も分るんだね。鈴木さんをはじめ四谷さん、長谷川さん、藤田さん、それから来年卒業のはずの近藤さんらあの時代の人は僕達の時代の腕白者を一言で云えば、トレイニングした先輩で懐かしい兄でもあり友でもある。さあもう少しだから聞いてくれ――腹は空いているけれど皆頑張ってね、扇沢の出合から一時間と五分で午後四時四十分小舎に無事に着いた。既に第一隊も、第二隊も成功して熱いココアを愉快そうに飲んでいたよ。僕達は山小屋において、山に登り得た勝鬨の夜はどんなことをするか君も知ってるだろう。部の年中行事のザイル祭を雪深い信濃の山奥まで担ぎ込んで飲めや、歌えの大騒ぎ。懐かしのオケサ節、山の謡。

A　「飲めや」と云ったって「コニャック」一本限りだろう。俺は東京で買った時知ってるぜ。

僕　モチ、一本さ。一本を十三人でね。でも飲み尽くさなかったぜ。その証拠には、九日の吹雪の中を皆が飲み残しをココアに入れて飲んだので、コロビコロビ降って行ったっけ。新雪の林の中を。

A　も遅いから帰るよ。も冬もすぐだね。どっかへ行こうか。今度は何日か俺の所で語ろう。さようなら。

（江口新造記）

9・10　藤田喜衛　「赤沢、スバリ西尾根」『日本登山記録大成』第12巻 白馬・後立山Ⅱ

1983（昭和58）年11月30日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『関西学生山岳連盟報告』第2号（関西学生山岳連盟事務所、1931年)〕

要　約

1930（昭和5）年7月16日の記録。

メンバーは、藤田喜衛、工樂英司（以上、京都帝大旅行部)、大和由松（有明の案内人)。

行程は、スバリ岳北方の国境稜線上のキャンプから大スバリ沢右俣を下降し、P4 北面より取り付く。P2は左のガレキから巻き、スバリ岳頂上に出ている。

スバリ岳における最初のバリエーションルート開拓と思われる。

※スバリ岳西面中尾根初登攀。

1930（昭和5）年7月21日の記録。

メンバーは、藤田喜衛、工樂英司（以上、京都帝大旅行部)、大和由松（有明の案内人)。

行程は、針ノ木岳・スバリ岳間のコルのキャンプから西尾根主稜と中尾根間の沢を降り、P4・P3 間のコルから登攀。P4も往復している。

※スバリ岳西尾根主稜初登攀。

昨年の夏劔沢合宿をすまして黒部谷へ下りて来た私は以前高橋先輩の語られた赤沢西尾根を試みるべくその前提として黒部川よりするルートの偵察を終えて大町へ出た。そして翌八月末再び苳岼の平蔵を伴って御山谷の日電小屋に拠り、大スバリ沢を採って登攀を企てたが不幸にして沢の険悪と尾根のヤブに悩まされ、加えるに天候にまで見離されて目的の第三峰を間近かにしながら恨みを呑んでの敗走を余儀なくされた。しかし一敗地に塗れた私は今度はそのルートを変えて国境尾根よりこれを試みてやっと年来の素志を成すことが出来た。そしてこの尾根と共に未知であったスバリの西尾根をも、ものすることが出来て予想外の収穫を得た。実際私としてはこの行についての第一の目標は初志から言っても先ず赤沢の方にあったのであるが、結果よりみれば、国境線よりのアタックであれば後にも述ぶるが如くスバリ西尾根の方がはるかに優れていることを知った。

元来、赤沢西尾根は相当によく目立つ尾根である。雄山や劔からは真正面に見える。なかんずくハシゴ沢乗越からの望見はそのもっともなるものであろう。この乗越に立って内蔵ノ助の窓を通してこの西尾根に接するものは誰しもその赤褐色に爛れた露出した岩壁と黒部谷へ向って薙ぎ込んだ鋭い稜線に驚異の眼を見はるにちがいない。これに反してスバリの西尾根はその黒部への落口と頂付近とを除いては比較的緩起伏な線を引いて延びているからちょっと見た眼には全体として平凡にさえ見える。このことが今までこの尾根をクライマーの目標からさえぎっていたのであろう。

赤沢の西尾根については、その初登攀は冠氏によって一九二七年六月十五日になされた。当時冠氏は赤沢の頂上より第三峰の通常、猫の耳と称せられる地点まで尾根通し約三時間を費して往復された。今度我々の採ったルートも大体これを踏襲したものであって、国境線よりこの尾根をトレースするつもりなればこのルートを採るより他はない。だが赤沢岳は少なくともその西尾根は、私の経験をもってすれば、国境線よりこれを試みる時はその興味は零に近い。事実、この西尾根は黒部の谷からダイレクトに登った時、初めてその真価を味うことが出来ると言わなければならない。従って一九二七年度の冠氏の行以後、いまだ黒部の谷よりダイレクトにこれを登り切った人がいない限り、この尾根の真の登攀は未完成の状態のまま今後の大きな問題として残るべきものである。以下、西尾根の各々について逐次的な説明を試みよう（挿図参照)。

先ずこの二本の尾根は簡単に西尾根と呼ばれるが、事実尾根自身は正しく西走しているわけではなく、そ

の走向線はスバリにあっては WNW、赤沢においては WSW に近い。しかして各々の尾根は図示するが如く大スバリ沢を挟んで相反した傾斜方向を持っている。その結果、各々の露出岩壁も必然的に反対して現われている。これらのことはこの両尾根を比較するうえにおいて興味ある事実である。

スバリ西尾根

写真や挿図で判る如く大体三本の尾根をもって形成されているが、主稜をなすものは一番南に位する西尾根である。そして中尾根（三本の中央に位するという簡単な事実から我々は仮にこう呼んだ）と最北位の尾根（第三尾根）はパラレルに走り、大スバリ頂上付近では真北から来る国境尾根に掠奪されて不明瞭な合流をなしている。

これらの尾根を通じて著しい特徴と思われるのは、各尾根が共に SSW の方位に傾斜している結果、その南面に揃って多くのスラブやフェースを持っており、岩について言えば各メインリッジ末端の取付部分には多くの逆層の大きなフェースを認め得るが、頂上に向って東進するに従って次第に順層をなした針峰状になってくる。そして質を言えば、全体としてこの山の岩のもつ感じはその名のスバリという字から連想される感触を我々に与える。これを分けてみると下半の部分はガッチリした撥き返すような硬さを示しているが上半分、なかんずく頂上付近は極度に風化された脆い岩で、その露出岩壁は真白な断面をもって烈日の下にギラギラ輝き、その強烈な反射には我々も少なからず眩い思いをした。

全体としてみてこの尾根は思った通りスケールはあまり大きくない。事実、登攀に適した部分は一番長距離の主稜（西尾根）においてすら四峰付近から東に限られている。従ってこの尾根によってビッグ・クライムをしようとする時は二つ以上のリッジを連登するの滑稽を演じなければならない。そしてこの尾根をクライムしている時我々が未知のある大きなバットレス等に相対したとき、往々経験する強力な感動というような圧迫感も受けることはない。故にこの尾根は正しくゲレンデ向きである。しかして我々がこの尾根をゲレンデとするならば、劒の源次郎や八ッ峰のリッジを行く時いつも感ずる偃松やヤブの嫌味等もほとんどなく、全く気持の好いクライムを味うことが出来て見掛け倒れの失望は決してしない。以下、この尾根について面白いと思われる部分をバリエーション・ルートをもって挙示しよう。

（一）　主稜（西尾根）四峰から西北に延びているリッジ　主稜中最も興味のある部分でリッジと言うよりはバットレスのフェースである。この末端ⓐよりダイレクトに四峰に出てリッジ通り縦走するルートは西尾根中、最長のもので根拠地の取りようでは充分に一日を要するものである。我々は七月十八日、この四峰寄りのフェースを試みたがアクシデントのため簡単に退却してしまった。このリッジその北東側のフェースは途中にオーバーハングがあり、下部は全て逆層であるから事実上、西尾根のリッジ中最も手強いものであろう。

（二）　主稜三峰の北面　多くの小さい支稜が混合していて複雑な部分であって、ダイレクトにすればやや短距離すぎる憾みはある。

（三）　主稜二峰の西北の支稜　主稜と残雪を挟んで相対するもので、やはり短い。主稜としてはここから岩質が急に脆くなって中尾根との間の涸谷は岩屑で充満している。

（四）　主稜二、三峰間の西南面（小スバリ沢側）　前三者が大体リッジ・クライムなるに反し、これは純然たるバットレス・クライムである。小スバリ沢からその谷壁に発達した著しい岩棚や岩壁のいくつかを登って直接この方面をアタックするルートはリッジを完全にトレースしてしまった者には興味ある問題を提供するにちがいない。だが一九三〇年度の我々のパーティをもっては遺憾ながら、これに手をつけるのは技倆の外であった。

（五）　中尾根　ルートとしてリッジを選ぶときは一番容易なものである。ただ途中一つ二峰直下に悪場がある（紀行参照）。

（六）　中尾根四峰付近　このピークからは二つの支稜が派出されているが、そのうち西位のものは稀に見

るナイフ・エッジをなしている。二稜ともにその取付の部分（東面）はいずれも相当に硬い逆層のフェースである。そしてこのピークから三峰へのナイフ・エッジの西面はその高さから言っても一枚岩としては西尾根中随一のものであろう。

（七）　中尾根二峰付近　この東面は第三尾根（西尾根中最も国境線に近い尾根）との間のガレが高く喰い込んでいるために、かぶり気味な一つのバットレスのクライムを除いては興味は西面にある。しかし中尾根も二峰に来るといつの間にか岩が脆くなって、なかんずくこの西面のフェースはフォーリング・ストーンの危険に曝された最も注意すべき所である。

（八）　二峰頂上間のリッジ　極度に風化が進んでボロボロになった岩質で出来た幾つもの岩塔が乱立して、いちいちこれをトレースすることははんに堪えない。中尾根を辛うじて頂上と結びつけているにすぎないものであるから、中尾根全体のルートとしてはむしろなくもがなである。

（九）　第三尾根　図中 a 点以下が問題となるのであって薄い切れ込みの多い一枚岩のような岩稜が西傾して短く走っている。リッジ・クライムよりもその西面を狙うべき尾根である。

（十）　キャンプⅠの傍のリッジ　低くいたずらに長く大スバリ沢深く入っているのみでクライムの目的には価値なしである。主稜や中尾根を登るときキャンプⅠからの通路としてトラバースされるにすぎない。

（十一）　黒部谷よりダイレクトのルート　最後にこれは赤沢西尾根と違ってスバリではその黒部谷への落口の壁を除いてはクライムの目的になる部分が主にその頂上寄りに集中されている結果、これを黒部谷から取り付いてダイレクトにトレースしようとすれば猛烈な藪のため一日くらいでは藪の部分さえ完全に切り抜けることは困難と思われる。また一方、大スバリ沢を遡行して可及的に藪を避けて西尾根に取り付くとすればこのルートは主稜（西尾根）の縦走となり問題は自ら解決される。ただ小スバリ沢より西尾根への最も手近な取付点は三、四時間のコルであるが、小スバリ沢をよく偵察しなかった私はこの可能性を断言することは出来ない。

以上で大体スバリ西尾根の各部分の地形やルートを述べたつもりだが、なおスバリ・ゲビート一般のゲレンデとしこの他に大スバリ頂上から東西に派生したリッジや小スバリの西壁等を挙げることが出来るが、いずれもスケールがずっと小さくなって面白味も少ない。

赤沢西尾根

前言した如く立山方面から黒部の谷一つ隔ててこの尾根を眺めた人は誰でも第三峰以下の赤黒い側壁と頂上より小気味よく切れ込んで来る稜線に素晴らしいリッジ・トレースを想像するが、一方国境線からこれを試みるものはその期待が大きければ大きいだけ、そのぢぢむささに対して抱く失望もまた大きい。私自身もこの例に洩れなかった。事実、全くこの尾根は黒部の谷筋からそのリッジに出るまでが真にクライムする価値あるものである。

さて、この尾根は沢一つ向うのスバリ西尾根が錯雑した構造を持っているに反して比較的明瞭な地形を呈していて、一本の幅太いメイン・リッジが西尾根の全てを代表しているのが著しく目立つ。以下、西尾根の全体からみてその地形に適したルートを列挙する。

（一）　メイン・リッジ　頂上より第四峰（第三峰と酷似して相似形に見えるので仮に相似峰と名付ける）までが大体主要な尾根筋である。しかし二峰以下では偃松が漸次密生して来て第三峰（猫の耳）では、はやブッシュさえ交えて相似峰に至ればもうリッジは真黒である。故にただ単に頂上よりこれらのピークを追って縦走するのはいたずらに偃松を泳ぐのみで何の面白味もない。

（二）　上ノ赤沢より相似峰及び猫の耳へのルート

（注）赤沢岳に黒部側より入っている沢は三本あるが大スバリ沢はともかく、他の二つの沢にはまだ適確な名称が与えられていない。一九二九年度の『ベルグハイル』誌上に私はこのことを述べて確実な名のつくまで仮にこの二本の沢を、一つを上ノ赤沢（御前沢の数町下流にその落口を持つ）他を下ノ赤

沢（内蔵ノ助谷の少し手前で本流に入る）と呼ぶことにした。

このルートは一九二九年七月の偵察によればその落口から大分奥までの通過の可能性は保障し得るが第三峰（相似峰）直下の沢の迂回点付近が不明であるからダイレクトに相似峰へのアタックの成否は未知数である。

次に猫の耳へは同じくこの沢よりアタックすることが出来るが、その左右両峰にやくされて西北位に展開するバットレスのスラブは我々のアタックに対して最も手強い反抗をなすもので、今のところこれを試みる自信はちょっとない。いずれにしてもこの上ノ赤沢は沢全体が極度に荒廃していて残雪の多い時季の遡行は比較的容易であろうが、雪の少ない時は北傾した西尾根の露出岩壁より押し出される落石の脅威に対しては全く無抵抗に暴露される危険性を覚悟せねばならない。

（注）　上ノ赤沢よりするこれらのルートを最もよく観望し得る地点は黒部左岸の丸山であって、冠氏著『立山群峰』七八頁に挿入されている写真はこの要求を充分満たしてくれる。この写真について言えば最も左端が赤沢頂上で、次の双峰が猫の耳であり真正面の冠氏がカツオブシ型と形容された双峰が相似峰（四）である。そして上ノ赤沢は左下から弧状を描いて各ピークに雪渓を懸けている。

（三）　西尾根の窓　二峰と三峰猫の耳との間にある最低鞍部で西尾根をちょっと中断した貌である。ここから上ノ赤沢を俯瞰した感じは劔八ッ峰の五、四間のキレットの三ノ窓側といったところだ。この窓はリッジ縦走中にはあまり注意を引かないが、上ノ赤沢を遡行しこれをトラバースして大スバリ沢へなり、頂上へなり出るルートは黒部谷を入れた数日の面白いプランの一つになるであろう。

（注）　この窓の写真も冠氏の『立山群峰』七八頁に挿入されている。

（四）　上ノ赤沢より赤沢頂上へのルート　これは上ノ赤沢を遡行するというだけの興味しかなく西尾根とは何の関係もなくなってしまう。これよりむしろ沢のずっと奥でダイレクトに二峰を目標に採って登る方が優れている。

（五）　大スバリ沢より相似峰へのルート　当時（一九二九）上ノ赤沢の奥とその取付に自信の持てなかった私は、八月二十八日、このルートをとって西尾根への登攀を企てたが不幸にして相似峰にさえ完全に到達することが出来なかった。しかしながら冬季を除いて比較的自由に赤沢に近づけるルートは今のところこの他には見当らないから、ヤブの煩はあっても黒部谷からのダイレクトのルートとして確実性と安全性を考えるからにはこれを採るに如くはない。なお、このルートについて詳細な記述は『ベルグハイル』五号を見て頂きたい。

（六）　猫の耳左峰より南走する主稜　これは二本の細長い偃松まじりのリッジで、大スバリ沢から直接猫の耳を志すものには二、四間のコルへの沢と共に興味あるものであろう。

以上の他に二峰の北壁、赤沢頂上の西南面等も各々短いながらクライムの目標たり得るものである。沢については下ノ赤沢はよく偵察もしなかったし直接西尾根と関係がないからここではその記述を差し控える。

以上で大体西尾根の説明を終えたが、なお登攀の根拠地に関して一言すれば、黒部本谷より直接これらの尾根へアタックするには今のところ御山谷の日電小屋が絶好の根拠地となる。そして上ノ赤沢遡行を除いては比較的容易に大スバリ沢及び小スバリ沢に入ることが出来てすぐ尾根に取り付ける便宜がある。現に一九三〇年三月立教パーティがスバリ赤沢の黒部側の登攀に際し、その根拠地として使ったのもこの小屋である。次に国境尾根よりする根拠地であるが、これは今回我々が地形、天候その他、交通関係まで考慮に入れて営んだ二つのキャンプ・サイトが最も妥当的なものと信ずる。

一九三〇年七月十三日～二十二日の紀行

パーティ　藤田喜衛（リーダー）、工楽英司、大和由松、赤沼家義（人夫）

七月十三日　松本一〇・〇〇―大町一・〇〇―ヨセ沢五・〇〇磧、キャンプ。数日間ブッ続けに降り抜いた雨も掉尾の矛を収めて、今日から梅雨晴れの天気が続きそうだ。大出までのホコリ道は自動車に乗る。

十四日　晴　ヨセ沢―大沢小舎泊。

十五日　晴　大沢小舎発六・〇〇―大スバリ岳頂上――第一次キャンプ着二・〇〇。本谷から岐れて峠へは登らずにマヤクボ沢をとって直接針ノ木の北の鞍部に出た。縦走路を北に向って小スバリ、大スバリの頂上を越えて降ること二十分にて残雪を見出し、ここを根拠地と決めた。やや信州寄りのザラ場を手入れしてテントを張る。三時からスバリ中尾根の偵察に向う。

十六日　晴　キャンプ発八・〇〇―中尾根三峰一一・三〇―第三尾根 a 点一二・〇〇（一・〇〇）―中尾根二峰を経て大スバリ頂上二・〇〇（二・三〇）―キャンプ着三・〇〇（中尾根登高は正味四時間）

カラリと晴れた蒼空に、くっきりとスバリ赤沢の西尾根が朝日に輝きながら、まず朝のグリースだ。本谷一杯に沈んでいた桃色の雲海がムクムクと浮かび始めて、その切れ目から早立の峠登りの人々が現われだした。手早く朝食をすまして、今日中房へ帰る赤沼がキャンプ直下のガレを本谷へ飛ぶようにして下るのを見送ってスバリ中尾根へ（八・〇〇）。キャンプ傍の尾根を越えて約二十分の後、四峰の末端（挿図矢印）へ着き、ここにてアンザイレン、順序は大和、藤田、工楽、間隔は各十米ずつ。このコンビネーションは以後のクライムにも踏襲した。取付からいきなり逆層のスラブである。これを右に巻いてリッジに出た。あとは大体リッジ・クライムであるが四の次のピークへの登りはリッジを左へ避けて大きな暗いガリーに入る。リッジは乱立の大刀先のようで股がることも出来ない薄っペラさで、南の涸谷へオーバーハングしている。岩はガッチリと硬く尖端は刃か針のように鋭い。これに触れる手先からジリジリした感覚が身の内に泌みこむようだ。このピークを越してやや幅広くなった所を数回上下すると三峰に出る（一一・〇〇 ― 一一・三〇）。ここに立つと二峰がグッと前にピラミッド型に聳えて見える。正面の肩の所に一個所大きなコンケーブ（凹み）がある。キャンプから真黒な悪場だと言い合った所だ。小憩の後、三峰の平頂を進んでいよいよアタックし始めた。だが真黒に陽の光さえ入らないくらいにかぶった所は当ってみると完全に逆層である。加えるに右は素晴らしい垂直の露出岩壁。トップの大和のゴム裏も駄目か、ついに二峰ダイレクトをあきらめて三から一まずガレへ下り第三尾根の a 点（ここではもはや少しも尾根らしい感じはしない）へ出て昼食にする（一二・〇〇 ― 一・〇〇）。ここから再び中尾根の二峰へガレと偃松の間を登りコンティニアスで大スバリ頂上へ出る。この辺りでは岩は白味を増して非常に脆い。例の岩塔やぎざぎざ等はいちいちマークする価値もない。頂上で寝そべりながら縦走路を見渡したが今日は一組も通らない。

十七日　晴　キャンプ八・三〇―赤沢頂上九・五五―二峰一〇・一五―窓一一・一〇―猫の耳（右）一一・四五（一二・三〇）―猫の耳（左）一二・四五（一・三〇）―赤沢頂上二・五五―キャンプ四・〇〇

天候は相変らずだ。そして朝から馬鹿に暑い。長い国境線を北へと赤沢へ向う。二十分ほど進んだ赤沢寄りのキレット（図示）で全くスバリ・ゲビートを脱してしまう。スバリでは私はただお駒草の群落が多いことに気付いただけで岩の種目などははっきりは判らないが、ともかくマヤクボ以北、ここまでは大体一様の岩であるが、ここからは一変して赤沢ゲビートを表徴する赤褐色の岩になる。グラグラ登りで赤沢の頂上へ着いた（九・五五）。いよいよ西尾根の下りにかかる、と言っても偃松と岩混りの比較的太いリッジである。そして写真では明らかに出ているはずの二峰も類似のものがいくつも段階状に揃っているのでちょっと見分けにくい。二峰（一〇・一五）以下のピークをいちいちリッジ通りようやく密になってきた偃松をわけながらトレースすると窓の上へ出る。だが大スバリを越した瞬間あまりの期待外れに少しくたじたじの態であったが、それでも一個所興味を繋いでいたこの窓の下りも案外なものである。折角持参したザイルがリュックの中でにわかに重みを増したようだ。窓着（一一・一〇）。日蔭になった所で上ノ赤沢をのぞき込んで休憩。ここから第三峰猫の耳まではいよいよいやましの偃松である。尾根通しにもかかわらず風死して全くの灼熱である。猫の耳は左右両峰ともほぼ等高で頂上付近だけは偃松もない。右峰（一一・四五 ― 一二・三〇）の岩上で日中の直射に蒸し返されながら昼食を摂り、すぐ隣の左峰へ登る（一二・四五 ― 一・三〇）。ここはさすがに国境尾根の岬になっているだけに黒部の谷の大半を見下ろしての素晴らしい展望だ。小スバリ沢の白い磧が鋭く眼を射る。そして真青な水面が渇した我々を強く誘惑する。だが、すぐ下に真黒に繁っている相似峰を見た時、この暑さにヤブと悪闘してまで下りようというものは誰もいない、「赤沢はやはり

黒部から」を感じながら相似峰は中止してそうそう頂上へ引き返し、飛ぶようにしてキャンプに帰る。

十八日　晴、午後ガス　キャンプ八・〇〇―スバリ主稜四のバットレス―キャンプ一一・〇〇。

昨日の暑気に当てられたのか皆に緊張がない。相変らずの蒼空に引かされた貌で、中尾根の裾を深く密生したヤブを押し分けて、主稜西北端ⓐに出た。スバリ・ゲビート第一のスッキリした壁である。取付の最初から逆層のフェースが続く。小一時間の後、やっと第一段のピッチを通過した瞬間大事なリュックサック転落のアクシデントを惹起した。皆の顔には相当疲労の色があるうえにさっぱりやる気が湧かないので早速退却に決した。前日までの連続的なアルバイトが相当身体に響いている。午後は休養。

午後休養かたがた午睡をむさぼっている間に飲料水である残雪が消えてしまった。十五日ここにキャンプを定める時には充分一週間と見積もっていたものが連日の好晴、なかんずく昨日今日の暑さのために見事融けてしまった。事実、降雨より晴天の方がなくなるものだ。とにかく水気を絶たれた我々はもうここを根拠地とすることは出来ない。

さて前に言い落としたがスバリ赤沢を国境側から登る時にはこの水が先決問題となる。晩春初夏の雪の多い時季なればどこにキャンプしても差しつかえないが、夏季以後にはザラ場の多いこの地域で、しかも尾根筋ではよほど注意してさがさないと無い。なかんずく今年は稀有の寡雪であるためなおのことこの雪には苦しめられた。従って略図に現われた残雪状況は恐らく最も少ない場合を示したもので、例年なれば八月でもこんなことはあるまいと思われる。なおキャンプⅠの一つ北のピークの信州側に一つ小池があるが、濁水であるから飲料には適しない。

十九日　雨　ガス　午後晴れ間を見て、大スバリ、小ズバリを越えて残雪のあるマヤクボ乗越へキャンプ移転（図中の第二次キャンプ）。夕方新設の峠小屋へ行きそのまま泊。

二十日　雨　夕方晴れたのでやっと針ノ木を越えキャンプに帰る。

二十一日　晴　キャンプⅡ発八・〇五―大スバリ頂上―主稜三、四の鞍部九・一五―九・三五（四峰往復）―三峰一〇・一五（一一・〇〇）―P点二・四五―大スバリ頂上一二・一五―キャンプⅡ着一二・四五。

キャンプを移して気分がすっかり新しくなった。二日間のガスがパッと晴れて空はもとの澄み切った青に返る。大スバリ頂上へ縦走路通り進んで、ここから中尾根との間の涸谷を下る（図中の矢印）。ガラガラの荒廃し切った谷だ。踏む足の下から岩雪崩が出る。三からの幅のあるリッジを巻いて三、四のコルへ出る。先日も見受けた大きなかもしかがノソリノソリと偃松の中をうろついて怪訝な顔付きでやがてコルを小スバリ沢へと越えて行った。ここで少し休んで四峰を往復する。スバリ西尾根も四以西は偃松とヤブが多くなって面白くない。コルへもどってすぐアンザイレンして登りにかかる。初めはコンティニアスに進めるが三（一〇・一五 ― 一一・〇〇）を過ぎるとリッジも薄ぐなって往々ワン・アット・ア・タイムを繰り返していかねばならない。付近から次第とリッジの刻みが激しくなって、ついにぎざぎざの連続に変る。右は小スバリ沢へ数段の岩棚を介して数百米の垂直な壁が続くようになるとこの尾根も相当面白くなってくる。ぎざぎざはそう高くないので、いちいちリッジ通り登降して行く。岩は中尾根と同様撥き返されるように硬い。この第二番目のものに一つ完整したチムニーが涸谷側から入ってダイレクトにこのリッジへ取り付ける適当なルートを与えている。

やがてぎざぎざが途切れてしばらくすると、リッジは急に太くなって偃松混りとなる。そして大スバリの頂上が思ったよりも早く我々の前へヌッと出た。

二十二日　晴、夕立　キャンプⅡ―大沢小舎―ヨセ沢―大町へ。

11・12　立教大学山岳部　「厳冬のスバリ岳西尾根と赤沢岳西尾根」

『日本登山記録大成』第 13 巻 白馬・後立山Ⅲ
1983（昭和 58）年 11 月 30 日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『立教大学山岳部部報』第 8 号（立教大学学友会山岳部、1937 年)〕

要　約

1937（昭和 12）年 1 月 3 日の記録（報告は磯野新一郎)。
メンバーは、榎本忠亮、磯野新一郎（以上、立教大学山岳部)。
行程は、針ノ木小屋からスバリ岳頂上に至り、3 峰の先付近まで往復。
※スバリ岳西尾根主稜上部積雪期初下降・積雪期初登攀。

1937（昭和 12）年 1 月 4 日の記録（報告は須賀幹夫)。
メンバーは、須賀幹夫、立川正康（以上、立教大学山岳部)。
行程は、針ノ木小屋から赤沢岳頂上に至り、西尾根 3 峰（猫ノ耳）まで往復。
※赤沢岳西尾根上部積雪期初下降・積雪期初登攀。

上記ふたつの記録は、滝ノ小屋・畠山小屋経由で大沢小屋をベースに針ノ木小屋を使用した同部による 1936（昭和 11）12 月 29 日～1937（同 12）年 1 月 5 日の厳冬期登山の試みの間に行われた登山。いずれも同部によるナンダ・コート遠征登山の留守部員による成果。なお、スバリ岳西尾根と赤沢岳西尾根の両パーティー共通のポーターとして大町の案内人・桜井一雄が同行している。

スバリ岳西尾根

榎本忠亮　磯野新一郎　赤沢西尾根班と人夫桜井一雄を共同使用す

昭和十一年十二月二十九日　晴時々曇　大町―自動車―大出―滝の小舎（午後一二・三〇―一・三〇）―畠山の小舎（三・〇〇)

積雪例年になく少なくスキーを背負い歩く、畠山付近のラッセル脛の半ばなり。針ノ木小舎に燃料なきため各自五百匁の炭を持参す。総計二貫これにて約五日間炊事燃料に当てるはずであった。

三十日　晴　畠山の小舎（午前一〇・〇〇）―扇沢（一一・三〇―一二・〇〇）―大沢小舎（午後四・一五)

終日交互にスキーのラッセルを続く、小舎近くリュックの重みに相当足取り鈍る、小屋に数枚の蒲団あり。

三十一日　雪　大沢小舎（午前八・〇〇）―マヤクボ沢出合（一〇・三〇―一〇・四五）―針ノ木小舎（午後一二・二五)

前夜星空を眺め今日の出発を予定し針ノ木雪渓（大沢）のアルバイトに対し、極力荷物軽減に努めた。予想外のスピードをもって針ノ木の分水嶺に立つことが出来たのは幸いであった。沢の中頃より風雪はなはだしくなり尾根上は黒部側から吹き上げる雪まじりの烈風で思わず顔を掩う有様であった。

一月一日　雪後曇　偵察　小舎（午前九・〇〇）―同着（一一・三〇)

雪の小止みになったのを幸い、偵察に出る。これより登路即ちスバリ岳に至るコースを時間的にみて約二時間の損失であるが尾根通り歩くことに決めた、こはマヤクボに雪崩を起こすことを極度に警戒したためである。

三日　晴

針ノ木小舎（午前六・二〇）―針ノ木岳（八・一五）―スバリ岳（九・〇〇―九・二〇）―四峰（一〇・二五）―三峰（一一・三〇）―P の下（一二・〇〇）―スバリ岳（午後一・四〇―二・〇〇）―針ノ木小舎（三・〇〇―三・四〇）―蓮華岳（四・四〇）―針ノ木小舎（五・三〇)

この日は終日快晴、風も全くなし春山のような天候で疲れも知らず一日中歩き廻った感があった。スバリ

の西尾根は雪もほとんど着いておらず秋と大して変りなかった。大スバリ沢の直下する所、黒部の源流が黒々とうねっていた。帰路はマヤクボの雪の状態で大丈夫と思ったので近廻りをしてスバリより一時間にして小舎に戻った。小憩の後、蓮華を往復した、薔薇色に染まって刻々暮れてゆく劒・立山・後立山の連峰は我々に深き感銘を与えるのに充分であった。須賀班の帰着を待って目的を達した御馳走として貴重な炭火をフンダンに焚いて夜の更けるのも知らなかった。

四日　雪後晴　針ノ木小舎（午前七・三〇）―大沢小舎（八・三〇）

朝起きて見ると新雪が五寸ばかり積もっている。空模様は定まらない、一同大急ぎで朝食もそこそこで大沢を一気にスキーを飛ばす。滑降には絶好の粉雪で赤石沢出合あたりから大沢小舎までは直滑降の出来るコンディションだった。午後から榎本、立川は大沢へスキーを楽しみに行く。

五日　晴　大沢小舎（午前九・三〇）―畠山の小舎（一二・〇〇―午後一二・三〇）―大出（二・〇〇）―自動車―大町（二・三〇）

連日の好天で今日は呑気に里へ下った。思えば天候に恵まれた冬山であった。　（磯野記）

赤沢岳西尾根

須賀幹夫　立川正康

昭和十一年十二月二十九日―一月二日まで記録はスバリ班と同じ

一月四日　快晴

針ノ木小舎（午前六・二〇）―針ノ木岳（八・一五）―スバリ岳（九・〇〇―九・二〇）―赤沢岳（一一・三〇―一一・三五）―赤沢岳西尾根猫の耳右峰（午後二・一五）―左峰（二・三五）―帰り西尾根の窓（三・〇〇）―赤沢岳（四・〇〇―四・一〇）―針ノ木小舎（八・〇〇）

針ノ木小舎に入るまで冬として余り順調な天候に遭遇してしまったので、雲海所々に低くたれこめ層積雲の朝焼は今早一日の快晴を考えられそうもなかったが、晴れ間の少ない裏日本の天候は降雪を見ない限り出発しなければきりがないので、スバリ班と共に小舎を出発することにする。針ノ木岳までは尾根通し（前承のこと）ちょっと一個所悪い所があったが大したこともなく相互にラッセルをしながら進む、針ノ木岳を通過する頃から尾根に急に雪が少なくなるので大体夏の縦走路に従って歩く。これは終始黒部側から吹き上げてくる強風が雪を吹き飛ばしてしまうためであろう。案じられた天候もスバリ岳に着く以前から日本晴となってしまったので立山、浄土の黒部側から発している谷々の雪景色は初めて見る僕にとってすばらしく、また黒部川一帯の概念を一挙にして得ることが出来たのは、知りたいものだと思っていた関係上大変嬉しく感じた。スバリ・赤沢間の尾根は黒部側はなだらかで縦走路は尾根より黒部側へ一間ぐらい下った所のガレの中を通っており遠くから見た感じよりずっと良く上ったり下ったりの実に平凡なつまらない路であった。赤沢岳で中食、ここでリュックを置きザイル（三十米）、予備の手袋、捨綱だけを持ち軽装する、降口から見おろした下りは相当なので直ちにアンザイレンする、西尾根二峰は幾分大スバリ沢側をまいて通過する。尾根の大スバリ沢側は絶壁となっている上の赤沢側に比較すると断然ゆるやかなので、尾根通し岩場を苦労するより雪をふみ落す危険がない限りトラバース気味に下る方が時間も早いし楽なので、二峰からほとんど大スバリ沢側をまいて窓まで下る。この日は春のような気温のため雪は腐って足もとから切れそうな気もしたのでカンバや偃松に確実なホールドを求め六十米ずつ相互に下った。窓からは大スバリ沢側も急になりこの所、岩もカンバもちょっとなくなるので雪の細いリッジを時にはまいたりして猫の耳に達する、猫の耳、右峰と左峰の間に入っている上の赤沢の絶壁はすばらしいものだった。猫の耳の右峰からの引き返しは下りのラッセルがあるうえ、登りなので簡単だ、アンザイレンしつつもコンティニュアスにどんどん登ってしまい、下り三時間要したところを一時間二十五分で赤沢岳へ出てしまった。帰途スバリ岳から夜となったが、天候はなんら心配を要しないので電燈を頼りに、行きの足跡通りゆっくり小舎に帰り着くことが出来た。

（須賀記）

13　山岳同志会　「スバリ岳の西面 一九五八年八月の記録」『山と溪谷』第232号

1958（昭和33）年10月1日刊　株式会社山と溪(原文ママ)谷社発行

要　約

1958（昭和33）年8月5日の記録。

メンバーは、坂口伊助、仲条竹治（以上、山学同志会）。

行程は、マヤクボ出合～マヤクボ沢～スバリ岳西面中尾根奥壁。

同会は1958（昭和33）年8月3～7日、篭川谷マヤクボ出合にベースを置いて6人で合宿を行い、本記録のほか、西尾根北西稜、小スバリ沢奥壁、第3尾根、中尾根P1・中央稜などの小規模な岩場でバリエーションルートを開拓している。なお、本記録は仲条竹治の報告による。

※スバリ岳西面中尾根奥壁初登攀。

概　観

スバリ岳（二七六〇メートル）は後立山連峰の南端近くに位置し岩場の方言から起きた山名そのままに角閃小紋岩から成る岩山である。

黒部川に臨んだ西面には二本の顕著な岩稜があり、その幾つもの岩峰と支稜とが好個の岩場を展開している。本誌一七一号で吉田二郎氏がこの一部を紹介されたが、その後も訪れる人がないためにまったく静寂な登攀を味わうことができる。今までにごくわずかな尖鋭的岳人の記録があるだけで開拓期から抜け出していない。随所に処女的な匂いがする。

岩質はおおむね堅牢で快適だが、部分的にはきわめてアンサウンドの個所があって悪い。ルートによってはかなりスッキリした登攀が楽しめるし、壮大な岩壁や複雑な岩稜は穂高滝谷をやや小規模にした感じだといえよう。

第一尾根（主稜）、第二尾根（中尾根）、第三尾根等はいずれも縦走路から容易に指摘できる顕著な岩稜で、その北面は比較的緩やかだが反対の南面は一気に裁断したかのような切れ込みである。登攀の根拠地としては、針ノ木峠手前のマヤクボ出合か、またはマヤクボカールが最適で、八月の早いうちならば残雪が比較的多くあり、容易に融水が得られる。

私達は残雪が少なかったのでマヤクボ出合にベースを置き、連日マヤクボを経由してアタックした。

第一尾根

大スバリ岳頂上から一気に落ち込んでいる長大なリッジで、Ⅱ峯よりⅣ峯までが登攀の対象になるが、Ⅳ峯以下は藪が多くて問題にはならない。もっとも早くトレースされたルートである。Ⅲ、Ⅳ峯間の南面には相当のフェースを持っている。

北西稜

第一尾根Ⅱ峰付近から落ち込む短かく鋭い岩稜で、見た目ほどすごい登攀ではない。

下部は二本の岩稜に分けられている。

第二尾根

大スバリ岳頂上から派出しているすばらしいリツジで、Ⅰ峰よりⅣ峰まで数えられる。リッジの中央に聳立しているのがⅡ峰で、正面にオーバーハングがあるために現在まで幾つかのパーティがアタックしたがいずれも撃退されていた。私達はこれを右側から突破することができた。また、Ⅲ、Ⅳ峰間には注目すべきフランケがありⅠ峰の南壁は幾分傾斜が緩く、幾つものルートを提供してくれる。

中央稜

第二尾根Ⅰ峰からなぎ落ちる急峻な岩稜である。登攀はそれほど困難ではないが岩が脆いので充分注意し

なければならない。

奥　壁

第二尾根と中央稜の間にある狭小なルンゼで、どんずまりの壁にチムニーが二本、左右に並んでいる。壁は極度のアンサウンドである。

第三尾根

尾根というよりもインゼルといった方がぴったりする。小さなリッジであるが、第二尾根側にフランケがあり、二つの顕著なピナクルがある。

その他

第一尾根Ⅰ峰南壁、第二尾根Ⅲ、Ⅳ峰間の北面、小スバリ岳付近には小さいが気分のよいフェースが点在し、恰好のゲレンデにすることができる。

登攀小史

一　昭和五年七月、京大の藤田喜衛、工薬英司両氏と有明の大和由松の三名が第一尾根（主稜といっている）、第二尾根（中尾根といっている）を初トレースした。

二　昭和九年五月、立大の山県（原文ママ）一雄、浜野正男、清水竜三の三氏が残雪期のトレースを行つた。

三　昭和十二年一月、立大の榎本忠亮、磯野新一郎両氏が厳冬期の第一尾根を登攀した。

四　昭和二十七年七月、登嶺会の吉田二郎氏ほか二名が第二尾根Ⅱ峰コルからⅡ峰正面を試みたが撃退された。（初登攀の京大パーティもこの壁は試登不能）

五　昭和二十七年八月、登嶺会の吉田二郎氏ほか一名が第一尾根をⅢ、Ⅳのコルから登攀され、続いてⅣ峰バットレスがトレースされた。

六　昭和二十八年八月、登嶺会の高橋、小野沢両氏が第二尾根Ⅳ峰から登攀した。

以上が現在まで私達の知り得た範囲のもので、第二尾根Ⅱ峰はどのパーティも撃退され、今回私達によって初めてトレースがなされたほか、第一尾根北西稜、同Ⅰ峰南壁、第二尾根中央稜、同奥壁、第三尾根等が初登攀された。

行動日程

昭和三十三年八月三日―七日

八月三日　第一、第二尾根偵察（坂口、仲条、広瀬、大塚、川島）

八月四日　赤沢岳西面偵察（仲沢）
　　第一尾根登攀（広順、大塚）
　　第二尾根登攀（坂口、仲条、川島）

八月五日　第二尾根中央稜登攀（川島、仲沢）
　　第二尾根奥壁登攀（坂口、仲条）
　　第一尾根Ⅰ峰南壁登攀（坂口、仲条）
　　第三尾根登攀（広瀬、大塚）

八月六日　第一尾根北西稜登攀（大塚、川島、仲沢）

八月七日　下山

行動記録

第一尾根

私達二人は第二尾根パーティと一しょに、第一、第二尾根間のガラ場を落石に注意しながら、第二尾根側寄りに下ることしばらくで途中に残雪を見た。このあたりから周囲の岩壁を眺めると、ちょうど滝谷を思わ

せるようだ。第二尾根パーティと互いの健闘を祈って別れ、さらにガラ場を下って第一尾根末端に近づくとⅣ峰バットレスが見えてきたので、それを目標に藪の中に入る。やがて藪から出てみると、草付混りの傾斜の緩いバットレスの一部に当った。私達は直接バットレスには取りつかずに尾根の末端に出た。ここから下部はほとんど草付と藪で問題にはならない。取付点は畳が三枚ぐらい敷ける大テラスですばらしい展望台である。第二尾根が一きわ鋭く私達を魅了し、赤沢岳や、黒部川を隔てて劔、立山が手にとるように眺められた。アンザイレンして行動を起す。

最初の取付きは四メートルの二本のクラックが走り、上部は手強いカンテ状である。左のクラックにルートを求め、抜けてから左に六―七メートルトラバースすると、また二本のクラックとなり、右側のクラックを登るとかなり広いテラスに出た。このあたりは完全なリッジで右側は削られてスッキリしているが、左側は幾分傾斜が緩くハングしていて下部がよく見えない。リッジ通しに行くと、また小テラスがあって、そこを左にトラバースして上部に出る。ここはホールドが乏しく緊張する。ハンマーにものをいわせて乗切ると、強い傾斜の草付がⅢ、Ⅳ峰間のコルまで続いている。ザイルを解いてコルまでリッジ伝いに行く。

Ⅲ峰の取付きは二本の短かいクラックがあつて簡単に左を登ると、岩とハイマツのコンビネーションで、リッジ通しに左側をからんでⅡ峰とのコルに立った。左側のガレ場にはかなりの雪渓が残っていたので、私達は思いきり腹を冷し、クラッカーを詰めこんで休息した後行動に移った。右側のガレは案外に傾斜が少く、コルからニードル群を見上げると、スッキリしたチムニーが二本、上部に喰いこんでいるのが見えた。少し遊ぶことにしてコルからチムニー取付点まで二、三分下る。下部は身体がすっぽり入り、快適にずり上る。上部にくるとだんだん狭くなってなかなか手強く、やっと抜け出るとニードル群の中間部に出てしまった。

ここからは浮石に注意しながらⅡ峰を経て適当にルートを取ってリッジ伝いに行くと、簡単に大スバリ岳頂上に達することができた。

取付点（九時三十分）Ⅲ峰（十一時三十分）

Ⅱ、Ⅲのコル（十二時十五分）頂上（十四時二十分）　（広瀬良信）

第二尾根

コマクサの群落に目を楽しませながら針ノ木岳とスバリ岳のコルに出ると、正面に立山、右に劔、眼下には黒部川が望まれ、やや下流では関西電力の工事で山肌が赤く崩れて痛々しい。私達は大スバリ岳から第一、第二尾根の中間ルンゼを落石に注意して下る。第一尾根Ⅱ峰から派出する北西稜と、第二尾根Ⅱ峰上の顕著なニードルからなぎ落ちる中央稜の末端付近は特に悪く、一人一人が右、左と岩に張りつくようにして行動する。第一尾根からは上部に雪渓の光るルンゼが入り、その下では右から第二尾根と中央稜とに挟まれた急峻なルンゼが出合に涸れ滝を落している。この第二尾根側のルンゼは奥でチムニーとなり、すばらしい岩壁となっている。これがつまり第二尾根奥壁なのである。

傾斜が大分緩くなった頃、第一尾根パーティと別れ、Ⅳ峰直下のコルに藪を漕いで登る。Ⅳ峰の登攀ルートはまず十メートルのチムニーから始まる。コンテニアスで簡単に抜けるとこの上は四十メートルぐらいのチムニーが走り、中途に四個のチョックストンが詰まっている。いよいよアンザイレンしてアタック開始、まず右壁を背にして登ると最初の小さいチョックストンにぶつかる。どうも不安定なので奥に入って向う側にくぐり抜ける。このあたりは岩が硬いので快適にバックアンドフットで登ると次のチョックストンが頭上を押さえる。左手の壁に第一発目のハーケンを打ち込んで乗越すと、またチョックストンが現われた。一たん外に出るようにして少しづつ上れば簡単に突破できた。この上は再びチョックストンが被っていてさすがにうんざりさせられる。ここでは今まで右壁につけていた背中を左壁に移しかえ、右手をチョックストンの鋭い岩角にかけて、完全に体を宙に浮かすと同時に上半身を前に倒し、這うようにして登り切った。このあたりは左側に洞穴状を見、右側の奥には真黒なチムニーが足下に口をぽっかり開けていた。次のピッチは真中のリッジを馬乗りになって十メートルほど快適に登ればⅣ峰の上だ。ハイマツの中をコンテニアスでぐんぐん高度を稼いでⅢ峰直下まで行く。右側は見るからに脆そうなフェースだ。

Ⅲ峰は高距約五十メートルの大きなフェースをなし、正面はハング気味の上にきわめてアンサウンドでハーケンも打てない。やむなく正面は見送って右側のクラッチに入り、約三十メートル登ってから左手の岩角でジッヘルして後続を迎える。次は左の正面壁にアタックすべく、下から見えた草付のクラックまでトラバースを試みたが岩が次から次と抜けるので断念。そのまま頭上のクラックに入る。ここもアンサウンドなのでホールド、スタンスをチェックしながら慎重に登ってⅢ峰の上に立つ。

Ⅲ峰から見上げる第二尾根は凄く急峻に見え、藪もなくて盛んに登攀欲を唆る。第一尾根パーティとエコーを交しながらⅡ峰の基部に出て右のクラックをコンテニアスで登り、上のアンカーレッジに立つ。Ⅱ峰も高距約五十メートルを有し、第二尾根の興味の中心をなしている。正面を見るとハング気味で悪相を呈し、その左側はスムーズなスラブで絶望的。右側には中央稜との中間ルンゼめがけて切れ込むスラブで、そして上部は逆層のスラブであり、最上部がハング気味ときている。わずかにこのハングに走る細いクラックが登攀の成否を握るキーポイントと思われた。このⅡ峰こそ、いずれの先蹤者も撃退されたいわくつきの壁に違いない。私達はルート協議の後、右側にルートを定め、敢然とアタックを開始することにした。

ジッヘルを頼んでまず仲条がトップでトラバースを始める。上がハングしている巾二十センチほどのバンドをハングの下に手を入れ後に引かれそうな恰好で中腰になり、少しずつ右へ右へと体重を移す。もしここで落ちたら下のルンゼまで五十メートルはノーバウンドだと思うとどうしても緊張してしまう。やっと七、八メートルのトラバースが終ると、息つく暇もなく三メートル登り、いよいよ頭上を圧するオーバーハングの下に立つ。

左は完全なスラブで何の手がかりとてもなく、やっぱり右上の二メートルぐらいのクラックを狙う以外にルートはない。少し右に寄ってやっと見つけた小さなリスにハーケンを打ち込み、これを手がかりにしてさらにその上に一本打つ。それからハング下のホールドに身を託し、ぐっと右に乗り出し、右手を伸ばしてむりやりクラックに詰め込み、右足一ぱいにある外傾した小さなスタンスにきわどいバランスで立つ。クラックに両手を入れ、左足が上のスタンスにかかると右手はがっちり出口の岩を掴んだ。左手も伸ばして一気に登り切ると、もうそこは手足が自由に使えるⅡ峰の上だった。赤沢岳からの縦走者に向ってわけもなく大声を出してしまう。小さなニードル群を主に左を捲きながら登ると簡単に縦走路に飛び出した。

BC（六時十分）コル（七時二十分）下降（八時）取付（九時）Ⅲ峰取付（十一時三十分）稜線（十三時四十五分）コル（十六時）BC（十六時二十分）　（仲条竹治）

第三尾根

第二尾根のⅡ峰あたりから眺める第三尾根はきわめて貧弱で、末端の方に小さな四つのピナクルが連なり、Ⅰ峰の上部はわずか数メートルの草付の土手によって左右のガレ沢の境をなし、広い岩尾根を経て縦走路に達している。

大スバリの須上から赤沢岳へ向って十分ほど下り、第三尾根の東側の低いハイマツ帯のカールを約二十分ほど下降すると尾根の末端に着く。初めはフランケを登るべく西側に廻り込んで基部に行くと期待していた壁は無惨にも全面的に剥れ落ち、上部は大きくハングしていてものにならない。右端にⅢ峰の肩に達するクラック、チムニーがあるが簡単で面白くない。もう一つは正面壁とフランケとのカンテに無理すれば、と思われたがホールドに乏しく、しかもアンサウンドでハーケンも頼りにならない。私達はフランケを断念して第三尾根を末端から登ることにした。

西側の岩がきわめてアンサウンドなのに比較して東側はおおむね硬質である。取付点は東側のフェースに求め、左手の小さなリッジ寄りに登る。かなりの急傾斜だがホールド、スタンスが豊富で快適に登り、Ⅳ峰の肩に飛び出す。三十メートルの一ピッチだった。

Ⅲ峰正面は垂壁で、ピークはちょうど鳥の嘴のような恰好で大きくハングしている。ハング下から右上方に走る二本の浅いクラックがあり、これを利用できたらカンテを廻り、フランケの上部に出られるかも知れないが、見るからに悪そうだ。私達は一たん左手に下りながら東側のスラブ下のテラスにトラバースする。

右手Ⅲ峰寄りはきわめて急峻で取付けないので左手のリッジ寄りにルートを取る。約二十メートルのピッチで登り切る。次のⅡ峰は左側のチョックストンのある小チムニーを越すと簡単だった。Ⅰ峰は尾根筋からはずれて西側にある。これは東側からではぜんぜん興味がないので一たん第二尾根側のガレ沢に下降して西側に迂回する。チムニーが一本あるが上部が狭いのでその右手の脆いリッジを慎重に登る。約十五メートルであっけなくⅠ峰に出てしまう。これから上部は登攀価値がなく縦走路は目の前だ。

取付点（十時十五分）Ⅰ峰上（十二時）　（大塚湊平）

第一尾根北西稜

北西稜はⅡ峰付近から派生している岩稜で、Ⅱ峰直下のコルより下部は二本に分れている。

第一、第二尾根の中間ルンゼを下り、ハイマツを漕いで右側のリッジ末端に達してからさらに左リッジにトラバースした。初めはアンサウンドで、草付と浮石混りをノーザイルで登る。やがてナイフリッジになって快適だが、ところどころにハイマツが生え、勾配も大したものではなくて中央稜よりは劣る。そのうちにハイマツ帯に入り、約二十メトール登ったらコルに出た。

岩稜はここで一たん切れて再びⅡ峰バットレスの左手に突き上げている。見るからに脆そうで登攀価値がない。それと対照的なチムニーが中央の右手あたりにスッキリと深く切れ込んでいた。私達はこのチムニーにルートを求め、リッジ通しにしばらく登ってからトラバース気味に右手の小壁下に達し、それを直登すると浮石がゴロゴロしてチムニー直下まで続いていた。このチムニーは取付いてみるとルンゼ状をなし、下部は浅く、上部は深く、オーバーハングに阻止され、左手には一本のクラックが走っていた。左手にルートを求めて登り、やがてハング気味になったルンゼを逃げて左のカンテにトラバースした。

このあたりは実に快適そのもので、チョックストンの詰まったクラックを約十メートル登り、岩角にセルフビレイしてジッヘルする。黒部川を見下して気分がよい。やがて第一尾根の稜線に達し、後はニードル群を上下して縦走路に出た。

取付点（十時二十分）縦走路（十一時三十分）　（川島一男）

第二尾根中央稜

中央稜の取付きは、第一、第二尾根の中間ルンゼを下り、北西稜を左に見送ると右手のリッジよりすばらしいピークが聳立しているのに瞳目する。これが中央稜の八等ピークである。さらにその奥にはⅢ峰の岩壁が圧倒的に切れ落ちている。まさにスバリの核心部といえよう。取付点はまず第二尾根と中央稜間のルンゼから入ってすぐリッジに出る。この取付きのルンゼは中央稜の末端と並んで十メートルばかりの滝となつている。

リッジからは十メートルほどのチムニーが二本並んでいるが、その右手に入る。草付と浮石の詰まったところで中途にテラスがありここでアンザイレンする。中間ルンゼのどんずまりはバットレスをなし、チムニー、カンテ、フェース、洞穴ありのⅠ峰直下の即ち奥壁である。私達は再びチムニーを登るが、岩は鋭くて手の切れるような感じを受けつつリッジに出る。思ったよりも岩が硬く、完全なナイフリッジになる。特に右側は一気に切れ落ちている。二ピッチで八等ピークに達した。

この先はアンサウンドで岩がボロボロ抜けるので悪い。上部はクラックが三ッ頭のピークに分れている。二ピッチでリッジに取付く。ここはハングしていたが快適に登り、ナイフリッジ、クラックを三ピッチで楽しみながら三ッ頭に立つ。

次はハイマツのリッジを二十メートル行くとⅠ峰の北西壁に突き当る。左手オーバーハングのナイフリッジをトラバースし、ハング下でジッヘルする。このリッジの左側にはやや緩傾斜のスラブがあって、左に行くに従って登りやすい。私達はハングしたリッジのすぐ左手クラックに入る。ほとんど垂直の登攀だった。途中にチョックストンがあって体が浮いてしまい、ちょっと緊張させられる。クラックを登り切ればⅠ峰に立つことができた。イワタケのガリガリした上に跨って後続をジッヘルすれば眼前の雄大なパノラマに気をよくする。後続者がひと抱えもあるような岩を落し、ガンガンと猛烈な音響が静寂を破っていった。やがて

ピークを下り、右手をトラバースしてハイマツ帯を経て縦走路に出る。

取付点（九時）縦走路（十二時三十分）　（川島一男）

第二尾根奥壁

第一尾根Ⅱ、Ⅲ峰間ルンゼを下り、奥壁へのⅠ、Ⅱ峰間ルンゼ出合の滝は中央末端のコルから捲く。ルンゼの中は急峻なガレで、第二尾根と中央稜とからの落石が集中する危険な場所である。上部のリッジに登攀者がいる時には登攀は見合わせるべきだ。ルンゼから見上げる奥壁は中央にチムニーを持ち、右には顕著な洞穴がある。

チムニー内はアンサウンドで登れそうもない。高距四十メートルはたっぷりあるだろう。右手に巾十センチの外傾バンドが走っているので末端でアンザイレン。垂直な壁にかかっているこのバンドには、浮石が乗っているので慎重に行動し、カンテを廻り込むと胸のところでハングしたスラブに出る。リスが一カ所ありハーケンを利かす（残置した）。吊上げで登り、左側の大きな岩をホールドにして一たんカンテの上に立つ。今使ったホールドに足をかけた途端に脱落し、ブーンと唸りをたてて落ちていった。

カンテの上部はハングで登攀不能、右手のルンゼ状を浮石に気をつけて三十メートル一ぱい登ると草付の外傾したテラスに着く。後続の坂口は先刻のハーケンよりもなお右に廻り、アンサウンドのハングをバランスよく乗越してきた。テラスの上はハングなので左から登るとハングが二カ所あり、それを突破してから左をなおも登ればチムニーのちょうど上に立つことができた。もうここからは簡単に右側を登り、第二尾根の稜線には一投足だった。

中央稜末端（十二時）チムニー基部（十二時二十分）第二尾根稜線（十三時三十分）

（仲条竹治）

第一尾根Ⅰ峰南壁

昨日第一尾根を登ったパーティからⅠ峰南面のすばらしいフェースについて報告があった。この壁は高距約一五〇メートルを有し、総体的には硬質だが右側にはアンサウンドの部分がある。今日はこの壁を登ることにした。

小スバリ沢を緊張して下る。凄い落石で一歩ごとに岩雪崩を誘発するほどだ。途中で涸れ滝を三つ越し、四つ目の滝上を右手の薮に入ってトラバースすると、Ⅰ、Ⅲ峰間のコル直下に出た。この付近は屏風のようになり、右側より左にかけて高度を上げている。登攀ルートはと見れば、中央部に顕著なクラックが上下に二本走り、いずれも上部がハングしている。その右側には少し離れてチムニーが二本並んでいるが、小さくて上はガラガラのテラスだ。クラック基部までガレを登り、クラックを五メートル直上したが右側はハング、左は垂直のフェース、リスを捜したが見当らない。しばらく頑張ったがどうにもならず退却し、右にトラバースしてチムニーの裏側（この付近は大きく岩が張り出ている）に出てクラックを登り、不安定な岩場を左へ左へと二ピッチ上ると、目前にニードルが見える。このあたりは技術的に困難はないが浮石が多く、ちょっとザイルが触れただけでも落石を起し、後続が危険なので慎重を要した。第一尾根に立つともうスバリの頂上だつた。

取付点（九時）頂上（十時五十分）　（坂口伊助）

14　登嶺会 「赤沢岳・スバリ岳・針ノ木岳周辺 主として冬―春について」『岳人』第260号

1969（昭和44）年2月1日刊　中日新聞東京本社発行

要　約

1958（昭和33）年8月の記録。

メンバーは、 後藤忠剛、渡辺照（以上、登嶺会）。

行程は、赤沢岳西尾根～2峰南稜第1グラード登攀。

本記録の登攀時、後藤忠剛によって、赤沢岳西尾根の3峰（猫ノ耳）から大スバリ沢側へ落ち込む岩稜である南稜途中から2本に分岐した登攀ルートの、向かって左側を第1グラード右側を第2グラードと初めて仮称されたとある。第2グラートも同じ頃、同ペアによって登られたと思われる。

※赤沢岳西尾根2峰南稜第1グラート初登攀（同時期に第2グラートも初登攀か）。

赤沢岳・スバリ岳周辺は、後立山連峯の中では不遇の山々である。白馬三山や不帰周辺、五竜、鹿島槍周辺にくらべると入山者が少ない。しかし、この周辺の岩場の楽しさは決して他の山域に劣らない。ここを登った人びとはその独特の雰囲気を非常に嬉しく思うにちがいない。

大スバリ、小スバリのスバリ岳周辺の岩場はようやく開拓期から抜け出したばかりである。

積雪期にはアプローチと根拠地の設定に苦労する。ベースキャンプの位置としては、①小スバリ岳と針ノ木岳のコル、②赤沢岳とスバリ岳の最低コル、③屏風尾根と国境稜線との接合部付近、④小スバリ岳東稜末端の台地などであるが、最後のものは雪の状態によっては危険である。ベースキャンプ設置場所へのアプローチとしては、屏風尾根とマヤクボがある。屏風尾根は大沢小屋の少し手前から取りつくのであるが、樹林帯がきれたあたりからは雪の状態によっては雪崩による危険がある。マヤクボは冬はまったく通過できない。春は針ノ木雪渓の喉（のど）の部分の状態のいい時は国境稜線まで一気に七時間ばかりで達することができる。当会のパーティもこのコースを採ったことがあるが、その場合は屏風尾根を経由するよりはるかに経済的である。

赤沢岳、スバリ岳、針ノ木岳周辺の主な登攀対象は、北から赤沢岳猫ノ耳南稜第一グラート・同第二グラート・大スバリ岳中尾根・同西尾根主稜・針ノ木岳西北稜があるが、これらの他にも小さなルートは沢山ある。大スバリ岳第三尾根・小スバリ岳西稜・同東稜などである。その各登攀ルートについて以下にその概略を記すが、これから計画される方々からのお問い合わせには、知っている限りのお答えをしたい。

赤沢岳西尾根猫ノ耳南稜

赤沢岳西尾根のいわゆる猫ノ耳から大スバリ沢側へ落ちる傾斜約四十五度の岩稜で、途中から二本に分かれ、それぞれが登攀の対象になっている。ここは昭和三十三年八月、当会の後藤忠剛、渡辺照によって大スバリ沢側から、向かって左側の岩稜が登られ、この時の登攀者後藤によって、これを第一グラート、右側を第二グラートと仮称されたのが最初と思われる。

取りつきへのアプローチは、いずれも大スバリ岳と赤沢岳、中間の最低コルから下るのが一般的であり、一時間ほどで大スバリ沢に出る。そこは第一グラート、第二グラート中間リンネの正面になろう。中間リンネは傾斜もきつくつらいところだが、このリンネが二分する地点までは迅速な行動が必要である。

第一グラート

中間リンネの分れる地点から、左に分岐するリンネに入る。これはくの字に曲がり、第一グラート末端のブッシュを巻いてその上部へ突き上げるもので、幅も狭く急であり、雪質によっては左右どちらかのブッシュに逃げなければならず大きなアルバイトになる。リンネがゆるく右に曲がるところでリッジ上に出る。末

端から約三分の一のところである。小さな岩峯がいくつもつづく真直ぐなリッジである。これらの小岩峯は二〇㍍ほどの高さのフェイスなので、左右いずれかの側壁からこなして行くこととなる。上部に登るにつれて変化に富むが、八ピッチほどで第二グラートとのジャンクションピークの下に出る。これは左肩に入る一五㍍ほどの開いたクラックを登るが、ここはやや悪い。一㍍四方くらいのテラスを過ぎると、リッジは正面の壁で登路を阻まれる。右へトラバースしてチムニーを登る。ナイフエッジのリッジの登りで猫ノ耳に出る。

以上で南稜の登攀は終わるが、赤沢岳まで気のゆるせない西尾根を登らなければならない。雪庇は主として上の赤沢側にできる。窓へ下るところは雪壁になっていて悪く、二、三の事故があったように聞いているから慎重に行動されたい。窓から大スバリ沢側を登るが、広い斜面でもあるので雪崩には注意したい。登攀はよほどの好条件が揃わない限り、一日で抜けることは難しく、ビバークは避けられない。

第二グラート

中間リンネの分岐点から右のリンネに入る。すぐに両岸はせばまり、第二グラート P4 が、中間リンネ側に張り出した手前を右に入る。リンネの傾斜はさらにつよく、ハンドホールドのカッティングも必要であろう。リンネの突き上げは、正面に P4 を見るところで非常に狭く、二、三人がやっと坐れるくらいの場所である。

なお、このリンネに入る場合の雪質の判断は充分慎重にしたい。少しでも不安のある時は、面倒でも末端から取りつくことをおすすめする。

正面の P4 に取りつき、裏側のガリーへ入るところからこのルートの核心が始まる。雪の量、雪質によって断定しがたいが、ほぼリッジ通しに登る。P3 は正面がハングしているので左の中間リンネ側に降りて巻く。P2 まではところどころナイフエッジの岩稜である。P2 はこれも正面がハングなので、右側の外傾したスラブをトラバースぎみに巻く。P1 は正面がくずれ、その中がチムニー状になった面白い岩峯である。ルートはこのチムニーの中であるが、氷化していたり、雪が詰まっていたりすると苦労させられる。P1 からは JP 下のテラスまで続く雪壁になるが、JP 直下は胸がつかえるほどでいやなところである。

なお、登攀は第一グラートよりも困難であり、一回か二回のビバークは考えるべきである。

大スバリ岳西尾根

大スバリ岳から黒部湖まで落ちる長大な尾根で、上部の岩稜が登攀の対象になっている。取りつきまでは P4 フランケをとらえやすいという点から、第三尾根の右側を下る。中尾根末端のコルを越え、さらにルンゼをトラバースして、P4 フランケ下のコルに出る。少し登ったところから正面の右に傾いたクラックに取りつく。かぶりぎみのクラックは苦しい。このクラックを抜けて左よりに登ると、ビレーに格好なテラスがある。テラスから直上するとかぶりぎみになるので左よりに越え、P4 フランケの正面に飛び出す。これまでがこのルートの核心ともいうべきで、アブミのほしいところである。P4 フランケ部分はわりあい容易であり、すぐにリッジに出る。P3 までは緩い雪稜であるが、雪質によっては単調なラッセルに終始する。P3 は小さく、ルートは正面を登るものと、チムニーを登るものとがある。チムニーにはブルーアイスが張りつめ、上部が狭まっているので出口で苦労する。P2 はすぐ上にあり、正面を登ると頂上までは容易な雪稜である。登攀は一日で可能である。

大スバリ岳中尾根

大別して四つの岩峯からなっており、なかんずく P2 の登攀は興味あるものである。第三尾根末端を過ぎると、中尾根側に雪壁がひろがってくる。取りつきの P5 はこの下である。この P5 は帯状の壁でルンゼ側の雪面は格好のテラスになっている。P5 の登攀は手前側と突きあたりにあるクラックの二つがとれるが、どちらも大差はない。P4 までは下降中に見えた雪壁で、P4 直下の一ピッチは傾斜も増してくる。P4 は正面のガリーに入る。無雪期にはアンサウンドで嫌なところであるが、雪は氷化して浮き石も落ちつく。ガリ

ー上部は傾斜が増して出口はやっかいになる。P3 までは容易な雪稜であり、P3 は二段になった岩峯で、下段は正面のかぶりぎみのところを越え、上段は右から正面のクラックへまわりこむ。P2 は中尾根最大の岩峯である。正面にとりついてチムニーを抜けると、ハングにおさえられた中間テラスに出る。このテラスから右にハングをかかえるようにトラバースしてコンケーブ状になったところを直上する。ハングにおさえられるので、右のリッペへまわりこんで直上するのが一般的であるが、左のスラブをトラバースすることもできる。どちらにしても相当悪く、ことにアイゼンでの登攀は困難をきわめる。P2 の上はゆったりとした広いテラスで、頂上まではコンティニュアスで登れる雪壁が続く。登攀は一日で可能である。

大スバリ岳第三尾根

この尾根で問題になるのは末端の壁であるが、昭和三十二年夏に豊田が女性二人と登っただけで、積雪期はまだトレースされていない。

小スバリ岳西稜・同東稜

黒部湖を足元に見ながらの快適な登りが楽しめる。短い岩稜が西稜であり、マヤクボカールの北にある雪稜が東稜である。東稜は大略三本に分かれているが、北のものほど岩の部分が多くなる。

針ノ木岳西北稜

西北稜は針ノ木岳から黒部湖へ向かい、西北に落ちこんでいる尾根で、末端で右稜・左稜にわかれ、末端壁をもっている。

尾根は岩稜と雪稜とが半々で、岩稜は脆くかなり神経を使わされる。

西北稜の取付点へは、針ノ木岳と小スバリとの中間コルから西北稜を左に見ながら、小スバリ沢に下降するが、ルートは急で雪がしまっていない時は雪崩の心配があり、また積雪の少ない時は、落石に充分注意しなければならない。

左稜は三つの顕著なピークを目標に取りつく。ブッシュと浮石の多い尾根で、左にはチムニーが一本入っているが、上部でハングしているようなので、右の脆い岩稜を登りはじめる。できるだけブッシュを避けて、右に左に岩場づたいに五ピッチほどでⅣ峯に出る。稜はケルンのような岩で、さわる岩はほとんど動くか、落ちてしまう。途中、左のチムニーをのぞきこんで見たが、やはり上部はハングしている。

Ⅳ峯からⅢ峯までは、傾斜も落ちて楽になり、コンティニュアスで進む。Ⅲ峯は顕著なピークで面白そうに見える。Ⅳ峯の岩と多少異なり、いくらか脆さも少なくなり、コンタクトラインの登りは気分のよい約二ピッチで通過できた。Ⅱ峯の下までは雪稜で、右稜からの雪稜と一緒になる。

Ⅱ稜は右へまわりこみながらチムニー、フェイスと、思いおもいにルートが取れる。ここから上部は針ノ木岳頂上まで雪稜が続いて、のんびりと登る。

右稜の取りつきは、左稜取付点より約二〇〇㍍下で、末端壁は取りつきよりブッシュのあるチムニーが入っており、上部でハングしている岩も脆くかなり悪い。末端壁の上は、左稜と合流するⅡ峯の下まで雪稜である。

15・16・17　京都大学山岳部 「黒部中流合宿」『日本登山記録大成』第15巻 薬師岳・黒部川

1983（昭和58）年11月30日刊　株式会社同朋舎出版発行
〔初出『京都大学山岳部報告』第8号（京都大学山岳部）〕

要　約

1960（昭和35）年3月14～17日の記録（報告は酒井尚平）。

メンバーは、酒井尚平、高橋旨象、岡野一郎、伊藤寿男、橋本伊織（以上、京都大学山岳部）。

行程は、小スバリ沢左岸の支稜末端部付近から取り付き、1ビバーク後、針ノ木岳頂上に至る。さらに2ビバーク（うち1つは風雪による沈殿）後、スバリ岳を経由して下山。サポート隊と合流し、ベースキャンプへ戻る。

※針ノ木岳西尾根登攀（初登攀か）。

1960（昭和35）年3月14・15日の記録（報告は小浜維人）。

メンバーは、小浜維人、饗庭邦光、野村高史（以上、京都大学山岳部）。

行程は、サポート隊の支援を受け、アタック隊が赤沢岳西尾根末端部から取り付き、途中1ビバークし、赤沢岳頂上に至った後、下山。サポート隊のキャンプへ入る。

※赤沢岳西尾根登攀（末端部からの初登攀）。

1960（昭和35）年3月15～17日の記録（報告は大森義次）。

メンバーは、沖津文雄（京都大学山岳部 OB）、清水英男（京都大学山岳部）、大森義次（同）、中野正文（同）。

行程は、スバリ岳西尾根末端部から取り付き、その日のうちにスバリ岳頂上に至る。風雪のため2ビバーク後、下山し、サポート隊のキャンプへ入る。

※スバリ岳西尾根登攀（末端部からの初登攀）。

上記の記録は、いずれも、御山谷にベースキャンプを置いた同部の部員等25人による1960（昭和35）3月3日11日～25日までの春山合宿で行われた登山。

まえがき

秋の春山決定と同時に、赤沢西尾根及び第三尾根、竜王、獅子等の偵察、及び一ノ越へのボッカを終了し、ほぼ最終的な計画をたてた。冬山前には関電からトンネル使用の許可もおり、最大難事であったパーティ相互の連絡もAACKの好意でハンディ・トーキーを借りることができ準備に関しては相当明るい見通しであった。その後、アタックメンバーの割当、一回生の動かし方等、色々話し合った末、最終案は次のごとくになった。

一、目的

黒部中流一帯を広くトレースすることにより、昨年の黒部源流、今年の十字峡横断と合せ、積雪期黒部への山行を総合的なものにする。

二、対象

（前期）後立側　赤沢、スバリ、針ノ木各西尾根、大スバリ沢（下降路、サポート）

（後期）立山側　東一ノ越尾根、二、六八一米尾根、第三尾根、中央山稜、黒部別山、その他平まで、内蔵ノ助沢、御前沢のトレース等

三、メンバー及び係り

L　谷口朗、S・L　小浜維人、笹谷哲也、酒井尚平、沖津文雄（OB）、高橋旨象、白井一成、饗庭邦光、

野村高史（装備係り）、清水英男（気象係り）、大竹三雄（マネジャー）、守屋重孝（記録係り）、大森義次（食糧係り）、中野正文、山田直美、岡野一郎、伊藤寿男、岡阪令、富田幸次郎、仲甲三、羽根田博正、柊弓絃、村山弘治、橋本伊織、安原啓二（以上二十五名）

（谷口　朗）

偵察行（一九五九年秋）

赤沢岳西尾根

十月末に谷口と二人で弥陀ヶ原、一ノ越、雄山谷をへて偵察に出かけた。

赤沢西尾根を晴天二日で末端より完登したがこの尾根は約二、三〇〇米の森林限界までは、偃松のブッシュ帯になっており、ひどいアルバイトが強いられるだけで特に問題となるところはない。雪が積れば、かえって楽になるかもしれない……。最難関は何といっても相似峰左峰の登りであろう。岩はもろく、浮石の多いいやな登りだった。我々は小さなブッシュ帯に沿ってルートを取ったが、積雪期にこのブッシュが使えなければ、かなりの悪場となろう。左峰を登ってしまえば、特に難しいところなく、猫ノ耳も左峰に少し岩登りがあるのみで、右峰は容易に黒部側をまけた。

あとは長い雪面が主峰まで続いている。我々二人はほとんどアンザイレンせずに登ったが、春には相似峰左峰の登りから猫ノ耳までは、全てアンザイレンしなければならないであろう。

十月二十三日　快晴

九・二五追分出発――一・〇〇天狗――一・二五室堂――四・四五一ノ越――六・一五雄山谷を四〇〇米下ったところで沈。

十月二十四日　快晴

八・〇〇テント地出発――五・〇〇雄山谷出合――七・〇〇ダム地点――八・五〇御前谷出合。

十月二十五日　曇のち晴

七・三〇出発―八・〇〇大スバリ沢より下流二本目のルンゼをつめ左の尾根へ取り付く――〇・〇〇予定の尾根と会い、最初の赤旗つける――三・三〇左からくる尾根と会う――五・一〇～一五・四〇四峰と三峯のコル――七・〇〇三峰頂上――七・一〇ビバーク地。

十月二十六日　快晴

七・〇〇出発―九・〇〇二峰頂上（猫ノ耳左峰）――一・三〇主峰――六・〇〇針ノ木小屋。

（小沢良夫）

竜王岳及び鬼岳東尾根

十一月五日　大森と一ノ越小屋をあとにする。きのう晴れ間を利用して雄山に登り、上からのスケッチもしだいたいの概念をつかんでおいた。竜王岳、次に鬼岳と各尾根を少しずつ登り、取付点に赤旗をつける。なお獅子の尾根は問題にならない。

一、竜王西尾根はピークから東～東南の二方向をもって御山谷に落ちこんでいる岩稜で、雄山より見た時はものすごい傾斜に感じられたが、実際取り付いてみると大したことはない。下部は偃松漕ぎがかなりつづく。上部は不明。この尾根の途中にジャンクション・ピークがあり、これから東と東南に分かれ、その間にものすごい奥壁をもっている。実際この下を通った時は、絶え間ない落石のためでもあろうが、しばし足のすくむ思いをした。

取り付くのは東にのびている方からが妥当だろう（一ノ越より十五分）。はじめは堰松漕ぎ、それから岩になるが、十分いける見通しであった。ジャンクション・ピークにつき上げる所はかなりいやな岩登り、トラバースがあろう。それより上は十分な技術がいるのではないだろうか。時間がないので早々にひきあげた。

二、鬼岳東尾根、これは鬼岳のピークから出ている尾根と、もう一本鬼岳西南のピークからのとある。いずれも岩稜だが、傾斜はかなりゆるい。しかしナイフリッジが多そうで、随所にみられる岩塔のようなもの

をいかにこなすかが問題となるだけである。取付は三本ほどに小さく分れている尾根の内のルンゼを少し登り、尾根に出る。赤旗はつけたが短く大して面白そうでない。

検討の結果、他の尾根や沢で春山の計画は十分でこのような短い尾根は一応問題外とされ春山の対象にはならなかった。しかし竜王東尾根は短いがかなり困難そうだ。（野村高史）

第三尾根

十一月五日　一昨日から二日続いた曇天も、今日はカラリと晴れて、早朝からの素晴らしい快晴である。酒井と二人で第三尾根の偵察に行く。

雄山を登り、頂上から東に出ている二、六八一米尾根を下り、更にそこから東一ノ越尾根との分岐点とのちょっとしたコルからサルマタのカールへ下りる。昨夜の冷え込みで、雪は完全にクラストしていて、アイゼンが快調に効く。久し振りにツアックを立てるのは何ともいえない気持。陽光がギラギラしてとても暑い。

ここから望見した第三尾根は、圧倒的なフェースからなる第一の岩峰と、それに切れ落ちて続いている、第二、第三の岩峰とでできている。カールを下り切り近づいて見ると何とか登れそうだという気がする。表側（南面）は凄いが、裏側（北面）は、初めは左上に続いて右斜めに偃松つきのバンドが走っていて、これにルートを求めるより外はなさそうである。途中まで登ってみる。この時に完全装備で上まで登ってみるべきであったが、中途半端な偵察が将来に禍根を残すとは、神ならぬ身の知る由なしというところであった。左斜めに上っているバンドがつきるあたりまで登って、アップザイレンで下る。予想外に時間を食ったので、二、六八一米尾根の上部を縦走することは止め、いったん登って写真を撮り、すぐにトラバース気味に引き返す。

七・〇〇一ノ越発―七・三五雄山―九・〇〇取付――〇・〇〇登攀中止――一・三〇カール底――一・三〇雄山―五・〇〇御前小屋。

（大竹三雄）

行　動

合宿前期の日誌

一九六〇年三月九日　先発、酒井、大竹出発

三月十日　準急「ちくま」にて残り二十三名、前小屋氏等多数の見送りをうけ出発する。

三月十一日　雨　大町着（七・〇〇）。間組の御好意で特にチャーターしてもらったバス、トラックに分乗。三十分余りで後立の下をぬけ、黒四のダムサイトへつく。

雪は約一・五米。予想外に少ない。目の前に大タテガビンのガンドウ尾根が黒々と岩肌をみせている。御山谷ベースまでは夏のトラック道をゆく。道は左岸にありいったん上り、あとはゆるやかな下りとなって御山谷までつづいている。そののぼりきった所に間組の「御身等のいと安全を雲の上」という標柱があった。ダブルボッカで二時頃までに全てをベースまで運ぶ。余りたやすくベースまで入れたのと小屋の快適さに全員何か拍子ぬけの感じらしい。山の第一日目は苦しいものと決めてかかっている連中には、何か悪い事？をしたような気になるのだろうか。いよいよ今日から黒部での二十五人の生活が始まる。雨のあと小さなナダレが落ちている。

三月十二日　晴

赤沢岳西尾根偵察…L・小浜、饗庭、安原、富田

大スバリ沢偵察…L・笹谷、守屋、山田、岡阪、柊

スバリ岳西尾根偵察…L・沖津、高橋、酒井、岡野、中野

針ノ木岳西尾根偵察…L・白井、大森、村山、羽根田

タンボ沢→タンボ高地…L・谷口、大竹、仲

我々は計画当初よりこの後立側に重点をおいていた。トンネル使用によるアプローチの短縮で、前半に十分時間的余裕をつくり、特に体力的な意味からも偵察には十分時間をとることにしていた。

今日はまたハンディ・トーキーを初めて試みる日でもある。赤沢、スバリ、タンボ各一を持ってゆき、正午に交信する。感度は非常によい。今後の効用を約束してくれる。快晴、日の前に後立の各尾根があり大スバリの大滝が白い一条の線となって落ちている。大スバリパーティ以外は三時頃までにベースに戻ってきた。

天気はよくナダレの音もきかないので皆のびのびしてぃる。四時頃大スバリのパーティが少し遅いので「御身ら」の地点まで見にゆく。ここは大スバリ沢出合のちょうど対岸で赤沢スバリ間の稜線がはるか上に望める。偵察なので遅くても五時頃には帰るはずだ。もうコールが聞こえるだろう。もう聞こえるかと思いないらついに二時間も待つ。夕闇が急にせまり風が冷たくなる。多少心配になってきたのでベースに帰り皆に連絡。夕食ののち小浜等四人にザイル、薬品、食糧、ツェルト、トーキーなどをもって出迎えに行ってもらう。全員がこんなに遅くなる原因はナダレ待ちか？　ナダレにやられたか？　どちらかしか考えられぬ。「御身ら」には一台トーキーをおき二十分おきに交信。七時ごろ「オオスバリにリヒト五個見える」という声をきく。まったく涙が出るほどうれしかった。やはりナダレ待ちで四時頃目の前に何本もナダレが落ちたので慎重を期し、二時間ほど樹林中で避けていたとべべの話。分ってみれば当然のこと。しかし、とにかく皆無事でよかった。一番心配していた下降路のオオスバリも一応使えるめどができ、上のテント地も決めてきてくれたので偵察は今日中でほぼ予定通り終了した。

測水所の人の話ではナダレ(底ナデ)も大きな奴は夜中に起るとのこと。いったいいつが安全なのだろう？

三月十三日　小雪　全員　沈

昨夜半からの雪降りやまず、アタック全パーティ見合わす。大スバリの雪の状態如何では新雪なだれも十分考えられる。今後のようすで沢が使えない時も考慮して、針ノ木パーティにテントを持って上ってもらうことにする。赤沢は予定通り。スバリは明日ラッセルのみとする。前期の予定として後立アタックのほか秋に一ノ越へ少しボッカしすぎたので、これの逆ボッカもいつかしておかねばならない。午後明日の準備に各パーティ大わらわ。少し予定が変るたびに食糧係の大森、装備の野村等は悲鳴をあげている。全く御苦労さんなことだ。しかしこれだけスムーズに片付くのも小屋ならではの感がある。

三月十四日　小雪のち時々晴

赤沢岳西尾根アタック…L・小浜、饗庭、野村

赤沢岳西尾根サポート…L・大竹、村山、安原

針ノ木岳西尾根アタック…L・酒井、高橋、岡野、伊藤、橋本

スバリ岳西尾根ラッセル…L・沖津、中野

タンボ尾根→タンボ高地…L・笹谷、清水、守屋、山田、大森、柊、富田、岡阪、羽根田

キーパー二時起床。小雪がちらついているが、天気図よりよくなると判断し、赤沢、針ノ木隊出発する。べべ達はこの間のタンボ沢からタンボ高地というルートが余りよくないので、尾根からの新しいルートを開拓にゆく。「御身ら」からすぐ尾根の鞍部に取り付き、樹林中をスキーで上る。沢より約一時間早く、しかもなだれの危険は全くない理想的なルートを見つけてくる。二十時針ノ木隊と交信。現在位置、あすの予定など聞く。ローソク岩を越して少し行ったところらしい。昼前にローソク岩手前にいるのがベースから見えたんだが。赤沢の方は相似峰の下あたりか。

三月十五日　快晴のち吹雪

スバリ岳西尾根アタック…L・沖津、清水、大森、中野

大スバリ沢…L・笹谷、守屋、山田、富田、仲

一ノ越逆ボッカ…L・谷口、大竹、羽根田、岡阪、安原、村山

絶好のアタック日和。リヒトを点けて次々と出てゆく。ベースは七人になった。体の調子悪い二人を残し、一ノ越まで逆ボッカにゆく。まったく雲一つない快晴、風の通らぬ沢筋はまるで熱地獄のようだ。御山谷を

二、三年前ではウィーゼルが通ったという。今年は雪が少なくスキーのスノーブリッジを探すのに骨が折れるくらいだ。十三時一ノ越着。さすがに稜線は風が強い。この天気ならアタックも成功だろうと話しながらゆっくり谷を下る。そろわぬスキーでは登りより時間がかかるくらい。十六時ようやくタンボ沢出合につく。日がかげりだしたなと思ったとたん猛吹雪になる。全く瞬時のことだ。十六時三十分ベース帰着。ますます吹雪いてくる。アタック隊も気づかわれるが十七時三十分、十八時ともに感度なし。二十時吹雪の中をオタケと稜線の見えるところまでゆき、ツェルトを被って交信する。針ノ木よりかすかに感度あり。針ノ木頂上にテント、大スバリは赤沢隊を収容したらしい……あとは聞こえない。

直前の天気がすばらしかっただけに今日のような天気は本当に恐ろしい。

三月十六日　雪　積雪約四十糎。上とは朝からずっと感度ない。針ノ木のピークはベースからよく見えるはずなのだが。酒井の奴、まだ寝てるのかな。ストーブの脇にゴンパチさんが羽毛服を着てつくねんと座っている。学生時代最後の山だとスバリのアタックを楽しみにしていた彼だが、カゼには勝てぬ。第二次アタックも予定通りやれそうだと言おうとしたが「ふうーん、そやけどなあ……」といわれそうなのでやめた。夕方ようやく雲が切れ始める。十八時大スバリ、小浜の声をキャッチ、「赤沢、オオスバリ無事、スバリは昨夕コールあり。頂上付近でビバークのもよう。吹雪。視界0」。「了解。了解」

三月十七日　晴

タンボ沢出合橋工作…L・大竹、柊、安原、村山、岡阪

タンボ尾根より交信…L・谷口、羽根田

タンボ尾根、ワッパでゆく。羽根田のラッセルのあとをゆっくりのぼる。ビシビシとあちこちから枝の起き上る音がする。正午、大スバリと交信。小浜の元気な声。「全パーティ上のコルに集合した。十六時三十分上を出るいわゆる第二便で下る予定」。新雪は粘着力ありその下ザラメ、スノーボールがぼんぼん落ちる。十七時三十分四名で出迎えにゆく、十九時出合につく。リヒトが見えた。ゴリカン、チョンペー、ゲジ……二回生の頼もしい顔、一回生の嬉しそうな顔、続々現われる。酒井のちょっとしけた顔、高橋さん、キョン、最後にベベ、皆で十三名。本当に御苦労さん。心から握手をかわす。ベースまでを待ちきれず各パーテイの話がはずむ。

夜、話し合いの結果、明後日第二次アタックを出すことにする。とにかく一日のラッシュで上のテントへ入れるところ、スバリ、針ノ木にしぼられる。ザイルパーティの関係で難があるが希望が強いので一応スバリにする。

三月十八日　晴時々小雪

スバリ岳西尾根ラッセル…L・大竹、岡阪、柊

タンボ尾根より交信…L・谷口、白井、羽根田、村山、安原

大スバリのコルより針ノ木岳往復…L・小浜、富田、仲

昨日下ってきた者は全員休養。総勢二十一人、やっともとのにぎやかさにもどる。タンボ尾根で上と明日の予定などについて打ち合す。

夕方ラッセル隊も帰ってきたので、もう一度検討した結果、五人ではやはり時間的に非常に悪いので針ノ木に変更する。二十時上にこの旨伝える。

夕食後、腹の感じが少し悪いのでみてみると手術のあとが黒く変色し、開きかかっている。岡野にいわせると彼が裂けた時とまったく同じ症状らしい。覚悟はしていたもののやはり残念だ。二、三日休養してようすをみることにする。明日のキーパー、大森と岡野が徹夜でがんばっている。天気はよさそうだ。

三月十九日　快晴

針ノ木岳西尾根アタック…L・白井、笹谷、大竹、守屋、山田

針ノ木岳西尾根サポート…L・沖津、伊藤、岡阪、柊

タンボ尾根⇄御前沢⇄クラノスケ乗越…L・高橋、清水、橋本

大スバリのコル⇄岩小屋沢岳…L・小浜、富田、仲、野村

予想通りすばらしい星空。二時半、サポート隊出発、二時間近く遅れてアタック隊出る。外に出ると針ノ木尾根はるか上にサポート隊のリヒトが見えがくれする。朝食をすませ、一眠りとシュラフにもぐりこんだとたん、キョンの声にたたき起こされる。もうジャンクションあたりまで行き引き返してきたらしい。入山以来一番よい天気だ。針ノ木のスカイラインに時々ラウヘンが上るのみ。内蔵ノ助パーティ、タンボ尾根から御前へよい下降路が見つかったと早く帰ってくる。十八時まさかと思っていたアタック隊が小浜とともに下りてきた。皆すごいファイト、大竹などもう一度アタックしそうな顔をしている。ベベは明日のため上に残る。明日は上を全て撤収して第一便で下る予定。話す小浜の顔も浅黒く雪やけしてたくましい限りだ。夜にふるような星空。明日一日の好天を祈ってシュラフに入る。

三月二十日　晴、夕方より曇

大スバリのコル→ベース…L・笹谷、富田、仲

タンボ平⇄東一ノ越…L・高橋、清水、大森、岡野、橋本

御前沢→内蔵ノ助乗越→内蔵ノ助沢→ベース…L・沖津、饗庭、伊藤、岡阪

ベベ達は元気に帰ってきた。最初の日のなだれにこりたのか、もう二度とこの沢は行きたくないと言っている。彼はこれで五度のぼり下りしたことになる。

ともかく前半は無事終了した。ベースに戻りゆっくり釣りにゆく。ユキムシでよく釣れる。本流の淵で柊達が尺余の奴を五、六本も上げてきたのには驚いた。大きなのは背開らきにして塩焼きにする。

内蔵ノ助へ行った連中が少し遅いので心配していたところ十八時ごろ伊藤、岡阪が饗庭のネンザを伝える。すぐ酒井等二、三人にトーキー等持ってもらう。ダムサイトの事務所で御世話になり泊めてもらうことになる。明日白井氏とともに下ろすことにする。不可抗力か？　彼の心情よくわかるような気がする。しかし彼の場合は赤沢岳アタックをやれたのがせめてものなぐさめか。

三月二十一日　雨　全員　沈

予定通り前半と後半の移り目の沈。ちょうど雨となる。小浜等が饗庭を送りに出る。皆は寄せ書きをして託す。間組の好意には本当に感謝あるのみだ。午後、前期の反省会及びさやかなティパーティを行う。

笹谷「午後四時ごろのナダレ、日射による融水を滑走面にしたナデに注意せよ」

小浜「アタックの時、サポートのおかげで時間的に非常にうまくいった。アタックに砂糖一人五十グラムは少ない」

沖津「岩が現れる前にヤッケ、手袋等完全にせよ。人数は四人でスムーズに行けた（ザイルパーティ二）。ザイルの三十米、四十米を何かではっきりさせておく必要あり。サーマターにスフが混じっていた者は凍傷にかかった」（スバリ）

酒井「荷物重く一回生には少し無理。ラジウス不調でひどい目に会う。ピッケルバンドの有効な使い方。トーキーを使う時一方的でも分っていることを皆云う。相手が聞こえないからといって切らない」（針ノ木）

以下、前期の後立山連峰西面のアタック記録を順に載せてゆく。　（以上、谷口記）

赤沢岳西尾根

赤沢岳より西へのび、黒部川におちている尾根を我々は赤沢岳西尾根と呼んでいる。この尾根はいまだ積雪期には登られておらず、この尾根を登ることは、今度の合宿の主要な課題であった。

秋の偵察をもとにしてたてた計画では、二、三〇〇米の森林限界付近に雪洞を掘り、好天をつかんでラッシュすることになっていた。しかし三月十二日の偵察の結果、今春は異常に積雪が少なく、とうてい雪洞を掘ることは不可能であることが判った。おまけに雪質は極度に悪く、偵察の時はやっと一、九〇〇米ぐらいまでしか登れなかった。そこで我々はベースから四日分の食糧とツェルトを持ってアタックすることに計画を変更したのである。

三月十四日　快晴のち小雪　早朝サポート隊が先発した。とうとうと流れる黒部の上は満天の星空であった。しかしアタック隊が出発するころはもう小雪がちらつきだしていた。天気は快方にむかうはずだと、我々は黒部第四発電所の工事現場へと凍てついた道を下って行った。発電所取水口横の尾根の末端にはしごがあったが、上部が悪いのでこのルートは放棄し、この尾根の北側に入っている小さな沢をつめることにした。雪が少なく、傾斜も緩いのでなだれの危険はなかった。ややあって尾根にとっついた。サポート隊のラッセルのおかげで、偵察の時よりも約三時間が節約された。尾根は一個所きれていて、十米ばかりの岩があるがここはアップザイレンで下った。この岩の上でサポート隊と合流した。下ったところは小さなコルで、そこから急な雪面の登りがはじまる。この雪面を登りきると、ブッシュをまじえた岩がでてきた。ここでサポート隊と別れた。

岩を登りきると深いラッセルがあり、また岩がでてくるといったいやな登りが続いた。やがて尾根は一層やせてきた。森林限界にきたころ、全くこつぜんと相似峰があらわれてくる。ブッシュや偃松がついているが、約百米の堂々たる岩峰である。小雪はいぜんとして降りやまず、いやな天気であった。最初の計画ではこのあたりに雪洞を掘るはずであった。昨夜の天気図から、天気は明日をピークとして下り坂に向うと判断されていた。今日この岩峰を登っておくことは明日の行動を楽にする。ともかく左峰を登ることにした。正面の壁の左方に大きなガリーがはいっていた。取り付いてから左へトラバースしてこのガリーに入れば楽であろうと見当をつけ、小浜、野村、饗庭の順にアンザイレンした。

いざ登ってみるとガリーへのトラバースは悪く、左寄りへ直登することにした。適当なテラスもなく、ミッテルの野村はザイルさばきに苦労していた。幸い彼はゼルプストをしていたので大いに助かったが、こういった場合、四十米ザイルに三人というのは著しく行動をにぶくする。岩はいたってもろく、偃松を雪のなかから掘りだしてホールドに使ったが、偃松の上の雪が落ちてきて全身雪だるまのように真白になってしまう。約三時間かかって登りきった。

左峰のピークにはやや平らな雪面があり、右峰へいやなやせ尾根が続いている。このピークでビバークと決し、ピンクのツェルトをかぶる。大きなツェルトで居心地はいい。風は弱かったがまだ小雪がちらついていた。今夜は今までのような生あたたかい夜と違ってグンと冷えこみ、雪で濡れた身体には寒さがひときわしみこむ。二時間おきぐらいにコッフェンをして、夜明けを待った。あまりの寒さにツェルトの外へでてみると、いつか快晴の夜空にスバリ、針ノ木が大きくそびえていた。星が冷たく光り、寒さがミシミシと音をたててツマ先にしみこんでくるようだった。

サポート隊出発（四・〇〇）、アタック隊（五・〇〇）―尾根取付（六・〇〇）―サポート隊合流（八・五〇）―サポート隊と別れる（一一・二〇）―相似峰左峰取付（一三・四五）―左峰頂上（一六・三〇）

三月十五日　快晴のち風雪　待ちに待った朝がやってきた。輝かしい白銀の朝だ。しかし水気のないラーメンはなんとまずいことか。今日の雪質も極度に悪く、ラッセルは深くゴジラ落しはいたるところにあった。右峰へのやせ尾根もたいしたことはなかった。右峰の下りはアップザイレンで下った。今日は大分アップザイレンを用いた。猫ノ耳の左峰は見たところ凄い岩峰である。しかし登ってみるとたいしたことはなく、雪面をアイゼンをきかして登れた。ただ最後のトラバースがいやだった。左峰から右峰へのナイフリッジも雪質が悪くいやだった。しかし右峰は平凡な岩峰に過ぎない。窓はいかにも名前にふさわしい大きなコルであった。ここからサポート隊がスバリの北側のコルへテントをはっているのが見え大いに気を強くした。

窓から二つばかり岩峰を越えると二峰だ。これもたいしたことのない岩峰であった。いつのまにか、いやな雲が立山をおおい、フルスピードで我々の方へおしよせてきている。雲と競争しながら二峰を登りだす。赤沢のピークとの間にもう一つコルがあるのかと思っていたら、意外にも尾根は急に広くなりそのままピークにつらなっていた。何だか気のぬけるような平凡なピークであった。我々がピークに達したのと同じくガスもピークを包み、やがて吹雪になってしまった。疲れた身体で吹雪とたたかいながら、ここからテントまでちょうど一時間の道のりであった。

見たらすごい岩峰の連続であるこの尾根も、実際登ってみると意外に簡単な登りであった。

出発（八・〇〇）―相似峰を下りきる（九・二〇）―コル出発（九・四〇）―猫ノ耳右峰取付（一〇・三〇）―窓（一二・四〇～一三・一〇）―赤沢岳頂上（一五・〇〇～一五・二〇）―テント（一六・二五）　（小浜維人）

スバリ岳西尾根

三月十五日　やっとアタックの時が来た、ほんとうにそんな気持であった。赤沢岳西尾根、針ノ木岳西尾根はきのうすでにアタックに向った。自分達だけがとりのこされたようでおちついていられなかった。

キーパーの心づくしの朝食もそこそこに飛び出す。夜明け前の夜気が我々のほてった顔に気持よい。凍てついた吊橋を走るようにわたり、尾根に取り付いた。きのうのラッセルは三日分の食糧と三ツ道具でザックをふくらませた我々にはスタンスが大きすぎた。しかたなくヨイショヨイショと登る。とたんに汗びっしょり。いやなヤブこぎから解放されて思いきり首をのばすと、立山の雄大な姿が朝日にかがやいていた。太陽はまだ我々の所まではとどかない。雪のクサらないうちにきのうフィックスをはったイヤなルンゼを通ってしまわねばならない。また最後の岩稜が全く未知なのだから、できるだけかせいでおいた方が良い。フィックス個所をすぎ、ジャンクション手前の岩峰をまき終った頃、ようやく我々の尾根にも日があたりはじめた。きのうラッセルに来た時より二時間も早い。ホッと一息入れ、早い昼食にする。劔、立山、五色、薬師の山なみが朝日にかがやいている。すばらしいながめなのだが、目がいたくて長くはみていられないのが残念だ。

ここから先はラッセルはなくなり、未知の世界に入る。自分の体で見、感じ、行動することができる世界だ。なんとすばらしいことか！　何米登るとバンドがある。そこでジッヘルして何米トラバースしてルンゼに入り……etc、etc。そしてこのような文献を忠実にたどると頂上に出る。こんな山登りの多いこの頃である。この尾根が今まで未知で残されていたことに感謝したい気持だ。ここにはパイオニア・ワークの喜びが残されている。しかしなんとちっぽけな、自己満足的なことか。それにつけても日本の山からパイオニア・ワークをうばっていった先輩達がうらやましく、また腹だたしくなる。

昼食をたべ、十分休んだ我々は先を急いだ。時々ゴジラ落しにはまりながらたんたんとした登りをジャンクションを目ざして行った。ジャンクションに出るとすばらしいながめだった。赤沢西尾根のノコギリのような山容。えぐりとったようなルンゼはなだれの巣だ。大スバリ沢をつめたサポート隊は今頃この下あたりにいるのではないだろうか。彼等の心中、察するに余りある。猫ノ耳の基部に黒点が三つ動いている。実にのろい。アタック食が悪く消耗しているのだろうか。こんな時でも食糧係が顔を出す。アリよりも小さく見える彼等を見ていると、バク然とした虚無感におそわれてくる。

ここから最後の岩稜までは快適な雪稜が続いている。天気はポカポカと快い。この分だとおそくとも二時頃にはサポート隊のテントにつけるなどと虫の良いことを話しながら雪稜の散歩をたのしんでいた。立山の上にかかってきたうすい雲なんて考えてみる者もいなかった。後にどんなことが待っているかも知らないで我々は快適な散歩を楽しんでいたのだ。針ノ木隊の長い隊列が見えがくれする。

この快適な散歩も終り、岩稜の基部に取り付く頃より風が強くなり、立山の雲が急速にその濃さを増して来た。春山である。もう少しは、少なくとも我々が登り終えるまではもってくれるだろうと誰しも考えていた。基部から二ピッチをワンアットアタイムで進むと、アレートに出た。コンティニュアスで進む。ザイル・パーティを沖津・清水、大森・中野の二パーティに分けていた。我々は雲と競走するような気持で登っていった。我々の希望的観測に反して、天候がくずれはじめた。しかし頂上はもうすぐそこだ。もうすこしがんばりさえすれば我々の努力が報いられるのだ。

我々の前には全然雪もよせつけないジャンダルムが厳然と行手をはばんでいる。左にルンゼをトラバースして行けぬこともなさそうに思われたが、我々の気持はジャンダルムに背をむけることはできなかった。清水がトップに立つ。アイゼンをガリガリならしながらジャンの頂上に立った。何ということか。その先はスッパリと切れているではないか。しかもその先に第二第三の岩峰が立ちはだかっているという。天気は完全

にくずれてしまった。猛烈なふぶきだ。先を急がなければならない。清水が苦心サンタンしておりるのを背にして、大森・中野はトラバースをはじめる。ここもいやな所だ。ツアックに全神経を集中して登る。二ピッチでまき終り、アレートに出る。左は急なルンゼがおちこんでいる。右をみればスッパリときれた壁が時々ぼんやりと見えてくる。マツゲが凍りついてしまって思うようにはかどらない。しかし何事にも終りがあるものである。我々は平らな雪面に出た。ここが頂上だった。

頂上を踏んだ感激もそこそこに、下降路をしらべるが、キョンさんが五年前に歩いたことがある以外、だれも経験者がいないため、さっぱりわからない。ものすごい風、雪。しかたがない。唯一の平らな場所である頂上でツェルトをかぶった。これから後にたのしい二晩のビバークがはじまる。

出発（四・三〇）―第一の岩峰（七・〇〇）―フィックス（七・三〇）―ジャンクション（九・三〇）―岩稜基部（一二・〇〇）―頂上（一七・三〇）―ビバーク（一八・〇〇）

三月十六日　終日風雪強し　沈。

三月十七日　あいかわらず風は強いが雪はやみ、朝がた星が見えだした。

羽毛服を着たまま出発。二晩のビバークで相当バランスがおかしくなっている。ようやくのことでサポート隊のテントが見える場所に来た。しかしテントはシーンとしている。チョン平が「べべ、起きろ」と叫ぶ。我々もうれしくなって同じように叫ぶ。べべちゃんがビックリしてはい出してきた。そのさまを見て我々は心から笑った。（大森義次）

針ノ木岳西尾根

針ノ木岳西尾根は後立山の南端を区切るにふさわしく長大な尾根で、平まで長々と裾を拡げている。針ノ木に隣接するスバリ、赤沢の西尾根がいずれも赤褐の岩稜が複雑な凹凸を見せているのにくらべれば、この尾根はローソク岩のリッジを除いて雪線の美しい尾根である。これを立山からみるとき、重量感は圧倒的である。ローソク岩まではタンネが尾根を濃く色づけ、そこから美しい雪線が稜線を濃淡に分けてのびている。山頂は何本かの岩尾根が収斂して、ピークは鋭く空をさしている。

関大が既にこの尾根に赤旗を結んでいるが、今合宿の主目標の一つであり、我々のトレースは全計画の南のボーダーラインである。ルートは平らかではなく、ローソク岩から小スバリ沢と黒部主流の合流点にのびている支尾根にとった。

三月十四日　晴　朝六時すぎベース出発。空は心配ない。留守部隊のお見送りをうけて、赤沢、スバリ隊と各々出発するさまは夏山合宿と良く似ている。雪山はこれまでラッシュばかりだったからでもあるが、今度のような軽快なアタックは珍奇な感じである。下には留守部隊がいる。針ノ木に登ればサポート隊が待っている。ましてトーキー持参だ。登ることにはちがいないが、駅を出て次の駅へ山越えして行く汽車のようではないか。スバリや赤沢のアタックはある程度サポートが要るとしても、登ったらサポート隊が食わしてくれるという計画の仕組にやはりしっくりしない感じがする。春山合宿は部の総力をあげて行う有機的登山であるのだからとは考えていたが部の「総力をあげて行う」ということは大人数の部員をなんとかまとめることで「有機的登山」とはそのためのマネージメントにすぎないと云ったら云い過ぎだろうか。

ともかく荷は軽かった。五日分の食糧とテントが主なものでシュラフなしだから苦はない。五人は傾きかけた吊橋を黒部本流右岸に渡り、小スバリ沢の出合から沢に入って歩いていった。十四日につけたラッセルはところどころラウヘンで消えてはいたが、苦もなくピッチは進んだ。出合から沢をつめ最初に派生した尾根に取り付く。小スバリ沢は出合からしばらく行くと、次第に幅をせばめてへつり多くなだれの危険が大きいのでほとんど下流から通行不可能である。尾根の取付は尻セードしたくなるような傾斜面で、一ピッチほどで稜線に出る。タンネが密生しており、幹の間をくぐりぬけて進む。一個所胸突きの斜面がある。ここは西側の沢身をトラバースした。五糎ほどの新雪がアワとなって流れる。海辺のさざ波のようだが良い気持はしない。

四囲の展望は次第にひらけてくる。立山東面が朝陽に映えて美しい。空の色が眠気をさまして次第に深味のある濃青に変る。赤沢、スバリはどうだ。このいかつい岩尾根はまだ光があたらず、黒々と東雲にギザギザしたスカイラインを区切っている。針ノ木の尾根は指呼のうちである。まことに威風堂々として大地にふんばっている。粘土色をしたローソク岩は近づくにつれて峻厳な様相を見せる。平にのびる主尾根ジャンクション手前の十四日のラッセル引返点に正午到着。ラッセルのときは六時間半かかったが今日も余り変らぬ。大休止。

ボソッボソッとぬかる雪稜を一ピッチ行くとジャンクションである。幅拡い尾根筋はここで一変した。スバリ側は粘土色の岩が林立して針ノ木沢側は深く雪斜面が切れこんでいて行手にもろい岩の小突起が次々と現われる。しばらくの間南側をザイルフィックスしてトラバースする。ローソク岩の中心部はこのあたりだろう。長さ五十米ほどの両側とも切れたリッジが行手を阻んでいる。リッジは敬遠して針ノ木側の雪面から稜線へ取り付こうとする。六十度位の急斜面で肩と頭で階段をつくり、雪だらけで上に登ると三坪ほどの窪地があった。全員ここに登って一まずたばこをふかした。このあたり随分と手こずらせるが、変化があって面白い。皆張り切っている。ただ午前中の快進撃はいまいずこピッチは俄然おくれて二百米ほどのところを二時間かかってしまった。

さきは岩が続いているので、高橋さんと二人でルート工作する。小スバリ沢側からクラックを登るとボロボロした岩壁が出てきた。ザックをかついでは無理なので空身でのぼる。上は二人以上は立てない馬の背で高橋さんが登ってくる。次にザックを吊り上げる。上からだけでは岩にひっかかって上らず、対面の岩の上に岡野に登ってもらいチロリアン風の吊り上げをする。足場がおだやかでないので腕だけでひっぱるものだからえらくしんどい。ふと見ると針ノ木側の岩の上ブロッケンの環が映ってなんとオレ様が御光を発しているではないか。岡野などは嬉しくなって手をふり上げたりザイルを動かしたりしている。緊張の連続もしばしなごんだ。立山東面が次第に影を濃くして冷えこんでくる。この難場をこしたのは七時近くで六時間かかった。軽いといってもキスリンがじゃまになったのが最大の因である。

テントに入リエッセン準備。ラジウスが不調で満腹したら零時近くだった。ラジオが「三月十五日はシーザーが予言者の忠告を無視して裏切られた日である。皆さん三月十五日に御用心」とはなしている。「オレ達も用心せんならん」と寝につく。

ベース出発（六・一五）―ジャンクション（一三・〇〇）―テント地（一九・一五）

三月十五日　晴のち雪、風強し　ラジウス不調で出発がおくれてしまった。ここから先はずっと雪稜で気持良く歩けた。ひるすぎキレットにつく。五、六十米切れていて、ここはスバリ沢側をトラバース気味に下る。尻セードしたくなるような斜面だがラッセルは深い。底から先は取付が岩場になっていた。荷をかついで珍妙なバックアンドフートで登り岳樺の枝をにぎってのぼる。誰かがピッケルを落してヒヤッとしたがうまく見つかった。ここでもザックの吊り上げで時間を食う。

稜線は樹林帯をすぎた。遠く槍穂が針ノ木の上方、船窪の彼方にかすんで見える。山はこともなく静かだ。ただ風だけが冷たくヤッケをバタバタさせる。テルモスの紅茶をのむ。橋本がブカブカの手袋でコップをおさえて飲んでいる。鼻水をたらしながら。伊藤は甘納豆。伊藤はいつも静かだ。デルファと同じようなメガネをかけてどこともなく眺めている。あとの三人はたばこに火をつけるのに苦労している。

ここから岩の露出した尾根を少し行くと針ノ木山頂の下である。正面は意外に立派な岩のフェースでスバリ側に二本の岩尾根がありわれわれはこの間のルンゼをのぼった。この頃から上天かきくもり、立山の方から黒雲が近づいてきた。頂近くショッパイ所が多くなり、横なぐりの霰に手こずる。一回生が岩場でストップ。ザイルを出してみたがうまくいかない。頂上はすぐそばだとの声に奮起一番登り切る。この間の寒さで皆消耗したが頂上はすぐだった。ガスが濃く吹雪になって見通しはきかない。スバリのパーティが盛んにコールしている。奴等は俺達以上にふるえているだろう。こちらからもコールするが向い風にかき消される。

三角点上にテントをはる。テントにはいってホッとした。ベースとサポート隊と三角交信する。サポート

隊と交信不調。どうにか赤沢隊成功を知りベースに中継したが、笹谷が交信不調なので相当がなっている。ゆっくり腹をあたためて横になるが、シュラフなしなので吹かれると寒くてねむれない。今日は朝おそかったがなんとも失敗だった。ラジウス不調のためばかりとはいえない。それから春山へ入る基礎が新人に徹底していなかったことも痛感した。ショッパイところで「これで岩登りは何回目だ」とか「アイゼンで岩登りははじめて」などといわれてはまったく冷汗ものである。大人数になればこのような欠陥が生じてくることを考えておかねばならないと思った。終夜寒くてうとうとするだけ。

出発（九・五〇）―針ノ木頂上（一七・一五）

三月十六日　吹雪　沈澱。岡野が腹が不調らしく吹雪の中に何回かとび出して行く。

ラジオで京響がハンガリア狂詩曲を聞かせる。夜の交信相変らず不調。こちらが「吹雪で視界零」と云ったのが聞こえないらしい。谷口がややあって「御山谷は満天星空でオリオンが輝いています。そちらはいかがですか。どうぞ」ときた。「ふざけるなよ」と云っても通じない。トンチンカンな交信である。

三月十七日　晴　ガスが徐々に切れて、晴れた。夏道の出た後立の稜線を漫歩。針ノ木の雪渓が真白でキラキラ光っている。スバリの山頂までサポート隊が迎えにきてくれた。三パーティとも成功したのを喜ぶ。満ち足たりた気持でテント地のコルに下る。暖かい紅茶がうまい。各々アタックの様子を語り合った。スバリの連中は吹かれて消耗したようだが、成功しておめでたい顔をしている。夕方大スバリ沢を下ることにして昼寝する、派手なテントのむこうに立山と剱が見える。いつまでもあきそうにない風景である。

出発（九・一五）―サポート・テント（一一・一五～一六・三〇）―ベース（二〇・〇〇）

（酒井尚平）

大スバリ沢偵察とサポート

三月十二日　晴　今日は一応の偵察ということで出発したが、まず第一の難関は、大スバリ沢と黒部への出合にわたる対岸のトラバースである。赤沢岳西尾根末端よりの土砂崩れのうえに雪がのり、全く不安定このうえない。今日は空身だからすぐ通過できたが、荷物を持つとフィックスをはる必要がある。出発時間が遅かったため、沢は出合付近から早くももぐりはじめた。沢の屈曲点までは左岸をそして後は適当にスノーブリッジをわたりながら行くと、まず第一の滝へ出た。高さは約二十米、これは左岸をまけば難なく行ける。まき終った所から更に一ピッチ行くと第二の滝につき当る。このあたりにくると相当コンターも上り、立山の方を見るとタンボ高原が真正面である。この滝もそれほど大きなものではないが、両岸が切り立った岩のため、相当大きくまかないとダメらしい。そこで、スバリの西尾根から、滝のすぐ下に入っている急な沢を登る。新雪の後ではとても無理と思われるくらいの急な沢である。登ること約一時間やっと滝の上の尾根に出て、下りはじめる。雪は全くくさっていて歩き難い。下りた所は、ちょうど滝の上に入る沢の出合である。このあたりデブリがうず高く一応用心して間隔をあける。これより上はデブリの上を行く。沢はいよいよ急になる。右岸は赤沢側の急峻なルンゼが並び、その下はデブリの山である。全く気味が悪い。最後のつめは第二の滝から三本目の沢を登る。くさった雪のため、ヒザくらいまでもぐる。この沢もデブリの山、しかも急なので休むのにも苦労するくらいだ。約二時間で稜線へ出る。ちょうど赤沢岳とスバリ岳の中間である。時間もなかったが、予想に反して、テント地も見当らないので、小一時間スバリ岳の方に偵察する。雪庇は非常に大きく、どのあたりまでが大丈夫なのか見当がつかないが、一応スバリ岳を下りきったコルにテントをおくことに決め、下山する。

下りは稜線のすぐ下からシリセードで快適にとばしていたが、その時対岸の赤沢側のルンゼからボーンという大音響と共になだれがおこった。ちょうど西日がルンゼにあたっているのである。あっと思う間もなくまた一つ、そしてまた一つ、そのデブリの山が我々の下る沢の真ん中をゴロゴロと動いていく。我々はガクゼンとして、すぐ左岸の樹林帯にとび込み、一時様子をみた。しかしその眼前をまた一つ今までの中で一番大きいのがおちる。そのうちに、今度は尻セードで下って来た所からもゴロゴロとなだれてくる。もはや沢

身だけではない。木と木の間からもゴロゴロとなだれの子供みたいなのが落ちる。全くなだれの巣の中にとじこめられたのだ。前日の雨でゆるんだ雪が、日射でゆるんで一斉に落ち出したらしい。なだれに対する判断の大切さをこれほど痛感したことはなかった。皆不安そうな顔をして、木の根元に座っているだけである。仕方がない。日がかげるまで待機し、四時半また出発する。登る時は一応なだらかだった沢の中は、もうデブリの山である。十分ほどの差で全員助かったのだ。ベースでは皆心配しているだろうが、くさった雪のため思うように足がそろわない。

黒部の出合についたらもうまっくらであったが、対岸の道には、リヒトが行列している。皆心配して迎えに来てくれたのだ。ただこちらの猪突猛進をはじるのみで感謝の言葉もない。小屋についたのは八時をまわっていた。合宿のはじめから皆を心配させて全くすまぬ。しかしこの日の経験は貴重であった。急な沢を通る時は日の当っている間は必ず避けよ、この原則を無視したがためである。以後大スバリ沢は早朝または日暮れにのみ通過と決定する。

御山谷小屋出発（六・三〇）―大スバリ沢と黒部本流出合（七・三〇）―第一の滝（八・四五）―第二の滝（九・三〇）―滝のまき終り（一〇・五〇）―昼食（一二・〇〇～一二・三〇）―稜線（一三・三〇）―テント地（一四・三〇）―下り始める（一四・四五）―なだれのため休憩（一五・一五～一六・三〇）―出合（一八・四五）―小屋（二〇・〇〇）

三月十三日　雪　全員停滞　スキー練習。

三月十四日　快晴　皆で二、六八一米尾根の末端からタンボ高地へとスキーツアー。昼ごろ二、一〇〇米あたりに着き、そこから滑降。少々雪がくさっていたが、全く快調なスキーである。わたしのようなスキー痴でもくるくるまわれる。合宿後半が楽しみになる。今夜は赤沢隊も針ノ木隊もどのあたりでビバークだろうか。

三月十五日　快晴のち吹雪　前にこりて、今日は四時半出発。空も地も、すべてがカチンと凍った全くの快晴である。テントと一週間分の食糧をもっているため、やや背中が重い。しかし、快調にアイゼンがきくので、ベースは偵察の時と変わらない。第二の滝あたりで夜明。立山が無気味な美しさをもつ朝やけである。どうも午後は天気がくずれそうだ。新雪も大したことはなかったが、最後のツメ上げのあたり、新雪約三十糎の下はクラスト。やはり無気味だ。間隔をとって登る。稜線近くはものすごい風。いよいよ天気が悪くなってきた。一時頃からテントの設営をはじめる。長期のサポート・テントとなるため、入念にブロックを積む。二時頃、スバリ西尾根の連中とコールをかわした。元気らしいが、この天気では今日中にこのテントに入れるだろうか。三時頃赤沢岳の頂上にアタック隊が現われる。風はいよいよ強く、吹雪となってきた。五人では出迎えにも行けず、テントを守るのが精一杯だ。四時半赤沢隊がやっと来る。三人とも相当消耗している。

この頃から猛吹雪となり、外へ出ると目も開けられない。スバリ隊の収容はどうやら不可能になった。このテントも六人用に九人のため、座っているだけで眠れない。一時間ごとに除雪。しかも寒気はきびしい。テントのウォールに当る背中は凍りついて、動くとバリバリという。しかしスバリ隊や針ノ木隊にくらべるとやはり天国だろう。彼等はどこでビバークしているだろうか。皆心配でまんじりともしない。空中状態も悪く連絡もつかない。しかしどうやら針ノ木隊の酒井らしき声は入る。

出発（四・三〇）―出合（五・四〇）―稜線（一二・三〇）―テント設営終了（一四・三〇）―赤沢隊収容（一六・二五）

三月十六日　吹雪　前夜と変らぬ風雪。せめてスバリ岳の上へくらいは行きたいのだが、とても無理だ。雪庇の状態が全然つかめない。いらいらする。相変らず連絡は不能。ベースにいる谷口の気持を思うと早く何とかしたいのだが。あすは晴れるらしい。除雪に明けくれた一昼夜であった。

三月十七日　快晴　前夜の睡眠不足のため、不覚にも快晴を知らず寝過ごす。六時すぎテントのすぐ上で、「べべおきろ」と大声でどなる奴がいる。すわ、帰って来たとばかりにはだしでテントをとび出す。いるいる、スバリ隊だ。赤や青の羽毛服に身を固め、一つ二つ、四つ全員無事だ。指先の凍傷だけらしい。スバリの頂上でビバークしたとか。全く元気な頼もしい連中だ。ともかく嬉しい。後は針ノ木隊だけ。野村と守屋

と三人で迎えに出る。

スバリのすぐ下で会った。こちらも無事。アタックは全部終了。特にこの隊は新人が二名いたので高橋さんや酒井は苦労したらしい。相変らず高橋さんは無口だが、そのやつれた顔に浮ぶ笑いを見ていると、安心感がみなぎっている。これでサポートの役目も終り、後は無事に皆を大スバリ沢から下ろすことだけだ。夕方四時と出発を決めて、昼は食ったり寝たりしゃべったり。ともかく前期の目標を皆完成して、皆の笑い声も非常に楽しい。ズッパ、チョン平、ゲジ等の三回生の悪者達が皆をからかっている。しかしうれしい。皆もうれしいのだろう。小浜、野村、富田、仲の四人をキーパーに残して皆四時に出発。この一回生二人は大したものだ。二日続いた吹雪にグチ一つこぼさなかった。

下りはじめると新雪は意外に深い。股までもぐる。非常に危険な状態だ。しかもその下はクラストしている。しかし下らねばならない。充分に間隔をとって下る。皆も不安になったのだろう、話し声もとだえる。ここでがんばらねばサポートの面目がない。守屋、山田と三人でラッセル、ルート探しをし、ともかくも無事に下へ。日はくれてくる。しかし出合までは遠い。七時半頃やっと出合に着く。もう二度とこんな沢は通らんぞと皆はいう。しかし我々サポートの連中は二度目だ。第二次アタックに出ればもう一度通らねば。ここを一度通ると、寿命が一年ずつ短くなるような気がする。

出合まで谷口以下が迎えに来てくれる。谷口の安心した顔、うれしそうな顔。彼の心中を察するにあまりある。明日は休養のため停滞の予定。久しぶりの小屋の味もまた格別なものがある。

スバリ隊収容（六・一五）―針ノ木隊収容（八・〇〇）―下降（一五・五〇）―出合（一九・三〇）―御山谷小屋（二〇・三〇）

（笹谷哲也）

針ノ木岳西尾根（第二次アタック）

二時にラッセル隊の出た後四時に満天星の中をベースを出発する。ワッパのラッセルの跡を快調にアイゼンで飛ばす。六時過ぎにジャンクションの手前で下ってくるラッセル隊に会う。彼等のためにだいぶ助かった。ラッセルがなくなるとアイゼンではだいぶもぐる。今日も快晴でほとんど無風に近い快調な尾根を楽しめる。

八時にローソク岩の横の岩場についた。守屋がトップで登るが浮石が多く落石のため退却する。べべが嫌な雪面のトラバースのルートを見つける。それからトップで一ピッチ登ってもらって難場は通過した。左から赤沢スバリ針ノ木背後には立山、劔、毛勝三山と素晴らしい。皆それぞれに山を楽しんでいる。顔には生きているのが嬉しくてたまらぬという表情を浮べている。知らず知らずのうちにピッチが上り、針ノ木の最後の登りとなる。浮石を注意しつつ幅の広いルンゼを登って頂上についた。第一次の時のビバークの跡があり苦労がしのばれる。頂上の指導標の横では皆アタック食を平らげるのにいそがしい。

スバリの頂上で中野達に会い、サポートテントに三時半に着いた。さっそくズッパにスピード違反だ、としかられるが、皆嬉しそうな顔で迎えてくれた。四時の第二便でべべちゃん以外は皆といっしょに下る。恐ろしいスバリ沢も今日は静かだ。出合でまたサポートを受ける。ベースでは雪焼けで一そう黒くなったクロちゃんが、前期のアタックが全部無事に終ったのを喜んでくれた。実に楽しい春の一日だった。

（守屋重孝）

合宿後期の日誌

三月二十二日　快晴

中央山稜パーティ…内蔵ノ助乗越へ…L・笹谷、野村、山田、村山、岡阪

黒部別山パーティ…タンボ尾根へ（内蔵ノ助平往復）…L・谷口、清水、守屋、安原、伊藤

二、六八一米尾根パーティ…タンボ平散歩…L・小浜、中野、橋本

東一ノ越パーティ…平まで散歩…L・酒井、大森、岡野、羽根日、仲、柊

第三尾根パーティ…一ノ越へ…L・沖津、富田（サポート隊）、高橋、大竹（アタック隊）

十分な休養で前期の疲労も回復し、それぞれの目標に向う。やっと長いベースづとめから解放される。

三月二十三日　晴　全パーティ、アタック。第三尾根以外全部成功。柊は二、六八一パーティに入る。

三月二十四日　雪　全パーティ沈。

三月二十五日　晴

タンボ尾根→ベース…L・谷口、笹谷、清水、守屋、野村、山田、安原、伊藤、岡阪、村山

第三尾根アタック…L・高橋、大竹

他は沈。後期のアタックも全てあっけなく終った。

三月二十六日　雨　全員沈。

第三尾根のようすは分らないが、あとはベースを引きはらい、御山谷から一ノ越それから弥陀ヶ原と無事下ることだけだ。日もゆっくりあるのでなるべくなだれの危険の少ない日をよって上ればよい。

しかしこの最後のしめくくりともいうべき弥陀ヶ原の快適な滑降？　を皆と共に味わずして、車のついた文明の利器で下界の人間になるとは何たる運命のいたずらか。別山アタック以来、手術跡のとみに悪化していたのは自覚していたが。きょうひそかに治療していたところをオバマ、サカイ、ベベ等のコワい連中にみつかって強引に下ろされることになったのだ。まさに密入国がばれて強制送還される時の気持とはこんなものであろうか。リーダーとしての任務も果し得ず迷惑をかけただけで心苦しい限りだ。しかしあとをまかすに足る連中ばかりだから心配はない。リーダーを小浜に託し、いっしょに下ってくれる岡阪とともにジープに乗る。皆の見送りにガラにもなく目がうるむ。　（谷口）

以下は後期、立山東面のアタック記録である。

東一ノ越尾根

三月二十二日　快晴　二時半おきにみるとすごいガスだった。今日はダメだろうと思って寝てしまった。六時頃おきだしておどろいた。快晴ではないか。他のパーティの連中がぎゃあぎゃあいうこということ。しかし我々は日数が十分あると思ってたいして気にもしなかった。アタック・メンバーに柊を加えて平に行くことにした。この天気のいい日、雪の黒部川をポコポコ歩くのは何と気持のいいことだろう。リスをおっかけたりしながら、ずっと右岸どおしで、高まき二回。たいしてピンチなこともなく平についた。帰りに岩魚の大群を発見。さっそく糸をおろしたが、結果はまったく期待はずれ。しかしほんとに楽しい一日だった。

出発（九・四五）―平（一三・四〇）―帰着（一六・〇〇）

三月二十三日　快晴のち雲量増し風強くなる　今日はいよいよアタック。二十日に大森、岡野は東一ノ越まで行ってきたが、スキーを持って行くのは重量の関係上あまり好ましくないと思ったので、持っていかないことにした。三時五十分出発。タンボ高地まで、同じルートを取る二六八一米尾根パーティが先行する。酒井リーダーはタンボ高地へ来るのがはじめてなのでスキーを持ってこなかったのをさかんにボヤく。しかし東一ノ越の最後の登りを考えるとちょっと考えこんでしまう。

いやになるほどのタンボ高地のトラバースを終って東一ノ越に着く。ここから雄山までが本番だと思っていたんだが、何とあっけないことだろう。全然たいしたことなく、あっというまに二六八一米尾根とのジャンクションについてしまった。ジャンクションにつくと突然沖津・富田の第三尾根サポート隊が現われた。彼等は我々の早いのに驚いていたが、我々が尾根の平凡だったことをボヤくと、「お茶づけの味だと思ってあきらめろ」となぐさめる。

雄山とジャンクションとのコルで第二朝食。ここで追いついた二、六八一米尾根パーティと共に雄山へ登った。雄山から一ノ越へ下り、ここで昼食の後、御山谷をシリセードで快適におりてベースに帰った。なお雄山の下りで岡野足首ねんざのため一ノ越に残り、かわりに富田がおりた。

起床（二・〇〇）―出発（三・五〇）―一ノ越（七・四〇）―雄山（一〇・〇〇）―一ノ越（一〇・四〇）―ベース（一四・三〇）

（岡野一郎）

二、六八一米尾根

三月二十二日　今日はアタック、と二時二十分とび起きる。が外に出るとまだガスが低くたれこめていて、相変らず気温も高く、はっきりしない空模様なので、東一ノ越パーティと相談の結果、ラッシュの我々は、アタックを見送ることにして、またごそごそシュラフにもぐり込む。

六時頃から他のパーティがそろそろ出発の準備をはじめた。気温もかなり下って、空には星が輝いている。シマッタ！　と思ったが、しかたがない。今日はタンボ高地までラッセルかたがた散歩に出かけることにする。

ラッセルに来たとはいえ、広々としたタンボ高地を目の前にして、こんなすばらしい所へなぜスキーをはいて来なかったのかとみんなぼやく。真白な雪の中に小さな点がのろのろ東一ノ越へ向っている。一ノ越から第三尾根をアタックするパーティだ。後をおう沖津が登ってきた。我々の所でチョット立ち止ってすぐおっかける。みるみる小さくなってゆく彼の姿をあとに、我々も尾根に取り付く。今度は、反対側に、中央山稜、別山パーティがみえる。明日はどのパーティもそろってアタックに出ることになりそうだ。この天気が明日もつづくことを期待して御山谷のベースに帰る。

出発（九・三〇）―タンボ高地（一二・〇〇～一三・〇〇）―ベース（一五・三〇）

三月二十三日　二時起床。少し雲があるようだがまず快晴。リヒトをつけて闇の中にとび出す。少しおくれて東一ノ越パーティがおっかけてくる。タンボ高地に入る少し手前で彼らと別れて尾根に取り付く。後立の稜線には雲が出てきたが、今日一日はまず持ちそうである。最初のコブを越す頃、日が上りはじめた。東一ノ越パーティはタンボ高地をすすんでいる。お互いに今日の成功を祈ってコールをかわす。中央山稜パーティも、もうだいぶ登っている。今日はずいぶん楽しいアタックになった。すでに森林限界をすぎて、スッキリした雪稜が眼前につづいている。雪庇は大体右手に出ているが、たいしたものではない。昨日の晴天のおかげで、雪はしっかりしまっており、風下側を歩けばほとんどもぐることもなく、アイゼンが快適にきく。登るに従って風も強くなってきたが、快調にピッチがのびる。八時二十分二、六八一米を通過して Essen にする。中央山稜パーティの黒い影が時々雪面の中に現われる。どちらが先に雄山へ着くだろうなどと話しながら下をみると、第三尾根パーティのトレースが目に入った。すでにもう取り付きはじめているのだろうか。サポート隊の帰ってゆく姿がみえる。

いよいよ最後の岩峰にかかろうとした時、東一ノ越パーティが岩峰の上に姿をみせた。我々も元気を出して岩峰にかかる。一応ザイルを用意していたが、岩と偃松と雪のミックスで大したこともないので、ザイルなしでゆく。岩峰を越してコルに降りると人の声がする。みると東一ノ越パーティと第三尾根のラッセル隊だ。そこで彼らと合流して雄山へ登る。さすが主稜線は風が強い。頂上で全員エイエイオーとカン声をあげ早々に一ノ越へ。アタックも成功し、不必要な装備食糧を一ノ越に残して身軽になった我々は、快適この上ない尻セードで御山谷をとばし、再び、ベースにもどる。

起床（二・〇〇）―出発（四・〇〇）―二、六八一米（八・三〇）―ジャンクション（九・五〇）―雄山頂上（一〇・二〇）―一ノ越（一〇・五〇～一一・四五）―ベース（一四・〇〇）

（中野正文）

立山中央山稜

三月二十二日　快晴　きのうの沈は十分の休養と今後の計画準備の完了の機会を与えてくれた。今日はアタックキャンプを丸山と二、二八一米峰のコルに作るのだ。別山パーティと行動を共にする。大スバリ沢の出合の対岸の尾根を登り、一ノ越よりのボッカルートにそって尾根をたどるが結構な重荷のうえに時にズボッズボッともぐりえらく苦しい。別山パーティはこの尾根の途中にテントをはり我々のサポートをかってく

れた。御前谷におり立つと赤沢西尾根がものすごい傾斜で黒部に落ちている。とくに相似峰の左峰の岩壁はみごとだが、あそこにも足跡を残してきたと思うと心中大いに穏やかである。御前谷の登りは大したこともないようだがジリジリてりつける陽に目がまわりそうである。別山パーティのサポートの有難味が身にしみる。二時半設営完了。星が美しい。明日もよい日であろう。

ベース（六・四〇）―別山パーティテント地（九・三五～一〇・五〇）―丸山のコルのテント地（一四・三〇）

三月二十三日　晴のち曇　二時ごろウトウトしていたのをたたき起こされる。さっそくテントより顔だけつき出す。星が降るようだ。今日の天気はまず約束された。手早くコッフェンし四時十分野村、山田、笹谷のオーダーで出発。アイゼンをきかしてコルより真直ぐにルンゼ状の雪面を登るがライトの光では斜面の凹凸がなかなかわからず、知らぬうちにえらくきつい斜面を登っていたりしてびっくりさせられる。周囲の山々は寝しずまっているという感で、丸山のあたりに残月が美しい。快調のピッチで二、二八一米のピークに立ち、一気にコルへ下る。そろそろ東の空が白み出したのでここで夜明けまちとする。

これからのルートを目で追うが、問題になる岩稜は最後の所だけ、あとは雪稜の登りとほんの少しの岩があるだけだろうと目算をたてる。急な雪面の一ピッチを終り、一息いれているとクラノスケのカールの支流にカモシカが黒い玉となって走っているのがみえた。そうこうするうち周囲がパッと輝き出す。日の出だ。立山の稜線が濃青の空にくっきりと浮ぶ。三人とも調子は上々、グングンとばす。急な雪面の連続である。ナイフリッジもまじえた雪稜の登攀がつづく。最後の登りのすこし手前で二六八一パーティとコールを交わす。最後の登りにかかるが、岩稜の右のルンゼが使えたので、そのルートをとる。このルンゼも急な雪面でキックして登る。最後のチムニー状の岩場も左手をまいて、なんなく富士の折立の頂に立つ。九時三十分である。東面の方は大した風もなかったが、稜線に立つとものすごい風で立っているのが容易でない。空模様も変なので、雄山にいくのをやめて真砂岳とのコルへ急ぐ。この稜線はさすがにアイゼンのあとも多い。弥陀ヶ原はスキーヤーで一ぱいだ。

内蔵ノ助のコルより雪庇に注意して下る。このカールの中に入るとうそのように風がない。カラカラと氷片の落ちる先をよくたしかめて尻セードといく。雪がやわらかく無茶苦茶快適である。これに気をよくしてアイスバーンのような所も尻セッテいたのが悪かった。笹谷のスピードがいやについているなと思ううち、ピッケルがとばされゴルジュへまっしぐら。これはいかんと思ったのもつかの間、姿はゴルジュ状の所からずっと下に消えた。やられたなと思いながら、何べんもコールする。しばらくたって下からコールがありほっとする。急いで下る。幸いかすり傷程度で止まっていた。「モウアカンカトオモイナガラモ色々ナコトヲ考エル余裕ガアッタワ」「ナントモノウテヨカッタナ、命ビロイヤ」「それにしてもコンター千米は尻セードは快適やな」などとしゃべりながら、気をしずめるため一服つける。

このころよりスノーボールの落下がめだつようになる。大丈夫とは思いながち気味わるくなり、両側に注意しながら内蔵ノ助平へいそぐ。このあたりカモシカの足跡がいっぱいある。内蔵ノ助平のド真中に着いたのが何と十一時、すごい速さであった。風なく陽はカンカンでりなのでここらで大体止とし、ツェルトをはってココアなどを作り、昼寝としゃれこむ。一時間もたつと別山パーティが帰って来たが、まさか我々だとは思ってもみなかったといっていた。ここで相談の結果天気の見通しがあまりよくないのでテントを別山パーティの所まで撤収することに決める。三時半コルにもどり手早くテントを撤収し、御前谷を下る。御前谷の滑降は荷重く、なかせる滑降どころではなかった。テント地についた時はそうとうバテていた。

春の中央山稜は雪稜の登攀で、その技術がたしかであればたのしめる山稜である。ただ雪がくさると登るのが非常に困難な個所があり、早朝の出発は有効である。なお中央山稜については「報告七」にくわしい。

その夜は二つのテントがならび、にぎやかに飲んだり食ったりした。

キャンプ（四・一〇）―二、二八一米（五・〇〇）―最低鞍部（五・一五～五・三〇）―富士の折立（九・三五）―内蔵ノ助平（一一・〇〇～一三・三五）―テント地（一七・四五）

三月二十四日　雪　昨夜よりの雪は四、五十糎積もり、前日のつかれもあり、今日は沈。歌をうたったり、

うつらうつらしながらの一日であった。

三月二十五日　晴　テントを撤収し、深雪に悩みながらとにかくベースへもどる。午後は魚つりをしたり、平のほうへブラブラ歩いてみたりしてすごす。

テント撤収（七・〇〇）―ベース（一三・〇〇）

第三尾根

三月二十二日　内蔵ノ助谷へスキーを取りに行った沖津 OB とは後で落ちあうことにして、一行三名、前期を無事終えたというひそやかな満足感と、これから始まる後期への期待を抱きながら、第一歩を踏み出す。

二、六八一米尾根に取り付きブナ林の中の快適に滑れそうな広い尾根を、スキーを肩にボソボソもぐりながら登り続ける。気温は高く、前夜の雨でのクラストも表面ばかり、おまけに沈澱のバテのなまった体に久しぶりの重荷がこたえてかなりの消耗だ。二、六八一米尾根を離れ、タンボ高地に出る。ここも相変らずのブレーカブル・クラストで、たまりかねてワッパをつけるも余り効果はない。重荷とジリジリ照りつける太陽に悩まされながら、落し穴に踏みこむようなラッセルを続けるが、同じような起伏が幾つも続き行けども行けども東一ノ越は近づかない。昼食をすませ、ワッパをアイゼンに替え、長い左斜面のトラバースをしてようやく東一ノ越に着く。ここで沖津と一しょになる。東一ノ越からは、ところどころ出ている夏道にルートを求めながら、シャリバテ気味で一ノ越に着いたのは、陽もすでに傾き、冷たい夕べの風の吹きつける頃だった。きのうから入って来たという小屋番のオジさんに頼んで、値ぎるつもりで泊めてもらう。

ベース発（六・一〇）―タンボ高地入口（九・〇〇）―東一ノ越（一四・四〇）―一ノ越（一七・〇〇）

三月二十三日　小屋での炊事に意外に時間がかかり、出発したのは明るくなってからだった。雄山の急な登りにアイゼンが快調にきく。雄山頂上から、二六八一米尾根と東一ノ越尾根とのジャンクションのコルをへてサルマタのカールへ降りる。よくしまっていてなだれの心配はない。

一気にとっつきまで来た。二〇〇米位の高距を持つ一峰は黒々としてかなり手ごわそうだ。南側（サルマタ・カール側）は相当な傾斜だが、秋に偵察した北側（中央山稜側）は外側したバンドが左右に斜めに二本入っていて何とかなりそうだが、秋の偵察といっても完全なものではないし、相談した結果立命大のルートをとることにする。メンバーは高橋、大竹の二名。ところが、いざ登ろうとすると、予想以上に悪い。高橋がトップで取っ付きを四、五回変えて、ようやく二ピッチほど登ってみたがとてもそれから先は登れそうにない。時間も遅く、今日中に済まなければ明日以後天気は悪くなる気配だし、きのうの疲れもあることだからというわけで撤退して北側を偵察して帰ることにする。カールを登り詰め稜線に出ると、天候悪化の兆しが見え“そよ風”がまともに吹きつけて来る。ほうほうの態で小屋に帰る。

出発（六・三〇）―第三尾根取付（七・四五）―登攀開始（八・一五）―撤退決定（一二・〇〇）―一ノ越（一五・三〇）

三月二十四日　風雪のため停滞。

三月二十五日　前日の失敗にこり、今度は早目に出発。雄山までは前日通りのクラストだが、尾根を下ると、がぜんもぐり出す。吹き溜りになっているらしい。ももから腰、時には胸までもぐる。先頭を代りながら行くが時間と体力の消耗がはなはだしく、「うまくアタックできるかな？」という考えが頭をかすめる。取っ付きへ着いた時には、きのうよりも二時間も遅い。すでに雪のブロック（というよりかけら）が落ち始めていた。岩の傾斜が大きいので、我々のところへまっすぐに落ちて来る。まず、アンザイレンして不安定な雪に注意しながら外傾したバンドに沿って左斜めに登り、バンドのきれているあたりの凍りついた偃松の急斜面に立つ。ここまで秋に偵察したのだが、今ではとてもここで一ピッチとするわけにはいかず、セカンドに動いてもらう。ここからは、全然未知のルートを求めることになる右斜めに上っているバンドを使おうと思えば、右側に回り込まなければならないのは分り切っているのだがとてもそんなことを許してくれる岩ではなさそうだ。しかたなく左気味に登る。ほとんど雪も付かない強い傾斜の完全な岩登りだ。適当なアン

カーレッジが無く、時々セカンドに動いてもらいながら、やっと急斜面ながらも雪面を見つけることができ、ピッケルを打ち込んで二ピッチ目とする。

さて、三ピッチ目が問題だった。アンカーレッジとした雪面はその少し上で傾斜を増し、右上へのガリーへと続いでいるが、その途中に、上から落ちて来る雪のブロックの堆積でできたのであろう、垂直な雪面というよりは雪壁に近いものによってさえぎられている。ガリーのつきる上の方からは、ぐっと傾斜が緩くなり、おそらく二本のバンドの上の偃松つきの大きなフェースになっているものと思われる。左上の方はハングの連続だし、あの雪壁を乗越して、緩傾斜のフェースにたどり着けば、後は何とかなりそうなので右手にルートをとることにする。ぎりぎりの所まで急な雪面を登り、右手の雪壁の方へ回り込むようにして試してみるが、とても自信を持てそうにない。上からのブロックの堆積でできた雪だから、凍った所とくさった所とミックスしている不安定な雪のうえに、ピッケルでステップを作ろうにも、雪壁の左手から体をのけぞらしてピッケルをふるわねばならないのでとてもやれたものではない。しかたがないから穴を掘って左足のスタンスとし、右足は不安定な雪を削って、どうにかアイゼンのツアッケをたて、胸の高さくらいにピッケルを打ち込み、どうにも自信が持てないので、それにザイルを通して、しゃにむに乗っ越すことにする。不安ながらも根元近くまで打ち込んだピッケルに期待をかけながら、じりじりと体を持ち上げた。首のあたりの高さにあったピッケルの頭が、胸少し下くらいに来た時、右足がスリップし、続いて左足のスタンスが崩れ、ビッケルが抜け、アッと思う間に雪面から投げ出され、視界が反転して偃松と雪が上方に流れた。わけの分らぬままに体が回転し、やがて静上した。はるか下の方にザックがころがっている。落ちたのだ。しばらく休憩してから体を調べてみる。二十米墜落したにしては、二人共比較的大した傷を受けていない。高橋さんは腰を打ち大竹はピッケルのバンドで締められて右人指し指の骨が甲の部分で折れているのと背中が少しおかしいくらいだ。まずは死神から見はなされたのだと、二人共ほっとする。

帰りは容易ではなかった。傷の痛みと、みじめな空白感とをかみじめながら、相変らずの深いラッセルを続けてカールをぬけ、コルから御山谷へ降りているルンゼを下って、一ノ越小屋に着く。小屋には、このような時には、とりわけ有難く、なつかしい、また頼もしい仲間が迎えてくれた。　　（大竹三雄）

黒部別山

三月二十二日　御山谷のベースからは、一日の実動には長すぎるので、丸山のコルにテントを出すことにした。ここに入るには、御前沢を黒部川から入るルートと、タンボ平より二六八一米尾根を越えて御前沢へ降りコルへ行くルートがある。偵察の結果御前沢下部には約六十米の滝がありテントをかついでは無理なので、少々遠回りになるが後者をえらんだ。

六時三十分、中央山稜パーティと共にベースを出発する。雪がしまりタンボ平の入口までズッポである。合宿中ずっとアタック形式であったせいか、スキーと重荷で少々つらい。正午に二、六八一米尾根から御前沢への下降点に出る。昼食をとる。

ここで、谷口の盲腸の跡が思わしくなく、また黒部別山をアタックするには、丸山のコルまで、アタックキャンプを出す必要もないので、ここにテントを張り中央山稜パーティのサポートをすることに決定した。すぐにテントを張り、我々は少々の荷物を持ってスキーで御前沢へ降りる。丸山のコルで設営を手伝い、明日のアタックをはげましあって帰る。帰路は御前沢を快調にスキーを下ろす。『三高報告』に書かれてあるとおり、なかせる滑降であった。

三月二十三日　快晴、夕方より曇　北アルプスの中心に座する別山へアタックする日である。二時三十分に起床、四時三十分出発する。ライトの明りをたよりに御前沢へ下る、朝早くライトをつけて行動するのは気持が良いものだ。あせばむ肌着から感じられる心良い寒さ、顔にふきつける朝風は、春山の醍醐味の一つだ。丸山のコル手前より明るくなり出す。コルで岡阪、村山と合流して、内蔵ノ助平へスキーで降りる。アイスバーンでは、スキーのエッジをうけ入れてくれない。転倒すると百米ほど流される。皆七転八倒してい

る。結局、アイゼンで降りた方が早かった。内蔵ノ助平にスキーをデポして、アイゼンで行く。ザラメ雪でもぐらず歩きよい。ハシゴ谷乗越まで一気に出る。八ッ峰の偵察に来ている阪大パーティと出会う。別山の北峰と南峰の分岐点まで少々ラッセルがあった。北峰に向う。あと一週間もしたら十字峡パーティがここを通るだろう。

別山からのながめは、とてもすばらしい。南は薬師岳が、ドッカリと、五色ヶ原の真白な雪面。東沢がまっすぐに見え、槍がちょっぴりと顔を出している。劔岳のすばらしさはまた格別だ。雪のついた八ッ峰、源次郎、黒々としたチンネは凄い。大窓、小窓から毛勝三山の重量感のある山々。日本海がうっすら見える。後立山の連峰、特にここから見る赤沢岳西尾根はノコギリそのものだ。この頃より雲が出始める。エッセンして帰路につく。内蔵ノ助平まで来るとツェルトが張ってある。まさか中央山稜パーティではないだろうと近づくと、まさに中央山稜パーティである。我々はア然として見とれる。何と早くアタックをすましたものか！　天候は悪くなる様子であるから、今日中に、コルのアントを撤収して、我々のテントの横に張るようにうちあわせて別れる。

コルのテント地でこまごましたものをザックに入れて、御前沢をスキーで下る。この沢は何度すべっても気持よい。滝の上部より二、六八一米尾根に出てテントに帰る。約二時間おくれて、中央山稜パーティは着く。天気図から判断して、明日はどうも沈澱らしい。夜中より雪が降りだす。

三月二十四日　終日雪　沈澱する。テントのラッセルに三回ほど出る。約四十糎の降雪である。あす一ノ越へ出るのにタンボ平を横断するのは、なだれの危険性から中止し、いったん御山谷のベースへ下ることに決定する。

三月二十五日　晴　重荷をかついで深雪でのスキーは無理ということを思い知らされた。二十米も行くと転倒である。これはというので即ワッパにはきかえる。明らかにワッパの方が楽だ。トラック道に出てからスキーにはきかえベースへ入る。　（清水英男）

あとがき

計画前、山行後に問題となった点二、三にふれて中流のまとめとしたい。

まず一としてトンネル使用の良否であるが私個人としては入山は一ノ越をこえて、帰りはトンネルを使用したい考えであった。一回生も含めて一ノ越をこえることにより、充分アプローチの苦労も味い、体が山に馴れてからアタックを始めるという案であった。もちろん全然アプローチもなく、車からおりたところがベースであるというのも、それが黒部の中核であるということも含めて何かしっくりこない点であったんだが。しかし入山日数の制限と計画のかみ合せ、特に前期に後立側のアタックをやってしまいたいという強い希望から入山にトンネルを使用するのは止むをえないこととなった。これによっておこる直接の欠点である体力的なものはアタックまでに偵察等に十分時間をかけて補うようにした。結果的に云えば、今合宿においては、トンネル使用により余裕をもってほぼ全計画をやれたのだから妥当だったと云えよう。時代の進むにつれて山はますます近くなり容易になろう。バス道をテクテク歩くほど愚かなことはないが、「あるものは使え」式にドライに割り切るには余りにも抵抗が大きいのではなかろうか。

第二には、今度の合宿がベースから放射状にアタックする形態をとったため、アタック隊サポート隊とベース、あるいはアタック隊相互の連絡方法の問題であった。合宿的なものをやる場合、いつも最大の問題となる点であるが、今期はAACKの好意によりハンディ・トーキーが使え解決できた。連絡という点においてはこれにまさるものはない。最大限の威力を発揮したといえる。しいて欠点を挙げれば、費用と重量がかさむことである。

第三、前期におけるサポートの問題であるが、目的の後立側は下降路に最大の難があったため大スバリ沢にその偵察もかねサポート隊を入れたのは当然のことであり、成功であったと思う。大スバリパーティはサポート隊であり、かつ一つのパーティとしてそれ以上の役目を果したと言える。前期においては、特に一回

生の動き方に頭を痛め、一部のものは針ノ木尾根へ、また一部は大スバリ隊として上にあがったが、残りの人達は下から各尾根のサポートという形になった。このため下からのサポートは何かサポートのためのサポート、トレーニングのためのサポートになったことは否めない。上級部員と下級部員との比率の問題でいたし方なかったにしても、もう少しよい方法があったかも知れぬ。

第四、小アクシデントの件。前、後期を通じてネンザ、スリップ等、運よく大事に至らなかった事故が二、三あった。それらがおそらく、不可避なものではなかったということを考える時、アクシデントの当事者はもちろん、我々部員一同大いに反省する必要があろう。その他、雪崩の件、スキーのこと等色々と問題となる点は多い。

とにかく無事終了した。戦前の立教や三高のパイオニアー、戦後の阪大、関大、京大等のこの地域における先輩の業績には較ぶべくもないが、その当時の一つの尾根をやる苦労、入山下山の困難等を、今合宿においては更に広い中流一帯のトレースともいうものにおき代え得たのは本当に幸いなことであった。

（谷口　朗）

18　石井順一　「赤沢岳猫ノ耳第二峯直登尾根（仮称）」（「記録速報」内）『岳人』第160号

1961（昭和36）年8月1日刊　東京中日新聞発行

要　約

1961（昭和36）年4月29日～5月1日の記録。

メンバーは、石井順一、勝山英司、平田正昭（以上、フェルス登攀会）。

行程は、赤沢右俣を詰めて取り付き、4月30日にスバリ岳に達している。上部は人工を含む登攀で、1958（昭和33）年5月2日に登られたルートとは違うラインをとっている。

本記録を「赤沢岳西尾根2峰西峰直登尾根」とするか、遠藤ほか『日本登山史年表』（2005山と溪谷社）の記載のように「3峰ダイレクト尾根」とするかで見方が分かれる。赤沢岳西尾根は通称「猫ノ耳」と呼ばれる3峰が特徴的である。今回は北面の赤沢右股から取りついているが、これは2峰と3峰の間の沢である。猫ノ耳を西尾根と解釈すれば2峰の右尾根（第二峯直登尾根）になり、記録内容はこちらに近いと思われる。しかし、猫ノ耳第二峯を3峰の2番目の峰（西峰）と読み取ると3峰ダイレクト尾根になる。両者とも峰がふたつあるため紛らわしい。

この記録は赤沢岳西尾根北面からであるが、2峰を中心とした南面の登攀記録も多い。

※赤沢岳西尾根3峰（猫ノ耳）ダイレクト尾根（オリジナルルート）登攀。

一九六一年四月二十九日～五月一日◆フェルス登攀会◆パーティ＝石井順一、勝山英司、平田正昭

赤沢岳はその黒部側に、かつて黒部溯行者の目をひいた鋸歯状の特異な尾根を派生させている。冠氏によってすでにトレースされていたものであるが、最近九州、関西のパーティらによって注目され始めた。一昨年、黒四ダム真上の鏡岩横より猫ノ耳直下に達したが時間無く引き返した。

今回は赤沢をつめて右俣にはいり、第二峯(双耳峯)に直接達する急峻な尾根にルートをとった。かつて内蔵ノ助平より望遠鏡による偵察の際に期待した岩稜の下部はカン木多く期待を裏切られたが、上部では大型のハーケンを打っての連続アブミによる登攀。手の切れそうな大まかな花崗岩質の岩稜に独特の面白さがあった。とくに赤沢岳まで続く岩稜のプロムナードはまた格別である。第一日目は直登尾根途中でビバーク、第二日スバリ岳ビバーク、翌朝針ノ木峠をまわって帰った。

（記・石井順一）

謝　辞

本誌を編集・発行するにあたり、下記の団体・個人の皆様から、資料の転載ご承諾や文字入力の作業につきまして、多大なご協力を賜りました。
ここにご芳名を記して、心より深く感謝の意を表すとともに、厚くお礼申しあげます。

〔団体〕

株式会社白水社　　株式会社山と溪谷社　　公益社団法人日本山岳会
富山県[立山博物館]　　モンベルグループ 株式会社ネイチュアエンタープライズ
大町山岳博物館友の会サークル「山岳文化研究会」　　オフィスなかやま

〔個人〕

阿部 唯史	大畑 貴美子	岡田 知己	岡田 汪	酒井 國光
漸井 宏彰	竹内 龍三	竹内 満子	細木 ひとみ	百瀬 堯
吉井 亮一	宮澤 洋介	有川 美保子	仙波 美代子	瀬戸口 三栄子
平野 悟	宮島 順一	宮澤 陽美	宮田 京子	中山 保子

（順不同、敬称略）

あとがき

登山史資料の編集･出版事業は､市立大町山岳博物館元館長の柳澤昭夫氏の企画立案によるものでした。同氏は第 1 集の編集作業のさなか、館長在職中の 2010（平成 22）年 3 月に逝去されました。その後、時間はかかってしまいましたが、柳澤元館長の意を受け継ぐ形で、続編の第 2 集、完結編の第 3 集の出版に何とかこぎつけました。

一連の資料集編集・出版にあたり、転載をご承諾いただいたり、収録の登山記録選定にご協力いただいたり､貴重な文献資料をご提供いただくなどした団体･個人の皆様方に､あらためて感謝を申し上げます。

このほかにも下記のとおり、多方面の皆様方から多大なご協力を賜りました。

第 1・2 集については、2009～2011（平成 21～23）年度「ふるさと雇用再生特別事業」（委託事業）の採択を大町市が受け、資料集の編集・出版を「山岳文化創出事業」と位置付け、当館の外郭団体である「大町山岳博物館友の会」に委託し、選任された同会会員の宮澤陽美氏に専ら編集作業を行っていただきました。そして、本書の第 3 集については、巻頭の凡例や謝辞にも記しましたが、当館職員のほか、大町山岳博物館友の会サークル「山岳文化研究会」（代表・宮澤洋介氏）、に協力をあおぎ、同サークル会員に文字入力作業を一部行っていただきました。このほか大部分の文字入力作業は音声起稿・反訳事務所「オフィスなかやま」（長野県伊那市）によります。

また、各資料集に収録した登山記録の選定においては、山と溪谷社編『日本登山史年表』（山と溪谷社、2005 年）を主として参考にさせていただきました。

資料集に収録した記録は､淡々と状況のみを記した冬期や岩壁での登攀の厳しさをうかがわせる登攀記もあれば、時代背景を物語る大らかな山旅の薫りただよう山岳紀行文といったものもあります。そうした一連の記録から当時の登山における様子をつぶさに読み取ることは、部分的ではありますが、北アルプス後立山連峰を舞台にした山と人とのかかわりの一幕を読み解く上で非常に大切です。

当館において編集・出版した登山史資料集は、登頂・登攀に焦点を絞った記録を収録するもので、近代を中心とした北アルプス後立山連峰の登山史を探る上で必須の文献情報を集約した基礎資料です。しかしながら､明治以降､近代登山が国内に定着し始めてから現在までの時間は百余年を経たばかりで､それは、先史時代から山と人とが織り成してきた 1 万数千年という歴史でみると一瞬です。こうした近代登山史のほかにも、有史以来、山麓で連綿と育まれた歴史や民俗を含めた北アルプスの山岳文化の全体像を探求するため、当館では今後、こうした近代以降の登攀史や登山史を包括する、近世以前からの“山岳文化史”の広い視点から、山と人とのかかわりをさらに深くとらえていきたいと考えています。

なお、本誌への転載に際し、一部、著作権者・著作権継承者、出版権継承者の確認・連絡が至らなかった記録があります。恐れ入りますが、お心あたりの方はお申し出くださいますようお願い申しあげます。

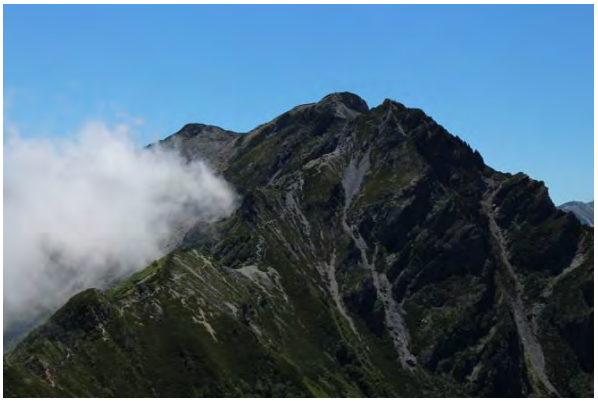
今後とも、引き続き皆様からのご教示、ご鞭撻のほどを何とぞよろしくお願い申しあげます。

（編集担当 記）

北アルプス登山史資料３
―黒部川側からの登山史・後立山南部地域登山史―

発　行　日　平成 29 年(2017) 3 月 31 日
発行・編集　市立大町山岳博物館
〒398−0002 長野県大町市大町 8056－1
TEL：0261−22−0211／FAX：0261−21−2133
URL：http://www.omachi-sanpaku.com
E-mail：sanpaku@city.omachi.nagano.jp
印刷・製本　株式会社奥村印刷所
〒398−0002 長野県大町市大町 2470
TEL：0261−22−0205／FAX：0261−22−1345

©Omachi Alpine Museum　2017　Printed in JAPAN



スバリ岳（赤沢岳山頂から）

２０１７